BINDING SECT. FEB 28 1983

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

East
Asiatic
Studies

51

亡き

父上

母上　に

此の一書を獻ぐ

昭和十年立秋前一日

著者

德富猪一郎著

蘇峰自傳

中央公論社版

LIBRARY
OCT 25 1968
UNIVERSITY OF TORONTO

TL
817
O39Z52
1935

自傳の緣起

大正十一年は予が六十歳の時にて、その翌年は卽ち文久三年癸亥の年が一周して、大正十二年癸亥の年となるを以つて、瀧田樗陰君は、强いて予に自傳を『中央公論』に寄せんことを需め、その爲に予は『還曆を迎ふる一新聞記者の回顧』と題し、予の口授を瀧田君が筆記して、これを『中央公論』の大正十二年新年號に揭げた。

其後改造社長山本實彥君は、予に求むるに、予の自傳を寄稿せんことを以てし、斯くて八重樫東香女史に口授し、昭和四年の春より、これを『改造』に連載して、約一年に亘つた。而してその記事は漸く明治二十七八年戰役、遼東還附に至つて止んだ。

其の以後のことに就いて女史の筆記したるものは、その儘原稿として保存せられてゐたが、兩三年前より、中央公論社長島中雄作君が、頻りに予に向つて自傳の刊行を促し、昨年に至つては、親しく予を訪うて、そのことを熟談せられた。予は『中央公論』には、瀧田前社長、瀧

田前編輯長以來、長き緣故を持つてゐる。今更ら旣にその一半は世上に公にしたものを、これを拒否する理由は無い。

故に自ら語るべき經歷も無く、傳ふべき事項も無きに拘らず。然もその一生は平々坦々、何等驚くべき、恐るべき、慶ぶべき、悲しむべき、笑ふべき、怪しむべき、凡有る傳奇的のことが絕無であるに拘らず、中央公論社よりこれを刊行する事を承諾し、改めて島中社長と理學博士三宅驥一君及び並木淨峰君等が相會して、その事を取定めた。

依つて舊稿を訂正し、未だ世に出でざる、日清戰役以後の、原稿の儘保存されたるものを取出して、更らにこれを訂正し、且つその不足の分は、新らたに口授して、東香女史これを筆記し、以てその記事は昭和七年、予が古稀に達するまでに至つた。

元來貝友社の出版事業は、擧て之を明治書院に移轉したから、その順序からすれば、當然同所より刊行す可きであるが、如上の理由に據りて、本書に限りて、之を中央公論社に一任した。固より明治書院の諒解を得たる上に於て。

本書の全部は東香女史の筆記したるもの。富田砕花の筆記よりも、たゞ転記して二三を採用したが、文字その儘を用ひたるものは皆無に近かつた。本書の中に掲げたる詩稿は、萱大流峰君が予の詩稿中より、抄録したるものにて、その目的は予の詩を傳ふる爲でなく、詩によつて予を傳へんとするものにして、詩そのものゝ價値は、殆ど眼中に無きものと思はるゝ。予が一切これに干係しなかつたのも、これが爲めだ。

予は自ら詩人とは思はず、從つて予の詩が素人眼にも堪へざることは、予よくこれを知つてゐる。併し強いてこれを拒ばきなかつたのは、予が抱懐する志を言ふ具として、これ又た若干の參禪に資すべきものがありと思ふたからである。

本書の内容は、予が親しく口授したるものなれば、その責任の全部は予が負ふ可きは勿論であるが、その書物としての結構、剪裁、編輯、校正に、專ら東香女史の手に出でたるものにして、淺峰君の勞働亦た鮮からず。而して島中中央公論社長、及び雨宮出版部長の助言も亦た、此に特記せねばならぬ。

予が少年時代には、殆ど三十歳以上は生存しまいと豫言した者があつた程、病弱であつた。然るに屢ゝ宿疾に罹りつゝ、七十三年の今日まで、尚ほ聖代の逸民として、生を享くるは、實に望外の大幸である。但だ七十年の生涯を顧み來れば、所謂る世間的意味に於ての成功なるものは、殆ど指點すべきものが一もない。今更ら自ら顧みて慙るといふも、愚痴の至りである。然もこれ又た自業自得、所謂る仁を求めて仁を得たるもの。固より寸毫も訝るべきところ無きも、又た恨むべきところもない。予の胸中に王するものは、只だ感謝の一念あるのみ。

昭和十年七月二十五日

東京　民友社樓上に於て

蘇峰七十三叟

蘇峰自傳　目次

第一章　生立ちと幼年時代

（文久三年―明治元年）

一　緒　言……………………一

二　予の家の歴史……………………三

◇一領一匹の徳富家

三　予の故郷と徳富家の格式……………………七

◇浮世に忘れられたる水俣

四　予の祖父徳富美信……………………一〇

五　父と母の兄弟姉妹……………………一三

六　予の父徳富一敬……………………一六

七　予の母徳富久子……………………一八

八　予の出生と其の幼時……………………二三

九　幼時に於ける予の性格……………………二七

十　水俣に於ける一二の記憶……………………三一

第二章　村塾勉學時代と洋學校時代

（明治三年―明治八年）

一　水俣より横井叔母に伴はれ熊本に至る……………………三五

◇父の寓所に於ける八歳の予

二　高野先生の塾に於ける予……………………三九

三　塾を引揚げて大江村に移る……………………四一

◇元田先生・竹崎先生の塾に學ぶ

四　兼坂先生の塾に於ける予……………………四五

◇薪水の勞に服す

五　兼坂先生の講義……………………四七

◇漢學主義・實學主義の先生

六　熊本洋學校入學と退校……………………五一

◇最年少者としての予

七　熊本に於ける實學黨と學校黨……………………五七

◇山田武甫、嘉悦氏房、徳富一敬、竹[illegible]又三の諸氏　◇[illegible]實學黨の全盛と學校黨の一掃

八　再び洋學校に入學す……………………六〇

◇基督教宣傳者としてのゼンス及び夫

人

九　花岡山バンドと予……六三
◇新聞記者たらんとする最初の希望

第三章　上京及び同志社遊學時代

（明治九年—明治十三年）

一　熊本より東京へ……六九
◇東京に於ける予の親類
二　東京英語學校入學……七三
◇幾もなく私かに京都に奔る
三　同志社と新島襄先生……七七
◇同志社の食堂と學課
四　予の同志社入學と兩親の寛大……八二
五　米國化せる同志社への不滿……八四
◇新島先生への敬愛と予の受洗
六　同志社在學中の記憶（一）……八八
◇休暇利用の傳道に參加　◇西南戰役と新聞の愛讀
七　同志社在學中の記憶（二）……九二
◇新島先生の講義　◇夏季休暇と中島力造氏
八　同志社在學中の記憶（三）……九六
◇大久保眞次郎氏と予　◇バイブル・クラスの專橫
九　同志社在學中の記憶（四）……一〇〇
◇最初の歸鄕と弟健次郎同伴歸校◇歸洛の船中に於ける議論
十　同志社在學中の記憶（五）……一〇四
◇十二年の夏休と岸和田行　◇同志社に於ける予の友人、元良勇次郎、家永豐吉、大西祝、山崎爲德、浮田和民の諸氏
十一　基督教に對する懷疑と予……一〇八
十二　同志社退學の始末（一）……一一一
◇新聞記者志望と『七一雜報』編輯助手　◇村上作夫先生の漢籍講義と予　◇同志社宣教師に對する予の態度
十三　同志社退學の始末（二）……一一六
◇クラス合併問題の紛糾　◇新島先生自らを鞭たる　◇予と同志社退學の決意
十四　上京に際する新島先生の溫情……一二〇

◇新島先生の人物

第四章　歸鄕と大江義塾の創立（明治十三年—明治十五年）

一　東京に於ける半年の生活（一）……一二五
◇福地櫻癡居士に面會を求む ◇津田仙氏訪問談

二　東京に於ける半年の生活（二）……一三〇
◇大久保眞次郎と井上侯、沼間守一氏を訪ふ ◇植村牧師と予及び新島先生

三　東京に於ける半年の生活（三）……一三四
◇內外交際新誌を手傳ふ ◇岡松甕谷先生の紹成書院に學ぶ ◇東京にて知れる阿部無佛、中江兆民、重野先生、立花小一郎の諸氏

四　京都を經由して熊本に歸る……一三七
◇東京にて知れる島田三郎、宗像政、有馬源內、林正明の諸氏 ◇歸鄕と吾家の經濟狀態の切迫

五　熊本に於ける學派の鼎立……一四一
◇實學校黨、實學黨、相愛社 ◇予と相愛社との關係

六　歸鄕當時の予……一四四
◇相愛社員中の[illegible]に參加 ◇[illegible]の手引[illegible]及び大江[illegible]の命名

七　大江義塾の設立……一四九
◇[illegible]と[illegible]

八　大江義塾長としての予……一五三
◇[illegible]のこと ◇[illegible]の[illegible]自由論と予

九　熊本縣下の政黨……一五五
◇[illegible]と紫溟會

第五章　上京と板垣伯及び各方面の交遊（明治十五年—明治十七年）

一　新島先生と與に木曾道中をなす……一五九

二　板垣自由黨總理との會見……一六三

三　板垣伯との會見記錄……一六六

四　東京に於ける交遊……一七六
◇田口卯吉、中江兆民、馬場辰猪の諸氏

五　板垣伯洋行費問題……………………一八二
◇相愛社代表として予の再上京
六　肥薩の青年を伴ひ高知巡禮……………一八四
◇片岡健吉、谷重喜、西山志澄、宮地茂春諸氏と會見
七　高知、東京より熊本へ……………………一八七
◇[illegible]翁と語る　◇大江義塾に於ける予の講義
八　熊本に於ける最初の著述……………………一九一

第六章　『將來之日本』出版と『國民之友』創刊當時
（明治十七年—明治二十年）

一　兩親に一任せる予の結婚……………………一九九
二　祖父德富美信の永眠……………………二〇三
三　『第十九世紀日本の青年及其教育』の出版……………………二〇五
◇意外なる好評と井上毅氏の知己
四　『將來之日本』著述と板垣伯……………………二〇八
五　『將來之日本』を出版する迄……………………二一四
◇予の上京と島田三郎氏　◇田口卯吉氏原稿を引受く
六　陣中の[illegible]……………………二一六
七　家を擧げて東上す……………………二一七
◇予に對する両親の信頼
八　『將來之日本』出版の影響……………………二二〇
九　民友社創立と『國民之友』の發刊……………………二二一
◇湯淺[illegible]氏の助力[illegible]、[illegible]の由來
十　明治二十年頃の日本の形勢……………………二二四
◇歐化主義旺盛の時代

第七章　國會開設前の政界と予
（明治二十一年—明治二十三年）

一　予の平民的急進主義……………………二三一
◇保安條例と民間の[illegible]
二　同志社大學運動と予……………………二三四
◇井上侯、大隈侯の肝煎り
三　大同團結に反對す……………………二三七
◇野田大塊と相識る
四　井上世外侯と予……………………二四〇

◇政治に對する予の興味
五　條約改正問題と予……………………二四二
◇大隈侯の遭難
六　明治二十二年の雜事……………………二四五
◇森有禮子と予　◇初めて松方公と會見
七　新島先生の晩年……………………二四七
第八章　『國民新聞』發刊時代
（明治二十三年）
一　國民新聞發刊の準備(一)……………………二五一
◇新聞社屋と印刷所
二　國民新聞發刊の準備(二)……………………二五四
◇資金に關する苦心
三　國民新聞發刊の準備(三)……………………二五七
◇新聞の特色と久保田米僊の聘請
四　國民新聞の發刊と新島先生の永眠・二六〇
五　國民新聞の發刊と世評……………………二六四
◇新聞發刊當時の政界
六　河島醇氏と進歩黨大合同……………………二六七
第九章　議會政治初期の政界と予
（明治二十三年―明治二十六年）
一　第一次山縣內閣と初期の議會……………二七一
◇陸奥伯の聲明と內閣彈劾
二　貴族的歐化主義と予の平民主義……二七三
◇松方內閣と選擧大干涉
三　選擧終了と陸奥宗光の來訪……………二七六
四　陸奥宗光伯と予……………………二七七
◇第二次伊藤內閣と陸奥入閣
五　自由黨と予との軋轢……………………二八一
◇『大勢一斑』の記事と『國民新聞』の不買問題
六　日本新聞社長陸實氏と予……………………二八四
七　『日本』と『國民』……………………二八六
◇保守主義と進步主義
八　對外硬と自主的外交の文字……………………二八九
◇六派聯合運動の人々と予
第十章　日清戰役時代と予
（明治二十七年―明治二十八年）
一　明治二十七八年役と予……………………二九三

◇國民新聞と從軍記事　◇日清戰役と川上將軍
二　探訪記者としての予……………………二九九
◇川上將訪問と高島氏の八卦　◇樺山將訪問と豐島沖海戰の號外
三　大本營の移動と予……………………三〇二
◇廣島に於ける人々
四　威海丸にて旅順に隨ふ……………………三〇五
五　遼東半島觀察中桂公と相識る……………………三〇八
◇遼東還附の報に猛然旅順より還る

第十一章　日露戰役前の政局と予（上）
（明治二十九年―明治三十年）
一　松隈內閣の前奏……………………三一三
◇伊藤內閣に對する憤懣
二　予と世界漫遊（一）……………………三一八
◇アガパンサス丸にて倫敦へ　◇大陸旅行中松隈內閣成立を知る　◇トルストイ、スツルザ、セルビア王、カール王及び皇后、ウアンベリーの諸氏
三　予と世界漫遊（二）……………………三二三
◇伊太利、佛蘭西より再び倫敦へ、◇倫敦に於ける大患と米國經由歸朝　◇スティールマン、クレマンソー、ハーコート、アックランド其他の諸氏
四　地租增徵問題と松隈內閣の內紛……………………三二八
五　政府と進步黨との絕緣……………………三三三
◇大隈外相以下內閣を去る
六　予の勅任參事官就任と囂々たる世評……………………三三七
◇松方內閣の瓦解とその原因
七　予を誤解されし勝海舟先生……………………三四一
八　惡評集中と新聞經營上の大苦心……………………三四三
『國民之友』と『家庭雜誌』『英文極東』の廢刊

第十二章　日露戰役前の政局と予（下）
（明治三十一年―明治三十六年）
一　第三次伊藤內閣と自由、進步兩黨の合同……………………三四九
◇伊藤公と予

二 隈板内閣より第二次山縣内閣……三五二
◇第一回の政黨内閣とその内訌
三 山縣公と予との關係……三五五
四 山縣公と伊藤公との關係……三六〇
五 桂公の擡頭及び伊藤公と政黨組織の内意……三六四
六 伊藤、井上兩公の九州下向と予……三六七
七 伊藤公の新政黨組織と大命降下……三七〇
◇第四次伊藤内閣と閣内不統一
八 伊藤内閣の瓦解と桂内閣成立迄の曲折……三七六
九 桂内閣の殊勳たる日英同盟締結……三七九
◇桂公と予

第十三章　日露戰役時代と予
（明治三十七年—明治四十二年）

一 桂内閣の改造と待望の對露宣戰布告……三八五
二 戰時中の言論統一と予……三八九
三 講和談判中の挿話……三九一
◇桂、タフト覚書の内容漏洩問題
四 國民新聞社燒打事件……三九五
◇ポーツマス條約と國民の不滿
五 燒打事件と新聞紙發賣禁止の[illegible]……三九九
◇國民の一般[illegible]と予の主張[illegible]
六 發行當初より新聞に對する予の抱負……四〇三
◇卒ゆるものを卒ゆる新聞
七 支那漫遊以後の新聞紙面の轉換……四〇八
◇[illegible]と[illegible]の予の意見

第十四章　桂公の政黨組織時代と予
（明治四十三年—大正二年）

一 朝鮮併合と『京城日報』監督としての予……四一五
◇貴族院議員に勅選さる
二 得意の絶頂にある桂公……四二〇
◇[illegible]
三 明治天皇の崩御と桂公の内大臣就任……四二三

四　第三次桂內閣の出現……四二五
五　桂公の新政黨と第二回燒打事件……四二八
◇不人氣なる立憲同志會
六　第二回燒打後に於ける予……四三三
◇精神的、物質的[illegible]と近[illegible]行◇『時事一家言』と『政治家としての桂公』
七　桂公の薨去と予……四三九
◇『公爵桂太郎傳』の編纂

第十五章　寄き逝せる思出を拾ふ

一　高島子爵と予……四四七
◇子爵のカバン洋行
二　西園寺公と予……四四九
◇公と三つの「ロ」
三　伊藤公最後の一の思出……四五一
◇ハルビン出發前のエピソード
四　大隈侯の晩年と予……四五三
五　井上毅陰先生と予……四五四
◇先生の遺稿『財政論』◇山田武甫翁と予
六　[illegible]南氏の回顧……四五七
◇『[illegible]』と[illegible]

第十六章　政界絶緣と立言者
（大正三年―大正十一年）

一　政界との絶緣と修史の素志……四六一
◇父の死と修史の一[illegible]
二　大正三年より七年に至る予の[illegible]……四六六
三　盲腸炎の大手術……四六九
◇逗子に於ける[illegible]と修史
四　國民教育奬勵會の創立……四七一
五　[illegible]に於ける予と[illegible]內閣……四七三
六　予の還曆と青山會館の設立……四七六
◇[illegible]の[illegible]
七　私設新聞局として勉強館の設立……四八〇
◇[illegible]と予

第十七章　關東大震火災と[illegible]時代
（大正十二年―大正十三年）

一　逗子に於ける大地震……四九七

二 國民新聞社全焼第二報と徒歩歸京……五〇一
三 大震火災と徳富萬熊……五〇四
四 國民新聞社復興策と石川武美氏……五〇七
五 石川氏の國社長就任と萬熊の永眠……五一〇
六 國民新聞社の苦境と川宇佾……五一四

第十八章 國民新聞社退去以後
古稀に至る迄（昭和二年—昭和七年）

一 何故に國民新聞社を去りたる乎……五二一
◇國民新聞社と根津氏との關係
二 國民新聞社退去の決意……五二五
◇言論の自由を拘束されし予
三 新聞社退去後の修養と文筆……五三〇
四 熱心なる大阪毎日新聞社の提議……五三四
◇大毎、東日社賓として論壇に立つ
五 徳富蘆花臨終の記……五三九
六 徳富蘆花の兄としての予……五四五
◇弟を弔するの辭
七 人生七十尋常事。倘翔前途又十年。……五五九
◇古稀祝賀會、横濱支局設立、[illegible]の建立 ◇予の古稀記念と[illegible]の下賜

第十九章 予の著作・文章及び書籍愛好趣味

一 予の著作一瞥……五八一
◇文章報國五十年
二 予の文章に就いて……五八八
◇達意の文章を目的とす
三 予と書籍蒐集の趣味……五九三
◇徳富文庫書籍の二大部類
四 刀劍からステッキ、ステッキから書籍……五九九
五 蒐集の第一歩五山版……六〇三
◇島田翁の薫陶と竹添井井居士の寶書
六 朝鮮支那漫遊と古印……六〇六
七 何故に書籍を愛したる乎……六〇九
◇『[illegible]』の[illegible]
八 蒐集の第二歩五山版……六一三

◇磯部屋より購ひたる五山版　◇鎌倉古寺院の五山版
九　『唐三藏取經記』掘出しの記……………六一七
◇村幸書店に於ける發見
十　『文選』『廬山記』『虛堂錄』掘出し記・六二一
◇磯部屋と琳琅閣に於ける發見
十一　書籍蒐集鼓大の幸運……………六二六
◇『祕府略』及び『醫心方』を得るの記
十二　朝鮮を經由せる支那本と朝鮮本・六三二
第二十章　自らを解剖す（上）
一　少年の心と反抗の精神……………六三五
二　反抗心と復讐心……………六三九
三　肉體的臆病と精神的勇氣……………六四三
四　金錢問題と予……………六四六
◇大業物の作企
五　金錢上の失敗譚……………六五三
六　金を作る人と費ふ人……………六五五
七　酒色の誘惑と予……………六五九
八　勝負事及び遊藝事と予……………六六三
第二十一章　自らを解剖す（下）
一　美の愛好者としての予……………六六七
◇審美的精神と野蠻の氣象
二　非社交的性格の兩面……………六七三
三　粗枝大葉とエネルギーの經濟……………六七八
四　壓迫に對する戰鬪的精神……………六八二
五　保守的なる予……………六八六
六　予の好まざるタイプと好むタイプ・六八九
七　予の宗教觀……………六九六
◇宗教は心靈上の奢侈美術　◇宗教に對しては一切平等
八　生れ落ちたる蒲團見……………七〇三
◇親の子孝行と妻の內助
九　予は一種の泣蟲……………七〇六
予の戀愛觀
蘇峰著作及び編纂書目……………一―一〇

蘇峰自傳

第一章　生立ちと幼年時代

一　緒言

予は手の屆く限り、凡有る新聞記者の傳記、自傳、懷舊錄などを集めて讀んで見たが、別段感心すべきものは、絕無ではないが、先づ少かつた。それもその筈だ。新聞記者は面白き事を觀察するが役目で、自ら面白き役目を働く事實もなければ、その役割にも與つて居ない。

特に傳記として面白きは、所謂るマン・オブ・アクション（Man of action）であつて、新聞記者は寧ろMan of action の記述者であり、解剖者であり、批評者である。彼自身の仕事といへば、要するに平々凡々に過ぎない。中には前『タイムス』記者スチードの如き『三十年間を經過して』と題し、自己を中心として、世界的政局の推移を敍してゐるけれ共、冷靜なる讀者は、餘りにその自己中心過ぎたるを、笑はずには居られない。

且つ等しく文士としての傳記ならば、せめてルッソーの『懺悔錄』ほどにゆけば興味もあるが、脫線しない文士の傳記は、左程興味のあるものではない。

予の如きは平凡に始り、平凡に終り、一生殆ど豫定の行動を爲し來つた樣なものにて、自らさへもその平凡に呆れる程であれば、他人は猶更らであらう。且つ予は少年の時より、些かばかりの記憶力を恃みとし、一切日記をつけない方針であつた。旅行中などには、一寸書き留めたこともあるが、それもほんの日程を記するばかりであつた。時には自分の感想を書き付けたる事もあるが、それは概して座右に讀みつゝある、凡有る書物の裏表紙や、餘白に書込んだるものにて、何れの本に何事が書いてある歟、蟲干の時などにそれを見出して、些か興味を覺ゆる事がある位に過ぎない。

但だ明治二十七八年役以來、一通りの事は、殆ど順序よく逗子の老親に報じ置きたれば、それが一種の日記代りにでもなるかと思つて居たが、老親沒後、其の遺篋を探りみれば、役に立たぬ書翰は、葉書までも丁寧に保存し、その受取つた年月日さへも記入してあつたが、必要と見る可き書翰は、殆ど一も見出さなかつた。これは注意深き老親が、その生前に燒捨てたものと思はるゝ。

然るに自ら老境に逼り來れば、少壯の時に恃としたる記憶力も、頗る減退し、今更ら予の一生を語らんとするも、語る可き程の資料もなく、叉たその記憶も殆ど無い。併し『君子は世を沒する迄名の

稱せられざるを憾む』と云ふ言葉もありて、自分は必ずしも自分の名譽を後世に遺す程の事ありとは思はぬが、唯だ念頭に浮ぶものを紙上に漫記したのが、『蘇峰自傳』である。

固より一種の閑文字にて、何等世道人心を裨益すべき點は無いが、併し有益でもなく、面白くもない代りに、讀んで毒になる心配は全くあるまい。兎も角も予はこれより記憶を辿り、昭和七年、予が古稀を迎ふる迄の事を、書き續くることゝする。

二　予の家の歴史

◇一領一匹の德富家

理りておく。これは固より懺悔錄でない。又た辯明書でもない。唯だ予が思出の儘を、その折々に書きつけるものである。固より世間の人に示さんが爲でなく、又た子孫に傳へんが爲でもない。謂はゞ自問自答、自語自聽に過ぎない。

扨予の昔噺をするには、予の家に就いて語る必要がある。その家に就いて語るには、先づ祖先に就いて語らねばならぬ。予が家は菅原氏にして、菅公の裔と申傳へてゐるが、それは固より當てにな

らない。しばらく最近の記錄に就いて云へば、德富氏初代を德富忠助と云うた。彼は寛永十三年肥前島原の役に、肥後國主細川忠利の軍に從ひ、有馬城本丸の磯際より鐵砲を放ち、城内に進入した功を以て、寛永十六年肥後國葦北郡水俣郷に於て、若干の高地を永世賜つた。これが德富家が肥後の南端葦北郡に於ける關係の初りと云ふよりも、その關係が記錄に書き殘された始である。

二代德富一保。父を襲ぎて郡筒小頭となり、男女四人の子があつたが、いづれもこれを他家に養子とし、若くは嫁せしめ、加藤家浪人の子を養つて、その家を繼がしめた。この經緯は詳しく我家の記錄に遺つてゐるが、恰も小說の趣きがある。

三代德富一貞。卽ち前に述べた加藤家浪人の子である。四代德富一延、忠四郎と稱し、郡筒小頭を世襲してゐたが、寶曆五年五月、醉興したる暴漢が家に來つて暴行を爲したから、家僕等之を毆打して、あやまつて死に抵らしめた爲に、二人の家僕はその罪に問はれて獄に投ぜられた。然るに一延君は自ら家主の責任なりと感じ、同年六月三十一日切腹して死んだ。時に齡五十。二僕はやがて放免せられた。

五代德富久貞。通稱太多七、元文三年十二月水俣濱村に生れた。寶曆六年二月、家督を相續して、郡筒小頭となり、明和七年六月、一領一匹に昇級し、同年十一月、葦北郡監察を命ぜられ、天明四年同郡津奈木郡總庄屋兼代官を命ぜられ、寛政十年正月、山本郡正院郷に榮轉した。この人は德富家中興の

主で、父一延君の切腹した時には、未だ二十歳に達せざる若者で、後に遺されたる多くの弟や妹の世話をやき、困難なる家道を立て直し、遂にその富一等に至るに到り、而してその職に在勤したるところの人も、概ね當時の熊本藩の名士であつたことは、記録に詳らかである。文化十五年同月十五日享年八十一歳にて逝いた。これより我が徳富家は別れて、本家、分家となつた。本家は徳富久貞君の長子才次郎之を繼ぎ。分家は次男茂十郎貞申これを繼いだ。これが即ち分家の六代目である。實は殆ど本家が相續したが、精神的の凡有るものは、概ね予の曾祖父貞申君が相續した。貞申君は明和七年に生れ、寛政十二年正月、父久貞君に繼いで、津奈木郡浦庄屋兼代官を命ぜられ、在職十三年、治績大に擧り、文化七年五月八日、津奈木官舍に逝いた。享年四十一歳。七代が予の祖父徳富美信君だ。寛政十年五月五日出生。文政五年十二月、津奈木郡浦庄屋兼代官を命ぜられ、天保十一年佐敷郷に轉じ、同じく十五年再び津奈木郷に復し、弘化四年水俣に轉職した。在職二十五年、明治十八年七月十七日、水俣に逝いた。享年八十八歳。

八代は予が父德富一敬君である。通稱は太多助、後太多七に改め、淇水と號す。文政五年九月二十四日葦北郡津奈木に生る。美信君の長子也。明治元年七月、父隱居の後、一領一匹に轉ぜ、給地開墾地、山林共に下賜せらる。その以前屢よ藩命を受けて長崎、鹿兒島方面を往來し、種々實務の任務に

衝つた事は、別に記録が存してゐる。明治三年六月、熊本藩廳の召に應じ、家を熊本に移し、同じく五年累進白川縣――當時熊本縣を白川縣と稱した――七等出仕に補せらる。六年十一月、辭職以來、專ら勸業教育の務に從ひ、明治十六年一月、家を長子猪一郎に讓り、父子相與に教育に勗む。十九年家を擧げて東京に移り、二十九年湘南逗子に老龍庵を營み、優悠天然を樂しむ。大正三年五月二十六日、病をもつて東京に逝く。享年九十三歳。

以上がその概略である。要するに吾家は双刀を佩したが、知行取りの士族ではなく、家格は一領一匹といふものにて、所謂る御赦免開きなるものを所有し、自力で開墾したる田地、若くは自力で植ゑつけたる山林等を所有し、全く自力にて食むものであつた。而して久貞君以來は民政に關係し、甚だ狹き範圍ではあつたが、或は海邊を開きて田地を造り、或は山野を造林して水源をつくり、或は運河、或は溝渠を通じ、而して或は學校を設け、良師を聘して郷黨の子弟を教育する等、それ〴〵骨折つてゐたことは、今尚ほ吾家の記録に存し、且つその功績が、葦北郡の諸方に口碑として存在してゐる。吾父に至つては横井小楠の最初よりの門下にして、恐くは小楠より最も信親せられたる一人であつたと思はるゝ。その國事に盡したる功勞は、當人があまり謙遜であつた爲に、詳しく書殘されてゐないが、往々他所の文書、例へば鹿兒島、越前等の文書の中から吾等に教へらるゝものがある。尚ほ熊本藩

政の改革に際しては、吾父がその同志と與に最も貢献したることは、吾父の手になつたる、當時の藩知事細川護久公の口達書をみても判るであらう。

三　予の故郷と徳富家の格式

◇延喜式に掲げられたる水俣

予は生れて八歳迄水俣に住んでゐた。今此に水俣に在つた幼時の記憶を辿り、水俣に就いて少しく物語ることゝしよう。

水俣は肥後の最南端で、直に薩摩と境を接してゐる。前には海をうけ、後に山を負つてゐる。熊本から二十五里、鹿児島から二十八里といふ。謂はゞ先づ双方の眞中であらう。上古よりの驛路にて、延喜式にも記載せられ、驛馬五匹と掲げてある。薩摩に赴くには、海岸に沿うたる道に出水があり、山手に沿うたる道には大口がある。島津家の時代には、大口の城主は新納武藏守忠元で、出水の地頭は山田昌巖であり、いづれも當時名高き勇士であつた。而して島津家が國外に兵を出す時には、出水口からでも、大口々からでも、先づ水俣に向ふを順序としたから、水俣は軍事上に於ても大切な場所

であつたらしく思はるゝ。而して邊鄙とは云ひながら、可成り繁昌してゐた

龜井道載の『肥後物語』に、薩摩より歸りしなに水俣の宿屋に泊つて、何か書き物などなしたるに、亭主がそれを認め、書を乞ひたれば、その需に應じた。而していざ明朝宿料を拂はんとするに、亭主は自分は田舎には住んでゐるが、若き時には四書位は讀んでゐる。最早三十年あまり此處にて旅人宿をしてゐるが、聖人の道を學ぶ人を宿した事は、今度が初である。これほど難有いことはない。宿料等は決して頂戴せぬと言うたから、道載は隨行の門人に申付けて、窃に宿料を鶏の塒に入れて立去つたのに、亭主は目早くこれを見付けて、更に之を門人に返却した。而して父子共に舟迄送り、新しき茶碗二つに茶を添へて、船頭に大切なるお客故、隨分心を付けよと申渡したから、いよ／＼舟が出でんとする時に再び門人に申付け、宿錢の一封を岸に投げたらば、亭主は少しく顔色を變じ、私は貴君方を知つてゐるに、貴君方は私を御存知なきは如何にも殘念と云つた。此に於て流石の龜井も、これほど自分の心中に恥をかいたことはないと書いてゐるが。水俣の風俗が必ずしもこの通りとも云へないであらうが、予の先祖等がいくらか斯る風俗を養成するには、與つて力があつたものであらう。水俣は大なる部落にて、山手の方は陣内若しくは陣の町と名付け、海邊の方は濱村と云ひ、その他種種の小字が少からずあつた。予の家は濱村にあつて、通稱居倉と稱してゐた。それは從前予の家のみ

熊本縣水俣八幡宮
（徳富氏の氏神の一）

百五十年來徳富氏の商家（現在は郵便となる）左の石は「徳富先生邸宅趾」の碑）

熊本縣上益城郡杉堂村（今津森村）の誕生記念碑除幕式後の蘇峰翁

か土藏造りの瓦屋であつたからであらう。予の生立つ頃には、固より附近に瓦屋も澤山あつたが。

水俣は山手からは材木とか、炭とか、薪とかを出し、濱邊には鹽田があつて、百姓は片手間に鹽を製造してゐた。鹽は大概專ら薩摩に送り、薩摩から米、麥等の食料品を輸入してゐた。平地は水俣川を挾んだる兩岸に廣がつてゐたが、左程廣くもなく、その周邊は小高き丘若くは山となつて、概ね畑に開墾されてゐた。

當時水俣にて予の家は格式に於ては、先づ第三番目であつたらう。第一は深水氏である。これは相良家の支族にて、元龜天正頃からの水俣城主の裔で、藩主相良侯から立派な知行を貰ひ、代々水俣の總庄屋で、水俣氏を稱してゐた。而してその家は細川家にお部屋様を供給し、現に細川護成侯の如きは、深水家から出たる、お部屋様の腹である。

その次は予の本家である。その家は陣町から濱村に至る眞中にあつて、實に城郭とも云ふべき大なる石垣を築き廻し、堂々たる構をしてゐた。この家は中小姓格であつた。予は子供の時に、正月が來る毎に、予の本家は五段の枝がある門松を立てたるに、吾家の門松には五段の枝がないことを、初は不思議に思ひ、後には遺憾に思つてゐた。併しその時分深水家の當主も、予の父に向つては全く弟分として交り、本家の主人は養子であつて、小作人や出入りの者に向つては威張つたであらうが、予が父

には固より數步を讓つてゐた。予の生立つ頃の父は、水俣の人物といふよりも、横井小楠の高弟で、熊本の藩は固より、鹿兒島とか、柳河とか、長崎とか、越前とか、藩外にも多少聞えてゐた。又た學問の上では、當時水俣に園田俊助と云ふ人があり、月浦と號し、江戸の聖堂にも遊學して、詩文などは達者で、その方では予の父は敵はなかつた樣だが、經世の學者としては、矢張り父が立てられてゐた。右の次第で、家格は第三位であつたが、家聲は第一であつて、予等は先づ水俣にある間は、鳥なき里の蝙蝠であつた。

四　予の祖父德富美信

當時予の家には三人の主人があつた。父が前申す通り濱村の居倉の主人である。それに予の祖母は中風であつたが、本家の附近といはんより、庭を隔てゝ住んでゐた。そこを予等は中隱宅と稱してゐた。祖父は水俣川が海に入る少し手前に於て、大小二派に分れ、その小なる流の三角洲に突出したる所を埋立て、そこに隱宅を構へてゐた。それを予等及び附近の人は、築出しと稱んでゐた。

予の祖父美信君は十三歲の頃、その父貞申君を失ひ、而して年頃になつて父の職を襲ぎ、それ〴〵官

遊した。如何にも偉大なる骨格にて、予等の生立つ頃には、最早六十を過ぎ、七十以上であらうが、それでも見掛けは相撲取りの如くであつた。理窟が嫌ひ、面倒なことが嫌ひ、禮儀、作法等をして、しかつめらしくすることが嫌ひ。何よりも酒が好きであり、それに鳥を飼ふことが好きであつた。任俠などといふむづかしき文字にあてはまるか否かは知らぬが、常に強きをくじくことを楽しんでゐた。その酒をあふつていゝ氣持になれば、若い時に人を投げとばしたとか、長上者を閉口せしめたとか、種々なことを我々にさへも語つてゐた。自分では無學者でないと云ひ、寧ろ學問を誇りとした様であつたが、話すところを聞けば、學問のことで奉行や郡代のあげ足をとつたり、やりこめたりしたことがある様で、彼が云ふ程の無學者ではなかつた様だ。それもその筈である。若い時には辛島先生の門に遊んだのである。辛島先生と云へば、鹽井と號し、松平定信の寛政時代に於ける肥後藩の學者で、山陽の父、頼春水等と幕命を奉じて、聖堂にて講釋をした人である。熊本藩黌時習館の教授としては、先づ屈指の一人だ。

これは予の父の話であるが、父の幼き時、津奈木の總庄屋として祖父が勤めてゐた際、一寸百姓一揆らしきものが起つて、喊の聲をたてゝ官舎を取巻いた。然るに祖父は耳之を聞かざるものゝ如く、双肩をぬぎ、灸を背に据ゑて平氣でゐた。幼き予の父は心配でたまらなかつたが、祖父は遂にまじろ

ぎもしなかつた。されば子供心にも、餘程豪膽の人であると思うたと、予に向つて語つたことを、覺えてゐる。

予の祖母は津奈木の徳永氏から來てゐるが、徳永氏もやはり家格に於ては、予の家とほゞ同じものであつたらう。予の生立つ頃には、祖母は中風にて起居も不自由であるし、言葉も不自由であつた。祖母はいつの頃にかあやまつて足をいため、遂に跛となつたが、併し跛となつて後も猶京都見物や伊勢參宮などをした。祖父の話では祖父の役目の一半は、祖母が勤めて呉れたとの事であつた。書類なども祖母が整理して、役所に赴く時などにも、袋に入れ、それを祖父の首に吊して、失はぬ様にとの事であつた。又予の父の學問や習字などにも心をかけ、父が熊本から故郷へ還る際に、祖母への土産は、唯だ使ひ古した澤山の禿筆を携帶したといふことである。予の母は予の眼にも尋常の婦人とは映じなかつたが、母が祖母に敬服してゐたところをみれば、餘程しつかりしたる女性であつたらう。當時祖母の不自由なる口から明かに出る言葉は、予の長姉の名と、予の名のみであつたといふことだ。予の長姉は予の父の弟の子にて、その父母熱病にて、殆ど同時に逝いた爲め、予の家に養はれて、長姉となつたのである。又予は予の同胞中殆ど最後に生れたる者にて、祖母にとつても、餘程珍らしかつたのであらう。予が幼き手にて祖母の背を撫で、若くは予がたべたる薩摩芋の半片を分つて祖母

に與へたる時などは、涙を流して喜んでゐた。又予が五六歳の頃、正月左義長の時に馬に乘つて出掛くる際には、祖母は看護者の背に負はれつゝ、わざ／＼家の前まで出掛けて、これを見物したことがある。祖母は明治二年予の七歳の時に逝いた。予は裃を着け、牧内と稱して、やゝ隔りたる丘陵にある予の家の墓地まで、坂を登つて、柩を送つたことを、今尚ほ記憶してゐる。

五　父と母の兄弟姉妹

予の父は長子であつて、その次が一義。これは予の父よりも體格もよく、又總ての事に就ても、予の父に立勝つたりといふほどでない迄も、出來がよかつたらしく、又た細川の藩にて繪畫なども描き腕力は頗る強く、三太郎と稱して、予の郷里から熊本に出づる間に、大なる三つの坂があるが、その道を鎧櫃をかついで往來したといふ程であれば、頗る元氣であつたらう。されば予の家を二つに分けその大半を父がとり、その小半を叔父がとることになつてゐたらしい。横井小楠先生上國遊歴の時も、予の叔父が隨行し、今でも旅行中叔父に與へられたる長州の村田清風其他諸有志の書翰等が殘つてゐる。予の幼き時にはその日記が殘つてをり、それには地圖とか畫とかを書き込み、子供心にも面白く

覺えてゐたが、惜しい哉それは多分明治十年の亂に紛失したものであらう。〔頃ろ偶然にも亡弟健次郎の遺物中から、之を發見した〕尚ほ『小楠遺稿』に掲げてゐる、小楠先生の各地見聞の記録も、多分叔父が筆記したものであらう。然るにこの叔父は夫婦共只幼き一女を遺して逝いた。そこでその女が予等の長姉となつたわけである。予は遂に予の叔父を見るに及ばなかつた。

次は高廉と云ひ、郡中の素封家江口家の養子となつた。これも見上ぐる如き堂々たる體格の持主で、才物であつて、吉田松陰等が肥後に來た時にも、往來をし、又た小楠先生に隨行して越前などにも赴き、維新の時も、東都に出で、可成り望をおかれてゐたが、才にまかせて勉強しなかつた爲に、大成するに至らなかつたが、諸方に官遊して明治十三、四年の頃には、東京にて『内外交際新誌』と稱する雜誌を發行してゐた。予が東京に新聞記者として筆を執つたのは、この雜誌であつた。後には父と與に『小楠遺稿』を編纂した。次は昌龍。これは予の祖母の家、徳永家を繼いだ。この叔父の子が徳永規矩と云ひ、嘗て或る人々に愛讀せられた『逆境の恩寵』といふ本を著した者である。

父の姉妹は三人あつたが、予の知つてゐるのは二人である。一人は源光寺といふ本派本願寺に屬する坊守となり、他の一人は津奈木の伊藤氏に嫁した。

母方は男子一人、女子七人である。母の父は矢島直明。温厚篤實の漢で、予の祖父美信の同僚であ

つた。その妻即ち予の外祖母は三村氏、名は鶴子にて、其の非凡の婦人であつたことは、横井小楠が其の墓碑に書いてゐる。今予が家に遺りたる筆蹟をみれば、如何にも勝れてゐて、尋常人でなかつたことが判る。

母の長姉は三村氏と藤島氏、これは双子であつた。その次が直方、その次が竹崎順子、その次が予の母、母の次が横井津世子、その次が矢島楫子、その次が河瀬貞子であつて、いづれも特色のある同胞であつた。

矢島直方は予の父と同年にて、十六歳頃から一緒に學んだ。この漢は十代にして父の代役をも勤め、民政の上に大なる手腕をあらはし、前途も有望の者として同志の間にも目指されてゐた。然るに當人も自惚が過ぎたとみえてだん／＼増長し、流石の横井小楠先生も手があたらなかつた。後には左院の議官となり、又た福岡縣の地方官となつたが、遂にその志を大に達せずして逝いた。學者ではないが、先づ半熟の英雄とでも云ふべきであらう。母の姉妹の中にて子供心の予にもその容貌、風采が上品にみえたのは、横井津世子であつた。而してその最も脱線的であつたのは、藤島の伯母であつた。熊本藩の會計役人に嫁し、長き後家暮しであつて、その子は藤島正健と云ひ、大審院の役人で、可成り幅を利かしてゐたが、伯母は正健氏の俸給でも何んでも取上げて、殆どこれをその周圍に振まり家

る學生等に施した。近年迄も世界的に名高き學者で、伯母の恩惠に與つた者が尙ほ存してゐた。

矢島楫子は最初林家に嫁し、予の生立つ頃は、その夫は大酒家であるとて、その幼き女を抱き里に歸り、一時はその女と共に、予の水俣の家に來り寓してゐたことがある。その女は竹崎達子といつて、昭和九年名古屋に逝いたが、水俣なる予の家に其母楫子女史と與にゐる頃、彼女は玩具の木製人形にて予の頭を割り、血を流したといふことにて、今尙ほ一笑話として傳はつてゐる。横井の叔母も横井小楠先生が、明治二年暗殺の厄に遭はれた後、一時予の水俣の家に來てゐたことがあつた。これは後の話であるが、予は横井の叔母に連れられて、水俣から熊本に出たのであつた。

六　予の父德富一敬

予は吾母が吾家に於ける最初にして、且つ唯一の主婦であるとばかり思つてゐたが、後に父の書いた記錄をみて、初めて予の家には、母に先立つ主婦のあつたことを知つた。それは父の從妹にあたる人にて、結婚後間もなく離緣となり、それが予の本家の主婦となつて、本家の養子に配したのである。別に何故といふことは聞きもせず、知りもしないが、その婦人は平氣で予の家にも往來し、予の母と

祖父美信翁が嫡孫たる蘇峰翁の無事成長祈願成就の爲め氏神に奉納せる額・猪の繪は即ち翁の生れ年に因む

美信翁の隱宅　樂田と稱す

先考湛水翁及び母堂久子刀自

翁の母堂の姉妹　前列右より湯浅初子(翁の姉)三村にほ(母堂の姉)
翁の母堂　後列右より小楠先生夫人横井津世子(母堂の長妹)三村つで(にほ子の女)矢嶋楫子(母堂の次妹)

もと當り前に交際してゐた。予の母は祖父と外祖父とが同僚であり、父と伯父とが同年、同窓、同學であり、予の家に母が嫁し來つたのは、別に何等不思議もないことであらう。今ま此に父及び母に就いて、予の當時みたるところを、物語るであらう

父は老年に至つては好々爺であり、又た篤厚の君子として、世間からも殆ど生ける聖徒の様に思はれてゐた。併し予の幼き頃の父は、それ程でもなかつた様だ。人間は眞面目であり、正直であり、重厚篤實であつたに相違ない。どこを探しても父には狡猾といふ分子はなく、輕薄といふ分子はなかつた。併し非常なる癇癪持ちであつて、又たどう考へても賢明とは思へなかつた。山氣などは爪の垢ほどもなかつた。今少し父が大膽者であり、横着氣があり、山氣があつたなら、必ず世間的に成功者として今少し幅をきかしたであらうと思ふ。父は十のものをせいぜい五位により使用せず、一生懸命の時でも七以上には上らなかつた。併し小心者ではあつたが、臆病者ではなかつた。正直であるから、利害得失など全く打忘れて、信ずるところを貫かんとした。必らずしも強い漢とも思へないが、又た弱い漢でもなかつた。兎にも角にも他人に制肘せられず、自分の思ひ通りの生涯を送つた。その點から云へば守るところに忠にして、信ずる處に勇とでも云ふべきであらう。生れ付きは不器用であり、あまり戰鬪を好まず、苦勞性であり、心配性であり、且ついづれかと云へば、引込み思案のことが少くなかつ

た。人と爭ふ時には人を押しやるよりも寧ろ自ら退いた。併しその心はなか／＼よく働き、一通りものゝ大局も見え、特に相手の方の氣分を察するなどの事は機敏であつた。横井小楠先生は如何にも素敏き人にて、その素敏きことは織田信長にも比すべきほどであつたさうだが、吾父は小楠先生の氣に入り、先へ先へと廻つて、常に小楠先生の思ふ通りの事を行つた。故に小楠の側、一日も徳富無かる可からずと云ふ風であつたといふことを、小楠先生に多年左右したる或る婦人は、予に物語つた。吾父は見掛けはそれ程でなかつたが、多少の才氣はあつたであらうと思はるゝ。兎に角予が人心ついて、常に吾父にあきたらなかつたのは、餘りに謙遜すぎることであつた。予は屢ゝ吾父に就いては、はがゆく思つてゐた。併し如何に割引して考へても、吾父ほどの善人は、全くないとは云はぬが、餘程少いであらうと思ふ。善に勇み、善を好み、善を樂み、善を慕ふに就いては、一寸世間に類の少き漢であつたと思はるゝ。

七　予の母徳富久子

母については思出が澤山ある。母はその特色ある八人の同胞中にて、最も特色ある一人であつたら

しく思はれる。若し母に缺點といふものが最も目についたらば、それは母が病身であるといふこと、及びその容貌、風采が、何處にも女性らしき美を認めないことであつた。若い時の事は知らぬが、予が覺えた頃は、母も既に四十以後であつたであらう。予は凡有る婦人の顏が、殆ど誰を見ても、同一に見えて、左程その容貌、風采等に、特別の興味を感ずる者ではなかつたが、それでも母を見て、吾母はその心の如く、その容貌も美はしいといふ嘆美の念は、遂に一度も起つたことがない樣に思はれる。それと予が物事の少しく心付頃より、母は殆ど半ば病に惱まされてゐた。その主なる持病は眼病にて、そは予の生るゝ以前からであつたかも知れない。八十前後には殆ど兩眼とも見えない程であつたらしいが、それでも字は手さぐりに書いてゐた。併しながら吾母はとても尋常一樣の婦人ではなかつた。別段學者といふほどではなかつたが、一通りの事は皆な心得てゐた。書はいづれかと云へば、能筆ではなかつたが、その氣性同樣大きな字などは雄健であつた。歌もそれほど修業しなかつたが、幾十年となく修業したる父の詩よりも清新であり、自由であつた。母は女工の事は一通り心得てゐた。料理もするし、針仕事等は寧ろ上手であり、又人と言話しつゝも、常に紬などをひきつゝ、手を休めたことがなかつた。遊藝も三味線などは手に入つたものにて、八十、九十の間でも、たまには弄んだことがあつた。世間では似た者夫婦といふが、吾が父と母とは、殆どその性格から趣味まで、相反して

ゐた。予は常に父が母であり、母が父であつたら、吾家は總ての點に於て、一層幸福であつたらうと考へた。母の武器は沈默であつた。即ち父同樣その感情は、頗る激烈であつて、たまにはそれが爆發せしむることもあつたが、いよ／＼その感情が激した時には、石の如く沈默し、猶ほ何と云つても、相手にしなかつた。その時には父自らが沈默を破る迄、待つの外はなかつた。母は予の喧嘩相手であつて、殆ど最後まで予と議論を戰はしつゞけてゐた。予も父に向つては、若き時には兎に角、二十を過ぎてからは、未だ一度も言ひ返しをしたことはなかつた。父も予には絶對の態度をもつて臨み、何等命令らしき事を申したことはなかつた。併し予も母にはいくらか無遠慮であり、母も予に對して可成り無遠慮なことを申した樣である。併し今日になつてみれば、母は實に良い母であつたと思ふ。序ながら猶少しく母に就いて語つて置く。

予は母に及ばないことが少くない。その一は無慾である。凡そ吾々俗世の中に無慾である者はなかつたと思ふ。何事にも趣味がなく、何事にも興味を感ぜず、所謂る猫に小判といふ如き意味に於ての無慾ではなかつた。母は何事にも趣味があり、興味があつた。生花なども免許とりであつた。又た凡有る生産的事業等にも興味を持つてゐた。謂はゞ趣味にせよ、仕事にせよ、凡有る方面に、その心が動いてゐたに拘らず、慾といふものは殆どなかつた。從つて又た名譽心などといふことも、殆どなか

つた。若し慾といふものがあれば、それは只だ奉仕の慾であつた。何かよき事をしたいといふ慾であつた。若し哀しみといふものがあつたらば、それは何物かを人に與へたいと云ふ事であつた。從つて母は金銭に潔白であつた。餘りに潔白にあり過ぎて、明日、若くは明後日の準備を打忘れはしなかつた乎と心配せらるゝ程であつた。第二は勇氣である。女ながらも非常なる勇氣を持つて、如何なる場合でも、失望、落膽するとか、若くは悲觀するとかいふことはなかつた。恐らくは母は一生の中に、その固有した勇氣を、一割ほども使用したであらうと思はれぬ。若し勇氣が遺産に出來るものであれば、せめてその幾割でも、遺傳しておきたかつたと思ふ。第三は、思ひ切りのよきことであつた。凡そ母程涙もろい者もなかつた。母は如何なる小事にも、その心の底から動くところの、同情を有つてゐた。併しいざとなれば、如何なる悲しき事をも、如何なる苦しき事をも、如何なる不愉快の事をも、母の忍び得ない事はなかつた。それが苦き藥を、苦き顔して呑むといふのではなく、平氣で滿喫して、何等その痕跡を止めなかつた。予等の熊本にゐる頃、父の官を罷めて以來は、郷里にある財產の大部分は、殆ど皆予の祖父の手許に取上げられ、別段特別の收入とてもなく、殆ど居食ひの姿であつた。それには先祖代々の貯蓄をつかひ果し、山林、田畑等も追々と賣りとばし、家にある什寶等も悉皆に處じて賣物とした。父はその頽廢に斷腸の思をなしたが、母は平氣であつた。あまりに平氣で、予は時

としては面憎く〻感じた程であつた。母は又た如何なる場合にも、困らないといふ丈の臨機應變の才略をもつてゐた。困難を切り抜ける事とか、人を說得する事とか、物の談判の解決をつける事とかは、實に鮮かなものであつた。次には英語でいふ Compassion 卽ち憐れみの心を非常に多量に有してゐた。その心は大なる者にも、小さき者にも動いてゐた。母程の勢力、腕前をもつてゐた者に、慘忍、刻薄などといふ分子が、露程もなかつた事は、今更驚かざるを得ない。次には愚痴を滾さないことである。これは思ひ切りがよい爲でもあらうが、未だ嘗つて過去を悔恨したる話をする樣な事はなかつた。非常に親切であり、幾十年以前に召使つた者でさへも、親類同樣の待遇をなし、一度交つた者は、一生忘れない程の親切心をもつてゐた。

併し一家の主婦として理想的であつたや否やは、何とも斷言が出來ない。それは母は社交的といふよりも社會的であつた。一家の經濟とか、子供の敎育にて滿足してゐる女ではなかつた。母の心も手も、外へ〳〵と伸びてゐた。母の多くの同胞、その緣を辿れば、母方の親類、緣者は、百名に垂んとしたであらう。母は如何なる場合でも、親類會議の議長であつた。又た女子の敎育とか、女工(紡績等)の創設とか、或は婦人に關する凡有る仕事などは、一として母の關與しないことはなかつた。然も母は決して自ら表面に立つて、その看板となるを欲せず、常に緣の下の力持ちをなしてゐた。母はよく

大體が見え、又た組織の才があり、而して一度ものを初むれば、それを徹底せしむる丈の辛抱力があつた。從つてその方面に就いては、申分がなかつたが、家庭の主婦としては、家の事は閑却せらるゝといふではないが、或は第二におかれる樣な心配が無つたとも限らない。それで父は母によつて、一生を助けられたに相違はないが、同時に又母は父にとつて、可成りの重荷であつたに相違あるまいと思はれた。

八　予の出生と其の幼時

これから少しく予自身に就いて語らねばならぬ。予は吾家に於て六番目の子である。六番目といふが、長姉は前にも述べた通り、予の父の弟の女にて、予の從姉であるから、我母の胎内から出で來りたる者としては、五番目である。不思議に吾家は女のみにて、これには當時家の相續といふことを最も大切とする時代に於ては、吾家では一大問題であつたらしい。四番目の姉の生れる時には、父も今度こそは男子であらうと、心待ちに待ち構へてゐたが、それが裏切られて、非常に失望し、その爲に最後の女の兒を殊更初子と名付けたといふことである。如何に吾父がその事を煩悶したかは、父の

草稿に其時の詩が遺つてゐる。この事に就いては、固より母が負ふべき責任とも思はれぬが、兎に角總べての人の前に於て母が面目なく、又た不首尾であつたことは云ふまでもあるまい。斯くて吾家には愈よ同姓より養子を迎へ、これに予が長姉、その實從姉である姉を娶せ、予の家を相續させんと試みたが、その漢が餘りに實直であるが爲めに、長姉が丸るで相手にせず、又予の父の氣にも入らなかつたから、その漢は歸へることになつたといふ事であるが、予も子供の時によくその漢を知つてゐる。養子漢としては、先づ理想的であつたらしい。彼は最後迄吾家に出入りをしてゐたが、如何にも實直なる漢で、何時の間に覺えたのであらうか、その書風等は、殆ど吾父そのまゝであつた

扨何故といふ事も聞かなかつたが、母は予を胎中に抱きつゝ、上益城郡津守村字杉堂なる里に歸つてゐた。而して母の里と予の家とは、南北相距ること三十餘里である。斯くて文久三年正月二十五日、予は實に母の里矢島家に於て生れたのである。世間では、予が葦北郡水俣に生れたといふが、それは事實でない。予は今云ふ通り、母の里にて生れたのである。斯くて幾程もなく、母は予を携へ、三太郎の嶮を馬に乗り、極めて朗らかなる主婦として、吾家に歸つて來たのである。如何に予の生れたる事が、予の家にとつて大事件であつたかは、想像も及ばぬ程で、是れ迄陰鬱であつた吾家は、急に光明となり、母の吾家に於ける位置も頗る堅固となり、有力となつた事は、申し添ふる迄もあるまい。

此の如く予は全く吾が父母晩年の子である。晩年と云つても、甚だ晩年ではないが、父四十二歳、母三十五歳の子である。今では左程でもないが、當時では四十を既に初老といふ時節であるから、生れた當時から、父母は常に、この子が德富家の相續者として、間に合ふ乎否乎といふ事を、唯一の懸念として、出來る事ならば、一年に三つづつも予に齡をとらせたいと希うた程であつた。

予の名は母の兄矢島直方――予の伯父――が、初め太平とつけたといふことであるが、母が予を伴ひ歸るや否や、予の祖父美信が今の名――猪一郎――に改めた。猪は亥で予が文久三癸亥の年に生れた事を證明するものであるが、併し猪の字は支那では豚を意味する事になり、支那旅行中などには、聊か閉口せぬでもなかつた。嘗て予の先輩井上毅君は、予に向つて「德富さんの名は、野蠻の名である」と云はれたが、併し當人の井上君も元は多久馬と稱し、餘り文明の名ではなかつた。動物の名を稱する事は、熊本地方では一般に流行して、必ずしも十二支ばかりでなく、鹿とか熊などの名をつける者も多かつた。吾父も元は萬熊と稱してゐた。予の叔父一義も、俗稱は熊太郎であつた。

自から心付きたる頃の予は、身體は寧ろ虛弱で、醫者に行つたり、醫者が來りしたことを覺えてゐる。又た食物に就いても、頗る好き嫌ひがあつて、殊更に粟の飯を好み、わざ／＼隣りの百姓の家から、粟の飯を取り寄せて食べたり、若くは目の玉の如く小さく握飯をつくり、それを燒いて食べたり

してゐたやうであつた。海濱に近くゐたけれ共、刺身抔を食べるは餘程後の事であり、味噌汁なども漢學先生の家に寄宿するやうになつてから、初めて食べることを覺えた。又た遊戲なども普通の人の如く、竹馬に乘るとか、獨樂を廻すとか、念木を打つとかいふ事は、絕えてなかつた。唯だ附近の百姓の子供等と、水俣附近で流行する、棒踊りの眞似事抔をした事を覺えてゐる。棒踊りは薩摩が流行の本家であつて、相互に隊伍を組み、棒もて叩き合ふ事である。只だ樂しみは、夏の蟲追と、春の初の左義長である。蟲追はなか／＼盛んなもので、銅鑼、太鼓、大鐘、小鐘を打廻り、火明を打振りつゝ、各村から若者共が繰出して來るので、その爲きつと衝突があり、時としては打合ひ、叩き合にも及ばないとも限らなかつた。予は何時も吾家の最も長大なる僕の肩車にまたがり、小さき鐘を叩きつゝ、その中を縫うて步いた事を覺えてゐる。左義長には未明に馬に乘つて出掛けたが、後に或時落馬をなし、その結果であるや否や確かではないが、やがて腹に大なる塊を生じ、父母に一方ならぬ心配をかけた。その爲に馬に乘る事をやめた。紙凧も我が鄉里ではなか／＼流行したが、吾家では紙凧の本場である長崎から、わざ／＼取り寄せ、隨分勝れて大なる紙凧を颺た事があるが、或時絲が切れて、行方知らずになり、やゝ久くして樵夫が奧山に入り、木を伐らんとしつゝあるに、何だか怪しいものがみえるから、これが所謂天狗であらうと膽を冷したが、それが卽ち予の紙凧であつたと

いふ話であつた。これも予自ら釣るでなく、他の者に釣らさせて、自分は見物をしてゐたのである。予の祖父は酒が好きであり、小鳥が好きであり、その餌として、よく鯊釣りに出掛けた。祖父は自ら釣るといふのでなく、殆どその釣りは一種のピクニックで、酒や辨當や、種々の随行者を従へて行つたが、予もよく祖父に伴はれ、附近の海濱の堤防に出掛け、自ら鯊を釣るといふでなく、他の釣るのを見物してゐた。又た祖父はよく山邊なる吾家の開墾地に出掛けたが、予も又それに従うて行つた。或る時祖父が開墾地の芝生の上にて酒宴を催しつゝある際に、予にも一杯のめと盃を與へたから、予が祖父を取捲く人々に向つて、この盃を飲み割つてみせようかと云ひつゝ、そのまゝ一飲みに飲み割り、一座を驚した事柄を覺えてゐる。

如何に祖父が予を愛してゐたかは、如何なる事でも予の言ひ出したることを聴かない事はなかつた。これは予の幼き時ばかりでなく、予が大江義塾を設立したる時さへも、その塾舎建設する資金の不足は、祖父の手許から出して貰つたほどであつた。

九　幼時に於ける予の性格

予は何時頃から讀書を始めたかを覺えてゐない。併し最初は唐詩を習つたやうだ。それは母の膝の上にて「月落烏啼霜滿天」の外、少し長きものでは、謝疊山の「雪中松柏愈青青」といふ詩杯は、その時に覺えたもので、六十年後の今日も猶ほ記憶してゐる。又「豹死留皮豈偶然」湊河遺跡水連天人生有限名無限楠子精忠萬古傳」といふ詩を、予の乳母に連れられ、姉共の行く附近の手習師匠から教へられた事を覺えてゐる。それから追々「大學」、「論語」等は母から教はつたやうである。讀書の方は案外早く進んだ樣だが、習字の方は、頗る遲れてゐた。予は生れながらにして不器用であり、筆をもつ事等は從つて嫌ひであつた。されば讀書の力と、習字の力とは、頗る懸隔してゐて、予が水俣にて初めて入門したる增田純八氏は、予が淸書のねの字に、朱筆もて「猫のやうである」と評を書き入れたことを記憶してゐる。德富の德の字は兎や角書けたが、富の字を略體で書くのは、なかなか大儀で、遂にうまく書けなかつた樣だ。この不器用は一生つきまとうてゐて、予にとつては少からざる不便利であるが、併しこの事に就いて、誰に向つて苦情の云ひ樣もない。予はその時分吾家に來る郡奉行とか、熊本から來る立派なお客樣達にも追々面會したが、いづれかと云へば、予は頗るのハニカミヤにて、なるべくならばそれを欲しなかつた。さりとて面會して彼等の前に出て尻込みするやうな事は毫もなかつた樣であるが、兎に角それ等の人に逢ふことは頗る大儀に考へた。一口に云へば、

予は出過張り者でもなく、押しの強き者でもなく、寧ろ比較的引込み勝ちの者であつた様だ。又予は臆病と云はふか、夜は種々の恐ろしき夢を見た。又目をつぶつて薄闇を打眺つてゐれば、その薄闇の上に、種々の恐ろしきものが出沒するを見た。又常に一寸した事にも目を覺まし、泥棒は這入らないか、胡亂の者は來らないか抔といふ心配をした。されば吾が長姉が未だ嫁せざる間は、予は常に長姉の傍に寢ね、予の隣りに長姉が居るのを心強く感じ、予が眠に就く迄、長姉から種々の昔噺を聞いて眠つた。長姉は婦人ながらも、恰も竹を割つたる如き氣質にて、又その父即ち予の叔父に似て、手が頗る器用であり、繪などを描いて予に與へた

予はその時分から時間を守ることは正確であつた。例へば旅行などの時にも夜中から目をさまし、いざとなれば誰よりも先に出掛けて行つた。又た一度きまつた事を改るといふ事が、非常に不愉快であり、予が父母から折檻を受けたる中のその過半は、定つた事、若くは豫定した事々、その通りゆかぬ事に就いて、予が自棄を起し、その爲に種々の亂暴をなし、遂に父母の折檻を必要とするに至つたやうに思はれる。今から考へても、予は決して無理無體の事を云うて、吾が父母に反抗したりなどした事は全くないと云はぬが、甚だ少かつた様であるが、一旦定つたことがその通り行かんとて、あまりに當り散らし、遂に予自らも止るところを知らず、これが爲に父母を屢々煩はしたのであらうと思

ふ。極めて幼き時には父よりも寧ろ母の方が嚴しかつた樣に思ふ。予は決してそれを以て吾母を非難するではなく、寧ろその爲に兎に角予が今日あるを效したるものとして感謝してゐるが、實に吾母が予を愛する事が十であつたらば、予を責めることは殆ど十五であつたと思はれる程嚴しかつた。或は手足を縛られたまゝ、室の中をころ〳〵轉つてゐた事もあり、或は庭の中門の傍に大なる木蓮の木があり、その滿開したる木に縛りつけられ、附近の悪戯小僧共は、予が縛ばられてゐるのを、中門の節穴から覗くのを、口惜しくてたまらなかつたことを覺えてゐる。又た或時は倉の中の五尺の桶に入れられたが、如何なる拍子にや、その桶より飛出し、村を騒がした事も覺えてゐる。

併し斯迄激しく折檻はされたが、予は吾家に於ては、父に次いでの位置を占め、或る場合には父同樣の位置を占め、全く特別待遇をされてゐた。右の次第であるから、予にはひがむとか、猜むとか、邪推するとかいふ樣な事は全くなかつた。謂はゞ何等その必要がなかつた。唯だ自分は特別待遇をせらるゝものと思込んでゐて、それが當り前といふ樣に信じてゐた。從つて人並みの待遇をせらるれば、何やら侮辱せられた樣な感がした。この點は不幸にして一生予につきまとうてゐるかも知れないが、併し嫉妬とか、邪推とかいふケチな根性が、遂に予を煩はす事なきも、又た予が幼少時代に於ける、環境の賜物であるかも知れない。

十　水俣に於ける一二の記憶

今尚ほ少しく水俣に於ける予の記憶の一二を語るであらう。その時代は何年何月といふことは確かではないが、概して明治初年から三年まで、即ち予の六、七、八歳の頃とみて差支へない。予の祖父は多くの孫の中に於て、予を特別に待遇してゐたやうだ。それは予が徳富家の後継りといふことが、主なる理由であつたが、又たその以外に、予自身に対しても、祖父嘉むる所があつたやうに思はれる。予には種々の世間話ばかりでなく、むづかしき話などもして聴かせてゐた。而して外孫などといふ者が、家にとつては油断のならんなどと云ふ事を、北條氏の事や、支那の呂后のことまで引いて話してゐた。祖父は吾父のあまりに謙遜であり、吾母の兄たる矢島直方などが、父と同年の友でありながら、あまり威張り、且つ其の兄弟姉妹、親類等が、あまりに有力であるのを、聊か不快に考へてゐたらしかつた。予は始から予の祖父に共鳴して、母方の親類等を、てんで相手にはしてゐなかつた。

或年の暮に、予が祖父の家——詰り隠宅——に、歳暮に行つたところ、祖父は予に不似合なる黄金造りの刀一腰をくれた。予は小さき肩にそれをかついで、帰つて来たことを記憶してゐる。予と同年輩

の親類には、同じ濱村に予の父の妹の嫁したる源光寺といふ、西本願寺派の大なる寺に、予と同年の男子があつた。親類ではあり、同年ではあり、互に往來してゐたが、その爲に予はお寺のことも聊か見馴れ、聞馴れて知ることが出來た。その時分は尙ほ薩摩は眞宗を嚴禁したから、薩摩の信徒は隱れてこの寺に參りに來た。然るに薩摩からはなほ探偵を出してこれを捉へんとしたから、寺には大なる地下室を設け、その中にて說教なども行はれてゐたやうである。或時予の從弟が予に石を投げつけ、予の頭から血を出したとて、祖父は非常に怒り、その爲に叔母は夜わざ／＼提灯をつけて、祖父の處にまで謝罪に來たことがあつた。この從弟は後には京都なる本願寺の學寮に學んだが、結婚間もなく自ら縊れて死んだ。これは明治十六、七年の頃と覺えてゐる。

　その外に予の鄕里から、二里距てたる津奈木に、予の叔父德永昌龍の子二人があつた。兄は予より二歲上であり、弟は又た一歲下であつた。これともたまには往來した。後に吾家の熊本に移つた後は、この兄弟を予の家に預つて、予と共に敎育することゝなつた。

　當時は恰も英式操練が我國に輸入せられたる時にて、近傍の若者共は、吾家に寄宿して、水俣の調練場にて、それ／＼訓練についた。予の父などもいくらか關係してゐたらしかつた。子供ながらも予は大人のあとについてよく調練場に赴いた。あまり幼少で、太鼓を打つ役も、笛を吹く役も、未だ予

にはあたらなかつたが、あたらぬこそ仕合せであつた。とても予には兵隊の稽古などが、出来得べき素質がなかつたからだ。

父は維新して諸方に往来し、即ち熊本、鹿児島、長崎、及び上方等、種々の用務を帯びて奔走してゐたが、暇したをり／＼家にあつて読書等してゐる時には、予もその傍にて聴いてゐたことがある。父はその時にはよく日本外史を読んでゐた。外史は予の家には無くて、多分本家からか、清水氏からか借り受けたものであらう。頼家原版の大字本であつた。父の読むのを聴いてゐれば、少しは解つたやうな気持もした。又予は屡々父に伴はれて、二里ばかりの山奥なる湯の鶴といふ処に湯治に出掛けた。其処の温泉は、極めて原始的のものにて、川の中に湧き出で、殆ど自然の湯壺に混浴するといふ、情態であつたが、吾家では小さいながらも別に自家用の温泉をもつてゐたかと覚えてゐる。父は湯治場に於いても、訪ひ来る人々に大學の講義などしてきかせてゐた。又た父に伴はれて葦北郡中の親類やら、父の友人の家にも出掛けて行つた。当時予の最も不愉快に思うたのは、髪を剃ることゝ、髪を結ふことであつた。予等は髪の毛をそこゝに伸ばして、錦畫にかいてある唐子遊びの唐子の如く、頭上に、前後に、両鬢に、小さき髷をつくり、その周囲は剃つてゐたさうである。今でも剃の刃をあてられる時の痛さと、元結にてくゝらるゝ時の窮屈さは、こたへてゐる。

予はその時分から自分の體に不相應なる長き刀を佩してゐて、ほとんどこじりには車をつけねば、歩けない程であつた。何時頃散髪になつたか、自分ながら記憶してゐない。父は熊本に出た後も、尚ほ當分は結髪であつたかの如く覺えてゐる。予の家には横井小楠先生の二姪がアメリカより送り來りたるワシントンとナポレオンの肖像があつた。それで予が外國人の名を知り、且つその人を知つたのは、この兩人が始である。予がはじめて字を覺えたのは、一二三四の數字であるが、當時予の家に薩摩の書家、鮫島白鶴の「愼獨」の大字に、徳富君の爲に、七十八叟白鶴と書いた額が掲げられてゐた。予が獨りで字を讀み出したのは、七十八の三字であつた。明治二年の巳の年は稀有なる大洪水で、予等が寢てゐる中隠宅の床上まで、殆ど水が上つた。その一般に及ぼしたる害は重大であつたらしい。これが爲に米一俵(三斗五升乃至四斗)が五百目といふ法外な値段を來した。百目とは今日の五十錢である。子供ながらもその話を聽いて覺えてゐる。父はこの水害に於て、救濟の爲に、吾家に所有する最上の田地を寄附した。後にその田地は入札せられ、それが今日でも水俣小學校の基本金の中樞資本となつてゐる。この事に就いては祖父も最早隠居の身であれば、別段異論も唱へなかつたやうであるが、併しあまり父の氣前の善過ぎるを遺憾とした樣だ。水俣に於ける予の生活の物語りは、先づ以上にて打切りとする。

第二章　村塾勉學時代と洋學校時代

一　水俣より橫井叔母に伴はれ熊本に至る

◇父の寓所に於ける八歲の予

予が熊本に出たのは、何月と云ふことを記憶しない。多分明治三年の秋の半を過ぎた頃であつたらう。それは途中の稻の穗が熟してゐたのを、今尙ほ覺えてゐるからである。當時父は藩命に應じて熊本に出て藩廳の役人となつてゐたが、一家は尙ほ水俣にあり、父は熊本に旅寓生活をしてゐた。予は直の姉――湯淺初子――と與に、橫井叔母に伴はれて出掛けた。橫井叔母は卽ち小楠先生の夫人、母の妹である。當時保養旁々水俣の吾家に來てゐたが、その歸るさに、予及び姉は伴はれたのである。水俣から松橋迄二十里の間は、例の如く小舟にて往つた。ところが風が凪いで舟が動かぬから、性急なる予は、辛抱が出來ず、頻りに船頭に喰つてかゝつた。それには叔母も閉口したやうだ。大正十一

年久振りに水俣に歸りたる時、勘左衛門といふ八十有餘の老人が來りて、頻りにその時の事を話してゐた。彼が當時の隨行者であつた。彼は吾家の召使であつて、吾父の通信機關であつた。彼は若き時には水俣から熊本迄、二十五里の間、しかも三太郎の嶮を越えて、一晝夜に往復したといふことであつたが、それは掛け値にしても、なか〱健脚であつた。予も六十有餘となつて、稠人廣座の眞中で、斯る昔噺を持出されては、苦笑せざるを得なかつた。然るに昭和二年水俣に歸りたる時は、彼は已に不歸の客となり、その孫が彼に代つて面會に來つた。

話元にかへる。

扨いよ〱松橋に著し、それから陸上五里の間は、叔母は駕籠に、前に云つた勘左衛門と姉及び予は歩行したが、駕籠の脚は早く、從ふ勘左衛門の脚は餘程早く、姉と予兩人は全く後に振り殘され、聊か心細くもあつたが、この大道を歩けば、行き著く先は、多分熊本であらうと思ひ、宇土といふ三萬石の城下を過ぎ、川尻といふ町の手前、緑川の渡しにて、勘左衛門が待受け、又た叔母の駕籠と前になり後になり、やうやく熊本城の見ゆる處迄來たが、叔母は頻りに駕籠に乘れと云ひ、予も乘りたくないこともなかつたが、折角これ迄歩いて來たのが、叔母の駕籠に相伴をしては、面白くないと考へ、遂に足を引摺つて、熊本の本山なる三村氏の家に著した。三村氏は予の外祖母の家にして、又た

予の母の長姉の嫁付きたる處。當時の伯父は、予の父と共に、藩廳の役人であつたが、何か父等と意見の合はないことがあつたか否は知らないが、やがて役をやめた。父はそこから近き矢部郷の出張所を借り受けて居た。當時熊本には各郷から（當時は郡―郷―村）出張するに、その出張所があつた。即ち父の寓居は矢部郷の出張所であつた。其處には父の僕、若黨、書生、一切男世帯にて、やがて予の第四姉――湯淺初子の姉大久保音羽――が來つた。予と同行したる姉は、母等に伴はれて、そのそ横井家に赴き、第四姉は予の伯母竹崎家に居たが、竹崎家も亦た隣家と同樣、熊本に召出されたが爲に、姉は父の旅宿に歸つて來たのだ

父が藩廳に出勤する時には、僕や若黨は父に伴つて出勤し、書生はみなそれ〴〵學校に赴いたから、後に殘る者は、予と姉と二人であつた。外に仕事もないから、二人で盛に喧嘩をしたが、あまり喧嘩をして、遂に長屋のお婆さんが仲裁に入つたことも屢〻であつた。予は到着當時は、直ちに素讀を三村の外伯父――予の母の長姉の夫――に授かりに赴いたが、讀方が田舍讀でいけぬから、改めねばならんと云はれて、頻りにその讀方を正された。凡そ素讀にはそれ〴〵讀方があつて、なか〳〵面倒なものである。例へば、子曰くとあるのを、『子のたまはく』とか『子のとふさく』とか若くは『子いはく』とか種々に讀んでゐる。山崎點、後藤點、道春點、一齋點などと云ひ、それ〴〵訓點者によつて、

讀方がなか／＼違ふものだ。教へる人によつて、その點者が違ふから、自然、讀方も違ふことになる。
當時予は既に髮を切つてゐたやうであるが、父は結髮であつたやうに覺えてゐる。朝暗き中から起きて、僕が父の髮を結うてくれてゐた樣に覺えてゐる。父の頭は最早や白黑相交り、その髮を見る每に、予は父が老人であり、それにしては予は餘りに幼くある。如何にして父に追付くことが出來やうかといふことを、自然に考へざるを得なかつた。或時三村家から父の宿所に歸へる時に、横井家の老女壽賀といふ婦人と道伴れになつた。壽賀は予の叔母が小楠先生に嫁ぐ以前から、横井家に居たもので、なか／＼有力なる女であつた。その時に如何なる話のハズミであつたか、壽賀の問に答へて、予は早く齡をとつて、父の跡を繼ぎたいと云つたことを記憶して、予が成人の後に、壽賀は屢々予に向つて「貴君はなか／＼若い時からコマツチヤクレテゐた」と語つた。別にコマツチヤクレテゐたわけでもあるまいが、父も常にその跡目を相續する者のなかつたことを歎じ、たま／＼予が生れた後は、なんとかこの子を早くものにしたいと考へてゐた。それが別段その通り父から訓されたわけでもなかつたが、自然予の幼心にも深くしみわたり、なんとかして一年に齡を三ツもとつて、早く父と予の間の距離が近くなるやうにと祈つてゐたことは、寧ろ當然のことゝ思はれる。

二　高野先生の塾に於ける予

やがて予は高田原なる高野先生といふ、寺小屋の少し毛色の違つたやうなところに行くことになつた。これはその附近に藤島伯母がゐて、その紹介であつたと思はれる。藤島伯母といふのも亦た母の姉にして、三村の伯母とは双子であつたが、容貌の似てゐるだけにて、その氣象も性格も、全く相反してゐた。その伯母は既に寡婦であつて、その長子の正健氏は、當時多分東北地方に官遊してゐたであらう。

扨右の高野先生の家に毎朝通ふことになつたが、予にとつては種々の困難に際會した。熊本城下の人は自から威張るばかりでなく、驚くべき程地方の者を輕蔑した。如何なる立派な身分の者でも、地方から出た者は、之を賤稱して、在郷兵衛と云うた。それから士族と輕卒との差別が非常であつて、百石以上を士族と云ひ、中小姓以下を輕輩と稱してゐたが、予は田舍者であり、且つ輕輩である。しかも予の田舍訛を彼等は盛に口眞似して嘲笑した。予は可成りおしやべりであつたが、嘲笑せらるゝよりも、默つてゐる方が得であると思つて、熊本言葉の練習がすむ迄は、成可く口を開かぬ事とした。

田舍者であることは致方ないが、幸ひ高野先生の處は、先生自らが輕輩であり、又た生徒も過半數は輕輩であるから、別に輕輩であることを深く耻づることもなかつた。唯だ困難であるのは、往復の途中である。到る處に當時の少年等は己れに異りたる者をいぢめることを、一の愉快としてゐた。小石を投げる、砂をふりかける、唾を吐く、惡言を放つ、時としては向うからぶつつかつて來て、何故にぶつかつたかと云つて喧嘩をしかける等のことは、殆ど當前であつた。予は彼等と喧嘩したりとて、何も己れに得することはないから、成可く彼等と接觸しないことゝした。それで彼等が待伏をし、若くは通行をしつゝあるのに、成可く出會せぬ樣にして、常に警戒して歩いた。幸ひにその爲に一度も彼等に侮辱せらるゝ樣なことはなかつたが、侮辱せられまいとして警戒したことは、決して尋常でなかつた。予は今日に於て何故であつたといふことを想起することが出來ぬ。或は途中の面倒を避くる爲であつたか、若くは勉強の都合であつたか。間もなく、先生に乞うて、先生の家に寄宿するやうになつた。固より予の外に寄宿する者は一人もなかつた。先生は尙ほ獨身であつて老母が居られた。老母は寒中予の薄き蒲團の下にある双脚が、鐵火箸の如く堅く、且つ冷なるをみて、可哀想であるとて、涙を流さんばかりにいたはつた。高野先生は、わざ〳〵紫の紐にてその長髮を束ねてゐた。結髮ではなく、束髮だ。よくわからなかつたが、隨分時勢に反抗してゐたやうだ。時にはその年長の門人と

明治四年の蘇峰翁　右より徳永規矩氏　徳永次郎氏
翁（九歳）翁ノ母堂久子刀自　翁の姉湯淺初子氏

熊本洋學校時代の蘇峰翁（十三歳）後列左端

與に、國友先生の會讀に出掛けたやうだ。國友先生といふは、熊本に於ける漢學者の一人であつた。唯だ予が意外に思ひ、且つ興をさましたことは、先生がその老母と、屢く喧嘩口論することだ。苟も先生とも云ふべき人は、決して親と喧嘩するなどといふことは、ある間敷きことゝ思うたが、先生はなか〳〵やつた。時としては鏡餅などを室に投げつけてゐたことがあつた。夫等のことを見てから、予は長くその處にゐるを欲しなかつた。

三　家を擧げて大江村に移る

◇元田先生・竹崎先生の塾に學ぶ

斯る場合に、若くはそれと前後して、母始め一家はいよ〳〵家を擧げて、水俣から熊本に引移ることとなり、斯くて明治三年の暮には熊本東郊大江村に引移つた。こゝは野中の一軒家にて、遙に一町餘を隔てゝ元田先生の家と相接した。吾父の居を卜することになつたのも、元田先生の直接ではなかつたかも知れぬが、先生の家の人の世話であつたといふことを聞いた。此の如くして、予の熊本に來た第一年、卽ち八歳は暮れた。

吾家が大江村に移つて以來、予は高野先生をやめて、元田先生の塾に通ふこととなつた。隣家と云へば云へぬでもない。吾家と先生の家との間は、約一町を隔てゝゐても、一軒の家もなかつた。先生の塾にはいづれも年長者のみにて、予の兄といはんよりも、寧ろ父と云ふべき人々が多かつた。予は父に伴はれて先生に謁したが、先生の書齋には何やら青き幕の如きものを排して入り、その中はせいぜい六疊位であつたかと覺えてゐる。何やら溫厚の面影にて、予は父に從つて恭々しく辭儀をし、先生と父との對話を傍聽してゐたが、それが何事であつたか實は記憶しない。その後間もなく先生は東京に出掛けられて、後は先生の重なる門人等が、それ〳〵留守をあづかつてゐた。先生の長子は寧ろ農業專門にて、自ら鍬をとつて百姓をせられてゐたが、予及び吾家より通學する從兄德永規矩等は、いづれもその人より素讀を授つた。然るにその人は敎へる本を自ら讀むことが出來ず、經典餘師とて、四書に假名がついてゐるのを持つて、予等に敎へてくれた。併し其人は極めて好人物であつた。その妻君は當時熊本の名士津田弘道氏の女であつたと覺えてゐる。なか〳〵活潑なる婦人で、先生の家を環る小川にて、よく我等に泳ぎなどを敎へてくれた。塾長としては深水賴寛――昭和四年二月八十餘歲にて逝いた――園田太邑などの人々であつた。予は當時深水氏の書いた手本を習ふこととした。深水氏は水俣の人、代々總庄屋にて、賴寛氏は父の友人といはんよりも、やゝ門人に幾き方であつた。

當時予及び二三の少年共に、塾の傍にある垣根の竹を拔き來つて、それにて模擬戰爭をしてゐたが、或日予等は深水氏より呼びつけられ、痛くその心得違ひを諭され、「御身達は先生の垣根に一本の竹でも附加へねばならんのに、先生の垣根から拔きとるなどとはけしからん」と叱られ、その時丈は、寔に尤もの事と考へ、痛く後悔した。自分等は家にゐては、あまり我儘をするといふ事にて、塾に寄宿したが、さて夏になつて蚊帳がない。予は何よりも蚊が嫌であつて、これには閉口し、その爲に年長者が、わざ／＼物を入れてゐる行李を空けて、それを予の頭から被せて呉れた事を覺えてゐる。それでもなか／＼閉口した。元田先生は上京せられたが、夫人その他家族の人々は仍ほ家にあつた。予は最も年少者であつたから、屢々夫人に招ばれ種々の御馳走になり、又いつも先生が歸られる時には、如何にする乎と問はれる條に、必ず途中迄御出迎する抔と答へて、よくも答へられたと、又しも馳走を重ねられたことがあつた。予が先生の家に行くことを好んだのは、先生の家には「繪入通俗三國志」があり、その書物が最も予を多くひきつけた。吾家には「武王軍談」「呉越軍談」「漢楚軍談」等の支那の通俗ものがあり、予はいつの間にかそれを讀み習つて、一通りの歴史上の簡略なる知識はそれで得た。併しそれ等よりも予の最も好きは三國志であつたが、しかもそれが繪入りで先生の宅にあつたから、それを借受くるわけにはゆかず、機會毎に行いてそれを讀み、且つ眺めた。その中に先生の家族は東京

に赴くことになり、自然塾も閉鎖したから、重なる門人の一部は、本山なる竹崎先生の塾に轉じた。

竹崎先生の塾とは、吾が母の姉竹崎順子の夫にて、竹崎律次郎、後には茶堂と改めた、その人の塾である。予等は固より當然の成行きとして、其處に通學する事となつた。其處も大人が重なる塾生であつたが、時に又た年少生も多く加りて、塾運はなか／＼盛大であつた。當時の同學生には林田龜太郎氏等があつた。予は前に云つた如く、予が從兄徳永規矩と毎日吾家から通學した。當時予の記憶に殘つた一事は、或時塾からの歸途、白川端にて兩人にて九九を暗記してゐたが、二三が六と、二三が五といふことにて大議論を始めた。徳永は二三が六というたが、予は確信を持つてゐるかの如く、二三が五といひ、徳永は彼是その理由を說明するけれ共、予は二と二を合すれば、四であるから、二二が四である。此くすれば二と三を合すれば五ではないかと云ひ、なか／＼議論が埒あかず、遂に毆り合ひとなつて、彼は予よりも二つか三つ年長であつたから、予は危く、土手に押しつけられんとしたるが、偶々通行の老人の爲に仲裁せられて、相伴つて家に歸つたことがある。如何に予が數學に趣味を持たなかつた乎といふことは、これにても證明せらるゝ。當時予は全く二三が五と思うてゐたのであつた。

四　兼坂先生の塾に於ける予

◇薪水の勞に服す

如何なる理由であつた乎、明白には判らないが、とても家に於ては、充分の教育が出來ないと考へられたであらう乎。又た竹崎先生は親類にて、思ふやうに躾ける事が出來ぬと考へられたであらう乎。或は又た他に理由があつた乎。兎に角予は竹崎先生の塾から、兼坂先生の塾に轉ずる事となつた。予は今まに明白に記憶してゐないが、九歳の末か十歳の初めであつたらう。卽ち明治四年の末乎、五年の初めであつたらうと思ふ。兼坂先生の塾は予の家より二里弱位はあらう。兎に角予の家は熊本の東の極端であつたが、先生の宅は西の極端であつて、石神山といふ山の中腹である。當時先生の塾は竹藪の中にあつて、塾があまりに狹かつた爲に、予は先生の家に寄宿することゝなつた。予は此處にて初めて全く異邦人の眞中に投込まれたる心地がした。左右前後一人も予の知つてゐる者は居ない。而して生活の樣式が全く從來とは變つてゐる。予も此處に來つて、自ら悲觀せざるを得なかつた。第一に閉口したのは、淋しき事であつた。友達といふべき者は一人もなかつた。第二に困つたの

は食事であつた。凡そ粗食といふが、これ程の粗食なるものは生れて初めてゞあつた。飯は無論粟の飯である。然らざれば麥飯である。予は如何なるわけか麥飯が非常なる嫌ひで、一粒の麥をみてさへも、最早食氣を絶つほどであつた。麥飯を喰はねばならぬ程なら、寧ろ絶食するといふ程であつた。粟の飯も大抵ならば容赦が出來るが、先生の家の粟飯は、殆ど米の粒は數へる程であつた。副食物と云つては、からき味噌汁、堅き澤庵。たま〳〵堅き豆でもあれば、それは御馳走の部分であつた。予は味噌汁が嫌であり、澤庵が嫌であり、殆ど先生の家に行つては喰ふものがなかつた。それから食事の時には、長幼の序をもつてすることゝなり、先生の家に食事のみに來る塾生が、彼是十人餘もあつたらうが、規則として最後にしまつたものが、すべての人の食膳の始末をせねばならぬ事になつてゐた。最年少者たる予は、予の番になるときには、汁の實などは固より藥にしたくもなく、予が飯を盛んとするときには、上席の者は既に二杯目となつてゐる。その爲に予は屢ゝ膳始末をせねばならぬことゝなつて、その爲に如何にして早く食事をしまふべき乎といふことに就いて、非常に練習をなし、飯は嚙むものでなく、呑むものであるといふ原則を發明し、不幸にしてその癖が今日迄殘つてゐる。

そも〳〵兼坂先生といふは如何なる人であつた乎。世間では先生のことを豚先生と綽名してゐた。その理由は詳しく聽いたことがない。一橋慶喜公なども、世間では豚一と稱せられてゐた。いづれに

しても尊敬の名でない事は明白である。兼坂先生を厩先生と云うたのは、先生が厩の馳走に人を案内して、あとからその割前をその人々に出さしめたからといふ説がある。

併し兎も角も、先生は世間離れのした人であつた。先生の家は五百石取りの士族で、立派な武士である。それを維新の際に弟と折半して、自分は蟄居した。而して先生の家の標札には厩と書いてあつた。當時はいづれも双刀を横へてゐたが、先生はたゞ脇差一本をさしてゐた。先生の住所は元熊本藩の家老長岡監物の一門、米田波門といふ詩人の別莊にて、四時園と稱した。或は百梅園と稱した。それ程澤山の梅があつた。先生は必ずしも貧乏ではなかつた。先生の奥さんは千石取りの士族から娶り、お八重さんといつた。而して奥さんは臺所は勿論、薪採りまでも自らした。先生の家庭には、先生の繼母、先生の弟、妹、及び僕がゐた。下女は奥さんが勤めてゐた。而して僕の仕事の半ばは先生の弟が勤めてゐた。妹さんは吾姉大久保音羽の親友で、後には吾姉と相携へて、上州邊に製絲の練習に赴いた。併しそれは後のことである。

當時兼坂先生の仕事は、熊本古城の洋學校に隔日出張して、漢學を教へる事であつた。然るに先生は當番の日には、先生として學校に出張するかとみれば、非番の日には自ら馬をひいて、薪を賣りに出掛けた。予等は朝から只だ一回先生若くは年長の塾生から素讀を授り、その他は習字位にあつ

た。總て竹藪の中の塾は廢せられ、石神山の下に長命水といふ有名なる湧き水がある、その前の田圃を埋め、其處に塾が出來、それを蔵春堂と稱し、一時は殆ど寄宿生が二階から下まで塡充した。先生は一般の學生は姑く措き、吾等の如き所謂る内弟子と稱する者をば無遠慮に使用した。庭の草をむしることから、湯に入りたる先生の背を流す事などは勿論、家には立派な井戸があるに拘らず、殊更ら長命水にて湯を立てることを好み、予等は坂の下から手桶でそれを擔ひ上げた。予の如きは年齢も最も若く、且つ力も最も弱かつたが、併し一人前の任務は是非共負はねばならず、爲に一個の手桶を他の年少者と共に擔ひつゝ、急坂を幾回も繰返したことを覺えてゐる。その他山から薪をかついで來る事やら、粟の穂を穫ることやら、青菜を摘み付くることやら、櫨の實を採ることやら、米をふむことやら、あらゆる力役に服した。時としては先生が石神山の上で食事をすると云ひ出し、其爲に飯櫃や、膳、椀をかついで山上まで登つたこともある。家の拭き掃除、お客の接待などは勿論、予が最も閉口したのは、先生の晩酌に侍することであつた。先生は何よりも酒が好きであつた。又たその酒が長かつた。別に相手があるでもなく、一人でチビチビやつてをられたが、いつも豫定分量を過すことであつて、その爲には奥さんと屢ゝ交渉が始つた。奥さんは如何なる人であつた乎、予等にはわからなかつたが、未だ曾て先生と云ひ爭つた事もなかつた。而して予等に對しても別に優しいといふことも

なく、當り前であつた。予は遂に奥さんが笑つた顔を見たこともなく、怒つた顔を見た事もない。唯だ毎日稼ぐ事が本職であるかの如く稼いでをられた。固より奥さんらしく身仕舞などをせられたことも、遂に見た事がなかつた。奥さんは痩ぎすではあつたが、千石取りの家のお嬢さん程ありて、上品の方であつた。而して先生等夫婦には子がなかつた。

五　兪坂先生の講義

◇進歩主義、平民主義の先生

予は特別先生に愛せられたといふことを感じてゐないけれ共、吾家から先生に拂ふ謝儀は、多くとも他家から拂ふものゝ五倍乃至十倍であつたと考へらるゝ。吾家からは可成り丁寧に先生の家には附け屆けをしてゐたやうだ。併しそれが爲といふではあるまいが、若干先生も予を眼中に措てくれたであらうと思ふ。晩酌に侍したのも、先生からみれば特別の好意であつたかもしれない。併し予に取ては、これ程閉口したる事はなかつた。但だこれが爲に覺えた事は、酒を呑むことのつまらないといふことゝ、人に酌をする事の熟練とであつた。又た先生はよく熊本に出掛けたが、出掛ける度に予等は

その從者となつた。予等といふが、相手は變るが、一方の相手は概ね予であつた。時としては先生が熊本市中の朝市場まで出掛けて、西瓜などを買つて、それを予等にかつがせて歸つたことがある。或は熊本の知人の家に於ける詩會とか、若くは閑談とかには、予等は玄關に冷き火鉢を擁し、十時過ぎまでも先生の歸るのを待ち、それから一里餘の田舍道を提灯をつけて、先生と共に歸ることがあつた。かゝる次第であつて、予も到底辛抱しきれずして家に逃げ歸つたことが、一度ならず數度あつたやうに覺えてゐる。併しその時には病身なる吾母は駕籠に乘つて予を連れ、先生の處に送り屆けたことがあり。又た義兄——第三姉の夫河田精一氏——は、父母の依賴にて予を伴ひ、先生の家に赴きつゝある途中、菜種畑の中に予はかくれ、河田氏をまいて、その儘家に歸り、押込みの中にかくれてゐた事もあつた。又た吾母はわざ／＼人をよこして饅頭や副食物などを送つて來たが、予はそれを如何ともする事能はず、そのまゝ竹藪の中に捨てたこともあつた。併し彼是してゐる中に、予の讀書の力も可成りついて來たやうであつた。先生の教育法とて別にこれといふ新奇の事はなかつたが、小學なども摘要して、これを『童蒙可讀』と名付け、銘々それを寫すことゝした。又た『銀臺遺事』、『藩譜採要』など、熊本藩の事に關するものを誦讀することゝなり、從つて四角なる漢字のみでなく、丸き日本文を讀む力も自らつけられたやうであつた。先生は詩が好きであつたが、詩人といふ程の作があつた乎否か

かは判らない。書もかき、後には繪も描いたが、それも一通りのことであつた。學問も大抵その位のものであつたらう。それは八家文會讀の時にも予等は無點本を讀み、先生は頼山陽增評の有點本を據へてゐた。併し予は今日に至る迄、先生の教育に負ふところ頗る多大であることを、感謝せずにはをられない。先生は予等を伴つて山登りには勿論、時としては六、七里を隔てたる山鹿などへも遠足せられた。先生は漢學者であつたが、珍らしく進歩主義の人であつた。先生の書齋とも云ふべき所は、硝子張りの障子で、又た先生はランプをつけて本を讀んでゐた。予等は固より日本の行燈に、燈心を點して讀み、後には樟腦油を點して讀み、一夜の中に鼻が眞黑になる程くすぼつたことがある。斯くて先生は、歸農したばかりでなく、極めて平民主義を實行し、その家の常客として、盲目の按摩などが屢ゝ來り、予等はその給仕に頗る閉口したことがあつた。少くとも予は先生によつて、自治といふこと、平民主義といふことを教へられたやうに思つて、今尚ほ感謝してゐる。

六　熊本洋學校入學と退校

◇最年少者としての予

予は年と與にだん〳〵ホームシックも減じ、漸々、その境遇に吾身もあてはまる樣になつた。塾には先生の宅を去つて、一般塾生同樣、塾に寄宿することになつた。その時分には塾も漸次衰へて、折角新築――とは云ふものゝ、古家を何處からか引張つて來たものらしかつた――した塾も、二階などは殆どガラアキであつた。その時分に年長の塾生が強盜の眞似をして、二階から拔刀のまゝ下り來り、予等を脅したり、又た時々附近の神風連から石を見舞はれたりした事等があつた。先生の塾の程遠からぬ處に、兼松某、米良某など、いづれも神風連の荒武者がゐた。彼等は明治九年の暴動に何れも切腹して死んだが、予は途中往々彼等に出會することを頗る危險に感じてゐた。されば成可くそれを避けてゐたが、時たま餘儀なく出會せねばならぬ場合にも遭遇した。彼等は殊更に横へたる双刀を、前に一尺ほども突出して佩し、結髪は勿論、大手を振つて途中を歩き、若し萬一間違つて彼等に觸りたらば、忽ち打つとか毆るとかいふことになるから、さはらぬ神に祟なしで、成可く近付かない事にした。予は仕合せに一度も彼等にいぢめられなかつたが、併しその爲には可成り心配をした。予が讀書の力は、漸次について來た。『四書』、『五經』は固より『左傳』、『史記』、『歴史綱鑑』、『國史略』、『日本外史』、『八家文』なども讀み、『通鑑綱目』等も、親類の横井家から借用して讀んだ。當時横井家は古城の堀端にあつたから、其處から『通鑑綱目』を十卷ばかりづつかついで塾へ持參した。實を云へばこの

上先生から習はんとするも、習ふべきものは少くなつた。そこで予の父母は予をして、熊本洋學校に入らしむる事とした。それが明治六年頃であつたと覺えてゐる。その時には予の從兄徳富氏兄弟も居た、竹崎先生の塾から洋學校に入る事になつた。そもそも洋學校と云ふは、細川家が維新の當初に創立したるものにて、それには横井先生の姪、米國から留學の半途、事の爲に歸朝したる横井左平太氏等の盡力にて創立したるものにて、多分最初には兵學校にても起す積りであつたか、フルベッキ氏の世話にて、米國ウェスト・ポイント兵學校卒業生砲兵大尉ゼンスを招聘した。ゼンスの妻はニューヨークの牧師スコッダーの女にて可成りの別嬪であり、なかなか氣强い女にて、ゼンスも夫人にはあまり頭が上らなかつた。ゼンスは最初は軍人で、可成り放縦の生活をしたらしかつたが、結婚の後に至、恐くはそれと同時に乎、或は其後であつた乎。兎に角日本に來た時には、彼は熱心なる基督教信者となつてゐた。

扨當初は兵學校の積りであつたらうが、世の中が一變するにつけて熊本の藩府は、廢藩から明治四年七月——縣政に引續いて、予等の父の仲間、即ち實學黨の手にあつたから、教育も自然實學黨の主義に傾いて來た。洋學校の日本人の教師は野々口といふ人にて、これも實學黨の一人であつたから、學校も又た實學黨の支配といつても差支へなかつた。當時の洋學校は一切洋式であつた。寄宿舍は却々進歩したるものにて、硝子窓を張りつめ、室の横に棚を架け、それを寢床としてゐた。食事も

パンとか、牛肉とか、なか〳〵進んだものであつた。門前を一度出づれば電信柱の下を通る時には、殊更に扇子を開き、それを頭の上にかざして通る如き神風黨が縱横してゐるに、學校の中は殆どアメリカ風の生活を其まゝ執り行つてゐた。最初は洋學校の生徒となるのには、縣下の俊秀を拔擢したものにて、兼坂先生などもその試驗官の一人であつた。併し予等の入校する時には、最早その制限も半ばとれたものと見えて、餘程の多數であつた樣に覺えてゐる。予は漸く漢學に趣味を覺え、若干の自信力も出來て、これから大いに勉强しようと思つてゐたから、洋學校入りはあまり好まなかつた。何やら當時は洋學校連といつて、殊更ら貫被つた仲間の後につくことは、自ら面白く思はなかつた。併し父母の希望でもあり、又たその希望が最も合理的であつたから、予も勇み進んでとは云はないが、兎も角も入校した。

併し入校してみると、予は自ら最年少者であるに驚いた。當時浮田和民翁などは先輩の一人で、小崎翁の如きは大先輩であつた。浮田翁などは予が福澤氏の『世界國づくし』を暗記してゐるのを、面白さうにきいて、頻りにそれを讚美してゐた。予等は最初にウェブスターの綴り書にとりかゝつたが、固より綴り書のことであれば面白き筈もなく、又た予は何事にもあれ新しきものには容易に喰ひ附かない性分であるから、あまり成績もよくなかつた。予等の寄宿舍の寮長ともいふべき一人は、二十七、

八年の役に、成歡にて最初に戰死した陸軍大尉松崎直臣君であつた。先輩の或者は、予に向つて、德富先生の子とも云はれる者が、左程覺えが鈍くては怪しからんなどとて、殆ど予の頭を敲らんばかりに叱り附けた事もあつた。その時分から我々と同時に入校したる新入生は、見込みなしとて退校を命ぜられた者が、殆ど過半であつた。從兄の德永もその一人であつた。或日野々口先生は一封の手紙を予に渡して、これを家に持參せよとの事であつたから、いよ／＼運命が予にも廻つて來たと感付いた。予はその手紙を親しく讀んではみたかつたが、父の語るところによれば、餘りに年齡が不足するから、今少しく年をとつてから再び來た方がよからうとの意味にて、態よく退校させたのであつた。此事は別に恥辱でもなかつたが、併し予に取つては少からざる不愉快であつた。當時十か十一の予は、年齡相應に子供らしきところもあつたやうだが、又た不相應に可成り老成してゐたやうであつた。されば予は今後如何なる事があつても、再び洋學校には足を向けまいといふ決心をした。

而して今更オメ／＼兼坂先生の塾に立歸ることも面白くなく、さりとて致方もなかつたから、當分しきりに諸所を歩き廻つた。或は八代邊に赴き、或は郡浦に遊び、或は竹崎先生に從つて玉名方面を歩き、生れて初めて肥後の國境を越えて、筑後に行つた事もある。多分斯して再び兼坂先生の塾に歸つたであらうと思ふが、今ははつきり覺えてゐない。兎も角も予は堀端の横井家に屢々宿泊するこ

とになつた。當時横井先生の姪、洋學校の創立者とも云ふべき横井大平の兄横井左平太(伊勢時治)といふ人は、その弟と與に維新前先生の命を奉じて米國に赴き、米國の海軍兵學校に入校する事となつてゐたが、當人等は感ずるところがあつて海軍よりも寧ろ政治法律の學を學び、この人も又た弟同様――當時弟は既に病の爲に逝いた――病の爲に歸朝してゐた。父は予をこの人に紹介し、英學とは云はず先づ洋算を學ばすることをした。元來横井兄弟の洋行には、吾家は最も多く犠牲を拂ひ、その洋行の資金なども、吾家不相應に提供してゐる關係があつて、新歸朝者たる伊勢氏も厚く予をきつてくれた。予はこの時多分伊勢氏から數學の初歩だけを習うたと覺えてゐる。併しそれよりも予にとつて愉快であつたことは、伊勢氏を訪問する種々の人の座席に予も侍べることが出來、又た横井家にあつた小楠先生手澤の本を引出して、勝手に讀む事が出來る事であつた。その中には星巖詩集を横井先生が、星巖の需めに應じて批評を書き、而して星巖死去の爲にこれを返送するの機會を逸し、そのまゝ殘しおかれたるものなどもあつて、頗る興味を感じた。それから予に直接伊勢氏が語るのではないが、他の來客に向つて語りつゝある西洋の話などをきゝ、又た伊勢氏が携へ歸られたる、凡有る西洋の寫眞等をみて、聊か見聞を廣めたるかの如き感がないでもなかつた。

七　熊本に於ける實學黨と學校黨

◇山田武甫、嘉悅氏房、德富一敬、倉園又三の諸氏

◇縣令安岡良亮の來任と實學派の一掃

斷つておくが父の熊本に召出されたのは、明治三年であつたが、三年、四年とかけ、父は殆ど一年に幾度も官を轉じ、漸次その位置が進んで來た。祖父は一時水俣の隱宅を引上げて、熊本なる大江村に吾等と同居したが、熊本は面白くないとて、又た引上げて水俣の隱宅に歸つた。そこで吾家は二軒となり、水俣には祖父が居り、熊本には父が居た。斯くて廢藩置縣となり、熊本を分けて白川縣、八代縣といふことになつた。時に吾父は白川縣の七等出仕となつた。當時熊本縣には縣令なるものなく、父の親友山田武甫氏が參事で、林なる人が權參事、吾父が七等出仕で、吾妻の父倉園又三氏がその下の典事といふもので、これが判任官の最上級であつた。而して先づ縣政は父と山田などの間に專ら執り行はれた。明治天皇が明治五年の夏、臨幸あらせらるゝや、吾父等は、縣の主なる役人として、拜謁仰付けられた。

予は吾父に對して何等申分はないが、只た何故に吾父は餘りに謙遜である乎と、屢〻歯がゆく思つたことがある。第一吾父は官に就くと同時に、俸給の外に家祿を貰ふことゝなつた。然るに何故か既に俸給を得れば、その上家祿を貰ふ理由がないとて、それを謝絶した。折角藏米を家に分配して來るのに、それを又た返却した。又た父は屢〻辭表を出してゐる。その辭表が頗る他と意味が異つてゐる。それは役人をやめようと云ふのではない。自分はどこまでも御奉公するが、七等出仕では少し過分であるから、今少しく等を下つて奉公したいといふ意味である。固より子供の予等に父が相談する筈もなく、父から、又た噂にも斯る話をきいたのではないが、父が出したる書付けなどを瞥見して、予はよく父の心事丈は了解してゐたが、然も予は常にそれを歯がゆく思つてゐた。別に他人を押しのける必要はないが、與へられたる位置を殊更に避くるなどといふことは、餘計なことであると思つてゐた。しかしそれは兎も角も明治三年から明治七、八年の間は、恐くは德富家に於て、全盛の時であつたかも知れない。當時は何等金錢の不足などといふことを噂さに聞いたこともなく、さりとて固より過多といふこともなかつたが、豫て交際を好み、且つ人に物を與ふることを、殆ど唯一の樂しみとしたる吾母の如きは、多分にその志を行ひ、且又た母が殆ど主となつて、熊本に於ける織物等の業を起し、又た家庭養蠶等を行ひ、或は製絲の業なども盛にし、又た婦人の教育等に就いて、それ〴〵手

をつけることになつた。

熊本の政治も維新以來、藩政から縣政にかけて、横井小楠一派、所謂る實學黨の政治であつた。從つて子供ながらも予等は肩幅廣く暮してゐた。然るに白川縣と八代縣とは合併して、熊本縣となり、參事であつた山田武甫氏は他所に移り、八代縣の權參事であつた嘉悦氏房氏が熊本縣權參事となり、父が依然七等出仕で、先づ嘉悦、德富二人でやつてゐたが、やがて縣令として安岡良亮なる人がやつて來た。當分の間は兎や角やつてゐたが、父も明治六年十一月には辭職した。嘉悦もその前後に辭職した。その他妻の父倉園等も同様であつた。謂はゞ從來熊本の縣政を專にした實學黨及びその仲間は、殆ど上から下迄一掃せられた。安岡は恐らくは斯くする積りでやつて來たであらう。而して追々と反對黨であつた所謂る學校黨なども、縣廳に採用することになり、神風黨なども各社の神官に採用せらるゝ事となつた。その間の變遷に付いては、子供ながらも多少氣が付かぬではなかつた。斯くして初めには『白川新聞』と呼び、後に『熊本新聞』と改稱した新聞などには、安岡に關する記事が可成り出で來つた。安岡は土佐人で、勤王家の出身であつたが、頗る傲慢の漢であつたらしく、且つその品行も頗る芳しからなかつたとかにて、隨分物議を釀した事もあつた。

八　再び洋學校に入學す

◇基督教宣傳者としてのゼンス及び夫人

予は一度洋學校から出されてから以來二度と再び足ぶみせぬ決心で、これから全く漢學でやり通さんと考へてゐたが、堀端の伊勢家――即ち横井家――にて、新歸朝者の時治氏の話を聽き、今後とても外國語を知らずしては世に立ち難きことも、そろ〳〵自ら感付いてゐたが、遂に父の切なるすゝめにて、再び洋學校に入ることゝなつたのは、多分明治八年の夏、予が十三歳の時であつたと思ふ。その時には前回と違ひ、予も既に一人前の了見があり、誰しも予を子供として待遇する者もなく、その時には既に仲間の餓鬼大將となつてゐた。然も仲間と云へば概ね予よりも二歳、三歳若くは五六歳の長者であつた。洋學校もその傍にある病院及びそれに附屬する醫學校も、いづれも實學黨の施設で、安岡縣令には受けがよくなかつた。一時は廢藩後細川家が經費を支辨してゐたが、それも永續するわけにはゆかず、予が入校の頃は、最早洋學校もその運命がきまつてゐた樣だ。

扨ゼンスはアメリカ人丈あつて、實學黨の注文通り、或は米國から種物や、農具を輸入するとか、

或は化學工業の初歩とも云ふべきことをはじめ、石鹸をつくる等の事を創むるとか、種々のことにその力を假したが、然も彼の胸中に蓄へたる大なる目的は、キリスト教宣傳にあつたらしい。當時長崎にスタウトといふ宣教師があつて、そこから凡有る聖書及びトラクト（基督教宣傳の文書）の類を取寄せ、それを生徒に分配した。その中には支那譯もあり、日本譯もあり、英書は固より舊約書の話などには、子供だましと見るべき、繪入りの立派な本などもあつた。而して土曜の晩などには、生徒を招んで讃美歌等も歌ひ、且歌はしめてゐた。當時洋學校第一回の入學生は卒業してゐたが、彼等は他に行くところもなく、尙ほ學校に止つてゐた者があつた。その中でもゼンスの最も氣に入つたる生徒は、予の從兄の橫井時雄、又その次の級には、予と緣續きである金森通倫などがあつた。小崎弘道氏は今でこそ牧師であるが、彼はその時迄は最も熱心なる實學黨の仲間で、寧ろ耶蘇教嫌ひであつたと思はるゝ。初めは上級生のみであつたが、追々下級生より新入生にも及び、集會の時にはゼンスの應接間は人で一杯となつた。而して後には學校以外の人さへも出掛けて來た。予自らはゼンスに對しては、好意も持たなかつたが、吾姉――湯淺初子は、その從妹橫井宮子と與に、ゼンス夫人の門人であつた。されば予も彼等と全く沒交涉といふ程でもなかつた。予が洋學校に入る頃は、舍監として境野熊藏氏がゐた。彼は學者の家柄にて、詩文なども可成り達者に出來た。而して恐くは『熊本新聞』の

論說なども、時々書いてゐたであらう。予等がリーダー等の譯文をつくれば、彼がそれを訂してくれた。予は秀才といはれる程でもなかつたが、又た鈍才と云はれる程でもなかつた。併し講堂等に於ける予の振舞は、屢々ゼンスの注意を惹き、叱かられた事も數回あつたやに覺えてゐる。課程時間には大講堂に上級から下級まで、悉く出席し、各々そこにて自習し、授業の時間來れば、大講堂から更に各級代る〳〵授業室に繰込むことになつてゐた。その間は席を離れる事も出來ず、談話をする事も出來ず、ゼンスは常に授業室と講堂の間とを往來して監視してゐるから、頗る窮屈なものであつた。予はその窮屈が辛抱しきれぬ爲、他人の席などに出掛けて、その爲に喧しく叱られたのである。

予は學生として別に惡しき學生ではなかつたが、予等の同級に狡なる者があつて、如何にも輕薄の漢であるから、それに制裁を加へたらよからうといふことを予が發議し、何れも同意者が多數であつて、遂にそれを實行した。予は自ら手を下さなかつたが、予の命令といはんか、予の相談といはんか、それに同意して參加した者は、何れも予よりも年長者のみにて、中にはその內の一人の如きは、それ以來十數年相逢はなかつたが、何時しか予を訪ね來り、それ以來近年同人の歿する迄數十年間、時々無心を申込まれてゐる。實に不思議の緣もあればあるものだと思はれる。而して又た制裁を加へた漢は、やがて予の親友となつて、予は屢々その者の家にも遊びに赴き、死に抵る迄親しく交つてゐた。扨そ

の騒は別に制裁を加へられた人の肉體に、何等の損害をも與へなかつたけれ共、餘りにその事が大騒となり、今度は公然退校といふ評議となつた。固より年少ではあつたが、予は張本の一人であつたから、退校者としては、イの一番に擧られた事と思ふ。併しこの事は穏便に取計ふがよからうといふ事になつて、上級生の人々が仲裁に入り、愈々首尾よく手打ちとなつた。

九　花岡山バンドと予

◇新聞記者たらんとする最初の希望

扨予は何事にあれ、新しいことはあまり好まない性質であるが、その時分から本を讀むことは好きであり、しかも漢學には聊か自信があつたから、漢文に飜譯したる舊約書や新約書を貰ひ受け、少しばかり讀んでゐた。なか〳〵面白さうであつた。元來予は實學連生抜きの者にて、『四書』の講義などは父からも聽き、又た『大學』の講釋にかけては當時第一人者と稱へられたる、竹崎先生の講釋も聽いてみたが、實のところ予の魂を捉ふる程のものはなかつた。ゼンスは四年以上も日本にゐたが、絶對に日本語を用ひず、彼は生徒に教ふるにも英語のみでやつてゐたから、彼の説教や談話なども、固

より予には解らう筈もなかつた。併し上級の横井時雄——當時伊勢——や、金森通倫が、ゼンスの意を受けて話す事はよく判つた。兎に角實學連の『大學』の講釋に比ぶれば、聖書の講釋の方が何やら面白くもあり、且その方の仲間が寧ろ學校では賢明にして、有力なる分子らしく覺えたから、自然その方に近付くことゝなつて來た。ゼンスも初の間は餘程遠慮をしてゐたが、最早彼の任期も滿ち、遠からず引上ぐることゝなつたから、彼も傍若無人にその所信をやつてのけたものと思はるゝ。斯くて明治九年の初めであつたと覺ゆるが、世間で名高き花岡山の申合せが出で來つた。

花岡山の申合せなるものに就いては、予は初からその申合せに與つたものでもなく、且つ予の年齡もやうやく十三、四にして、當時予より六七歳以上の幹部などとは、年齡の上にも懸隔があつたので、謂はゞ予は陣笠の一人として參加したに過ぎない。併し世間では特に予の名なども主なる一人に擧げてゐるが、それは難有迷惑にて、實は幹部といふ幹部は上級生の數輩にして、あとは附和雷同したに過ぎなかつた。予は當時固よりキリスト教の事を研究したといふではなく、唯だ黴の生えたる『大學』や『論語』の講釋よりも、何やらこの方が面白いやうに心得たる迄であつた。謂はゞ實學黨の殼からをどり出す爲に、その仲間に加はつた迄にて、それ以上の意味はなかつた。然るに仲間に加はつた連中はやがて種々の物議が起つて、そろ／＼それをやめたが、予はかねての氣質にて、一度やりかゝれば

ゆく所まではゆくといふ決心であつたから、後まで踏止つたのである。それで予も花岡山の連盟者の一人として、記憶せらるゝことゝなつた。併し予の眞意は今申す通り、深くキリスト教を研究して、それを信じたのではなかつた。固よりキリスト教の爲に一生を捧ぐるといふ了見は、露程もなかつた。唯だ他の者がやめるから、意地にもやめずにゐたのであつた。

扨實學黨の連中は、畢竟己の後嗣者をつくらんが爲に洋學校の創立に骨折り、維持にも骨折つた。されば洋學校の連中もその系統からすれば、悉くとは云はぬが、大多數は、實學黨の色彩を帶びたる者のみにて、その重なる者共は、日曜や休日には、竹崎先生の會讀とか、その他實學黨の諸先生の宅に教を聽きにゆく者が少くなかつた。その實學黨の諸先生中には、云ふまでもなく吾父もあつた。然るに思ひきや彼等の後繼者達は、彼等とはだん／＼遠くなり、しかもいづれも耶蘇教熱心者となり、中には治國平天下の業を他所にして、傳道でもしかね間敷者共が出で來つた。所謂る實學連の諸先生からすれば、佛を頼んで地獄に入るとは、この事であらう。此處に於て學校では、非耶蘇教徒が自然出で來つた。非耶蘇教徒は事實非ゼンス黨である。それは學校のことゝして、實學黨の諸々の家庭は、社會に對して重大なる責任を感じた。さなきだに實學黨の先輩横井小楠先生の如きは、耶蘇教を信じたといふ理由の下に暗殺された位で、實學連には、耶蘇教といはれることは最も禁物であつた。然る

に横井第二世と云はれた時雄氏を始め、末輩の予等に至る迄、耶蘇教を信じたと云はれては、天下に對しても、家に對しても面目がないといふ事にて、此に於て所謂る迫害なるものが起つた。迫害の最も劇しかつたのは、横井及び金森であつた。金森は予の伯母三村家との親戚關係よりして、專ら三村家に於て迫害せられ、横井は又た堀端の家に於て迫害せられたが、吾家にも竹崎先生などは、駕籠にて夫婦連れでやつて來、隨分物々敷くあつた。後から最も熱心の信者となつた竹崎伯母、横井叔母、及び吾母などの耶蘇教反對熱はすさまじきものであつた。何時までたつてもこの問題は、落著するものでもなく、又た學校の運命も既に明治九年の秋までときまりたれば、長くゐるわけにはゆかず、予は寧ろ東京に遊學せんことを志し、この際父母と妥協するを賢明の方法と考へたから、兎も角も萬事を父母に一任すると云ふことに漸く話をまとめた。予の仲間の者は、徳富は耶蘇教を捨てたと云ふたが、予は其實捨つる程に耶蘇教を深く信じたものでもなく、只だ實學黨の月並的型に入るのがいやであるばかりであつたから、斯る問題にアクセクして一生をあやまらんよりも、寧ろ速かに東京に出で、予が志すところを達するに如かずと考へ、兎も角一應は兩親の云ふことをきくといふことになつたのである。

斯くて予はいよ〳〵東京に赴くことゝなつた。それは明治九年八月頃であつたと思ふ。當時横井氏

は既に東京に、金森氏は京都に赴いてゐた。

序ながら語つて置くが、予が新聞記者たらんとする希望は、當時に於ても既に其の兆候があつた。熊本洋學校の側に活版舍なるものがあつた。之は本來洋學校の書籍を出版すべく、藩廳で購入したる活字及び活版機械を廢藩置縣の爲めに、拂下げて出來たものであつた。そこから當初は半紙綴りにて『白川新聞』と云ふを出し、後には一枚刷りの『熊本新聞』を發刊した。それの記者は後に元寇記念で有名であつた湯地丈雄、また後には予の忘年の友となつた、境野熊藏等の諸君が書いてゐた。予は此の新聞に多大の興味を有つて居り、また東京から父等が購讀しつゝある『東京日日新聞』などを最も熱心に精讀し、當時主なる世界の出來事であつた、露土戰爭のことなども、同紙上にて、其の約略を心得てゐた。

七十三歳の老記者、料らざりき、六十年前の故吾を、校正の原稿紙上に於て再視せんとは。浮生一夢の語、眞に吾を欺かず。讀み來りて、感慨無量。

昭和十年七月二十九日午後三時半、岳麓山中湖畔双宜荘、山葡萄の緑葉は、半ば書牕を蔭し、落葉松の樹枝を透して、富嶽の雲烟を望みつゝ。

蘇峰古稀又三叟誌

第三章　上京及び同志社遊學時代

一　熊本より東京へ

◇東京に於ける予の親類

前記の如く予が熊本を出發以前に、予の從兄横井時雄氏——當時伊勢時雄氏——は、既に上京してゐた。又た予と緣續きである金森通倫氏も、既に京都に赴いてゐた。予は別に彼等と何等の聯絡はなく、只だ父母にその志を告げ、父母の許を得て上京する事となつた。許可とは云ふけれ共、父母も當初よりその積りであつたらうから、實は双方の考が合致したと云つてもよからう。

扨予が上京するに就いては、誰か予を伴ひ行く人があらうと吟味したが、伯父矢島直方——母の兄——の知人にて、古莊一雄氏が近々上京するとの事にて、予は愈よその人に伴ひ行かるゝ事となつた。古莊氏は當時司法省の役人であつたが、先輩井上毅氏等とも懇意であつて、先づ前途有望の少壯官吏であつた。彼は眉目秀麗の漢にて、若き夫人と與に、今日の言葉で云へば、ホネームーンとで

も云ふべきものであらうか、結婚間もなく歸郷したものらしい。夫人も亦た熊本人であつた。
予は明白に出立の日を記憶しないが、非常に暑き日であつたから、多分七月か八月かであらう。予が出立とて家には父の友人や親類なども來つて賑かであつた。併し予は何よりも彼等が斯く騷ぎ廻るのを苦々敷思つたから、挨拶もそこ〳〵にして家を立つたことを覺えてゐる。多分父母とは大江の宅にて別れ、予を船まで送つて來たのは予の義兄、河田精一氏であつたらうと思ふ。當時熊本から東京に行くには、熊本を去る二里程の百貫と云ふ港から、小蒸汽に乘り、長崎に抵り、長崎から飛脚船に乘つて神戸に至り、それから又たその飛脚船にて横濱に著し、彼是一週間乃至十日を費してゐる。熊本から長崎迄の航路は五十里足らずであるが、その船は當時に於てさへも、極めて小さき船にて、船の中にて立つことさへも出來ぬ程であつたから、今日からみて、如何にその小さき船であつたかゞ、思ひやらるゝ。とても今日では、斯る船は利根川上下の船にさへも、見出されまいと思ふ。
兎も角も予は古莊夫婦に連れられて、その船に乘つた。予は水俣から熊本通ひに、屢ゝ和船には乘つてゐるが、小なりと雖ども蒸汽船なるものには初めて乘つた。其の臭氣が堪へ難く、特に暑くはあるし、兎も角も御馳走にて、腹は一杯であるし、船が非常に動き出したから、自然船暈を感じた。今更ら致方もないから、予は著てゐた木綿飛白の單衣の兩襟をあけて、其内に半ば顔を突き込み、腹

の中のものを殆どその間に吐き出した。而してそしらぬ顔をしてそのまゝ濟してゐた。それが長崎に至る頃には、肌と著物との間に固著して、殆ど乾飯の如くガラガラとなつてゐた。我慢は予が持前の性質にて、自業自得なれば致方もなかつたが、今更思ひ出して笑止に堪へない。神戸に上陸して古莊氏夫婦に布引の瀧杯も連れられて見物した。その砌り、或る男子が琉球人の如く、髮を束ねてそれに簪をさしてゐるのを見た。古莊氏はその漢を指し、あれが熊本にて上田休兵衛といふ、有名な漢であると語つた。上田は多分東京からの歸途であつたらうと思ふ。彼は翌十年の西南の亂に、黨薩隊を作つて活動したが、後に明治政府の爲に刑死せられた。

斯くて予等は東京に著し、三等煉瓦の西紺屋町の旅館に至り、其處にて鮪の刺身にて晝食を喫ひ、それから古莊氏に伴はれて、神田裏猿樂町なる予の伯母藤島氏の邸に入つた。爾來古莊氏とは幾十年か會期がなかつたが、氏は大審院の判事となり、爾後京都に隱居して逝いた。氏は「國民新聞」の愛讀者にて、屢ゝ詩を寄せ、又た予と書翰を往復した事があつた。

當時東京には母方の親類には藤島氏があり、父方の親類には江口氏があつた。藤島氏は予の母の姉にて、その子正健氏は、當時大藏省に奉職し、特に有力なる松方氏や、得能氏などの知遇を得、可成り羽振りをきかしてゐた。伯母は予の母の姉妹中、最も特色ある女にて、殆ど共產主義の實行者であ

つた。即ちその子正健氏の俸給は固より、凡有るものを以て、これを人に施す事を樂とした。そこで藤島氏の家には、伯母を頼りて來る書生など尠からず、予は固より姪であれば、當然の權利でもあるかの如く、その家に寄寓してゐた。

父方の親類江口氏は、高廉と云ひ、予の父の弟であつた。當時叔父は官を罷めて、本所側なる新大橋の袂に寓居してゐた。叔父は德富家から出て、江口家を嗣いだのである。その養子實は妻の弟高確氏は警視廳に奉職し、川路氏の信用篤く、これ又た警視廳で羽振りをきかしてゐた。——高確氏は江口家の子であつたが、幼少の爲に叔父が高確氏の姉に配し、江口家を相續した——叔父の實子高寛、高達、高邦及び純吉何れも福澤門下で、就中高邦氏は最も福澤翁の愛顧を受け、一時は東京府會議員などをした事もあつた。純吉氏は予より一歳の弟で、當時は尙ほ高確氏の家にあり、何處かの學校に通つてゐた。當時高確氏は本所綠町に居た。予は神田裏猿樂町から新大橋の附近、本所綠町の間を屢〻往來した。今から考ふれば隨分御苦勞の事であつた。右の次第で順序から云へば、予は當然慶應義塾に入るべきであつた。併し如何なるわけか、予は熊本に居る時から福澤流は蟲が好かなかつた。熊本などにても、福澤流は殆ど或る部分を風靡してゐたが、予は何やら氣に喰はなかつた。それで年長の江口兄弟の云ふ事も、別段敬服もしなかつた。當時高達氏は何處かの私立學校の敎師で、

明治十一年同志社に於ける蘇峰翁
右端　湯淺初子氏（翁の姉）
中央　德富健次郎氏
左端　蘇峰翁（十六歳）

新島襄先生

同志社に於ける蘇峰翁の同級生　前列左より二人目が翁　その後に立てるは綱島佳吉氏

叔父の寓居と近き處の二階に間借りをしてゐた。彼は兄弟の中にて最も温厚であり、且又た予が叔父の寓居を見舞ふ際に、屢ゝ面會の機會があつたから、予は『酒好人に與ふるの書』と題して、懇々酒の害を書き、忠告じみたる手紙を送つたことがある。彼と予とは年齢も頗る相違してゐたから、定めて生意氣な小僧と考へたであらうが、江口親子兄弟は、よればさわれば酒を呑んでゐた。何れもその道にかけては豪の者であつたらしい。但だ高寛氏だけは醉うたこともなく、この人は眞面目一方の人であつたらしく思はれた。

二　東京英語學校入學

◇幾もなく私かに京都に奔る

慶應義塾既に面白からずとすれば、私立學校では、中村先生の同人社しかない。そこで江口高確氏の知人横尾東作と云ふ人の紹介にて同人社に赴き、一寸試驗を受けてみたが、これも面白くなく、この方から斷つた。築地あたりの宣教師の學校はどうであらうといふ話もあつたが、それも氣に喰はす、彼是して遂に東京英語學校――今の一高前身――に入ることゝなつた。これは予の從兄横井時雄

氏が當時開成學校――今の帝大前身――に入學しつゝあつたから、その階梯の學校、卽ち今日の第一高等學校の前身たる、東京英語學校に入るのは、寧ろ當然の順序であつたと思はれる。兎も角も入學は叶ひ、出席することゝなつた。當時開成學校と英語學校とは、何れも神田の一橋外にあつた。横井氏は當初神田美土代町にゐたが、やがて藤島氏に來り寓し、藤島家の座敷には、横井氏と予とが陣取り、主人の正健氏はかへつて狹き室に押込められてゐた姿であつた。予等は伯母の姪とて、斯る勝手な振舞をしたものであらうが、今更ら思ひ出して慚愧に堪へない。

予は當時數へ年の十四歲で、嘗つて神田美土代町の横井氏の寓居から、横井氏及び他の一人と、三人一輛の車に乘つて、上野に赴いたことを覺えてゐる。當時は相乘り車とて二人乘りの車があつたが、二人は予を眞中に乘せて、三人乘りとして出掛けた。それに據つてみても、如何に予が小さかつたかがわかる。

嘗て內村鑑三翁に面會した時に、翁が云はるゝには、『德富さんに珍らしきものをお目にかけよう。いつぞや或人が予に明治九年頃の東京英語學校一覽表を吳れたが、それを見てゐる中に君の名が出てゐる。しかも君は餘程不勉强であつたものとみえて、名が尾に出てゐる。』との事であつた。別に殊更不勉强といふわけではなかつたが、予が學校に通つたのは、恐らく二ケ月とは經たなかつたであら

う。予は何れを見ても面白くなく、英語學校に入學したとて、只だ教場にて、教師の顔を見る位では、書物を習ふばかりで、何等身に益する事はないと考へた。而して、當時金森氏等が京都の新島襄氏に就いてゐることを知つてゐたから、寧ろそれに赴かんと考へ出した。横井氏は東京に出掛けに京都に立寄り、新島先生に面會してゐたやうだが、別にその時迄は新島先生に多く敬服してゐるやうな話も聽かなかつた。

　何はともあれ、予は横井氏には相談せず、金森氏と書面を往復し、種々事情を糺してみた。而して一人自ら東京を去つて京都に赴かんと決心した。併し理つておくが、予は決して傳導師などにならんが爲に、京都に赴かんとするではなかつた。予は熊本にゐる時分から新聞に多大の興味を持ち、『東京日日新聞』などを愛讀してゐた。又た當時熊本にて發行する『白川新聞』『熊本新聞』の類もよく讀んでゐた。東京に來てからも新聞とか雜誌とかには、特別の興味をもつてゐた。されば福澤翁が箕浦勝人氏を編輯長として『家庭叢談』なるものを發行した時にも、裏猿樂町から兩國藥研堀なる報知社まで、その創刊號を需むるべく、炎天に汗を揮つて出掛けたことを記憶してゐる。但ゞ予は學校は書物を讀むところと云ふよりも、寧ろ師に就いて學ぶ處であるといふ考をもつてゐたから、その場所を東京に於て見出さず、京都に於て見出さんと欲したのである。予の學校の觀念は、兼坂先生の塾が、其の基礎と

なつてゐた。

扨予は内々出立の準備をした。最早や明治九年も秋風訪れ、霜が降らんとする頃であつた。予は汽船問屋に就いて、ほゞ横濱出帆の汽船を問合せておいた。何時も横井氏と毎朝相携へて學校に赴いたが、その日に限つて何かの口實を設け、予一人後に止つた。而して忙しく鉛筆にて横井氏に書置きを認めた。如何なることを認めたかそれは記憶してゐない。荷物は既に我が手に提げられる丈の小さき行李に入れてしまつた。而して豫て藤島正健夫人に預けておいた三十圓の金を、如何なる理由を以てしたのであるか、それは記憶せぬが、ともかくも取り返した。而して自分で車を呼び來り、三十圓の金を懷中し、小さき行李を携へて車に乘つて、新大橋の向側なる江口叔父の寓所に至つた。斯くてその車を待たせつゝ、叔父に向つて斯々の譯にて京都に赴くことを告げたるに、叔父は以ての外の事とて、直ちにそれを差止めた。予は當初よりこの叔父はよく予を了解してゐて呉れたとは思はなかつたから、今更ら叔父と爭うたとて致方なしと考へ、叔父の云ふにまかせてゐた處が、叔父は何處かに出掛くるといふ事にて、蕎麥でも喰つて行けといふ事であつたから、蕎麥の馳走に與り、そのまゝ車に乘つて新橋停車場に乘りつけた。それから横濱の旅館に赴き、一宿し、その翌日か若くは翌々日かに乘船した。實は追手が來ないかと懸念したが、遂にその事もなかつた。横濱市中を徘徊する內、或る

寫眞屋の店頭にて、一枚の寫眞に、當時有名なる人々の顔を合せ撮りたるものを購ひ、それを熟視し、せめて他日は、其中に伍する樣になりたいものと考へた。その寫眞は今尙ほ藏してゐる。

予は心細くも汽船に乘込んだ。最初は甲板の上などを往來してゐたが、やがて動搖甚だしく、遠州灘では頗るやられた。神戸に著したのは、翌々朝の午前二時頃であつたと思ふが、はしなく或る年長の書生と同行した。彼は予よりも若干多く英語を知つて居たものとみえ、言葉の中に何やら英語をさしはさんでゐた事を記憶する。神戸からその書生と別れて、京都に向つたが、その時は京都の停車場は未だ出來上つてゐなかつた。

三　同志社と新島襄先生

◇同志社の食堂と學課

斯くて予は相國寺門前の同志社に赴き、金森氏を訪ね、斯々の次第にて來たと云ふことを陳述し、そのまゝ携へ來れる小さな行李を、同志社の一室に置いた。その夜は祈禱會があるとて、金森氏は、予を御所內の元柳原家の邸である同志社教師デビス氏の宅へ伴つた。當時御所內には中山家の邸もあ

り、それには同志社の教師にして醫者なる、テーラ氏が住んでゐた。而して前に申す通り、柳原家の邸にはデビス氏が住んでゐた。扨その夜の祈禱會にて別に予の目につくものはなかつたが、たゞ一人の婦人が、日本服の上に何やら西洋婦人の帽子をかぶり、不思議な風采をしてゐた者を見掛けた。それが即ち新島先生夫人であつた。祈禱會の後に各々の感話をしたが、予も亦た立つて一場の話をした。如何なる事をしやべつたか、少しも記憶してゐない。併しそれは多少感動を與へたものと見えて、金森氏は特別に予の爲に祈禱を初めた。その祈禱が何事であつたかは、これ亦た記憶してゐない。その夜は無事であつたが、その翌日、新島先生から、今夜先生宅に話に來れと云ふ案内があつた。斯くて予は先生の申された通りに出掛けた。當時先生は烏丸通りの寺町東へ入る町に借家してをられた。普通の京都の家にて、入口の土間を上れば、そのとりつきが先生の書齋であつたかの如く覺えてゐる。而してその次の室が日曜には教會の代用をなして、其處で先生は日曜の説教をしてゐた。尤も會衆は多くて二三十名に過ぎなかつたから、別に差支へもなかつたであらう。先生は一見した處、如何にも親切で溫恭で、立派な人格者らしく思はれた。別に特徴と云ふ程の事はなかつたが、眉の上に大なる傷痕があつた。先生は西洋流のナイトガウンを著、房のついた帶をしめてゐた。何やら小なるストーブがあつたと覺えてゐる。先生は種々予に是迄の成行きを訊ねた。而して薩摩芋にて作

りたる羊羹幾片れか御馳走し、當時初めて流行しつゝあつた紀州メンネルのシヤツ二個を惠まれた。それは予が夏仕度にて國を出て以來、殆ど著物には頓著しなかつた。定めて予が寒さうな風をしてゐたのを見て、豫め予に與ふべく準備をして置れたものであらう。此の如くして予と新島先生との長き間の交際は初まつた。

予は別段新島先生には失望しなかつたが、同志社には失望した。同志社は明治八年に開校したといふことで、創立から既に一年を經てゐるが、何事も不整頓であつた。予等が熊本にて學んだる洋學校に比ぶれば、とても比較にはならなかつた。第一閉口したのは食物であつた。當時同志社は同志社トレーニング・スクールと宣教師等は稱してをり、新島先生と山本覺馬氏とが結社して創つたと云ふが、それは表向き日本政府に對する申譯で、その實は米國宣教師の全權の下にあつたといふも差支へなかつた。新島先生も日本人には味方といふ味方を殆ど持たなかつたから、斯くあつたのも致方あるまい。食堂の事は先に云つた醫師テーラ氏が監督してゐた。されば日本人の食性などは、全く無視して、予等にとつては意外なる食物を與へた。第一主なるものは、マッシと云つて、皮ぐるみに挽きたる小麥の粉をねりたるものであつた。それを大なる鉢に盛つて出した。若干砂糖が入れてあつた樣でもあるが、兎に角美味きものではなかつた。その次が豌豆を煮たるものであつた。それは豌豆の皮が

ドロドロになる位に煮たもので、それにも若干砂糖を入れてあつたやうだが、毎日の食物としては可成り閉口した。その次は麥の中に牛肉の塊を入れて煮、而してその牛肉は引き出して細かく切り、菜葉と共に汁をこしらへ、麥は各々の茶碗に盛つて喰べた。而して一週間に一回パンを各々二切づゝ給與せられた。それが非常なる馳走であつた。予は子供の時から麥飯が先天的に嫌であつて、殆ど麥が一粒飯碗の中に入つてゐても、全部箸をおくといふ次第で、親類の家などに泊つてゐる時に、麥飯を出されると、一日位は平氣で絶食してゐた。子供の時に兩親にやつた手紙に『今度は麥飯無之、御安心被下度候』といふ文句を認めてやつた事さへあつた。然るにその麥を、麥飯ともつかず、たゞザラ〱に煮たものをすゝり込むことは、予にとつては尠からざる苦役であつた。やがて食堂問題が持ち上り、米飯を一杯づゝ給與せらるゝ事となつた。その爲に、成可く後に食堂に出て、他人の喰ひあましたる食をもあはせて喰ふ工夫をした者もあつた。副食物などは茄子とか、唐茄子とか、冬瓜とか、凡有る野菜に、肥料にするホシカよりもやゝ少しく上等なる、小鰯の煮干しを加味したるものであつた。恐るべきは習性だ。予が今日迄、ガブ〱のむところの汁物を好んでとるやうになつたのは、全く同志社の食堂から來たものと思はる。

扨又た敎場の方は如何と云ふに、予等には宣敎師の連中の授業は殆どなく、予等の先生と仰ぐ者

は、熊本洋學校から來た予等の先輩であつた。この意味に於ては、熊本洋學校の延長と云つても差支へあるまい。予の同志社に赴いた時には、既に所謂る熊本バンドと稱する、洋學校の廢校と共に移轉し來つた連中が、澤山同志社に來つて、殆ど從來の同志社生を壓倒してゐた。彼等の爲に風采も言語も半ば以上熊本化してゐた。予等は京都に居て、京都言葉を使ふ必要を感じなかつた。在校の上方及び他地方の人も、餘りに熊本バンドが有力なる爲、熊本流の訛を模倣する程に至つた。若し予が熊本人でなかつたならば、さぞ憤慨したであらうが、熊本人であつたが爲に、その點丈は別に憤慨心は起らなかつた。併し迷惑を感じたのは、書物の不足であつた。予等は米國にて出版したるギヨーの『コンモンスクール・ヂオグラフイー』なるものを讀む事となつたが、人は多く書物は少く、その爲に時間割してその書物を讀む事となり、時間の都合にて、或は午後の十時から十二時になる者もあり、午前の二時から四時となる者もあり、それには何れも當惑した。而してその書物のやりとり、時間の分配等にて、仲間の中に隨分悶著が起き、必ずしもそれが理由と云ふではなかつたらうが、その爲に教師と喧嘩をして學校を飛出した者さへあつた。これと同時にバーレーの『萬國史』を授つた。これは專ら舊約書を引用したるものにて、兒童に課すべき書物で、我等にはあまりに子供らしく、莫迦らしく思へたから、予が發議にて何ぞ役に立つ歴史ととりかへる事を主張し、その爲に予は大阪に赴き、當

時熊本洋學校の教師であつたゼンス氏が、大阪英語學校の教師となつてゐたから、彼よりして書籍代を借り受け、兎も角も四五册のウイルソン氏の『萬國史』を購ひ、それを持歸り、それを課程の讀本とした事を記憶してゐる。

四　予の同志社入學と兩親の寛大

予が熊本なる兩親に諮らずして、しかも東京なる叔父の意見に逆いて同志社に奔りたる事は、兩親にとつて定めて意外であつたかも知れぬ。兩親は兎も角も緣家、親類に對して、兩親の面目を潰す樣な結果があつたかも知れぬ。又た實學黨の主なる父の友人達に對しても、父の顔が潰れるやうになつたかも知れぬ。それは止むを得ないわけである。從つて何時の間にか予が東京から携へ來れる三十圓の金は、旅費となり食費となり――當時授業料は一ケ月五十錢で、殆ど勘定の外であつた――餘すところ幾何もなくなつた。而してやがて熊本には神風黨の亂があつた。明治九年十月二十四、二十五日の事にて、多分予が京都に著して間もなき後の事であらうと思ふ。予は、予が自由行動の結果として、今更ら學費の送金を家より仰ぐ事も出來ず、さりとて宣教師に頭を下げ、他の同學生の如く、門

番とか、掃除番とか、その他凡有る名義をつけて、學費の援助を仰ぐことも屑しとせず、心中聊か困らないこともなかつたが、ゆくところまでゆけばどうにかなるであらうと思ひ、絶對の儉約をなし、蒲團なども藁蒲團を誂へ、著物は一度著たらばそれがきれて縄の如くなる迄、殆ど更へないといふ程度で、湯などにも殆ど入らなかつた。その爲め同輩の者共も、予の傍に近付くを厭ふ程であつた。併し別に吝くさき事をするのではなく、只だ著物は殆ど身體に固著したものゝ如く、特別なる必要のなき限りは、帯をも解かず起臥してゐた。されば翌年と覺えるが、吾父は、予の從兄たる江口高寛の熊本から東京往復に際して、特に京都に立寄つて、予の狀況を視察すべく依賴されたる報告書によれば「猪一郎さんはまるで乞食のやうな風をしてゐる」と云うたさうであるが、全くそれ程でなくも、それに近かつたに相違あるまいと思ふ。予は必ずしもそれを誇としたわけではなかつたが、左樣なる事に氣を附くる遑はなかつたものと思はるゝ。

熊本から予に手紙が來たのは、多分明治十年一月の末頃と思ふ。それは予の長姉山川常子よりの手紙で、世の中も段々騷がしくなれば、よく／＼氣を附けて貰ひたいと云ふことで、その時には何かものを添へてあつたやうだが、何物を添へてあつたかそれはよく覺えてゐない。熊本でも、先年秋から冬にかけての神風黨の騷ぎから、當年は鹿兒島事件が正に起らんとする時であつたから、その模樣を

告げ知らしたものであらう。兎に角、その時に若干の學費が送つて來たと覺えてゐる。予は一ヶ月位は餘儀なく予のゐる寮の掃除番といふ名義で、實際どれ程掃除をしたか記憶してゐないが、三、四圓の報酬を得たやうだ。併しそれ以來は兎も角も吾家から學費を送り來つて、別に自ら支ふるに困難ではなかつた。予は今に於ても吾が父母の甚だ寬大にして、よく予を理解したる事を感謝してゐる。

五　米國化せる同志社への不滿

◇新島先生への敬愛と予の受洗

當時の同志社は、全く米國の學校にて、祭日とて休むでなく、日本の國旗を揭ぐるでもなく、天皇陛下の萬歲を唱ふるでもなく、土曜は朝から休日であり、日曜は休日と云はんよりも、寧ろ說教を聽く日であり、每朝課業の初めにすべての人が講堂に集り、新島先生を初め、敎師から順番に五分か十分づつの話を聽き、且つ祈禱があり、三度の食事に食堂で祈禱があり、中には敎室にも各級の課業を初むる前にも祈禱があり、金曜の夜は祈禱會とて、特にその集りがあり、又た夜就寢の前三十分は、各々祈禱の爲に保留する時間としてあり、一切を勘定すれば、一週間の中に祈禱の時間は頗る多くあつ

た。されば食堂の祈禱の時などには兩手を網の目の如くにして、目をふさぎ、祈禱最中に、今度の獻食物は何んであるかと、盛んに吟味してゐる連中も少くなかつた樣だ。宣教師の中には、所謂る女敎師なる者もあり、若くは宣教師の夫人もあり、學生の中には、さう云ふ人々に接近し、專らその人々の好意に與る事を光榮とし、誇りとなしつゝある者も皆無ではなかつたやうだ。予が同志社に至つて第一癪にさはつたのは、宣教師の態度であつた。何やら彼等が傲慢無禮であるかの如く感じた。これは恐くは予の偏見であらう。概して同志社の敎師たる諸宣教師は、人格者が多かつた。他の外人に比して其の人格は、優りてはをるとも、劣りてはゐなかつた。併し當時の予は前記の如く感じた。

第二は學生の中に頻りに宣教師殊にその夫人等に向つて、胡麻をする輩を不快に感じた。彼等は日本男兒の眞面目を潰す者ではないかと感じた程であつた。それから何事もアメリカ、アメリカと云ひ、日本の事を全く忘れてゐるやうであるのを、これ亦た頗る不快に感じた。それと今から考ふれば、如何にも子供らしき事であるが、新島先生夫人の風采が、日本ともつかず、西洋ともつかず、所謂る鵺の如き形をなしてをり、且つ我々が敬愛してゐる先生に對して、我々の眼前に於て、餘りに馴々しき事をして、これも亦た癪にさはつた。是亦た、餘計なる事であつたが、自分の勉強などは第二として、斯る事に不快を感じたり、反動心を生じたりするのは、自ら愚の至りと思ふが、當時に於ては、

全くその通りであつた。予が新島先生から洗禮を受けたのは、前に申した先生の借家で、明治十年の春の末か夏の初であつた歟と覺えてゐる。卽ち數へ歳十五であつた。同時に受洗した者には、伊勢みや子、卽ち予の從兄である横井時雄氏の妹もゐたかと覺えてゐる。予は何故に先生から洗禮を受けたかと云ふ事を、明白には意識してゐない。只だ予は總ての事に不平であり、不安であり、不快であり、不足であつたけれ共、新島先生に對しては、日一日と敬愛の情をたゝへて來たのではないかと思ふ。予が先輩の熊本バンドの中には、先生を以て平凡とし、先生を以ておとなし過ぎるとなし、先生を以て弱き人となし、先生を以て學識淺薄の人となし、教場にて先生をやりこめたりする事を得意がる者も全くないではなかつたやうだ。併し予は當初より先輩諸氏が買つてゐる相場以上に、新島先生を買つてゐたと信じてゐる。固より先生に對しても遺憾の點は少くなかつたと思ふが、それにも拘らず新島先生は、予の先生たる丈の立派な人物であると云ふ事を、認めてゐたやうである。先生から洗禮を受けるやうになつたのは、恐らくはそれが主なる理由ではなかつたかと思ふ。謂はゞキリストを信ずると云ふよりも、新島先生を信ずると云ふことで、キリストを經由して、神に近付くと云ふよりも、新島先生を經由して、神に近付くと云ふ事であつた。

當時予等の屬したる教會は、京都の第二公會と云つた。當時教會の名なく、公會と稱してゐた。併

し予は同志社に於て何物を最も多く得たかと云へば、國民的精神を得た事である。若し予が同志社の如き宣教師學校に入らなかつたならば、これ程迄に自國を愛するの心は多く出なかつたではあるまいかと思ふ。謂はゞ同志社に入りて、初めて我が日本帝國の難有さを知つた樣な心持がする。或時第二公會に於て新島先生の説教の後、その場所はしかと覺えてゐないが、日本帝國外のある處の饑饉か何かの救助金を募集する事になり、各々少しづつの醵金を、當時レプタ箱と稱する箱に投じた。然るに予はその時聲を震はして立上り『今我國にては戰爭があつて、予が郷里熊本には、これが爲に非常なる不幸に陥つてゐるものがある。それ等に對して救助する事をせず、緣もゆかりもなき他方の人の不幸を救ふのは、前後緩急を過りたる事で、如何に結構でも、予一人としては贊成出來ぬ。故に予は投金する事をお斷りする。併し若し西南の役に於て不幸に罹りたる者を救ふならば、自分丈のことはする積りである』と云つた。

斯くてその後に、その救助金を募る時に、予は人知れず五十錢を投じた。五十錢の少きを笑ふ勿れ。當時前にも云ふ通り、月謝が五十錢であつた位で、五十錢は予にとつては、大金ではないが、決して小金ではなかつた。此の如く予は同志社に於て見る事、聞く事、することとなす事、前後緩急をあやまつたる事の多きを思ひ、予は自分の流儀で何事でもやりつくる事にした。

六　同志社在學中の記憶（一）

◇休暇利用の傳道に參加

◇西南戰役と新聞の愛讀

話前に遷る。明治九年の末には、學校も休暇となり、その休暇を利用して先輩の連中は、何れも諸方に傳道に出掛けた。予も一人學校に止るよりも何處かに出掛けんとて、先輩金森、市原二氏に伴はれて、伊勢に赴くことになつた。二人の外に井手義久君及び予の從弟の藤島武彥君がゐた。武彥君は予の伯母藤島老夫人の末子で、予より一歲年下であつたが、彼はなか／＼の俊才であり、又た予などよりも餘程早熟であり、實は伯母も手に餘つてゐたから、彼是相談の上、武彥氏を同志社に送ることとしたのは、予が東京を飛出すより二三ケ月以前の事であつた。而して武彥氏を連れて京都に行つたのは、大久保眞次郎とて、當時北里柴三郎氏等と共に、醫科大學に學んだる、而して共に藤島老夫人より愛護を受けたる學生の一人であつた。尙ほ大久保の事に就いては、後に語る事があるから、此に理つておく。

予等五人は赤毛布を頭から被つて、東海道を三條の橋を經、粟田口から蹴上まで來た時に、後から頻りに予等の名を呼ぶ者がある。それは同志社からの使で、目下伊勢方面では一揆が起つて、とても傳道抔の沙汰ではないと云ふ事であるから、予等は餘儀なく引返したが、そのまゝ止む事でなかつたから、今度は奈良に赴く事となつた。奈良にては猿澤池の畔なる或る旅店に止宿したが、旅店の者は何の爲に年末に來たのであるか、聊か不思議に考へてゐた樣だ。

扨て金森、市原の兩先輩は、それ〳〵傳道をやらんとしても、別に手掛りとてなく、只だ相手かまはず人さへみれば、耶蘇教の說法をするといふ事であつたが、遂に各々が數百部携へて來れる『眞の神を知るの近道』と題する小册子を、町家に分配することそよからんとて、多分大晦日の夜と覺えてゐるが、各々手分けをして出掛くる事となつて、予も亦た若干の分け前を受け取つた。出掛くる前には、屋外なる人靜かなる處にて、何やらん金森氏が熱烈なる祈禱をした樣に覺えてゐる。予は元來喧嘩でもする時には、隨分思ひ切つた事を云ふけれ共、本來はハニカミヤにて、人に對して物を云ふ事はあまり好まず、わけて見ず知らずの處に飛込んで、說教などする事は、とても予の持前の性質ではない。併し予も仲間が働く時に、一人安閑としてゐるわけにはゆかず、且つその時分には予自身も若干傳道心があつたやうだから、奮つてそれを受取つた。

而して軒別にそれを分配したが、大晦日の事とて、何れの町家も明皎々と灯をつけ、取引きの人々が出入しつゝある際なれば、この小僧も掛け取りか仕拂かの使であらうと、向うでは先知して、夫々の挨拶をなしたから、その受け答には、かへつて此方が閉口した程であつた。扨その夜は首尾よく配り終つたが、それから又明けて明治十年の元日から、予は三笠山の麓なる家々にそれを配つた。其邊では奈良名物の墨や筆を賣る家もあり、予に向つて『無代で頂くのも氣の毒ぢや』とて、墨などを呉れた者などもあつたやうだ。兎に角予は自費にて出掛けたのであつたが、論功行賞の際、予も一かど働きたりと云ふ事にて、旅費丈は補助を受けた樣に覺えてゐる。それも二圓か三圓であつたらう。その當時では、宿泊料は先づ二十錢內外であつたかと覺えてゐる。

明治十年は日本の歴史に於ても多事多故の年であつた。明治天皇には年の一月二十四日東京御發輦二月の五日には京都、大阪間の鐵道開通式あり、京都七條の停車場に御臨幸あつて、親しくその典を擧げさせ給うた。當時予は脊低く、とても龍顏を拜する事が出來なかつたから、金森氏の肩に乘つて漸くその志を遂げた。卽ち明治五年五月十八日熊本に於て、小島より熊本に向はせ給ふ途上に拜し奉つて以來、第二回目である。やがて西南の戰爭は出で來つた。陛下は京都に御駐輦遊され、三條、木戶、伊藤等の諸大官も供奉のまゝ滯在した。又た大久保內務卿も東京から出掛けて來た。謂は

ば政府の臨時本據は、東京から京都に移り、而して大阪が征討軍の大本營地であるかの如き姿となつた。この半年間は、同志社に於ける教育よりも、寧ろ同志社外に於ける教育が、予の一生の運命には影響が多かつた樣に覺えてゐる。予は熊本にゐる時分から、熱心なる新聞雜誌の愛讀者であつたから、東京に赴いてからは勿論、同志社に來りてもその方には中々熱心であつた。學費さへも不足勝ちであつた予は、自ら新聞雜誌を購ひ讀む事は出來なかつたが、苟も讀み得らるゝ丈は熱心に讀んだ。當時同志社には東京の新聞では『日日新聞』、『報知新聞』、『朝野新聞』、大阪では、『大阪日報』及び京都の新聞等が來てゐた樣だ。それは讀書室に備へてあつたから、何れも人々は爭ひ讀んで、予一人これを專らにするわけにはゆかなかつたが、併し恐くはすべての學生の中で、予程熱心に熟讀したるものはなかつたとは云はぬが、少かつただらうと思ふ。當時の新聞は戰爭の記事が專らであつて、特に『日日新聞』の福地氏の如きは、山縣參軍の幕下にあり、單に新聞社の特派通信員と云ふばかりでなく、公の爲にも働いたらしく思はれる。末松謙澄氏の如きも當時は記者であつた乎、官吏であつた乎、何れにしても兩者を兼ねてゐた如くであつた。その外『日日新聞』の通信員には、現樞密顧問官久保田讓男の同胞久保田貫一氏があつた。『報知新聞』では犬養毅氏が年少從軍記者として、盛に戰報を送つてゐた。『朝野新聞』では成島柳北氏が軍事通信の目的にて京都迄出掛けてゐたが、むし

ろその紙面は軍事よりも、今日で云ふ社會記事の方が振つてゐたやうだ。同年五月二十六日には木戸松菊先生が京都にて逝いた。やがて『日日新聞』にはその社說欄に木戸公の評傳が出た。これなどは予が最も愛讀したるものであつた。又た福地氏が戰地より歸るや、彼は一布衣の身を以て謁見仰付けられ、親しく戰況を奏上した。此事の如きは予の頭腦に尠からざる刺戟を與へたやうに覺えてゐる。
予は何時頃より新聞記者たらんと心掛けた乎。明白に意識してゐない。併し熊本に居る當時よりその志があり、明治十年——予が十五歲の時——の初には、已にその志が確立してゐたと云ふことを疑はない。

七　同志社在學中の記憶（二）

◇新島先生の講義

◇夏季休暇と中島力造氏

予は每日の新聞を耽讀するばかりでなく、是非古き新聞を讀んでみたいといふ志を起し、當時京都に博物館と稱する圖書館類似のものがあり、その樓上には古き新聞が積んであつたから、予は一人

自ら此處に赴き、明治八年頃の『東京日日新聞』等を引張り出し、その中から面白き論説等を見出せば、これを寫し取り、それが薄葉紙の小册子に幾册か出來てゐた。それは大江義塾に於て、學生の或者に分ち與へたから、今は手許にないが、少くともその寫しとつた二三の文章はよく記憶してゐる。同志社の課業には殆ど予の興味をひくものはなかつた。予は新島先生からカノーの物理學と、英語にて代數を授けられた。又た四福音書の調節とでも云ふべきハーモニーやら、又た四福音書中の馬太傳か馬可傳かの講義を聽いた。予の先輩等は、バーンズの註釋書を使用し、新島先生はデーン・アルフォードの註釋書を使用してをられた。當時政府の取締りが嚴重で、聖書は同志社內にて教授する事を憚り、同志社と道を隔てたる一小家屋――當時それを三十番と稱してゐたが、その三十番――で教授せられた。聖書の講義の時には小さきストーブをめぐつて、新島先生を中に圍んで何れも聽いてゐたが、予は成可く後にすわり、先生には背をむけて、その講義中には外の事を考へてゐたから、その講義が何事であつたかは、實は何等の印象も止めてゐない。

十年の夏は如何にして暮したか、何等の記憶もない。只だ同志社の夏休みは、學生よりも寧ろ學生を教へる宣教師本位であつたから、隨分長きものであつた。休暇は六月の十二、三日頃から、九月の中旬迄あつたらしく覺えてゐる。宣教師は何れも比叡山に天幕生活に赴くか、若くは六甲か有馬邊に

赴いたやうである。予は元來宣敎師とは疎遠であつたから、彼等が如何に生活してゐたかさへも知らない。たゞはつきりと覺えてゐないが、十年の夏休みの全部でなくとも、その一部分は同志社敎師デビス氏の留守宅に、中島力造氏と暮したのではないかと思ふ。

中島力造氏は熊本バンドの來る以前よりの同志社學生にて、丹波福地山の出身であつた。非常なる勉强家で、後には倫理學者として知られた人であるが、何故かすべての人より頗る嫌はれてゐた。所謂る總スカンの標本であつた。同志社の學生の便所の壁には、何れの便所の壁にても、凡そ中島氏に就いて、惡口を書かない者はなかつた。その中に餘りに甚だしき文句があつたとて、毎朝の祈禱會の或日、新島先生から總ての生徒に向つて警告せられた。但し斷つておくが、予は人の惡口を便所の壁に落書するが如きことは、固より屑しとする者でもなく、又た中島力造氏をも、何故に他の人が嫌ふ乎。否、他の人程彼を嫌ふべき理由を見出さなかつた。故に予は彼の誘引に應じ、與に夏期休暇の或る期間を暮す事を辭しなかつた。併し二人で暮してみれば、隨分心細かつた。當時の御所内は、至る所に軒傾き壁崩るゝ廢屋や、昔ながらの公家の庭園の跡にて、氣儘に成長したる老木があり、晝さへも明るき氣持はしなかつたが、夜は寔に靜かであつた。幾つとなく空間があり、廊下があり、然も半ば破れたる柳原家の舊邸に、中島氏と二人留守する事は、夜などは餘りに淋しく感じない事もなかつ

た。併しその際予は中島氏から種々世間の話を聽いた。中島氏は予よりも年長であり、同志社に來る前に大分世間を渡つて來た。即ち予が聽いた話は世間話であるが、予の如く家庭から學校に眞直ぐに來た者には、聽く事が悉く意外であつた。併しこの間に於て、何の問題であつたか知らぬが、一度中島氏と喧嘩をおつぱじめ、予が喰つてかゝり、やうやく大澤善助氏が仲裁した事があつた乎と覺えてゐる。大澤善助氏は當時その養父と共に、新島先生の教會の一員であつて、一時は同志社の賄なども受け負うてゐたのではないかと思ふが確かでない。何れにしても當時同氏は、同志社や新島先生の家に出入りしてゐた。

戰爭がそろ〳〵下り阪となつた頃、予の伯父矢島直方が東京から京都にやつて來た。伯父は戰爭の初期にはその郷里に居り、無遠慮に馬に乘つて往來したから、當時の所謂る賊軍の爲に嫌疑を受け、捕へられて熊本の協同隊本營に送られたが、その隊長が偶然にもその知人であつたが爲に、隊長の方から懇願的に立退きを希望し、護衛の人を付けてこれを戰線外に送り出し、そのまゝ東京に赴き、今やその歸途に京都に立寄つたのである。矢島伯父は從來東京、福岡等に宦遊し、熊本にゐる日が少かつたから、予は親しく伯父と相知る機會がなかつたが、實はこの際初めて膝を交へて話したのである。當時伯父の隨行者には大久保眞次郎がゐた。彼は前に記した藤島家に出入りする醫科大學生で、嘗て

藤島武彦氏を同志社に伴ひ來りたる者であつたが、よくは聽かぬが、今度は醫科大學を飛出し、伯父の隨行者として來たとの事である。

八　同志社在學中の記憶（三）

◇大久保眞次郎氏と予
◇バイブル・クラスの專橫

明治十年の末か十一年の初か、はつきり記憶しない。唯だ此に想起す一事は、前に記したる矢島伯父に伴はれて、東京より京都に來た醫科大學生の大久保眞次郎が、同志社に入學した事だ。予は彼としみ〲交際しなかつたが、東京に於ける藤島伯母の家にて屢ゝ面會した。彼は熊本城北山鹿郡の百姓の伜であつたが、俊才にて、熊本病院附屬の醫學校に入り、和蘭人マンスの門人となり、緒方正規、中島某、北里柴三郎等と共に選拔され、東京の醫科大學に入つた一人である。多分その學費は、予が伯父矢島直方が擔當したものであらう。彼はやがて醫科大學を卒業する間際であつたか、若くはそれに幾かつたか、何れにしても彼はその仲間に於て、餓鬼大將の一人であつたらしいが、彼は何

明治十年　同志社に於ける十五歳の蘇峰翁（左端）右端は家永豐吉氏

（上）明治十年の蘇峰翁　前列右より藤島武彦氏　翁　後列右より金森通倫氏　林治定氏

（下）明治十二年『七一雜報』編輯手傳の爲、神戸に赴く當時の送別寫眞前列右より二人目元良勇次郎氏　その前大西祝氏　その次が翁（十七歳）　後列右より四人目金森通倫氏　その次市原盛宏氏

故に醫學校を去つた予、兎も角矢島伯父に從つて、東海道を京都までやつて來た。その後の事は知らなかつたが、後に彼の語る處を聽けば、彼は東本願寺の學僧小栗憲一の許に、食客として入り込んだといふ事である。其後如何にして其處を飛び出したか知らぬが、彼の云ふ處によれば、過つたる風をして箒にて佛樣をはり倒して出て來たとか云ふ事である。何れにしても尻の据らぬといふ事が、彼の特色の一にて、如何にして同志社に飛込んで來た乎、それは予には記憶がない。併し彼が同志社に入つた事は、予にとつては可成り重大なる關係を持つ事となつた。

當時同志社にはバイブル・クラスなるものがあつた。その主なる者は何れも熊本からやつて來た予等の上級生にて、彼等は上は教師たる宣教師や新島先生を凌ぎ、下は他の學生を率ゐ、實に有力なるものであつた。その中でも小崎、宮川、金森、海老名、横井、及び故人となつた前朝鮮銀行總裁市原氏の如きは、其の錚々たるもので、彼等は謂はゞローマのパトリシアンの如きものであつた。予は第一アメリカの宣教師が威張るのが癪にさはり、第二には、予にとつては友人でもあり、且つ先輩でもあるに拘らず、そのバイブル・クラスの連中が、我が物顏に同志社を振舞ふのが頗る癪にさはつてゐた。成程彼等は予より年長者である。又た彼等は大概教室に於ては、教師として予を教へ、予等は又た生徒として彼等より業を授けられてゐる。英書を讀む事、說教をする事、祈禱をする事、それ等

の點に於ては、予等は固より彼等に及ばない。又た及ばない事をよく知つてゐる。併し漢學の知識や、學校以外の我國の現狀などに就いては、恐くは予の方が一日の長があると信じてゐる。それで別段彼等には感服してゐない。何かの機會に彼等に一泡ふかしてやらんと思つてゐたのに、それといふ相手もなく、味方もなかつたから、そのまゝゐたが、今偶然にも大久保眞次郎がやつて來た事は、予にとつては一方ならぬ味方を得た心地がした。

當時同志社には、同心怒社と稱する一の團體があつた。斯る變手古な名をつけたのは、藏原惟郭氏が字引をひいてつけたのであるといふ事であるが、名は何れにしても、この團體はバイブル・クラス以下のものが主なる者で、藏原氏抔も其中の論客として認められてゐた。云ふ迄もなく予もその一人、主なる一人であつたかも知れない。然るに大久保は何時の間にかそれに加入した。而して盛んに予と同一の側に立つて演說やら、討論をやつた。大久保は予に比すれば又た一日どころでなく、十日以上の長があつた。予は我が家庭から洋學校を經て東京に赴き、東京でも親類の家に寓居して、それから京都に來たばかりで、世間の事抔を知つてゐる筈はなく、折角知つてゐる事も、それは大概ね書物の上から得た知識に過ぎない。ところが大久保は多く世間を渡つて來た。何れの時代でも醫者の學生は、普通の學生よりも一口に云へばにやけてゐる。大久保は熊本の醫學生であり、且つ病院の助手をも

勤めてゐた事であれば、最早熊本にゐる中に、一通り世間の味は嘗めてゐたものだ。それが東京に赴き、又た京都に來て、東本願寺の學僧の中に暮してゐたといふからして、予等の知らない世界を多く渡つて來た。

彼はなか〱辯舌が達者であつた。又た時としては奇想天外よりおつる如き事を云ひ出した。甚だ感激性にも富んで、空涙とは思へない涙さへ流した事もある。要するに彼はそれ程の腹黒ではなかつたが、なか〱才子であつた。智慧が多かつた乎、少かつた乎は疑問であるが、種々の事を目論む事は最も長じてゐた。予は悉くとは云はぬが、多くの點に於て、彼と共鳴する所が多かつた。彼は又た餓鬼大將の資格があり、その周圍に種々の人を集める事が上手であつた。或人の目から見れば、年齢の差から云ても、經驗の多少から云ても、予は或は當時に於ては彼の子分と見られてゐたかも知れない。併し正直に云へば、予は決して彼を首領抔と仰ぐ氣持はなかつた。予は如何なる場合にも人を子分としない迄も、自分が人の子分となる樣な事は出來なかつた。併し彼を味方に得て、大にバイブル・クラスに對抗する論陣を張つた。

九　同志社在學中の記憶（四）

◇最初の歸鄕と弟健次郎を同伴歸校

◇歸洛の船中に於ける議論

予が初めて歸鄕したのは、明治十一年の春であつたと思ふ。家を出た時には十四歳の少年であつたが、家に歸つた時には十六歳であつた。併し足掛け三年の後に家に歸つてみれば、熊本は十年の亂にて燒拂はれ、漸く所々に新築が出來上り、隨處に瓦礫狼藉の有樣が殘つてゐた。予の家は郊外にあつた爲、幸ひに厄をまぬかれたが、それでも戰爭の損害は、殆ど平等に受けてゐたらしかつた。歸鄕當時の予は恰も水の出鼻にて、恐くは予の生涯に於て、最も熱心なるキリスト教信者であつた時であらう。予は傳道といふ事を積極的にやらなかつたが、キリスト教に就いて間違つた事を云ふ人がある時には、遠慮會釋なくこれを辯駁し、又た予の信ずる所を説明した。父母は予に就いて如何に考へられたか、恐くは困つたものだ位には思つてゐたらうが、猶ほ一縷の望を予に囑してゐたに相違はない。されば父母は寧ろ外間の非難に對して、予を辯護する位置に立つた樣である。

或時父の社中の家に數輩集りたる際に、父に向て『耶蘇教抔を信ずる漢は放蕩者より餘程惡しくある。放蕩者は只だ酒色に身を委ねると云ふだけであるが、異端を信ずる者は、如何に品行方正でも、その害の及ぶ所は多くある』とて、頻りに予の事に就いて吾父を說得したといふ事であるが、予は彼等の無理解を遺憾とし、何れ他日は彼等がその事を悔悟するの期あるべしと考へ、唯だそれ等の事は聞き流してゐた。併し吾父にとつては、如何にも氣毒に考へた。父は全く予とその學友との間に板挾みになつてゐたやうだ。されば予は何れの日か父の心を安ぜんと思つてゐた。當時熊本には父等の仲間によつてたてられたる講習會があつて、何れも握飯を携へて相會した。而して種々の問題に就いて討論した。予は父に伴はれ、父の執、後には予の友となつた山田武甫氏の邸に赴き、終日板縁の上に坐つて、種々の愚論の取りやりを傍聽してゐた事を記憶してゐる。

兎も角も予は如何にして父母の同意を得たかを知らぬが、予の弟健次郎氏を伴つて同志社に行く事となつた。當時健次郎氏は數へ年の十一歲で、何故に父母が彼を手放して予に托したるか知らぬが、予から考へれば、父母は意見を予と異にしながらも、予を信じてゐたといふ事が判る。又た健次郎氏が既にその時に、予の父母の手に合はなかつたではあるまいかと思はるゝ所もある。手に合ないといふ事は、兄弟同樣であるが、合ない方法は餘程異つてゐたかと思はるゝ。予は何れかと云へば、

何事も豫定の計畫をなし、それが間違つて來た時に種々問題を生じ來つたが、弟は寧ろ其時々々の氣紛れにて問題を起したやうだ。一口に云へば、予には物事が豫定の如くさへ行けば、問題はないが、弟には豫定そのものがないから、動もすれば問題を起す傾きがあつたとでも云へよう歟。何れにしても予は弟を伴ひ、京都に赴く事となつた。而して父は予等兄弟を京都に赴かしむるを心細しと思つた乎、幸ひ父の友人白杉、古澤兩氏が東京に赴くから、神戸まで同行といふ事となつた。白杉氏は陸軍少佐を罷めて、當時は何事をしてゐたか知らないが、後には日本鐵道會社の重役となつた。古澤氏は熊本縣の官吏であつたが、當時は多分吾父等と共に役をやめてゐたゞらうと思ふ。予等は僕の如く熊本から長崎に赴き、飛脚船を待合せて長崎に數日滯泊したが、兩人は何時も予等兄弟を後に殘して他に出掛けた。予は無邪氣に彼等が歸へり來れば『貴君方は如何なる御用があつて出掛けられた乎、何處に行かれた乎』などと云つて質問した。これは全く予にとつては無邪氣であつたが、彼等は後にこれ程困つた事はないと人に語つたといふ事である。古澤氏はなか〳〵論客にて、予と年齢は父子の如き差があつたが、常に予を相手に議論をした。或朝出會ひ頭に『貴君方は昨夜のことを知つてゐる乎』と訊くから、『寢てゐたから知らない』と云つた。それを聽くや彼は勝ち誇りたる顏をもて『寢てゐた後の事さへわからぬのに、死んだ後の事がわかつてたまるものか』と、予に向つて予の

靈魂不滅說を否定せんと試み、それから一議論初めた事を記憶してゐる。

當時の汽船は固より三等にて、中甲板に莫蓙を敷き、そこに乘客群居してゐるのであつた。たまたま船中にて古澤氏と議論をなし、盛んにやつてゐた。予は當時携へたる『天道溯原』――アメリカのマルテンスが支那文にて著述したもので、耶蘇教證據論とでも云ふべきものであらう。――それを引出して盛に辯じ立てた。固より古澤氏はそれにやりこめられてゐたが、傍聽者も殆ど雲の如く相集り、中には『書物から引出して理窟を云へば、とてもかなはぬ』抔と云つて、予が小倅にて長者をやり込めるのを面憎しと思つたか、古澤氏に同情した乘客もあつた。當時予は『唐詩正聲』を携へて、頻りに愛讀してゐた。白杉氏はこれを見て不思議に思ひ『貴君は變な書物を讀んでゐる』抔といつて、此奴は如何にも變な奴だと云はんばかりの顏をしてゐた。

斯くて神戸から彼等と別れて、予等兄弟は京都に歸つた。後に古澤氏は熊本に歸へりて、父及び父の友人即ち實學黨の諸先生達に向ひ『貴君方は油斷をしてはいけない。久しからざる中に、貴君方はかの小倅共の爲にやりつけらるゝに相違はない』とて、頻りに心配相に話してゐたとの事である。その古澤氏の子は靜岡縣の警察署長、郡長、時としては沼津の市長などをなし、熊本に歸りて、熊本市の電氣局長をし、今は鹿兒島の電氣會社の重役をしてゐる。

十　同志社在學中の記憶（五）

◇十二年の夏休と岸和田行

◇同志社に於ける予の友人

元良勇次郎、家永豐吉、大西祝、山崎爲德、浮田和民の諸氏

十二年の夏は岸和田に赴く事となつた。岸和田の殿樣は岡部長職子とて洋行をなし、又た一時キリスト敎をも信じたる人にて、それが緣故であつた乎、否乎は知らぬが、同志社とは可成り關係があつた。予等は三十石船にて伏見から大阪に下り、而して岸和田迄步行して赴いた。予は健次郎氏を携へたれば、途中車に乘つた。斯くて或る一軒の家を借り、二十名内外の學生が自炊する事となつた。各各役目を擔當したが、人もあらうに予を炊事係の長に選任した。予はその職務を受くるや否や、每日南瓜の汁と決めて、それを日每に勵行した。一日、二日は人々も辛抱したが、日が經つに從つて、何れも不平を鳴して來た。併し予は『君等が予を炊事係りにした以上、予のやる事に從ふべきである』と平氣でゐた。幾日南瓜の汁が續いたか知らぬが、その中に家永豐吉氏がやつて來た。彼は予に一歲

の年長者で、年に不似合に世間の事を知つた者にて、彼は京都の新京極にて競賣りを見て、母の死するや家事を整理する爲に故郷柳川に歸り、人を集めて競賣りをやつた。故郷の人々は何事も知らぬ小忰が賣る事なれば、定めしよき掘出し物もあらんと集つた。それを家永は京都の新京極の競賣りの風をそのまゝ學んで、盛んにせり上げ、その爲に意外なる儲をした程の漢である。されば彼は予に代つて炊事係となり、その問題は落著した。予の弟は最も西瓜が好物であつた。或時西瓜を飽食した爲でもあらう。夜中頻りに腹痛を訴へた。予は半睡半醒の間にそれを聞き流してゐたが、翌朝起出でてみれば室は勿論、縁から庭の石まで、至る處に下痢の痕が殘つて、その掃除には頗る閉口した。これ程の事であれば、ねむさを忍んでも、早く起き出ればよかつたと後悔した。

又た或時友人兩三名申合せて、牛瀧といふ處を見物に行つた。山の奥で瀧があり、なか〳〵よき處であるが、扨晝飯を喰つていよ〳〵勘定といふ事になり、三人持合せの分を出してみても、猶ほ若干の不足があつた。今更ら如何ともする能はず、そのまゝ日暮れに近き迄其處に休んでゐたが、遂に同行の一人をしてその事情を申述べ、後から拂ふといふ事にて、漸くそこをのがれ出で來つた。

予が同志社に於て當時親しき友人といふは、杉田勇次郎、辻豐吉、木全視抔であつた。杉田勇次郎は攝州三田の者にて、彼は固より熊本バンドではなかつた。彼は後に元良勇次郎博士として心理學の

大家となつたが、同志社にゐる中から、スマイルスの『自助論』を愛讀し、同心交社の集りでは、いつも『自助論』から引張り出して、發明家の苦心談等を演說した。彼は神は無用のものを作らずといふ事にて、髮の毛もかることをせず、爪も伸びる丈は伸ばし、如何にも不思議の風采をしてゐた。彼は予よりも若干の年長者であつた。

辻豐吉は卽ち家永豐吉にて、彼は柳川の者にて、その父は聖堂等にて學び、維新の際には、大津縣の知事か何かになつた。漢學などは出來る漢であるらしかつた事は、その藏書をみても知らるゝ。其子豐吉氏は熊本洋學校に入る際から、英語には堪能であつたが、一見才子らしき風をして、彼がバイブル以外種々の英書を讀む力があるから、予にはその意味に於て益友であつた。

木全祝は卽ち後の大西祝博士で、彼は年齡に於て予の後輩であつたが、予は彼に當時から望を囑してゐた。

その他予に利益を與へたと思ふのは、山崎爲德、浮田和民の二氏であつた。山崎氏は後藤新平、齋藤實などと陸中水澤の出身にて、熊本人が維新の際東北に官遊したる關係から、彼も又た熊本洋學校に來つた。而して熊本洋學校から東大の前身開成學校に赴き、開成學校から又た同志社に轉じ來つた。彼にして若し東大にゐたならば、東大の誇りとなつたであらう。予は初めて彼から、カーライル、

マコーレー、エマースン等の名を聴き、彼が所持してゐるカーライル文集などを借覧した。又た同志社にて『唐宋八家文』を所持したのは、彼のみであつたから、予は彼からそれを借覧した。彼の漢學の力は、左程ではなかつた。彼は蘇家父子、老蘇、大蘇、小蘇と云ふべきを、大蘇、中蘇、小蘇と云つてゐた。大蘇は即ち蘇老泉、中蘇は即ち蘇東坡、小蘇はその弟蘇潁濱である。又た彼は、頼山陽の阿辰を哭するといふ詩を英譯して、それを女子とした。阿辰は即ち辰蔵にて、固より男である。此の如き事を云へば、彼の漢學の程度もたいしたものでもなかつたが、兎に角彼は當時の同志社仲間では、英文學にも漢籍にも、兩つながら卓越してゐると認められてゐた。

又たその外に浮田和民氏がある。浮田氏は熊本洋學校から予も知つてゐた。予が最初に洋學校に入つた時に、浮田氏は既に上級生としてゐた。予は同志社にて浮田氏からバンヤンの『ピルグリムス・プログレッス』などの譯讀を授つた。それよりも予に有益であつた事は、氏が頻りに馬琴の『八犬傳』を予に推奬してきかせた事である。それと同時に福澤諭吉氏の文章を予に紹介した事である。予は子供の時から『太閤記』、『三國志』、『呉越軍談』、『漢楚軍談』等の軍書類はよく讀んだが、小說、艸草紙の類には目をふれなかつた。然るに浮田氏より馬琴を紹介せられ、又たやがて大久保氏から爲永春水の『イロハ文庫』『梅暦』なども紹介せられ、一通りこれを讀んだ。予がその方面の知識は、全く同志社にて

得たるものであつた。其後は殆どそれ等のものに目をふるゝ機會がなかつた。併し予は馬琴の文章とか、福澤氏の文章を讀みは讀んだが、予は寧ろ自ら選擇したる福地氏の論文を、より多く讀んだかと思ふ。その他何も當時の出版したるものは、何によらず手當り次第讀んでゐた。されば日々の課業にはあまり勉强しなかつたとするも、讀書には隨分骨折つた事は、云ふ迄もない。

十一　基督教に對する懷疑と予

予の一生の中に於て、是れと云ふべき程の學校教育を受けた事は無いが、併しその中に於て、若し有りとすれば、兼坂先生の塾に於ける幼年時代の教育と、同志社に於ける少年時代の教育とを擧げねばなるまい。

兼坂先生の塾に於て、予は平民主義の何者たる乎を體得したる心持がした。

同志社に於ては、予は人格主義の何者たる乎を體得したる心持がした。一は兼坂先生に負ふ所であり、他は新島先生に負ふ所である。予の眼中に於ては、兩先生必ずしも同等とは思はない。併し最初に予をして、人間は階級とか、門閥とか云ふものに賴らず、赤裸々の自力に賴らねばならぬと云ふ事

を知らせたのは、兼坂先生であり。如何なる仕事も恥しい事は無く、恥しい事は仕事をせずして、ぶら〲遊んでゐると云ふ事であると知らせたのも、兼坂先生である。

而して人間は唯だ生活するばかりでなく、更により大なる目的の爲に生活するものであつて、人間の生活は畢竟、高尚なる奉仕の爲にするものであり、人間の價値は奉仕する心の純潔と熱誠とに依つて、定まるものであると云ふ事を教へたのは、新島先生である。

以上は必ずしも兩先生の口づから授けられたといふのではない。併し自然に予をして斯く感受せしめ、斯く覺醒せしめたのである。家庭に於ける父母の教育は申す迄もない。

話元に還へる。明治十一年から十二年にかけては、予も當時學生間に流行した腦病とやらを患ふことゝなつた。それには種々の理由がある。その主なる理由の一は、予は新島先生を信じ、先生に依つて基督教を信じたが、併し齡と共に基督教に對する疑問がむら〲と起つて來た。予はそれを如何にして押しつけん乎と心配した。予は洗禮は受けたが、基督教の主體たる基督に就いては、何等親しむ心が起らなかつた。基督に親しむ心がなくして、基督教信者と云ふは不思議の樣であるが、事實その通りであつた。

斯くて學校の課程として、『基督教辯證論』を讀むにつけて、愈々基督教に對する疑が多くなつた。

その疑を刺戟したる一は、新島先生以外の宣教師、及び主なる基督教信者に對する反感も加つてゐた事は云ふ迄も無い。予は彼等と別に何等交渉はなかつたが、彼等は予の目から見れば、基督教信者らしき——尠くとも予が標準とする——理想に相當せざる事は、予に於て多大の遺憾であつた。

彼や是やで基督教に對する胸中の煩悶が出で來つた。それから何につけ彼につけ、感傷的の氣分になつて來た。その中でも死てふ問題が、最も多く予を惱ました。予は人と別れると云ふ事が、子供の時から非常に嫌ひであつた。所謂る離別の哀愁と云ふ言葉は、予にとつては詩歌に詠ずるよりも、より痛切であつた。一寸親しき友達と別れる事さへ、幾日も樂しくなかつたから、予が常にホームシックに惱まされた事も、一通りでなかつた。

親しく相接してゐる際には、左程でもなかつたが、予の心の底には、常に吾が父母が在つた。何時かは永遠の死で父母と相別れねばならぬと云ふ事を煩悶した。死の煩悶と云ふ事は己れの死のみでなく、凡ての死に就いてゞあつた。彼や是やで精神の壓迫から、自然に鬱陶しき氣分となり、その結果が當時で稱する所謂る腦病となつて來た。

予も人並に毎夜必ず祈禱をして居たが、如何なる事を祈つた乎と云ふ事を、祈禱した後にそれを書き付けたものがあつた。今から見れば、譯もたわいも無きものであるが、その祈禱の最も主なる一は

『如何にすれば神を神じ、神と近付く事が出來る乎』と云ふ事であつた。併し如何に祈禱をしても、予の心は寧ろ神より遠ざかつて行つた。併しこれは世間で云ふやうに神より遠ざかつたのではない。予は別に何等の誘惑も受けず、所謂る飲酒喫煙は愚か、その他の事に於ても、普通のクリスチャンの踏む可き事を踏み來つたので、それ等の點では、別に窮屈も不自由も感じなかつた。

神より遠ざかつたといふ事は、寧ろ正統なる――オーソドックス――基督教徒たる事に、困難を感じたからであつた。

十二　同志社退學の始末（一）

◇新聞記者志望と『七一雜報』編輯助手
◇村上作夫先生の漢籍講義と予
◇同志社宣教師に對する予の態度

前にも記したる如く、予が新聞記者たらんとする決心は、既に明治十年頃から定つてゐたから、その爲には人知れず隨分骨を折り、勉强もした。當事新聞記者などにならんと云ふ事を、他に語つたと

て、誰も相手にする者無きは勿論故、予自らも語る必要を感じなかつたが、予はそろ〳〵、その時分から大阪の新聞、若くは神戸にて毎週發行する『七一雜報』てふ雜誌等に投書を試みた。それは何時頃であつた乎、はつきり覺えてゐないが、少くとも明治十一年、若くは十二三年、即ち予が十六、七、八歳の頃であつたらうと思ふ。

斯くてぶら〳〵してゐても致方はないと云ふ事にて、新島先生と相談の上、愈ゝ神戸なる『七一雜報』の編輯を手傳ふ事となり、先生の紹介にてそれに赴いた。それは明治十二年の春であつたかと思ふ。『七一雜報』は前に申す通り、毎週一回の雜誌にて、當時宣教師O・H・ギューリック氏(O. H. Gulick)が引受けて居た。その印刷人は今村謙吉氏、その編輯者は村上俊吉氏であつたと覺えて居る。

予は取敢へず今村氏の宅に寄留する事となり、其處よりギューリック氏の宅なる編輯局に通ふこととなつた。當時の神戸は纔か海岸通りに町があつたばかりで、山手通りは、半ば野原や田畑であつた。今村氏の宅は、中山手通であつたと覺えてゐるが、其處から諏訪山の麓邊迄は、散歩するには極めて適當であつた。

予は一日か二日ギューリック氏の許に出掛けて、極めて平凡なる飜譯を手傳うたが、餘りに莫迦莫迦しいから嫌氣がさし、早速京都に立還つてしまつた。予は幾何の日子を神戸に送つた乎を記憶しな

い。されど京都にて予を送別の際に撮りたる寫眞が、未だ出來上らない以前に、京都に歸つて來た程であれば、極めて短時日であつた事が判る。或朝、予が同志社の食堂に出て、食卓に就いてゐるのを友達共が見て『幽靈ではないか』と驚いた程であつた。

予は元來尻の落著かない漢ではなかつたが、その時だけは除外例であつた。今更ら考ふれば、新島先生に對しては申譯がなかつたが、當時予は先生に向つて何等釋明する所なく、勝手次第に行動した事は、若氣の至りとは云ひながら、寔に慚愧に堪へぬ次第だ。

併し予の新聞癖は愈々嵩じて、密かに當時關西に於いて有力なる新聞である『大阪日報』に投書をした。もとより匿名であれば誰も氣づくものもなかつたが、たま／＼それが掲載されたのを見た時には、予は獨り欣然として、鬼の首でも取つた思ひをした。

當時予に新たなる光明を與へたものがある。それは村上作夫氏の漢籍の講義である。それ迄も同志社には漢籍の先生が居た樣でもあつたが、別に氣にもかけなかつた。然るに十年戰爭後、豐後森の人にて、村上作夫なる人がやつて來た。この人がその門人や同輩を引連れて、同志社の附近に『叡麓舍』なる私塾を開き、而して同氏が又た同志社の漢學の教師となつた。この人は備中山田方谷翁の門人で、陽明學をやつたと云ふ事であるが、兎に角聲がよく、辯舌は更によかつた。予等は氏より『文章

軌範』、『史記』等の講義を澤山でもなく、一週に一回か二回聽いたのであらう。氏は金聖歎の『才子古文』を金科玉條として、その中の若干を拔萃し、それを活字に附して學生に頒つ事とし、それを講じ、時としてはそれを書取らしめた。同時に作文の題目を課し、それを添削して呉れた。この人は當時漸く三十を出た位であつたらう。なか／＼氣焔もあり、自ら運ぶところの文章はそれ程とも思はなかつたが、文章の評論にかけては、頗る明快、痛切の感を與へた。尠く共予は氏に依つて、作文に於る新たなる光明を與へられたる感じがした。

予は何時頃よりであつた歟、同志社を出て郊外の田中村なる、或る水車の二階を借り、其處に大久保、家永等と合宿し、同志の者は暇を偸んで其處に集り、恰も其處が同志社に於ける異分子の一の倶樂部となつてゐた。

予はその時分水車に對して大聲を發し、『三國志』などを朗讀するやら、或は演説の眞似事をするやら、兎も角も演説の學習と云ふではないが、自分の思うたる事だけは、人の前に滯りなく述べ得るだけの功夫を凝した。その中に大久保や、家永や、その他友人共は同志社を去り、東京に赴いたから、田中村の寓居も解散して、予は再び同志社の寄宿舍に歸つた。これは明治十二年の夏過であつたらうと思ふ。

要するに予の仲間である、謂はば同志社の異分子は、大概同志社を去り、殘る者は予と若干の友人のみであつた。而して明治十二年には、バイブル・クラスなる上級生も大概卒業の上、所々方々に傳道に赴き、學校に止るものは、その中の小數であつたかと思ふ。予も明治十二年の下半から、十三年の初にかけては、久振りに從順なる同志社の學生となつた。當時は上級生として、聊か羽振りを利かして居た樣に覺えて居る。併し當時に於ても、予が宣教師に對する態度は、今日から考へても、餘り穩かではなかつたと思ふ。從つて宣教師も亦た予に對する態度が同樣であつたかも知れぬ。或日同志社教師の中にて、首座の教師の夫人が、突然寄宿舍なる予の室を訪れた。而して向ふから種々の事を話しかけたが、予は沈默して一言も發しなかつた。彼女もこれには興をさましたと見え、新島先生にその事を訴へ出た相だが、先生は如何にそれを聽いてゐた乎、先生夫人の語る所に依れば、

「襄（先生の事）も德富さんは近頃餘程攘夷熱が昂つて來た樣だと申て居た。」

と云ふ事である。別に攘夷熱と云ふでもないが、宣教師の妻君などが、學生の室に無遠慮に立寄つて見舞ふ事などは、餘計の事と考へて、相手にしなかつたまでゞある。

話は少し前に溯るが、予は同志社の演說會などにても、新島先生夫人などの事を、稠人廣座の前で、大聲疾呼して攻擊したこともあつた。別に惡意があるわけではなかつたが、夫人の風采態度が、

先生の爲に信用を厚くする所以でないと感じたからであつて、今更ら考へれば、如何に少年客氣の時とは云へ、先生に對して慚汗背に洽ねきを覺えざるを得ない。併し予は明治二十三年一月二十三日、先生の大磯に於て永眠せらるゝや、直にその傍にて、新島先生夫人の手を握り、『是迄は兎も角も、これからは貴女を先生同樣と思ふから、今後は何事も私に御賴り下され』と云ひ、不肖ながら今日迄その心を持ち續けて居る。(夫人歿後は、其の遺言通りに、予が夫人の墓銘を書した。)

十三　同志社退學の始末(二)

◇クラス合併問題の紛糾
◇新島先生自らを譲たる
◇予と同志社退學の決意

予は何故に同志社を去つた乎。趣味から云つても、氣分から云つても、何等予と同志社と調和を保つものはない。但だ予が同志社に居たのは、新島先生に傾倒して居た爲である。予は最初に逢うた時より先生に傾倒して居た。此人は實に立派な人格者であると思つた。種々の事情が加はり、事件が伴

つて來た。併しその確信は愈々一層深くなつた。當時先生は予を如何なる程度に認めたか知らぬけれ共、予は先生に全き價値を與へてゐた。それが予の足を同志社に引止めた所以であつた。併し予の新聞記者たらんと欲する心は、愈々旺盛となつて、新聞記者の學校は、唯だ新聞社あるのみと考へた。そこで大なる記者となる爲には、大なる新聞社に入り、その坩堝の中にて煮られ、陶冶されて、ものになるより外はないと考へた。又た予の友人共は、東京から頻りに來れと招いた。自ら省て見れば、京都には與に語る者が無かつたとは云はぬが、甚だ尠なかつた。併し明治十三年の六月上旬は、予も曲りなりにも、同志社の普通科を卒業するからして、それ迄は辛抱して踏み止る事となつてゐた。

然るに十二年の末か、十三年の初頃でもあつたらう。一の問題が持上つた。それは學校の都合にて甲と乙との兩級を合併する事となつた。この合併に於て、乙は得をしたが、乙の得をするだけ甲は損をした。上級生と下級生と合併すれば、上級生が不平を云ふのは、知れ切つた事である。その不平が昂じて、愈々騷が起つた。これは予には關係がないが、予の友人新島公義その他の面々が、被害派であつて、予は義俠心と云ふでもないが、その後押しをした。

種々の關係から予も深入りして、一方では學校の當局者、他方では予及び被害派の面々が相ひ對立する事となり、事は愈々面倒となつた。學校の當局者中には、後に横濱市長、若くは朝鮮銀行總裁となつた市原盛宏氏等もあつた。事は益々面倒となつて、愁訴となり、遂には申合せて退校せんとする騒ぎとなつた。然るに此に意外の事が出で來つた。

毎朝學生を講堂に集めて、五分間ばかり訓話と祈禱をなす會がある。或朝その會に予等も例に依て出席したが、新島先生がステッキの樣なる三尺許りの木片を携へ來つたから、不思議の事と思つてゐた。然るに先生は軈て立上り、滿場の教師及び學生に向つて、

「今回の騒ぎの出來たのも、畢竟予の不德の致す所と信ずるから、謝罪の爲に自分は諸君の前にて自分を窘める事とする」

とて、その木片を擧げて自ら鞭たれた。餘りの事にて滿場呆れ返つてゐたが、やがてその木片は折れて三つとなつた。予等を初め人々先生の手に縋り、その袖を引き、漸く先生を座に就かしめたが、その時先生は、

吉野山花咲く頃の朝な／＼
心にかゝる峰の白雲

なる古歌を誦し、自分は常に此の古歌の如く、學校の事も、諸君の事も心に掛けてゐるが、不敏にして此心が未だ徹底しないと云はれ、これに就いては被害級の面々、今更ら恐縮の至りに堪へず、やがては新島公義氏がその歌を大書し、その歌の傍に不平黨の面々撮影し、これにて段落を告ぐる事となつた。

併し此事あつてより以來、予は何となく氣拙くなり、最早同志社を去る決心をした。當時予は同志と與に同志社を去て、今出川邊に下宿をしてゐたが、そこが又た不平黨の巣窟となつた。

最初は同志社を去らんとする者、吾も〳〵とあつたが、愈よ去るといふ場合になつては、新島先生及び學校當局の說諭に逢つて、漸次に減少した。新島公義氏は新島先生の弟の養子であつて、先生が米國に亡命したる後は、先生の弟がその家を嗣ぎ、弟の跡を又た公義氏が養子として家を嗣ぎ、氏から見れば先生は義理ある伯父であつた。されば公義氏が同志社を去る事を、先生は斷じて許さなかつた。公義氏は同志社を去つて慶應義塾に行くと云つたが、『左樣の事は斷じてならぬ』と止められた。そこで公義氏は板挾みとなつて『此上は致方ない。切腹でもする所であるが、當世ではそれも出來ぬ。せめて坊主になつて諸君に謝罪する』と申出た。併し予は公義氏を坊主にしたとて、何等得る所がないから、それを止め、同志の面々と予の下宿に集り、珍らしく鯛を買つて鯛喰會を催した。鯛

喰は退校に通ずるからだ。愈ゝ同志社を去る場合には、予の同級生河邊久治及び次の級なる湯淺吉郎二氏であつた。猶ほ津田仙君の長子元親氏もそれであつたが、同氏は新島先生が仙君より同氏を托されてゐるからとて、強ひて止められたから、思ひ止る事となつた。

十四　上京に際する新島先生の溫情

◇新島先生の人物

予等は凡ゆる所持品、机から食器まで悉くこれを當時古道具屋をしてゐた大澤善助氏に賣拂つた。予は實は旅費に困つたから、公義君を介して新島先生にその借用を申込んだが、流石の先生もその時だけは立腹し、

『德富君の面は千枚張りである乎。予を踏みつけた上に、旅費まで借りて出掛けんとするは、餘りに蟲がいゝ話ではない乎』

と云はれたと聞いたが、予は先生を人間よりも神様に幾き人と思つたから、勝手に右の如き我儘なる相談を持込んだのである。

予は同志社を去り、東京に出立する前日、先生の宅を訪うて、その諒解を得、且つ先生より寫眞を受取つたが、此の寫眞の裏には、

『大人とならんと欲せば、自ら大人と思ふ勿れ。
德富猪一郎君　　新島襄』

と書いてあつた。『大人とならんと欲せば、自ら大人と思へ』と云ふ事が普通であるが『思ふ勿れ』と云ふ事は、何故であらう。先生は予が餘程自惚れでもしてゐるかの如く考へ、予を誡められたものであらう。

扨愈ゝ出發の日となり、今出川の寓居を出で、寺町を眞直に、丸太町上る新島先生の宅に至つた。その時には見送りの友人共が相續き、先生宅の寺町に面したる門口から玄關先まで、人が一杯であつた様に覺えてゐる。予等は胸に一物肩には荷物といふ氣持で、各々持物を前後に負ひ、先生の宅に暇乞に出掛けたらば、『暫く上れ』といふ事にて、餘儀なく荷物を下し、上り込んだところ、先生は又ぞろ東京行の危險多きを告げ、引止める口氣を漏された。特に予の同級生河邊に向つては『飛んで火に入る夏の蟲とは、貴君の事である』抔と頻りにその不可を說かれた。予は河邊に代つて何かと先生に答へ、その爲に時間も過ぎ、最早晝時刻に近まつたから、兎も角も別を告げ、又た餘り時間がとれ

たから、見送りの連中にも先生の門口にて相別れ、其處から予、河邊、湯淺三人、それに公義君が相送つて、三條橋に來たが、最早や晝の時刻も過ぎたから、晝食を喰つて別れようと、橋の袂なる一樓に登り、そこで晝飯を食つたが、愈々勘定となつた時、公義君がこれは予に任せて吳れと云ふから、不思議に思つて『何故乎』と云へば、公義君が申す樣、

『實は君等が去る時、伯父が云ふには、せめて晝飯でも馳走してやれと云つて、予に若干金を渡してゐる。これは予が拂ふのではない。伯父が拂ふのだ』

と云ふ事であつて、今更らながら予も『何を云つても先生の方が予等よりも一枚上である』と、覺えず頭が下つた。

予は同志社に在學中、未だ一回も新島先生其人に對して、不平を抱いた事は無つた。正直にいへば予は新島先生に於て先生らしき先生を見出したのであつた。先生は政治とか經濟とか云ふ點よりも寧ろ科學とか數學とか機械學とか云ふ方に長じて居られた。併し何れかと云へば先生は頭の人でなく、心の人であつた。先生は山をも動かす信仰を有つて居り、石をも泣かせる情熱を有つて居た。人間であれば何人も缺點がある。先生は決して缺點なしとはいはぬが、實に日本男兒の立派なる標本であつた。予は自ら先生の如き人に會うたのを幸福とするものである。予は自ら先生を訪ねて、京都に赴い

たことを、予の一生涯に於て、最も幸福なる一と信じてゐる。

莵　道　（明治十二年　十七歳）

斜陽如畫照秋川。　古廟寂寥鳴暮鵑。
唯有鳳凰堂畔月。　清光不改一千年。

京　都　（明治十三年　十八歳）

春歸春去遂如何。　五歲星霜容易過。
恥汝東山三十六。　厚顏依舊柔情多。

新嶋先生、誦「芳野山花在久頃乃朝奈朝奈心爾加可留峰乃白雲」之歌、全校生徒朝會之席上、自鞭。鞭折而爲三片。予賦一詩贈。

春入櫻花吉野岑。　朝朝恐見白雲往。
先生爲此緣何事。　欲問還思淚且深。

初夏即事

菜花花謝藤花開。　野色山光詩興催。
四月鴨河河畔路。　柳絲濃處送人來。

偶　成

摩氏文章圖使豪、　培公議論亦超高。
併衡贈吾是何意、　欲問君意頭更搔。
憑殺今日輕薄徒、　珍重奉持比范袍。
一誦韓柳何足屑、　文思全滴與時流別。
請見他年翰墨場、　走破倒鯨筆如鐵。

友人某、携贈馬高雷、培根兩文集、本賦。

予は同志社に於て、基督教よりも、寧ろ其の傳道心を授けられた。而して此の傳道心は、今も尙ほ當年の情熱を剩してゐる。六十三歲の首に著作して、之を天下に公布したる『國民小訓』も、十四歲の大晦日の夜、奈良の市中に配布したる『眞の神を知るの近道』も、其物は異るも、其の傳道の精神は同一である。

高蹈や、獨善は予の望みでない。能はずと雖も志は兼濟に存する。

（『奈良に於て迎へたる予が十五歲の新年』中より抄錄）

第四章　歸郷と大江義塾の創立

一　東京に於ける半年の生活 (一)

◇福地櫻癡居士に面會出來ず

◇津田仙氏訪問談

予は明治十三年五月京都から東京に赴き、同じく十一月東京から熊本に歸つた。予が在京の時間は五ケ月に過ぎず。その中にても旅行杯を差引けば、在京の時間は正味三ケ月乃至四ケ月であつたらうか。然も此の半ケ年に滿たざる予の漂泊生活は、予の一生にとつて、尠からざる經驗ともなり、教育ともなつた。これを悉く書けば、數限りもないが、今思ひ出すに從ひ、その若干を物語るであらう。

扨三條大橋にて新島公義氏に別れた予等同行三人――卽ち河邊久治、湯淺吉郎――は、相伴うて大津に至り、それより船にて琵琶湖を渡り、同夜は草津驛に一宿した。それから月並的に五十三次を足

駄を履いて歩いて行つたが、その中に一寸記し置くべき事が一二ある。

五月の末ではあるし、暑さは暑し、渇くに任せて水を飲んだから、赤坂驛の鯉屋と云ふ所に泊つた夜、一寸したる霍亂を起し、その爲に思はず布團に小間物屋をぶちまけた。予はそれを旅館に斷るべきであつたが、何だか氣恥しくて斷わり兼ね、宿の女中が知らぬ間に、吐き出したる儘、布團をくるくる疊んで、素知らぬ顏をして出發した。これ丈は今でも氣にかゝつてゐるから、殊更に此に斷つて置く。

又たその時分同志社では「日曜には遠足するものではない」といふ事を敎へられてゐたから「日曜に旅行抔をするは如何であらう？」といふ評議をなし、先づ二三里位は差支へなからうといふ事に相談を決め、掛川に投宿したのは、午前十時頃であつた。これには旅館も面喰つてゐた樣だが、お客とあれば朝にせよ、晩にせよ、拒むべきではなかつたから、泊めては呉れたが、予等も午前十時に旅館に泊り、可成り手持ち無沙汰であつた事を覺えて居る。

當時は二十錢は先づ上等の部に屬する宿料であつたから、茶代は十錢か十五錢のものであつたらう。予等は二三日茶代を儉約し、大磯に泊つた時に五十錢の茶代を奮發したが、その時には大なる鉢に鮨を山程出し、三人ではとても喰ひ盡せなかつた。

此の如く三人の轍次、喜多は東京に著し、先づ下谷練塀町なる友人家永豐吉氏の下宿に赴いた。斯くて湯淺氏はその郷里安中に歸つたが、ゆくほどもなく又た練塀町の下宿を訪れ來つたから、

『これから何處の學校に行く乎』

と訊いたら、湯淺は濟まない顔をして、

『實は安中に歸つたが、兄貴から散々叱かられた。「お前は徳富君に欺まされて同志社を飛び出す抔とは、怪しからぬ話である。一刻も速に謝罪して、早々復校せよ。」との事で、これから又た同志社に歸る積りである』

と云つた。河邊は初から學資を持たず、實は予が何とか世話を焼く積りであつたが、兎に角これは予の從兄藤島正健の英語の教師として、其處に落著く事となつた。

扨予は如何になすべき乎。初から目指す場所は日日新聞發行所の日報社であり、人はその社長吾曹子福地源一郎氏である。予は取敢へず唯だ貧乏らしき名刺を懐にして、日報社に赴き、福地氏に面會を求めた。當時の日報社は銀座第一の吳服店『ゑびす屋』の跡を引受けたる、堂々たる建築であつて、その入口には『太政官記事印行御用』の看板を掛け、田舎者ではその敷居を踰るさへ氣遲れする程であつた。

固より薄汚き青年が面會を求めたとて、取次がるべきでもなく、留守とか、不在とか、一向相手にして呉れず。然らば自宅にと考へ、不忍池ノ端なる茅町に、福地氏の邸を訪問したが、これも何時も不在で、双方の間を足駄をガラ〳〵踏み鳴し、幾度往復した乎、今は數へ切れぬ程であつた。

當時家永は島田重禮先生の双桂學舍に通學し、漢籍を學んでゐたが、彼は當時に於て、英學では最早一人立ちが出來る程の力も出來たれば、漢籍の方は予が家永に敎へ、英學の方は家永が予に敎へるといふ樣に、互に交換してゐた。予は百計盡きて、新島先生の友人であり、且つ又た予の父の知人である津田仙氏を、麻布三ノ橋なる學農社に訪うた。

仙氏は顏に痘痕があり、擧動も如何にも眞率と云はん乎、輕易と云はん乎、演說などをして、面白き所に至れば、聽衆よりも眞つ先に當人が笑ひ出すと云ふ程の人にて、極めて慝の少き人の樣であつた。予が訪問した時に、氏は先づ予に向つて、

『歩いて來た乎、車で來た乎』

と問うたから、予は、

『固より歩行である』と答へた。下谷練塀町から麻布三ノ橋迄炎天の歩行は可成りこたへたけれ共、同志社足掛け五年の生活は、遠足、山登り等を、半ば課程の如く心得てゐたから、別段困りもしなか

つた。それから津田氏は予が著てゐた夏羽織を指し、

『それは君の物乎』

と訊いたから、

『いや、これは友人から借受けたものである』と答へた。

これは正直の處、家永のを借受けたのであつて、固より生れて初めて夏羽織を著けたのであるから、津田氏の眼から見れば、不恰好に見えたのは當然であつた。實は餘り粗服して福地氏を訪ひ、その爲に面會も出來なかつたのであらうと考へたから、その日に限つて借著したものであつた。それから予は志を述べ、

『何とか福地氏に面會の事を取計らひ下され度し』と頼んだ。ところが津田氏は、

『それは出來ぬ事もないが、面會したとて君が新聞記者となるに、君を弟子に取るとか、君が弟子入りするとか云ふ樣の事のあるべき樣もない。されば何れにしても貴君の目的を達する事は出來まい』

との事であつたから、此上頼み込むといふ事も面白からず、その儘引下つた。予はせめて福地氏の顔でも見度きものと思うたが、その時分は福地氏も東京府會議員の一人であつたから、當時は山下町なる東京府廳に赴き、府會を傍聴して、初めて――遠目ではあるが――福地氏を見た。併し何やら役

者と云ふ程でもないが、講釋師か何かの樣に見受けられ、これが爲に輕蔑を感じたと云ふ程ではないが、予の熱心を喚るわけには參らなかつた。

二　東京に於ける半年の生活（二）

◇大久保眞次郎と井上侯、沼間守一氏を訪ふ

◇植村牧師と予及び新島先生

當時予等の仲間の先達とも云ふべき大久保眞次郎は、東京大阪の間を往來し、貿易一新論とか、何とかを唱へ、頻りに航海運輸の必要を論じ、何やら自ら汽船會社にても起さんと目論んでゐた。尤も大久保の子分とも云ふべき醫科大學の退學生外一二名は、大阪に於て既に船乘りとなり、瀨戸內海航海の小蒸汽の船長となつてゐた程であるから、大久保は海運業などは、手に唾して出來るものと思つたのであらう。

予は初より實業などといふ事は何等興味を持たず、固より自身が左樣なる事に關係を持つと云ふ樣の事は、露程も考へてゐなかつたが、併し大久保がやると云ふ事は別に止めもしなかつた。そは止め

たとて止る樣な訣でない事を、知つてゐたからである。

但だ彼が此の問題で奔走する時に、予も彼と與にと云はんよりも、彼の後につついて、種々の人を訪問した。其中でも覺えてゐるのは、沼間守一氏と井上侯爵である。當時沼間氏は民間に於て政論家としての大立物であつた。彼は維新の際には幕府方であつて、善く闘ひ、それが爲に板垣伯の認識する所となり、維新後土佐に聘せられたが、やがて元老院書記官となり酒田縣に於る三島通庸の暴政を檢舉し、大いに直名を得た。斯くて官を辭して嚶鳴社の領袖の一人となり、柳橋萬八樓邊に於て盛んに演說をなして居た。而して『横濱毎日新聞』を東京に持出し、此れを『東京横濱毎日新聞』と改題し、彼がその社長となつて、日報社の福地氏と對抗した。予は大久保と與に氏を今川小路の家に訪ねたが、大久保が諄々として航海會社を設くるの必要を說いた時に、氏は事も無げに、

『そは三菱にでも行つて相談したらばよからう』と撥ねつけた。一見した所、精悍の氣溢れて居た樣に覺えてゐる。

井上侯は工部卿として、赤坂靈南坂の上に居た。初はもちと立派な人であらうと思つたが、逢つて見れば、如何にも英雄豪傑らしからぬ容貌であつた。顏は傷やら、皺やら、痘痕やらわからず。聲は鹽辛聲にて、一向引立たなかつたが、併し話を聽いてゐる中に、何んとなく引きつけるものがあつた

様だ。予は一見して『此人は何やら偉いものを持つてゐる』と云ふ様に感じたが、此の感は遂に侯の世を終る迄持ち續け、今も猶ほ持續けてゐる。侯は大久保の話よりも、寧ろその同行したる二人の青年にインテレストを見出した様である。その中で最も見出されたのは家永であつた。若し家永が今少し俐巧に立廻つたならば、彼は尠くとも或る期間だけは、井上侯の寵兒となつたかも知れない。

右の様な次第で、初から予は學校に入る目的でもなく、さりとて目的としたる福地氏の下に記者となる事は行はれず、唯だ其處に一日、彼處に一日と云ふ様に送つてゐたが、夏は家永と與に武州金澤、鎌倉、江ノ島等に赴き、江ノ島には數日滯留して旅費に窮し、家永が東京に旅費調達に赴き、その歸る迄、予は人質同様、江ノ島岩本樓に滯在してゐた。處が大久保が大阪から頻りに『一寸來い』と云ふから『それでは』と家永と伴ひ、又た東海道を今度は草鞋がけにて大阪に下つた。何の爲に大久保が予等兩人を呼寄せたか知らぬが、矢張り航海會社一件の事であつたらうと思ふ。

斯くて再び今度は三人連れ立つて、東海道を上り、恰度岩淵に來た時に、恰も八月十九日で、登山の季節であつたから、此の機會に富士登りもよからうと云ふ事で、東海道を岩淵から折れて大宮に至り登山し、須走りに下り、足柄を越えて小田原を經、東京に入つたのは、八月二十三日であつた。その時に予は何物も持たず、手に破傘一箇を携へてゐたが、これもつきらぬとて、新橋停車場に降り、

浪華橋の欄干から、それを投げ捨てた事を覺えてゐる。

大久保が航海會社に熱中すると共に、予のそれに對する不熱心は、愈ゝ明白となり、確實となり、やがては『君は君、僕は僕』と云ふ事にて、大久保は家永と提携し、予は寧ろ獨立して勉強をしてゐた。

予は同志社を去る時に、新島先生より、

『貴君は教會には出らるゝであらう』と念を押されたから、

『勿論出ます』と答へた。予はその約束に從ひ、著京匆々下谷に教會が講義所を持つてゐる植村正久氏を訪うた。然るに植村氏は如何にもぶつきら棒の漢にて、新島先生と相對したる氣持などは、露程も出で來らず、とても斯る漢の話などを聽いたとて、役にも立たず、面白くもあるまいと思ひ、その儘斷念してしまつた。植村氏は一種の人物にて、予が斯く思つたのは、後から考へて見れば、皮相の見であつたかも知れない。それは兎も角も、爾來予が教會に行かぬとて、新島先生は予を『嘘つき』などと云つて、正面から攻撃してゐた。

予は同志社には未練がなかつたが、先生にはあつたから、富士山に登つた時などにも、その事を先生に報道してやつた。それで予と先生との關係は、不卽不離、謂はゞうやむやの間に在つた。

三　東京に於ける半年の生活（三）

◇『内外交際新誌』を手傳ふ
◇岡松甕谷先生の紹成書院に學ぶ
◇東京にて知れる阿部無佛、中江兆民、重野先生、立花小一郎の諸氏

當時予は神田神保町に下宿してゐたが、外務省に出勤しつゝあり、特に井上侯から寵せられてゐた水上珍亮なる同縣の年長者は、予より英學を習ふべく、自ら居を予の下宿に移して來た。予の英學の力なるものは、頗る怪しかつたが、併し水上氏の爲にフリーマンの『歐洲近世略史』を講じてゐた。而してその時分から熊本縣人の在京親睦會にも出席し、その幹事の役目を勤めつゝあつた、今日の阿部無佛翁、即ち當時の神山充家氏等とも相知るに至つた。

その中に當時予の叔父江口高廉は、その子高寛、高達、高邦等、及びその子の友人等と相謀り、『内外交際新誌』と云ふ雜誌を發行しつゝあつたから、予も廔々にはそれを手傳ふこととした。予の仕事は、横濱外字新聞に出てゐる外國電報を飜譯するやら、それに就いての短評を書くやらであつたが、

叔父はよく予の書いたものを添削し、餘りに添削し過ぎて、予は内々その眞意を沒却された如く感じ、不平であつた事も尠くなかつた。

斯る際に予が同郷の友人共の中には、只今衆議院の場所である内幸町、當時三條公の屋敷跡に、岡松甕谷先生が紹成書院を建て、その中に寄宿した者もあり。又た有名なる佛蘭西學者中江篤介氏等も、自ら一方では佛學塾の主でありながら、その門に學びつゝある事を聞き知つたから、予も神田邊に下宿をするよりも、總ての事が都合がいゝから、先づ下宿を變へるといふ積りで、岡松先生の外塾に入る事となつた。例に依つて先生の講義にもろく〳〵出席しなかつた。先生は帆足萬里の高足門人にて、漢學にては當時その類少しと云ふ大家であつた。又た帆足萬里同樣外國の事も研究し、外國語も若干は心得、帆足先生の著作『窮理通』なども、岡松先生に依つて完成した事を聞いてゐる。叔父が最も得意で、山陽の『日本外史』などは、初から終迄添削し、『日本外史』の講義の時には、よくその自個の訂正本を持出して、講釋されてゐた樣だ。

先生の十八番は『常山紀談』を漢文に譯す事であつて、それを中江氏初め門人共が全力を盡して漢譯し、それを岡松先生が更に滿足する樣に、自ら書直し、此に漢譯の『常山紀談』が出來上つた。その原稿は中江篤介氏に傳へ、篤介氏の死後は、その門人幸徳秋水に傳へ、秋水が愈よ最期に近かんと

する場合に於て、それを予に托したから、予は大切にこれを保存し、その後先生の長子岡松參太郎博士の需に應じてこれを送附し、やがてそれが刊行せられたのである。

話元に戻る。該塾では、予は相變らず騒いで居た。岡松先生は如何にも寛大なる人にて、予も『莊子』の講義などには數回出た事がある。併し予は初から漢文を作る事を好まなかつたから、復文——假名文を漢文に譯すること——などはてんで相手にしなかつた。併し餘り仲間と夜中に騒ぎ廻るなどといふ爲に、塾監である合志林藏と云ふ漢から屢〻誡められ、揚句には保證人を呼出して、説諭するなどと云ふ事迄に立至つた樣であるが、仕合には退塾せらるゝ迄には至らなかつた。

予は幾ケ月を岡松先生の塾に過した乎を知らず。又た先生に依つて何を得た乎知らないが、併し先生は最後迄予を門人の一人に數へ、後年先生の七十の賀筵を、上野に開いた時にも、予が門人總代として認めたる祝文を、同窓の一人、上遠野富之助君が朗讀した事を覺えてゐる。

當時予は又た駿河臺袋町に重野成齋先生を訪うた。重野先生は、予の父と維新前からの交際があり、予を親しく引見し、予が差出したる詩稿を即座に添削し、思ひ掛けなき高評を記して下された。併し予は詩作も初から眞面目に心掛けたのでなく、唯だ吾志を言ふに止つてゐたから、別段眞面目に學修するといふ事もしなかつた。

秋の末頃には、同志社に於ける予の先輩であつた、小崎弘道氏と高輪東禪寺に暮した事を想起する。それはその時の詩が殘つてゐるからである。

當時予は又た地方から出掛けた有志等にも面會した。他日陸軍大將となつた、男爵立花小一郎君の如きも、地方から有志家總代の一人となつて上京してゐたが、予は神田淡路町の旅館で、君等と面會した事を覺えてゐる。

四　京都を經由して熊本に歸る

◇東京にて知れる高田露、宗像政、有馬源内、林正明の諸氏

◇歸郷と吾家の經濟狀態の切迫

兎も角も東京一杯を歩く丈歩き、又た予の力の屆く丈の人にも面會をして見たが、何時も予の意に叶ふ者もなく、彼是考へて見れば、此の儘東京に居たとて何の益する事も無いから、寧ろ郷に歸つて、新奇蒔直しに、勉强せん乎と考へてゐた。折しも予の父の親友山田武甫氏が、縣下の有志者の用向きを持つて上京をしたから、取敢へず旅館に訪問し、予が志を述べた處、山田氏は欣然之を贊

成し、予の父に宛て、予の是迄の行動及び今後に於ける予の志望を釋明したる一書を認めて呉れ、且つ旅費さへ借して呉れたから、予はそれを受取り、愈々歸國する事となつた。それは明治十三年の十月の末乎、十一月の初め頃であつた點と思ふ。

　予は歸鄕する以前、偶然にも東京に於て高田露、宗像政、有馬源内等云ふ人々と出會した。この人々は西南の役に熊本協同隊を組織し、薩軍に加擔をなし、その爲入獄し、今や漸く出獄して熊本に歸へらんとする際であつた。その時宗像氏は、

『鄕里に歸るならば、定めて意中の美人が待つてゐるであらう』

抔と話し掛けたが、予はこれを聽いて頗る不快に感じ、

『左樣な事は決して御座らぬ』

と氣色ばんで返事をした。後から考へて見れば、宗像氏は冗談の積りで話したのを、予は眞面目にそれを受取つたのであつた。

　是程左樣に予は東京には居たが、その方面には頗る疎かつた事が判る。

　福地氏とは前にも記したる通り面會も出來なかつたが、その時分『近事評論』の持主である、林正明、又たその記者である矢野駿男等といふ人々とは相知る機會があつて、新聞雜誌などといふものも

世間に出れば、大層なものゝ樣であるが、その裏面を窺へば、何んでもない事が判つた。

予は京都に立寄り、新島先生を訪ねたが、先生は恰も九州に赴き不在であつて、面會を得ず。それから博多に至り、柳河にて家永の留守宅を訪ひ、又た三池にて立花小一郎氏の留守宅を訪ひ、熊本近郊の大江村なる吾家に歸つた時には、麥が少しく靑き芽を出し、桑の葉が既に萎んだ時であつた。予は足掛け三年振りにて吾家に歸つた。當時吾家に到著した時の氣持は、今尙ほ新なるが如く記憶してゐる。

予は此間に於て著しく吾が兩親の老衰したるを認め、それよりも吾家の經濟狀態の甚だ危險であるに氣付かざるを得なかつた。吾家は縣下の水平から云へば、先づ中地主と云ふべきものであつたらう。左程の財產家ではなかつたが、自活するばかりでなく、多少の餘裕があつたのは勿論だ。併し吾父が維新前後諸方に奔走し、特に吾家は横井小楠及びその眷族の寄所方をつとめ、小楠の二姪の洋行の際などは、可成り奮發して旅費調達の任に當つたと云ふ事にて、財政狀態は當時に於ても、必ずしも健全ではなかつた。

唯だ吾父が明治初年から奉職し、明治五六年頃に至つた間は、固より不自由のあるべき筈はなく、その俸給の幾分かが熊本に於ける邸宅、及びその邸宅を繞る若干の土地となつたものであらう。或は

それも葦北郡にある土地山林を賣却して、それにて購ひ得たのかも知れない。
予の祖父は父が熊本に於て奉職したる爲に、一時熊本に來たが、『故郷忘れ難し』とて引上げ、水俣に歸り、築出しの隱宅に住居した。此に於て吾家にて纔に餘し得たる小作米その他の收入は、舉げて祖父の奉養料となり、熊本に於ける予の一家は、全く自給自活をせねばならぬ狀態であつた。
然るにそれにも拘らず、此の數年間予の姉二人は東京若くは上州邊に赴き、予及び健次郎は又た京都に赴き、謂はゞ四人の留學生を出した事となつてゐた。固より規定の收入はなく、收入と云へば予の母が姉達と協力して養蠶をなす事。若くは桑畑より苗木を取つて、桑苗をその希望者に頒つ事位のものにて、その他は唯だ一方では葦北郡にある土地を賣り、又た家にある祖先傳來の什物などを賣つて、その日を過してゐた。時としては家の一部を他に貸してゐた事もあつた樣だ。
予は全く吾家の經濟狀態を知らなかつたと云ふ程ではなかつたが、習慣性となつて、左程困難であるとも思はず。されば學費の如きも潤澤に取り、敢てそれを自ら奉ずると云ふではないが、これを友人共に頒ちなどして、氣持よく暮してゐた。然るに歸つて見れば予の家の經濟狀態は、殆ど危急に迫つて居る。唯だ大膽にして、物事に屈託せぬ吾母が、やりくりして暮してゐるに過ぎなかつたのを見て、又た予の父が正直にして、且つ小心の性質とて、胸中その事を苦にし、その爲に豫ねて多かつた

白髪が、猶更ら多くなつたのではあるまいか乎抔と考へ、予は今更ら實に兩親に對して相濟まない心持ちになり、何は兎もあれ、是非共この經濟狀態を立直さねばならぬと決心した。

五　熊本に於ける學派の鼎立

◇舊學校黨、實學黨、相愛社

◇予と相愛社との關係

當時熊本には十年戰爭の餘を受けて、その善後策として二箇の學校が出で來つた。一は同心學舍と云ひ、これは十年の役に熊本隊として薩軍に加はりたる池邊吉十郎、其他の面々の仲間で、所謂る學校黨と稱する者の團體から成つたものであつた。一を共立學舍と云ひ、それは山田武甫や宮川房之及予の父等の發起したるものにて、予の父は殆ど予の歸郷する頃までは、全力を此の學校に注いでゐた。その外に相愛社なるものがあつた。これは宮崎八郎などの仲間にて、十年の役には協同隊を組織し、或は討死し、或は入獄したが、その入獄せざる者、若くは獄中から歸り來る者共の團體にて、池松豐記、松山守善及び前に掲げたる有馬、高田、宗像、田中賢道等が、その主なるものであつた。

此の如く學校は共立學舍、同心學舍の二つあり。猶ほ又た實學黨の中にて嘉悦氏房氏の邸内に廣取校なるものを設けて、專ら英學を授けてゐたが、有力なる學校としては、前記の通り二つであつた。

斯くて同心學舍は、木村弦雄、佐々友房の指導の下に大に振ひ、濟々黌と改名した。此の如く熊本には、事實三黨が分立した。同心學舍を基礎としたる舊學校黨。共立學舍及び廣取校を基礎としたる實學黨。及び相愛社である。學校黨が保守黨であり、實學黨が漸進黨であり、相愛社が急進黨であつた。しかも十年の亂に關係しなかつたものは、只だ實學黨のみであつたと云つても可なりだ。

斯く分立しては居ても、戰後の復興として、協力一致を主唱し、縣外の熊本出身者及び縣の當局者等も、内外呼應して骨折り、これが爲に『忘吾會』なるものが出で來つた。即ち吾を忘るゝの會にて、孰れも自我を忘れて、互に協力一致する事である。前に記したる山田武甫翁等が上京したのも、この『忘吾會』の用務の爲であつた。

斯る勢であれば、予も又た『忘吾會』會員の一人となり、傳統的に實學派であらねばならぬ予は、父と與に共立學舍に赴き、或は講習、或は討論等に從事した。當時共立學舍には、予の父の外に主なる教師としては、行德文卿、津田靜一氏等があつた。行德翁に就いては別に記する事があるが、今此に記するは、津田靜一氏の事だ。津田氏は津田信弘の長子である。津田信弘は津田山三郎と稱

し、坪井實學の領袖株の一人にて、藩の家老米田是容に引立てられ、水戸人士と交友し、藤田東湖等にも知られ、維新の際には參與にまで拔擢せられたる漢である。靜一氏はその長男として夙に米國に赴き、一通りの學問をすましたのであるが、米國に在つても米國風に染まないのみならず、寧ろそれに反動し、一種の强硬なる日本主義者であつた。彼は門地もあり、緣故もあり、東京にて官職につかんとすれば、何等苦勞は無かつたが、先輩の止むるを顧みず、袂を拂つて故山に歸り、讀書を事とし、その傍ら共立學舍に敎へてゐた。その弟熊谷直亮は予と同年であつたが、氏は予よりも少く共十歲内外の年長者であつたと思ふ。或はそれよりも多かつたかも知れぬ。予は當初から津田氏と意見が衝突し、何かにつけて議論を鬪はした。固より鄕黨にては齡を尊ぶ習ひであれば、予が津田氏に向つて抗論するは、何となく失禮にも見受けられ、正直なる予の父などははら／＼したであらうが、予はそれ等には一向頓着なく、盛んに議論を鬪はしてゐた。今何事を論じたるや、その事さへ想起せぬ程であれば、別にたいして重大なる問題ではなかつたらうが、予は當時最も急進論者の一人であつたから、予の言ふ事が、津田氏の氣に喰ふ筈がなかつた。

斯る際に予と相愛社との交際は自ら開けて來た。相愛社は全くルッソーの『民約論』を金科玉條としてゐた。予は必ずしもそれを信仰したと云ふではなかつたが、若干それに感染してゐた事は間違

ひなかつた。今此に想ひ起すが、予が明治十三年の秋の初、岡松先生の塾にある頃、當時渡邊洪基氏が『集會條例』の製造者であるといふ評判が高くなり、予は友人兩三と共に、氏を南佐久間町の邸宅に訪うた事を記憶して居る。その時予等の暴動が餘りに壯士らしかつたとて、家の人々はおど〳〵して取次がなかつたが、餘りに騷がしきものから、主人公自ら玄關に立現はれ、『さらば兎も角も上れ』とて應接間に通され、それから議論に及んだが、洪基氏は予等の云ふ事を聽きながら、

『それはルッソーのコントラ・ソーシャルの受け賣りではない乎』

と云はれた事がある。當時渡邊氏の立場から見れば、左もある可きであつたらう。

六　歸鄉當時の予

◇相愛社連中の巡回演說に參加

◇『東肥新報』『開化の手引』及び大江逸の變名

予は別に定りたる職業もなく、家に在つては讀書をなし、若くは家事の手傳をなし、父と與に共立學舍に赴き議論をするのが、その日の仕事のやうであつたから、相愛社の連中の誘ふに任せ、演說の

爲に田舍廻りをなし始めた。時としては月田道春、時としては松山守善、時としては田中賢道氏等が、予の同行者であつた。松山氏は今も八十を越えて矍鑠としてゐるが、氏は本來神風黨であつたのが、急進黨となり、相愛社の大先輩の一人となつた。氏は十年の戰爭には加入せず、官吏を罷めて、辯護士となり、時にはその會長となり、恒產もあり、議論は頗る過激であつたが、生活は極めて穩當、中正であつた。月田氏は月田蒙齋先生の子にて、その刑期が輕かつた爲に、最も早く獄中から放還せられたる一人であつたらしい。田中賢道氏は花岡山事件頃から——洋學校には關係がなかつたけれ共——基督教に關係あり、十年の戰爭には、協同隊の中隊長まで勤め上げたる一人で、最も雄辯家であつた。

予は如何なる事を演說したか記憶しないが、これが爲に予自身にとつては、尠からざる演說の練習となり、又た地方の事情等も察し、元來予及び予の家に緣故の多くなかつた熊本城北の方面に、多くの知己朋友を得る端緒となつた。予は元來口不調法の者であつた。子供の時からしやべる事は嫌ひではなかつたが、全く下手であつた。ものを順序立てゝ人に話す事を、如何にも面倒くさく考へ、何でも結論から先に話し、或は三段論法を二段論法として話し、その爲に自分の思ふ事を正しく云ひ表はす事の出來ないのみか、往々他を誤解せしめた事があつた。演說は猶更であつて、多くの人の前に立

つてしやべるなどといふ事は、予の神經に過大の刺戟を與へ、予にとつて堪へ難き重荷であつた。加之聲量は少く、聲音は淸朗を缺き、演說家の資格としては、何一つ取柄がなかつた。

併し時としては、他人から促されぬ迄も、自ら進んで云ひ度いと思ふ事があり、その爲に到底巧妙なる辯士とならざる迄も、自分の云はんと欲する所だけは、兎も角も云ひ得る丈になりたいと云ふのが予の望であつて、それには可成り苦心もした。この相愛社の人々と田舍廻りの演說をした事は、予に取つては、決して無駄骨折りではなかつたと思ふ。

當時熊本には又た中學校、師範學校などの敎師として、他地方より入込んだる者、若くは新聞記者として入込みたる者、その他に依つて、相親社といふ學術硏究の團體があつた。予も又たそれに加入すると云ふわけでもなかつたが、屢〻その會に臨み、互に討論、演說などした事を覺えてゐる。

當時は役人と云はず、敎育家と云はず、政論大繁昌の世の中であつて、寄るとさはると政治を論ぜざる者はなかつた。斯る折しも相愛社の連中は、愈〻新聞を發行する事となつた。それは多分明治十四年の中頃であつた乎と思ふ。別に資本があるでなく、唯だ或る活版所と共同して、隔日に四號文字四頁の新聞を發行する事となつた。當時『熊本新聞』には、村上定なる人が來つて、福澤流の議論を頻りにやつてゐたが、相愛社の連中はそれが氣に入らず。尙ほ一層過激と云はんよりも、無遠慮なる議

論かして見度いといふわけにて創刊した。

社説は池松豊記、編輯は宗像政など云ふ人が關係してゐた。予は誘はるゝ儘に當初より無報酬にて、その編輯を手傳ふ事となつた。予は社説も書いた。論説も書いた。雜記として種々の飜譯ものをも出した。又た雜報さへも手傳つた。論説には種々の號を用ひ、若くは變名を用ひた。その中でも最も多く用ひたのが、最初は大江逸郎と書き、それから後には郎を削つて大江逸とした。大江と云ふは、予の住所が大江村であつたからだ。予の飜譯したのは、マコレーのエッセー、若くはクロムウェルの傳などであつた。

それからその新聞ばかりでなく、後には『開化の手引』と題する、極めて平易なる雜誌をも發行し、平民的に政治の思想を鼓吹せんと企てた。それにも種々の飜譯物を掲げた。當時予の英語の力は頗る怪しきものであつたが、しかも予は大膽に、無遠慮にやつてのけた。今から考ふれば汗顏の至りであつた。盲目蛇とは此の事であらう。

予は明治十三年の秋、東京を去る以前に、或る古洋書屋の店頭から、一冊のマコレーのエッセーを發見し、それからそれを耽讀し初めた。山陽は東坡の文を讀み、初めて『天地間に此の如き文章ある乎』と驚嘆したと云ふ事であるが、予も又たマコレーのエッセーに就いてはしか云はねばなるまい。

それでその耽讀したるものを、恥し氣もなく飜譯したのだ。

扨て相愛社連中が發行した新聞の名は『東肥新報』と稱し、『熊本新聞』とも種々の問題に就いて、論戰を試みたが、予は初から論戰なるものを好まなかつた。予は人は人、吾は吾。吾は唯だ吾が云はんと欲する所を云ふだけにて、人が贊成しようが、反對しようが、それには頓着しなかつた。時には餘りに氣に喰はない說を見れば、其人には喰つて掛らぬまでも、其說をば駁擊した。但し予の一生を通じて、概して云へば、正面から人と議論を鬪はした事は殆どない。それは鬪はしたとて何等效能がないと考へてゐたからである。即ち吾は吾が云はんと欲する事を云ひ、彼は彼の云はんと欲する事を云ひ、その得失は第三者が隨意に取捨すべきものであつて、第三者に向て『是非彼を捨てて吾を取れ』とまで立入つて云ふ必要はないと思つたからだ。これは予の一生を通じて、新聞記者としての立場であつた。されば予は殊更らに他を攻擊もしないが、又た他の攻擊に對して、答辯もしなかつた。

或時予の留守中に裁判所から召喚狀が來て、予の父母を驚かした。それは『開化の手引』なる雜誌發行に就いての、何か手續きの事であつたらうと思ふ。予は長き筆硯生活に於て、未だ嘗て所謂筆禍なるものに罹つた事はなかつた。これは予が言論に就いて、謹愼した爲であつた乎、或は他の理

由であつた乎知らないが、予は言論に就いては、常に責任觀念が深かつたから、未だ曾て人に對して申譯の出來ない樣な言論を、逞しくした事はなかつた。

當時予が如何なる方面に勉强したかといふ事は、今こゝに明治十四年二月自ら筆記したものがある。それには『學問の目的』と題し、『第一史學、第二文章學、第三經濟學、右の通りに相定め候也。一切無用の讀書を禁ず。詩歌は性情を養ふものなれば時々披見して可なり。新聞は時勢を達觀するの具なれば時々讀むべし』と記してある。之が予の當時の學問の方針であつた。予は此間に於て米國に注文して愛讀したる „Nation" と云ふ週刊雜誌、及び田口鼎軒氏の『東京經濟雜誌』、中江兆民氏の『政理叢談』、矢野文雄氏の著作『經國美談』等を默過することが能はぬ。此等は田舍の書生である予に少からざる刺戟を與へた。

七　大江義塾の設立

◇家政改革と家塾開設

此に又た予の生涯に於て、一の記念すべき事が出來た。それは大江義塾創立の事だ。今此の事に就

いて、少しく語るであらう。予は同志社に足掛け五年間居る中に、教育に就いて多大の興味を感じ、自分が教育者となる日には、此の事は斯くせねばならぬ。彼の事は斯くせねばならぬと、種々自ら註文をつけてゐた。

又た共立學舍に屢々出席して、その模樣を見ても、何となく齒がゆい樣な感がした。それで予は何とか自ら學校を起して見度いと云ふ樣な感が、歸鄕匆々湧いて來た。それには又たそれを必至とする一の理由がある。それは何とかして予の家の財政を立直さんまでも、切拔けだけはせねばならぬ。それに就いては、予は是迄兩親から搾取したる報償として、今後は自分の心と身とを働かして、兩親に貢獻せねばならぬと云ふ感を起し、それに就いては他に藝能もないから、極めて貧しき學問ではあるが、それを提供する外はないと考へたからである。

予の家は特に予の母の時代となつてからは、緣家親類の倶樂部同樣であり、のみならず父の友人若くは門生等も、常に予の家を中心として相集つた。されば予の家の僕の如きも、每朝朝市場に出掛け、魚類を買出す事が、一の役目であつた。事程左樣に食事などの時刻になれば、別に用事もなき客が、食事の爲にやつて來るといふ程であつた。斯くする事が予の母にとつては、恐らくは一の習慣と云はんよりも、快樂であつたかも知れない。

兎に角徳富家にさへ行けば、何等かの御馳走には有りつくものと云ふ事になつてゐた樣だ。予は吾家の病根が此にある事を見て、第一、人に御馳走する事をやめる事。第二、成可く客を引止めざる事と云ふ法度を定めた。其爲に十二疊の座敷を板間となし、その眞中に二疊の疊を敷いた。此れは主人一人、客一人と應接するには、それで澤山であるからと云ふ考であつた。

斯る次第で一切家政を改革したから、予の緣家親類に於ける予の不評判は、著るしきものであつて、或は親不孝者の名さへも、宣傳せらるゝに至つた。併し斯く方針を定めて見れば、吾家は寧ろ只だの住居としては廣きに過ぎた。そこで是迄の客間一切を擧げて、塾舍とすべく考へた。

予が歸鄉より幾何もなく、縣立中學校の生徒の中には、予に英書の講讀を乞ひに來た者があつた。予は彼等に向てマコレーのエッセー、ワルレン・ヘステングや、クライブなどの評傳を講讀した。固より予にもよくは讀めなかつたが、兎も角も講讀した。

又た共立學舍の生徒等の中にも、予の講義を聽んとして來た者があつたから、彼等にはギゾーの『文明史』を講義して聽かした。此の如くにして生徒は招かざるも追々集つて來た。その爲に吾父も又た興味を感じて、『論語』、『孟子』の講義抔もする事となつた。

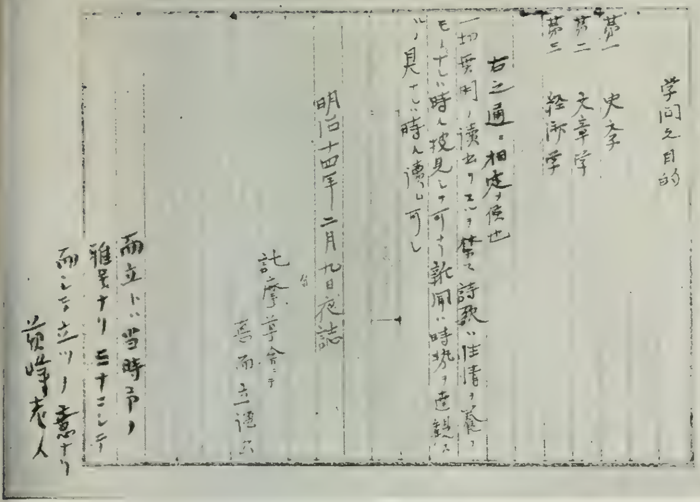
當時學校黨の造りたる同心學舍は、木村弦雄、佐々友房などの指導の下に、且つ政府の擁護の下に

盛んになつたが、共立學舍は既にその盛時を過ぎ來つた。その時恰も予が講義を初めたから、自然共立學舍の生徒の中にも、若くはこれから共立學舍に赴かんとする者の中にも、予の方に講義を聽きに來る者が増加して來た。

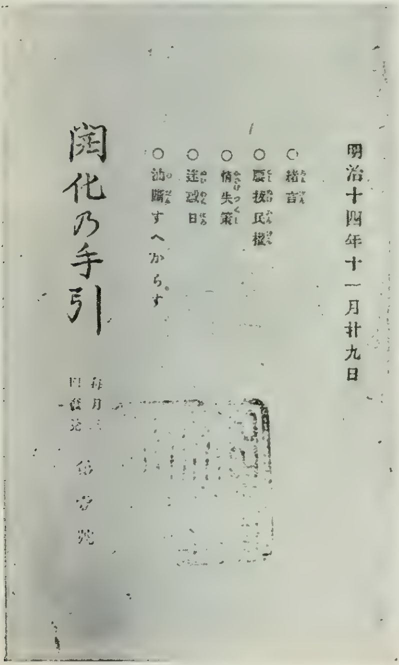
當時予は所謂る日本人には日本學が必要であるといふ事を唱道した。或は英學と云ひ、或は漢學と云ひ、或は皇學と云ふ。皇學者は大和言葉で學問をなし、漢學者は漢字、漢文で學問をなし、洋學者は洋字、洋文で學問をなすと云ふ事で、孰れも普通日本人にとつては、その道行きが甚だ面倒だ。それよりも現代の日本言葉にて、現代の學問をする事が一番近道である。それが即ち予の所謂る日本學である。

即ち現代の言葉にて、政治、經濟、歴史、地理、何にても必要の學科は修められるから、それを強ひてむづかしき言葉の力を借りる必要はないと云ふのが、予の立前であつた。そこで予はその意味を以て講義をなし、經濟學なども同志社のラーネッド教授の講義を種本として、それを予が日本語に寫し、その口授を筆記せしむる事とした。斯くて明治十五年三月に至つて開校式を擧げたが、學校と云つても、予の家の座敷、玄關、次の間等に過ぎず。學生とても十人乃至二十人内外であつたらう。これが大江義塾の創りである。

大江義塾々生一同　最後列右より八人目が塾長たる蘇峰翁　中央白髯翁は淇水翁　明治十九年十一月大江義塾解散式に際して



蘇峰翁立志の書たる『學問之目的』の手稿
當時翁は十九歳



社會及び政治、大衆教育の爲、熊本に於て發刊せる『開化の手引』第一號の表紙

八　大江義塾長としての予

◇行徳文卿翁のこと
◇當時の民權自由論と予

予は自ら大江義塾の長となり、一人にて塾長から、教師から、幹部まで兼ねて居た。若干これにて家政の缺陷を補ふ積りであつたが、得るところは幾何もなかつた。中には五十錢の月謝を拂ふ者もあつたが、中には月謝どころでなく、食費さへも予の方で手傳はねばならぬ者もあつた。而して予は數學を除けば、殆ど凡有る學課を教へた。又た予の所謂る日本學にて、歴史、經濟などの講義は勿論、漢學も英學も、何んでも手當り次第に教授した。

英學などを授くる際には、教師である予自らが、時としては理解に苦しむ事もあつたが、さる場合には特に大いなる聲にて怒鳴るが如く講義をなし、當座を誤魔化し去つた樣な事もある。漢籍なども講釋をして見れば、自ら思ひの外學力の少かつた事に驚いたが、『教へるは學ぶが半』と云ふ事にて、自分が勉強する積りで教へた。又た父の論語、孟子の會讀には予も出席して、時としては父の講義に向

つて無遠慮なる横槍を入れ、今から考ふれば、親に對して可成り無遠慮なる言を吐いたものと思つて恐縮してゐる。

併しその間に於て、予は可成り勉强をした。予は種々文章を書いたが、自分自らその文章が物になる乎、ならぬ乎と云ふ事に就いて、屢々危惧の念を抱いた。然るに共立學舍の先生に、行德文卿と云ふ人があり、この人は眼科醫であつたが、徂徠學派の人にて、特に詩文には達者であつた。人物も如何にも恬淡であり、又た不思議に見識もあつた。予は曾て相知らなかつたが、共立學舍で對面し、その後予の作文や作詩を持參して、その斧正を乞うたが、行德翁は予を以て與に語るべき者となし、予を待つに普通の青年を以てせず、謂はゞ器重したとでも評すべきであらう。又た予の父の執山田武甫氏は、その人物が公平にして、俗氣なく、如何にも大人たるの襟度があつた。この人が又た予を以て與に語るべき者となし、胸襟を披いて予の云ふ所を聽いた。

當時予は世間一般の民權自由論に感染れてゐたが、その中でも予は聊か他と趣を異にした。それは當時の民權自由論は、その名目が民權であつて、その實は國權であつた。卽ち明治六年征韓論の餘波は、尙ほ當時の人心を支配し、民權論者の中でも半以上は、朝鮮討つ可し抔と云ふ論が多かつた。謂はゞ民權論者の中に於て、その多數は寧ろ一種の變形なる帝國主義者、若くは武力主義者であつた。

予は民權論者ではあつたが、武力主義者には飽迄反對した。當時予は民權の敵は武力であると考へ、戰爭は武人跋扈の原因をなすものと考へたから、何處迄も戰爭には反對した。予の本旨は一言して云へば、マンチエスター・スクールであり、所謂るコブデン、ブライト、グラッドストンなどの黨であつた。ルッソーの『民約論』を看板として、武斷主義を行はんとするが如き相愛社流とは、根本に於てその趣を異にした。併しそれは唯だ奥底を窺つての話で、民權論だけにては、何等反對の事はなかつたから、相變らず交際もし、當時予も殆ど相愛社員の一人と見られて居た。併し相愛社の幹部の連中は、必ずしも予をその內部の評定迄は加へなかつた。否、予自らもそれに加はる事を欲しなかつた。されば予は傳統的に於ては實學連であり、交際の上に於ては相愛社連であつた。併し予本來の立場は寧ろ大江義塾の長たる、一個の德富猪一郎であると見るより外なかつたであらう。

九　熊本縣下の政黨

◇安場男と紫溟會

天下を擧げて國會開設論が湧き、國會請願が盛んになり、廟堂多事の時に際して、熊本縣の先輩

の一人、安場保和男は、岩倉公等と相談の上、熊本に於て、所謂る紫溟會なるものを作るべく、その主意書を携へて下向した。その主意書は井上毅子の筆になつたるもので、冒頭には、よく國を興すものも政黨なり。國を滅ぼすものも亦た政黨なりと云ひ。しかもその目的は專らルッソーの『民約論』を攻撃するにあつた。

これは勿論熊本縣下を統一して、當時の民權論の狂瀾を支ふる積りであつたらう。前にも申す通り、當時熊本には『忘吾會』なるものがあり、各黨吾を忘れて相會すると云ふ事であつた。右の安場男も忘吾會に重なる人々を集め、紫溟會組織の事を相談した。その時予は相愛社の首領株、有馬源内氏と共に、相愛社を代表して出席した。然るに最初に主意書を讀み、次に安場男が一通りの演說をなし、斯くて贊成、不贊成を表すべく、列席の人名を讀みあげたが、孰れも『贊成』『贊成』の聲にて、それが讀んで予の名に至つたから、予は『自分は仲間の代表者として來てゐるから、卽答は出來ぬ』と云つて保留し、有馬氏も亦た保留した。聞く所に依れば、初めから相愛社を除外して、その他の連中を統一せんとした事であつて、予等が贊成を保留した事は、別に安場男等にとつては、何の不思議もなかつた。

やがてその紫溟會なるものが、元の實學黨と、元の學校黨との間に意見の齟齬を來し、遂に紫溟會

は舊學校黨及び津田靜一氏等の所謂る坪井實學なるものに止り、横井派の實學派は、殆ど擧げて紫溟會を脫會し、此に於て相愛社と實學黨とは、勢ひ提携せねばならぬ事となり、此の如くして熊本の政黨は出で來つた。

予は政黨には左程の興味も持たず。飽迄も自分の勉强をしようと考へたから加入しなかつたが、依然予の立場は相愛社と實學黨とに跨がつてゐた。これを大局の上から云へば、相愛社は當初から板垣伯を主とする自由黨に連絡を持ち、實學黨は大隈侯を主とする改進黨に連絡を持つてゐた。尤も横井派の連中は維新の際、大隈侯の爲に致されたる歴史もあり、當初はあまり接近しなかつたが、改進黨なるものが、大隈侯及び河野敏鎌一派の嚶鳴社を合して、知識と財産とを標榜し來つたからには、自然漸進黨の實學派は之に傾かざるを得なかつた。而して彼等は紫溟會なる共同の敵があつたから、勢ひ相愛社と提携せざるを得なかつたのである。

感慨（明治十四年　十九歲）

神飛上下三千載。氣吐縱横六大洲。
咄咄功名是何事。烟波唯合伴閑鷗。

掩衛門

蕭蕭竹葉掩衛門。流水桃花別有坤。
一笑書生策天下。案頭猶積賈生論。

笑聲溫

啄剝有聲叩蓽門。　同年莫逆笑聲溫。
一籬春色百花底。　共把詩篇仔細論。

秋

秋入梧桐爽氣生。　荒庭蟲語伴吟情。
無端喚起跨鞍感。　鐵笛聲寒銀杏城。

偶成

跳丸烏兎去難留。　奈此夙心猶未酬。
露滴空階蟋蟀泣。　風鳴叢竹短檠愁。
敢期功業冠千古。　漫願人間第一流。
抛卷深宵提劍起。　碧天如水大星幽。

題鴨東圖

偶對畫圖別恨濃。　山川歷歷記曾蹤。
鴨東秋色莫人管。　片月影寒如意峰。

幽懷

欲說幽懷亦有誰。　眼中得失寸心知。
半宵冷雨燈窗底。　閑伴傲霜花一枝。

除夕

人歌人哭竟如何。　世路營營感亦多。
却笑風流大江子。　歲除光景探梅過。

第五章　上京と板垣伯及び各方面の交遊

一　新島先生と與に木曾道中をなす

予は明治十三年の初冬に、東京より熊本に歸り、明治十九年冬、家を携へて東京に出る間、熊本を本據として、第一自分の學問を專務とした。傍ら新聞などにも關係し、又た演説、講演等もなし、政治上にも多少奔走したが、專ら從事したのは、前にも記したる如く、大江義塾に於て、生徒を教育すると云はんよりも、寧ろ生徒と共に勉强した事であつた。

この塾は最初は予の聽講生五六人より初つたが、後には六七十人、その盛時には百人を超えてゐた。熊本縣下は固より、鹿兒島縣よりも常に數十人と云はさるも、十數人は來り、其他、他府縣からの來學者も尠くなかつた。又た臨時に當時天下行脚の有志家が來りて宿泊したる者も尠くなかつた。その中には可成り知名の士もあつた。而して予は學課の餘暇、年末年始、春季若くは夏季の休業中に

は、時としては一人、しかも概ねは數人の生徒と共に旅行を試みた。縣内は勿論、鹿兒島縣とか高知縣とか、或は京阪地方、東京等に往來した。その中にて一二記憶したる事を語るであらう。

明治十五年の夏休みには、予は先づ東京に出づる目的を以て大阪に赴き、大阪に於ける重なる新聞記者、政客等を訪問した。その中には大每社長故本山彦一翁も大阪新報記者として、盛んに自由民權論を說く際にて、予はその社に君を訪問した事を記憶してゐる。而して予は京都に至り、新島先生の家に宿した。予は明治十三年歸鄕の折、京都に先生を訪うたが、先生は九州下りにて面會を得ず。予が熊本に歸宅したる際は、先生は旣に出發した後であつたが、風波の爲又た引返し。それが仕合せとなつて、先生と一夕快談し、これが爲に兩者の間に於ける蟠りも解け、爾來先生とは常に文通してゐたから、予が先生の家に投宿したのも、何等不思議は無かつた。

或夜予が先生の二階の一室に眠つてゐるに、夜半蚊帳を排して入り來る者あり。驚いてこれを見れば先生であつた。先生は一卷の聖書を手にし、聲を震はして、『是非この所を一讀して、然る後床に就いて貰ひ度い』と云はれた。これには予も聊か閉口した。予は先生の信者ではあつたが、基督敎の信者でもなく、又た殊更ら聖書の信者でもなかつたから。

幸ひ先生も東北方面に赴くとのことにて、夫人は汽船にて赴かるゝ樣になつたから、予は先生と同

行し、木曾路を行いた。同行者は横井時雄、湯淺吉郎、外一兩人の同志社學生であつた。當時先生も頗る元氣であつて、孰れも膝栗毛で中仙道を歩いた。但だ横井氏が蒲柳の質にて、時としては先生と共に馬に乘つた。予等は孰れも茣蓙を著て、全く道者の姿であつた。而して前と後には小さな行李を風呂敷に包み、それを紐にしばり、前後の肩に掛けた。所謂る『胸に一物肩には荷物』と云ふわけであつた。

別段この旅行には、苦情や面倒もなかつたが、恰も雨期であつて、景色を賞するよりも、寧ろ道路の嶮惡なるには聊か困つた。それよりも困つた事は、寄れば觸れば、新島先生が予に向つて、說敎せらるゝ事であつた。鳥居峠を登る頃などは、日は已に暮れて、嶮しき山坂を先生の說敎を聽きつゝ夢中になつて過ぎた。

當時横井氏は、その夫人が先生夫人の姪であつた爲でもあらうが、先生より特別取扱ひを受け、先生も横井氏の爲には、始終夫々氣を配ばられた樣だが、予に向つてはそれよりも唯だ如何にして予を再び悔改めて、基督教に復歸せしめんかと云ふ事を、始終焦慮せられた樣であつた。

當時の木曾街道は、芭蕉翁が、

『かけ橋や命をからむ蔦かづら』と云つた時代よりも、若干進步してゐたかも知れぬが、しかも何れ

かと云へば宿屋の食事等も極めて原始的のものであつた。偶ゝ福島に泊つて何やら魚らしきものを食べた時には、先生初め一同その珍味に驚いた。恰もその晩は土曜日であつて、明日は日曜であるから、一日此處に逗留しようと云ふ事になつた。一日の逗留は結構だが、その爲に予は尠からず先生の說敎に惱まされた。つまりその一日にて予をせめ落す積りであつたではないかと思はれた。予は固より基督敎を嫌ふ者ではない。唯だ予には信仰せらるゝ部分と、せられない部分とあつて、新島先生の赤心からの祈でも、予の心を動かす譯には參らなかつた。併し先生の好意には寔に感激した。

先生は食物には頗る趣味があつた。特に蕎麥となれば命さへ打込む程であつた。偶ゝ寢覺めの床にて、予と先生と名物蕎麥の賭喰ひをした。予はなか／＼先生に敵すべくもなかつたが、一生懸命にて先生が九杯の時に、更に半杯を加へた爲に予の勝となつて、蕎麥代を先生に拂はしめた。併し輕井澤の追分に於て、再び試みた時には、双方共競爭の益なきを悟つて、互に大抵の所にて切上げて、勝負はつけなかつた。

當時予は詩に熱心と云ふではないが、聊か興味を持つてゐたから、道中では專ら詩を作つた。今只だ二三を記憶してゐるが、その中に、

仰看萬嶽壓前頭。蘇水如雷劈石流。

行客不レ禁衣褐冷。　連レ天綠雨信濃州。

又た淺間山の詩に、

突兀奇峰衝二碧蒼一。　群山以外勢飛揚。
問レ君有二何不平事一。　吐二出光炎萬丈長一。

又た碓氷嶺の作に曰く、

平遠茫茫望壯哉。　八州之野眼中開。
啼鵑梅雨岐蘇路。　踏二破千山萬壑一來。

とある。別に取るべき程の價値もないが、當時の氣分はそれで判る。

斯くて予等は碓氷嶺を越え、上州安中に到り、此處にて新島先生夫人に出會し、先生と別れて予と横井氏は高崎から千里軒の馬車にて、夜通しに東京神田萬世橋に到著し、それから予は如何なる緣があつた歟、麻布善福寺の塔頭に下宿した。

二　板垣自由黨總理と會見

當時東京は自由民權論の中心地であつた。板垣伯は自由黨總理として、同年四月岐阜に於て刺客の難に罹り、その傷漸く癒えたる時であつて、自由黨は恰も旭日昇天の勢をもつてゐた。予の上京は勿論板垣伯に面會する事が、九分九厘迄の目的であつた。

當時自由黨の本部は寧靜館と稱へ、銀座裏の三十間堀にあり。其處には河野廣中、鈴木舍定、宮部襄等の幹部連が居た。予は新島先生の添書を持つて、板垣伯に面會すべく赴いたが、固より田舍の一書生で、一度や二度で逢へる筈はないと、初から覺悟をしてゐた。案の如く板垣伯は面會せず。河野其他の諸氏が面會したが、予は一切諸氏を相手とせず、

『予が今回の上京は、諸氏に面會する爲でない。唯だ板垣伯に面會せんが爲であつて、諸氏には固より何等の用事もないから、此方から面會をお斷り申す』と云ひ放つた。

爾後數十年の後、河野廣中翁が此の事を記憶して、

『その節の德富さんには困り拔いた。』と云つた。

斯くて予の熱心は、遂に板垣伯と會見する事となつた。

それは駿河臺なる岩崎邸で、當時板垣伯は其處に寓居して居た。併し刺客の難後であれば、生面の客に面會する事は、板垣伯は兎も角も、その周圍の人々が餘程懸念したと見えて、壯士連が一度なら

ず、二度ならず、予を検問し、而して後予は漸く板垣伯の室に導かれた。

板垣伯は寫眞で見たよりも逢つて見れば、如何にも人間味のありさうな人にて、その音吐も朗かにて、何となく人を惹き付ける樣な感がした。予は如何なる事を申した歟、自分では一切記憶してゐないが、兎も角も予の云つた事は、伯に多少の印象を與へたものと見え、板垣伯は、

『近日から箱根に赴くから、話を聽き度ければ、其處まで來ても差支へない。』と云つたから、

『然らば左樣致すで御座らう』と云ふ事に取極めた。

予はやがて偶ゝ箱根迄赴く友人と同行し、神奈川から圓太郎馬車にて小田原に赴き、それから友人と共に堂ケ島に到り、予一人其處から芦の湯に赴き、板垣伯の宿――紀伊國屋か松坂屋か、孰れかの一――に赴き、その旨を通じたれば『差支へなし』との事にて、更らに又た堂ケ島に赴き、携へたる小荷物を肩にし、再び芦の湯に來り、炎天の下、草いきれのする茅の中の小徑を、芦の湯、堂ケ島間を三回程、膝栗毛を飛ばし、板垣伯と同宿する事となつた。

最初は宿の入口の側、しかも便所に近き薄暗き室に打込まれたが、やがて許されて板垣伯と同室する事になつた。板垣伯の室は大なる二階の二間打抜きにて、その一間が板垣伯の室であり、他の一間が隨行者の室であつた。隨行者の重なる者は、伯の祕書とも云ふべき栗原亮一氏、及び伯の聟なる

宮地茂春氏、その他數人の護衞とも云ふべき壯士であつた。予もその室に同居する事が出來て、初めて彼等の仲間に投じ、頗る愉快を覺えた。

板垣伯は只だ一介の武弁と思うてゐたが、逢つて見ればなか〳〵の論客であり、記憶力も確かであり、特に『孫子』十三篇等は暗記してゐる程であつた。暇ある毎に種々の昔語りなどをせられたが、特に會津戰爭の一齣などは、最もその得意とする所であつて、よくこれを聽かされたのみならず、容堂公の事、後藤象二郎伯の事、谷將軍の事など種々聽かされた。

又た土佐立志社の諸人物の評など、よく伯の口から聽いた。

板垣伯は狩りが好きで、當時は禁獵の季節であつたに拘らず、予等は伯に伴はれ、勢子の役目をつとめて、兎、雉等を追出しにかゝつたが、餘り獲物もなかつた樣であつた。

三　板垣伯との會見記錄

左に掲ぐるは、當時の記錄で、予が聽くに從ひ、その日〳〵に筆記したものである。

『溪雲漠々水冷々、萬峰堆裏の風景を愛るに非で、其の中に沈痾を養ふ賢者を尋ね訪はんと、遙々と

尋ね來し其の時は、明治十五年八月二日にてありき。

八月二日夜、板垣君の室に到る。君從容として問て曰く、

『九州改進黨解散の風聞あり、卿聞くや否や。』

余答て曰く、

『恐らくは誤傳ならん。』

曰く、

『然れども立憲政黨新聞にあり。』

『然らば資本に究したる事ならん。』此より政黨の談にわたる。君曰く、

『專制政府の下政黨の成立するは實に六ケ敷事なり。我が自由黨の如きも、早晩解散せらるゝ事ある可し。此等の事は覺悟せざるに非ざれども、正大なる手段を以て公然と政黨抔くみ立るは、是れ退助が政府に向ての親切なり。且つ我國人の輕擧事を誤るが如き、又土地偏著心抔の如き、色々の惡風を洗濯するには、是非政黨の形體上に成立せられねばならぬ必用もあるにぞかくは成すものゝ、去りとて解散せられしならば、彌々其の時に存るものこそ鐵石心のものにて、却て吾人の試金石とも申す可きか』是より一般の主義論に遷る。君曰く、

『凡政治社會に立つもの丶土地偏著心は愚か、偏頗なる心にては行ぬ事なり。實に四海兄弟の公平寛大なる心を以て標準とせざる可らず。』

余曰く、

『實に尊命の如し。我が九州の如き其の有爲の氣に富は、恰も火山の焔を吐くが如しと雖ども、惜矣哉千古の大道理を見破し、之を基礎として總ての事を所置し、之を主義として、之を保障とし、之と死生存亡を共にするが如き人に乏しきは、實に遺憾の至にて候。』

君曰く、

『然り。實に我が國の時處位より考るに、今日は決して武を以て國を立る時に非ず。正に今日西洋諸國に匱乏したる正理公道を以て、萬國に鳴るが如き國柄とは致したし。是れ殊に單純なる道理上よりするのみならず、我が國の利益上に考るも、亦之を以て斷案とせざる可らず。』

余曰く、

『實に尊命の如し。彼の愛國心は偏頗心と云ふが如きは、實に道理の見合の附ぬ物の考と存じ候。嘗て福澤氏と斯々の話を致せり。』と申す。（中略）。

君曰く、

『一二を知ねば三を知る事能はず。如何ぞ一身一家を愛するを知らずして一國家を愛する事を知らんや。予にして假りに政權を取らしめば、干涉主義は愚か、强兵とて漫に兵士を養ふと云ふ事を止めにして、飽迄道理を以て立つ國となさしめんと欲す。』云々略す。

君曰く、

『世人の讒誣も亦甚しい哉。熊本抔に於ても、既にしか〴〵の事を鳴し候と聞くは無論、予は未だ共和論を主張せし事なく、亦た其の論を主張せんとするものでも無いが、然れども英國政體に於ても何が第一多きと申さば、先づ平民的分子が第一餘計ならん。』と申さる。余取り敢す、

『然り。凡そ代議の政府を作るには、尤も平民的分子あらさる可らず。然るに是を好んで彼を惡むは心得難き事なり。』と申す。

八月三日の朝。

余曰く、

『時勢の變化は後來如何成り行く御考なる哉。』

君曰く、

『然り。大凡時勢は大人豪傑の利導する所ならば、如此せんとすれば如此なり。左樣にせんとす

れば、左様になるものなり。若し一個の定見なくして、漫に世の先達者の意見を聞て奔走するものは、到底時勢を知らず。亦時勢に後るものぞかし。馬車の乗客が馬の騰揚奔逸するを見れば、實に危險にして掛念切なりと雖ども、御者に至りては悠々寛々、意に介せざる如き由縁のものは、他なし。唯其の負擔の心重く、之を御するの經綸あればなり。卿等亦國事に仰天するの乘客とならずして、國事を駕御するの御者たらん事を。余に於ても國勢を利導し如此とす可し。如斯せざる可らず。思ふ事多しと雖ども、固より岐阜遭難の如き、孰れの日死するやを知らざれば、到底余が思ふ如くなるや、否やを知らず。然れども民權自由の議論の如きは、決して磨滅する能はざる可し。且又政府の都合を見れば、全く平和之主義を捨、飽迄輿論に抗敵せんとするの勢あり。此の有様なれば廿三年迄、假令千百彌縫すと雖ども、とても其の時にならば國家は一大壞亂を來す可し。是所謂深溪の下には激湍あり。則ち自然の勢也。然れども斯る勢に至せぬこそ、朝野有志の責任なれ。」

余曰く、

「某の見込にては到底一義人の血を流さずして改革の行るゝは夢にも想はぬ所にて候。されば民間の有志にも固より必死の覺悟あり度事と考ふ。」

君曰く、
『然り。大丈夫一旦目的を定め、事を行はんとする、固より死の覺悟あらざる可らず。されど吾より事を始む、是固より事の已を得ざるに出るに非ず。亦固より條理の正しきものとなす可らず。唯條理を盡し、事の止に止れぬ大和魂と云ふ結局に至らば、所詮致し方なき事なり。九州地方の如きは、未だ主義を重ずるの心薄き故に、他の後に附くを恥て未だ大主義の爲めに、大局に注目するを知らず、早晩斯る陋見は飛び去ならんと待居るなり。嘗て馬場辰猪余に問て曰く、「死に處する難し。如何せば則ち死に處するの正を得ん」と、余答て曰く「人或馬場美濃に問て曰く、公は如何にして武勇抜群なるや。馬場曰く、余強を避け弱を撞く。此の事に付き四ヶ條あり」又曰く「敵を見るよりも味方の鋭氣を見て槍をさし入れよ。さる時は已れ獨りで犬死する樣な事なく、二番三番と驟雨の如く必らず敵を撞崩す可し」、と。』時に森脇直樹君東京より到る。余辭して座を立つ。
八月三日の夜。
余曰く、
『願くは左に陳する所の順序を以て高意を承る可きや。曰く、第一反對黨及び政黨自然の傾向たり。第二自由黨運動の都合なり。第三憲法及び施政上の事。第四如何なる所以を以て我が日本國は

道義によりて國を立ねばならぬと申す思想の順序は出來たるや。總て右等の箇條なり。」

君曰く、

『今よりして政黨の模樣は如何なる可きや。大凡物平均を欲せざるはなし。亞細亞の歐羅巴に於ける、民權自由の壓抑專制に於ける、其の平均を求むる力は、其の不平均の度に從て彌厚きを加るものなれば、我國に於て反動の勢ある亦あやしむに足らず。唯恐る我が自由黨の如き、今日に於ては旣に政府よりも民間の一部分に於ても、過激粗暴の惡評を被ると雖ども、是他日猶一層の激烈單純なる黨派興起せば、我輩は陳腐因循の譏を免るゝ能はざるを。而して之を例するに幕末の時に於て、容堂、春嶽の二公の如き、幕府の怒に觸れ、幽閉せられたる、時勢の止を得ざるにより、急に政府に登用せられたるも、旣に激徒を制し、人心を滿足せしむる事能はざりき。彼の佐久間の如き公平正大なる議論を主張し居たるも、端なく殺され、亦西鄕、木戸等の如きに於て時勢を看破し、身を躍して風潮の中に入り、而して風潮を制せんとせり。他日に於ても亦如此事あらん。而して其の所置如何は豫め定む可きに非ざるも、若し此の時風潮の中に入り、風潮を制する人なくんば、我輩は甚恐矣。』

余曰く、

『帝政黨後來の命脈は如何』

君曰く、

『是私黨なり。必ず他日爲にする事の、滅すれば從て滅す可し。彼の三人は――福地源一郎、丸山作樂、水野寅次郎――何人ぞや。皆節操なき僻邪の小人と云はざる可らず。所謂余が眼を以てするときは、眞成の守舊黨は彼の改進黨にあり。試に觀よ。彼輩の綱領は皆老人富者の好む所を求めて作爲したるものにして、其の心事察するに餘りあり。況んや此の老人富者を驅て俗吏輩の事を行はんとするは、豈亦難からずや。今後の事猶鐵壁の未だ與らさる可らさる所あり。』云々。

曰く、

『然らば尊王黨なるものは生ぜざるか』

曰く、

『今日の所にても誰も□□の黨を結ぶものもなければ、之に反對するが爲めに、格別に尊王黨を結ぶ事もあるまじき筈なり。』

曰く、

『嚶鳴社の貴黨に合せざるは、抑も主義によるか、將た情實によるか。』

曰く、

『情實なり。第一沼間守一が予と河野（敏鎌）を和解せんと欲する中、大阪立憲政黨より予及び中島（信行）に總理の任を乞たるも、共に辭したれば、該委員小島忠里は詮方なく河野敏鎌に向て其の任に當らん事を乞たるに、彼曰く「諾、然れども余板垣君と異論あり。夫に差支なければ余は諾せん」と、其の中終に中島が行く都合になりたれば、其の事止矣。是一原因なり。沼間予に向つて曰く「君の尤も信用する七八名を組織して內閣を做さんと欲す」と。是れ余が尤も諾せざる所にして、第二因。彼曰く「余精神の人を愛して學士を愛せず」と。第三因。是より終に模糊の中になりける。然も彼の氣節ある田口（卯吉）田中（耕造）輩は、既に其の社よりして我に來れり』と。

八月四日の朝。今朝より板垣君の室に移る。

憲法及び施政の事。

『憲法の事は込み入りたる事多し。固より一朝に云ひ盡す可きにも非ずと雖ども、先づ一局議院にて普通選擧する事を宜敷事とす。併し是等の事は全國の輿論によりて左右するものなれば、余は飽迄も意見を立通と云ふ積りには無之。但し若し貴族院（上院）にするならば、余は飽迄不同意を唱へざる可らず。何となれば人間に階級抔を設るは、決してある間敷筈なればなり。』

余曰く、

『高論の如しと雖ども、二局議院抔の論の如きは、到底利益はなきものと信ずれば、飽迄もつまらぬ物を作り、我々のみか、後世迄の迷惑を殘さぬ樣に致度存ず。』

君曰く、

『成程余の考にては、政治家となる程うるさきものはなし。何となれば政治家は常に一般愚人の仲間入をせねばならず。是程困る事はなけれども、今日の危究實に見るに忍ぬ事故、此の如く塵世に奔走するなり。余が畢世の願は無邊の境堺に逍遙し、神心の知識を馳騁し、書を著し、道を論じ、百世子孫を益する事こそ本意なれ。』

余曰く、

『然り。然れども此の事たる何の日に全く望を遂し給ふや敢て知る可らず。唯願くは政黨の首領たる資格と、一個人たるの資格を以て暫く此の世に立ち給はん事を。先生の全く政治社會に墮落し給ふは、實に生の欲する所に非ず』と云ふ。君頷く。

是より九州と自由黨と親和す可き事に附て、段々と陳述せり。』

當時は隨分來客もあつた樣であるが、予の記憶に留るのは、何か朝鮮に事變が起つた爲に、大石正

巳氏が急ぎの駕籠に打乘つて、伯を訪問した事だ。大きなる漢が小さき山駕籠にはみ出すばかりであつたから、よくそれを覺えてゐる。

併し當時の板垣伯は民權論一點張りであつて、國權論には左程多くの興味も持たなかつた樣だ。

四　東京に於ける交遊

◇田口卯吉、中江兆民、馬場辰猪の諸氏

當時自由黨は『自由新聞』なるものを發行してゐた。これは全く素人のつくつた新聞であつて、新聞としては價値が無かつたであらうが、予は板垣伯を尊信する餘りに、初號からの購讀者であつた。當時『自由新聞』の社說は、田口卯吉、馬場辰猪、中江篤介、末廣重恭、土居光華、植木枝盛その他諸氏の筆になると云ふ事であつたが、その大部分は殆ど田口卯吉君が書いてゐた。田口君は嚶鳴社出身であつて、島田三郎氏等と親友であり、當然大隈伯の改進黨に赴くべき人であつたが、君は大隈伯が保護貿易者であり、自らが自由貿易者であるが爲に、從來大隈伯の政策に屬よく反對したる行掛り上、その傘下に趨くを屑しとせず。さりとて自由黨に加入する程にもすゝます、

客員として筆を執てゐた。予はかねて田口君の『經濟雜誌』を愛讀して、尠からずその文章と議論とに感服したが、今この論說を讀んで、是非會見して見度いと希望してゐたが、板垣伯などは、予が高く買ふ程には田口君を買つてゐなかつたものと見えて、別にこれを勸めもしなかつた。

　田口君以外に予が交際したのは中江篤介君であつた。君は當時靑山墓地の傍に大なる長屋門のある家に住し、一方には番町に佛學塾などを開きて、門戶を張つてゐた。この人は顏に痘痕があり、雀斑があり、瘦ぎすの小柄にて、何等風采の人を動かすものはなかつたが、その額は案外に廣く、その眼は小さかつたが、キラリと光つて居り、その脣は薄かつたが、寧ろ銳敏なる才氣を示して、輕薄を示さなかつた。

　當時旣に中江氏は奇行家として世に認識せられてゐた。板垣伯も中江氏に對しては、何事も諦めて居た。極めて潔癖家で、手を洗ふ際にも殆ど手桶一杯の水を要し、旅行する時には箸や、茶碗を持參せねばならぬと云ふ樣なる板垣伯も、中江君が極めて不潔なる肉體の部分に接觸せしめたる酒杯を、その儘受取つて、呑み干さねばならぬ始末に立ち到つたなどは、困つたであらうが、困りながらも別に怒る事もなかつた。

　予はかねて岡松先生から中江氏が佛蘭西學者にして、特に漢文の達者なる事を聽いてゐたが、それ

よりも予は中江氏がルッソーの『民約論』の宣傳者であり、自由黨に向つて、恰も黨師の如き位置を占めてゐる事を、看過し能はなかつた。

或日友人と共に中江氏の青山宅を訪うた。午前であつたらう。明治十五年の夏は、東京は虎列刺が大流行であつたが、中江氏は何やら琥珀色の液體をコップに注ぎ、『これはコレラ除けの藥である。德富さん一杯如何です』と差出した。予も聊か躊躇したが、中江氏は固より、同伴の者もこれを飮んだから、予も安心して一杯呑み干した。やがて予は予の腦中に千軍萬馬の往來するが如き心持を覺え、その以後は殆ど萬事を忘却し去つた。

偶〻目覺れば予は中江氏の鐵のベッドの上に横はり、日影は旣に庭に落ちてゐる。最早や午後三四時頃であらう。全く中江氏に一杯食はされたのではなく、飮まされたのだ。併し中江氏はその申譯でもあつた歟、その書棚の中にある多くの佛蘭西書の中から、英文のロックの『ヒュウマン・アンダースタンデング』と、チャールス・デッケンスの『少年用英國史』とを拍き出して予に與へた。予は哲學には興味を持たなかつたから、それを友人元良勇次郎君に呈した。デッケンスの『少年用英國史』も誰にか贈つたものと思ふ。

それは兎も角も、予は爾來中江氏の死に抵る迄、親友と云ふ能はずんば、尠くともそれに幾き者の

一人であつた。

予が當時面會して、最も啓發されたのは馬場辰猪君であつた。當時『共存同衆』なるものが日吉町にあり、その傍に會館があつた。即ち演說堂である。その堂がやがては國民新聞社發祥の家である。予は屢〻其處に傍聽に出掛けた。其處は演說者も知識階級であり、傍聽者も知識階級であつた。馬場辰猪、小野梓等と云ふ人が、その中でも最も錚々たる人であつた。當時雄辯家と云へば、先づ馬場氏を推さぬ者はなかつた。土佐人には本來雄辯家が多いが、馬場氏は土佐人の中にても、最も秀いでたる一人であつた。

當時馬場氏の裏面は兎も角も、表面は獨身生活にて、共存同衆演說館の裏手なる三等煉瓦――舊國民新聞社の裏通り――の二階屋に下宿してゐた。予はその所に馬場氏を訪うたが、予の從來見た所では、君程の好男子はあるまいと思ふ。さりとて別に厭味はなく、唯だ綺麗さつぱりで、何等田舍臭き所もなく、さりとて江戸兒の强がりもなく、紳士の風采とは斯くもある可きものかと思はしめた。併し君は本來の熱血男兒で、喧嘩は何よりも好物であつたらしい。予は約束の時間に君を訪ねたが、君は未だ歸つて來なかつたから、予は暫時待ち受けてゐた。君はその申譯に、何處とかの演說會に赴きたる歸途、巡査が不都合であつたから、それを聊かこらしめた爲に、覺えず時間が遅れたと理

つた。
君の言論は別に餘韻はなかつたが、必ず是を是とし、非を非とし、極めて明白であつた。且つ頗る獨自性の强き人であつたと見え、誰の事を訊いても、餘り感心しなかつた樣である。板垣伯などの事も殊更ら尊敬してゐる樣にも見えなかつた。
君はその自ら著したる英文の『日本條約改正論』や『日本文法論』を予に與へて曰く、
『森有禮氏は日本には文法らしき文法はない。故に日本文は規則立つて綴るわけにはゆかぬと云つたから、予はそれを事實の上に辯駁すべく、殊更此に日本文法論を著したのだ』
と。馬場氏は少年の時から倫敦に留學し、國漢學の方は果して幾何の造詣あつた乎知らぬが、自ら信ずる事に忠なる事は、全くその通りであつた。
それから更に予に語つて云ふには、
『政治の事を知るには、憲法とか、法律とか、歷史とか種々あるが、併し眞に政治の運用を知るには、政治家の傳記を讀まねばならぬ。それには先づ斯る本を一讀あれ』
とて、予にはその讀みさらしの本を出して與へた。その一はモルレー卿の『コブデン傳』を民衆版として出版したもの。他は又た米國アップルトン書肆に於いて、叢書の一として、民衆相手に刊行した

るビーコンスフィールドの評傳であつた。

この二書は予にとつて天啓であつた。予はこれに依つて初めて、ロード・モルレーを知り、コブデンを知り、ブライトを知り、――固よりコブデン、ブライトの名は、同志社にて經濟學を、ラーネッド氏に授つた時に聽いたが――マンチェスター・スクールを知る事が出來た。元來予の政治思想は、横井小楠から發足し、新島先生の基督教の感化を受けたものであつて、マンチェスター・スクールの論旨が予に感應したるは、恰も水乳投合したる趣があつた。

予は又たビーコンスフィールドの傳によつて、更に同人の著書エンデミオン、コニングスビー其他を讀む事が出來、始めてマンチェスター・スクール以外に、又た一種の政治的雰圍氣のある事をも知つた。

兎に角予の馬場君を見る事は、僅か數回であつて、恐らくは馬場君は予を記憶しなかつたかも知れぬが、予にとつては實に大なる啓發であつた。

五　板垣伯洋行費問題

◇相愛社代表として予の再上京

要するに明治十五年の夏期の上京は、予にとつては多大の得物があつた。然るに同年の秋の末、冬の初になつて、板垣伯洋行の問題が起り、自由黨內に異論紛出した。此は第一、當時洋行の時期に非ずと云ふ事、第二、その洋行費の出所が甚だ明瞭を缺くと云ふ、この二點であつた。而してこの反對者の最も主なる者は、馬場、大石、末廣三氏にて、彼等は自由黨から分離して、獨立黨を組織した。而して田口卯吉君抔も、その問題に就ては如何であつたか知ぬが、氣を腐らして『自由新聞』を去り、從つて『自由新聞』は全く古澤滋氏によつてその筆政を司らるゝ事となつた。古澤氏はこれ迄大阪に在て、大阪に於る近畿自由黨の新聞――立憲政黨新聞――を主宰してゐたが、板垣伯其他の慫慂にて、愈ょ東京に出で來つて『自由新聞』の筆政を司る事となつた。

この騷ぎに就いて、本部から各地に向つて代表者を出すべく電報が來た。相愛社の方でも適當なる人がないから、予に上京して貰ひ度いとの事であつたから、歸來未だ幾何もならなかつたが、予は

欣然としてこれに應じ、再び東京に赴いた。大江義塾の教務は、甚だ多端であつたに拘らず。

予は今板垣伯の洋行費の出所の何れからするかは、明言する必要は無い。板垣伯の側では、大和の富豪土倉庄三郎氏が出す事になつたと云つてゐた。表向きはこの通りであらう。併しこの洋行費問題には板垣伯は知つて居た乎居ない乎。後藤象二郎伯が恐らくはその張本人乎、さなくも主なる張本人の一人であらう。而して其の背後に一種の魂膽が存したことは間違あるまい。

當時板垣伯は病んで、高輪なる後藤象二郎伯の邸に寓してゐた。予は青山南町の中江氏宅から、二人乗りの人力車に中江氏と合乘し、高輪なる板垣伯を訪問した事を記憶してゐる。

贊成も不贊成も論外だ。事は既に決定つてゐる。予は一通りの事情を聽いて、唯だこれを國許の政友に報告するだけの義務を盡せば足るのだ。唯だ世の中は實に『三日見ぬ間の櫻哉』と云つた通りで、『自由新聞』などは盛んに馬場、大石、末廣氏等に向つて、惡聲を放つてゐたのみならず、是迄さへも互に快くなかつた自由黨と改進黨とが、この一事からして表向きの喧嘩となり、『自由新聞』などは盛んに、改進黨中、就中河野敏鎌、沼間守一氏等の一派を攻撃してゐた。其の筆鋒の惡辣であつたことは、正しく古澤滋氏であることを思はしめた。

民間兩黨の軋轢は、明治政府にとつては、此上なき仕合せであつて、この喧嘩の種は誰が播いた乎

それは知る人ぞ知るであらう。

六　肥薩の青年を伴ひ高知巡禮

◇片岡健吉、谷重喜、西山志澄、宮地茂春諸氏と會見

明治十七年の夏期には、大江義塾の學生數名、及び鹿兒島宮之城の青年數名を伴ひ、土佐に赴く事とした。當時土佐は民權自由論の發祥地にして、苟くも天下の改革に志ある者は、孰れも土佐を中心とせぬ者はなかつた。固より當時は既に大隈侯を中心とする改進黨なるものが出で來り、民間黨は自ら二派に分れてゐたが、然も自由黨が本家本元であり、その自由黨の本家本元が又た土佐であるかの如き觀をなしたから、予等が土佐に巡禮を企てたのも、良に當然の事であつた。宮之城の青年には寧ろ予と同年、若くは年長の者が多く、中には十年の役に從軍したる者もあつた樣だ。それは當時宮之城に居た阿部充家氏が誘うて來た。

兎も角も肥薩の靑少年は孰れも相率ゐて勇ましく、阿蘇山の外輪山を越えて別府に到り、それより四國に渡る事となつた。然るに此で一つの議論が湧き出した。それは薩摩連は和船にて渡らんと云

ひ、熊本連は汽船にて渡らんと云つた。熊本連が、『和船では危險である』と云へば、『それでは神功皇后の三韓征伐には、如何なる船にて出かけたのであろ乎』等と、隨分議論も盛んであつたが、遂に汽船に乘り、三津ケ濱に上陸し、松山を經て高知に入る事になつた。

予は今治に横井時雄氏が居たから、予の叔母に面會旁々立寄る事となり、予は大江義塾の幹部の一人、戸波易治氏を伴ひ、今治に到り、それより和船に乘りて新居濱に至り、西條から別子銅山を經て高知に入つた。元來此の道は豫ねて世に聞えたる四國横斷道路中、最も嶮岨にして、別子銅山から先は車は愚か、馬も牛も通はぬ程の嶮岨にて、予等は漸く何とか云ふ一軒の山小屋に到着し、そこに一夜を明したが、同行の戸波氏は足を腫して歩行甚だ惱み、別に藥もないから、樵人の敎に從ひ、呪ひとて何やら呪文を唱へ、小豆三粒を水に浮して一口に呑み下した。呪が利いたか如何乎は判らぬが、兎に角翌日は出立し、山又た山、坂又た坂を越えて、漸く手の掌程の平地を見出したる時には、何となく新天地を發見したるかの如き心持がした。

斯くて一行は孰れも高知にて相合した。予等が高知に行く以前、高知の壯年志士板垣伯の愛婿宮地茂春氏外數氏は、九州を遍歷し、吾が大江義塾をも訪問し、互に交驩してゐたのみならず、予は前にも記したる通り、板垣伯及び土佐の重なる人々とも交際があつたから、予等は分不相應に高知人士か

ら待遇せられた。斯くて予等は彼等の社にそれ〴〵投宿した。

當時高知の壯年、青年團體は、その方角々々に社を結び、そこを本部とし、集會所とし、互に演說討論をなし、若くは擊劍、柔道をなしてゐた。或は發揚社と云ひ、或は嶽洋社と云ひ、或は修立社と云ひ、その他まだ幾何もあつたであらう。

予は當時高知の先輩諸氏を訪うて、種々その意見を聽いた。その中には片岡健吉、西山志澄、谷重喜氏等があつた。その中でも谷重喜氏は谷干城將軍の同姓にて、しかも板垣伯の說に依れば、干城將軍よりも實戰は上手であつたといふ事であつたが、當時は專ら吸江に小舟を浮べて釣を樂んでゐた。板垣伯は海外から歸つて東京に居り、土佐には居なかつた。

予等は專ら壯年の諸君と交際したが、彼等は別に讀書をするでもなく、學問をするでもなく、唯だ悲憤慷慨して酒を飲んでゐた。予はその情態を見て、今日では土佐の勢力が猶ほ天下を制せんとしつつあるが、二十三年國會開設の後に於ては、如何ある可き乎と、聊か懸念せざるを得なかつた。而して土佐の先輩がその後輩を導くに於て、或はその方法を誤りはしまい乎と憂慮した。

そは兎も角も予等は新地の得月樓といふ處で宴會に招かれたが、予等が會場に至る頃には、壯士の面々は既に醉うて、踊り出さんとする者さへあつた。予等は又た川狩り等にも案內せられた。予は

同行の阿部光家氏と潮江の宮地茂春氏の家に寓する事となり、阿部氏は唯一の身に著くる浴衣を盜まれたから、宮地氏の夫人、即ち板垣伯の令孃から、新らしき浴衣を縫うて貰ひ、之を著けた。

七　高知、東京より熊本へ

◇福澤諭吉翁と語る

◇大江義塾に於ける予の講義

斯くて予は諸氏に別れて高知より大阪に赴き、京都に至り、それから東海道を四日市に、四日市から乘船して東京に赴いた。東京には明治十五年夏、秋二回の滯在中、新たに得たる友人も多かつたから、それ等の者と交際した。

猶ほ當時自由黨には築地に唯一館と稱し、壯士の本部があつた。其處にも遊びに行つたが、これと云ふ目ぼしき人物をも發見しなかつた。但だ當時予の記憶に殘つたのは、福澤諭吉翁に面會したる事である。

これは予の從兄江口高邦に伴はれて赴いた。江口は福澤翁の愛弟子の一人にて、その東京府會議員

に選擧せられた時には、翁の財産を借りてその資格を作つた程であると聞いてゐる。されば予が彼に伴はれて福澤翁と相見る事を得たのは、當然の事であつた。

予は平生福澤翁の立言に餘り多く感心せず、特に當時翁が官民調和論を唱へ、姑息の妥協論を主張するかの如く考へられて、頗る不滿であつたから、予は出會ひ頭に、

『先生は學者として世に立たれる積り乎、政治家として世に立たれる積り乎。學者ならば千古の眞理を探明するが目的であり、政治家ならば當今の務に應ずるが當然であらうが、先生の所論は何れとも予には判斷しかねる』

と云つたら、福澤翁はその質問に答へず、

『貴君は書物を讀む乎』と訊いたから、

『勿論讀んでゐる』と答へた。翁は、

『孰れ貴君が書物を讀めば、追つて判るであらう』との事で、話はそれで濟んだが、歸途に江口は予に向つて、

『初見の先生に左樣な議論を吹掛くるなどゝは、餘りに大膽すぎる。』と、頻りに予をたしなめた。

爾來予は福澤翁と相見るの機會がなかつたが、明治二十幾年かであらう。予が芝浦の海水浴旅館に、

金玉均氏と對話の節、一人の田舍爺がつか〳〵と入り來り、造作もなげに金玉均氏と話すを見れば、紛らひもなき福澤翁であつた。それで予は自ら名乘る必要もなく、唯だ一通りの禮をした。予が親しく福澤翁と相見たのは、此の二回であり、三回目には翁の死後、翁の宅を訪ひ、その靈に向つて一抹の香を焚いた。(再考するに福澤翁と予が會見したのは、明治十五年の夏であつた。當時予は此事を、箱根蘆の湯に於て板垣伯に語りてゐるから。)

予は自由黨が兎角空論に流れ易く、偶ゝ實行に取掛るものがあれば、それは所謂る直接行動にて、武力に訴ふるの行動となり、改進黨が知識、財産を誇りとして、英國派の改革論を唱ふるも、何となく因循姑息、正直のところ、佛蘭西流の自由黨にも、英國流の改進黨にも、何れも慊らぬ所があり、此上は只だ自分は自分だけで勉強するの外なしと考へ、一生懸命に大江義塾に在つて、講學を勉めることゝした。

固より予の學問と云ふものは、別段系統もなかつたが、予は學生には普通學課の外、吉田松陰の『幽室文稿』や、『戰國策』、『史記』などを講じ、又た『英國憲法史』、『經濟學』等は種々予が讀んだる本を種本としてそれを講義した。而して予は出來得る程度に於て專ら歷史、政治、社會、經濟、文學等、手當り次第の本を讀んだ。その中に於て最も予を益したのは、マコレーの『英國史』、プルタークの

『英雄傳』と、トクブウィルの『デモクラシー・イン・アメリカ（Democracy in America）』翻譯の『二十二史劄記』等であつた。

大江義塾の設立當初は、『東萊博議』を講義したが、後にはそれが何となく鼻について、あまり用ひなかつた。『二十二史劄記』は明治十五年田口卯吉氏に面會の頃、氏からその好書である事を聽き、書中に於ける、『三國志』中の玄德、曹操、孫權に關する人物論などを語り聽かされ、歸途京都の竹苞樓に於て購ひ歸つた。而して正しく田口氏の言語を欺かざるを知つた。

その外にも予を益したのは、京都同志社教授ラーネッド氏に依つて、米國から『ネーション』、及び『ライブラリー・マガジン』などを購讀したる事だ。『ネーション』は當時が最も盛んなる時で、その中の特別寄書は、特に予が愛讀する所であつた。特別寄書は、米國以外の諸大家から寄するものにて、その中にはブライス、ダイシーその他英國、佛國の有名なる大家が揃うてゐた。又たその新聞の社説及び評論は、ゴッドキン、若くはギャリソンの手になつたものらしく、頗る卓越してゐた。『ライブラリー・マガジン』は、凡有る雜誌から面白く、且つ有益なる文を轉載したるものにて、田舍にある書生には、最も調寶であつた。

八　熊本に於ける最初の著述

予が大江義塾生活中成したる、幾多の著述は、皆なこれ等の讀書及び默想の中より出で來つたものと云ふも差支へあるまい。この間に於て予が熊本に歸つて、最初に筆をとつた『東肥新報』は旣に廢刊したが、予は『熊本新聞』の客員としてこれに投書した。又た東京に於ける小崎弘道氏等が發刊したる『毎週新報』にも投書したが、その投書が祟をなして、遂に『毎週新報』は發行停止を申付けられた。『毎週新報』は要するに、基督教を主とする雜誌であつたが、それに激烈なる政治論を、しかも幾回となく重ねたから、遂に此に至つたのであらう。

その他可成り予の製作もあつた。その中でも小冊子として私に刊行し、これを有志に配つたものゝ中で、その最初に出來たのが『明治二十三年後の政治家の資格を論ず』と云ふものである。今予が筆をとつて私刊したる此の小冊子の空白に記したるものを見れば、

『明治十五年十月の上旬、余中江氏と共に板垣君を高輪の後藤邸に訪ふ。君病んで蓐にあり。余に語て曰く、德富君よ之を一讀せられよ。是れ余が近日の議論なりと。乃ち自由新聞一葉を出して示

さる。余之を讀み、感激自から禁ずる能はず、爾來居就之を思ひ、益熱矣。而して馬高禮氏英國史を讀み、愈ゝ大に感奮する所あり。之を筆せんと欲して不果、本年一月の初め僅少なる時間を偸み、日南――日奈久溫泉――に赴き、微恙を養ふを得、是に於て孤枕半夜聽風潮聲の際、吟哦夕陽對江山景の時、略ぼ腹稿を構へ、歸來匆々之を成せり。」と。卽ちこの書は實に明治十七年一月に成りたるもの。然るに此書は頗る好評を博し、田口卯吉君は左の如き書を寄せ來つた。

「拜啓。此程は尊文を拜讀し轉た爽快の情を覺ゆ。嘗て拜顏を得たりしときは、唯だ思らく政治に熱心なる人のみと。何ぞ料らん又た文壇の巨擘ならんとは。維新以來文章の見る可きもの少し。尊文の如きは其比を見る能はざる也。僕嘗て徂徠の文を讀み、往日肥後に水秀才ありしを知る。水秀才早く死す。貴下請ふ自愛せよ。二十三年以後の事、財政尤も注意すべきか、豫め尊慮を勞せられん事を希望する也。匆々頓首。

田口卯吉

徳富秀才机下」

斯る次第にて、最初の私刊は乍ち配布し切つたから、再びこれを印刷し、配布する事とした。予は

田口氏の此の書簡に依り、尠からざる自信力を獲得した。これは長く田口氏に向つて德とすべきであらう。その外明治十七年十二月には、『自由、道德、及儒教主義』なる一册を成した。十八年六月には、『第十九世紀日本の青年及其敎育』を成した。これが他日『新日本の青年』と改題して、世間に出で來つたるものである。又た『官民調和論』抔といふものもあつた。これ等の著述は今日から見れば、殆ど一笑にも價せぬが、當時に於ては讀者に多少の刺戟を與へたる事は、予が慚愧止む能はさる所である。

西溪探梅（明治十五年　二十歳）

氷魂雪魄歳寒時。苦節之中有逸姿。
吾是人間耽癖客。空山還過舊相知。

東遊口占

隙駒驅我我還驚。年少唯須事遠征。
此志唯希觀形勢。斯行豈敢華崢嶸。
風雲萬里拓壯思。山水千程寄客情。
堪想江灘天曉處。芙蓉一笑揖吾迎。

京攝途上

兵庫北去幾何程。住吉茨田取次行。
一抹斜陽山崎路。天臺山色太分明。

是舊盟

淹留六載豈無情。鴨水東山是舊盟。
今日相看儂多慚。依然落拓一書生。

關原

岩手古城山莽蒼。茫茫野草接天長。
書生無策蘇天下。漫指戰場論興亡。

木曾道中 節錄

夾水層巒翠插天。濛濛山驛雨成烟。
平生愛誦賴翁句。句裏風光落眼邊。
仰看萬嶽陳前頭。蘇水如雷劈石流。
行客不禁衣褐冷。連天綠雨信濃州。

十三峰

尺幅高天亂嶂封。重重危棧更重重。
客途陵咏賴誰報。怪雨盲風十三峰。

和田嶺

參天老樹擁崔嵬。咫尺糢糊大霧催。
馬上征人肝膽落。萬峰風雨一時來。

淺間山

突兀奇峰聳碧蒼。群山以外勢飛揚。
問君何有不平事。吐出光炎萬丈長。

碓氷嶺

平遠茫茫望快哉。八州之野眼中開。

啼鵑梅雨岐蘇路。　踏破千山萬壑來。

入東京

一條官道馬蹄忙。　滿望平疇連翠蒼。
鞍上敲詩未成句。　板橋朝雨入東京。

函嶺雜詩　三首

老檜參差高似雲。　遥澗湍水響幽聞。
深宵人定萬峰寂。　一穗青燈獨草文」。
萬峰壁立畫冥冥。　積翠壓家天地青。
高誦王詩倚欄角。　心中烟火亦冷冷」。
王陽明句曰、溪雲漠漠水冷冷
健兒肩鐵韓塵隨。　雨後涼風野草肥。
亦是英雄閑事業。　滿山斜日獵狐歸」。
時從板垣無形先生在薫湯相伴遊覽

題畫

寥廓秋天望不涯。　白波紅葉相映奇。
莫是詞人欣賞處。　立杖江山落照時。

須磨

一谷堡頭荒草茸。　須磨寺畔夕陽春。
英魂髣髴激餘怒。　老樹風高鐵拐峰。

舞妓灣

舞妓灣頭坐石磯。　江山秋色入斜暉。
風景依稀幽翁句。　漁艇一帆天上歸。

豐州途上

野蹊旁叢草間蛇。　夕日蕭深帽影斜。
一笑渠儂無氣力。　秋風吹倒女郎花。

此　遊

此遊恰似敵也風。　天地闊宏氣象雄。
遠海岐山壯觀外。　別看當世韓魏公。

庭　前　紅　梅　（明治十六年　二十二歲）

幽靜丰容春到遲。　紅唇半發任風吹。
不知妙質難持處。　一片芳心好向誰。

太　郎　嶺

世外烟霞塵事非。　靜中默契見天機。
山蹊盡日行人少。　春鳥一聲花自飛。

偶　成

虞夏周秦取次過。　喜顛悲倒竟如何。
請看洶湧無邊海。　捲去一波還一波。

橡　溪　雜　詩　節錄

黑雲擁岳晝冥冥。　驀地銀彈迸小亭。
一任溪風吹散去。　夕陽山色雨痕青。
雨收前嶂翠光鮮。　浴後憑欄人欲仙。
乍有微風起林澗。　送來嵐氣落眉邊。
入山去復出山來。　十日閑遊意快哉。
此際人間有何事。　案頭新紙白堆堆。

苦雨嘆

秋霖彌旬。叨覺無聊矣。偶閲米國詩人老温克邊路氏之集至于苦雨嘆。欣然有所會於意。試譯之。示同社諸友。且以自慰。

白日迷濛天氣凄其。慘風索索苦雨霏霏。
女蘿無力倚彼壞壁。枯葉淅瀝疾風所激。
白日迷濛而凄其。

吾生迷濛吾懷凄其。慘風颯颯苦雨霏霏。
壯圖如綫繫吾臆記。宿志蹉跎狂颶所使。
終日迷濛而凄其。

將抑且靜安爾囚魂。密雲蔽日輝光猶存。
衆人所同薄運奚感。十日天晴一日雨滴。
一日迷濛而凄其。

小金峰絶頂夜宿

天高北斗爍光芒。萬象沈沈秋氣清。
提劍壯吟山欲裂。寒林老木一時鳴。

郡浦即目　二首

松堤曝網釣舟閑。秋動波痕鷗影間。
冷落詩情堪畫處。半灣斜照一帆還。

秋水蘆花肥碧鱸。淡烟斜日片帆孤。
天公也有丹青手。描出江山落照圖。

託摩原

極目原頭風淅淅。黄雲滿地接蒼烟。
斜陽如畫山一角。秋在吟筇指點邊。

橡溪曉行

黃葉碧潭雲不成。曉風殘月詠詩行。
天機活動君看取。古木長林秋有聲。

又

吟許一界白皚皚。天外風峰舞色開。
欲識餘山清絕處。五更風雪出家來。

第六章　『將來之日本』出版と『國民之友』創刊當時

一　兩親に一任せる予の結婚

予が明治十七年高知から京阪、東京遊歴中に、予の一身にとつて重大なる出來事があつた。それは予の留守中に予の兩親が予の妻を迎へたる事であつた。花聟無しの結婚などは、世界に比類少き例であるが、予は偶然にもその例に廻り合せた。併し斷つておくが、これは予の兩親の專斷ではない。兩親は正しく予の委任したる所を遂行したる迄であつた。

扨も予が東京から明治十三年歸鄉後は、予も亦た父と共に、時としては父に代つて家政に關係する事となり、從つて明治十六年家督相續をし、父は隱居となつた。つまり吾家には隱居が二人出來たわけだ。祖父は水俣に隱居し、父は予と同居して隱居してゐた。家督相續と同時に、結婚は必然の問題

となつた。

予は結婚に就いて別に一個の見識があつたと云はぬが、併し予が同志社に居る頃、予の先輩の或る人々は可成り結婚問題に惱まされ、これが爲に物議を起した事もあつた。されば予は初から結婚に就いては餘り多きを望まず、これを寧ろ運命に一任せんと決心した。そは如何に手を代へ、品を代へ、良き配偶者を得んとしても、その得たるものが案外なる失敗に終りたる例もあり、又た無頓著にて結婚したる者が案外に成功したるものもあり、何れにしてもこれは人力よりも天運でありと諦めたから、已に天運であれば左程心配するは徒勞であると考へ、一切これを人手に任すことゝした。人手と云ふが、先づ兩親に任するより外はないと考へた。

斯く考ふるに就いても、多少の理由が無い事はなかつた。と云ふは當時、予は親類、緣家には餘り評判よき漢ではなかつた。予の行狀と歟、予の品行と歟、予の性格と歟と云ふものに就いて、左程非難を蒙る可しとは思はなかつたが、予が家政を改革し、從來親類、緣家に對する態度を一變し、世間の交際の樣式に頓著せず、どん／＼やりつけたるを見て、予を變人、奇物と見るはまだしも『困つた者である』と思ふ者も尠くなかつた。左樣なる者に自家の最愛の女をやらうと云ふ者も多くはあるまじく、又た左樣な者に自ら嫁んとする者もあるまじく。されば種々の選り好みをなしたとて、とて

も思ふ樣にも參らぬであらうと諦らめたから、寧ろ吾より頓首再拜して貰ふ嫁よりも、相手方から喜んで與るゝ者を、貰ひ受くるに如かずと考へたのであつた。

されば予は何等選擇の標準をも兩親に告げず、一切を一任した。兩親は彼是諸方を當つた。又た中には予にその女を與れんと云ふ人もあり、或は萬々一には予の家嗣くは予に嫁せんとする者も、絶無と迄は斷言が出來なかつたかも知れぬが、それは予が知る所でもなく、又た關する所でもない。予は只だ兩親に一任したのだ。

兩親は何等面倒もなく、父の親友にして、且つ予の隣家とは云はざるも、殆どそれに類したる、先づ半哩位を隔てたる隣村の、倉園又三氏の女ツル子を選定した。別に媒酌人があるでもなく、父が向う方に赴き、云々の話をなし、それにて直ちに纏つたと云ふことだ。斯くて善は急げとて、予の留守中に向う方の父がその女を伴ひ、吾家に來りて、此にその式を擧げたが、その時に立合つたのは、横井の叔母であつたと云ふことだ。結婚の入費は幾何であつた乎、しかと聽かぬが、酒が一合、肴が若干と云ふ位で、手輕と云へばこれ以上の手輕はあるまい。

斯くて予が留守中に父は予の妻たるべき女を伴ひ水俣に赴き、予の祖父にも面會せしめ、親類等にも披露した。斯くて予が東京から歸るさに、父の書齋に婦人の讀書の聲が聞えるから、何やらんと思

うたら、父が予の妻たるべき者に四書の素讀を授けつゝあつたのだ。歸來取敢へず『これがお前の妻であり、これがお前の夫である』と兩親に紹介され、それから約半歳後に同棲する事となつた。

而して聟入りなども世間流の形式をはづし、友人二三と與に倉園家に赴き、予の舅が自ら釣り來りたる鰻の馳走になつて、それで一切を終うた。

倉園氏は舊藩政の末には、先づ熊本藩の大藏大臣であり、予の父は內務大臣の役を勤め、それから縣政になつても、當座は同僚として相勤め、安岡氏が縣令となつて來るに至り、又た相共に職を辭したるものであつた。予も父の執として倉園氏をよく知つてゐるし、又た妻の兄は大江義塾の創立後間もなく入門してゐたから、予は妻とは相見なかつたが、妻の家及び妻の父兄とは親しかつた。されば相見ても別に何ら珍らしき事もなく、爾來予の妻は今日まで予にとつて、缺くべからざる伴侶としてゐる。しかも右の次第であつたから、予の妻と予の父母とは頗る相得て居た。妻が餘りに予の母と仲が良いものであるから、妻を家女である乎の如くに考へ、

『お宅の旦那は御養子でありますか』

などと、途方もない質問を、母に向つて發した者さへあつた。予は全く盲目籤を引いたのであるが、先づ引き當てたと云つてもよからう。

淸白祖風今尙存。　齊家最賴孟光賢。
平生自覺饒二天惠一。　形影相依三十年。
而して今や更らに四十餘年となり、金婚式も旣に過ぎた。

二　祖父德富美信の永眠

これと同時に猶ほ記すべき事は明治十八年七月、予の祖父が歿した事だ。急病の報に接し、父と予は二十五里の道を心ばかり馳せつゝ、小さき和船にて急いだが、到着の時は旣に間に合はなかつた。祖父は八十九歲にて永眠する數日前までは、猶ほ日記をつけてゐた。祖父の死は種々の意味に於て予の一家に變化を及した。予は祖父より多大の信用を得、大江義塾增築などの際には、祖父より費用を出して貰つた程であつた。祖父は予の云ふ事には殆ど一切信用してゐた。併し予の父母は種々の理由及び事情に依つて、予の家の財産を減らしたる者として、尠くともその一點だけは、予の祖父に信用を得なかつた。

而して予の母方の親類一統が、餘りに蔓り過ぎるとて、それも予の祖父には釋然たらなかつた。祖

父は屢々予に向つて支那や日本の歴史にも、外戚が餘り威張るのは宜しくない抔と云つて、その例を引き、予に戒め告ぐるところがあつた。祖父が熊本より水俣の隱宅に再び歸へりて、吾家と二十五里を隔てゝ隱居してゐた間は、家の小作料などは、悉く擧げて祖父の收入となつてゐた。然るに祖父の永眠と共に、それ等のものが吾家の收入に歸する事になつてから、これ迄の經濟上の苦痛は、幾何か緩和せらるゝ事となつた。

而して予は父と與に祖父の遺產等に就いても、迅速にそれを處分し、分配すべきものは分配し、讓與すべきものは讓與し、此に初めて一段落を終へ、二軒に分れたる德富家は、漸く一軒になるを得た。

予の祖父は筋骨逞ましく、容貌魁梧にして、一見角力取りの如くであり、目は小さかつたが、何處やら底光りしてゐた。自ら無學文盲と云つてゐたが、なか／＼の物識りで、種々の事を記憶してゐた。封建時代にはたかゞ鄕士であつたから、門閥に押へつけられ、その力を伸す事が出來なかつたから、その不平の氣は何處にか殘り、その爲めに聊か拗者らしき態度があつた。

なか／＼力が強きばかりでなく、人を喰つた漢で、その長上官等を巧みに揶揄し、それとはなしに彼等を赤面せしめたる如き事は少くなかつた樣だ。その爲め大に立身出世も出來なかつたが、しかもその子供の敎育には最も力を用ひ、孰れもそれ／＼成立した。長子は予の父であり、次は德富一義と

云ひ、横井小楠先生の愛弟子であつたが、小楠先生と與に上國を漫遊し、歸來幾何もなく熱病に罹つて逝いた。その次は江口高廉、その次は德永昌龍、皆なそれ〴〵一人前以上の漢となつた。

三 『第十九世紀日本の青年及其敎育』の出版

◇ 意外なる好評と井上毅氏の知己

予が『第十九世紀日本の青年及其敎育』と表題を打つて、明治十八年六月著述したるものは、これを東京の友人に托し、三百部ばかり印刷して、それぞれ配布することゝした。眇たる小冊子ではあるが、然も、又た公刊でなく、唯だ謄寫に代ふるばかりに印刷したるものであるが、東京に於て私刊したるは、これが初めてゞあつた。然るにその三百部はやがて殘りなく配布し終つた。誰と云ふ事もなく、望みの人に渡し、若くは予の方から贈りて、批評を求めたる向きもあつた歟と覺えてゐる。

然るにこの小冊子は意外なる反響を齎した。田口卯吉君の『東京經濟雜誌』には、小冊子とは云ふものゝ、雜誌の論文としては寧ろ頗る長篇であるこの文を、幾週間に亙つて連載した。又たその外二三新聞雜誌等にも掲げたるものがあつた。田口君などは、當初大江逸なる假名の許に、この書が出で

來つたるを見て、予と大江逸とは、全く別人と看做してゐた樣であつた。極めて率直に云へば、この小册子は予が出世作と云ふ事が出來なければ、尠なく共その準備作と云つてもよかつたであらう。

これは後から聞いた話であるが、同鄕の先輩井上毅氏は、この小册子を得るや否や、わざ／＼役所に出る一日を休んで、これを通讀し、愛誦の餘、更らに有賀長雄氏に囑してこれを批評せしめ、裝釘してこれを藏したりと云ふ事にて、予の評判は期せずして井上氏の口より傳づたらしい。予はそれ迄井上氏に面會したることもなく、所謂る刀筆の吏とは彼が其の標本であらうと冷視して、左程尊敬もせず、又た近付きもせず。寧ろ傳統的に井上氏を反對黨の人として見てゐたのであつたが、思ひきやその井上氏に依つて、予の出世の道開きを、偶然にもなさんとは。

予の從兄藤島正健氏如きも、從來は予に就いて何等考へてゐなかつたが、井上氏よりその話を聽きそれより以來は特に予を器重し、爾來死に抵る迄、恒に親しく交つてゐた。

又たその頃であつたらう、我が大江義塾の生徒も追々增加し、熊本に於て一種の勢力を成すにつけて、反對黨の學校、卽ち濟々黌の若者共は、頻りに迫害を企てた。

塾は桑畑や粟畑の眞中に建つてゐたから、これを襲擊するには、極めて便利であつた。されば夜になれば屢ゝ濟々黌の者共が來襲して、石や瓦を投げつける如き事は、尋常茶飯の觀であつた。此方で

も少數ではあるが、徒らに雌伏するを屑しとせず、或は桑畑の中に伏勢をしてこれを取りひしぎた る事もあつた。然るに井上氏は東京に居てその事を傳聞し、濟々黌の主宰者たる佐々友房氏に宛てゝ『德富も議論は違ふが一個の人材であるから、あまり彼をいぢめるのは宜しくない』などと注意を與へてゐた。その事は後日予が佐々氏と懇意になつた後、佐々氏が井上君より贈られたる書簡の卷物を示したるが爲めに、初めてこれを知る事を得た。

　次手ながら記して置くが、狹き熊本に居ながら、予と佐々友房氏とは、遂に相見て、相語る機會を得なかつた。或時予は行德先生を訪ねた。先生は本職が眼科醫であつたから、予等と四方山の話をなしつゝ、その患者の治療をなした。或時患者でもなく、素性の知れぬ漢が來て、頻りに先生と話してゐた。その後先生に面會した時に、

『德富さん、過日の漢は誰である歟知つてゐる乎』と訊かれたから、予は

『知りませぬ。』と云へば、

『彼が所謂る有名なる佐々である。向うも貴君を知らなかつたと見え、貴君の事を「あれは鹿兒島人であります乎」などと訊いてゐた。』

と一笑された。眼から鼻の熊本にゐて、黨派の垣は此の如く吾等の交通を不自由ならしめた。

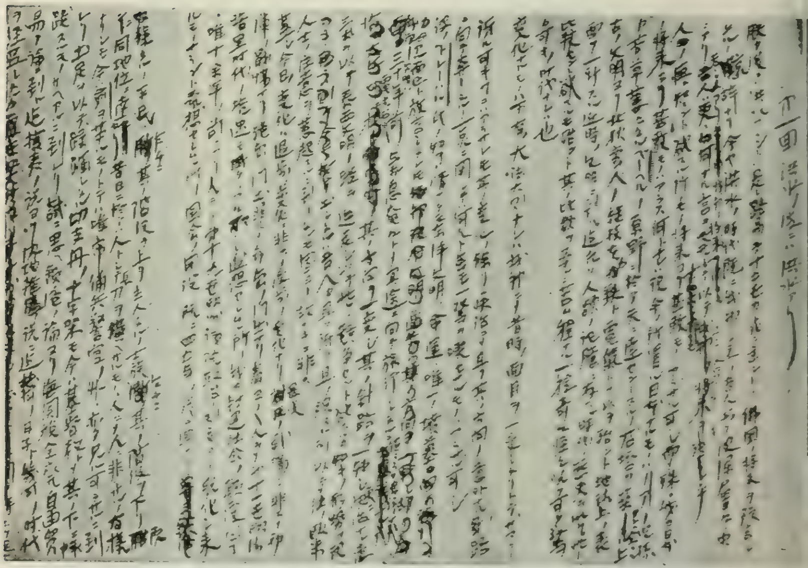
四　『將來之日本』著述と板垣伯

大江義塾は愈〻隆盛となつた。或者は上京してそれ〴〵學校に入り、或者は故郷に歸り、又た或者はその故郷に大江義塾の分校とも云ふべきものを開き、又た漸次に大江義塾の名は縣外に聞え、入學者も多く、訪問者も少くなかつた。この儘にしてゐれば、予は全く一個の村學究となつて終るかも知れなかつた。

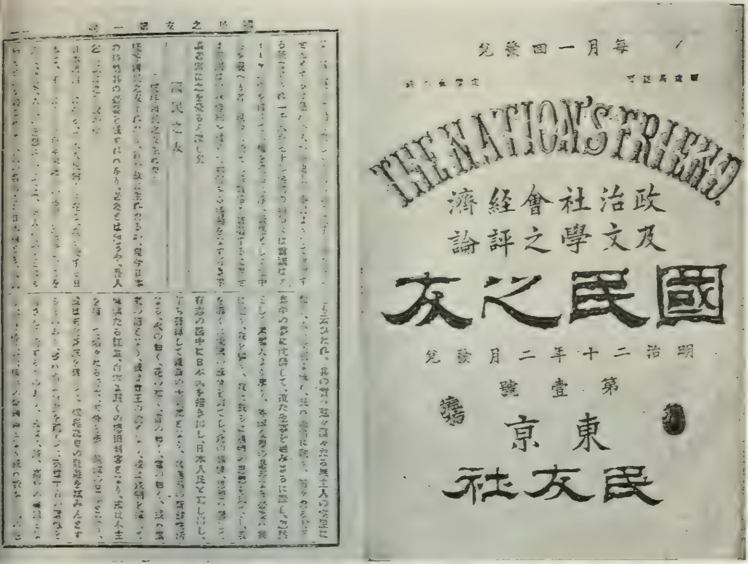
予の家政も祖父の歿後は前に比すれば豐かとは云はぬが、幾何か寛いで來た。それで予は又た出來得る程度に於て學費なくして志ある青少年を、幾分かは補助する事も出來た。併し何時迄大江義塾の主となつてゐたればとて、唯だ縣下に於て相手の濟々黌と競爭する外はない。しかも濟々黌は御用學校であつて、官府その他凡有る方面の力を利用し、吾は唯だ吾等限りの力であるから、とても競爭すべくもなく、唯だやうやくその獨立を維持して、體面を保つ迄の事に過ぎなかつた。

されば予は此際に於て、何んとか新たなる一轉機を見出さねばならなかつた。斯る場合に予の所謂る『將來之日本』は出で來つた。これは多分『第十九世紀日本の青年及其教育』が世の中に受けた爲

明治十九年（二十四歲）夏、胸中策を祕めて上京せる當時の蘇峰翁



翁の出世作とも云ふべき『將來之日本』の原稿


毎月一回發兌

THE NATION'S FRIEND

政治社會経濟
及文學之評論

國民之友

明治二十年二月發兌

第壹號

東京
民友社

國民之友

『國民之友』第一號の表紙と内容の一部

『國民之友』創刊當時(明治二十年)の蘇峰翁と社員　後列右より松枝彌一郎氏　翁(二十五歳)　宮島眞之氏　谷口林太郎氏　前列右より湯淺治郎氏　澤田義武氏　奈須義一氏　人見一太郎氏

に、それに勇氣を得て、第二の試みとして企てたものであらう。尠くとも筆を執り初めたのが、明治十八年の下半期であつた。その脫稿は十九年の上半期であつた。初めは『日本之將來』と題したが、それでは面白くないから、『將來之日本』と改めた。

これには予の當時有する總ての思想、一切の知識、凡有る學問を傾倒し盡さんと企てたばかりでなく、その覺悟で始め、又たその覺悟で終つたものである。予は當時專らスペンサーの進化說や、ミルの功利說や、抑々又たコブデン、ブライト等のマンチ＝スター派の非干涉主義や、自由放任主義や、若くは橫井小楠の世界平和思想や、それ等のものに依つて、予一個の見識を打ち建てたるものであつた。

兎に角予はこの著述の草稿を三度書き代へた。而して先づこれを誰に示さん歟と思うたが、誰よりも板垣伯に若くはなしと考へたから、夏休みを利用して土佐に赴くことゝした。今度は從來の陸路に懲りて、神戶から汽船にて、直ちに浦戶に赴いた。而して高知市中に宿をとりて、潮江新田の板垣伯の邸を訪うた。板垣伯はその頃家內に病人があるとて、餘りに浮かぬ顏をしてをられたが、相變らず予に向つては種々の話をせられた。又た頻きりに予に向つて、その同志たるべく促された。此に於て予は左に揭ぐるが如き書簡を認めて、これを板垣伯に呈した。

拜呈仕候。是迄追々御懇情に預り種々御高喩を辱うし、爲めに雲霧を排て靑天を望むが如きの心地致候事も不ㇾ尠候。然れども畢竟今日迄は一己人の私交を以て斯く御交際を致候得共、唯今よりは政治上の交際に一步を轉じ、事宜によりては先生閣下と共に、政治上の運動を共にし、其の進退を同うする譯に立到候儀に候得ば、兼て小生の性格、意見、趣向等は御承知の儀とは萬々存じ候得共、念の爲め左に一二申上候。是れ畢竟君子永久の交を全うするの道と存候得ばなり。

第一、小生は先生を信ずるが如く、先生の同志の方々を信ずる儀には無ㇾ之、縱令政治上の運動を共にする事あるも、唯先生と共にする而已にして、其の關係も、其の責任も、唯先生一人に限り、其の他の諸君子に向つては全く無關係、無責任の覺悟にて候。

第二、小生將來政治上の運動は全く自動的の運動にて有ㇾ之候得ば、或はある場合に於ては先生と意見を殊にするやを難ㇾ期、さる時分に於ては、小生は無㆓遠慮㆒自家の意見を公言致す覺悟なり。

第三、小生は縱令自由主義の目的を達せんが爲めなればとて、決して天下百世に向て、上天に向て、亦自己の良心に向て、申譯なき拙鄙奸惡の手段を致す儀は萬々不同意にて、如何なる場合に於ても、決して斯る御相談には相關し不ㇾ申候。

第四、小生不肖天下の志士を以て自ら任ずるものなれば、決して一土地、一地方の利益を而已目的と致す譯に無レ之、されば爾來九州の一志士として御交際被レ下候ては、甚だ迷惑の儀なれば、願くは日本の志士として御交際被レ下度候。勿論小生は一己の定議定見を有するものなれば、敢て一々九州人士と共の運動を同ふし候義務も無レ之、亦恒に其の意見議論を代議代表する儀にても無レ之、唯小生の運動は小生一己の運動にして、小生の議論は小生一己の議論と御明め有レ之度候。

第五、小生は天下何人と共に交際し、何人と共に往來し、或は何人と共に相運動するも、小生が政治上の主義、小生が良心に逆背せざる限は、隨意の擧動を可レ致、是れ決して先生に對して、小生が是迄又たは是れよりの政治上、私交上に於て、不都合をなす譯には無レ之と存候間、此段豫め御承知被レ下度候。

第六、縱令其の事は我が運動に必要にして、又決して正道に外れざる事にても、若し自家の性格に不適當なる事は、必ず辭し可レ申、是れ決して自から安逸を偷まんと欲するにあらず。唯自家の不長所に向て自家の才能を用ふるは、唯自家の品格を下落せしむる而已にて、決して他に何等の利益も無レ之事と信じ候得ばなり。勿論自家適任の事ならば水火も犯す可し。白刃も踏む可し。決して決して躊躇回走不レ致心底にて御座候。

第七、小生は卽今一書生にして未だ其の經驗を有せざるものなれば、敢て公然政黨抔に加入し候儀は萬々御斷申上候。勿論他人を代表代理し候抔の儀は、一切未だ信用を得ざる事なれば、御斷申上候。唯自家一人にて若し政治の運動卽ち自由主義の眞正なる運動に鞠躬して、少小にても其の甲斐ありとせば、生は甘じて其の一卒となり、餘念なく相働度覺悟にて有之候。

第八、小生が政治上の主義は、今回著述致候『將來之日本』なる一小册子にて分明と存候。果して此の小册子通にて不都合なしと御考へに成候哉。若し不都合ありとせば如何なる點哉。篤と御示し可被下候。然る時には再考三考熟考可致候。されども唯今の所にては、先々右の小册子に記載致候ものを以て、小生將來政治上の主義に御座候故に、生は若し此の小册子の論點に於て、其の見を同ふする人は、何人にても政治上の朋友と存じ、同ふせざる人は、何人にても政治上の敵と存候。先生の高論如何。

第九、小生が先生を尊信するは、固より先生を以て一世の豪雄となす故とは申しながら、更に其の根本を論ずれば、其の主義節操を信じ候譯合なれば、先生にして若し（萬々なきことなれども）萬々一其の主義、節操に於て慊たらざる所あらば、小生は斷然先生との關係を失し可申と存居申候。されども君子交絶ども惡聲を出さず、小生は決して漫に他の輕薄兒を學んで惡聲を出す事を

なさざる可し。

第十、事をなすは謹愼にあり。謹愼の要點は機密にあり。機密を漏さずして始めて共に信ず可し。されば小生は決して何人に向ても先生との機密に付き、相漏す事をなさざる可し。然れども若し事公明にして便利なる事は、可成公明になす可し。祕密にて便利なる事は、必ず祕密にす可し。此の邊には決して決して御掛念なき樣に豫め御相談仕置候。

右十條果して先生の御意見にて差支なしと御考へ被成候はゞ、生は必ず先生と政治上の交際を可致覺悟に御座候。事少しく面倒の樣なれども、將來紛々錯雜の日に於て、如何なる間違あるや不可知。生は決して拙劣男子の擧動を不致心底なれども、若し二三の行違よりして、先生との關係疎淡に相成候節に於ても、先生より失節者、輕薄兒と呵責せられ候儀にてもあらば、畢生の遺憾に付、豫じめ申上候。先生必ず輕々書生を信じ給ふ勿れ。

明治十九年七月二十六日　　高知客舍に於て

大江逸生百拜

板垣退助先生閣下

如何なる返事を板垣伯から受取つたかは、確と覺えてゐない。兎に角予の目的は『將來之日本』を示して、君の批評を求むるにあつたが、板垣伯は果してこれを通讀して吳れた乎、それさへ予には明白でない。唯だ板垣伯はこれを一般ありふれたる書生論と看做し、別に何等感心した風もなかつた。予も有體に云へば、これには聊か失望せざるを得なかつた。

五　『將來之日本』を出版する迄

◇予の上京と島田三郞氏

◇田口卯吉氏原稿を引受く

併しこの儘歸鄕するのも面白くないから、予は神戸に出で、又『將來の日本』を懷にして東京に赴いた。

東京では『第十九世紀日本の青年及其教育』が、予の爲めに門戶を開いてゐたから、予は到る處で田舍書生の身として、過分の驩迎を受けた。而して此の際最も感謝すべきは、島田三郞君が予の爲に多くの紹介狀を認めてくれた事である。島田君とは生面にて、恐らくは田口君の紹介にて島田君を知

つたのであらうと思ふ。

斯くて予が面會したる者の中には、大隈侯、河野敏鎌子、陸奥宗光伯等もあつた。而して當時新歸朝者として『週遊雜記』を出版したる矢野文雄君等もあつた。當時陸奥伯は外務省の通商局長か何かを勤めて居、出獄後新生涯を初めたる間際であつた。元氣頗る旺盛であつて、予は炎天に歩行して根岸金杉の其邸を訪問し、覺えず愉快の時を過した。その時伯は予の名字を聽き、

『君は水俣の德富ではない乎。それならば君の家も知つてゐる。君の父も知つてゐる。』等と語つた。予は維新前、陸奥伯が暫く吾家に寄寓し、他の嫌疑を避くる爲に、旅から來た醫者と云ひ、常に藥箱を携へて外出せしめた等と云ふ話を聽いてゐたが、伯はそれを想起したのであらう。而して陸奥伯を吾家に伴ひ來つたのは、伯と長崎にて同學の書生であつた、予の從兄に當る江口高邦であつたらうと思ふ。

斯くて『將來之日本』の原稿も、田口卯吉君が見て、

『これは結構である。經濟雜誌社から出版しても差支へない。』と云うたが、『併し善き本必ずしも賣れる本ではない。故に責任だけは貴下の方で持つて貰ひ度い』と云ふ事で、そこで予も當惑したが、予の姉婿湯淺治郎氏が、

『それなら予が責任を持たう』と云ふ事になり、そこで原稿を經濟雜誌社に渡す事となつたが。その時分は斯る書籍は、豫じめ警保局の檢閱を要する事であつた。當時の警保局長は、清浦奎吾伯で、予の同鄕の先輩であつたが、予はその力を假る迄もなく、その屬僚に平野侯次郎なる人あり、この人より訂正すべきかど〳〵を內示せられ、そこで漸く無事に通過した。その訂正の文字は悉くは覺えてゐないが、唯だ革命の文字を、悉く改革と代へただけは、今猶ほ記憶に殘つてゐる。

六　胸中の祕策

或日、予は同行の人見一太郎氏を伴ひ、上野公園の人靜かなる森の中の、大なる榎樹の根株に腰打掛けた。頃は八月の末乎、九月の初であつたらう。予は人見氏に向て、予の胸中の祕密を語つた。人見氏は元熊本師範學校出身にて、卒業後熊本より三里を隔てたる金峰山の裏面、有明海に瀕する河內の小學校に教鞭を執つてゐたが、一週一回づつ予に英書の講義を聽きに來た。それ以來予は君の人物に傾倒し、彼是便宜を計つて、大江義塾に來り寓する事となり、明治十七年の夏高知にも相伴ひ、卽ち今回も又た相伴つて、土佐より東京に出でたのである。仲間では人見氏を、德富の祕書と稱してゐ

た。予は、

『予等は長く田舍に老ゆべき者ではない。中原に出て角逐すべき時期は、正に到來せんとしつゝある。それで君は今より直に歸つて熊本の同志に告げ、速かに大江義塾の閉校を計らはれ度し。若し諸友が異存あらば、火をつけて塾を燒いても差支へはない。萬事君の思ふ儘に任すから宜しく頼む。予は暫く東京に止つて、愈ゝ旗擧げの準備をなし、然る後歸鄕する事とする。』と語つた。

人見氏も直にそれに贊成し、自ら奮つてその事に任ずる事となつた。それで予は何や彼や東京諸名士の間に往來して、他日愈ゝ東京に門戸を張る可く準備をした。その間矢野文雄君の『週遊雜記』に就いて、隨分手嚴しき批評を『六合雜誌』に揭げたが、それが緣となつて矢野君と相見、君に依つて便宜を得たる事も亦た尠くなかつた。

七　家を擧げて東上す

◇予に對する兩親の信頼

予は東京に在りて、彼是と故鄕の大江義塾を營み、再び上京して東京に根據を据ゑ、聊か活動す

るところあらんとするの準備をなしつゝあつた。而して別に何等取りとめたる事は出來なかつたが、兎も角も吾力を試むべき自信力が出で來つたから、愈ゝ歸郷する事になつた。其時の詩に、

弊裘依舊出都門。　一片歸心輕似雲。
西海故人應待我。　秋風吹老大江村。

とある。當時の氣分はこれにて想像がつく。

扨て歸へりて見れば、大江義塾社中も、案外予の志を諒として、別に何等面倒もなかつた。されば予は社中及び社外に於ける同情者その他の知友を招き、愈ゝ目出度く大江義塾の閉校式と云ふ乎、若くは解散式と云ふ乎を擧行した。

而して社中の重なる面々は、予と共に上京せんとの志であつたから、予は出來得る程度に於て、その志を援助するに力めた。

翻へつて予の家庭に於ては、當初予等夫婦のみ上京する積りであつた。然るに予の父母は予の志に贊同し、

『御身がそれ程の決心あれば、予等老人夫婦も共に東京に赴かん』

との事であつたから、予にとつては寧ろ望外の幸福とし、愈ゝ一家を擧げて東京に移轉する事となつ

た。これは人としては予等夫妻二人に父母二人を加へ、二が四となりたるに過ぎざるも、德富家一切を疊んで東京に移るといふ事は、當時に於ては、所謂る船を焚き、橋を斷つの手段にて、可成り大膽の事であつた。

それは予に定りたる職業も無ければ、收入も無く、全く徒手空拳にて、吾が運命を試めす事であつたからだ。愈よ決心したる際には、一家の會議を開き、爾後吾家定規の收入一ケ月約三十圓にて生計を立つる可き旨を相談の上、父母及び予等夫婦各よ記名調印して、その志を固めた。三十圓は當時予の家に於ける確定の月收であつたからだ。

斯くて藏書等は極めて手近き必要品、祖先傳來の品を除けば、二束三文に賣り飛ばし。家財諸道具抔は親類、知己に分配し、その餘はこれも一山百文的の入札拂となし。心も輕く、身も輕く、愈よ親子四人、及び同志の士十數人相携へて熊本を立つたのは、明治十九年十二月一日であつたかと記憶してゐる。

予の決心はさる事ながら、予の父母が住み馴れたる故鄕を去り、前途の充分なる保證も出來ぬに、予の冒險的東上に同情して、この行に參加せられたるは、予にとつては寔に感激に堪へぬ次第であつた。

八　『將來之日本』出版の影響

『將來之日本』は、予が東京を去りて熊本に歸りたる後に出版せられ、その幾百部はやがて熊本に送り來つた。予は初めて吾が著書を公刊するものであつて、その運命に就いては、多少の關心が無いでもなかつた。然るに新聞の評判や、在京の友人から申來る趣は、孰れも意外の好評であつた。而して如何に早く此書が行き渡つた乎は、予が東上の汽船中にて、既に此書を携へて、朗讀しつゝある者を見出したるに依つて見ても知らるゝ。

謂はゞ予は『將來之日本』の好評の裡に、東京に一家を擧げて飛込んだものと云つても差支へあるまい。予等は兎も角も十二月十日、山王臺の下、赤坂溜池の傍なる予の姉の家、湯淺氏方に草鞋を脫いで、やがて赤坂靈南坂の奧まりたる一隅の借家に落著いた。これに就いては熊本洋學校及び同志社以來、予の先輩であつて、靈南坂教會牧師たる小崎弘道君、及びその夫人が彼是と周旋せられた。

明治十九年も既に暮れんとした。予は如何にすべき乎。何事をなすべき乎。將た如何にして生活すべき乎。予は唯だ自己の運命を信ずる以外には、何等の確定したる考へも無かつた。併し當時引く手

數多とは云はざるも、若し予にして職業を得んとすれば、必ずしも困難ではなかつた。大阪の或る新聞は新島先生を介して、予を招聘せんとした。當時『報知新聞』を主宰する矢野文雄君なども、予の入社を欲しない事も無つたらしい。又た田口卯吉君なども、予にしてその部下に赴かんとしたらば、決して拒ばまなかつたであらう。

何れにしても『將來之日本』は、將來の日本の爲に如何なる效果を與へた歟を知らざるも、著者たる將來の德富の爲には、鮮からざる便宜を齎した。予は決して『將來之日本』が出た後の德富が、『ミルトン論』の出た後のマコーレーと、同一程度に世間の評判を博したと云はぬが、正直の處、評判はなか／＼盛んであつた。而して其の證據には、予の文體や論旨などを、模倣と云はんよりも、其儘複製したるものが、往〻にして予の目にもつく程であつた。

九　民友社創立と『國民之友』の發刊

◇湯淺氏の助力及び誌名、社名の由來

予は何事をなすべき歟。予は熊本を去る頃から既に一個の計畫を抱いてゐた。それは予自ら雜誌を刊

行する事である。予は初から新聞に心があつた。されど多少とも新聞に經驗ある予は、容易に手を出すべきものでない事を知つてゐた。そこで新聞の事を後廻しとし、暫らく雜誌を以て滿足する事とした。それは『將來之日本』が、好評を博すると博せざるとに論なく、何れにしても實行する積であつた。既に前に云つた通り『將來之日本』が、吾が運命の道開きをしてくれた以上は、猶更ら此の際雜誌を刊行して、吾運を試して見度きものと考へた。

然るに予は意外にもその同志者を得た。それは湯淺治郎君である。君は上州安中の住人にて、新島先生とも同鄕の誼があり、且つ予の姉婿であり、群馬縣會議長として廢娼論を實行したる人であり、資性狷介にして容易に人と妥協せざるも、一度意を決すれば、する丈の事は必らず成す人であつた。それが偶然にも予の志に賛同し、愈ゝ相共に雜誌を刊行すると云ふ事になつたから、何の雜作もなく、仕事はすら〳〵と行つた。

申す迄もなく予は社長格で且つ主筆として一切の編輯に從ひ、紙面に關する責任を負ひ、湯淺氏は副社長格で、マネーヂャーとも云ふべく、經營一切の事に任ずる事となつた。湯淺氏は計算の上のみならず、技術方面の趣味もあり、雜誌の表紙とか、挿繪とか、一切の體裁及び廣告の樣式等に就いても、大方ならず貢獻した。予は唯だ廣告の文字のみ斯くすれば效果多かるべしと、自ら認めたるとこ

ろを、其儘書放して置けば、湯淺氏がそれを極めて人目につく樣、よき體裁に作上げて、これを新聞に廣告するといふ事になり、斯くて『國民之友』第一號は、明治二十年二月十五日發行せられた。

當時雜誌の發行部數は、概ね千部以下にて、通常五百、六百といふ位にて、千を超ゆれば先づ盛んなりと云ふべきであつた。『國民之友』は初號を、最初初號であるからと考へて、思ひ切つて多く刷つたが、見る間に賣切れ、再刊、三刊の止むなきに至り、遂に總數萬位に上るに至つた。これは寧ながら意外であつた。

扨何故に『國民之友』と名付けた乎と云へば、予は少壯以來米國の『ネーション』(The Nation) 雜誌を愛讀し、ネーションといふ字が頭の中に刻みつけられてゐたから、遂に斯く稱したのである。而して社名を民友社と命名けたのは、『國民之友』の中より、二字を抽出したのだ。國友社とせずして、民友社としたのは、當時平民主義を主張し、何處迄も人民の味方を以て自ら任じたからである。

雜誌の體裁などは半ば予が創意になり、半ば外國雜誌のそれを應用したる事もあつた。唯だ特別寄書欄を設くるの一事は、米國のネーション雜誌に、スペシアル・コレスポンデンス (The Special Correspondence) として、歐羅巴、就中英國諸大家の寄書を掲げたから、それを其儘特別寄書と譯し、而して當時著名なる諸大家の作を、悉く吾が特別寄書欄の中に網羅せんと努めたのであつた。

初號はこの通りであるが、二號以下は景氣が落ちはせぬかと心配せぬでもなかつたが、左樣ではなかつた。されば此間に於て、前に記したる通り、予が明治十八年の六月、脫稿し『第十九世紀日本の青年及其敎育』と長銘を打つて、私かに三百部を印刷し、これを世間に配布したるその原稿を、是非出版させて吳れと懇望する者出て來り、予は其乞に應じて、更に總論一篇を新に起草し、これを『新日本の青年』と改題し、明治二十年三月、神田の集成社より出版する事としたが、此書も又た『將來之日本』に雁行して、その賣行は凄まじきものであつた。

此の如くにして予は吾が著書の爲に、敢へて澤山とは云はぬが、若干思ひ掛けなき收入を得たが、その大部分は、予の親戚と、曾つて予の父の門弟で、吾家の爲に財政の遣繰り抔を計りたる友人等の窮迫を救ふ爲に、若干の援助を與ふるに至りたるは、予が今日に於ても聊か感謝する所である。

十　明治二十年頃の日本の形勢

◇歐化主義旺盛の時代

予は本來政治が好きであり、政治が予の生命であつた。されど當初から役人にならんとする樣な

考は一切持たなかつた。平たく云へば當初から大臣希望者でもなく、又た議員希望者でもなかつた。予は唯だ世の中の政治を吾が思ふ樣に動かし導かん事を欲したる迄にて、それ以外には何等の功名心も無ければ、名譽心も持たなかつた。併し極めて微力ではあるが、世の中を予の是なりと思ふ方に導かんとする志は、若しこれを野心と云ふならば、その野心は燃ゆるが如くあつた。

されば著述をしても、雜誌を刊行しても、その目的は本を賣つて金を儲くるとか、若しくは文學界に霸權を占むるとか云ふが如き了見は少しも持たなかつた。若し書物や雜誌が賣れて、予の文名が高くなるならば、唯だそれに依つて聊か予の志を天下に行はんとするに過ぎなかつた。

扨明治二十年の日本の形勢は如何。十八年の末に初めて內閣制が出來、一匹夫であつた伊藤公が總理大臣となつた。卽ち第一期伊藤內閣だ。然るに伊藤公の意氣込も當初は頗る凄まじかつたが、種々の障礙に出逢ひ、聊か沮喪するの趣きが無いでもなかつた。それは薩長聯合と云ふも、薩派の長老たる黑田淸隆伯の如きは、何となく伊藤公に對して、隱然一敵國の狀を呈し、却々伊藤公の一存にて、思ふ樣には參らない事も多かつた。

而して伊藤公を助けて此の改革をなしたる井上毅君の如きも、その胸中伊藤公の所信が聊か鈍ぶりたるをはがゆく思ひ、伊藤公との間に彼是論爭の結果、その身は宮內省圖書頭の閑職に移つてゐた。

併し當時に於ては何と云つても大立物は外務大臣の井上侯であつた。即ち明治二十年頃は、伊藤内閣と云ふが、その實井上内閣と云うても差支なき程に、井上侯は有力であつた。それもその通りだ。何んとなれば、侯の次官としては青木周藏子があり、政務局長としては陸奥宗光伯があり。外務省に殆ど當時の人材を集め、而して彼等は一方に於ては條約改正を成就する爲、他方に於ては頑固黨を退治する爲、盛んに歐化主義を鼓吹した。

即ち鹿鳴館に於ける舞踏、ローマ字會、演劇改良抔といふ事が、次から次に出で來つてゐた。當時彼等歐化者の主義は、『元來長を取り短を補ふなどといふ事が間違である。日本人では外國の文明の長短得失などがわかるべき筈はない。寧ろ其まゝ悉く取入れ、然る後徐々に長を長とし、短を短とするも遲しとせず』といふ說であつた。

此事に就いては西園寺公なども予に向つて其說を示された。又た陸奥伯の如きは、態々川柳の、『神農も初めはウヅに目を廻し』といふ句を引いて『ウヅと云ふは毒草であつて、神農も藥草であらうが、毒草であらうが、當時は手當り次第これを嘗め、毒草では目を廻して、而して後にその毒草である事を知つたのであるから、吾人もウヅに目を廻すが如き事は、覺悟の前でなければならぬ。』といふ事を說いてゐた。

二十二新年 （明治十七年　二十二歳）

迎來二十二新年。往事茫茫夢似烟。
欲與春陽較英氣。晴窓讀起自由編。

詠竹刀

彌耳數書寄倫劍。自由開拓屬君曹。
呼號東曉知誰子。滿袖風霜一寸刀。

梅花

春在清香冷艷枝。東風習習透書幃。
氷心一片向誰說。獨對梅花讀楚辭。

雪

天低平野凍雲堆。風雨連宵夢不催。
曉起拍案欲飛舞。群山白雪壓窓來。

偶成

誰將家國坐弊船。彼不愛民唯愛錢。
至竟議論做底用。堪思當世合扶田(ハムプデン)。

韓悠揚

門外晴霜白于雪。曉窓誦讀韓悠揚。
偶終講課試閑步。落照逗庭樹影長。

球磨道中　三首

青松素石水潺潺。四月春風花滿山。
一徑無人萬峰寂。斧聲遥在白雲間。」
群峰東水水南奔。北去身同鳥入樊。
行到渡頭也蕭瞻。滿眸黃綠別乾坤。」

滿眸黃綠別乾坤。凝黛遙山遠曠原。
一岸垂楊水如練。午雞啼破桃花村。

恢復自由歌

擬鄉耳瑞士山中追懷英國能耳須氏作　維廉鄉耳者。瑞士之義士也。瑞士爲奧太利所襲也。鄉耳爲敵人所捕。久繫於囹圄。後竊脫獄而入深山。糾合義徒。終得攘外敵於境外。恢復國家矣。其功勳赫赫。長照青史。因有此作。

重吸青山靈淑氣。再蹈白雲清高嶺。英魂一搏脫絆籠。恰似老鷹之健翼銳眼睨日而戾青天。亂嶂撑天氣勢雄。神威赫鎮自由國。自由國今爲奴隸州。神若有靈德。曷不千丈之險崖轉來氷雪之大磈。雷擊電掣殲逆賊。獵夫與牧童。僅餬靈地罰不測。如何彼逆賊。飛揚跋扈得安息。神乎號泣爾。爾之雷公獄在何處。何其默默。憶昔壯遊拜天日。山河信美眼界寬。水是自由水。白龍跳巖瀉碧湍。山是自由山。儼拱義和戴雪冠。乍見怪風盲雨驀然到。陽闔陰開現偉觀。激雷劈天山忽裂。霹靂震地人欲翻。此時抑塞之靜懷隱刻發。豪氣盤桓天地間。絕叫自由今何在。嗚呼爾不在吾死矣而已。以這英靈淸淑鄉。豈忍着奴隸之趾。雖然陽氣之所透。窮山絕谷何邊不見草花淸妍。況是自由之正氣鬱積地。何人不爲慷慨拔劍起。我不愛生命唯愛汝。一片精忠對天矣。只復逆賊。姓名如烟歸空裏。看我壯烈淋漓自由氣。泰山萬古屹青史。嘗見山霧橫斷吐紅暾。萬象燦爛拭目視。嗚呼是豈莫非自由日出之兆。皇天上帝眼分明。長跪籲天天鑒爾。與爾同死又同生。

題小著後

滿腹經綸任手裁。 疎狂愧不濟民才。
何時學取馬韓筆。 萬里長江一瀉來。

土佐山中

奇峰攢立欲凌騰。 人宿亂雲荒霧層。
[illegible]侵[illegible]夢難成。 萬山風雨一靑燈。

京　都

頑顏愧彼靑山矣。 萬里歸程志未成。
短褐依然舊時客。 秋風孤劍入西京。

靈　山

三十六峰雲漠漠。 洛中洛外雨紛紛。
破簦短褐來揮淚。 秋冷殉難烈士墳。

橫井小楠

神知靈覺自天眞。 雪嶺之東第一人。
焉得作君九原下。 與論家國大經綸。

一閑人

吟時還界絕纖塵。 河嶽日星隨處新。
不問身前身後事。 居然宇宙一閑人。

鬱　鴉

不能隻手正乾坤。 四度秋風臥故園。
獨立樓頭何所見。 鬱鴉啼過夕陽村。

石嶺 (明治十八年　二十三歲)

天風浩浩客衣寒。　萬壑層雲脚底看。
石嶺關頭行欲盡。　白鶴山色落肩端。

詠史

落落胸襟不著塵。　光風霽月見天眞。
多情一掬英雄淚。　半爲邦家半美人。

春雨

奈此無情風雨何。　三春光景等閑過。
平生灑盡憂時淚。　也爲櫻花一半多。

風波惡

風波惡風波惡。風波畢竟奈君何。踏正勿懼。踏正勿懼。風波畢竟奈君何。

西山

滿目秋風飛白雲。　西山紅葉映斜曛。
霜經露緯天孫手。　織出蜀江錦繡文。

日南客舍除夜

兀兀唯應對斷篇。　平生心事有誰憐。
波瀾浮影日南驛。　復在閑中送一年。

丙戌新正 (明治十九年　二十四歲)

豈無奇策濟時艱。　冷淡生涯獨掩關。
唯有新年風景好。　皚皚白雪滿蘇山。

第七章　國會開設前の政界と予

一　予の平民的急進主義

◇保安條例と民間の論客

當時予の立場は平民的急進主義とでも云ふべきものにて、鹿鳴館の舞踏とか、徒らに外國の文明を粉飾するとか、特に外國物質文明を崇拜するとか云ふ事は大嫌ひであつた。而して外交の要は必ずしも外人の服を著、外人の食を喰ひ、外人の如く踊り、外人の如く考へ、身も魂も外國化するに非ざれば、その目的を達する能はずとは考へず。されば『國民之友』初號には、貴族的文化主義に批評を加へ、西園寺公の如きは此れを讀んで、

『貴君の書いたものは、何やら社會主義の要素が含まれてゐる樣だ』

などと云はれた事を記憶してゐる。又たその第二號には『外交の憂ひは外に非らずして内にあり』と

いふ題目にて、内を忘れて外にのみ奔る外交政策を攻撃した。これに就いては豫て予の目からは保守的の官僚派にして、所謂る刀筆の吏の毛の生えたるものに過ぎずと看做したる井上毅君などからも、至極同感であるとの贊成を得た。併し當時予の最も恐るゝところは、歐化主義者よりも、その反對に立つ反動者であつた。

されば予の同情は何れかと云へば、内地雜居反對などと云ひ、昔の攘夷論者の如き口吻を繰返す者よりも、寧ろかへつて井上、陸奥、其他の歐化主義者にあつた事は、論を俟たぬ。然るにかねて明治政府に對し、反對の位置に立つ自由黨若くは保守黨の面々は、互にその意見が異なるに拘らず、明治政府に對する上に於ては、その鋒先を一にしてゐた。而して政府部内に於てさへも、井上侯が萬事を犠牲にしても、條約改正を成就せんとの熱心から、その談判が國家の體面を傷くるも顧ざらんとするの有様を見て、不快に思ふ者ありて、反對論は内外から一時に湧出した。

而してそれが爲に政府は、保安條例を制定し、凡有る民間の論客をして、帝都の外に追放する事となつた。當時井上毅君の如きも、井上侯の條約改正には頗る反對し、その爲に辭職せんと迄に考へてゐたらしかつた。予はその顏色を察し、密かに語つて曰く、

「餅屋は何處に行つても餅屋であり、酒屋は何處に行つても酒屋である。御身の今日あるのは、明治

政府あるが爲だ。今更ら明治政府を飛出したからとて、急に御身の偉くなる見込みも無し、寧ろ今日は隱忍して、他日を待たれた方が御身の爲にも、日本帝國の爲にも得策ではあるまい乎」と云つた。君も當初は憚る所あるが如く、言を左右に託したが、後には予の眞心を察し、その心事を打明けた。斯くて君は『此事は太平記にもある通り「天狗六本杉に會す」と云ふ譯合にて、今夜は全くその通りであるから、ゆめこれを他人に語り給ふな』と云つた。されば予はこの事を是迄口外しなかつたが、今日ではこれを云ふも差支へないと思ふから語りて置く。

而して當時最もその反對の急先鋒は、實にお雇佛蘭西人ボアソナード氏であつた。此人の如きは實に吾が帝國の爲に謀つて忠なる人と云はねばなるまい。予は保安條例實行の際には、急性腸カタルに罹つて打臥してゐた。或朝虎門外琴平町に下宿してゐる阿部充家氏が飛込んで來た。餘り早いから『何事か』と訊いたら『やられた』と云つた。而してその後から警官が尾行して來た。卽ち阿部充家氏も亦た保安條例の厄に罹つた一人である。

予は此の病氣が仕合はせとなつて、その厄を逃れたが、或は病氣をしなくとも逃れたかも知れないが、唯だ明治二十一年の新年には、病の爲に『國民之友』を一回だけ休刊する事となつた。

明治二十一年二月には井上外相の後を、思ひ掛けなくも改進黨の首領大隈侯これに代り、四月に

は伊藤公は樞密院に退き、同月、黑田伯が首相となり、此に黑田內閣が出で來つた。而して井上侯も亦た黑田內閣の下に、農商務大臣となつた。

二　同志社大學運動と予

◇井上侯、大隈侯の肝煎り

この際に於て記憶すべき事は、同志社大學運動である。新島先生は最初から同志社に身も魂も打込んで居り、行く〱はこれを大學とする希望を持つてをられた。されば先づ明治十七年頃には、明治專門學校といふ名義の下にて、その基金を始められた。而してその主意には贊成する者があつたが、金を出す者は思ふ程無かつた。

予は平生新島先生に恩義を感じ、何時かは報いる機會のあるべしと考へてゐたが、今やその機會の到來したるを認めた。予は家を擧げて東京に移轉する事に就いては、別段新島先生の贊成を需めなかつたが、先生は平生予に成可く田舍に在つて勉强しろと云つてをられたが、此際には最早や予が中原に向つて腕を試むべき時節が到來したと認めたのであらう。予の上京に反對せざるのみか、寧ろ贊

同し、『國民之友』の如きは、最初の購讀者の一人となられた。

當時新島先生を助けて專らその衝に當つてゐたのは、金森通倫氏であつた。予は先生に向つて明治專門學校などといふ名目よりも、寧ろ當初から大きく同志社大學と持ち出した方が宜からんと云ひ、而して募金をするには、京都、大阪等よりも、寧ろ東京に押出してやる方が效果があるべしと云つた。而して新島先生の依頼に應じて、所謂る同志社大學の主意書なるものを起稿する事となつた。世間に評判ある『良心を手腕に運用する人物を養成する』といふ主意書がそれである。

先生が如何にして井上侯と近づきとなつた乎、その邊は予が深く知る所ではないが、井上侯の側に於ては、恐らくは歐化主義の一端として、宗教も基督教を日本に輸入するの必要を感じ、その爲には新島先生及び同志社が適當の機關であらうと認め、その力をこれに藉さんとしたのではあるまい乎と思ふ。又た或人の如きは、慶應義塾派が餘りに有力にして、民間の凡有る方面を專斷してゐるかの如き傾きがあつたから、その牽掣運動の爲にも、然かしたのではあるまい乎――當時の早稻田は漸く學校が成立したばかりで、とても今日の盛大は豫想されなかつた――と云ふ說であつた。

何れにしても井上侯が肝煎りとなり、それには青木、陸奥、野村、三好（退藏）その他の贊成者があり。特に陸奥伯の如きは、募金に就ても種々の智慧や、才覺を供して呉れた。然るにその間に於て

井上侯は去つた。而してその後に大隈侯が出で來つた。大隈侯は自ら早稲田の創立者であれば、同志社募金の爲に肝煎る抔といふ事は、聊か普通の人であれば遲疑すべき所であるが、そこは流石に大隈侯にて、一議に及ばず井上侯の後を引受け、遂に外務大臣官邸に大隈侯が主人として、部下の澁澤子爵、岩崎彌之助男爵、其他の富豪、有力者を集め、井上侯が自ら筆を取つて勸進帳をつけ、斯くて一夜の中に數萬圓の寄附金が出來上つた。而して井上侯、大隈侯も各〻一千圓の寄附帳についた。

これは同志社と世間とが初めて接觸したる時であつて、その席には新島先生以外に金森氏及び予、其他の人もあつたが、今記憶してゐない。兎も角も微力ながら予は新島先生の代理となつて寄附金募集の爲に、又た都下の有力なる各新聞記者を集めて、その寄附金の贊成者たらしむべく、彼是奔走し何れもその贊成を得た。特に保守黨の本丸と目指されたる『日本新聞』紙上に、陸實君が此の募金に就いて、贊成の說を掲げたのは、其の當時しが、如何に氏が苦衷を語つてゐるかゞ思ひ知らるゝ程、その世評を盡してゐた。

三　大同團結に反對す

◇野田大塊と相識る

予の行路は、必ずしも自動車で京濱國道を走るが如く、滑らかではなかつた。『國民之友』はその隆盛になるに從つて、反動若くは反對の勢力を激起した。或は國粹保存黨と云ひ、或は國權黨と云ふ保守主義者側からは、異端視せられ、又た耶蘇教の臭味ありとて、僧侶若くは神官の仲間からも攻撃せられた。しかのみならず、當局側からは又た過激なる反對黨視せられてゐた。

然るに又た此際一の出來事があつた。それは後藤象二郎伯の大同團結だ。明治二十年十月三日、後藤伯は在野の重なる人士七十餘名を三縁亭に招き、一大懇親會を催し、その席上に於て、當面喫緊の演説をした。予もその時は『國民之友』社長兼主筆として招かれた。その席上には自由黨、其他改進黨の或る面々、其他政黨以外の學者、論客等もあつた。珍らしく三鞭酒などの馳走が出て、來客の中には麥酒にしては餘りに沸騰するなどと訝つた者もある程で、寔に盛宴であつた。

是を手初めとして後藤伯は、明治二十一年の春からそろ／＼政治運動を開始した。而して彼の所謂

は極めて粗大であつたが、兎も角も帝國は目今危急存亡に瀕してゐる。西伯利亞鐵道も追々建設せらるゝ。此際主義、主張の異同などを問ふべきでない。須らく一致團結して、此の危急を救はねばならぬといふ事であつた。

此の如くにして明治政府、即ち薩長政府に對する攻撃の總同盟運動は、後藤伯に依つて出で來つた。自由黨の面々は保安條例にて、二十里の先に孰れも退去を喰ひ、今更ら一寸手も足も出で兼ねる有樣であつたから、その空虚に乘じて、後藤伯の大同團結は、風行雲集の勢ひを以つて、天下を席捲した。後藤伯は明治二十一年四月二十二日福島縣に於ける、東北七州會を初めとして、東北から北陸道に遊說し、而して九州などもその風を望んでこれに應じたから、殆ど天下を擧げて、後藤伯の大傘下に集まらざるものは無つた。

斯くて明治二十二年二月十一日、帝國憲法發布の當日、後藤伯が馬車に乘つて參內するや、これを見たる群集は、孰れもその馬車を擁して、『後藤伯萬歲』を唱へ、後藤伯は恰も一種のヒーローとなり『後藤伯出ずんば蒼生を如何せん』と云ふ有樣であつた。

但だ予は當初から後藤伯その人の所說に餘り感服せず。且つその人物に就いて多少疑ふところあり、寧ろ此の運動には批評的の態度を持してゐた。而して大隈侯の率ゆる改進黨も、明治二十一年二

月、大隈侯が外務大臣として入閣したるが爲に、その主力は自重して動かなかつた。此の如くにして予等の態度と改進黨主力の態度とは、大同團結に對しては、期せずして一致する樣になつた。予が矢野文雄君等と最も親しく提携したのは、此時であつたと思はるゝ。

扨九州に於ては從來九州改進黨なるもの出で來り、自由黨にも、改進黨にも屬せず。九州は九州にて別個の團結を成してゐたが、此の大同團結に就いては、從來自由黨の臭味の連中は、舉げてそれに加入する者多く、但だ熊本縣に於ける山田武甫、福岡縣に於ける野田卯太郎、永江純一の徒は、斷乎として動かず。此の如くにして九州もその進步主義者の中に、大同派と非大同派と自ら分裂する姿となつた。而して予が野田、永江、特に野田大塊との政治的交際は、實に此の運動から初まつたと云つても差支へあるまい。

當時の野田は未だ福岡縣の熊本縣に境する大牟田に於ける、地方的有志家に過ぎなかつたが、彼は當時からなか／＼の働者にて、熊本に於ける山田武甫翁一派と相ひ策應して、大同團結の九州に於ける運動を殆ど防止した。これには斯く申す予も聊か一臂の力を效し、予の代表者として、阿部無佛翁が專らその事に任じた。

俄然予等の豫見の通り、後藤伯は危急存亡を踏臺として、二十二年三月三日には黑田內閣に入り、

遞信大臣となつた。此に於て大同團結に隨喜し、後藤伯に謳歌したる連中も、今更ら呆氣にとられて、何れも尻餅をつかんばかりの有樣であつたのは、如何にも氣の毒千萬であつた。

四　井上世外侯と予

◇政治に對する予の興味

話代つて、井上侯は明治二十年の條約改正問題に破れて、その職を退き、二十二年にはその最近は政敵にして、以前は政友であつた大隈侯が入閣の間もなく、再び黒田內閣の農商務大臣となつたが、そはその志でなく、しかも勃々たる雄心は自ら制する所以を知らず、此に於てか得意の歐化主義は一變して、同志者の糾合となり、一方に於て、農事改良として、頻りに大農論を振り廻し。他方に於ては自治論を提唱し、政治の要は地方制度より手をつけねばならぬと云ふ事にて、遂に世間では「井上は自治黨なるものを組織するもの」と認められるに至つた。是れには獨逸流儀の青木周藏子の鼓吹が與りて力大に居た。

扨予は少年時代に、會て井上侯を知り、而して新島先生の同志社大學運動にて、屢〻面會し、斯く

て井上侯は予に向つて、多少のインテレストをとるやうになり、新島先生を介して予に洋行を奬めらるゝ事となつた。今こそ洋行など〻云うても、新橋から大森に行くのと殆ど違はぬが、當時に於ては、なか／＼たいした事であつた。予も食指聊か動かんでもなかつたが、つら／＼考ふるに、一度井上侯の恩惠を蒙むれば、一生關係が出來、出來ても差支へはないが、井上侯は或人の說に依れば鬼子母神であつて、時としてはその子を懷に入れて愛撫し、時としてはその子を取りて喰ふと云ふやうなる事にて、首尾克く侯と關係を保つ事は困難であると考へ、折角の好意ではあるが『國民之友』の用事にて、應じかねる旨を新島先生に告げて、體よく斷つて貰うた。しかも屢〻井上侯の邸に出入するの止むなきに至つたから、世間からは自然斯く認められ、當時須藤南翠氏が『改進新聞』に掲げたる小說には、予と當時日報社長にして『東京日日』の主筆なる關直彥君を、小說中の人物に書込んだと云ふ事であつたが、果して然るや否やは、予が保證するところではない。

予は自から政治家たるを好まなかつたが、併し政治そのものは頗る好物であつて、須臾も政治を離れる事が出來ず。その爲に漸次に實際の運動にも主役ではなかつたが、加役として多少の努力をした。即ち明治二十二年の春、地方自治制の實施せらるゝに際し、予は父の執山田武甫翁と共に熊本に歸へり、全縣下を遊說した。これは單に地方自治制に對し、地方人士の耳目を啓發すると云ふばかりでな

く、山田翁等にとつては、翌年行はるべき第一回の帝國議會に於ける、衆議院議員總選擧の準備であつたかも知れない。

予は固より政黨員ではなかつたが、當時に於ては恐らくは政黨員以上の熱心を以つて働いたであらうと思ふ。若し予が議員たるべき野心があつたならば、第一期の總選擧には、年齢が未だ三十歳に滿たずして致方なきも、次回からは差支なければ、豫じめその地盤を作るべきであつた。しかも予には初めからその考がなかつたから、それ等の事は一切度外に置き、殆ど萬遍なく山田翁と共に、巡回演説をした。

五　條約改正問題と予

◇大隈侯の遭難

明治二十二年は、予にとつては實に多事多端の年であつた。それは一方には政治上に於て、大隈侯の條約改正が、世の中の大問題となり、予も又たその渦中に投じてゐたからである。第二は同志社大學運動が愈々緒につき、その爲に其の方面に於ける予の仕事が頗る増加した事である。第三は予の宿

志である新聞發行の準備が、此年に於て略々出來つゝあつた事である。以上の三つに就いて、今少しく順を追うて、手短かに語るであらう。

扨大隈侯は井上侯の條約改正失敗の後を引受けて、外務大臣となつたが、彼の滿々たる野心は、手を拱いて無爲無策の宰相たるを屑しとせず。寧ろ井上侯の失敗の餘を引受けて、是非共條約改正を議會開設以前に成就せんと努力した。固より大隈侯は井上侯ほど露骨に外人の要望に讓與しなかつた。しかも例せば吾が法權を外人に承認せしむる爲に、彼等の註文通りに外人は使用せざる迄も、外人を日本に歸化せしめて、それを採用するなどゝ云ふ事にて、畢竟反對者の眼から見れば、井上侯の條約改正と、事實に於ては五十歩、百歩に過ぎなかつた。

當時自由黨は勿論、苟も大同團結の流を汲む者、若しくは保守黨、國權黨の面々は、孰れも條約改正反對にて、中止の請願、若しくは建白書などを出す者が相接した。予は此際、この勢を防止せねば、保守的反動が何處迄出で來るも知れずといふ考にて、從來大同團結に反對したる行掛り上、大隈侯の條約改正を理想的とは思はぬが、寧ろ最善を得ざれば次善を得よとの立場から、これを成就せしめた方が得策であるといふ見地にて、多數の世論に反對した。

『國民之友』は明治二十年二月創刊の頃は、月一回、やがて二回となり、三回となり、後には週刊と

までなつたが、世間の好奇心も時間と共に減退し、競爭者も世上に可成り出で來り、その爲に劈頭ほどの大景氣はなかつたが、しかも總ての點に於て當初占め得たる地歩を失はなかつた事は、雜誌そのもの丶品質、勢力の上から云つても、又たその經營上の所謂る成功といふ點から云つても、間違ひなかつた樣だ。特に『國民之友』が春期、夏期の一年二回の大附錄は、一代の文學者を網羅し、恰も時代の水平最高準を示すものとなり、又た『國民之友』に其の寄稿を採錄せられたるが爲に、名を成したる作家も尠くなかつた。

それは兎も角も明治二十二年の下半、條約改正の騷ぎに際し、議論としては、殆ど孤城落日の姿であつたが、然も當時『經濟雜誌』の田口卯吉君『報知新聞』の矢野文雄君等と互に呼應して論陣を張つた。併し正直に云へば、予は此の條約案に隨喜した者でなく、唯だ彼れ是れより善しと云ふ程であつたから、贊成の方面には、左程熱心ではなかつた。これが爲に『國民之友』の讀者に、或は多少の影響があつたかも知れぬが、予自身に於ては、それ程氣付く程のものはなかつた。併しこの戰爭は予にとつては負け戰であつた。

それは當時閣僚の一人たる後藤伯は、內輪から外界の反對黨と、頻りに氣脈を通じ、又た樞密院議長であつた伊藤公の如きも、隱然反對の態度を示し、樞密顧問官にして明治天皇の御信寵最も篤き、

元田先生の如きも、頻りに暗中の飛躍をせられ、如何に大隈侯が奮闘するも、到底勝色は見えなかつた際に、即ちその十月、大隈侯は霞ケ關外務省の門際にて、來島恒喜の爆彈に打たれた。此に於て改進黨は極めて不利なる立場にあり、予と氣脈を通じつゝあつた九州の進歩主義者も、反對黨が條約改正反對の氣運に乘じて、自由黨の面々と提携し、大活動をなした爲、尠からざる打擊を受けた。併し予一個の立場としては、何等の痛痒をも相感じなかつた。

六　明治二十二年の雜事

◇森有禮子と予

◇初めて松方公と會見

話前に還へる。明治二十二年二月十一日の憲法發布は、目出度く相濟んだが、その時には森有禮子が西野文太郎の爲に刺殺せられた。森子は元來急進黨の一人にて、米國に於ては新島先生等と頗る懇意の間柄であつた。然るに彼が文部大臣となるや、官學一點ばりにて、私學に對しては何等の同情をも寄せなかつた。

予は新島先生の代理として彼を文部大臣官邸に訪ひ、同志社の事に就いて種々の相談をしたが、何一つ相手として取合はなかつた。予はこれが爲に若干不快を感じた。それは予を侮辱すると云ふではなく、その舊友である新島先生を侮辱するが如き口氣を漏したかの樣に、受取られた爲であつた。されば彼が刺殺せらるゝや、予は直に新島先生に向つてその旨を電報もて告げ知らせた。予は必ずしもこれを愉快とは思はなかつたが、併し當時は、當人の被害は、自業自得ではあるまいかと思つた。今日から觀れば、森子の心事に諒とすべきもの頗る多く、彼に缺點もあり、失策もあつたが、彼は文部大臣として、吾が帝國の歷史に最も記憶せらるべき一人であつた事は、間違あるまい。

又たその頃の黒田首相は、首相官邸に憲法發布祝賀の大夜會を催し、それには全國府縣會の議長などを招待せられた。予も亦た招待せられて、生れて初めて總理大臣の官邸なるものに赴き、又た夜會なるものに列した。予は予の妻及び群馬縣會議長として招待を受けたる湯淺治郎氏、及び予の姉たる湯淺夫人等と赴いたが、案内せらるゝ儘に奥へ奥へと赴き、左右を顧みれば、孰れも綺麗に著飾りたる婦人のみにて、男子らしきものは一人も見えなかつた。そこで初めて此處は貴女の控室である事に氣付き、急がしく飛出した。

扨舞踏が初まつてから、眞鍮の小札を持歩き、それを手渡しつゝあつたから、予もそれを受取らん

としたが、初めてそれが舞踏の番組である事を知つた。予が特に驚いたのは、從來野蠻人の標本と思うてゐた、醉興の親玉、喧嘩の大將黑田伯が、殊勝にも、婦人を相手に踊つてゐた事であつた。その相手が外國婦人であつたか、日本婦人であつたか、そこまでは記憶せぬが、予に於ては實に意外の感があつた。

予はその晩種々の人に出逢つた。而して松方公と會見したる初は、實にその席上であつた。松方公は予が父の舊友と云はずんば舊知であつた。予の家には維新頃の公が、予の父に寄せられたる書通の書簡があり、父はよく公を知つてゐた。併し予は必要なき所には一切出入しなかつたから、實はその時まで松方公とは、直接に言葉を交した事は無つた。然るにそれ以來、予と公との公私の交際は始まり、遂に大正十三年七月、公が世を終る迄、師友の如き關係を持續した。

七　新島先生の晩年

扨又た同志社の事は追々世間に認められ、一瀉千里の勢で進むべきであつたが、井上侯の氣紛れと、種々の事に就いて智慧と力とを藉したる陸奥伯が、全權公使として米國に去りたると、大隈侯が

條約改正に沒頭して他を顧るの遑なきと、種々の事情に依つて、東京では初め程の景氣ではなかつたが、地方に於ては、なか〳〵の勢力であつた。

併しこれと同時に新島先生の身體は、屢々危險狀態に瀕した。明治二十一年の夏であつた乎と思ふ、先生は鎌倉に居られたが、殆ど危篤に迫り、予はその報に接し、當時鎌倉迄は汽車が全通してゐないから、看護婦を連れ、藤澤まで汽車にて、それから車にて鎌倉長谷の三橋なる、先生の寓所に馳けつけた事があつた。

先生の心臟病は最早や階段を上る事さへ容易でなかつたが、しかも東奔西走、身を以つて同志社の事に當る有樣にて、予は淚と共にこれを止め、出來得る限り予は先生の代理として、その勞に服することにした。

當時制定せられたる同志社通則、卽ち同志社の憲法なども先生の望みに任せて、予がその原案を起草した。斯くて先生は二十二年の末には、相州大磯の百足屋の奧座敷に寓し、これにて新年を迎へた。

予は當時『國民新聞』の創立の爲に頗る多忙であつたが、新年に入りてから先生を大磯に訪ね、種種の談話をした。而してその時に、多分金森通倫君も同席であつたと思ふが、愈々大學設立の場合には、政治、法律、經濟だけは、東京に置く方が便宜であり、且つ得策であると云ふ事に相談が一致し、

機會を見てこれを發表する事に話合つた。

その事は先生の日記を見れば明からさまには記してはないが、その意味として受取らるべき文句が掲げてある。先生は篤學の人であり、又た下問を恥ぢざる人であつた。されば晩年東京に於て、大學の爲に奔走せらるゝ時には、猶ほ車の上にて讀書を怠らなかつた。特に和漢の書籍に興味を感じ、頻りにこれを耽讀せられてゐた。

右の次第にて、先生は自ら餘命幾何も無いと思つて居られたであらうが、さりとて早急に永眠せらるゝであらうとは、吾も人も考へては居なかつた。即ち明治二十三年の新年を迎へた先生の詩に、

『劣才從乏濟民策。尙抱壯圖迎此春。』

とある通り、先生の胸中には、その壯圖が往來してゐた。先生は決して唯だ京都に蟄居して居る事を屑しとしなかつた。其の證據と見るべき一は、先生は大磯に極めて狹くはあつたが、小軒を建つべき程の地面を需めて居られた。其は大學の一部分を東京に分設すると云ふ話の前であつた乎、後であつた乎、其の登記は先生の永眠後に至つて了した程であるから、早くとも二十二年の末であつたらうと思はる。

先生は大磯に在つて、東西兩京を股にかけて、同志社を擴大する積りであつたに、相違あるまい。

寄　人　（明治二十一年　二十六歲）

分明蘇嶽在雲間。　極目原頭倦鳥還。
欲向相知問消息。　秋風吹夢落家山。

第八章　『國民新聞』發刊時代

一　國民新聞發刊の準備（一）

◇ 新聞社屋と印刷所

新聞を發行する事は、予が新聞記者とならんと志を立たると同時に、思付きたる事ではない。順序から云へば、當初は唯だ新聞記者とならんとするが、唯一の目的であつたが、完全に新聞記者の機能を働かしむるには、自分が新聞紙そのものに對する自由の手腕を揮ふ事が必要であり、斯くするには自らその新聞の持主、若くは重なる持主たるべき必要のある事を認めたから、予は何れの新聞社に入社する事も見合はせ、何時かは自ら思ふ通りの新聞を發行して見度いと考へてゐた

而してその考は『國民之友』が殆ど豫想外の成功をなしたから、猶更ら一層の自信力を持つて來た。併し今日は勿論であるが、明治二十二年代の當時に於ても、一つの新聞を作る事はなか〳〵容易

でなかつた。

當時東京には所謂五大新聞なるものあり。即ち『日日』、『報知』、『毎日』、『朝野』、『時事』であつた。其他には幾多の小新聞なるものがあつた。而してその中間にも若干の新聞はあつたが、若し強ひて領地を開拓すべきものありとしたならば、それは大新聞に非らず。小新聞に非らず。その兩新聞の境目に、若干新たなる力を讀むべき餘地があつた。

即ち予は此の方面に向つて鍬を打込まんと考へた。抑々何時頃から日刊新聞發行を具體的に計畫み出した乎。今ははつきり記憶しないが、尠くとも明治二十二年の初には、即ち憲法發布の前後には、既にそろ〳〵其事に取掛つたらしく思はるゝ。それには第一、人である。予は豫め新聞の同人たるべき人物を夫々物色し、單に物色したるのみならず、平たき言葉を以つて云へば、その人々へ手付を打つて置いた。それのみならず豫めその準備として、その人々を夫々實地に就いて、練習せしめて置いた。予が福田和五郎君を『京都日報』に派出して、其の編輯長とし、十分の練習を積ましめたのも、その一であつた。予は如何に遲くとも、明治二十三年帝國議會開設の年には、是非共吾が新聞を以つて、意見を發表して見度いと考へた。

當時『國民之友』は一ケ月三回、十日に一度の發行で、それにても云ふだけの事には何等差支へは

なかつたが、何やら日刊新聞でなければ物足らぬ樣に思はれ、是非共日刊新聞が欲しかつた。併しこれには尠からざる困難があつた。第一は資金であつた。第二は新聞經營であつた。若し此際これ迄予と提携したる湯淺治郎君が『國民之友』發刊の當初に於ける如き熱心を以つて、此事に從事したならば、右の如き心配は無つた。併し湯淺君は寔に立派な人物であるが、それと同時に狷介不屈の人である。何時迄も予の女房役たる事に甘んずるには、餘りに獨自一己が勝過ぎてゐた。予は此事に就いて君を說いたが、君は反對はしなかつたが、實を云へば寧ろ已むを得ず贊成した。それで新聞を作るといふ一點に於ては、傍觀的態度と迄は行かなかつたが、左程熱中しなかつた。これが爲にその金策も予自ら當たらねばならぬ事となつた。

當時民友社に幾何の資金があつたか知らぬが、何れにもしろ明治二十年から二十二年迄の間に、若干の儲があつたに相違は無い。兎も角も日吉町の共存同衆演說館で、後には大谷派の說敎所となり、更に飯島某といふ盲者の高利貸の所有となつたものを、都合に依つて買收する事となつた。それが卽ち國民新聞社の本據で、大正十五年四月、加賀町に移轉する迄、その本據は動かなかつた。此の家屋を詳しくは知らぬが、五千圓若くはそれに少し出た位の額で買受けた。

場所はそれで澤山であるが、印刷は如何にすべき乎といふ事であつたが、當時一二の新聞社は秀英

舍に依頼して居た。その例に傚ひ、印刷一切は秀英舍に引受けしむる事とした。即ち植字大組みを此方にてやり、大組みしたるものを、秀英舍に持行き、秀英舍にて印刷する事にした。而して植字、大組みも秀英舍が出張して來たものであつて、詰り新聞社が秀英舍に出張するではなく、秀英舍が新聞社に出張して來たのであつた。

當時新聞のメ切りと云へば、四時かせい〴〵遅くとも五時か六時。頁は四頁、多くて六頁、發行部數は五千から一萬迄と云ふ事であれば、それで澤山であつた。併しそれにしても新に新聞を作るには、なか〳〵骨が折れた。吾社は固より『國民之友』の地盤があつて、その地盤の上に新聞を載せて行く事が出來て、新に發刊するとは申せ、頗る便宜ではあつたが。それでも創業は固より創業である。如何にしても創業費の一萬や二萬は必要であつた。

二　國民新聞發刊の準備（二）

◇資金に關する苦心

新聞編輯の方は田舍新聞であるが、予は曾つて『東肥新報』に關係して、その爲に極めて幼稚では

あるが、若干の經驗があつた。且つ此方には當にしたる人もあり、當にすべき人もあつて、懸念は無かつたが、經營の方は全くの無經驗であつた。さりとてその儘閑却すべきでは無かつたから、此方は人見一太郎氏に擔當せしむる事とした。

人見氏も無經驗の程度に於ては予と同樣であり、彼は唯だ『國民之友』の編輯に、若干參與したといふ迄の事であつたが、なか〳〵强情者にて、且つ清廉潔白の士であり、且つ人を能く容るゝと云ふ事は兎も角も、部下を作らへ、部下を愛すると云ふ事は、間違ひなき人であつたから、先づ此人にこの方面のことを委する事とした。固より其上には湯淺治郎君が、監督をしてゐた事は、改めて云ふ迄もない。

扨て資金の問題である。既に新に社屋を購求したる上は、此上民友社に餘金のあるべき筈もない。予は如何にせんと考へた。それに就いて予が第一思付いたのは、當時社會に於て多くの大學生等を養成し、所謂る文化事業に就いて理解心があり、又た人を助くる上に於て義俠心があると評判ある、某出版業者である。彼は當時教科書出版以外に、流行の小說、雜誌、文藝等の書籍を出版し、凡有る文士はその庇蔭を受けてゐた。理つておくがこれは博文館の事ではない。

予はその人こそ與に語るべきものと考へ、何等の緣故も無かつたが、夫から直にその人に面會を申込

み、約束の上、下谷龍泉寺町の私宅を訪ね、第一予が新聞を作る所以を述べ、第二予が作る新聞は特色ある新聞である事を述べ、第三從つて必らず成功すべきものたる事を述べ、最後に共同事業なり、若しくは資金の貸與なり、何れなりとも予の話に一口加つて貰ひ度いといふ事を申述べた。

然るに彼は或る小新聞の持主であつて、當時はその持主であつた乎、若くは持主を辭めた乎、その事までは明白に覺えてゐないが、何れにしても新聞に就ては、全くの素人ではなかつた。從つて予の話に對しては頗る懷疑的にこれを聽き、頭から斷つた。予も聊か面目を失し、悄然と歸つたが、此に於て初めて人の懷中を當てにした事を、悔いざるを得なかつた。併し矢弦上にあれば發せざるを得ず。今更ら中止するわけにもゆかず、此に於て湯淺君とも相談の上、上州原市の半田平次郎氏から一千圓を借用する事とした。半田氏はクリスチャンにて、同志社などにも寄附金をなし、新島先生の崇拜者であつたらしく思はれた。湯淺氏とは固より交友の間柄であつた。予とは別段何等の關係も無かつた。併し千圓の金ではとても物にならぬから、そこで予は彼是考へて、予が郷里熊本縣葦北郡田ノ浦村藤崎彌一郎氏に申込む事とした。同氏は予が從來の懇意にて、地方では大地主であり、數年前予が猶ほ熊本に居た際、吾國に銀貨と紙幣との價格の差甚しき際、予の意見を聽いて意外にも金儲をなし、それにて予を德としてゐたと云ふ事を聞いてゐた。理つておくが、これは予が藤崎氏を儲けさせ

る爲に言つたのでは無く、予の出駄羅目が偶中したものであつて、予としては何等恩を被すべき筋でなかつたが、藤崎氏は何故か予を德としてゐたといふ事である。それは扨置きその話を申込んだ。當時に於ては、五千圓の金は頗る大金であつた。今日では二十億の豫算を振廻す日本政府も、當時は漸く八千萬圓、六千萬圓の間で民黨と鎬を削つた時節であるから、五千圓と云へば大金であつたに相違ない。それで藤崎氏も予の申込に對し、且つ予の申込を取次ぐ二三の友人の顏に對し『金錢は御用立つるが、何とか保證人が欲しい。湯淺君ならば申分は無い』との註文であつたが、當時の湯淺君は『半田氏の分だけは保證に立つが、それ以外は御免蒙り度し』との事にて、其上强ふべき事でもなく、予は止むを得ず事情を打明けて、新島先生に保證人に立つて貰ふ事とした。

三　國民新聞發刊の準備（二）

◇新聞の特色と久保田米僊の招聘

予は兼ねて如何なる新聞を作るべき乎と云ふ事を研究し、當時英國留學中の望月小太郎君に托し、凡有る英國の新聞を取寄せて、その長短得失を研究した。その中で當時英國にて所謂る「New-Journ-

Mall を標榜したるステッドの『パルマル・ガゼット』などは、恰も予が意を得たるものたる如く思はれた。予は豫ねて京都の畫家久保田米僊氏を知つてゐた。此人は畫家ではあるが、政談演説などもした事があつて、なか／＼娑婆氣の多い人であつた。而してそのスケッチに至つては、天下一品と思はれるものがあつた。

嘗て君が佛國博覽會に赴くの際、予が編輯員の世話を燒いてゐた『京都日報』の紙上に、途中からスケッチを送つたが、それは如何にも面白かつた。そこで予は愈〻新聞を作る日には、何はともあれ先づ久保田氏を聘する事を第一の要件と心得、兎も角もこれから手をつけねばならぬと思ひ、京都に飛んで行つたのは、明治二十二年の秋にて、世中は大隈外相の條約改正中止運動の眞最中であつた。當時予が中止運動に反對しつゝも、餘り目覺ましき働をしなかつたのは、本來大隈案そのものに就いて、深く隨喜しなかつたばかりでなく、實は新聞創刊の計畫に、殆ど全身全力を效してゐたからであつた。

斯くて予は京都に赴き、久保田氏に面會し、事情を打明けて此に約束を結んだ。予は久保田氏に月給七十圓を拂ふ可しと云つたが、久保田氏は百圓欲しいと云ふ事であつた。今日から云へば寔に兒戲に類するが如きであつたが、百圓の月給といへば、當時に於ては決して少額では無つた。何れにして

も、予は編輯局に於て、最も高き給料を、久保田氏に拂ふ事に取極めた。

當時の新聞、即ち所謂大新聞たるものは、社説と云へば先づ政治問題か、せいぜいくだけて經濟問題に止り『左樣然からば』のしかつめらしき文句のみであつた。從つて新聞紙面は單調であり、無味乾燥であつた。何れの新聞を見ても、沙漠を行くが如きものであり、但だその中に於て『報知新聞』に於ける栗本翁、若くは『朝野新聞』に於ける成島柳北、『日日新聞』に於ける岸田吟香諸君の文章が漸く見るべきものがあつた。然も是れも當時は過去の事となつてゐた。而して社説に於ては福地、福澤諸君の文章などであつたが、それさへも明治二十二三年の頃は、段々特色を失つてゐた頃であつて、更に新聞界に新しき局面の打出を必要とする時であつた。

予は新聞の問題は決して政治、經濟に限るものでない。文學、宗教、美術、凡有る社會問題、凡有る人事問題、悉く新聞紙面の種として取扱ふべきものであるから、政治經濟に偏重する必要の無き事を認めてゐた。又た新聞は必ず讀むものと思うてゐるが、その外に又た見るべきものである事を考へ、問題次第では讀むよりも、寧ろ見る方が早分りのする事を知り、新聞に於て凡有る事件を繪畫にて説明するの必要を認めた。風景とか、人物とか、肖像とかは勿論、火事があれば火事の繪、祭禮があれば祭禮の繪、當時は未だ寫眞術が發達せず、寫眞版が普及しなかつた時にて、勢ひスケッチの木

版畫が必要であつた。

同時に事件が新聞の種であるのみならず。意見も亦た新聞の種である事を認めた。當時意見として新聞に揭ぐるものは、社說、論說、投書の部類であつた。併し予はそれ以外に、その時々にその問題に必要なる人を捉へ、その意見を聽き、これを新聞に揭ぐるといふ事が最も大切なる事を認めた。所謂る對話、即ちインタービューなるものを、吾が新聞界にも採用せねばならぬと考へた。予のなした事は必らずしも、予自ら發明の特許をとる程の價値は無い。併し吾國に於ては、如上の件々は予が國民新聞發刊と共に始めたと云ふ事が出來なければ、尠くとも廣く遍くこれを行ふに至らしめたと云ひ得るであらう。

四　國民新聞の發刊と新島先生の永眠

一切の準備は先づ明治二十二年一杯に出來上つた。社員の勢揃も略々出來た。編輯長には湯淺君が群馬縣會議長の際に、その書記に採用し、其の能力を認めて『國民之友』編輯員に推薦し、予は又たその能力を認めて『京都日報』創立者に推薦し、その爲に新聞編輯には、一通りの經驗を經來つたる

福田和五郎氏を以つて、これに任ずる事とした。

予自らは又た此事に就いて、晝夜兼行の奔走をしてゐた。而して發行の期日は愈〻明治二十三年二月一日と定めた。斯くて一月二十日に新聞發行披露の爲に、從來『國民之友』の特別寄書家其の他種種の緣故を持つて居る人々を招待した。愈〻當日の午後となり、予は珍らしくフロックコートを著込み、瀧山町（只今銀座西七丁目）なる床屋に顏を剃りに赴いた際、端なく社の小使が其處まで一通の電報を齎した。それは『先生危篤至急來れ』と云ふ事であつた。予は豫ねて新島先生の心臟病が、不治である事を知つてゐた。而して早晩先生と死別せねばならぬ時期の來る事を知つて居た。併し斯く迄急に、その事が迫つて來樣とは思はなかつた。

予は顏を剃り終つた乎、終らなかつた乎、それさへ氣がつかぬ樣に飛んで歸へり、當夜三緣亭に招待するお客の接待一切は湯淺君に依賴し、萬一の場合を慮り、取敢へず小崎弘道君に通知して、至急大磯に赴かれん事を通じて置いた。これは別儀でも無い。愈〻先生が最後に迫られた場合には、予は宗教者としては何事もなし得ない。何はともあれその場合に牧師たる小崎君が第一必要である。

斯くて予は取るものも取敢へず新橋から汽車に乘り、大磯に著し、停車場から百足屋の別莊に至りたるに、呻吟の聲は殆ど門外に聞えてゐた。それから二十三日午後二時二十一分、先生の永眠せらる

る迄、殆どフロックコートの著詰めにて、徹夜の看護をしたが、先生は遂に逝かれたのである。先生はその逝く前に種々の遺言をせられたが、それを聽いてゐた者は、小崎弘道氏、及び京都から來られたる先生の夫人であつた。一切は予が悉く筆記した。先生は固より靈魂不滅を信ずる人にて、死を恐るゝ人では無い。併し當時は注射などと云ふ事も思ふ樣には行はれず、その苦痛は實に傍目に見てゐるのが、又一段の苦痛であつた。

予は先生の逝かるゝや否や、先生の夫人に向つて斯く云つた。

「私は同志社以來貴女に對しては寔に濟まなかつた。併し新島先生が既に逝かれたからには、今後貴女を先生の形見として取扱ひますから、貴女もその心持を以つて私に交つて下さい。」

と、爾來夫人の逝かるゝ迄、予は新島夫人をその時の心持同樣の心持を以つて待遇して居た。

話代つて先生と殆ど同時に、明治十九年十二月予等一家の熊本から東京に移轉する際に同行したる女學生、池田禰尾子も亦た大學病院にて逝いた。彼女は特殊の婦人にて、予は予の伯母竹崎順子の紹介にて面會した。志を立てゝ男裝し、五分刈、兵子帶、絣の羽織、朴齒の下駄といふ扮裝にて、拒絕したるにも拘らず、强て予等と同行したが、品行も方正であるし、品性も潔白であるし、殊勝な女性であつたが、遂に逝いた。

これは予の生涯に何等の關係は無いが、偶然の出來事であるから、此に附加へて記して置く。
後にて聞けば三緣亭に招かれたるお客の面々は、主人が居ないとて散々不平を並べ、中には又た洋食に酒を出さなかつたとて、その不平も交つたと云ふ事であるが、併し予に於ては致方なき事であつた。新島先生の死は日本の爲にも、同志社の爲にも非常なる打撃であつたが、予一個人にとつても非常に寂寞を感じた。明治九年の晩秋以來二十三年の初春に至る迄、先生とは離合集散常無かつたが、併し互に相知り、相ひ敬愛し、最近二三年間は、悉くとは云はぬが、同志社問題等に就いては、同心一體として働いた。予は初から同志社そのものに多くの望を屬したと云ふよりも、唯だ先生の志を援くる爲であつたから、先生を失つた後の予は、同志社に對する考へも聊か異らざるを得なかつた。
それは兎も角も、當面の問題は先生を保證人として借受けたる創業費の一件だ。予は取敢へず吾が同郷の債主たる藤崎氏に、左の如き電報を打つた。
『保證人たる先生は逝いた。貴君より借用したる五千圓は、其儘手許にある。若し先生無き爲に安心が出來かぬると云ふ事であれば、直に返濟するも苦くない』
然るに藤崎氏は、
『此上は致方ない。一切貴君を信賴するから、然るべく使用あれ。保證人は誰にても異存は無い。』

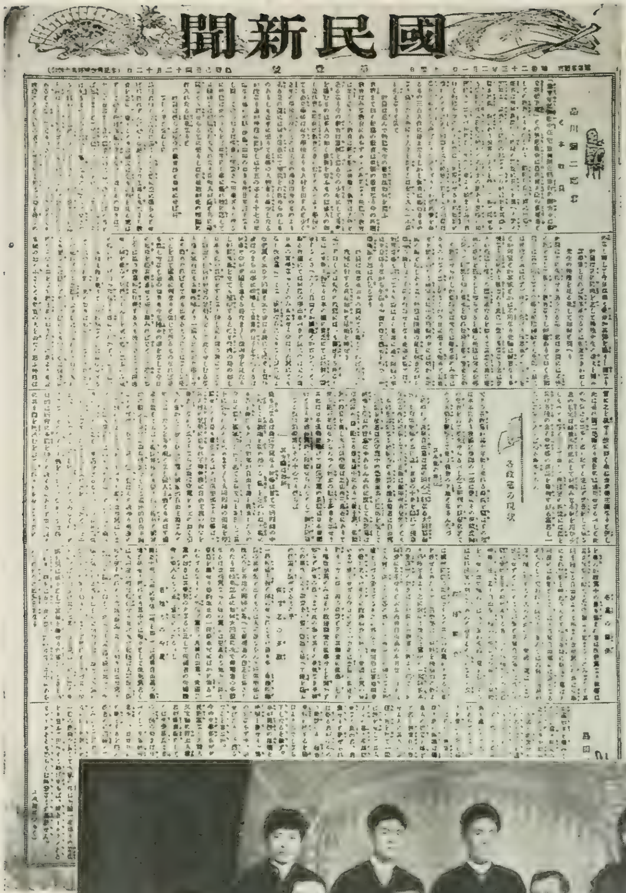
と云ふ事であつた。そこで予は『國民之友』の會計をしてゐた事務員を保證人として、その金を創業費に使用する事が出來た。

五　國民新聞の發刊と世評

◇新聞發刊當時の政界

斯くて明治二十三年二月一日の朝『國民新聞』第一號は出で來つた。これを『國民新聞』と命けたのは『國民之友』の國民なる字を其儘使用したのだ。而して『國民之友』と『國民新聞』とは、恰も米國紐育に於ける『ネーション』雜誌と『イブニング・ポスト』の關係の如く、兩者倂立する事とした。

扨新聞が出來上つて見れば、予自身に於ても滿足は出來なかつた。而して『國民之友』にて多大の望を囑したる世間も、敢へて悉くとは云はぬが、その一部では確かに失望したらしかつた。何時も餘は柳の下には居ない。『國民之友』で世間を驚したる予は、再び新聞で驚かすと云ふことは、初から期待したる事では無かつた。或者は日刊雜誌であると云つた。無用の文字を羅列して、何等新聞ら



(上)『國民新聞』第一號

(下) 明治二十三年『國民新聞』創刊當時の蘇峰翁 社員

後列右より 福田和五郎氏 栗原武三太氏 左端人見一太郎氏

中列 〃 芳野熊彦氏 久保田米僊氏 翁(二十八歳) 竹越與三郎氏 渡邊政德氏

前列 〃 塚越芳太郎氏 德富健次郎氏 丁吉次氏 宮崎八百吉氏 小澤安左衞門氏 中村修一氏 渡邊勝用氏

しき種は無いと云つた。それも或る程度迄は當つてゐたかも知れない。併し公平に云へば、矢張り新機軸を出したに相違は無い。世間の期待ほどでは無かつたとしても、必らずしも特色なき新聞では無かつた。而して當初から七千内外の購讀者を得た。當時に於ての七千の紙數は、一萬が殆ど新聞發行の最上級であつた時代であるから、決して少いとは云へなかつた。

必ずしも手前味噌では無いが、縱令『國民新聞』の發刊が、世間の豫期にも、又た予自身の期待にも、全く副ふ事が出來なかつたとは云へ、凡有る意味に於て、新聞界に新紀元を打出した事は、疑ひも無い事であつた。

『國民新聞』は新聞紙面の及ぶ範圍を廣くした。卽ち從來殆ど閑却せられたる人間の生活、及び思想の凡有る方面に向つて、新領土を開拓したのであつた。而してこれが他の新聞に、新たなる刺戟を與へた事は、爭へない事實であらう。

併し當時に於て、予の主なる目的は、此の新聞を以つて改良の目的を達せんが爲であつた。當時予の最も熱心であつたのは、第一、政治の改良。第二、社會の改良。第三、文藝の改良。第四、宗教の改良であつた。

而して『國民新聞』は、以上の改良に向つて、自ら急先鋒を以つて任じて居た。その中にても、政

治の改良が予の最も熱中する所であつた。

抑如何にして政治を改良する乎　予の當時の意見は何よりも先づ藩閥政府の打破であつた。これを打破するには輿論の力を以つてせねばならず。而して輿論の力と云ふも、唯だ空言、空論で無く、實力を以つてせねばならぬ事を、十二分に認めた。而してその所謂る實力とは如何なるものである乎を考慮し、先づその實力の養成と糾合とに勗めた。

予の考ふる所に依れば、自由黨と云ひ、改進黨と云ひ、是迄互に鎬を削つて來たが、何れも藩閥に對する反對黨である。政府黨に對する在野黨である。

然るに互に相爭ふと云ふ事は、これ恰も在野黨の力を以つて、藩閥政府を擁護する所以である。斯くては憲法が發布せられ、帝國議會が開設せられても、終古その目的を達する事が出來無い。故に何よりも先づ今日の急務は、在野黨の合同であり、合同が出來なくんば聯合である。

それには先づ自由黨ともつかず、改進黨ともつかず、所謂る九州に於ける進歩黨を合同し、その力に依つて、兩黨を合同するに若くは無しと考へた。これは予一人の考へでは無つた。予等同志の考へであつて、しかもその考へを最も熱心に、且つ有力に唱說したのが、河嶋醇氏であつた。

六　河嶋醇氏と進歩黨大合同

此の機會に於て、河嶋氏に就いて少しく語らねばならぬ。河嶋氏は薩摩の健兒で、山本權兵衛伯等と年齡も相應し、又た少年からの友達であつた。

君は大藏省に於ける三人男――河嶋醇、中村元雄、加藤濟――と稱せられ、特に大藏大臣松方公の寵兒であつた。君は若き時より有名なる論客であつた。然も山本權兵衛伯程の雄辯では無つた。餘りに性急で、聊か吃り氣味であつて、口よりも手の方が先に出ると云ふ漢であつた。

君が毆つたとか、君に毆られたとか云ふ者は、世間には尠くは無い。先年まで樞密院で恐ろしく勢力を張つてゐた、某顧問官の如きは、洋行の途次、船中にて骨牌の喧嘩から、強か毆られたと云ふ話がある。

此人は根は正直者にて、駈引多き薩摩人に不似合に、一本調子の漢であつた。但だ何事に依らず意見が多く、善く云へば『經綸湧くが如し』とも云ひ、惡しく云へば、出來る相談でも、出來無い相談でも、いくらでも註文に應じて出す、と云ふ人であつた。

此人は獨逸、墺太利の間に留學し、特にスタイン博士の門人であつて、行政學、政治學、經濟學等に就いては、當時の官吏としては、造詣淺からぬと云ふ評判であつた。

而して海外に在る中から書を鄕友會に寄せて、屢々その國家前途の長策を開陳してゐた。鄕友會と云ふは、鹿兒島人の社交團體であるが、或は他日君によつて、政治團體になりはしまいかと思ひ、予は君が鄕友會に寄せたる意見に就いて、嘗つて『國民之友』誌上に於いて、一本參つた事を記憶してゐる

然るに君は歸朝後、大いに松方大藏大臣等に重用せらるゝであらうと思うたが、何か意見の衝突でもあつたか、予等が政府黨のチャンピオンと期したる君は、却て反政府黨のチャンピオンとして進み來つた。

君は先づ鹿兒島縣下に於ける、反政府黨の勢力を糾合し、それに依つて、九州進歩黨の合同を提唱した。九州では大同團結の折に、自由進歩主義者の一部分は、これに投じ、他の一部分はこれに反對したが、後藤象二郎伯が、それ等を踏臺として、黑田內閣に入閣して以來、大同團結は事實に於て分解し、從つて九州進歩主義者は、自然一致する傾向を來した。

固よりこの中にも、板垣自由黨に緣故を持つ者もあり、大隈改進黨に緣故を持つ者もあり、双方に

緣故を持つ者もあり、又た何れへも緣故を持たぬ者もあつたが、何れにしても、九州は九州にて團結する事を得策とし、前には九州改進黨の名の下に團結し、後には九州進步黨の名の下に團結する事になつた。

河嶋君等は此の進步黨大合同の旗幟を飜して、中央に乘出し、先づ自由、改進黨に回答を促し、此に議會に乘込むに際し、在野黨の一大勢揃をせん事を企てた。政府ではこの勢を見て、今日で云へば、所謂る右傾團體とも云ふべき者の勢力を假り、頻りに此の大合同の妨害をなさしめた。

而して、福岡の玄洋社、加賀の盈進社などは、何れかと云へば、この進步黨の大合同には、最も反對であり、熊本の國權黨なども、勿論それであつた。

この進步黨大合同に就いては、自由黨側は寧ろ大熱心とは云はざる迄も、餘り異存は無つた。唯だ板垣伯その人が、果して熱心であつた乎否乎は疑はしい。

併し九州出身の松田正久氏等は、無論贊成者の一人であり、特に熊本に於る、熊本進步主義の首領山田武甫翁の如きは、多少予の刺戟も與つて力があつたとは云へ、最も熱心者の一人であつた。

而して改進黨に於ては、島田三郎君等が、頗る熱心に盡力した。併し「好事魔多し」改進黨中に、若干の異議者あり、爲に改進黨の合同者は、味方より攻擊せられ、今更致方も無く、此に於て折角企

てられたる進步黨大合同は、改進黨を取り除きたる、其他の進步主義者の合同に止まらねばならぬ次第となつた。

此の場合に於て、河嶋氏は、反對黨の最も目指す一人となり、街頭若しくは公會の席上に於ても襲はれ、又その宅にも反對黨の壯士が押掛くるといふ事にて、同志の面々は何れも刀を携へて、河嶋氏宅に集つた事があつた。予の如きも刀こそ携へなかつたが、從來の友誼上河嶋氏の宅に出掛けた事があつた。

第九章　議會政治初期の政界と予

一　第一次山縣內閣と初期の議會

◇陸奥伯の歸朝と內閣改造

話代つて當時陸奥伯は、亞米利加より歸へり、山縣內閣の農商務大臣となつてゐたが、彼は當時に於て最も政治的に大なる野望を抱いてゐた。

彼の目的は進歩黨合同でも無く、又た政府黨合同でも無かつた。彼は衷心より藩閥は嫌ひであつた。維新の當時から『日本人』なる論文を作り、昔平家全盛の世には、平氏ならざる者は人にして人に非らずと云うた如く、薩長の全盛の時には、薩長ならざる者は人にして人に非らずと云ふ如き有樣であるが、これでは維新の目的は達せられ無い。日本は日本人にて治めなければならないと云ふ自分の立場から、此くの如き論文を作つて、これを木戸侯に示したといふ事である。

陸奧伯は山縣公が洋行の歸途米國に立寄つた際、大いに山縣公を說く所あり、その後山縣公が日本へ歸へり、内閣を組織するや、陸奧伯もやがて日本に歸へりたるに、内閣の椅子は既に分配し盡されてゐたから、陸奧伯は當時板垣伯と往來し、板垣伯の衣鉢を承けて、愛國公黨――當時板垣伯直屬の自由黨を愛國公黨と稱してゐた――の首領とでもなる如き態度を示し、その處宜しき駈引があつて、遂に山縣内閣は、岩村、榎本二大臣を罷め、新に陸奧、芳川の新大臣を迎ふる事となつた。

この更迭は、寧ろ專ら陸奧伯の爲に行はれたものと見るべきものであつた。爾來陸奧伯は大臣として内閣に在りながら、民間とも交通し、大臣にして候補者となり、遂に和歌山縣選出の代議士となつたのである。而して陸奧伯は此際何事を企てたる乎。恐らくは自ら政府黨でもなく、在野黨でも無く、その中間に蟠る一勢力を作つて、政界を上手く料理して見度きものと、考へたのではあるまい乎。

第一議會に際して、民黨は一千萬圓の豫算から、八百萬圓を減ずべしと論じたるに、所謂る土佐派の爲に六百萬圓にて妥協が成立したのは、恐らくは、陸奧伯の勝利と見るべきものではあるまい乎。特に第一議會の議長は、中島信行――後に男爵となる――氏にして、中島氏は陸奧伯の親類であり、且つ親友であつた。而して土佐派中の林有造、竹内綱などは孰も十年の事件にて、陸奧伯と同じく法

網に罹つた連中であれば、如何に陸奥伯の手が彼等に及んだ乎は、これに依つて知るべきであらう。予は第一議會には尠からず失望した。中江篤介氏の如きは土佐人でありながら、土佐派の裏切りを憤慨し、『無血蟲』の文を草して、遂にアルコール中毒を理由として、議會を去つた程であつた。

二　貴族的歐化主義と予の平民主義

◇ 松方内閣と選擧大干渉

話後に戻る。明治二十年『國民之友』は、發刊以來の傾向よりすれば、予は當時世の所謂る自治黨と稱する、井上侯の仲間に加入すべきであつた。この仲間は井上侯を首領として、青木、野村、陸奥、西園寺、光明寺三郎、其他の新進氣鋭の士等、その中に數ふべき者多かつた。彼等は世の所謂る歐化主義者にして、予の言葉で云へば、貴族的急進主義者であつた。予は從つてその連中には、悉くとは云はぬが、概ね親しかつた。就中、井上、西園寺、陸奥、青木等の人々とは、最も親しかつた。併し予は彼等の所謂る貴族的歐化主義が、予の平民主義と、何處やらしつくり喰合はぬ所があるかの如く感じ、その爲に彼等の傍には近付いたが、彼等の仲間とはならなかつた。併し當初の關係は、

最後迄順縁、逆縁、種々の意味に於て取り續いた。

予は陸奥伯がその身を民間黨に投ぜん事を、期待と云はんよりも寧ろ希望して居た。併し陸奥伯は却つて山縣内閣の働き役者となり、恐らくはその力に依つて土佐派を懐柔し、遂に第一議會の解散を見ずして終はるに至らしめた。これに就いては、當時の予は寧ろ不平であり、不服であつた。

予は何處迄も藩閥政府とは絶對反對にして、憲政樹立の急務は、唯だこれを打破するにありと考へ、その爲には全力を盡した。然るに山縣内閣が松方内閣となるや、議會と政府との衝突に依り、遂に解散となり、明治二十五年二月には愈よ總選擧となつた。

此時陸奥伯は内閣に在つたが、彼は寧ろ伴食に過ぎず、一切の仕事は内務大臣品川子爵と、次官たる白根男爵がやつた。所謂る世にも名高き松方内閣選擧大干渉とは此事である。

松方内閣と云ふも、首相の松方公は何れかと云へば、常識に富んだ穏健なる人で、とても選擧干渉などを自らなす人でもなく、又たなす事を好む人でもない。併し内務大臣品川子爵は、吉田松陰先生の愛弟子にて血性男子である。彼は反對黨を見る事、恰も朝敵を見るが如く、明治二十五年の選擧干渉は、戊辰の初、鳥羽、伏見の役に於けると同様に考へ、敵を退治するには、手段方法などを撰ぶ處では無いといふ事にて、殆ど露骨なる大干渉をした。

當時予は熊本縣なる予の先輩、山田武甫翁の熱心なる希望に應じ、相伴つて下縣し、翁と共に熊本縣下を遊説し、九死一生の目に逢うた。當時横井小楠門下の安場男爵は、福岡縣知事として九州探題となり、熊本縣は同じく、横井門下、松平正直君これを率ゐ、しかもその退治せらるゝものは、熊本は無論、福岡縣の筑後河邊に於ける在野黨は、總じて横井小楠門下と云ふ能はずんば、その類であつたから、謂はゞ同じ仲間の戰さとも云ふべきで、保元、平治の亂も、これには過ぎずと思はれた。

予は當時熊本から玉名郡を振出しに島原に渡り、島原から口の津を經て天草に赴き、天草から風波の爲に、途中の小島に停泊し、漸く葦北郡佐敷に至り、それより球磨川に傍うて溯り、人吉に至り、又た人吉から球磨川を下りて八代に。八代から松橋、宇土を經て熊本に歸つた。

球磨川下りの時などは、人吉の壯士等が鐵砲、刀などを携へ、時々舟中から兩岸に向かひ、發砲して過ぎた。斯くて選擧の結果は、總じて民黨の爲に不利であつたが、しかも熊本では僅かに山田翁一人當選する事が出來た。當時山田翁の爲に、

殊更らに吹き亂さずば山里の
水もかく迄濁らざらまし

とあつたが、全くその通りであつた。

三　選擧終了と歸東途次の插話

扨愈々選擧も濟んで歸京する事となつたが、隣縣の福岡縣は最も亂暴で、野田卯太郎、永江純一氏なども、頗る危險の目に逢ひ、永江氏の如きは、足を傷けられ、遂にその爲に一生跛となつた程である。斯る次第であつたから、同志の者が心配の餘、予に智慧をつけた。それは明朝春日驛（今の熊本驛）から出發すると宣言しつゝ、今夕池田驛（今の上熊本驛）から出發し、吾々同志が護衞して門司まで送り屆けるといふ事に取極めた。然るに同夜は山田翁宅に案內せられ、薩摩汁などの御馳走があり、愈々停車場に駈付けた處、最早や汽車は出た後にて、今更ら致方無く、停車場の茶店に一泊する事となつた。當時茶店は未だその普請が成就せず、別に寢具なども無く、隙洩る二月の夜風には隨分閉口した。而して護衞の一人たる高田露氏は、今更ら相濟まずと、頻りに予に向つて謝罪つた。『これは拙者が意地が汚なく、御身が立たんとしたのに、今一杯と薩摩汁を喫した爲に、此の失策を來したのである』など〻云ひ、孰れも一笑した。

斯くて高田露、井上敬次郎、高木第四郎、阿部充家等諸氏相伴ひ、門司にて下車すべき處を、故

に一驛前なる小倉にて下車し、其處にて晝食をしたゝめんとしたるに、如何なる間違ひか、飛んでもない處に飛込み、今更ら歸へるに歸へられず、怪しげなる婦人等が、狼籍として寢てゐる室の附近にて、兎も角も食事をなし、漸く船に辿りつけば、その船には選擧干渉の親玉たる安場、松平等が孰れも先着し、安場男の如きは槍の穂を杖に据ゑ、それを杖きながら跛足を引ずり、甲板を往來し、意氣軒昂の有樣であつた。

而して此の小さき船中には、佐賀縣にて落選したる松田正久氏なども乘船してゐた相だが、氏は三等船客の中に混じ、毛布を被つて寢てゐたから、誰もそれと氣付く者が無かつた。即ち同志者たる予なども、一向それとは氣が付かなかつた。

四　陸奥宗光伯と予

◇第二次伊藤內閣と陸奥外相

總選擧の結果は無論吏黨が多數で、民黨は少數であつた。併し禍は內から生じた。松方內閣に於ける農商務大臣陸奥伯の如きは、當初から選擧干渉に反對であつた。彼は自ら松方內閣の副總理でな

ければ、參謀長を努むべき資格の人であつた。然るに對議會策に就いては、內務大臣品川子、次官白根男等の手に掻き集められ、陸奥伯は殆ど口を容れ、手を下すの餘地は無かつた。その不平知る可しだ。予は第一議會の際に、陸奥伯が妥協に骨折りたるを快からず思うてゐたが、今松方內閣に居ながら、其の政策に反對したるを見て、自然舊交を回復するの止むなきに至つた。

陸奥伯は內閣の內情を、その儘予に語つたから、『國民新聞』の政治記事は、恰もX光線もて照すが如く、內閣の狀況は暴露せられた。從つて政治新聞としての『國民新聞』が、聲價を擧げたる事は、半ば陸奥伯の賜と云つてもよからう。斯くて松方內閣に於ける內相品川、農相陸奥は、殆ど相搏つの姿となつて、双方共に總選擧の後、臨時議會の前、卽ち明治二十五年三月の中旬に辭職した。依つて從來政府と妥協したる自由黨、特に土佐派の自由黨なども、悉く民黨に復歸した。

斯くて種々の經緯があつたが、二十五年八月には、第二次伊藤內閣が出來、元老總幕出揃の內閣となつた。卽ち樞密院議長伊藤公が首相となり、黑田伯が遞信大臣となり、山縣公が司法大臣となり、而して陸奥伯は外務大臣となつた。この內閣の成立に就いては、陸奥伯なども餘程骨折つたらしかつた。當時伯は西ケ原の邸からよく山下町の帝國ホテルに出掛け、予も亦屢〻伯と會見した。當時伯はランドルフ・チャーチルの演說集等をポケットに入れ、閑を偸んでそれを讀んでゐた。

伊藤公は當時小田原の滄浪閣に居たが、陸奥伯は屢々これを訪問し、種々獻策してゐた。伯の語る處に依れば、「折角伊藤に意見を注入し、愈ゝものになつたと考へて歸へれば、間もなくそれが取消されて、元の木阿彌となる事がある。これは寔に困つたものである。要するに伊藤を動かさんとすれば、巳代治を動かす他は無い。今日では伊藤なども元氣が拔けて、若者の巳代治などに動かされてゐる次第であれば、なか／＼一氣呵成に物事をやると云ふ事は六ケ敷しい」と嘆息してゐた。

實に陸奥伯は聰明と云ふ程度を通越した程の明敏なる人で、井上侯が中心勢力である時には、侯を動す爲に、自分では高慢ちきの鈍物であると心中では冷笑しつゝも、表向きは青木周藏子と結託し、又たその胸中では、伊東巳代治伯などは相手ともしなかつたであらうが、伊藤公を動かす爲には、伊東伯の驩心をとる事も辭せなかつた樣だ。

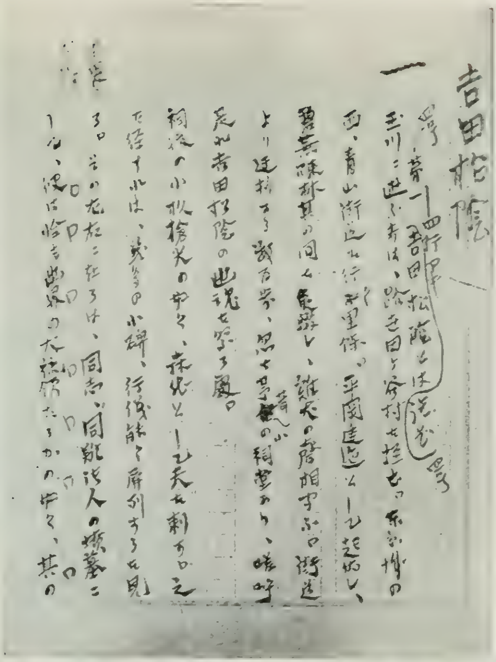
そは兎も角も、陸奥伯は此の如くにして、外務大臣の要職に就き、初めて錐が嚢中に置かれた。これから穎脫するのは當然の事である。予は初から薩長政府に反對するのが目的であるから、陸奥伯が松方内閣と葛藤を生じた時に、陸奥伯と接近したのは勿論であるが、扨愈ゝ第二次伊藤内閣が出來上つて見れば、これ又た松方内閣よりも文明的ではあるが、依然たる薩長の内閣には相違ない。從つて又た予と陸奥伯との政治的關係は、追々疎遠とならざるを得なかつた。

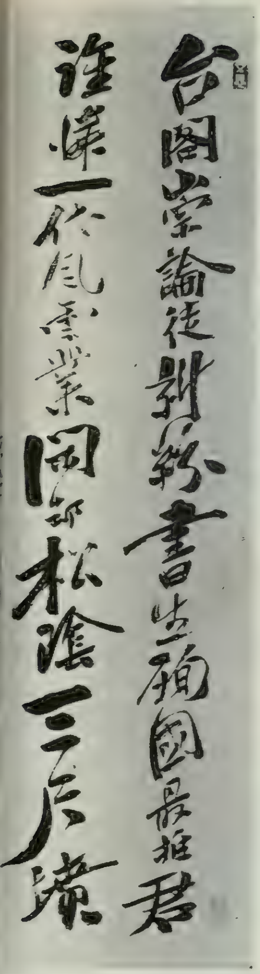
それは何故かと云へば、陸奥伯の手は、又た昔同様自由黨に向つて伸びつゝあつたからだ。陸奥伯は板垣伯とも懇親であり、中島男とは尚更ら親類の間柄でもあり、特に自由黨の雄將星亨氏なども、過去に於いては陸奥門下の一人であつて、陸奥伯とは離れ難き情誼があつた。されば如上の關係を辿つて仕事をせんとすれば、乘ずべき機會は、陸奥伯の方に於ては幾多でもあつたのである。

當時朝野の一大問題は、條約改正であつたが、その中でも內地雜居反對の論者が少く無かつた。これは政府部內にもあつたが、民間黨の中にて、從來政府と關係淺くなかつた保守黨の連中も、概してそれであつた。予は當初より內地雜居論者であつたが、併し陸奥流と云はんよりも、伊藤流の外交には反對であつた。予は飽迄對等條約を主張し、その目的を達する爲には、先づ條約を勵行せねばならぬ事に結著した。

これは予が發明した論では無い。大隈侯が外務大臣として、條約改正を企てたる場合に、執つた政策の一であつた。從來條約面に依れば、凡有る外人は居留地以內に封込まれ、その外に出るには、頗る面倒であり、窮屈であつた。唯だ法は存したけれ共、大目に見てそれを勵行しなかつたから、外人も左程苦情を訴へなかつたが、大隈侯が外相となつて以來、その條文通りに勵行したから、居留の外人等には頗るこたへた。即ち予等の意見はこの勵行を一層手廣く、手嚴しく、徹底的にやるといふ

明治三十四年の徳富家
後列右端が翁(三十九歳)
左端は徳富健次郎氏





（右上）『吉田松陰』の原稿

（右下）松陰先生墓前に於ける（大正二年の撮影）

（左）松陰先生を詠ぜる詩

事であつた。即ち外國人の機嫌をとつて、條約を改正するよりも、寧ろ彼等を徹底的に困らしめて、自ら兜を拔がしむるに如かずといふ意見であつた。この意見は急進黨も、保守黨も、頑固黨も期せずして一致し、此に所謂る六派聯合なるものが出で來つた。その六派の中には、品川子の選擧干渉に依つて出で來り、西郷侯、品川子の統率の下に、國民協會として成立したる團體もあり、其他凡有る右傾派もあつた。而して又たその中には大隈派の改進黨もあつた事は云ふ迄も無い。しかも所謂る自由黨は、陸奥伯などの關係の爲と云ふばかりでは無く、改進黨との對抗上、自然純政府黨では無かつたが、準政府黨であつた。此くの如くにして吾社と自由黨との衝突が出で來つた。

五　自由黨と予との軋轢

◇『大勢一斑』の記事と『國民新聞』不買同盟

『國民新聞』『國民之友』などは、當初から藩閥打破一點張りであつたから、自由黨の態度を齒がゆく思ひ、これを新吏黨などと名付けて盛んに攻撃した。彼等も腹に据ゑかね、何かの機會を待つてゐた。然るに明治二十六年四月二十三日發行の『國民之友』百八十八號に六號文字で『大勢一斑』と題

した中に『星亭何人ぞ。眇たる一代言人のみ』との文句があつて、これを取柄に忽ち星亭氏の部下から談判委員が、予の赤坂氷川町なる宅に押掛けた。

正直のところ此の六號文字の『大勢一斑』なるものは、予自身が書いたものでも無ければ、予が旨を授けて書かせたものでも無く、實は予が旅行中に、社員の一人が書いたものであつて、予は談判委員の來る迄別段氣も付かず、氣にも留めずに居たものだ。併し向うから喧嘩を賣るといふ事になれば、此方も餘儀なく喧嘩を買はねばならず。最初は星亭と德富猪一郎との問題であつたが、やがては自由黨と『國民新聞』『國民之友』との問題となり、向うからは自由黨の幹事等が談判に出掛けて來た。今日にして思へば、それ程星派で咎立てする程の文句では無いが、又た予の方にて執著する程の文句でも無く、向うからの凄まじき見幕に對しては、此方からあつさりと謝辭を云つて、其儘濟した方が、何はともあれ新聞政策としては得策であつたに相違は無い。併し當時年少氣銳の予は、斯様なる損得の打算抔を考慮する餘裕も無く、此方も愈〻喧嘩腰となり、最後には『不肖ながら予も民友社及び國民新聞社を代表する者である。就いては自由黨からも總理板垣伯が出掛けて來られたならば、而して速記者を連れて來られたならば、予は御相手申して、逐一論談するであらう。自餘の方には御免を蒙むる』と言ひ放つた。

斯くて幾何もなく自由黨の長老片岡健吉君は、國民新聞社に予を訪問し、自由黨の使者として、予に向つて絶交を申渡した。予に於ては斯る宣告は痛くも無く、痒くも無く、平氣で受取つたが、扨困つた事は、その影響が新聞の發行高に及ぼした事であつた。予個人に對する星派の新聞、雜誌の攻撃及び身體に關する危險等は姑く措き、地方の自由黨員には『國民新聞』不買同盟とも云ふべきものが出來、その爲に從來『國民新聞』の得意であつた九州地方などは、著しく減少し、それを回復するには十數年の歲月も猶ほ不足であつた。

此の如くして陸奧伯、西園寺公等の昔馴染の人々とは、政治上では甚だ疏遠と云ふよりも、寧ろ反對の側に立つ事となり、陸奧伯の如きは『豫て文明的急進論者の德富氏が、非內地雜居論者など〻肩を並べて、乃公等の政策を妨害するとは怪しからぬ』と云ふ事にて、予に對しても、多大の遺憾の情を含んでゐた樣であるが、明治三十年の八月伯が病むや、予は故に西ケ原の邸に見舞うたが、併し岡崎邦輔君等が『只今接見しては伯が昂奮するから』と注意したので殘念ながら相見ずして去つた。伯は『德富氏に逢つたらば、一議論試むる積りだ』と云つてゐた相だが、予も實は伯の此の世を去る以前に、從來の經緯に就いて、相語りたき事が尠く無つた。若し次の世があらば、或は相見て呵々大笑するかも知れない。

六　日本新聞社長陸實氏と予

當時の在野黨は六派聯合と稱して居たが、其の六派は何であつた乎。兎に角自由黨を除くの外、其他の野黨は、主義に於ても、歴史に於ても、孰れも是迄何等の緣故は無く、寧ろ互に鎬を削つてゐたものであつたが、所謂る條約勵行論、即ち對外硬と云ふ點に於て一致した。而して此の團體には、政府黨及び當時に於ては、準政府黨とも云ふべき自由黨の外の新聞、雜誌は、孰れもその同盟に加擔した。されば其勢ひは殆ど全國を席捲せんとした。

新聞雜誌方面に於ては、表立つては專ら志賀重昂氏等が常任幹事として骨折つたが、内輪の畫策は專ら、日本新聞社長陸實氏がやつてゐた。陸氏は狷介不群、氣節を以つて立つ昂々乎たる東北の一男兒として知られ、又た莊重勁拔の文章に秀でたる記者として知られてゐたが、予はそれだけを以つて、陸氏を評價する事は、實際氣の毒であると思ふ。

君は善き意味に於て、なか／＼謀を好んだる策士であつた。而して君の手は政界の裏面には、なか／＼よく動いた。而して餘の事は兎も角、政治上に就いては、可成り融通も利いて居た。君は谷、

鳥尾、三浦等と云ふ國粹論者、若くは保守論者たる舊將軍連とも懇意であつた。又た神鞭知常、高橋健三氏等とは兄弟同樣の親みを持つてゐた。而して井上毅、杉浦重剛、小村壽太郎其他政界の浪人者、有志者等にも、知己朋友が多かつた。其中に於て、予も又たその一人に數ふべきであらう。

予は當時專ら此の運動に就いては、陸君と相談した。而して相談する毎に、陸君の思慮はなか〳〵周到で、予の如き粗枝大葉の者が、とても追付くところでは無いと考へた事が、幾度かあつた。而して種々の文案等を起草する時なども、予と陸君とは何時も其の委員であつた樣だ。曾つて予が極東と書いたのを、陸君が東亞に改めては如何だらう杯とて、予も一議にも及ばずそれに同意した事があつた。斯う云ふ文句の上でも陸君はなか〳〵注意深かつた。

此の機會に於て、予と陸君との交りに就いて語るであらう。予は明治十九年の夏、双方の友人和田正脩君と共に、君を牛込揚場町の寓所に訪うた。當時君は尚ほ明治政府の小役人であつた。官報局であつた乎、制度取調局であつた乎、それは覺えて居ないが、高橋健三氏が官報局長として、多分君はその局員の一人であつたと思ふ。予の『將來之日本』が出で來るや、當時新に發行せられたる『出版月評』なる、新刊書評論を專門とする雜誌に、貫宇野史と題して、その詳評を掲げたものがあつた。予は一讀して、多分それが陸氏である事を感付いた。貫宇と云ふは陸君の名、實の字を二

つに割いたものであらう。併しその事は當人には訊さずに濟んだ。

七 『日本』と『國民』

◇保守主義と進歩主義

やがて君は官を辭じ、青木貞三君等の後援に依つて、初めに『東京電報』なる新聞を發刊し、明治二十二年二月憲法發布の頃から、之を『日本』と改題し、發刊した。而して君はその社長であつた。『國民新聞』は、明治二十三年二月に發刊したから、正しく一年遲れたる弟である。然るに此の二新聞は、その主義主張、趣味嗜好等に於ては、互に氷炭相容れぬ程に反對してゐるに拘らず、孰れも殆ど商賣氣を拔きにしたる書生流の新聞で、孰れもその讀者は實業家とか、金持ちとかで無く、寧ろ論客、志士、其他世の中と共に俯仰しない、特色ある人々を讀者とする事に於て一致してゐた。而して社員の見分や風儀は、互ひに異つてゐたが、社の組織と云ひ、社と社員との關係と云ひ、孰れも互に有志者の團體的氣風を持つてゐた事に於て一致してゐた。

併し何と云つても『日本』は歐化主義の失敗したる時に蹶起し、天下の反動の氣運に乘じて出で來

り、しかもその援護者は有力者のみにて、社友とも云ふ可き人々の中には、陸軍の將軍連の外、副島伯などの老先生もあり、又た大學出の古き學者達もあり、地方に於ては有力なる――暴力團とは云はざるも――その名を聞いてだに、人をして慴伏せしむるに足る壯士團體等もあつて、なか〳〵それに向つて競爭すると云ふ事は、容易の業では無かつた。

固より日本新聞社には、福本日南の如き、如何なる問題であらうが、如何なる文體であらうが、向ふ所敵無き健筆家がある。又た詩人としては天下一品と云はれたる、國分青崖氏などがあり、又た文學方面には正岡子規、繪畫方面には中村不折、又た海外よりの投書家としては、池邊三山氏等があり、實に濟々たる多士であつた。

予は陸君とは初から懇意の間柄であつたが、日本新聞社中の人々は、恐らくは予を異端者として、必らずしも蛇蝎視せざる迄も、中にはそれに幾き者があつたかも知れない。

然るに六派聯合、對外硬以來、種々の相談にて、親しく其社にも往來する事となり、偶々『國民新聞』が、發行停止となつたる時は、予は深井英五君を伴ひ、神田雉子町なる日本新聞社に赴き、予等の原稿を、『日本』に掲載した事もあつた。是は何人も意外としたる所であるが、政治的熱は時としては異分子さへも、融和せしむる事があり、時としては同一分子さへも、分解せしむる事がある。

右の次第にて、『國民新聞』と『日本』とは、從來の行掛りから議論より、文章の總てに至る迄、互ひに其の兩極を代表してゐたが。而してその讀者も若し極端に云へば『日本』は、頭の硬き連中の爲めに愛讀せられ、『國民新聞』は、氣の迅き人々の爲めに愛讀せらるといふ傾向があつたに拘はらず、社會に於ては、兩々相對して居た。

但だ予は當時他の新聞は相手とせず、常に『日本』を相手としてゐた。其の紙數抔も、略々伯仲の間にあつたと思ふ。併し正確の事は判らぬが、『日本』六、『國民』四、若くは『日本』五半、『國民』四半と云ふ位の所であつたと思ふ。然るに日露戰爭後、間も無く、陸君は病の爲に日本新聞社を他に讓渡し、鎌倉極樂寺の幽居にて、病を養つてゐたが、其時『日本』の記者の若干が、國民新聞社に收容されたるを見て、陸君は予に書を與へ、

『漢何ぞ楚人の多きや』

と云ふ文句を援き、其の感慨を述べ來つた。併し受領者たる予が、其の手紙に打たれたる感慨は、手紙の作者たる君の感慨より、深かつたであらうと思ふ。

君はやがて逝き、予は其の後碌々として今日に至りたるが、しかも今や君とは異りたる意味に於て、又た方法に於て、予も亦た『國民新聞』と別れたる事は、今更ら實に人事は、決して豫想通りに行く

ものでないと云ふ教訓を、しみ〴〵と味ひ得た。

八　對外硬と自主的外交の文字

◇六派聯合運動の人々と予

尙ほ對外硬と云ふ事に就いては、予一個人としては、聊か首肯しがたく覺えた。自分は對外硬は、硬とか軟とか豫じめ定むべきものでは無い。唯だ外交は何處迄も他國に追隨する外交で無く、自國を主としての外交であらねばたらぬ。其處で予は自主的外交の文字が、最も適當であると信じてゐる。

予は當時に於て既に內地雜居贊成者であつた。又た當時に於て、既に我が國に於ては、ローマ字の採用亦た苦しからずとするの論者であつた。予は日本が勝手次第に支那の文字や、支那の文章や、支那の制度を吾に利用したる如く、歐米の文明に就いても、又た然かすべきものと信じてゐた。されば同じ對外硬の仲間でも、內地雜居反對論者等とは、大いにその意見を異にしてゐた。

此に於て予は對外硬なる總稱の下に、彼等の仲間に卷込まれてしまはん事を慮り、自分では自主

的外交なる文字を作し、これを以て標語となさんと試みた。而して予自らは、多忙であつたから、旨を社中の一人に告げて『自主的外交』なる小册子を、國民新聞社の同體異名なる、民友社から刊行した。

斯る次第で對外硬の名は、その時限りの文字として、消失せたが、自主的外交の文字は、今日に於ても猶ほ生命ある文字として、現存してゐる。此の運動の間に、予は前にも述べたる如く、所謂る貴族的急進論者、卽ち歐化主義者の人々、若くは舊自由黨の方面に於ける人々抔、尠からざる友人を失うたが、他方に於ては、又た是迄緣も由緣も無かつた人々と交際するの便宜を得た。例へば此の六派聯合の運動の際に、近衞公とか、二條公とか、谷將軍とか云ふ人々は勿論、やがては品川彌二郎子、高島鞆之助子、樺山資紀伯等と云ふ、薩長の人々とも、面接し、若くは交際する事を得た。然るに此の運動は、東洋の風雲急を告げ、朝鮮に於ける日清の衝突が、目睫の間に迫り來りたる爲に、やがて條約勵行問題から一轉して、朝鮮に於ける自主的外交の問題となり、其爲に運動は愈よ實際問題に接近し來つた。

吾社は本來武斷政治に反對し、文治主義を主張し、主戰主義に反對して、平和主義を主張した。しかも朝鮮問題に就いて、淸國の態度甚だ横暴にして、動もすれば朝鮮を併呑して、吾を威嚇せんとす

るの勢を示し、吾が帝國の國防上一大危險の迫りたるを見るや、吾社は猛然として、朝鮮に向け出兵を主張した。若し『國民新聞』が唯一なる出兵論の先導者で無かつたならば、尠くともその一であつたに相違は無い。而してやがて豐島沖の海戰となり、成歡、牙山の役となり、清國に對する宣戰の詔勅は發布せられ、此に於て從來の政爭は、全く一時中止の姿となつた。

天草泊舟　（明治二十五年　三十歳）

捨舟重唱定風波。　海曲蕭條三兩家。
抛却龍拏虎攫夢。　吟魂一夜在梅花。

懷人

落花時節雨紛紛。　芳草和烟澹不分。
天外相思誰有淚。　杜鵑叫破萬重雲。

予の記者生涯中、幾許の新熟語を新鑄した。然も其中に於て、必傳と信ずるは、先づ『自主的外交』と『皇室中心主義』の類であらう。

第十章　日清戰役時代と予

一　明治二十七八年役と予

◇國民新聞と從軍記事

◇日清戰役と川上將軍

明治二十七八年戰役は、日本の歷史にとつても、又た予一個の歷史にとつても、孰れも重大事件であつた。而して予が一生にとつては、又たこれが一大回轉機であつた。予は是迄藩閥政府を相手に、最後迄戰ひたる一人である。此に最後迄と云ふは、議會開會前後から、從來の民權論者にも、往々藩閥政府と妥協したものがあつたからだ。

然るに一度二十七八年役が起るや、予は藩閥政府も、薩長も何もかも打忘れ、擧國一致清國に當る事を當面の急務とし、それに向つて予の持つて居る、凡有る一切のものを犧牲とした。世間では此事

に就いて、予の事を彼是非難したる人もあつたが、それは各々の量見で致方が無い事として、予自身としては、苟も公人として世に立つからには、大勢に順應して、大勢を率ゐると云ふ事は、當然の事であらうと思ふ。況んや此の二十七八年の役たるものは、予等自らその張本人たるを以て居らざるも、尠くともその急先鋒の一人たる事に於てをやだ。

當時何れの新聞も此事に熱心したが、特に福澤諭吉翁は最も熱心であつて、確かの事は記憶せぬが、一萬圓の軍資金を獻納したやに覺えて居る。

予は是迄印刷を秀英舍に一任して居たが、新聞が盛大になるに從つて、段々不便を感じたから、新に印刷機械を買入るゝなどの準備をなし、聊かながらも吾社には貯蓄もあり、又た印刷機械買入れの爲に、或る鑛山業者から若干の資金を借り受けたれば、その事に著手せんとする間際に、此の事件が突發した。故に夫等の爲に用意したる一切の資金を、悉く此の事件に投じ去つた。予は政府に資金を獻納する程の力は無かつた。されど予の力の有らん限りを擧つて、吾が新聞を此の事件の爲に提供する事とした。

恐らくは其爲に從軍記者の數は各社を通じて、吾社ほど多數の人を出した社はあるまいと思ふ。先づ最初に朝鮮には阿部充家君、又た畫報記者として久保田米僊君、その子米齊君、金僊君等も、追々

出掛けた。其他社員、社友及び臨時徵發の人々を加へれば、前後を通じて殆ど三十人にもなつたかと思ふ。軍隊の通譯たる熊谷直亮君、又た出征したる梅田又次郎君等は、社外の通信員として、前者は枕戈生、後者は一老兵の名にて、他の新聞の容易に、追隨する能はざる通信を送り來つた。而して松原岩五郎君の如きは、釜山より陸路京城に出掛けて、第一軍桂師團に從ひ、遂に海城の籠城迄もした。又た古谷久綱君などは第二軍に從ひ、軍隊中の最も年少者として、頗る重寶がられた。又た國木田獨歩は千代田艦に搭乘し、所謂る『愛弟通信』――通信文を其弟國木田收二君に宛てゝ、書簡體に認めたるもの――等に依つて、頗る異彩を放つた。而して又た久保田君の繪畫通信は、その方面に於ては、最も他に先んじ、且つ卓越の技倆があつたから、やがて平壤陷落後は歸朝し、廣島大本營にて、御前揮毫の光榮を忝くする事になつた。

『國民新聞』は是迄は軍隊仲間にも評判が善くなく、又た所謂る薩長人士の如きは、極めて少數なる松方公其他を除けば、德富などは國を賣る逆賊でなければ、その手先き位に考へられてゐたものであつたが、予が此の戰爭に對し、凡有る犧牲を顧へりみず、奉公の誠を效さんとする態度は、追々彼等の諒とする處となり、その中には意外の方面に、意外の友人も出で來つた。その中で最も先に擧ぐべきは川上將軍であらう。當時の川上將軍は、參謀次長であつて、參謀總長は、有栖川宮熾仁親王であ

り、事實川上將軍は參謀本部の首腦であつた。

予を將軍に介して呉れたのは、吉井一三君、同志社出身の予の後輩であつた。彼も小芋の一人であつたから、此際種々の親芋連中に、予を紹介して呉れたのであらう。併しそれよりもより多く予を紹介したのは『國民新聞』が、戰爭に對する俊敏なる働きであつた。從來予は川上將軍とは、何等の緣故も無かつたと云はんよりも　川上將軍が予に對して如何に思うてゐたかは知らぬが――予としては、川上將軍には決して好感を持たなかつた。と云ふ譯は、予は父の執として曾我老將軍と懇意であつた。而して老將軍と共同して、『日本國防論』なるものを、明治二十一二年の頃『國民之友』に掲げて、手酷く、當時の陸海軍に對する批評を試みた。而して曾我將軍等は、當時の參謀次長川上操六、陸軍次官桂太郎等に排斥せられたる人々であれば、その人々が彼等に對して、好感を持つ筈はなかつたからだ。

併し川上將軍は軍人に珍らしく腰の低い漢であつて、肌觸りのよき漢であつた。一見舊の如しとは彼の事だ。彼は如何なる場合でも面會謝絶などと云ふことをしなかつた。話は簡單でも頗る要領を得てゐた。予は元來軍人などは譯の分らぬものと思うてゐたが、また川上に就ても、其反對者から隨分惡口を聞いてゐたが、會つて見て、日本の陸軍の脈はこゝにありと感づいた。それから彼とは何事に

ついてもよく話合をした。彼はよく予に言つた。徳富君には何一つ不足はないが、困つたものは例の平民主義だ。之れさへ止めて貰へば寔に結構であると云つた。彼は薩摩の生地に獨逸の鍍金をした漢で、遂に平民主義の眞諦は分らなかつた。併し其考へ方も、其の態度も、彼は自ら知らず覺えざる中に平民的であつた。

日清戰爭についてはいろ〳〵の面白き話があるが、いかに彼が苦心をしたかといふ事についてこゝに少しく語るであらう。之は固より彼の口から予の耳に入つた話であるから間違ひはあるまい。實をいへば、日清戰爭は老人が始めたのではない。若者が始めたのだ。内地では川上、北京では小村、それに巧く活機を捉へた所の陸奥などが、巧みに伊藤、山縣等の大頭を操つて行つたらしく思ふ。出兵の當時、いろ〳〵議論があつたが、思ふ所は言にあらはるゝで、川上は『かゝる問題には老耄共の分る事ではない』と公言した。處が上席に据つたる山縣がいかで之を聽き逃がすべき。『老耄とは誰の事か。分らぬといへば列席する必要もあるまい』とて座を蹶立てゝ歸らんとした。ところが川上がとんで行つて山縣の袖をとり、『如何にも失言は重々謝りますが、こゝは國家の一大事であるから、何とか機嫌をとり直して復席して頂きたい』と謝罪をして、漸く元の席につれ戻つたといふ事である。また代理公使として北京にある小村及び駐在武官からの電報は、首相たる伊藤には選擇をして見せた。

開戰に都合のよささうなものは見せたが、少し都合の面白くないものは隱してゐた。ところが或日、至尊から德大寺侍從長を以て、伊藤公に斯く〳〵の電報は如何に思ふといふ御下問があつた。然るに伊藤公は未だそれを知らなかつた。そこで段々詮議の上に內閣で大問題を惹起し、殆ど伊藤公の進退問題となりかゝつたのである。ところが機敏なる陸奧は、飛んで川上の所に到り、實は只今斯く〳〵の問題で詮議最中である。定めて君の手元に古き電報があるであらうから、それを一纏めにして伊藤公がまだ其邸に歸らない前に、早く副官にでも持ち込ましておけ、さうして實は副官の手落ちで甚だ相濟まんと云ふて謝罪したらよからうといふ智惠を授けた。其爲めに其の問題はともかくも無事に濟んだ。之は單に一つの出來事であるが、斯る類は定めて多くあつたであらう。また小村もなか〳〵の漢で、北京から川上と照應して頻りに開戰の手筈を定めつゝ、表面はいかにも平和黨たることを裝うてゐた。そこで當時英國の公使オコンナー氏は、談判破裂していよ〳〵小村の引き揚げ歸國する時には、小村の手を握つて、折角の御盡力でもとう〳〵其の甲斐がなく、破裂したとは寔に笑止千萬であると、泣いて別れを告げたといふことである。之も予が小村侯其人から親しく聽いた話であつた。いづれにしても若い者の元氣が盛んであつたが、彼等よりより若き予等の元氣は尙更らであつた。

桂、川上と云へば、陸軍の花形であつたが、當時桂將軍は第三師團長として名古屋に在り、中央で

は殆ど川上將軍の一人舞臺であつた。尤も川上將軍にも油斷のならぬ相手があつた。それは上には山縣元帥てふ巨頭を戴き、下には陸軍次官兒玉源太郎てふ豪の者が控えて居た。併し陸軍大臣としては大山公爵があり、彼の沈默の中に於ける常識と、威信とは、極めて統一し難く、極めて混和し難き陸軍をば、兎も角も纏めて居た。而して俊敏なる川上將軍の上には勿論、その側ら及びその下には、兒玉とか寺内とか、種々の山縣派の小姑共が居り、又た野津とか山路とか、なか〳〵手に負はぬ先輩若しくは同輩の人達もあつたが、然も川上將軍はその間に、上手く楫を取つて居た。

二　探訪記者としての予

◇川上邸訪問と高島氏の八卦

◇樺山邸訪問と豐島沖海戰の號外

而して川上將軍の最も強味とも云ふべきは、當時の首相たる伊藤公と妥協して居た事であつた。これは單に川上將軍の方からばかりでは無く、伊藤公の方からも、所謂る魚心あれば水心と云ふ樣な事であつたらう。謂ば山縣派に對する伊藤、川上の攻守同盟とも云ふべきものであつたかも知れぬ。

而して川上將軍は參謀次長の職權からして、鐵道にも關係を持ち、鐵道會議の議長として、世間の政客及び實業家など〻接觸を保つてゐたから、單りサーベル連中ばかりで無く、その以外にも、輕視し難き勢力を扶植しつゝあつた。

予は川上將軍と一見舊の如く、忽ち親しくなつた。而して當時予は社長でもあり、主筆でもあり、探訪者でもあつたから、種を取るには川上將軍の宅に如くは無き事を知つて、殆ど毎朝出掛け無い事はなかつた。宅は今日の大橋新太郎氏の邸宅の一部であつた。當時は參謀次長の宅としては、寧ろ見窄らしい程であつた。玄關の次に應接間が二つあつたが、それも薄き壁や板戸で隔てゝゐたから、その話はよく隣室に聽えてゐた。

予は川上將軍から種を取るばかりで無く、その會見を待つ間、その應接室の控室にて、多くの人々と出會し、その雜談中から往々にして得たるヒントを得た。その中で今猶ほ記憶してゐるのは、高島嘉右衛門氏が將軍を訪ねて、種々話をしてゐる中に、傍で聽けば、『易を引いて見たが、戰には勝つが、併し心配の事がある。それは招かざるの客三人あり。云々の卦が出たから、御注意あつて然るべきであらう』など〻話してゐた。將軍も固よりであつたらうが、予も亦た『當るも八卦、當らぬも八卦と云ふが、斯るたわいも無き話をするとは、扨も好奇きの親爺である』と思うてゐた。然るにその

翌年、所謂る三國干涉が出で來り、此に於て「招かざるの客三人」なるものゝ意味が、漸く判つた。此等は偶中と云へば偶中であるが、又た不思議と云へば、不思議とも云ふ事が出來よう。

序ながら又た話して置く事がある。當時高島、樺山等の諸將軍は、松方內閣の沒落以來、暫らく閑地に在つたが、予等對外自主論者は屢々その門を叩いて、意見を開陳した事があつた。然るに宣戰の詔勅出ると間も無く、樺山提督は軍令部長となつて戰地に去つた。

予は或日紀尾井坂の邸に伯の子愛輔君を訪ね、四方山の話をしてゐた。然るに愛輔君は、端なく予に豐島沖の戰に就いて語つた。予は恥しき事ながら、その時迄は斯事を知らなかつた。君は恐らく予も知つてゐるものとして、話したかの如くであつた。これを聽いた予の驚きは知るべきであつたが、予はさあらぬ態に聽流し、殊更に落着き拂つてしばらく話込み、而して門を出づるや否や、車を傭うて大急ぎに急がしたが、生憎その車夫がヨボ／＼で、殆ど辛抱しきれぬ程であつたが、さりとて車を降りて驅け出す事も出來ず、兎や角社に歸へり着くや否や、直に號外を出して奇勝を博した。

これは一例であるが、予は吾が身體を殆ど千百にして、凡有る方面に驅けずり廻つてゐた。予がその通りであれば、社中の面々が緊張してゐた事は、云ふ迄も無かつた。此の如くにして、『國民新聞』の營業は、隆々として實戰毎に世に擧つた。而して發刊當初から七千程度を上下してゐたものが、戰

爭中は一萬臺を越え、一萬五千臺を越え、殆ど二萬を越ゆるに至つた。

三　大本營の移動と予

◇廣島に於ける人々

扨八月には大本營も愈ゝ廣島迄進轉する事となつた。予は當初から身も魂も此の戰爭に打込んで居たから、廣島に赴く決心をした。併し赴くに就いても、大本營と共に動く事を便利と考へ、その事に就いて川上將軍に懇談した。將軍は參謀次長で、兵站總監を兼ねてゐたから、その位の事は何んでもあるまいと考へたが、予は所謂御用記者でないばかりで無く、當時の伊藤内閣には、最も激烈なる反對者であつたから、如何に戰爭がおつ始まつたとは云へ、伊藤内閣は依然予を反對新聞記者の重なる一人と見、予も亦た擧國一致と云ひつゝも、伊藤内閣に對しては、今猶ほ釋然たらざる氣分を持つて居た。

故に如何に川上將軍が、予と親しく在つたればとて、表向き予のみを特別取扱になすわけにもゆかず、さりとて予の懇願を無下に斷るわけにも參り兼ねたと見え、出立の數日前、予に赤い徽章を與

へた。當時徽章は三種に分れ、金色の徽章は高等官、銀色の徽章は判任官、赤色の徽章は使用人、從卒等の類であつた。卽ち予はその仲間に伍して出掛ける事となつた。併し汽車の中では赤色を佩けてゐたとは云へ、廣々とした一室を予一人にて占領し、極めて樂であつた。

第一日は名古屋に大元帥陛下御一泊在らせられ、從つて翌朝名古屋停車場から、再び特別汽車に乘込むに際し、大山陸軍大臣は、供奉の一人に予を群集の中から見出し、

「貴君は如何にして此處に來つた乎」

と頗る驚異の眼を撥つてゐた。

斯くて予等は廣島大手町元安川の橋際に、吾社の出張所を構へ、其處を足溜りとして、予は日夕廣島中を驅け廻つた。當時川上將軍は吉川旅館に居を構へ、樺山提督は長沼旅館に居を構へ、孰れも予等と同じ大手町であつたから、往復には頗る便宜を得た。

又た當時の廣島は東京を持參して廣島に收縮したる樣であつたから、東京に比すれば、凡有る便宜があつた。予が廣島滯在中、最も屢〻往來したのは、川上將軍、樺山提督、野戰運輸通信長官寺内伯、野戰衛生長官石黑子爵、野戰監督長官野田男爵、米田侍從、松方公、山本權兵衛伯――當時大佐やがて少將となる――又た伊集院五郎――後元帥、當時大佐若しくは少將――其他川上將軍の部

下である參謀本部附の某將校が主たるものであつた。

而して廣島に於て臨時議會の開かるゝや、全國の政客は悉く廣島に集り、なか／＼賑やかな事であつた。予等の出張所も、社員の戰地より往來する者、本社より往來する者、滯在する者、なかなかの雜沓にて、恰も一個の寄宿舍以上であつた。而して長谷場純孝、宗像政等の諸友は、代議士として廣島に來り、又た廣島から戰地に行くに際しても、何れも予等の出張所をその足溜りとした。

併し或時はその家は予等の占有を許さず、一軍隊に徵發せられ、軍隊と同居した事もあつた。その同居者の中に、梅田又次郎、加賀美重三郎等の連中もあり、加賀美などそれを緣として、一生予に師事し、其子の名さへも德富と命名ける程であつた。――因みに云ふ、彼は數年前、其の鄕里山梨縣に於て病歿した。梅田も亦た東京にて逝いた。――されば予がこの出張所を綽名して、亂暴本部と云つたのは、決して不思議では無つた。今から考へて見れば、明治二十七年の秋の初めより、二十八年の春の終りに至る迄、予の廣島に於ける生活は、予の一生の中にて、最も愉快なる時期の一であつた

當時予と終始行動を一にしたるは、即ち今日本銀行總裁である深井英五氏であつた。君は予に先發して廣島に出掛けた。有體に云へば、予は君を予の理想的の新聞記者に作上げようと思つたが、その方面では予は聊か予の考が間違である事を悟つた。君は寧ろ小心に過ぐると云ふべき程、堅實性に

明治二十八年廣島に於ける記念撮影

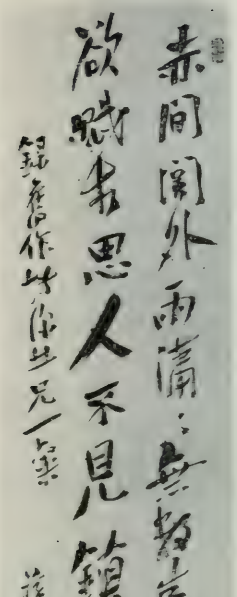
前列右より

平田久氏　深井英五氏

後列右より

蘇峰翁（三十三歳）横澤某氏

明治二十七八年戰役當時の國木田獨歩（右）
國木田收二（左）と蘇峰翁



日清戰役中の詩　後年書して深井氏に送りたるもの

富んだ人であつて、山氣たる事とか、冒險的の事とかは好まない。頭腦は全く論理的に出來てゐて、自ら先づ醉うて、而して後人を醉はしむる等と云ふ手際は、望むべきで無かつた。併し君の英語の知識は極めて精確であつて、君の飜譯でさへあれば、一々原文と對照せずとも安心であり、又た問題を與へれば、それを研究的に調査し、調査的に研究し、徹底せしむるに就いては、普通の新聞記者の及ぶ所で無く、特に如何なる難題でも、君に理解の出來無い事は無かつたから、粗枝大葉の予に取つては、縱令神速、機敏などゝいふ點には、予の誂向きでは無かつたにしろ、無二の調法な人であつたに相違は無い。

其處で予はつら〳〵考ふるに、君を日常的の探訪とか、通信とかに使用するのは、材を用ゐる所以で無いと悟つた。然も當時川上將軍から、大本營に英語を解する者が尠いとて、その推薦を頼まれたを幸に、君を推薦し、斯くて深井君は、毎日銀色の徽章を佩け、大本營に出掛ける事とした。

四　威海丸にて旅順に隨ふ

戰爭も愈々佳境に入り、予等の考では、山海關を經て北京に攻め入日も、決して遠くは無いと考

へたから、此際寧ろ大本營を遼東半島に進むる事が、士氣を鼓舞、振作する上に於ても、必要であると考へ、予は頻りにその論を以つて、朝野の間に遊說した。併し當時の廟議は、大元帥陛下の御渡海など﹅云ふ事は、到底期待すべき事でないと云ふことになり、此に於て小松宮殿下が御名代として、大本營を率ゐ、愈ゝ旅順口に出掛け給ふこととなつた。これが明治二十八年四月の事であつた。

大本營が東京から廣島に移るときには、予は從卒の資格で表向は隨行したが、大本營が廣島から旅順に進轉する時には、大びらに將校同樣、一のキャビンを占むることとなつた。予は深井英五氏を同行することゝしたが、なか〳〵それを許可しない。

實は川上將軍の方では予一人さへも、反對黨の新聞記者として、これを伴ひ行く事は骨折りであつたに相違は無い。然るに二人に於ては當惑知る可きだ。併し予は胸中考ふる處があつたから、深井君に「兎も角も竊に乘込み、予のキャビンに居り給へ。」と云ひ、愈ゝ予も大總督宮小松宮殿下、其他屬々の諸將校の後から乘込んで見ると、予のキャビンには、當時唯一の御用新聞『東京日日』の記者某が乘込んでゐる。

當時の『日日新聞』は、內閣書記官長として、その威權赫々、普通の大臣は、殆どその鼻息を仰ぐ程の、伊東巳代治伯の所有であつたから、反對新聞の記者たる予を伴ふからには、當然の權利とし

て、『日日』の記者が割込み來つたのは怪しむに足らない。併し船客の都合で猶ほ一人囑託か何かの名義の男が入込んで來た。其處で最初は予一人と思うて居たのが、四人となつた。普通ならば二人前のベッドが上下にあつたが、それに四人を押込めることは、容易でなかつた。しかも露骨に云へば、深井君は密航者である。食堂に出る事も出來ない譯だ。

此事を知つた爲である乎、否乎は姑らく措き、船が出發すると間もなく、人員點檢となり、愈ゝ事が面倒にならうとして來た。元來運輸通信長官寺内伯は、軍規、軍律などゝいふことには、別して嚴重なる人にて、予は廣島當時から伯に厲克の二字を奉つてゐた程である。果してその厲克を發揮して來た。

其處で予は密かに川上將軍に見え、此處然るべく功夫ありて、『曾つて、深井氏を大本營の囑託としたこともあるから、再び囑託として貰ひ度い』と頼んだ。將軍は委細心得、その爲に深井氏は無事であつたが、扨て船が旅順口に著いて以來も、他の從軍記者は支那の廢屋に高粱を敷き、その上に起居したるに、予と深井氏のみは、港に繋ぎたる威海丸に在りて、贅澤なる生活をしてゐるのを見て、同業者間には頗る議論も起つたらしいが、予等は或は金州方面に赴くやら、或は營口に赴き、それから陸路海城に赴き、海城から蓋平を經て、再び營口に歸へる等、旅行に日を暮してゐたから、夫等の

問題も自然に消失せた。
當時予等の船威海丸が、樂を奏して馬關海峽を過る時には、恰時李鴻章が伊藤、陸奥の兩全權と、講和談判最中であつた。斯くてその調印のことは、船が威海衞を經由した際、獨逸の軍艦からこれを聞いた。而して旅順口に居る間に、三國干渉の話をチラと耳にはしたが、しかも予は馬關條約に依りて、遼東半島は既に吾有となつた事を知つてゐるから、せめて吾が領土だけでも檢分したいと思つて、おめ〳〵と旅順口に滯在せず、斯く走廻つたわけである。

五　遼東半島視察中桂公と相識る

◇遼東還附の報に猛然旅順より還る

予は日本内地以外には、今度初めて足を踏出したもので、遼東半島の旅行は、予に取つて實に愉快であつた。固より交通機關とても無く、又た所謂る支那内地の旅行に必要なる、蒲鉾形の馬車さへも無く、徒歩をするか、さもなくば普通の荷車に毛布を一枚敷いて、それに乘つて行くかの外に方法が無つた。

尤も當時は休戰最中で、兵站部の連絡はあつたから、予等は兵站部から兵站部へと、その線路を辿つて歩いたのだ。當時四月の下旬で、遼東半島には初めて春が訪れ、大木の柳は漸く芽をふき、北方特有の花たる杏花は、今を盛りと咲きつゝあつた。廣き野原に何物も目を遮へぎるものなく、悠々として春風に吹かれながら、吾が新領土とも思ふ、大陸の土を踏みつゝ旅行した事は、予にとつては實に大なる愉快でもあり、滿足でもあつた。

予は後來桂公と政友として、尋常ならざる關係を持つてゐたが、不思議にも公と逢つたのは、遼東半島の蓋平に於てゞあつた。曾て海城に籠城したる桂公は、海城を去つて蓋平に第三師團司令部を置いてゐた。

當時予は若氣の至りで、至る處の將校や兵隊と喧嘩をしたが、蓋平でも又たその事があつた。予等は蓋平に到著して、某聯隊長を訪問した。彼は碁でも打つてゐたらしかつたが、『用事があつて只今逢へない』と云つた。予は『新聞記者が面會を求めるのは當前のことだ。其方に用事があれば、此方も用事がある。是非只今面會したい。』と繰返した。ところがその聯隊長は、餘程癪に障つたと見えて、顏は見せなかつたが、大變な聲にて怒鳴りつけた。併し予の癪に障つたことは、より以上であつた。予はそのことを寧ろ師團長に訴ふ可く、桂公を訪問した。而してその始末を語つたが、桂公は如

何にも尤もだと云ふ様なる顔をしてこれを聴いてゐたが、話が四方山に亙り、予は公から海城籠城の話から、師團、牛莊の占領の話、或は外國宣教師を懐柔したる話等を詳細に聽いた。兼ねて吾社の從軍記者、松原岩五郎氏から、桂公を市民將軍と人の稱してゐることを聽知つてゐたが、此に至つて果して聞くところに違はざるを思ひ、久振りにわけの分つた軍人と語る事を得て、其日は珍らしく西洋料理まがひの御馳走に與つた。斯くて再び營口に歸へり、御用船にて旅順口に歸つた

歸つて見れば、出發の時の形勢とは打つて變り、恰も火の消えたる狀態で、これは何事である乎と聞けば、愈よ遼東還附であると云ふ事にて、予は實に淚さへも出ない程口惜しく覺えた。予は露西亞や獨逸や佛蘭西が憎くは無かつた。彼等の干渉に腰を折つた、吾が外交當局者が憎かつた。一口に云へば、伊藤公及び伊藤內閣が憎かつた。

かねて伊藤內閣とは外交問題で戰つたが、今更ながら眼前に遼東還附を見せつけられたには、開いた口が塞らないと云ふばかりでは無かつた。此の遼東還附が、予の殆ど一生に於ける運命を支配したと云つても差支へあるまい。此事を聞いて以來、予は精神的に殆ど別人となつた。而してこれと云ふも畢竟すれば、力が足らぬ故である。力が足らなければ、如何なる正義公道も、半文の價値も無いと確信するに至つた。

そこで予は一刻も他國に返還したる土地に居るを屑しとせず、最近の御用船を見附け二歸へる事とした。而して土産には旅順口の波打際から、小石や砂利を一握り手巾に包んで持ち歸つた。せめてこれが一度は日本の領土となつた記念として。

廣嶋客舍 （明治二十七年　三十二歲）

秋滿韓山殺氣多。貔貅十萬枕霜戈。
鏖南一夜天如墨。渤海風濤今若何。

投筆

何時投筆請長纓。一片雄心萬里情。
渤海氷開應有日。春風吹入廣陵城。

談兵

短褐談兵彼一時。春風滿眼有幽思。
無情鎭日瀟瀟雨。落盡梅花渾不知。

海城途上

天勢穹窿低曠原。遼河雪絆漲新痕。
春風萬里吹無斷。垂柳垂楊處處村。

遼東還附

誰下天書泣萬民。遼東亦見長荊榛。
諸公謀國襟懷大。百戰山河畀附人。

吉田松陰 （明治二十八年　三十三歲）

臺閣崇論徒糾紛。書生殉國最推君。
誰憐一代風雲業。閑却松陰三尺墳。

已十年

從出鄕園已十年。渾將窮達附蒼天。
一家贏得閑淸福。垂白双親壽似仙。

外遊當時コンスタンチノープルに於ける蘇峰翁及び深井英五氏

第十一章　日露戰役前の政局と予（上）

一　松隈內閣の前奏

◇伊藤內閣に對する憤懣

予は今更ら自ら顧みて、聊か若氣の至りであつた事を思ふ。唯だ當時に於ては、遼東還附と云ふことが腹一杯になり、それが予の身も魂も殆ど喰ひ盡し、燒き盡す程であつた。予は十年の後にせよ、二十年の後にせよ、將た百年の後にせよ、此の屈辱は必ず雪がねばならぬと決心した。又た此の屈辱を招くに至らしめたのは、軍隊でもなく、國民でもない。要するに伊藤內閣の外交だ、其の宜しきを誤つたからである。言ひ換へれば、豫ねて予等が對外軟と綽名したる腰拔け外交の本性を、遺憾なく暴露したるものである。

されば今にもあれ此の內閣を叩き倒して、これに代へるに自主的外交の內閣、十年一劍を磨くの內

閣を樹立せねばならぬ。斯る決心であつたから、予は何はさて措き伊藤内閣を顚覆する事を、最大急務と信じ、それに向つて全力を盡した。當時伊藤内閣は謂ば强弩の末であつた。多分戰爭の峠を越した後であらう。當時閑地に在つた松方公は、再び伊藤内閣に入つて大藏大臣となり、大藏大臣渡邊國武子は遞信大臣に轉じた。

松方公は本來から云へば、大久保甲東の政治的門下生で、伊藤公も同樣であつた。年齡から云へば松方公の方が長者であつたが、政治的位置から云へば、伊藤公の方が先づ兄貴分であつた。然るに松方公は旣に一度は總理大臣ともなり、段々一本立ちの政治家として、自覺心を强めて來たが、伊藤公の眼から見れば、依然たる舊時の松方であつた。それが兩者の關係を追々疎隔せしむる一の動機となつたかも知れぬ。しかのみならず、松方公の周邊には、寧ろアンチ伊藤とも云ふべき者が、尠からず集つて居た。例へば東方策士の稻垣滿次郎、神鞭知常、高橋健三等あり。特に予は松方公とは日清戰役以前は、唯だ父の執として、個人的に懇意であつたが、戰爭中よりして漸次兩者の間に於ける政治的關係は濃厚となり、松方公の意見書等は、悉くとは云はぬが、予の手に成つたものも、尠くなかつた。

予は伊藤内閣を顚覆するの導火線は、松方公の辭職にありと考へた。而して伊藤内閣に取つて代る

べきは、松方、大隈の聯立內閣であらねばならぬと考へた。此の松方、大隈の關係に就いても、一言せねばならぬ。

從來の行掛りから云へば、大隈侯は伊藤、井上に對しても、先づ兄弟分とは云ふものゝ、兄貴株であつた。伊藤公が兵庫縣知事の時代に、大隈侯は既に參議であつたから、官等の順序から云つても、兩者の間には、若干の懸隔があつた。大隈侯が大藏卿である時には、松方公は大輔であつた。これは多分大久保公が大隈侯が餘りにやり過ぎるのを牽制する爲に、御目付役として、松方公を大輔の位置に据ゑたものであらう。從つて在官中兩者の間は、互に長所を賞め合ふと云ふよりも、寧ろ缺點の拾ひ合ひをするが如き傾向が無いでもなく、從つてその間柄も全くの協調と云ふでも無かつた。又た大隈侯が野に下つた後も、兩者の關係は急に親密になつたといふ程の事も無かつた。

予は豫ねて理想的の大藏大臣が松方公であれば、理想的外務大臣は大隈侯であり、若し兩者の提携さへ成れば、伊藤內閣に取つて代る位は、朝飯前の事であると考へ、何は兎もあれ、此の兩者の間の連絡を取る事が急務であると云ふことを認め、頻りに兩者の間に往來し始めたのは、多分戰爭が未だ初まらない以前からであつたらうと思ふ。更らに溯つて云へば、予は少壯の時から板垣伯を初め、自由黨の人々にこそ交際もあつたが、所謂る改進黨の人々には、交際してもその以來の事である。夫

隈侯には豫ねて一種のプレジヂュス（Prejudice）を持つて居た。

有態に云へば、維新の時に横井派の面々、由利公正を主として、種々の人々が出で來つたが、大隈侯の爲に殆どそれが一掃し去られた。それが爲でもあるまいが、「大隈は奸物である」と云ふ評判は、子供の時から耳にしてゐたから、如何に島田三郎氏等が、大隈侯は大久保甲東の再來で、その才識はこれに優る抔と云ふも、一向安心は出來なかつたのである。併し政府が樞密顧問官であつた大隈侯が、民黨の首領板垣伯と會見したとか何とか、譯もたわいも無いことを以つて、これを罷めさせ。又大隈侯の身邊に凡有る迫害を加へ、手も足も出ぬ様になし、殆ど兵糧攻めになしつゝあるを見て、予は聊か義憤を感じ、此人の爲に一肩入れてやり度いといふ氣持になり、大隈侯からの依頼を待たず、自ら進んで侯の爲に働いた事も尠く無かつた。

而して段々その雄偉なる言論に接する中に、所謂英國の自主的外交宰相パーマーストンとは、此の如き人であらうと考へ、やがては聊か心醉する傾向となつた。從つて予は大隈侯の爲に新天地を開拓すべく、日清戰役を機會に、大隈侯が廣島大本營迄、自ら天機伺ひに罷出たならば如何といふ考を持ち、頻りにこれを勸めた。併し侯の身邊には、今更ら一身を挺して、政敵の眞中に飛込むべきでもあるまい抔といふ議論もあり。その事は行はれなかつた。何れにしても此の聯合の爲には、予は尠

らず骨を折つたが、此事に就いて予と最も力を併せたのは、予の從兄藤島正健であつた。

松方公と伊藤公とは、折角その內閣に、入れもし、入りもしたが――この事には日本銀行總裁川田小一郎氏が、最も與つて力多きに居るものと推察せらるゝ――何となく双方の間に水臭き感があつたらしく、その中でも双方の感情を害したのは、馬關談判の際に、松方公も自らその一人たることを希望したが、伊藤公の方では『何に生意氣な、餘計なことを云ひやがる』と云ひ、松方公の方では『何も陸奧一人を介添としなくとも、予を加へても差支へあるまいのに、强ひて予を排斥するとは聞えぬこと』といふ感もあつたらうし、斯ることがいや重り、愈ゝ面白く無くなつたのであらう。

而して其の結果は松方公の辭職となり、凡そ此の戰爭に關係したる者は、何れもそれ〴〵恩典に與つたが、松方公のみは、その同輩の伯爵が概ね侯爵となつたが、獨りこれに與らなかつた。勿論井上侯も陞爵の榮典に與らなかつた一人であつたが。

此の如くにして松方公の辭職は、予等の註文通りに出來。此上は唯だ早稻田と三田との提携が愈ゝ必要の條件となり、予等はその爲に奔走した。併し予等のみならず、有力なる岩崎彌之助氏なども、亦た冥々にその爲に力を效したのではあるまいかと思ふ。唯だ岩崎氏は理想としては大隈、松方の聯合よりも、大隈、伊藤の聯合をやつて見度いといふ考であつたかも知れぬが、尠く共松方公と大隈

侯と舊交を溫むるに就いては、彌之助男が尋常ならざる貢獻をしたものらしく思はるゝ。

二　予と世界漫遊（一）

◇アガパンサス丸にて倫敦へ
◇大陸旅行中大隈内閣成立を知る
◇トルストイ、スツルザ、セルビア王、カール王及び皇后、ヴァンベリーの諸氏

話は代るが、予は家庭改善の必要を認め、明治二十五年九月『家庭雜誌』を發刊した。而して日本が未だ世界を知らず、世界が未だ日本を知らず、日本は世界の中に在りながら、恰も世界とは隔離してゐるかの如く感じ、其處で何よりの急務は、世界をして日本を知らしむると同時に、併せて日本が世界を知ることであると考へた。而して明治二十八年二月には、自ら英文雜誌を刊行するの必要を感じ、それを『極東』Far East と命名けて、取敢へず深井英五君をその編輯長とし、豫ねて予及び深井君等が懇意であつた米國宣教師ドクトル・グリーン氏等をその文筆上の助力者に誘ひ、毎月一回づつ刊行することゝした。

抑ゝ予は最初に『國民之友』を刊行した。それから『國民新聞』を發行することゝしたに拘らず、依然『國民之友』は繼續してゐた。それは前述の如く恰も紐育の "Evening Post" と、紐育の "Nation" との關係の如くであつた。

斯る次第で、予は更に英文雜誌『極東』を發刊することゝしたが、しかも日本を外國に紹介し、外國を日本に紹介せんとするに當つて、單に雜誌『極東』のみを以つて足れりとせず、自ら外國に赴かんと決心し、二十九年の初頃からそろ／＼その準備に取掛つた。併し予は固より何等個人としての貯蓄も無く。新聞社も二十七八年戰役に、殆ど有らん限りの金錢を費ひ果したる次第であれば、固より外國に赴くべきほどの餘裕もあるべき筈は無つたが、幸ひ當時戰後の好景氣にて、予の鄕友の二三が、多少の洋行費を貢ぐことゝなり、又たその不足の分は、大隈侯の口入れにて、或る銀行から借入れ、兎に角深井英五君を伴ひ出掛くることゝして居る際に、又しても二十九年三月には篤疾に罹り、五月漸く癒えて、その十九日に横濱を出帆することゝした。

船は『アガパンサス』と云つて、郵船會社が歐洲航路を開いた第二回目であつた。即ち第一回が土佐丸で、第二回が『アガパンサス』であつた。これは六千噸内外の鐵船にて、全く荷物船を會社が借受けたるものであつた。さればその船には日本人といふ日本人は、唯だ事務長と事務員二人にて、又

た乘客とても深井君と予二人の外は無つた。しかもその速力は十哩以下にて、やがて予はこれを鈍牛丸と名付けたが、鈍牛の名空しからず、凡そ如何なる船にても、予等の船を追越さないものは無く、初は口惜しくも思ふたが、後には諦めることゝなつた。

序に云ふが、神戸に停泊中、予は京都に赴いたが、恰も大隈侯も京都に旅行中にて、侯に伴はれて東本願寺の別邸、枳殻殿等も觀た。而して京都にて松方公と大隈侯とが會見せらるゝといふことまで確め、自分の理想が漸くものにならんかと考へ、病後ではあつたが、その爲に何となく身も魂も愉快にて長途の旅に上つた。

馬關では熊本の友人やら、野田大塊やらが相送つた。大塊もまた予に若干金の旅費を給した一人である。彼が當時伴ひ來たれる一個の少年と云はんよりも童子が、今日の代議士野田俊作君である。

それから船は香港、新嘉坡、ペナン、コロンボ、ポートサイドを經て、マルセーユに至り、大抵の客は此處で上陸するが、予と深井君とは、折角の辛棒なればとて、ジブラルタルを過ぎ、倫敦に達したのが八月十日前後であつたと思ふ。倫敦では取敢へずハムステッドヒースの傍なる家に下宿し、今日の大使館、當時の公使館と往來した。公使は加藤高明君であつて、これには大隈侯から丁寧の紹介狀があつたから、加藤公使もそれこれと周旋をして與れた。尤も予が到著の頃は、タンブリッヂウェル

スと云ふ處に避暑してゐたから、當時の領事であつた林權助君に誘はれて、往訪したこともあつた。

然るに或日『タイムス』を見てゐると、それに伊藤内閣が更迭し、大命が松方公に降ると云ふ樣な電報が載つてゐる。予はこれを見て、實に靑天の霹靂の感がした。それは何故である乎と云へば、予は尠くともその事を一年以後、卽ち予が海外漫遊より歸つた後のことゝ、胸中には豫定してゐた。然るにそれが一年も早く出來ては、とても何等の準備も出來樣筈は無い。月足らずであれば、流產するか、さもなければ弱蟲の子が產るゝより外は無い。何れにしても千載一時と考へたることが、斯く意外に早く出來ては、萬事休すと云はねばならぬ。それで予は早速深井君を公使館に遣りて、その事實を確かめしめたが、公使館では何等要領を得ない。併し此儘日本に於ける政變を心配して、倫敦に踏止りたりとて、何の役にも立たぬから、豫定の如く大陸旅行に出掛けた。

先づ英國のハーリッヂから和蘭に渡り、和蘭から獨逸に赴き、獨逸では靑木公使に面會した。靑木公使は昔からの知己であつたから、尠からざる便宜を得た。而して獨逸に居る間に漸く松方内閣の顏觸れを知ることが出來た。それから露西亞に入つた。今日のレニングラード、卽ちペテルスブルグに至り、その附近を遊歷し、それからボルガ河を下りて、ニジニノヴゴロドに出て、當時開催中の博覽會を見、モスコーに赴き、それよりツーラを經てヤスヤナポリヤナにトルストイ翁を訪ね。キエフか

らオデッサに至り、それより黒海を渡つてコンスタンテノープルに至り、コンスタンチノープルから引返して海路コンスタンザに至り、それよりルーマニヤの都ブカレストに至つた。ブカレストではルーマニアの名家ギカ及び外務省の政務局長であるミシュ抔と云ふ人々に面會し、當時の總理大臣スツルザ氏にも面會した。當時セルビア王アレキサンダーの來訪を驩迎する爲、シナヤの離宮に大宴會があつたが、予等も又た招かれて、これに列することを得た。アレキサンダーは後日その皇配ドラガと共に虐殺され、慘酷悲慘の歴史に富むセルビアの歴史中でも、特に慘劇の跡を留めたる人である。

予等は有名なるカール王に謁見したが、それよりも愉快であつたのは、文名歐洲に轟いたる皇后、ペンネームでカーメンシルアに謁見したことであつた。のみならず皇后のピアノも聽けば、饗宴の際に行はれたる素人芝居なども觀た。當時ルーマニアは國不相應に軍備擴張をなし、露西亞に對して多大なる敵愾心を抱いてゐた。云ふまでもなく露土戰爭の際には、ルーマニアは露西亞に荷擔して骨折つたが、その獲物は殆ど他に奪はれ、謂はゞ骨折損のくたびれ損と云ふ如き形勢にて、それ以來ルーマニアは露西亞に含むところが尠くなかつた。固より眇たるルーマニアのことであれば、ごまめの齒ぎしりに過ぎなかつたが、しかも當時の日本も亦た露西亞に對してはごまめの齒ぎしり同樣であつたから、二匹のごまめが提携したればとて、露西亞にとつては何程のこともなかつたであらう。併し

ごまめそれ自身にとつては、一寸の蟲も五分の魂と云ふ通り、何となく快心の情に堪えなかつた。

ルーマニアからカルパシアン連山を過ぎて、ハンガリーに入り、此では有名なるヴァンベリー氏を訪ふた。ウァンベリー氏はジュウの血も少し混つてゐるといふことであつたが、露西亜嫌ひとしては有名なる一人であつた。曾つて身を回教徒の巡禮者に紛して、中歐亜細亜を遊歴し、露國計略の陰謀を探索し、これを倫敦にて發表した。予は彼の著"The Coming Struggle in India"(印度に於いて正に來らんとする爭鬪)の一書は、日本に於て既に熟讀し居たるところにて、氏とダニューブ河畔の高樓に相語つて、頗る快心の情に堪えなかつた。爾來予は文通を怠つてゐたが、しかも予にはその自傳を送り來つた。その書は今猶ほ書齋に藏してゐる。

三　予と世界漫遊(二)

◇伊太利、佛蘭西より再び倫敦へ
◇倫敦に於ける大患と米國經由歸朝
◇スティールマン、クレマンソー、ハーコート、アックランド、其他の諸氏

ブタペストからウヰーンに入り、それからチロルを越えてヴェニスに下り、フローレンスを經てロー

マ、ネーブルス邊を歩廻つたが、ローマでは『タイムス』の特派通信員スティールマン翁と交り、翁に依つて凡有る便宜を得た。翁は今日の米國人には殆ど種切れとも云ふべきエマースン時代のニューイングランド風の米國人にて、實に面白き人であつた。政治の方面では熱心なるクリスピーの贊成者であつたが、ラスキン抔とも友人であり、自分でも繪も描けば、凡有る美術に就ても趣味を持つてゐた。而してその半生をギリシャ、イタリヤ方面で送り、革命運動などにも參加してゐたやうである。最早や七十を過ぎてゐたやうであつたが、ローマに於ける新聞記者連中とピクニックに出掛けた際などには、若い者も及ばぬはしやぎ方をして、唄なども歌つてゐたやうである。

それから北伊太利を過ぎてスイッツランドに入り、ヂェネバに至つたが、冬のヂェネバは淋しかつた。それからリオンに下り、リオンからパリに赴き、クリスマスはノートルダムの大寺院で過したかと覺えてゐる。

佛蘭西ではクレマンソー氏に面會したが、當時彼は失意の極であつた。彼もパナマ事件の連累に煩はされ、議員を罷め、漸く文筆生活で其日を送つてゐた樣であつたが、最早や世間からは世捨人同樣に、現在から葬られて、過去の人となつてゐた趣があつた。彼は日本の美術品を好み、印籠、根付け、香盒等のコレクションもあつたと聞いてゐたが、當時は恐らくは賣飛ばしてゐたのであらう。唯

だ相變らず元氣で、達者なる英語もて、縱横無盡に話捲つてゐた。彼は當時鬚も無く、色は聊か青味がかつて、何處を見ても英雄らしき風采は無つたが、その言論は如何にもハキ〳〵として、實に痛快であつた。

當時下院の議長であつたメリヌとは同年であつたと云ふ話をしてゐた。予は可成り彼を老人と思ふてゐたが、今から考へて見れば、五十を少しばかり出た頃であつたらう。彼はギリシャに遊んだからその旅行記を書き度いと云ふことゝ、何か彼の持つてゐる科學的、哲學的意見を小說の體を假つて、著述しようと思ふてゐるなどと話してゐた。此人が佛蘭西の救世主となり、世界大戰の大立物となろうとは、神ならぬ予等が豫想の及ぶところでは無く、恐らくは當人も亦たその通りであつたかも知れない。

斯くて新年は巴里で迎へ、それから英國に歸へり著いた。巴里に居る頃に日本からは頻りに歸朝を促して來た。それは何れも予の政友等が、予が日本に居ることを必要と認めたからであらう。斯く予の歸へることの必要を認むるに至つた理由は、予としても察するに難くない。恐らく松方、大隈の關係が面白くゆかないであらうと云ふことは、予としても推察が出來ないことも無つた。斯くて英國に歸へるや、議會も見物し、又た政黨の集會にも臨み、サー・ウィリアム・ハーコートの大演說を、僅か

に一間か二間を隔てゝゐる所から聽いた。

それからスコットランドに赴き、ニューキャッスルや、オックスフォード、ケムブリッヂ等を訪ふて歸著すると、予は大患に罹つた。それが明治三十年の二月であつた。多分その病氣はオックスフォードで携へ來つたのであらう。オックスフォードでは、サー・ヘンリー・アックランドに面會した。最早や老人で看護婦が附つ切りでゐたが、それにも拘らず翁は予等に向て、その祕藏したるサー・ジョン・ミレースの描きたるラスキンの肖像等を示し、又た自らラスキンと共に創設したる博物館等に案內して呉れた。この老人はそれ程偉き漢とも思はなかつたが、後に種々の書を讀むにつけても、單に醫者としてばかりでなく、人物としても立派な人であり、エドワード七世などとは、極めて親密の間柄であり、又たグラッドストンなどとも、頗る親交のある人であることを知ることが出來た。

旅行から歸つて倫敦の下宿に著いた時には、予は最早や病人であつた。實は重病を經て、前年五月病後の療養旁々、殊更ら鈍牛丸に乘りて、倫敦までやつて來たが、爾來餘りに奔走が激しく、然も寒氣に當てられ、遂に急激なる腎臟炎に取憑かれたのであつた。外國で病氣をするのは、甚だ心細くあつたが、幸に同行の深井君が肉親も及ばない程に親切に看病して呉れ、漸くに九死に一生を得、四月の下旬には深井君の肩に倚つて、門外まで出ることが出來た。予も此の病氣では沁々と悲觀し

た。初めはとても駄目であると考へたが、漸次に恢復したから、先づ一命は取止めたものと思ふた。併しとても此れからは劇務に堪へぬから、政治は固より、新聞の仕事も覺束無く、今後は悠々逗子に引込んで、魚でも釣つてゐる外はあるまいと觀念した。

併し日本からは頻りに歸朝を促す電報が著いたから、今は致方なしと諦め、愈ゝ五月上旬リバープールから太西洋を渡り、米國に赴いた。船に乘る迄は猶ほ半病人であつたが、海上一週間の生活にてすつかり蘇生し、米國に達した時には、既に以前の元氣を殆ど回復し、逗子に引込むなどといふ考は何時の間にか消去つて、紐育では既に日本人の會合の席上で、演説などをするに至つた。

斯くて米國では紐育から新英州を見、ボストンではノートン敎授に面會し、又たウィリアム・ゼームス氏等にも面會し、エマースンの故鄕を訪ね、その墓に詣り、シカゴを經、サンフランシスコよりハワイを經て横濱に歸著したのは、六月の末であつた。太平洋の船はペルー號と云ひ、太平洋汽船會社の船でも、最も劣等に屬する船にて、噸數も三千噸内外であつたらうと思ふが、總ての設備も決して上等とは云へなかつた。併し海上の生活は頗る予に適して、横濱に著く頃には、予の健康は殆ど發病以前の狀態に恢復して居た。此の如くにして予の世界漫遊は、一年と一ケ月餘にて終つた。

四　地租增税問題と松隈內閣の內紛

一ケ年前に出立した時にも、澤山の送別會などを催され、自分には過分と思ふ程の見送りを受けた。併し橫濱著港當時の驩迎は、更に予を驚かした。自分ながら不思議に思ふ程であつた。予は東京には赴かず、橫濱から逗子なる兩親の許に赴いたが、長谷場純孝君などは逗子まで予と相伴ひ、途中にて一通りの現狀に就いて語つた。それより東京に出掛けたところ、誰よりも先に陸實君が、松方內閣の頗る窮地に陷つてゐる事情を語り、豫じめ予に注意するところがあつた。何はともあれ、東京でも盛んなる歸朝驩迎會が帝國ホテルで催され、それには當時の與黨である進步黨やら、其他同業者、又は予の友人、及び『國民新聞』關係者等にて、なか〳〵の盛會であつた。

併し斯く驩迎せられたが、予の座るべき所は錦の褥では無く、寧ろ針の蓆であつた。松方內閣は十個月續いたが、其間に種々の出來事があつた。外に於ては自由黨は勿論、伊藤、陸奥等と云ふ一派、及び所謂る官僚派からは邪魔者にされるのみならず、恰も親の敵ででもあるかの如くつけ狙らはれてゐた。內輪では大隈派と薩派とが互に反目してゐた。薩派では何時迄も大隈の尻に敷かるゝよりも、

寧ろ大隈と縁を切つて、自由黨と妥協した方が得であると考へ、樺山、高島二君は、其の方面に手を伸してゐた。桂公などは松方內閣の組織の當初臺灣總督であつたが、山縣公に勸められて、陸軍大臣たることを承諾し、松方首相との間にその話が全く成立したに拘らず、當時拓殖大臣であつた高島子が、陸軍大臣は乃公のものであると頑張つた爲に、桂公は虻蜂取らずとなり、その爲に桂公などは最も此の內閣の崩壞を希望したる一人であつたらしく思はれた。然るに首相松方公は、一方に於ては大隈外務大臣が傍若無人に振舞ひ、他方に於ては樺山內相、高島陸相等が傍若無人に振舞ひ、殆ど虛器を擁するに過ぎなかつたのである。

何れにしても此の內閣は、外から顚覆せらるゝで無く、內訌の爲に自ら顚覆することは、眼前に現れてゐた。予は此の狀態を推察せぬでは無つたが、正直の處これ程までとは思はなかつた。予は自ら顧て情無くなつた。何故に今少し外國に遊んでゐなかつた乎、何故に早く歸つて來た乎、併し予は歸つて來たことを、決して後悔はしなかつた。斯くなれば一身の利害得喪は全く無きものとして、自分が仕組みたる芝居であれば、――固より予一人で無いことは明かであるが、予も自らその中の一人である責任を自覺してゐた――自らその中に身を投ずることは、當然の義務であると確信したから、予は自ら注文を附けず。何でも御座れ、予の一身で叶ふことは何でもやる。併しながら露國を目標と

して、吾が國運の伸張を計ることだけは忘れてはならぬ。これが爲ならば如何なることでも犧牲とする。卽ち己一個の名譽や信用などは、鴻毛よりも輕しと覺悟した。

予は洋行以前から松方公は勿論であるが、樺山、高島等といふ薩派の首領株とも懇意であつたし、大隈侯は尙更らであつた。されば予は進歩黨の味方として、薩派と鬪ふでもなければ、薩派の味方として進歩黨と鬪ふのでも無く、予は唯だ松方内閣の存在する理由、卽ち遼東還附の屈辱を囘復すべく、國力を增進する爲に努力する外に、何等の野心も無ければ、慾望も無つた。

當時松方内閣の帷幄に參したる者は、書記官長として高橋健三、法制局長官として神鞭知常の二氏であつた。二氏は所謂る日本新聞派とも云ふべき者にて、その友人として陸實氏が居た。謂はゞ條約改正の問題では、大隈方では無くして、寧ろ大隈の脚を切つた方の側であるが、當時は進歩黨と最も接近してゐた。唯だ當時高橋氏は既に病に犯されて、湘南地方に病を養ふて居、神鞭氏が一人で二人前を働いてゐた。

當時の問題に就いて最も重要なる事は、軍備擴張であつて、其爲には地租を增税することより外に手段は無つた。何れの政黨も二十七八年役前には、地租輕減、民力涵養抔を以て、其の看板としてゐた。特に進歩黨がそれであつたから、今更ら急に看板を代へて、軍備擴張、地租增徴抔のことを云へ

る筈は無つたが、併し二十七八年の役は、世界に於ける吾が帝國の位置を一變したから、これに從つて吾が帝國の政策も亦た一變すべきが當然である。進歩黨が今更ら消極的から積極的に轉じたりとて、何等疚しいことは無いが、併し何よりも選擧區の鼻息を覗ひ、しかも選擧區は地主に依つて支配せられたる當時なれば、進歩黨が地租增徴を好まなかつたことも、決して無理からぬことであつた。併し若し吾國にして十年一劍を磨かんとすれば、軍備を擴張するの外は無く、擴張することは增稅に依るの外無く、當時に於ては增稅としても地租に依るの外無つたことは、多言を俟ざるところである。予は決して大隈侯が其節を變じて、松方内閣を裏切つたとは斷言しない。併し松方公の側から云へば、大隈も最初はそれに贊成したが、進歩黨の有力なる面々が遮つて、これを止め、これに反對したからと云つて、何時の間にか又た反對者となり、遂に廟議を紛糾せしめたと思ふたことも、松方首相としては、決して無理からぬことであつたと思ふ。

扨て予には何よりも先づ新聞の方に加勢を頼むといふことであつたから、それでは先づその方面を引受けるといふことになり、總理大臣官邸に、松方、大隈、樺山、高島、それに西鄕海軍大臣等、重なる閣僚の會合を乞ひ、予はその人々に向て覺書を呈出し、それに就て逐一説明をしたが、孰れもそれにて差支へ無く、宜布く頼むと云ふことであつたから、予はその言葉を信用して引受くることゝな

つた。最初世間では高橋健三氏が病氣であるから、書記官長の後役を予に賴むのであらうといふ評判もあつたが、予は出來ることならば役人をせずに、民間で働き度いと思ひ、寧ろ左樣なる相談の來らなかつたことを仕合せとした。然るに當時勅任參事官を選任することゝなり、武富、尾崎其他の諸氏が夫々任命せられたから、予にもなつて貰ひ度いといふことであつたから、斯る場合に彼是云つて辭退するのも臆病らしく思へたから、自分の身體は諸君に一任するから、何なりとも然るべく處置せられ度しと云ひ、その結果予は內務省の勅任參事官となつた。當時の內務大臣が樺山伯で、秘書官には今の水野錬太郎、及び今日の侯爵久保利武氏が居た。併し予は內務省で仕事をするといふではなく、予は初から新聞に關する仕事を引受けたから、寧ろ內閣總理大臣直屬として、仕事をしてゐた。それをするには役人となつたことが、予には尠からざる便宜があつた。それは內閣會議の際などにも予は內閣に赴き、閣僚の評定する隣室に居て、何時でもその消息を聽くことも出來、それに依つて意見を世間に發表することも出來た。斯る次第で予は內閣に在つて新聞紙の記事を自らも書き、又た夫夫指圖もした。

五　政府と進步黨との絶緣

◇大隈外相以下內閣を去る

松方內閣の前途は思ふたよりも內輪に入つて見れば、猶ほ險惡であつた。樺山、高島の薩派の連中は、殆ど進步黨には見切りをつけて、頻りに自由黨の一部と內交涉を始めてゐた。當時薩派と稱するものと、專ら連絡を持つてゐたのは、頭株では松田正久氏であつたらしく思はるゝ。されど都合次第では、星亨一派も亦た、或は乘つて來ないことも無つたかも知れない。併し樺山には樺山の手筋があり、高島には高島の手筋があつて、何等その間に充分の連絡は出來てゐなかつたやうである。進步黨ではこれ又た薩派に見切りをつけ、此儘薩派に引摺られて行けば、何處まで行くかわからぬから、先づ大隈侯を擁して、二十七八年前の民力涵養、地租輕減の立場に復歸せしめ、それが通れば良し、通らなければそれを口實として、さつさと引上ぐるが得策であると云ふが如き考を持つてゐたらしく、初は松方公に相談づくで種々の要求を持掛けたが、やがては猛烈なる脅迫となり、その決答を期を刻して迫るが如き勢となつて來た。

予はこの形勢を見て、豫ねて覺悟の上ではあつたが、飛んでも無い處に吾身は嵌つたと思ふた。若し大隈侯が此際斷々乎として軍備擴張、地租增徴と云ふことに旗印を立て、それに向つて邁進するといふ場合には、多少の異論者はあつたらうが、進歩黨も大部分は恐らくは隨いて來たであらう。併し當人の大隈侯も、進歩黨の首領株が種々面倒を竝べ立て、苦情を持出すに就いては、自らその鎭撫役となるべきであつたが、却つてその先頭となつて、松方首相に肉迫するの有様となつて來た。神鞭氏などは出來得べくんば松方、大隈の間をしつくりやりて見度いと骨折つたやうであつたが、これも遂には匙を投ぐるに至つた。

一方では松方公が所謂る後入齋で、後から〳〵意見を更へて行くと云ひ。一方では大隈は二枚舌で時と場所に應じて、常にその議論を變ゆると云ひ、詮じ來れば何れ鴉鳥の雌雄を知らんやで、隨分困つたに相違は無い。特に當時の司法大臣淸浦伯、文部大臣蜂須賀侯等は進歩黨側からは、敵の間諜であるかの如く取扱はれてゐた。されば與黨たるべき進歩黨が、松方内閣に取つては、一番厄介であつて、松方内閣そのものから云へば、それが却つて獅子身中の蟲とも云ふべきものに看做された。

予は孰れの黨派に加はるといふでも無く、自分の意見である對露問題解決を目標に置き、遮二無二それに向て邁進するの外に餘念は無つたが、折しも少しの暇が出來たから、東北に出掛けた。先づ仙

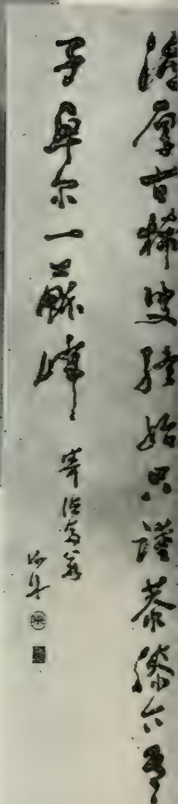
臺から岩手を經、當時青森は知事と進歩黨の連中との間に紛爭が生じ、知事は盛んに排斥運動を喰ひつゝあつたから、それ等の調査もあり、旁々青森から弘前まで赴き、それから奧羽線を通つて歸京すべく、豫じめ日程を作つてゐたが、東京からの急電は、櫛の齒を引くが如く、予の歸京を促した。そこで弘前から取つて返し歸京したが、途中迄出迎へたる友人等の語るところに依れば、政府と進歩黨とは、到底兩立は出來無い姿であつて、何とかせねばなるまいといふことであつた。

予は歸京と同時に各種の方面から目下の政情を詳にし、最早や内閣の瓦解は眼前だと思ふたから、取敢へず辭表を書いて、これを樺山内務大臣に呈し『これはお預け致して置くから、何時でも必要の場合は此通りに御取量ひあれ』と云ひ、先づ自分の一身の處置だけはそこに著くることにし、兎も角も斃れて後止む迄はやらなければならぬといふ考を持つて、松方首相とも話をなし、最早や進歩黨から迫つて來た以上は、絕緣の外は無いから、寧ろ此方から進んで『進歩黨の注文には應ずることが出來ない。その爲に進歩黨が與黨たることが出來ぬと云へば、それも致方無し』といふ、はつきりした書付けを渡す方が宜からうといふことを建議し、それに松方首相も同意したから、予は自らその文書を作り、松方公に示した。公はそれにて差支へ無しとのことであつたから、豫め通信社員を内務省に呼び、その書付けを渡して置いた。

予が斯くしたるのは、決して早まつた譯では無い。松方公は予の意見を容れられたれども、若し後から異つたる意見を持込む者があれば、或はそれを容れられるかも知れぬから、寧ろ此際一刀兩斷、取返へしのつかぬ様にして置くに限ると考へたから、斯くなしたのである。

果然予が書付けを渡して後、予の處に或人來つて『少し考があるから、先の書付けを出すことだけは見合して呉れ』といふ旨を齎らし來つたが、予は『切角のことであるが既に出した以上、今更ら致方無し』と答へ、果して予の思ふ處に違はなかつたことを、一人自ら胸中に於て微笑した。これは予に取つては何やら輕卒の様であつたが、今日に於ても予は斯くするより外なかつたと思ふ。倒れるほどならば、正しく倒れるがよく、男らしく倒れるがよく。右に逍遙ひ、左に逍遙ひ、前に動き、後に動き、思案に暮れて野たれ死をなすが如きは、寔に面白くないと考へたから、斷然斯くしたのであつた。

斯くて愈ゝ政府と進歩黨とは絶縁となり、大隈侯も罷め、又た進歩黨から官職に就いた者は、殆んど皆罷めて、殘つた者は埼玉縣知事宗像政ぐらゐであつた。彼は『君も進歩黨の緣故から役人となつたのであるから、罷むべきである』といふことを或人から云はれた時に、公開狀を以つてこれに答へ、『自分は行く處まで行く。壇浦迄も行く』と云ひ、そこで彼には『壇浦知事』といふ綽名が後ま

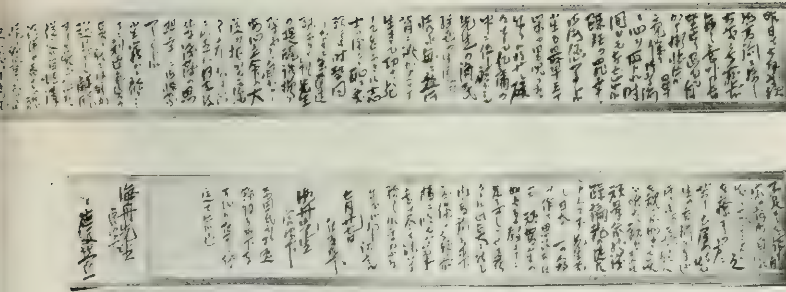


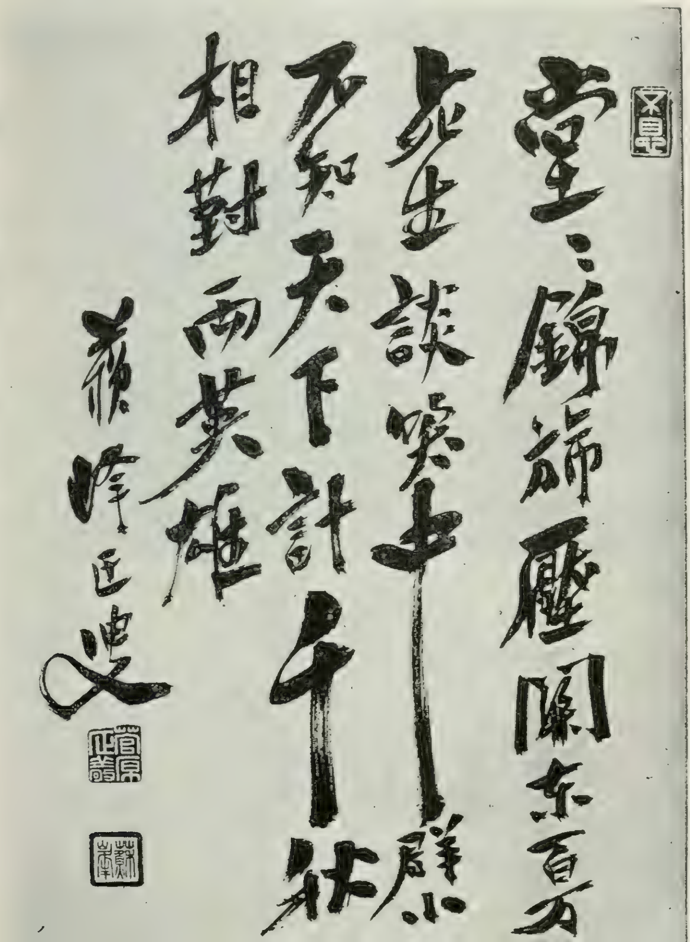
勝海舟先生と淇水翁古稀に際して與へられたるその筆蹟

德厚古稀叟。 終始只謹恭。
膝下有之子。 卓爾一蘇峰。

寄蘇峰翁

海舟





（上）蘇峰翁が明治二十五年勝海舟先生に送りたる書簡

（下）海舟、南洲両先生を詠じたる詩

でくつゝいて居た。

六　予の勅任參事官就任と囂々たる世評

◇松方内閣の瓦解とその誘因

予は此に初めて人間學の初步を卒業した氣持がした。六月の末予が橫濱に入港する時から七月にかけては、予の人氣は大したものであつた。然るに予が勅任參事官になつてからは、不思議に人氣が落ちて來た。而して進步黨の連中、例へば尾崎行雄、武富時敏等の諸氏は、皆な相踵いで松方內閣を去りたる時に於て、予が一人踏止つたといふことに就いては、最早や人氣が落ちるとか、落ちないとかいふ問題では無つた。自分ながら不肖なる予が、每日凡有る新聞の記事、論評を滿たす光榮を得たることを、不思議に思ふ程であつた。その攻擊者にもこれを分類したならば、種々の連中があつたであらう。或は平生予に快くなき人々が、一時は屛息してゐたが、世間の反動に乘じて、大いに予に對する、惡意、惡感を放射した者もあらう。又た進步黨員は、平生予が立場の自由であるのを知らずして、予を進步黨員と誤解し、此際一人踏止まるのは進步黨を裏切つて、薩派に降參したるものである

と憤慨したものもあらう。

それ等は予にとつては、別に何等の苦痛も無つたが、唯だ予が最も遺憾に堪えないのは、『新日本の青年』『將來之日本』『國民之友』其他の予の著書を愛讀し、眞に予の味方である人々が、恰も自ら裏切られたるが如く感じて、予に對する信用と尊敬の念を失墜したることだ。予自ら顧れば、予としては唯だ日本男兒としてなすべきことを爲したるに過ぎず。予自身は自ら犧牲者の積りでゐるのに、他の人々は予を以つて主義を犧牲として、節操を犧牲として、世間の名譽、富貴に殉へたる者と認めたるのは、予に於ては心外千萬であつた。

予は固より當初から既に瓦解しかけつゝある松方内閣に、一身を投沒するのは、予の前途について甚だ危險であることを自覺した。併しその際は所謂る、

『かくすればかくなるものとしりながら、止むにやまれぬ大和魂』

といふ氣持でやつたのであるが、予の知己とも、親友とも云ふべき人々にさへも、諒解せられなかつたことは、甚だ遺憾千萬であつた。唯だ有り難くも予の兩親だけは、よく予を諒解して呉れた。世間の毀譽褒貶に拘らず、予の踏んだ道は利害得喪の打算からすれば、誤つてゐた道かも知れぬが、所謂る人間道、紳士道、男兒道としては、斯くあるべき筈であると認めて呉れたのは、良に予にとつては

涙の出る程有難く感じた。

予自身は倫敦に於て既に客中の鬼となるべく覺悟してゐたのが、幸に生命を取返して歸國したものであるから、如何程讒誣中傷の犠牲となつたとて、別に苦情を云ふべき限りでは無つたが、併し世間の囂々も隨分煩さきものであつた。而して其爲に吾が『國民新聞』にも多大の影響を來したやうであつたが、併し猶ほ新聞の發行部數は、五六千を降らなかつたであらうと思ふ。

扨て内閣は豫定の如く、地租増徴を以つて鬪はんとしたが、議會劈頭貴族院などにても、空氣が頗る險惡であり、衆議院は猶更らであるから、予は初より解散説を主張し、寧ろ吾が政綱を引提げて、堂々とその可否を輿論に訴ゆるに如かずとなしたが、中には停會などを目論む者もあつた。併し遂に議會は明治三十年十二月解散となつた。

扨愈ゝ解散となつたから、予等は内務省に選擧本部を置き、それ〳〵選擧のことに取掛らんとしつゝあつたが、意外にも此に松方内閣は外からの攻撃で無く、内訌の爲に瓦解することゝなつた。その原因とは言はぬが、手近き誘因は左の通りである。

内閣に於ける最も有力者の一人高島陸軍大臣は、竊かに松方内閣の首を取換へるべく目論んだ。高島子爵は頗る傍若無人の漢にて、その子分に對しては親切でもあり、又た子分の言ふことはよく聽く

傾向があつたが、同僚若くは先輩に對しては、隨分勝手な言動をした。恰も議會が解散せらるゝと同時であつたらう。高島子爵は松方首相を訪れて、

『斯る危局に於ては、御身の首相は柄に無い。寧ろ此際西郷海軍大臣に首相の椅子を讓り、御身は專任の大藏大臣となられた方が得策であらう』といふ、意見とも忠告ともつかぬものを述べた。現在の首相に向つて、斯る申込をするからには、首相も固より返事の仕樣も無く、

『篤と考へて見るであらう』と答ゆる外は無かつたが、その答は、『萬事休す。最早掛冠の外は無い』と覺悟を決めしめたものであらう。

高島陸相はその足で西郷海軍大臣を訪ひ、又た同樣の意見を述べた。西郷海相は何と答へたか、そのことは知らぬが、やがて官邸から一切の荷物をその私邸に送去り、引上げの準備をした。西郷侯は何れの內閣に於ても、調和機關として、最も重要なる役目を働らく人であつたが、松方內閣に於ては特に然りとした。最初からしつくり合はなかつた松方、大隈兩人を、兎も角も一箇年の餘引張つて來たのは、西郷侯の力であつた。又た西郷侯にかけては、進步黨であらうが、官僚黨であらうが、陸海軍側であらうが、相手として可ならざるは無つた。

如何なる腕白にして我儘な高島將軍の如きも、西郷侯には頭が上らなかつた。されば西郷侯が內閣

に居る中は、先づ內閣は兎も角も生存してゐるに差支へは無つた。然るに此人がとても駄目と決心したからには、例へ松方公が踏止らんとしても六ケ敷かつた。然も高島子によつて總理大臣の椅子に就かんことを勸められたる西鄕侯も、總理大臣の椅子より退かんことを勸められたる松方公も、殆ど同時に辭職を決心したからには、最早や內閣總辭職の外は無つた。予等は正に來るべき選擧に氣をとられて、此間に於けるそれ等の狂言は、爾後に於て知つた位であつた。併し知つた時には最早手のつけやうも無つた。

此の如くにして松方內閣は、議會が解散すると同時に、內閣自身も亦た解散した。斯くて明治三十年の歲晩は、予は兩親と共に逗子に三十五歲を送ることゝなつた。而して當時左の詩を賦した。

『湘海孤村守レ歲時。寒燈獨坐有二幽思一。何來天樂徹宵響。松韵濤聲兩不レ知。』

七　予を諒解されし勝海舟先生

此間に於て一言するは、勝海舟先生と予の父との事だ。予の父は極めてよく予の心を諒解して、世間が何といはうと予の進退には最も贊成をした。勝海舟先生は又予にとつては、新島先生以外の恩師と

いふべき一人であつて、予は屢々先生より敎を受けた。予は先生の令孃內田夫人の借家に、吾父と共に洋行以前在京の過半を過した。卽ち家は勝海舟先生の邸內である。いはゞ予等も間接に先生の店子の一人であつた。善にあれ惡にあれ、よく先生を賴りとした。予が大病の時抔は吾父は醫者の藥よりも、先生の敎の方が效能があるであらうといふて、わざ〳〵其事を先生に願ひ、病氣を癒す藥の代りに文句を書いて頂いた事がある。予は不幸にして西鄕、大久保、木戶若くは岩倉等の維新の所謂元勳に接するを得なかつたが、賴ひに海舟先生の敎を奉ずることを得た。南洲翁は先生に會うて、其の人物は測り知るべからず、佐久間象山などの及ぶ所でないと書いて居らるゝが、兎に角海舟翁は、日本が幕末より明治にかけて產出したる一個の偉人でなければ、偉人中の一個であるに相違はあるまい。先生は實に人間學の大博士であつて、家康の相談相手であつた本多佐渡守なども、恐らくは先生ほどでは無つたらうと思ふ。予等は父子共に先生から敎を受けてゐた。總ての人の門戶が予に向つて閉された時にも、先生の門戶丈けは常に開かれてゐた。先生が予の父に與へられた絕句がある。『德厚古稀叟。終始只謹恭。膝下有レ之子。卓爾一蘇峯』と。又た予に與へられたる句の中には、『君弱冠以二才學一著レ世矣。夙有二麒麟兒之目一。他日得三大展二驥足一。其所二造詣一未レ可レ測也。』との言もあつた。爾來碌々成す所なく、先生の期待を裏切つたのは、今更ら慙愧に堪へぬ次第であるが、兎に角に先生の知

遇を忝うする事を得たのは、予にとつて、一の幸福と云はねばならぬ。

八　惡評集中と新聞經營上の大苦心

◇『國民之友』『家庭雜誌』英文『極東』の廢刊

扨て明治三十一年は、予にとつては、隨分面白からぬ年でもあり、又た面白き年でもあつた。何と云ふても、予は公人として殆ど全く葬られ盡した。變節漢とか、藩閥への降伏者とか、其他凡有る惡名は、遠慮會釋なく予に雨集し來つた。予は今更らそれに驚きもしなかつたが、吾が兩親の手前、毎日予の非難、罵詈、讒謗の新聞を見せしむることに就いて、聊か心配が無いでもなかつたが、予の兩親はよく予を諒解して、却つて逆に予を慰さめて呉れたことは、今猶ほ感激に堪えぬ次第である。

斯る場合に於て、特に遺憾に思ふたのは、予が逗子から大隈侯に送りたる手紙、その意味は、『是迄自分は主義主張の爲に、最善の努力を盡したが、其效なく松方内閣も瓦解したから、これからは當分世間の樣子を他所に眺め、徐ろに讀書をことゝする積りである。』云々の書を與へたものが、如何なる譯にや、それが異つたる意味に解釋されて、その手紙の一部と共に或る新聞に出たことである

る。予は衷心大隈侯に對しては舊誼を忘れず、予の進退に就いて、予の眞卒なる衷情を言ひ送りたるに、それが予を攻擊非難する資料に使用せられたることは、縱令、大隈侯の本意では無つたにしろ、甚だ遺憾に思ふところであつた。

爾來予は約十ケ年ばかりは、大隈侯との交際を斷絶し去つた。新聞雜誌の予に對する追擊戰は、不相變ず盛んであつたが、それよりも困つたことは、借金の追擊戰であつた。予は元來個人として、未だ人に金を借りたことは無つたが、洋行の爲に餘儀無く大隈侯の口入れにて、或る銀行より借用した。然るに倫敦にての大病の爲に、その金高も可成り多額に上つた。これと同時に、當時國民新聞社には、佛國より輪轉機械を購入し、其他瓦斯エンジン、印刷附屬の諸機械等を購入し、その爲に尠からざる經費を要した。

然るに內閣は瓦解し、政友は禽奔獸走し、今は東京に於て予が與に交際し、往來する者は、纔に高島子爵位であつたから、誰に向つて金策の致樣も無つた。予は臍緒切つて初めて借金の恐るべく、債鬼の恐るべきを覺えた。併し洋行費のことは、意地づくでも皆濟せねばならぬと思ふて、彼是功夫をしたが、その爲に印刷機械、其他に對する支拂は、餘儀無く延期せねばならぬことゝなつた。然もその相手は三井物產會社であつたから、ひし〳〵催促せられて、今は予も百計に窮したから、自ら當時

日本橋にあつた三井物產會社に赴き、益田氏（現時の男爵益田孝氏）に面會し、事情を訴へ『到底今急に機械代などを皆濟するわけにはゆかぬが、寧ろ此際國民新聞社を御身と予との共有となし、先づ半分だけを持つて貰度い』といふことを提議した。益田君はこの話を聽き、

『いやそれは貴君としては尤もなる申分である。併しながら自分は既に或る有力なる新聞の部分的持主であつたが、何時の間にやらそれも無くなつた。僕は『國民新聞』の半分を持つたとしても、筆を持つ人は貴君であり、貴君と僕の意見が一致する間は、何等の差支は無いが、萬一意見が一致せざる場合には困つたことになる。貴君は筆の持主であるから、どし〳〵思ふところを語るだらうが、自分にはさういふことは出來無い。それでこの提議だけは、切角の申分であるが、眞平御免を蒙り度い』

と云ふことであつた。

考へて見れば、尤もなる話であるから、予はその儘引下つたが、予が一切の內情を打明けて、話したる爲でもあらう。その後は債務の督促も左程急激では無くなり、然も返濟の方法も極めて寬大に取扱はれたるは、予が今猶ほ感謝するところである。

毀譽褒貶などは、予にとつては何でも無いが、財政の困難だけは予にも餘程こたへて來た。予の惡評と共に、『國民新聞』は固より、國民新聞社との兄弟社たる民友社から發行したるところの『國民之

友』『家庭雜誌』英文雜誌 "Far East" の如き、何れも予の評判の下ると共に發行部數も下つて來た。特に英文雜誌『極東』卽ち "Far East" は、明治二十八年以來予が奉仕的に刊行したるものであつて、三文の利益にもならず、謂はゞ家に道樂息子を預つて置く樣なものにて、社運の隆盛の際と雖も困つたものであつたが、斯る場合には猶更らであつた。予は出來得る限り財政困難の現狀を、予の父母及び予の妻にも語ることを避け、又た成可く他の智慧を煩はすなからんことを欲した。獨力にて仕末をつけんものと焦慮したが、生來初めてのことにて、馴れぬことではあるし、何一つ思ふ樣に參らず、寧ろ虎の子の樣に殘し得たる若干の金を旅費として、當分英國にでも奔らんかと思ふたこともあつたが、それでは餘り無責任であると思ひ返し、曲りなりにも、小さくなつても、此の城だけは守り通さんと決心して、その爲に努力した。

折しも予の家內は出京以來未だ一度も歸省しないから、里方の兩親を見舞はんが爲に、歸省したいとのことで、予にとつては却つてこれを好機となし、一人家に在つて千思萬考したが、此上は經費大節減の外無しと考へ、それには人を減らさなければならず、人を減らすには仕事を減らさなければならぬと考へ、一方には『國民之友』『家庭雜誌』"Far East" を、『國民新聞』と合併するといふ名義の下に、一切廢刊し、他方には社員の約三分の一を淘汰することゝした。これは確かに『國民新聞』

の正に倒れんとするを支持する所以の、當時に於ては唯一の方法であつたが、これを實行する爲に、社員として是迄働きたる人々に、何等の豫告をも與へず、罷免したることは、寔に不本意であつた。當時罷去つた人の中には、角田浩々歌客、宮崎湖處子、中村樂天君等、其他幾多の人々があつた。予は今も猶ほ此事を止むを得ぬこととは云ひながら、甚だ遺憾に感じてゐる。

且莫吹　（明治二十九年　三十四歳）

城外城中花滿枝。　青春佳興不多時。
紅顏易老花零落。　寄語東風且莫吹。

王荊公

畢生心事在經綸。　餘技詞章亦絕倫。
時俗奚知濟時略。　枉將安石做文人。

甲東碑

諸公齊唱太平歌。　一劍報君今若何。
細雨新泥春欲老。　甲東碑畔落花多。

孤松　逗子老龍庵

艸堂新築拓蒙茸。　移植孤松恰似筇。
黛色成陰知何日。　期君一夜化蒼龍。

暗催涙

雲海茫茫寄此身。　五洲風月眼中新。
問君何意暗催涙。　爲有高堂白髮親。

海南嶋

檣上風高夜色幽。　香灣南去水悠悠。
金蛇一道掣天末。　應是東坡謫處州。

未死魂

紅海蒼茫日色昏。　遙看大漠障雲屯。
當年老相有遺憾。　塞了英雄未死魂。

奈翁

歐南歐北拜旌旗。　孤島幽囚役一時。
蓋棺百年無定論。　亂山何處出奇兒。

和蘭途上

點點牛羊散碧叢。　溝渠如帶劃西東。
不關四境有何事。　盡日風車轉半空。

謗議　(明治三十年　三十五歲)

江湖謗議謾紛紛。　遮莫青雲與白雲。
出處由來心自會。　斯生不作解嘲文。

第十二章　日露戰役前の政局と予(下)

一　第三次伊藤內閣と自由、進步兩黨の合同

◇伊藤公と予

翻つて明治三十一年の政局を見れば、松方內閣瓦解の後を受けて、伊藤公が第三次の內閣を組織したが、如何に松方內閣には缺點があつたとは云ひながら、又た伊藤公がそれに反對したとは云ひながら、軍備擴張、地租增徵は、日本帝國の政策として、免かれざるところであつたから、固よりこれを踏襲するの外なかつた。然るに『咽喉元過ぐれば熱さ忘れる』自由黨、進步黨は、孰れもそれに反對し、伊藤公は殆ど窮地に陷つた。此に於て伊藤公は自ら政黨を組織すべく、彼是準備をしたが、當時の所謂官僚黨、即ち山縣公一派の反對に逢ひ、それも意の如くならなかつた。予は元來先天的とも云ふべき程に、伊藤公嫌ひであつたが、此の機會に伊藤公とその官邸に於て面會した。立會人と云

はうか、同行人と云はうか、何れにしても可なりだが、その人は野田大塊であつた。予等兩人が伊藤公と會見したるのは、舊首相官邸の應接間に隣りする食堂の、ストーブの傍であつて、伊藤公は土瓶に酒を盛り、それをストーブの傍に置いて溫めつゝ、且つ語り、且つ飲んだ。

其時公は『德富君は勤王主義に異存はあるまい』と云はれたから、固より異存のあるべき筈は無く、當時予は何れかと云へば、伊藤公よりも輪をかけたる軍備擴張論者であり、その必然の結果として、地租增徵の止むべからざるを認めたる論者であるから、予が强ひて伊藤公に隨喜するを俟たず、意見は自然に一致せざるを得なかつたのである。又た當時久しく疎遠であつた井上侯は――多分大藏大臣であつたと思ふ――衆議院書記官長林田龜太郎氏を使として、是非德富君を同行して來れと云ふことであつたから、林田君に伴はれ、議院に於て井上侯と會見した。侯は當時予に向つて頻りに地租增徵の止むべからざるを說き、それに同意を求めたから、予は『云ふ迄もない、それが私の本來の議論である』と云ふことを此方からも詳しく語り、自然此の如くにして伊藤公、井上侯の意見と、予の意見とは、尠くとも地租問題に就いては一致することゝなつた。併し予は既に松方內閣と運命を共にして、九死一生と云ふより以上の苦境に陷つたから、今更ら再びこの苦き經驗を繰返へすべくもなく、伊藤、井上兩公の希望ほどの加勢もしなかつたが、又た强ひて反對するが如きことはなか

つた。

予も其際伊藤公の政黨設立の話を多少聽かされたが、それとても身を以つてこれに投ずるほどの熱心は無く、唯だそれが出來れば仕合せであるといふ位の程度であつた。然るに民黨に於ては此の機運に乘じて、板垣、大隈を握手せしめ、自由黨、改進黨を打つて一丸となすの計畫が持上り、電光石火にそれが成就した。これは實に予等が明治二十二年から二十三年にかけて、必須に運動したるところであつたが、事成るに垂々として遂に破れた。それが明治三十一年の中頃に於て成就したのである。併し予等が當時に於て大合同を畫策したのは、民間黨の力を合して、藩閥政府に當るにあつた。しかも今日は其時で無い。日本國の力を合して、露國に當らねばならぬ時である。その爲には地租增徵をせねばならず、軍備擴張をせねばならぬ。然るに民間黨の合同成ればとて、咽喉元過れば熱さを忘れ、遼東還附の屈辱を憤りながら、今更ら政權を得るの近道なればとて、軍備擴張に反對して、從つて地租增徵に反對するなどゝ云ふは、甚だ聞えぬ話とて、當時日本全國山となく河となく、草も木も、悉く憲政黨——卽ち進步黨、自由黨の合體して一黨となれるものゝ名——に謳歌するに拘らず、予及び予の統督する『國民新聞』だけは、尠くともその外に屹立したと云へば大層であるが、斷乎として、孤立した。

従來薩派の殘黨と稱せられたる予の友人、長谷場純孝、宗像政等も、此の場合には憲政黨に加入したが、予一人のみは加入は愚か、これに向つて相當の批評を試みた。されば宗像政君の如きは、予の親近者に諷して『德富君の態度も餘りに野暮臭いではないか。今少し融通が利いてもよいでは無いか』と云つた程であつたが、予は如何に落つこちても、既にどん底まで落ちてゐるから、此上はその心配も無く、依然としてその所信を枉げなかつた。

二　隈板內閣より第二次山縣內閣

◇第一回の政黨內閣とその內訌

扨て伊藤公は窮餘の一策、憲政黨が漸く成立して未だ物にもならない際に、忽ち自ら辭表を上つて、大隈、板垣二人を推薦した。斯くて此に初めて第一回の政黨內閣が出來たが、出來るや否や喧嘩が始つた。予は此の主義主張よりも、寧ろ政權獲得の合名會社とも云ふべき憲政黨內閣には、別段同情も無く、さりとて別段敵意も無く、批評的態度を持してゐたが、果して上に於ては首相大隈、內相板垣の葛藤となり。下に於ては改進黨員、自由黨員の葛藤となり。未だ曾つて組織以來一日も寧日無

き有樣であつた。

當時海相西郷、陸相桂の兩君は、前伊藤内閣よりの居殘りにて、彼等は單純なる居殘者で無く、寧ろ藩閥側、官僚側の目付として居殘りたるものであつた。果して兩人が申合せでもしたか否乎は知らぬが、西郷侯は自然に大隈側に近く、桂公は自然に板垣側に近く、從つて双方の訴は此の兩相の間に悉く聞えざるは無く、その爲内閣の機密も、内閣の内情も、その弱點も、その爭點も、悉く筒拔けとなつて、予等の耳にさへも聞ゆるに至つた。當時吾が『國民新聞』は、内閣種の卸問屋を陸相官邸に求め得て、吾社中の重なる人が常に陸相と面會して、その種を取つてゐたが、流石の陸相も餘りに頻繁であるから、何とか表門からで無く、人の氣付かぬ裏門から出入して貰ひ度いなどといふ程であつた。

斯くて三十一年の初冬には、大隈、板垣の葛藤が愈〻破裂し、所謂る憲政黨が分裂して、自由黨側が憲政黨を名乘り、進歩黨側は本黨を名乘るに至り、内閣は瓦解して、此に再び第二次の山縣内閣は出で來つた。此の内閣の出で來つたことに就いては、予も聊かその内幕のことを知つてゐる。併し今此にこれを語る必要が無い。兎に角平田東助伯などが暗中の飛躍をなし、山縣公を盛立て、松方公と提携せしめ、謂はゞ山縣七分、松方三分の内閣が出で來つたのである。而して樺山伯なども、入閣し

て文部大臣となつた。

その冬は近畿に大演習があつたから、予も演習拜觀の名義で、その實は政治の舞臺が大阪方面に移つたから、その觀察に出掛けた。その頃から自由黨と山縣內閣との交渉が頻繁に行はれ、星亨氏を入閣せしむるとか、せしめないとかいふ問題から一轉して、遂に自由黨と山縣內閣との提携が出で來つた。予は予が大阪に赴く際には、野田大塊などと同行したが、隣室には星亨氏なども居て、最早や昔時の喧嘩は忘れたる如く、よく話した。星氏は意外にも讀書家にて、當時彼一個は固より、自由黨の運命にも、重大の關係ある旅行であつたに拘らず、彼は汽車中はイスパニヤ語の文典を繙きつゝ、頻りにそれを研究してゐた。現代の政治家には珍らしき程の讀書人であつたが、その讀書が如何なる影響を與へた乎といふことに就いては、予は不幸にしてこれを知ることを得ない。兎に角明治三十一年は第二次松方內閣を葬り、第三次伊藤內閣を葬り、大隈、板垣の憲政黨內閣を葬り、隨分多事の一年であつた。而して世間では人の噂も七十五日と云ふが、なか〳〵予の失墜したる信用は一年位で回復すべくも無く、可成り予は慘めなる位置にあつたが、しかも予の露國に對する目的は、漸次に具體化して、進行して行つたことは、予が私かに愉快とするところであつた。

且又吾社も果斷の緊縮政策を執つた爲に、漸く落城せずに持こたへることが出來。而して徐々に讀

者も又た回復して來、三十一年の末には、略ゝ日清戰爭以前の狀態に近付く迄に回復して來た。
明治三十一年十一月より、三十三年十月迄、約二十二ケ月間の山縣內閣は、予と最も良好の關係を持つてゐた。それは主義に於て山縣內閣は、陸海軍を擴張と云はざるも、これを充實して、露國に對する萬一の場合に備ゆることを以つて、先決問題とし、それに向つて邁進したからである。
第二には個人的に親しくあり、特に第二の松方內閣以來、政治上に於て其の運命を共にしたる、松方公が、西鄕侯と共に、專ら內閣に於ける山縣首相の相談相手であり、從つて松方公と親善であつた予が、勢ひ山縣公と親善であるべく、自然の勢に導かれた爲である。

三　山縣公と予との關係

山縣公とは曾て明治二十三年以前、公が第一次伊藤內閣に於て、內務大臣たる時に、山下町の官邸にて面會したこともあり。爾來接觸の機會は無つたが、大隈板垣聯立內閣の瓦解當初から、予も此處彼處と奔走する中に、自然山縣公の門下生とも接觸するに至り、彼や是やにて、自然公とも屢ゝ出會するやうになつた。

從來予は陸軍側でも交際したる人々は、正統なる山縣派では無つた。最初に親しかつた曾我將軍でも、次に親しくなつた川上將軍、高島將軍でも、彼等は各々の立場を持つてゐたが、然も何れかと云へば、山縣派では無つた。從つてその脈を辿つて得たる消息は、何れも山縣公は窮屈なる人であり、小六ケ敷き人であり、小やかましき人であり、なか〳〵交際などは樂ではあるまいといふことに歸著したが、段々接觸してみると、實に意外の感があつた。成程六ケ敷くもあり、やかましくもあり、與みし難き人であつたに相違は無い。併し第一の印象は、公が當てになるといふことであつた。

果して當てになる乎ならぬ乎は知らぬが、當てになるらしき感を與へた。それに若し伊藤公や大隈侯が、講釋上手であれば、山縣公は聽上手であつた。桂公などの如くに、故らに感服したやうな樣子はせぬが、併し如何なる愚論でも、尤もらしくそれを聽いてゐる。餘程のことで無ければ、談話の途中に腰を折るなどといふことは無つた。

それで一面には畏敬をしつゝも、他方では向ふからは胸襟を開くか開かぬかは分らぬが、此方からは胸襟を開くことが出來る。予は山縣公に心醉するほど無批判では無つた。併し逢つて見れば、思つたよりも偉い漢であつた。

概して維新以來、南洲、甲東、松菊以後に於ては、唯一の人物では無いが、尠く共片手に折るべき

中の一人、若くは第一人ではあるまいと思ふた程であつた。

當時新聞記者で最も首相と親しくした人は、二宮熊次郎といふ人であつたが、此人の作つた『京華日報』といふ新聞は、發行部數も少く、謂ば無勢力であつたから、二宮氏は新聞記者としてよりも、寧ろ山縣公の門下生として、昵近してゐた樣であつた。

眞に新聞記者として親しかつたのは、斯く申す予、及び朝比奈知泉君であつた。併し當時の朝比奈君は、前日の朝比奈君では無かつた。これは恐らくはその健康が、從前程に勝れなかつた爲でもあらう。山縣公の懷刀は、前にも後にも平田東助伯であつて、當時は法制局長官で、安廣伴一郎君が書記官長であつたが、其實は法制局長官も書記官長も、平田伯がこれを兼任し、安廣君は其の次官とも云ふべき姿であつた。從つて予等は兩君とも屢〻接觸した。

予は別に政治の顧問に與つたと云ふわけでも無く、又た所謂る御用記者でも無かつたが、その關係は親密なる政友といふ位のところであつたらう。

但し當時の大藏大臣松方公、文部大臣樺山伯等は、從來の行掛りもあつて、一層親密にしたことは申迄も無つた。

陸海軍を充實するには、豫算を通過せしめねばならず、豫算を通過せしむるには、議會に多數の味

方を得ねばならず。議會に多數を得るには、議會の多數黨、若くは多數ならしむる丈の合從をせねばならず。此の如くにして山縣內閣と自由黨、即ち現時の政友系とは、所謂る肝膽相照らすの好名目の下に、それが行はれた。

何事も無代價で出來得るものではないから、山縣公がこれに向つて、大なる代價を拂つたことは云ふ迄もあるまい。予は此間に於て、如何に實際政治なるものが、吾々の理想と遠きかを體驗し、愈々自ら政治家となることが嫌となつた。

併し如何にもして露國とは、遼東還附の遺恨を霽す時期が到來するものと信じ、その爲には何事も犧牲とせねばならぬといふ決心を以つて、山縣內閣の政策を助成した。

その中でも宗教法案提出の際などは、予は平田伯に向つて『ビスマルクでさへもクルツルカンプで手を燒いた。坊主はなか／＼油斷のならぬものであるから、これは實に重大事件である。然るべく御注意あれ』と云つたが、平田伯は『既に反對黨の黑幕たる石川舜臺等も證文を入れてゐる程であるから、心配はあるまい』とのことであつたが、場所も場所、山縣公の全く繩張りとも云ふべき、貴族院に於て否決せられ、山縣公は頗る不快の感にて、議會から官邸の玄關に歸來つて『負けた／＼』と叫びつゝ、奧に入つて行かれたと云ふことだ。定めて無念であつたらうと思ふ。

山縣公は武人であつたから、訪問の時間などもなか〳〵正確であり、且つ嚴重であつた。而して容の服裝なども、面と向つては云はれぬが、可成り氣をつけてゐた樣だ。予は當時藤栗毛にてオーバーシウスを穿めながら、總理大臣官邸の首相の控室、即ち當時內閣會議のある隣室によく通つたが、或日公はそれとなく『德富君の靴は珍らしい靴だ』と云ふ樣な皮肉を發せられた。

それよりも困つたことは、當時寫眞版が思はしくないから、大概木版で濟したが『國民新聞』の多分三千號の祝であつたと思ふ、公に揮毫を乞ひ、それを木版に彫つて、その校正刷を示した處、公は公に昵近したる寺崎氏に向つて『如何に俺が字が拙いとて、これ程の拙い字を書く筈は無い』とて、立腹せられたといふことにて、それを予に報じ來つたから、予は寺崎氏に向つて『何とか功夫はあるまい乎』と云ふたら、紙屑の中から竊かに公が認められたる文字の反古を拾出し、それを上手く繼合せ、それを再び試みては如何といふことにて、その通りにしたが、果して公の意を得たる乎、否乎、その先のことは聽かなかつた。

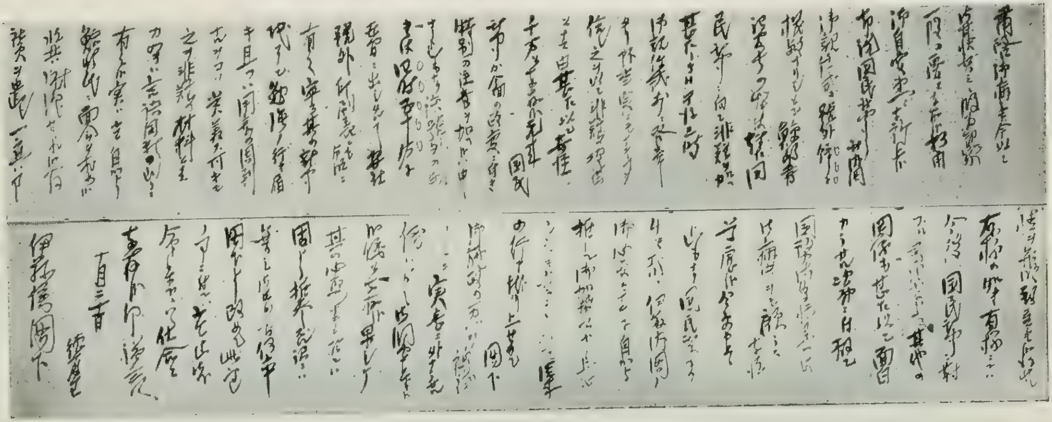
併し斯ることは偶々の出來事で、予にとつては、公は寔に話のよく判る人、話をよく聽く人、その諾否を苟もせぬ人、或る程度迄は、賴み甲斐のある人といふ印象を深からしめた。

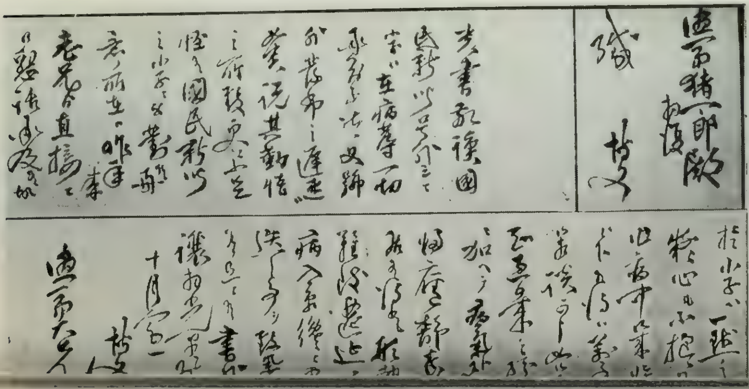
四　山縣公と伊藤公との關係

山縣公は必らずしも一切のことを、軍規、軍略から割出すといふではあるまいが、併しその用心堅固な遣り口は、何時でも敵前露營の覺悟であるかの如く、見受けられた。されば進擊する時に既に退陣の準備を忘れないと云ふのが、その遣り口にて、恐らくは明治三十三年の春には、辭職の覺悟をしたらしかつたが、時恰も義和團の事件が起り、その爲に當分思止ることになつたらしかつた。斯く辭職の決心をしたのは、第一は豫算案を無事に通過し、第十三議會、第十四議會も、首尾克く濟んだからであらう。

併しその一は肝膽相照らすと云つたが、なか〳〵星亨などの要求も一通りでは無つた。それが頗る山縣公には煩さかつたに相違はあるまい。されば山縣內閣が文官任用令を改正し、從來一切勅任官は隨意任用であつたのが、悉く文官登庸試驗に依つて支配せらるゝこととなつた。これは自由黨にとつては、全くの不意打ちであつて、これほどの思切つたことを爲すには、自由黨との提携を絕つだけの覺悟や、決心が無くては、出來るものでは無つた。予が兵法を政治に應用したのではあるまい乎

松方正義公と蘇峰翁（明治三十二年於松方邸）





（上）明治三十三年『國民新聞』號外發行の件に付、伊藤公に送りたる蘇峰翁の書簡

（下）同じく伊藤公の返簡

と云ふたのは、斯ることを指したのだ。

それには又た更に公をして辭職を決心せしめたる、他の大いなる理由と云ふ能はずんば、事情があつた。それは伊藤公である。伊藤公と山縣公とは、孰れも吉田松陰の門下であり、孰れも長州の出身であり、孰れも維新以來共に艱苦を嘗め來つた人ではあるが、伊藤公は木戸侯の門下として出身し、軈て大久保侯に知られ、何處までも文官出身であるが。山縣公は少壯にして、高杉東行等と共に奇兵隊を組織し、その隊長となり、日本帝國の陸軍に於ては、薩摩の大西郷と相結び、次には弟西郷、大山等と提携し、自らその經路は異つてゐる。

山縣公が單に陸軍のみに立籠つてゐる間は、左程では無つたであらうが、政治に頭を出す樣になつては、自然伊藤公と接觸の機會が多くなつた。謂はゞ山縣公の畑には、伊藤公は餘り踏込まなかつたが、伊藤公の畑には、何時とはなしに山縣公が踏込んで來た。伊藤公もそれには聊か安からぬ感があつたであらう。伊藤公は井上侯とは時折り喧嘩もし、爭ひもしたが、これは徹頭徹尾親友であり、又た井上侯は、言葉通りの伊藤公の益友であつた。

大隈侯とは大久保甲東全盛時代には、左右の翼となり、しかも大隈が兄貴株で、伊藤が弟分であつたが、甲東歿後遂に明治十四年の政變を起したのは、謂はゞ大隈、伊藤兩雄不併立の結果と見るも、

差支へあるまい。併し兩人の關係は所謂碁の相手の如く、世に云ふ碁敵きで、勝敗を爭ふ時には、憎さも憎いと思ふが、扨て居なくなつて見れば、何となく淋しき感がせぬでもなかつた。但だ伊藤公は山縣公とは親しき仲ではあつたが、何處やら互に相許さぬ處もあつたらしく、尠く共明治二十三年から四十二年伊藤公のハルビンにて斃るゝ迄は、兩人の間には、常に紛紜が絶えなかつた。

而して極めて最近のことを云へば、第三次伊藤內閣の當時、伊藤公はその內務大臣たる井上侯と相諮つて、到底他力では思ふ樣の政治が出來ない。就いては自ら政黨を組織する外は無いと決心したが、その時に橫槍を入れたのが山縣公であつた。その橫槍は、自ら內閣に立つて政黨を組織するといふことの不可であるばかりで無く、恐らくは伊藤、井上兩公が相率いて政黨を組織すると云ふことにも、餘り贊成はしなかつたであらう。兎に角伊藤公の水の出鼻を、山縣公に依つて毀はされたといふ感はあつたに相違無い。

そこでその報復と云ふではあるまいが、從來內閣の更迭の例に反し、當時新に出來上つたる憲政黨、卽ち自由黨と改進黨との聯合黨に向つて、政權を渡すべく、板垣、大隈二人を推薦した。これには伊藤公をして語らしむれば、必らず歴然たる理窟もあつたらうが、山縣公の方から見れば、怪しからぬことをしたものと考へたかも知れない。

然るに隈板内閣は、未だ半年經たない中に瓦解することゝなつた。順序から云へば、當時伊藤公は支那旅行中であつたから、その歸るを待つ可きであつた。然るに伊藤公が召還の電報を受取り、未だ上海を發せざるに、山縣内閣の組織は出來上り、明治三十一年十一月八日、伊藤公が馬關到著同一日時に、東京に於ては、山縣内閣の親任式が行はれた。

當時山縣公の命を受けて、都筑馨六男が申譯の爲に、伊藤公を途中迄迎へたが、果して伊藤公がこれを諒としたるや否や、それはわからない。兎に角正直の所、鬼の居ぬ間の洗濯で、伊藤の歸へらない中に、一切を料理して終へといふ風に、第三者の眼には映じた。

併し伊藤公もさる者、第十三議會には、政府を援けて地租增徴案の通過に勗め、十四議會には、自ら選擧法改正の主張者となり、又たその通過に盡瘁した。併しその胸中は、一點釋然たらざるものゝあつたには、相違あるまいと思はるゝ。

特に山縣内閣の外務大臣青木周藏子は、伊藤公とそりが合はず、伊藤公は殆ど事毎に青木の施設には不滿であつた。その爲に外交上の事などには、隨分伊藤公から突込まれたこともあつた。且つ山縣内閣の新進山本權兵衛伯の如きも、何れかと云へば、伊藤公と結んでゐて、必らずしも伊藤公の勢力を利用したと云ふではあるまいが、多少その傾きが無いことも無つたであらう。

何れにしても山縣内閣にとつては、第一は憲政黨、第二は伊藤公、此等が尠からざる面倒を與へたに相違あるまい。それが山縣公をして、辭職を決心せしめたる、總ての動機ではあるまいが、主なる動機の中に數ゆることが出來るであらう。

五　桂公の擡頭及び伊藤公と政黨組織の內意

山縣公は何時も七分の勝利を占め、十分は固より十二分といふ如きことを、望まない。當時から旣に山縣公は陸軍大臣桂公を、恐らくはその後繼者に推してゐたものであらう。桂公は元來系統から云へば、木戶侯の門下生であつて、必らずしも山縣畑の者では無かつた。併し彼が獨逸から歸朝の後は、陸軍の畑は殆ど全く山縣公の手に歸したれば、遂に桂公も其處から追々額を出すことゝなつた。併し桂公は決して、山縣專門ではなかつた。軍人としては勿論山縣の大傘下に立つてゐたが、政治家としては、伊藤公とも頗る親近であつた。謂はゞ彼は水陸兩棲の動物であつた。骨は山縣であれば、肉は伊藤といふ處であつた。

彼は第二次松方內閣組織の際、山縣公の斡旋にて臺灣總督から、陸軍大臣に推薦せられ、最早や首相

の松方公もその積りで、愈々實行といふ段になつて、拓殖大臣であつた高島將軍が、陸軍大臣は自分の外、他に無いと頑張り、その爲に桂公は全く先輩に裏切られたる姿となり、それで陸軍大臣の椅子は他人に取られ、己は臺灣總督の椅子を放擲ち、爾來報復の期を待つてゐたが、松方内閣の成立するや、桂公は鵜の目、鷹の目もてその顚覆を圖り、志成るや彼は此に始めて第三次伊藤内閣の陸軍大臣となつた。

斯くて大隈、板垣の時も依然陸軍大臣であつた。而して内からその内閣を壞し、愈々第二次山縣内閣成立の際には、專らそれに奔走した。恐らくは伊藤公の東京に到著以前に、内閣を組織してしまへと云ふのは、彼の畫策であつたらうと思ふ。固より山縣公も初からその積りであつたとは申せ。

斯る次第で桂公は、爾來寧ろ政治上には山縣により近くなつて、伊藤公との間には、何やら一膜の——然もその一膜は極めて薄き一膜であつたが——隔てがあつた樣に思はれた。

山縣公が桂公をその後繼者に推すといふことが、關係に嗅ぎ出さるゝや、新進の山本海軍大臣の如きは、最もこれを不可としたらしくある。山本海相は此の問題を引つ提げて、伊藤公に相談した乎、否乎は知らぬが、伊藤公も餘りこれには贊成しなかつた樣だ。その中に前にも述べたる通り、義和團の事件が起つたから、先づこの事は中止となつた。

話は轉ずるが、伊藤公はこの第三次伊藤內閣の時に、板垣、大隈兩黨に苦しめられ、議會政治は政黨無くしては、圓滿に行けるものではないといふことを體驗し、愈ゝ公が平昔主張したる超然內閣の說を、若し放棄といふことが出來なければ、尠く共變更することゝなつた。而して爾來大いに食指動きつゝあつたのだ。

扨て自由黨の方は、一時山縣內閣と肝膽相照してゐたが、何時からともなく疎遠となり、互に垣を結ふことになつたから、今は何處にか賴るところを求めねばならぬ。最初は板垣伯の統一の下にあつたが、板垣伯ではとても彼等の望を滿足せしむることが出來ないから、寧ろ此際首の繼代へをなし、伊藤公を以てこれに代へんと企て、遂に自由黨の幹部連中が、大磯滄浪閣に伊藤公を訪ひ、何んか自由黨を指導して貰ひ度いといふ相談を持懸けて來た。

併し其處は流石に伊藤公である。自分が自由黨の婿養子となることとは、公が屑しとせぬところであつて、公は『諸君の志は寔に有難いが、自分には自分の見込みもある。愈ゝ政黨の必要を認むる時には、自分自ら進んで新に政黨を組織するから、其際は諸君も加入されたらば宜からう。併しきつとさうするかせぬかは、只今は猶ほ考慮中である』と答へた。

六　伊藤、井上兩公の九州下向と予

◇古谷久綱のこと

斯る次第であつたから、伊藤公の食指は大いに動いた。公は天下の大政黨たる自由黨が、全黨を擧げて乃公を首領に戴くと申出して來る程であるならば、公にして一度政黨を造るに於ては、檄を飛して天下を定むることが出來るであらうと考へたに相違はあるまい。そこで公は諸方を旅行して、世の中の脈を執つてをられた樣だ。而して明治三十三年の四月頃、伊藤公は井上侯と相携へて、九州下向といふことになつた。予も伊藤公及び井上侯とは、年來の交情があつたから、熊本縣に赴かれるといふのに、知らぬ振りをしてゐるわけにも行かず、その金棒引きとなつて、久振りに熊本に下つた。言葉通りに寔に久振りであつた。それは明治二十五年二月選擧干渉以來であつたから。卽ち足掛け十一年目の歸縣であつた。

伊藤公は當時熊本で絕對多數を持つてゐた、佐々友房の國權黨にも著眼し、佐々などはその藥籠中のものと假定してをられた樣であつたが、當時佐々氏は故らに避けたのか、不在であつたのか、その

代りとして、安達謙藏氏が、如何にも肥後男兒染みたる風采を以つて、途中の汽車迄出迎へに來りたることを、予も亦たその車中にゐたから、よく覺えてゐる。

當時熊本の公會堂にて、伊藤、井上兩公の演説があり、伊藤公は元田先生及び井上梧陰子のことに就き、自ら負ふ所少くなかつたといふ意味を語られた。井上侯は又たその演説の後に、『此處に居らるゝ德富君は、從來過激の議論を唱へてゐられたが、近來は餘程穩健著實となられた樣であるから、諸君もこれから德富君の意見を聽いたら宜からう。』抔といふことで、予も餘儀無く、その後で一言せねばならぬ始末に立至り、少からず當惑したことを覺えてゐる。

予と伊藤公との關係に就いて、此に一の挿話がある。

當時伊藤公は帝室制度取調局總裁といふ名目にて、靈南坂米國公使館の上に、その官邸があつた。その官邸は、明治十三年頃初めて予が井上侯を訪問したる家であつた。伊藤公は大磯と靈南坂とを往復してをられたが、或日予が伊藤公と對談してゐる中に、山縣内閣の外務大臣、青木子爵が訪問した。子爵と伊藤公とは、互に相容れなかつたが、然も伊藤公は、その位置が如何なる場合にあるにせよ、明治天皇の至高顧問であつたから、事苟も外交に關する事は、伊藤公に渡りをつけなければ、殆ど動かなかつた。その爲に青木子爵も心外ながら訪問したわけであらう。

さて其際伊藤公は、秘書が欲しいといふやうな話をせられた。そこで予は元と『國民新聞』記者として、二十七八年役に從軍し、予等が洋行の留守中には、深井君の後を受けて "Far East" の編輯に關係し、爾後白耳義に留學し、業卒へて此頃歸り、恰も職を求むる最中であつた古谷久綱を適任と思ひ、豫ねて予はその考もあり、古谷のことを詳しく說明した。伊藤公は固よりそれ迄古谷の名も知らず、況んや見たこともなかつたのだ。

そこで予は彼是推薦の言葉を述べたところが、伊藤公も膝を乘出し『それは宜からう。兎も角も一度逢ふて見度い』といふことであつたから『それならば只今より歸へりて、連れ參る可し』とて、當時は自動車も無いから、人力車にて馳せ歸り、古谷を同道して、官邸の階段を上る時に、青木子爵は上から下り、予等を眺めつゝ『德富君御意の變らぬ中に、連れて來たのであらう』と、ひやかし半分に云ひつゝ去つたが、案の如く一見して、古谷は採用せられた。

その以來彼は殆ど伊藤公の周圍を離れず、外國にも、內地の旅行にも、又た朝鮮統監の際にも、而してハルビンにて安重根の彈丸にて、公が斃れらるゝ迄、その傍らにあつた。

斯る關係があつたから、予は愈ゝ伊藤公とは、切つても切れぬ情實が出來、その爲に政友會の組織には、甚だ微力ではあつたが、若干の奉公をせねばならぬことゝなつて來た。

七　伊藤公の新政黨組織と大命降下

◇第四次伊藤内閣と閣内不統一

何事でも理想通りには實行されない。正直のところ伊藤公でさへも、自己の力を過信せられた樣だ。伊藤公の考では、苟も心から憲法の完美を欲する者は、皆な相率いて公の傘下に集るであらうと思はれたであらうが、事實は全くそれを裏切つた。公が無二の味方と思ふてゐた、澁澤、大倉等の實業家さへも、躊躇した。又た子飼ひの時から引立てた子分の隨一たる、伊東巳代治伯の如きさへも、愈よといふ間際では、御免を蒙つた。恐らくは伊藤公も此に至つて、人間と云ふ者は、頼もしくもあり、又た頼もしくもないといふ感を起したであらう。

併し兎に角集まることはよく集まつた。第一は自由黨、即ち星、松田等の幹部から、一切を擧げてのもの。第二は國民協會の殘黨とも云ふべき、大岡、元田其他のもの。第三は進歩黨、若しくは改進黨の方から來るもの。その重なるものは、尾崎行雄氏であつた。次には舊官僚の者にて、即ち金子堅太郎伯、都筑馨六男などであつた。末松謙澄子は、既に前から自由黨に投じてゐたから、改めて云ふ必

要は無い。而して原敬氏の如きも、大阪毎日新聞社長を罷めて、政友會の幹事長たるべくやつて來た。併し官僚派で第一の大物は、大藏大臣や遞信大臣を勤めた、渡邊國武子であつた。彼は自ら副總裁の積りで、何處までも伊藤公の大番頭として、その位置を占めてゐた。井上侯は加入はしなかつたが、陰になり、陽になり、頗る盡力をした。

扨て此の組織に付いて、伊藤公と當時の首相である山縣公との間には、諒解がついてゐたであらうが、併し何となく互に水臭きところがあつた。伊藤公はまさか山縣公が水をさしたとは思はなかつたであらうが、來るべくして來らざる者の中には、山縣に氣兼ねしてゐる爲であるといふこと丈は、思はずにはゐられなかつたであらう。

又た當時伊藤公が帝室制度調査局の總裁でありつゝ、その官邸で新政黨を組織するは、穩かならぬといふ論もあつて、これが爲に伊藤公は總裁を罷め、又た官邸を引拂つたが、これ等に就いても、まさか山縣公の指金であるとは、思はなかつたにせよ、尠くとも山縣の側から、斯る意見が出たのではあるまい乎といふ疑惑は、當然起るべきものであつたらう。

併しそは兎も角も、政友會が漸く結黨式をするや否や、山縣公は直に骸骨を乞ふて、その後任者に伊藤公を推薦した。

これに就いては伊藤公も、尠からざる不快を感じたやうだ。併しそれは伊藤公が、大隈、板垣の提携によつて、憲政黨が出で來るや否や、直に內閣をそれに引渡したと同樣にて、謂はゞ公が大隈、板垣に試みたるものを以つて、山縣公が逆しまにこれを公に試みたるものにて、公にとつては左程不平を云ふべきことも無つたであらうが、併し伊藤公としては、漸く家を建てゝ、新築祝はしたものゝ、疊、建具さへも未だ出來揃はぬのに、直に宿屋を開業すると一般、政黨の看板を揭ぐるや否や、その儘內閣を組織せねばならぬとは、『山縣も餘りに惡辣なる遣り方である』と、考へたであらう。

その爲でもあるまいが、これが爲に所謂る元老間の會議は、頗る長引いた。その相手は無論、山縣、伊藤の兩橫綱であるが、何事も腹に收めない伊藤公であれば、可成り激烈にその意見も吐いたであらう。

併し何といつても山縣公は、やらぬといふから、その後を引受くる者は、伊藤公であらねばならぬ。

然るに伊藤公の政黨が、漸く看板を揭げ、內閣組織に取掛らんとするに際して、意外なる破綻を暴露して來た。それは自ら副總裁を以て任じたる渡邊子が、伊藤公に向つて絕交を申込み、それを天下に宣言したることであつた。これには種々の理由もあらうが、要するに、渡邊子が自ら思ふ程、伊藤公は渡邊子を重んじなかつたことが、原因でもあり、理由でもあつたであらう。ところがそれが漸く

他の人々に依つて鎭撫せられ、名義だけに渡邊子も、正しく元の巣に還つたが、併しこれは伊藤内閣の威信を傷くるばかりで無く、伊藤公その人の威信にも、多大の影響を與へたであらう。

而して如何に渡邊子だけは元の巣に還つても、仲間がこれを驩迎する筈は無く、これが爲に伊藤内閣は、組織の當座、已に内訌の兆を孕んでゐた。

問題は内閣よりも、寧ろ内閣に對する予の態度である。予は第二次山縣内閣に最も好意を表した。それはこれに依つて、將來對露問題を解決するの端緖を得んと欲したからである。第四次伊藤内閣は、所謂る政友會内閣であつて、その政友會の創立には、予も聊かながら貢献してゐたから、その内閣が出來たとて、それに反對すべき理由は無かつた。然も伊藤公は固より海陸軍の充實といふことには、公自身は大なる平和論者でありつゝも、固よりその必要を認めてゐたからである。

併し同時に予は官を去りたる、山縣、松方の兩公とも懇親であつた。謂はゞ予の位置は伊藤派でも無く、山縣派でも無く、予一個としては、唯だ遼東還附の恥辱を雪ぐべく、たゞその機會の來らんことを力むる、一個の愛國狂者であつたといふの外はあるまい。

但が予は甚だ面白く思はなかつたのは、渡邊國武子の態度であつた。伊藤公の大番頭として、自分では副總裁を氣取りつゝ、内閣組織の間際に、絶交を申込み、その騷ぎの最中に、心氣一轉といふ言

葉にて、又た元の鞘に戻り、兎に角その爲に大藏大臣の椅子を贏得たのである。

予は內閣組織の時に『國民新聞』が號外を早く出したといふことで、書記官長鮫島武之助君との間に葛藤を生じ、その事に就いて、伊藤公に訴へたら、伊藤公は流石に『號外を早く出すのは、新聞社の手際であつて、傍から彼是苦情を云ふべきものでない』とのことに落著し、大いに予を慰撫せられたこともある。

また總理大臣官邸にて、政府の要人と、民間の有志者との會合の席上、或人が渡邊國武子に向つて、種々の質問をなし、當時外務大臣として、列席したる加藤高明君の如きも、殆ど渡邊對論客の議論が、餘りに突きつめたる爲、殆ど顏を脇にそむけてゐた樣なことがあつたことを、今猶ほ記憶してゐる。先づ云ふてみれば、予の伊藤內閣に對する態度は、英語で云ふキャンデッド・フレンドとでも申すべき外はあるまい。

併し此の內閣には、種々の反對があつた。その一は星亨氏を遞信大臣としたが、問題はそれから湧いて來た。當時星氏は疑問の人であつた。收賄とか瀆職とか云ふ、法律上の證據があつた乎、否乎は知らぬが、兎に角嫌疑は彼の身に深く、重く懸つてゐた。

それが原因であつた乎、否な寧ろそれを口實にしたのではなかつた乎——何れにしても、貴族院の

各團體は、鋒先を揃へてこれに突きかゝつて來た。その爲に伊藤公も餘儀なくせられて、星は罷め、原敬君が代つて來た。

扨て議會となつたならば、貴族院の多數黨たる、研究會が反對をした。其時の研究會の首領株は、清浦伯等であつた。當時山縣公も松方公も上方に在つて、遠方からそれを見物してゐた。遂にたまりかねて西鄕侯は、自ら上方まで出掛けて、この兩元老と相談をした。

斯くて兩元老も愈ゝ歸京することゝなつた。その時に予は伊藤公から、兎も角も途中迄迎へて、その委曲を竭さんことを依賴せられた。それで國府津に赴き、一泊して、翌朝汽車の來著を待受けてゐた時に、豈に計らんや、安廣伴一郎氏もまた來てゐた。云ふ迄もなく安廣氏は、平田伯等、即ち貴族院に於ける、反對黨の立場を辯明すべく來たものである。予等兩人は相ひ顧りみて苦笑し、到著するや否や兩元老に面會し、予は予が云ふべきことを云つたが、安廣君が何を云つた乎、それは予が知る處でない。

兎に角伊藤公は七重の膝を八重に折り、それにても目的を達しかね、遂に當時の貴族院議長近衛公は、大命に應じて拜謁を仰せ付けられ、勅語の下降に依つて、漸くその目的を達することが出來た。目的は達したが、これに依つて伊藤公の威信の傷けられことも、又た決して少くなかつた。

八　伊藤內閣の瓦解と桂內閣成立迄の曲折

初から難産であつた第四次伊藤內閣は、如何にも短命であつた。それは兎に角、三十三年の末から、三十四年の初に亙りたる第十四議會は、兎も角も通過したが、扨て翌年度の豫算編成會議に於て、早くも內閣中に異論を生じ、伊藤公は五月二日闕下に伏して、內閣不統一の爲に、辭表を捧げ、瞥然として大磯に去つた。自餘の閣僚も渡邊藏相を除くの外、皆な辭表を呈出した。而して其後は當時の樞密院議長であつた、西園寺公が、臨時首相として、當座の空位を充してゐた。

渡邊藏相は『自分は伊藤公に依つて藏相となつたのでは無く、至尊の御信任に依つてなつたものであるから、伊藤公と進退を共にすべき理由は無い』といふ理窟の下に頑張つた。

後任には順序として、井上侯が然るべしとの事にて、五月十六日には宮中に召されて、大命を拜した。そこで井上侯は、これを千載の一事として桂公に諮り、桂公を內閣の總支配人として持掛け、若しそれでも桂公が承知せぬならば、自分は桂首相の許に、井上藏相としても差支なしとまで云つた相だが、桂公はこれを辭するのみならず、併せて井上內閣を組織するの不利なる所以を勸說した。又

た井上侯は豫ての親友なる澁澤子に、此際は藏相として、一肩ぬぎ吳れよと、諮つたが、澁澤子も亦たこれを辭したといふことで、五月二十三日には、到底組織が出來ぬことを、西園寺臨時首相に依つて、天聽に達することゝなつた。そこで椅子は桂公に轉げて來た。

元來山縣公が、其の衣鉢を桂公に相續せしむべしとは、三十三年の晩春初夏の頃に、殆ど具體化せんとした處であつたが、種々の事情の爲に立消えとなり、爾來政友會の組織が伊藤公に依つて行はれ、遂に伊藤公が內閣を組織することゝなつたのである。

併し旣に首相の椅子を匂はせられたる桂公は、その匂のみに滿足する筈は無く、竊かにその時機の到來を待つてゐたに、相違なからう。敢へてその爲でもあるまいが、第四次伊藤內閣の出來たる時には、桂公は遂に病と稱して陸相を罷めた。

元來桂公は容易に陸相を罷める樣な人では無つた。第三次伊藤內閣が更迭して、隈板內閣となるや、何人も桂公は辭職するであらうと考へてゐた。然るに公は却つて思止つた。然るに第四次伊藤內閣の時に、留任するであらうと期待せられたる公が、强ひて辭職したのは、病氣も或は事實であつたかも知れぬが、その以外に多少の理由が存したることではあるまい乎。

若しその理由としたらば、桂公は正に來らんとする、首相の椅子を待つてゐたではあるまい乎。何

れにしても、種々の紛紜があつたが、五月二十五日、山縣、松方、西郷、井上の會議で、桂公推薦に決し、山縣、松方兩元老は即日これを上奏し、翌二十六日、桂公は宮中に召され、大命を拜した。而してその翌日大磯に赴き、伊藤公を訪問し、更に二十八日參內して、伊藤公の起たざるべからざるを上奏した。伊藤公は二十九日朝命を畏み、大磯より歸京し、三十日を以つて參內し、同日內閣組織の大命は、重ねて桂公に向つて下つた。而して桂公は六月一日に自ら參內して、大命に應ずる準備の成就したることを上奏し、翌二日に愈々親任式の擧行を見た。即ち伊藤公の辭職は五月二日、桂內閣の成立は六月一日、全一ケ月首相の椅子を持越つたわけである。

斯く物事の迅速に結著しなかつたのには、その間に種々の魂膽、策略、芝居等が挾つてゐたのであらう。若し伊藤公の胸中を打割つて云つたならば、臨時總理大臣である、西園寺公を、其儘首相に据置くことが、最も公の意に適したることであつたらう。併しそれは又た最も山縣公の欲せざる所であつて、山縣公は兎も角も桂公を推したかつたものであらう。謂はゞ西園寺公は隱然たる伊藤公の候補者であり、桂公は公然たる山縣公の候補者であつたが、何事も思慮周密で用心深き山縣公は、已れ一人の推薦では覺束ないと考へ、伊藤公を除きたる四人の元老會議に懸け、次には伊藤公をも、桂公が頻りに再起說を以つて公に迫つたから、伊藤公も今は自ら出でゝこれを辭し、辭するに就いては桂公を

推薦し、又た推薦することを餘儀無くされたのであらう。

されば此の政變には、伊藤公としては、表向きは兎も角、內心に於ては、餘り愉快では無つたらうと思はるゝ。

予はこの芝居を、餘り遠くも無く、餘り近くも無く、恰度都合のよき處から、面白く見物してゐた。それは何れの內閣となつても、予の目的たる、遼東還附の屈辱を伸す方向に向ふ處の內閣であることは、間違ひ無いと思ふてゐたからであつた。

九　桂內閣の殊勳たる日英同盟締結

◇桂公と予

桂內閣成立は極めて不人氣であつた。茶屋の女將さんまでが、これを緞帳芝居と云つた程だ。元來總理大臣の株は是迄、伊藤、山縣、松方、大隈等といふ大頭、卽ち元老といふべき人々の特有とせられてゐたのが、突然第二流の政治家として知られたる桂公が、首相となつたから、斯く相場をつけられたのも致方は無い。

予は前にも記したる通り、桂公とは二十七八年戰役中、蓋平にて相見、爾來隈板內閣の時から、屢屢往來し、特に第二次山縣內閣の際には、その成立の時から、桂公とは多少の交渉を持つてゐたから、滿更ら知らぬ間柄では無つた。

併し予は桂公が極めて老猾な政治家であるといふことを知つてゐたから、而してその二枚目の役者としては、技倆拔群であることを認めたが、彼を首相の器であるや否やといふことは、予自らも亦た何とも判斷がつかなかつたから、謂はゞ予の方からは、桂首相とは成可く接近しない態度を持してゐた。

然るに桂公は如何なる考であつた乎、予の最も親しくする先輩松方公を通じて、頻りに予との會見を求めた。松方公も是非會見したらば宜からうと慫慂せられたから、桂公の三田邸に於て、一夜懇談したが、話して見れば何れも予等の意見は一致してゐたから、予も先づ桂公の內閣を援助せんとする決心も出來たが、併しそれは外からの援助で——即ち第三者の援助で、中まで飛込んで同心一體となつての援助ではなかつた。而して自分では成可く桂公自身と、直接に談判せず、松方公を通じて互に話すことゝした。それは深き考があつたのでは無いが、それが予にとつては、安全の策と思ふてゐたからだ。

併しながら時と共に段々予と桂公との關係は接近して來た。而して松方公も、必らずしも常に東京にゐるといふことで無つたから、如何に松方公を通じて談判せんとするも、已を得ざる場合には、直接に種々のことを語らねばならぬことゝなり、從つて愈々接近を加へた。

扨て政友會は俄然桂内閣に喰つて掛つた。これは政策といふよりも、寧ろ感情問題が勝つてゐた。而して伊藤公は恰も外國に赴いて留守中であつた。

伊藤公は第三次伊藤内閣の辭職後は、朝鮮、支那方面に遊んだ。今や第四次伊藤内閣の辭職後は、又た米國を經由して、歐洲に赴いた。而して政友會と桂内閣との衝突は、その留守中のことであつた。誰しも桂内閣は三日内閣であると思ふた。然るに明治三十四年六月に成立したる桂内閣は、困難ではあつたが、兎も角も第十六議會を切拔けた。これを切拔けるに就いては、隨分骨が折れたが、兎も角も相互の妥協に依つて、豫算案丈は成立することゝなつた。

併し今此に桂内閣に取つて、大なる仕合せは、日英同盟の締結であつた。この經緯に就いては、今此に詳しく語る必要は無いが、兎も角も第十六議會の半ばに於て、日英同盟は成立した。

即ち明治三十五年一月三十日、倫敦に於て調印し、二月十二日、桂首相はこれを貴族院に、小村外相はこれを衆議院に披露した。事の此に至りたるに就いては、必らずしも桂、小村兩君の力のみ

とは云ふべきであるまい。

併しこれが出來上つたことは、實に桂内閣に取つては、無上の勢力と信用とを加へ來つた。

元來予は日英同盟論者であり、現に予は明治二十九年から三十年にかけて、英國に滯在中『デーリー・ニュース』記者に向つて、これを語り、予の意見として、當時同紙に掲載せられた程であつた。當時予は云ふた。

『即今世界に於て孤立の狀態にあるものは、英國と日本だ。この兩國が同盟すべき時機は、只だ今日である』と。

然るにそれが足掛け五年を經て、漸く實行せらるゝに至つたことは、予にとつては如何なる歡喜であつたらう。

予は英國の崇拜者でも無ければ、英國の盲信者でもない。併しながら露國と對抗するに就いては、英國と結ぶの外、他に手段方法の無いことは、少しく世界の現狀に通ずる者は、誰でも首肯するところであつた。

當時日本には日露協商論者もあり、伊藤公の如きも亦た恐らくはその一人であつたが、これは云ふべくして行ふべからず。縱令協商と云ふても、實は日本が露西亞に叩頭するの外は無い。又た協商し

ても、それが繼續すべきものでは無い。今日に於ては彼と結ぶにしても第一は彼をして、反省せしめねばならぬ。反省せしむるには、彼を懲らすの外に手段は無い。されば予は日英同盟を一の潮合ひとして、身も魂も殆ど桂內閣と云はんよりも、桂首相と一致し、愈よその目的を遂行すべく決心した。

此くの如くにして、予と桂首相との關係は、好緣か惡緣か、遂に桂公の死する迄繼續した。

梅花信　（明治三十一年　三十六歲）

茅舍南三籬野烟。蘇山雪色映春天。
故園誰報梅花信。辜負清香十二年。

青山卜居　（明治三十二年　三十七歲）

繞屋綠陰清晝閑。紅塵咫尺有仙寰。
儂家光景儂能說。老樹當門高似山。

佐久道中

唐松葉燭傲霜風。千曲川原一望中。
回首淺間山色好。孤煙直上入秋空。

國民新聞三千號　（明治三十三年　三十八歲）

筆陣縱橫過十年。局將心事敢前賢。
可憐辛苦三千紙。經國文章亦索然。

有馬

一道奔湍奔白蛇。　人家半在水之涯。
薫風陣陣渡溪至。　開遍松間躑躅花。

望岳亭 (明治三十四年　三十九歲)

綠樹禽聲午夢殘。　烟波萬頃與人寬。
蓮峰半在白雲上。　獨坐林亭靜處看。

孤帆 九十九里沖

孤帆若葉沒濤頭。　眇眇斯身似海鷗。
無限清光流不盡。　太平洋上月明秋。

漁竿

且浮湘海把漁竿。　身世悠悠獨自寬。
秋水夕陽千萬頃。　芙蓉倒景眼中看。

芳野 (明治三十五年　四十歲)

新泥滑滑落紅斑。　咫尺帝陵春樹間。
一路濕鶯啼不住。　筍輿衝雨度芳山。

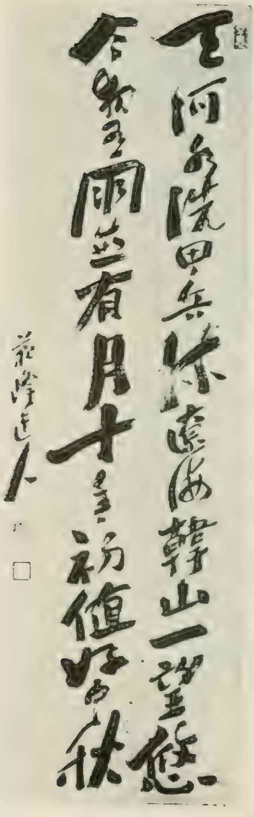
靜浦

雨歇薫風滿靜灣。　四圍山色淡濃間。
海鷗猜識漁期近。　飛去飛來不暫閑。

向上 (明治三十六年　四十一歲)

天花簇簇眼中紅。　向上前程一綫通。
遮莫人間脚力盡。　斯生秖合趁無窮。

明治三十八年九月五日『國民新聞社』第一回燒打當時の蘇峰翁



燒打當時國民新聞社籠城中、中秋明月に對する翁の詠懐

支那漫遊中、天下第一關に於ける蘇峰翁

第十三章　日露戰役時代と予

一　桂內閣の改造と待望の對露宣戰發布

桂內閣は尙ほ政友會に於て、隱然と云ふよりも、寧ろ公然たる一敵國を持つてゐた。政友會は初から、桂公が政友會の內閣を橫取りしたものと思ふた。その總裁伊藤公も、桂內閣の出來は、本意では無つた。又た桂內閣に依つて出來たる日英同盟も、反對では無つたが、その素志は寧ろ、日露同盟にあつたことは、爭はれ無い。

從つて第十六議會は、兎や角濟んだが、第十七議會は、遂に十二月九日に、開會式を擧行せられて、その二十八日には、解散の運命を見るに至つた。而して此際は從來政友會をして、不本意ながら桂內閣と妥協せしむべく、骨折りたる伊藤公が、大隈侯と提携して、桂內閣に當るといふ段取りとなつて來た。

即ち桂内閣は人から云へば、伊藤黨、大隈黨。政黨から云へば政友會に憲政會、皆なその反對となつた。

桂内閣の産婆役でもあり、且つ後見役でもある山縣公は、非常にこれを懸念し、此に於て三十六年の春は、桂公と伊藤公との間を調停し、兎も角も臨時議會だけは、切抜くる手段が出來て來た。

併し濟まぬは桂公の腹の中であつた。公は臨時議會だけは　即ち十八議會だけは――濟ましたが、何れにしても一方に於ては、伊藤公が政黨の首領として臨み、他方に於ては國家の元老として臨み、恰も一身にして兩様の資格を兼ねたる様であつて、とても此人を相手としては、前途六ケ敷と考へ、桂公は伊藤公に向つて辭意を漏し、併せて伊藤公が内閣を組織したならば、自分は一個の國務大臣として、その下に働くべく申込んだ。

併しそこは政治に老練なる伊藤公であつて、それでは首相の椅子を桂公より貰受けた姿となり、所謂る有名無實の首相となることを看破し、忽ちこれを斥けた。此に於て桂公は病と稱して葉山に退き、骸骨を乞ふたが、元老は何れも心配し、種々の經緯の後に、伊藤公は勅命を奉じて七月十三日に、樞密院議長に任じ、政友會の總裁には、西園寺公が推さるゝこととゝなつた。

併し伊藤公も樞密院に祭り込まれては面白くも無いから、山縣、松方の二元老も同時に、樞密顧問

官となつた。但だ井上侯だけは實業上種々の關係があつて、それに至らなかつたが、然も元老總幕出揃にて、兎も角桂內閣を助くるといふことになつた。

斯くなるに就いては、露國との關係が愈々切迫を加へ來つた爲であることは、言を俟たない。斯くてその十七日には、桂內閣の改造があり、桂公も愈々日露戰爭、若くは日露協商を目途として、再び腹帶を締め直すことゝなつた。

斯くて內閣改造以來、內閣に入つて、その主要の位地を占めたる兒玉源太郎伯は、十月に至つて突然參謀本部次長となつた。これは當時の次長田村怡與造氏が死んだ爲であつて、その補缺であつた。是迄臺灣總督やら、內務大臣をしてゐた兒玉伯が、急に參謀本部次長となるなどとは、成上りで無く、成下りであるが、事此に至つたのは、如何に露國との關係が切迫であつたかゞ判るのである。

長き話は姑らく措き、兎も角も明治三十六年の下半期は、日本に於て殆ど前後未曾有の緊張じたる時代であつた。而してその翌年明治三十七年二月十日には、愈々宣戰の詔勅が下つた。勿論露國と烽火を交へたのは、その數日前であつた。

予は此間に於けることに就いて、今多く語ることの出來ぬのを、遺憾とする。何となれば、事皆な機密に屬して、口外すべき限りのもので無いからだ。

併し予が世間から變節漢と云はれ、平民主義の裏切り者と云はれ、利益の爲に從來の政友を捨てたるものと云はれ、甚だしきは政治的賣徳漢と云はれ、凡有る字引にない新熟字までも製造して、予を罵つた者もあり、中にはその世間の悪口非難の爲に惑はされて、從來予に親しき者さへも疎遠となり、謂はゞ予の崇拜者と云はるゝ者からまでも、半ばは見限らるゝに至つたに拘はらず、明治二十八年の春以來、如何なる艱難辛苦をも凌いで、是非共遼東還附の屈辱を雪ぐべしと決心したる予が、今此に開戰の詔勅を捧讀するに至つたのは、予に取つては如何に快心のことであつた乎。

他人の非難のみならず、予に於ても見來れば、松方内閣、第三次伊藤内閣、第二次山縣内閣、第四次伊藤内閣、桂内閣と、その間に尠くとも、濃淡遠近の差はあつたが、常に接觸を保つてをり、その間には必らずしも快心のことばかりでは無く、官僚臭氣紛々たる連中と伍して、歩趨を一にする場合には、可成り不愉快のこともあり、又た癪にさわつたこともあつた。

然も一切のことはこの詔勅を捧讀して、恰も雲霧を排して、青天を見るが如き心地して、此上は死んでも悔ゆる無しといふ程の、痛快味を感ずるに至つた。

二　戰時中の言論統一と予

三十七八年戰役中に於ける、予の行動は、今詳しく語るわけには行かぬが、兎も角も予の最も必要と信じたるは、第一、内に於ては、擧國一致の精神を鼓吹して、當局の後援をなし、併せて當局を鞭撻し、其の目的を達せしむること。第二は第三者をして、吾國に對し、充分なる理解と、同情を傾けしむること。而して第一の爲には、全國の新聞、雜誌に對して、その政策宜しきを得ること。第二には外國の新聞雜誌記者、及び新聞雜誌に對する政策の宜しきを得ること。即ちこの兩者に就いて、予は及ばずながら微力を效した。

桂公は此の兩目的に就いては、予と徹頭徹尾意見を同うして、其爲に予の意見も公に遺憾無き迄に、採用せられたことは、今尙ほ予が愉快とする處である。特に外人關係に於ては、予は外國の新聞記者中、特に有力なる者を紹介して、桂公と直接の交渉を得せしむることをした。その一例を擧ぐれば、米國雜誌『アウト・ルック』から特派せられたるジョージ・ケナン翁の如きが、その一人である。又た外國の宣教師などにて、新聞雜誌に關係ある人々とも、親密なる交渉を得せしむることに就

いて、微力を效した。これは世界の輿論、特に英米の輿論を、吾國に傾けしむるに就いて、多少の效果があつた事と信じてゐる。

固よりその爲には、末松子は英國、金子伯は米國に、それ〴〵特派せられて、骨を折つたことは云ふ迄も無きことであるけれ共。

予は初からバイカル湖以東を割いて、吾が領有となす抔といふ論者とは、その意見を異にしてゐた。予は遼東還附の屈辱を雪ぎ、ハルビン以南に於て、卽ち南滿洲を完全に吾が勢力範圍にすれば、それにて先づ滿足せねばならぬことを、確信してゐた。

而して豫ねて豐太閤征韓の役に徵しても、外征軍は曠日彌久なるべからず、第一段の目的さへ達すれば、それにてすん〴〵切上ぐべきことが、大切であることを、信じてゐたから、三十八年奉天の大會戰と、日本海々戰の後には、唯だ一日も早く講和の日の來ることを希望してゐた。

而して愈〻その時期が到來したるが爲に、吾社は特に濱田佳澄氏を、全權に隨行せしめて、彼の國に派出せしむることゝした。今此に一の出來事に就いて、予はこれを語るであらう。それはその關係者が殆ど皆な故人となつてゐるから、語つても差支無いと思ふから。

三　講和談判中の插話

◇桂、タフト祕密會見の内容漏洩問題

或日予は吾が老父母を伴つて、日比谷公園の躑躅を見に赴いた。老父母は逗子にゐて、偶ゝ上京し、予も戰時中は屢ゝ見舞ふ期を失したから、せめてその上京を幸に、日比谷の花でもと考へて、斯く誘つた。然るに偶然にも珍田次官に出會した。

當時小村侯はポーツマスに赴き、桂公が外務大臣を首相として兼任し、一切の仕事は珍田伯が次官として、これに任じてゐた。伯は予の顏を見るや否や、かねて溫厚なる珍田伯にも似ず、容易ならぬ見幕をして、「一寸」と云ひつゝ、予を人無き所に誘ひ、扨て云ふ樣、

「德富君、御身は困つたことをして吳れた。實は斯く／＼の次第で、桂公はその爲に寢食を安んぜずにゐる。兎も角も速かに桂公に面會して、然るべく釋明あれ」と云つた。

それは今詳しく語ることは出來ぬが、當時タフト氏は、ルーズヴェルト内閣の陸軍長官であつて、フィリッピンに赴く途次であつたと思ふ。吾國では米國は凡有る關係に於て、最も重要なる隣國であつ

たから、下へも置かず饗待し、タフト氏を芝の延遼館に止宿せしめ。斯くてその機會を捉ゆるに敏なる桂公は、フィリッピン及び朝鮮に關する意見を、互に交換した。

かねて米國では日本がフィリッピンに野心でもあるかの如く、常に痛くも無き腹を探りつゝあつたから、桂公はこの機會に於て、日本が斷じて左樣の意志無きことを表明し、その代り日本の朝鮮に於ける權益を、米國に於ても、十二分に識認せんことを求めた。

これは最も機密に屬することであつたから、他の通辯を用ひず、珍田伯をして、これに當らしめた。此の問答はタフト氏も餘程重要と考へたと見えて、その筆記を作成し、これを桂公に示し、その同意を得て、ルーズヴェルト氏に送附し、ルーズヴェルト氏から元老院の外交部員に示す手筈となつてゐたとのことであつた。

予はその顚末を桂公より承知してゐた。それは予等はかねて對朝鮮の意見に於て一致してゐたから、その實行に向つて、更に一歩を進むる機會の出來たことを、桂公が予に向つて語るは、寧ろ當然すぎることとであらう。

予は固よりその委細を語らなかつたが、極めて大體に、そのヒントを、『國民新聞』の一外交記者に與へた。當時『國民新聞』には、曾つて予が刊行して、經費多大の爲に廢刊したので、せめてその

雛型でもといふことにて、『國民新聞』紙上に、『ファー・イースト』と題し、英文の一欄を殘し置いたが、幸か不幸かそのヒントが、英文欄に表はれた。

予は餘り重大でもなき英文欄には、吾社の新聞とは申しながら、目を付くることをしなかつたから、如何なる順序を以つてそれが表はれたか、氣が付かなかつた。

然るに當時『國民新聞』は、桂内閣の意見を代表するものとして、知られて居、その爲に亞米利加人などは、特に氣を付けてゐた。當時米國大使館員ミルラー氏の如きは、常に吾が編輯局に來り、種種のニュースを集めてゐた程であれば、如何で米人がこれを見逃すべき。それが忽ちルーズヴェルト氏に報道せられ、ルーズヴェルト氏から、又た如何なる手筋を經て來た乎、當局に對して、表立つた抗議といふではあるまいが、苦情を持込まれたのである。

何事にも餘り困らない桂公も、これには餘程閉口した樣であつた。予は別に辯解する迄も無く、意外の迷惑を來したことを、陳謝するに止つたが、數日後曇りたる桂公の顏が、漸く晴れた。それは『彼の記事は全く『國民新聞』記者のでたらめの推測を書いたもので、當局は全然與り知らぬ』といふ辯明にて、米國も滿足したといふことであつた。

而して桂公は『これが米國であればこそ仕合せであつた。若し他の國であつたなら、なか〳〵面倒

であつた。今後は呉々も氣を付けて貰ひたい』と云ふことであつた。固より云ふにや及ぶ、予も從來氣をつけてゐたが、あまり愉快であつたから、唯だそのヒントを與へたのであつて、新聞のニュースとして與へたのでは無つたが、予の注意の足らなかつた爲に、此に至つたのである。併し右は例外のことにて、予は餘り機密を守り過ぎたるが爲に、大概のことは吾が社中にも語ることを愼み、その爲に予はとつくの昔に知つてゐたことを、社では彼や是やと騷ぎ廻つたことが、往々にしてあつた。予は寔に相濟まぬと考へてゐたが、當時國家第一、新聞第二と考へたから、苟もこれを新聞種として、不利と思ふことは、みす／＼これを知りつゝ、これを他に讓らねばならぬことゝなつた。

その爲に『國民新聞』が非常なる不利益を受けたことは、今此にくだ／＼しく云ふ迄も無い。人或は『國民新聞』は、政府と接近してゐたから、恰も生簀から、魚を取る如く、如何なる種でも勝手次第にこれを取るものと考へてゐたかも知れぬが、豈計らんや、『國民新聞』の接觸したる地は、恰も禁獵地で、鐵砲を打つことも出來ず、網を入るゝことも出來ず、釣糸を垂れることも出來ず、唯だこれを見て、見ぬ振りをしなければならぬ、苦境に立つてゐたのである。

世の中に知らざるを知らずとするは、苦痛でも猶ほ忍び得るが、知つたことを、知らざる振りをして過すことは、如何にも苦痛である。如何にも不快である。

予は十年間、特に三十七八年の役から、この不快をば、常に衝突した。

四　國民新聞社燒打事件

◇ポーツマス條約と國民の不滿

國民新聞社第一回燒打の話をなすべき、機會に到着したが、餘り時が隔りて、殆どその始末を忘却した。實は吾々は初から、償金などを取り得るものとは、期待しなかつた。併し樺太全部、ハルビン以南は、間違なきものと信じてゐた。

然るにそれが樺太は半分、滿洲は長春以南といふことになつた時には、聊か輕き失望を感じないでも無つた。併し實を云ふと、それで三十七八年役の仕末がついたことは、寔に仕合せであつたと思ふ。これから奥に行けば行くほど、我には不利であつて、露國には有利であつた。

而して此上戰爭を繼續するといふことは、兵力の上に於ても、財力の上に於ても、非常なる冒險であり、特に對世界の政策から見れば、最も不安全のことであつた。米國なども、何時迄も日本に金を貸しはしまいし、輿論の振子も亦た日本にのみ向つては動くまい。されば萬障を排しても、この際切

上げることが、萬全の策であつたに相違は無い。

併し今から考へて見れば、今少し强く押せば、露國は内部に於て、土崩瓦解の勢をなしたかも知れない。有體に云へば、露西亞の內情は、亂脈ではあると察してゐたが、事實は吾々の思ふたよりも、亂脈であつたのだ。その點から考ゆれば、予等は彼を知り、己を知るといふ點に於て、聊か缺けてはゐなかつたかと思ふが、併しそれは後の祭りであつた。

日本では敵を恐れるよりも、寧ろ味方を恐れた。吾が內輪に多くの弱點があることは、當局者のみの知識にして、國民の士氣の沮喪するを恐れて、一切これを隱して置いた。これは當局者としては、或は誠意を缺くといふ說もあらうが、併し若しそれを悉く暴露した時には、飛んでも無き結果を來たす虞があるから、寧ろ他日暴露した時に、國民の怒を買ふこととあるも、祕密になし得る限りは、飽迄祕密を保つてゐた。

而してポーツマスの條約は、正に當局者がその爲に、年貢を納むべき時節に到着した。當時の輿論は、十億の償金も足れりとせず、滿洲は勿論、進んで沿海州も割讓せしめんとする勢であつたから、ポーツマスの條約などは、不滿足は勿論、失望は愚か、國民はこれを以つて、遼東還附以上の屈辱と信じたのである。

斯る場合に於て、當局者が攻撃せらるゝは勿論だが、當局者と共に、意見を同じくして、天下の輿論に反抗したる當時の『國民新聞』が、その矢面に立つことは、寧ろ當然すぎるほど、當然のことであつた。

形勢は刻々に危險になつた。予も彼是考へたが、最早や逃れぬ場合と考へたから、生るも死ぬるも運命次第と覺悟し、九月四日の夜社員を烏森なる扇芳亭に集め、一通りの演說をなし、社員を激勵した。當時吾社の長老であつた、栗原武三太君が、更に予の意志を承けて、大いに激勵し、孰れも決死の覺悟にて、各ゝ記名をした。

その書付けは今如何になつた乎。或は大正十二年の大震火災に、燒失したかも知れない。

扨て愈ゝ翌日になれば、日比谷には國民大會が開かれ、そこからその流れが押掛けて來るといふことで、所謂る櫛の齒を引くが如き、注進があつた。予は腹を拵へねばなるまいと思ひ、二三の人を誘つて、天金に赴き、かねて好物である天麩羅にて腹拵へをなし、社に歸つて來たらば、愈ゝ騷ぎが生ぜんとしつゝあつた。

當時、日比野雷風なども、大なる棒を突き『豫ねて先生の眷遇を忝くするから、御援助の爲に來た』といふことであつた。又た梅田又次郎氏もやつて來たが、彼は下駄ばきのまゝ、二階に上つて來た

から、『此處は下駄を履く處では無い。取換へて貰ひ度い』と云ひつゝ、取換へしめた。

梅田氏は後から、『生きるか死ぬかの場合に、切角加勢に來た者を、顏を見るや否や叱りつけて、下駄ではいけないなどと、小言をいはれるには、驚き入つた。』とて、後にはその事を悪口するやら、褒るやら、遂に逸話となつた。

日比野氏は社の門口の、電話の陰にて打たれて、額を打割り、血を出した。此方は種々防禦をしたが、防げどもなか〳〵手に餘る群集にて、石や飛礫は雨の如く降來り、中には庇に上つて、社の看板をはずさんとしたる者があり、或は窓に近き梧桐の枝に攀て、それより二階に入らんとする者もあり、なか〳〵の騒ぎであつた。

さりとて警官が來るでも無く、吾社は全く群集の爲に、踏潰され、叩潰されんとした。最早や致方無しとて、栗原武三太、阿部充家等の諸氏は、一刀を拔き放つて、群集に切込んだ。その爲に群集は漸く開いた。

斯る中に時間も經ち、警官も來、又た攻撃の場所は國民新聞社のみでも無く、他にもあつたと見えて、聊か退潮になつたが、とても此儘では覺束ないといふことにて、遂に戒嚴令を敷かねばならぬ仕末となつた。

それ以來予はその僑社に泊り込んで、約一ヶ月弱の間、家には歸らなかつた。家の方でも可成りの騷ぎがあつて、群集が押寄せるとか何とかいふことにて、吾妻等は他所に立退くべく、警官から勸められた相だが、それも暫らくのことにて、それ程でも無つた。

唯だ快心の一事は、此の如く燒打ちに遭ひつゝも、その翌日は兎も角も新聞を出すことが出來たことであつた。而して暴徒云々の廣告を、各新聞に依頼して出したが、何れも暴徒の語に辟易して、これを肯んじなかつた。併し吾社の新聞には、暴徒襲來などと掲げて、飽迄當時の輿論に挑戰した。今から思へば、如何にも血氣の至りで、故らに敵を求めた傾きがあつたが、これも騎虎の勢ひ致し方も無き次第であつた

五　燒打事件と新聞販賣系統の紊亂

◇戰後の一段落と予の支那漫遊

明治三十八年九月五日の燒打は、日本の歷史に記憶せらるゝ日であると同時に、予一個の歷史にも、記憶すべきであらう。特に「國民新聞」の歷史に取つては、重大の出來事であつた。それは「國

民新聞』が、戰時中切角築き上げたる處の地盤を、これが爲に殆ど根柢から顚覆へし去られんとしたからだ。

『國民新聞』の歷史に就いては、前にも話した樣だが、明治三十年の末、松方內閣の沒落より、三十一年一杯が、最も困難なる時期で、三十一年の末から漸次回復して來た。固より從來の愛讀者中には、予が平民主義を捨てゝ、帝國主義に變じたといふことにて――その實予は決して平民主義を捨てたのでは無つたが――その爲に多くの讀者を失つたに相違無きも、他方に於て又た、新たなる讀者を得たことも、間違ひはなかつた。

而して新聞としては、時の風潮に雷同せず、寧ろそれに反抗するが如き態度を以つて、一切世間の交涉などを度外視し、自ら信ずるところを陳述して、天下に同志を求めんとするに止つたに拘らず、鞏固なる讀者は、漸次に增加し、特に戰時中は予自ら軍事通信員となり、又た何れの社に比しても、恐らくはその量と質とに於ては、劣らない從軍記者を特派し、その以外に軍事通信員を得、爲に新聞の聲價も頗る高くなり、戰爭の末期に於ては、紙數の增加を求めずして、紙數の方から自ら增加し來りたる傾があつたに拘らず、此の燒打事件は、『國民新聞』の議論が、世間一般の議論と趣を異にしたるばかりで無く、これが爲に販賣の系統も、配達の連絡も、殆ど目茶々々に打毀され、正にこ

れ新規巻直しといふべき姿となつて來た。

されば販賣部長の如きは予に向つて、怨言を放ち、『先生と仕事をするのは、恰も賽の河原で、石を積むやうなもので、切角千辛萬苦して積上ぐれば、忽ちくずして元の姿となし、再び積み上ぐれば、又た元の姿になし、斯る次第では如何に骨を折つても、折り甲斐が無い』といふたが、予もそれは尤もなることであると自覺しても、今更ら致方も無きことにて、初めから新聞を商賣と思はず、新聞の繁昌を目的として、新聞を發行したもので無く、只だ新聞に依つて、吾が主義主張を天下に宣揚せんが爲であつたから、予に於ては紙數の增減何かあらんといふ氣分であつた。

切角予の下に働いたる人々の希望に、添ふことの出來なかつたのは、今以つて後悔はしないが、聊か遺憾とせざるを得ない。

扨予は桂公と相談の上、斯る場合に於ては、吾々の主張を天下に徹底せしむるより先なるは無し。それには要所々々に『國民新聞』を配布するが第一であると申談じ、先づ全國の市町村役場に向つて、當分無代價配布をした。それは『國民新聞』の顧客を回復するには、左程の利き目は無つたけれ共、主義主張を貫徹する上には、頗る有效であつたことは、安達謙藏君が、講和問題に就いて、地方を遊歷し、止むべからざる所以を演説したるに、地方の重なる人々は、大抵『國民新聞』に依つて、

その豫備知識を得てゐたことを知り、如何にもその效果の著明であることを、予に向つて語りたることがあつた。即ちその一例を見ても、無用で無つたことが判る。

扨て世間からは緞帳芝居、三日内閣と云はれたる桂内閣は、種々の運命を經つゝも、内閣あつてより以來——明治十八年十二月、伊藤公が内閣を組織して以來——歷代の内閣中、殆ど比類無き程、長き壽命を保つた。即ち第一次桂内閣は、明治三十四年六月から、明治三十八年十二月迄にて、足掛五年、滿四年と六ケ月を越えた。

予は桂公とは、從來の舊交もあつたから、無論その内閣に向つて、惡意を表すべき理由は無つたが、併し桂内閣成立以來、日一日と種々の因緣が重なり、桂内閣の辭職の頃には、最早や桂公と予とは、政治的關係に於ては、切つても切れない程のものとなつた。

されぱその儘踏込んで、新首相西園寺公と、政治上の關係をつけるのも、餘りに無節操の如く見え、且つ予が遼東還附以來、歷代の内閣に對して、援助を吝しまなかつたのは、畢竟露國に對して、大いに報いんと欲するが爲であつたのに、今や既にその目的を達したからには、予の政治的生活は、此に一新するの必要がありと認めたから、予はその時間を利用して、朝鮮から支那に遊ぶこととした。その顚末は、『七十八日遊記』に揭げて置いたから、今此に繰返へさないが、予は先づ朝鮮に入り

て、伊藤公の統監政治を見、それより鴨綠江を渡り、當時漸く輕便鐵道が連絡してゐる、安奉線を通過し、奉天に赴き、それより北の方開原、昌圖に赴き、更に南下して大連に出、それから營口に至り、天津を經、北京に入り、北京から又た天津を經て漢口より長沙、湘潭に入り、恰度その時間が七十八日かゝつたから、それを『七十八日遊記』と名付けたのであつた。

この遊歷は恰も日露戰爭後であつて、日本の勢が旭日沖天の有樣であつた。朝鮮は固より、滿洲及び支那本土に於ても、寔に愉快なる旅行であつた。しかも當時は猶ほ淸朝の末路でありながらも、舊支那が未だ全く壞頽しつくさゞる時であつたから、觀察の上にも、寔に好都合であつた。

六　發行當初より新聞に對する予の抱負

◇率ゆるものを率ゆる新聞

支那より歸るや否や、予は大いに感ずる處あり、『國民新聞』に向つて、大變革を來たさしめた。この機會に於て、予の『國民新聞』に對する態度を、少しく語る必要がある。明治二十三年二月一日初號發刊の際に於ける、予の心持は、『國民新聞』をして、政治、文學、宗教、技藝、其他精神的にも、

物質的にも、國民の凡有る生活に關係を持ち、その生活に必須の機關たらしむるにあつた。

政治には固より重きを置いたが、決して『國民新聞』は本來政治新聞では無つた。趣味に於ては普遍的に、且つ高尙に、且つ淸新に、最も日本に於ける穩健にして、且つ高雅なる、進步的分子を代表する機關たらしめんことを期してゐた。されば『國民新聞』は、上品なる新聞であると同時に、決して乾燥無味の新聞では無つた。『國民新聞』の神經は銳敏であつたが、併し決して過敏では無つた。主張は堅固であつたが、決して頑冥では無つた。隨分思切つた言論をなしたが、味方に對して偏頗で無いと同樣に、敵に對しても不公平では無つた。

然るに時勢の變化と共に、且つ予が政治的熱心と、實際の政治運動に、多大の關係を持出してより以來、『國民新聞』の全力は、殆ど政治の一面に注がるゝに至つた。此の如くにして、善にあれ、惡にあれ、その結果としては、全く一個の政治新聞となり終らんとした。

然るに予が明治二十九年から三十年にかけて、海外漫遊をなしたる結果は、如何なる影響を『國民新聞』に來たしたる乎と云ふに、他の方面は兎も角も、尠く共營業の方面に於ては、寧ろ退步したと云はなければならぬ。

それは予は當時新聞には、率いらるゝ者を率ゆる新聞と、率ゆるものを率ゆる新聞との差別があ

り、予は自ら進んで、率ゆるものを率ゆる新聞を、作らんと欲したるが爲である。當時予は新聞の紙數增加などといふことは、殆ど眼中に置かず、新聞の讀者はせい〴〵一萬あれば澤山である。その以下にても苦しくないと考へた。

要は唯だ新聞が、一國に於て、最も善良にして、且つ賢明なる人士を代表すれば足ると考へた。その結果新聞の體裁たども、一切重きを置かず、從來二號文字を使つたものを、悉く避けて字を小くし、振り假名を振つたものを悉く止めてしまひ、一般の民衆から見れば、從來百花爛漫の新聞を、沙漠界にでも變じたるかの如くならしめた。これは寧ろ予が、外國から歸へりての反動であつたと、云はねばならぬ。

予が英國にある際は、恰もノースクリッフの『デーリー・メール』が頭を擡げ出した時であつて、英國の新聞も、大いに New Journalism の影響を受け初める時であつた。予は當時『デーリー・メール』の俗惡なるを卑み、寧ろ予が作る新聞は、『タイムス』以上に、堅實、中正なるべきを期した。予の考では、新聞は國家に對する奉公である。出來得べくんば、讀者には代價を取らず、無代價にて配布するも妨げないなどといふ考をもつてゐたからして、營業などといふことには、固より重きを置かなかつた。

これは海外漫遊以前のことであつたが、或日、當時廣告業者の代表者とも云ふべき、江藤直純、販賣業者の代表者とも云ふべき、川合晋兩君が、予を氷川草堂に訪ひ、

『先生の新聞も、寔に結構であるが、今少しく面白く作つて頂けば、廣告の方も都合がよく、販賣の方も都合がよいから、その事を申上げたい爲に罷出た。それには黒岩周六なる人がゐる。この人は飜譯小說の名人であるから、これをお傭ひになつては如何』といふことであつた。

當時黒岩氏は、從前の新聞の關係を絶つて、未だ『萬朝報』を起さぬ時で、一寸浪人をして居られたのであらう。予は劍もほろゝの挨拶にて、

『面白く作るなどとは眞平御免。予は初から面白き新聞を作らうなどとは思はぬ』とはねつけたから、兩氏は互に顏を見合せて、『とてもこれでは駄目である』といふ樣子にて、辭し去つた。

洋行以前でさへ、此の如き有樣であつたから、以後は寧ろこれに倍してゐた。併し世の中には『蓼食ふ蟲も好き好き』と云へば、左樣に面白くない新聞を作つても、猶ほ讀む人があり、三十七八年戰役中は、確實の數を記憶してゐないが、數萬に上つたことは、間違ひ無い。

新聞のことに就いては、山縣元帥なども、なか〳〵心配して呉れた。或日山縣元帥は予に向つて、

『過日西園寺公は、凡そ世の中に「國民新聞」ほど面白くなき新聞はないと云つた』と噂させられた

が、果して其通りであつた乎、否乎は予が保證する限りで無い。予は平生西園寺公を、予の愛讀者の一人と思ふてゐるから、新聞に就いては、斯く云はれたにせよ、尠くとも予の書いたものに就いては、その以前も、その以後も、恐らくは今日も、相當の興味を持つてをらるゝものと思ふ。

扨て山縣公が云はるゝには、

『幸ひ軍事通信も續々出で來るから、せめて吾軍が鴨綠江を渡つた後の記事は、要所々々には、今少し大なる活字を紙面に採用しては如何』との事であつた。予は、

『他の事では閣下の教を仰ぐも、新聞のことでは、不肖自ら信ずる所があるからして、切角の御忠告でも、その通りには致し兼ねる』と斷つた。

而して予の流儀でやり通した。やり通しつゝも、新聞は相當に增加したのである。唯だ前にも云つた通り、燒打に際して、それが根柢より覆へされた。しかも三十九年には、瘡痍が未だ全く癒えない最中に、予は支那を旅行し、且つ支那より歸つたのである。

七　支那漫遊以後の新聞紙面の轉換

◇戰後經營と對鮮對米の予の意見

予は支那に就いて、種々の新知識を得た。その中に於て殊更に感じたるは、支那の強點は、何處にある乎といふことであつた。一言にして云へば、數である。量である。四百餘州といふ面積と、四億といふ人口とが、支那を有力ならしむる所以であると考へた。

元來予は數といふことに就いて、是迄全く無關心では無つたが、支那を旅行して見て、實に數の偉大なる勢力に驚いた。而して如何に列國が支那を虐めたり、叩きつけたりしても、依然として有力であるのは、畢竟數の爲であることを、泌々感じた。

特に今後デモクラシーの世の中には、此の數といふことは、無視するわけには行かぬといふことを考へ、急に日本に歸つたら、『國民新聞』を、數の波に乗せて見度いと考へた。

そこで明治三十九年八月の中旬、歸京間も無く、社の幹部を集め、その旨を告げ、如何にして『國民新聞』の紙數を增加するやといふことに就いて、評議を凝した。幹部の一人吉野太左衛門氏が、「そ

れでは先づ結城禮一郎氏を、御召還あつて然る可し』との事にて、早速その通りにした。結城氏は未だ青二歳の頃より、吾社に來り、予にとつては、子飼ひの弟子とも云ふべき、一人であつたが、當時は故あつて社を退き、玩具屋か何かを初めてゐた。斯道にかけては結城氏は、種々の缺點もあらうが、先づ一種の奇才といふべき一人にて、新案、奇策湧くが如く出で來つた。予も元來『人を疑へば用ゆる勿れ、人を用ゆれば疑ふ勿れ』といふ原則であるから、社會部のことを舉げて一任した。而してその爲めに社會部が吾社の全部を、占領したといふ程であつた。

紙數は固より豫定の如くどん／＼増加して來た。それと同時に、新聞の品位は愈々下落して來た。時としては『これが自分の新聞である乎』と、予自ら予の目を疑ふ程の記事が、新聞に載つてゐたが、予は蟲を抑へて知らぬ振りにて經過した。予の考では、兎も角も新聞がどん底まで下品となつても、紙數を増加し、吾社の地盤が完全に出來た上は、更に漸次に上品ならしむることも、遲くも無く、難くも無いと考へたから、先づ當分の中と、自ら諦めてゐた。

併し世間の攻撃は、なか／＼激しきものであつた。初から下品の新聞であれば、何等心配も無つたが、潔癖とも云ふべき程の新聞に、急に下卑たる記事が表はれ出したから、故ら從來のものと對照して、世間には異樣に感ぜしめた。

固よりこれが爲に、予が世間から彼是非難されたことは、當然であり、予も初から覺悟のことなれば、別に不平も無つた。但だ紙數の増加を日一日と樂んでゐたに止つた。

元來『國民新聞』創刊の頃、日曜休刊なしにて發行したとて、基督教信徒の人は、日曜を休まないのは聞えない事だと、大分非難せられた。併しそれ以外には、政治上の議論に就いては兎も角、その他に就いて、他より指をさゝるゝことは無つた。

併し明治三十九年の秋以來『國民新聞』の世俗化は甚しく、恰も道學先生の墮落は、墮落書生の墮落より、甚しいと同樣になり、世間の或者は、『德富君は自分の新聞を、自分の家庭に入るゝことを、拒んでゐる』と言いた者さへあつた。予は固より拒むことをしなかつたが、實は吾が家庭の者に對してさへも、笑止千萬の感を持つた。併しこれは當分のことであると思ひ、蟲を殺して辛抱した。

それ以來恐らくは紙數に於ては、明治四十年から四十五年、明治天皇の崩御當時までは、『國民新聞』の紙數は、都下唯一とは云はざる迄も、恐らくは第一の中の、其一に位したに相違はあるまい。

此の如くにして『國民新聞』は、一擧にして、數に於ても、又た有力なる位置となつた。

予の當時の考は、如何にして戰後の經營を、完成すべき乎といふことであり、それには大洋政策と、大陸政策とに於て、遺算なきを期せねばならぬと考へ、特に大陸政策に就いては、最も熱心に考

へ、主として朝鮮を併合することが、帝國の存立に於て、必須の要件であるといふことを考へた。而してその爲に桂公などと屢〻意見を交換し、聊か微力を竭す所があつた。

伊藤公の統監時代には、聊か公の仕打が手溫い感があつた。その爲に『國民新聞』は屢〻公の政策を批評したが、曾つて公の怒を招き、或日公が帝國ホテルの裏なる別館に滯留中、秘書官古谷氏が國民新聞社に來り、『只今急に統監がお目に掛り度いとて、待つてゐる』との事にて、相伴つて赴いたが、伊藤公の傍には、何やら德利があつて、既に半は空となり、公は手酌にて頻りに傾けてゐた。これが所謂るブランデーであつた乎、何乎、中味は知らぬが、面會した時には、公はよき加減に醉つてをられた。而して出會ひ頭に、予に向つて、

『君は實に困つた漢だ。誰のいふことも聽かぬが、親爺のいふことだけは聽くといふことであるから、寧ろ君の親爺に、君のことを云ひつけてやらうと思ふてゐる』などと冗談をいはれて、予及び予の新聞に對する不滿を漏らされた。

予は固より心から伊藤公を攻擊する積りでもなく、又た伊藤公と雖ども、結局は予等と同感であつた。但だその間に緩急速徐の差があるに過ぎないから、これ以上は公と妥協するに如かずと考へ、朝鮮問題に就いては、愈〻公と折合ふこととなつた。併し予に如何に折り合ふても、寧ろ公を突ついて、

急進せしむることのみを考へてゐた。

同時に予の注意は、亞米利加に向つた。米國は三十七八年戰爭を界として、日本に對し、敢へて禍心を抱藏するとは云はぬが、その態度を一變して來た。さればこの大なる恐怖は、太平洋を越えて、早晩我を壓して來るべく、東亞大陸の政策上に於ては、日本の自由なる運動を阻礙するものは、米國に如くはなしと考へ、敢へて米國を敵視するでは無いけれ共、自ら防禦する丈の覺悟がなければならず。それには我が海軍の力を充實することが大切と考へ、從來對露政策から、陸軍に重きを置いたるものが、今後は對米政策から、海軍に重きを置くは、必然のことであるから、その方面に聊か予も力を效した積りである。

洗　兵　（明治三十八年　四十三歳）

天河水洗甲兵流。　邃海韓山一望幽。
今夜有朋兼有月。　十年初見好中秋。

渾不語

隨緣隨業復奚疑。　苦雨淒風彼一時。
問著先生渾不語。　靑天白日此心知。

芳　野　（明治三十九年　四十四歲）

鶯候香雲護翠霞。　故行宮接梵王家。
尋來不慣先芳信。　看至十分澄落花。

京　城

野草連階景福宮。　石獅無語夕陽中。
南山剩得舊時翠。　統監旌旗蘸半空。

連　山　關

縈廻鐵路與雲連。　殘壘猶存斜照巔。
古柳老槐家五六。　牧童驅馬下前川。

長　江　三首

渺渺奔波與岸平。　半江雨半江晴。
布帆多在柳梢上。　掠水沙禽不識名。

過眼洪流逝不還。　依然形勝古今間。
登臨欲賦何邊好。　落日江南江北山。

無限濁流無盡時。　壯觀如此有誰知。
杜陵謫仙渭底水。　卻對長江不作詩。

永　平　寺　（明治四十年　四十五歲）

山谷幽深絕俗緣。　伽藍突兀倚危巔。
降龍伏虎高僧去。　空翠依然七百年。

猪苗代湖（明治四十一年　四十六歲）

東風習習客衣吹。　關外春光不恨遲。
湖畔櫻花山腹雪。　物華撩我有新詩。

若　松

一夢恩讎四十年。　鶴城春到草芊芊。
憐佗白虎紅顏子。　萬朶櫻雲護墓田。

國民新聞六千號

湖海論場二十秋。　頭顱白盡不知愁。
儂家自有儂家法。　休說人間第幾流。

公　孫　樹（明治四十二年　四十七歲）

墻頭紅葉可憐生。　籬落黃花亦有情。
最愛公孫千尺樹。　金冠赫灼倚天榮。

第十四章　桂公の政黨組織時代と予

一　朝鮮併合と『京城日報』監督としての予

◇貴族院議員に勅選さる

明治三十八年の末より、大正二年迄は、先づ政友會と、止むを得ずんば官僚黨とも云ふべきもの、人としては、桂、西園寺の妥協時代であつた。此の妥協時代に就いて、最も政友會側に於て骨折つた者は、云ふ迄も無く、野田大塊であつた。

大塊と予とは昔からの親友であり、從つて時には相互の意見が一致しなかつたけれ共、一致しないにせよ、一致するにせよ、互に氣脈相通じたことは、間違無つた。從つて戰後の經營なるものは、此の桂、西園寺の妥協時代に、全く出來上つたといふことが出來なければ、斯く共その基礎が定つたと云ひ得らるゝであらう。

國有鐵道を斷行したのは、第一次西園寺内閣であつた。而して日韓の併合を斷行したのは、第二次桂内閣であつた。但しこれを併合するに就いて、重要なる動機は、明治四十二年十月、伊藤公がハルビンに於て、朝鮮人安重根に暗殺されたことが、最も有力なる、且つ有效なる動機であつたと云ひ得らるゝであらう。

日韓併合以前、寺内伯は統監として、寧ろ日韓併合の大使命を以つて、朝鮮に赴いたが、予は寺内伯とは日清戰役以來、屢ゝ接觸した。日清戰役當時は、運輸通信長官であつたが、其後寺内伯は一寸旅團長として、仙臺に赴いた。それより又た中央に歸り、軈て陸軍大臣として、三十七八年役に臨み、日韓併合間も無く、予が朝鮮の新聞のことに就き、寺内伯より依頼を受けて、朝鮮に赴いたのは、多分明治四十三年九月であつたと思ふ。

當時朝鮮に於ける新聞政策は、未だ全く定つて居らず、當初は予に總督府で買收したる、京城の一新聞の經營を、依託する筈であつた樣だが、予は寧ろこの際一切の新聞を『京城日報』に集中するに如かずとの意見を具し、それが容れられて、遂に予が監督となり、半島に於ける言論に、微力を效すことゝなつた。

當時予の相談相手は、一方では今日の（昭和拾年八月）拓務大臣である、當時の總督秘書官兒玉伯で

あつた。しかも最も予と戮力したるは、當時の朝鮮警務總監明石男爵であつた。明石男爵は福岡人であつて、福岡人の最も良好なる點を具へたる、快男兒であつた。

何れにしても、寺内總督をして彼が如き治績を擧げしむるに至つたのは、明石男爵の力與つて大にをるといはねばならぬ。予は爾來朝鮮と關係を持ち、時としては年に四五回も赴いたが、總じて三回はかゝさず、大正六年に至つた。

或者は予が朝鮮に於て得たる處のものを以つて、東京の足らざるものを補ふたではあるまい乎といふけれ共、それは寧ろ逆であつた。『京城日報』が『國民新聞』に奉公したといふよりも、『國民新聞』が『京城日報』に奉公したことの多かつたことは、云ふ迄も無い。

唯だ予が愉快であつたのは、此間、朝鮮内地を殆ど旅行し盡くすばかりでなく、朝鮮の重なる人々とも交驩し、意見を上下したることだ。その中でも予が最も敬服するのは、――敬服の意味に於ては同一では無いが、――學者として金允植君、政治家として李完用君の如きは、その尤であつた。李埈鎔や、朴泳孝諸君は、彼等が日本内地に流寓中からの友人であり、又た宋秉畯、趙重應などの諸君とも、常に相ひ往來した。今となつては、只だ朴泳孝侯爵あるのみである。

話は代つて明治四十四年八月、第二次桂内閣の辭職以前、予は貴族院議員に勅選せられた。これは

予にとつては、必らずしも意外では無つた。予は固よりその爲に運動がましきこともしなかつた。併し桂内閣が予を奏薦して勅選議員としたるは、正直の處、過當とは思はない。予も及ばずながら明治三十四年以來、十年餘に亙つて緣の下の力持ちではあるが、若干の御奉公をした。國家に功勞あるといふことは、おこがましき話であるが、これも比例の問題で、他に選任せられたる人に比して、未だ必らずしも大なる遜色ありとは思はない。

併し予は貴族院議員になつたとて、議員の資格もて、政界に雄飛せんとするなどの野心も無つた。予自身としては、政治は飯よりも好きである。飯よりも好きでありながら、政治家とならなかつたといふことは、如何にも不思議千萬の樣であるが、それには理由がある。予は如何に自ら考へても、予には不幸にして、政治家たる資格の持合せが無いと考へた。

それは第一愚論を感心して聽くほどの、辛抱力がない。桂公などはその辛抱力が大であつた爲に、政治家となつたのであるが、予はとてもその辛抱が出來ない。

次には金を作ることの不器用なことであるのみならず、嫌である。政治家となるには、自分に金を持つてゐれば、それに越したことはないが、さもなければ他人の金を勝手次第に引出す方便を持たねばならぬ。それが出來ずに政治家となることは、なか／＼難い。

次には政治家となるには、尠く共、その地盤があらねばならぬ。地盤の重なるものは、藩閥か、軍閥か、財閥か、學閥か、或は又た閨閥があらねばならぬ。然るに予はその中の一も持たない。特に學閥なるものは、最も有力なるものにして、それには大學出身などゝいふことが、最も必要である。然らざれば、有力なる慶應、早稻田などゝいふことも、亦た無用ではない。然るに予にはその何れもが無い。

のみならず予は尺を枉げて尋を直うするといふことさへも出來兼ぬるに、尋を枉げて尺を直うするが、政治家の常であれば、寧ろ不向きであることは、論を俟たぬ。

以上の理由を以て自ら政界に打つて出ることを敢へてしなかつた。謙遜といふわけでは無い。唯だ聊か自らを知る明があつたからである。而して予の働は、寧ろそれよりも、一個の Journalist として、且つ Publicist として立つが適當であると考へたが爲であつた。

然るに予は何時の間にか深入りして、自分では政治狂言の作者である積りであつたが、却つて政界の馬の脚の働きまで、せねばならぬといふ羽目に立至つて、實は聊か十年の歳月を、無用とは云はぬが、不經濟に使用したことを、悔いざるを得なかつた。

二　得意の絶頂にある桂公

◇國民新聞社元老、栗原、草野兩氏逝く

『國民新聞』は一時は桂内閣の御用新聞などゝ云はれ、その以前には予を以つて變節漢、裏切者などと云ひ、その爲に予一個の信用も減じ、友人も失ひ、新聞も困難に陥つたことがあつたが、元來何れかと云へば、予は寧ろ變ずるよりも、變じない方の人間にて、寧ろ自分の信ずるところは、利害得失を問はず、馬車馬の如く走ることが、本色であるから、世間の人も漸くそれを理解し、從つて予が失つた友達も、漸次回復し、それ以外に又た新たなる友達も出來、新聞にも亦た愛讀者、共鳴者が漸次增加し、兎も角も予が明治三十九年、支那漫遊より歸へりたる後に企てたる新聞紙面の大變革は、確に成功し、紙數に於ては、都下の新聞として、孰れに對しても恥づるところなきまでに至り、愈よ新聞の基礎も堅實となつて來た。

　而してこれと同時に、豫ねて予が企てたる通り、一時低下したる趣味を、漸次向上せしむることに努めたことは、今更云ふ迄もなく、紙面を見れば、それが歴々と證明せらるゝ。而して此間に於て、

二の悲しむべきことがある。

それは吾社に於て、元老とも云ふべき、栗原武三太君と草野門平君を失つたことである。兩君共に予の年長者であつて、異つたる立場に於て、常に予の股肱として、働いて呉れた。

栗原氏は明治四十四年三月、吾社が朝鮮實業視察團を組織するや、君はその幹部の一人として、團員を伴ひ、朝鮮に赴き、歸途宮島に於て解團式をなし、それより東京に歸へる汽車中、岡山市畔旭川の三十尺の鐵橋の上から、過つて汽車の何處よりか轉げ落ちたのであらう。遂にこれが爲に、不慮の死を遂げた。

君は予が熊本に於て、『東肥新報』の論說や、飜譯物を爲しつゝある時に、その事務員であつた。予とは總ての性格が反對であつたが、それ丈多く予の足らざる處を補つた。平生社に定つて出席するでもなく、定つた仕事も無つたが、それでも吾社に於ては、最も缺くべからざる一人であつた。

草野氏は栗原氏と全く對蹠的の性格であつて、まるで几帳面の權化とも云ふべき人であつた。君は吾社の編輯、事務、外交、其他に於て、常に奔走した。而して大正二年三月、腦溢血にて斃れた。

此の兩君を失つたことは、吾社は勿論、予にとつて、大なる傷手であつた。

併しながら編輯には伊達源一郎、事務には尾間明、その他大元老として阿部充家、中元老として山

川瑞三等の諸幹部が、孰れも力を竭し、前途に駸々乎として進んでゐた。
然るに此に又た一の大たる頓挫が出来た。それは大正二年二月十日、第二回の焼打である。
此事を語るには、少しく前に遡る必要がある。第二次桂内閣は、明治四十四年八月、第二次西園寺内閣に、讓渡して去つた。實は聊か桂公も得意で、驕慢の傾むが無いでも無かつた。それもその筈だ。何事もどん／＼拍子に、思ふことが成功するからして、自然に當人が成金氣分となるは、止むを得ぬ次第だ。
それに桂公のこの氣分を利用して、自ら爲にする者も尠く無かつた。
桂公は日英同盟で伯爵となり、日露戦役で侯爵となり、而して韓國併合で又た陞上の公爵となつた。この公爵となつたことは、桂公が自ら欲したのであつた乎、將た他より持上げられたのであつた乎、それは予が關かり知る處では無つたが、予は桂公に向つて、
「御身の公爵は、實に高價である」と云つた。それは實にその通りであつた。
凡そ桂公の一生の中に拂ふた代價の中で、この公爵ほど高價のものは無つたであらう。世間も亦た決してそれが爲に、桂公に對して、同情を加へなかつた。しかのみならず、それよりも甚だしきは、桂公の擁護者たるべき諸元老の、桂公に對する好感を減殺したることだ。

桂公よりも大先輩である、井上侯が、一等下つての侯爵である。松方侯が亦た同樣である。山縣公などは、桂公に對して、自ら親分と思ふてゐたのが、全く桂公と同輩となつたわけである。

予は孰れの元老よりも、親しくその事に就いて、話を聞かなかつた。併し總ての元老が、この事に就いての感情は、決して良好では無かつた。元老ばかりでは無く、寺内伯なども、頗る不滿であつた。伯が伯爵となることに就いて陞進されたのも、桂公に對する當てつけではあるまいが、或る他の人々に對して、釋然たらざるものがあつたのではあるまい乎と思はるゝ節が、ないでも無かつた。

三　明治天皇の崩御と桂公の内大臣就任

されど桂公は敢へて保身とは云はぬが、處身の術に於て、決して行詰る人では無かつた。日露戰爭後、日英同盟は、多少の變更を經て、猶ほ存續してはゐたが、その目的は已に達成して、果して向後に於ても、それを繼續するの必要ある乎、否乎は、日本に於ても、英國に於ても、等しく考慮せられたる問題であつた。

而して桂公は今後の世界問題は、支那及び東方亞細亞に集るものと言ひ、これが爲には、日英同盟

は存續するにせよ、せざるにせよ、職責の必要なるは、露國と獨逸にあることを考へ、先づ露國より獨逸に入り、而して英國に至り、世界の大局を一通り實測し、それに依つて、吾が對外方針を一定せんと考へ、その爲に漫遊に出掛けたのは、明治四十五年の夏であつた。

然るに公の一行がモスコーに到着するや否や、明治天皇御危篤の報は達し、遂にその儘日本に引返した時には、公は既に元老、特に山縣公等の推薦に依つて、内大臣たるべく決つてゐた。

固より新天皇に侍き奉る内大臣としては、公は適任であつたかも知れない。然も或る觀察者の所見に依れば、これは公を宮中に封込めて、再び政界に出さぬ秘策であるなどといふ者もあり、公が如何に考へたか知らぬが、兎も角も公は元老始め、衆議に依つて推薦せられたのを、今更ら辭退することも出來ず、實は餘り心では進まなかつたが、それを引受けた。

引受けて見れば、思ふたよりも公にとつては、窮屈でもあり、不自由でもあり、且つ手持不沙汰でもあり、それにて一生を終ることは、頗る不本意であつたに相違あるまい。

此の場合に所謂る二個師團增設問題なるものが發生し、第二次西園寺内閣は愈よ暗礁に乘上げ、進退維谷はまることになつた。その場合に於て、公が如何なる態度をとつたかは、これを明言することは出來ぬが、見樣次第では、表てには消防夫であつて、實は放火者ではないかと疑はれることが、滿

更ら無いでもなかつたらしいと觀察する者もあり、予は正直の所、長き間政治の下働きをなし、これからは獨自一己の眞面目を發揮せんと欲し、最早や妥協政治も飽き〳〵したることであつたから、餘りこの騷動には、立入らなかつた。

而して西園寺內閣の更迭は、必らずしも嫌ふところでは無つたが、しかもその後に桂公が出で來ることは、頗る考へ物であると思ふた。固より桂公が宮中に入つたことは、一生の不覺でもあり、失策でもあつたが、入つて間もなく飛出すといふことは、更に失策の上塗りであると考へた。

されば桂公が辭退して、內閣の椅子が諸方に持廻らるゝ時には、何人でもあれ、西園寺公の後は、桂公以外の人が、相續する方が然るべしと思ふた。

されば一時松方公を起さんとする議があつた時には、予も桂公からの依賴によつて、松方公にその旨を傳達したこともあつた。併し強ひて公に勸めたといふわけでは無つた。

四　第三次桂內閣の出現

併し世間では、何れに讓るも、その底意は、桂公が自ら起つて、その後を繼がんとするものである

と猜定した。されば第三次桂內閣が、大正元年十二月二十一日出で來るや、天下を擧つて、殆どこれを呪はない者は無かつた。

當面の相手たる西園寺公の率ゆる政友會は勿論、政友會の反對黨である、他の政派も、又た貴族院の多數も、恐らくは、山縣、松方の諸元老も、山本權兵衞伯等の薩派は勿論、何れもこれを以つて桂公の腹黑き陰謀の結果となさぬ者は無かつたであらう。

凡そ內閣が出來て此の如き不人氣なるものは、殆どその例が無かつた。予はその內閣の成立には、何等關係は無かつたが、併し桂內閣が世間に斯く迄不人氣であり、反對の氣運が出で來り、金持も、壯士も、實業家も、政黨も、新聞紙も、學者も、擧げて反對する內閣に、傍觀坐視することは出來なかつたから、予も最早や致方無しと覺悟を決め、出來得る限り、禍を轉じて福となすべく、微力を致した。微力とは卽ち新政黨組織の計畫であつた。

桂公も長い間妥協政治でやつて來た。卽ち明治三十四年の第一次桂內閣といふよりも、遡つて三十一年第二次山縣內閣以來、桂公は常に妥協の唯一の役者でなければ、役者中の重なる一であつた。

されば桂公も妥協政治には、殆ど倦き〳〵したるには相違ない。それで謂はゞ長い間辻車に乘つたものが、自用車を購求したくなる如く、今後政界に於て、志を逞しくするには、他人の力を借ら

す、自力に於てやつて見度いといふ志を起したのは、決して不思議では無かつた。自力とは取りも直さず新政黨組織の事である。

それ迄でも桂公の政友であつた大浦兼武子は、直接、間接、政黨に關係を持つてゐた。されば桂公と政黨とは、從來からが全く無關係では無かつた。個人として政黨員の公の門下に出入する者も、決して鮮くなかつた。而して彼等は自個の黨派の首領よりも、寧ろ桂公から直接に選擧費用の援助を受けた者も鮮くなかつたのである。

されば公が新政黨組織といふことは、要するに從來部分的にやり、裏面的にやり、種々の保護色をつけてやつたことを、正々堂々と、青天白日の下にやるといふことであつて、決して不思議は無かつたのである。

但だ若し政黨を組織するならば、組織して然る後に、内閣に立つべきであつて、内閣に立つて政局が困難であり、進退谷まるといふ際に、組織するなどゝいふことは、如何にも順序が間違つたことであるけれ共が、何といつても斯る場合には、爲すとは、爲さゞるに勝つてゐるから、兎も角も、これを行ふことゝなつたのであつて、この事に就いて他にも政黨組織の策を、桂公に獻じたる者があつたに相違がなく、又た桂公も或は自發的に斯く決心したかも知れぬが、斯く其子も今はこれより外

に、やるべき道は無いと思ふたから、寧ろやるならば、一身をそれに投沒して、桂公が大死一番、死して後甦へるの覺悟でやられんことを希望し、桂公もその覺悟であつて、一切を捨てゝ、赤裸々となり、これから新生面を開き、天下の民衆と與に、勤皇の主義を徹底するといふことであつたから、予も此に於て微力を竭した。微力といふが、予に於ては、最善の力を竭したのである。

五　桂公の新政黨と第二回燒打事件

◇不人氣なる立黨同志會

凡そ如何なる店でも、開店をするには、その時期を選ばねばならぬ。例へば、氷屋を始むるには、暑期を目掛けねばならず、燒芋屋を始むるには、冬を目掛けねばならぬ。然るに桂公は、不人氣の絕頂に、政黨屋を開店した。これは恰も夏に向つて燒芋屋を開店し、冬に向つて氷屋を初むると同樣であつた。

併し當時の問題は、時期を選ぶに遑無つた。謂はゞ當時の桂公は時期の問題で無く、生死存亡の問題であつた。斯る不人氣の中にあつて、尙ほ當時の所謂る同志會をも、纏め得たるのは、桂公とし

て、先づ上出來であり、大なる出來榮えであつたと云はねばなるまい。

當時アンチ桂の空氣は、上下に充滿してゐた。桂横暴の聲は、上は元老より、下は實業家まで、行渡つてゐた。所謂る憲政擁護なるものは、政黨者流よりも、寧ろ平生政黨に何等關係も、緣も、ゆかりも無き連中が、各々ポケットから金を出して、政黨をしてその運動を起さしめたといふも、事實は全くこれを否定し去ることは出來ない。

當時予は殆ど寢食を忘れて、この事に奔走し、『國民新聞』の如きは、一時桂公新政黨組織の本部といふことが出來なければ、尠く共別動隊本部といふ位であつた。

桂公の政黨組織に關する文書は、固より予が認めたるものであるが、その發送等も、殆ど予の手で引受けた。その爲に樞密顧問官などに向つて、政黨加入狀を發したとて、種々非難、攻撃の尻が、予の方に來た。それ位のことは何んでも無つたが、それ等を見ても、如何に桂公の政黨組織に、釋然たらざる連中が、鮮く無つたことが察せらるゝ。

予は議會の休期中、大正元年の歲晩から、大正二年の歲首にかけて、朝鮮に行き、寺内伯に面會したが、寺内伯なども桂公の新政黨組織を、餘り面白く思つてゐなかつた樣である。

歸途馬關から特急に乘つたが、偶然にも九州から上京する、野田大塊と同車した。長い間妥協政

治では、予等兩人同一の目的に於て、立場は違ふが共に働いて來た。然るに今回は偶然にも、敵味方に分れねばならぬことゝなつた。

何といつても新政黨の對象は、政友會である。政友會からすれば、新たなる敵が出來たものだ。大塊は予に向つて、

『君は近頃何か桂公に勸めて、政黨を作るとか云ふことだが、如何か』といふから、予は笑つて、

『細工は流々仕上げを見よ。とても君程の手際はあるまいが、乘りかゝつた舟で致方は無い。併し君と僕とは如何に離れても、各々勝手の道を行きつゝ、何れ又た何處かの曲り角でひよつこり出會せぬとも限らない。』と云つた。

併し野田君が滿腔の敵愾心を持つてゐた程であるから、その他は知るべしである。

◎予は豫ねて此の議會は解散に定つてゐると考へ、桂公とも申談じ、解散の理由書なども認めて置いた。然るに二月十日の朝、予は三田桂邸に赴きたる際に、意外にも一人の客が疾風の如く、桂邸に乘込んで來た。それは別人ならず、山本權兵衛伯であつた。

山本伯と桂公とは、第二次山縣內閣以來、等しく內閣に立ち、第一次桂內閣の時には、山本は桂の下につくことを屑としなかつたが、その先輩西鄕侯爵が、

「御身が海相とならねば、予が海相とならねばならぬ」といふことで、先輩を煩はすは氣毒であるとて、止むを得ず海相となつたが、その代り海軍擴張の條件を以つて、桂内閣に入り、その結果海軍擴張の必要の爲に、地租増徴の止むべからざることゝなり、此に於て桂内閣對政友會の葛藤が出來、その時は流石の山本伯も、『いざとなれば、予等は西鄕南洲でも敵とせねばならぬ。況んや伊藤公などは』との口氣さへも漏したほどであつたが。それはその時限りのことにて、本來は山本伯は何れかと云へば、伊藤公とは政治上に於て、極めてその關係が良好であつたが、山縣公とは圓滿ならず、桂公とも同公の累進以來、餘り親密といふ程では無かつた。

予は階下の別室に避け、山本伯は階上に於て、暫らく桂公と談話し、何やら尋常ならざる樣子にて出で去つた。その後から桂公が出で來りたるから、予はこれを廊下に擁して、

『樣子如何』と訊いたら、桂公は、

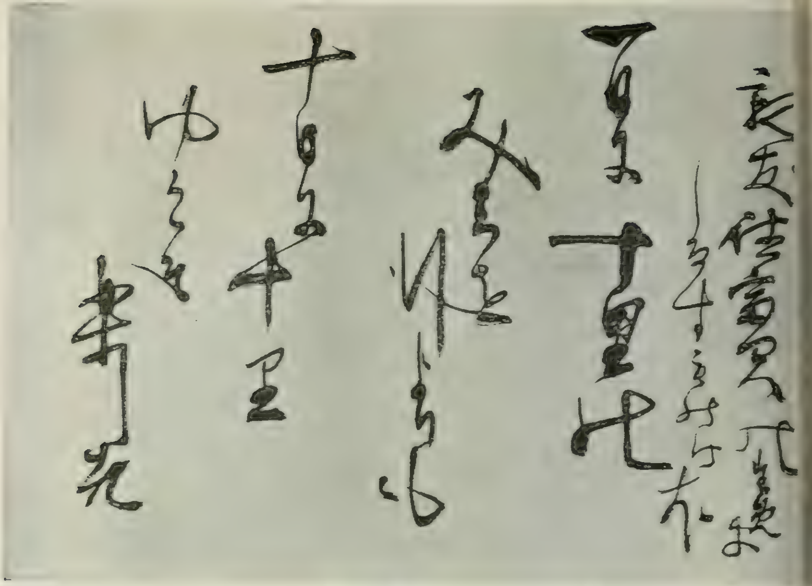
『最早や新規卷直すの外はあるまい。却つてそれが萬全の策であらう』と云つたから、予は此に於て初めて山本伯が桂公に、辭職勸告に來り、桂公がそれを納れたといふことを、感付いた。

最早やこれにて一段落は付いた。解散の理由書などは、必要無しと思ひ、然も前日來の形勢は頗る不穩で、今度も又た燒打に遭ふであらうと考へたから、寧ろその準備をするに如かずと思つた。

それより予は日吉町なる國民新聞社に赴いたが、果して形勢は頗る不穏であるから、最早や覺悟をせねばならぬと考へ、兎も角も先づ腹拵へをせねばならぬ必要があると觀念し、二三の社友を伴ひ、天金に赴き、豫ねて嗜む天麩羅を快喫し、歸へり來ればやがて、群集は押寄せ來つた。

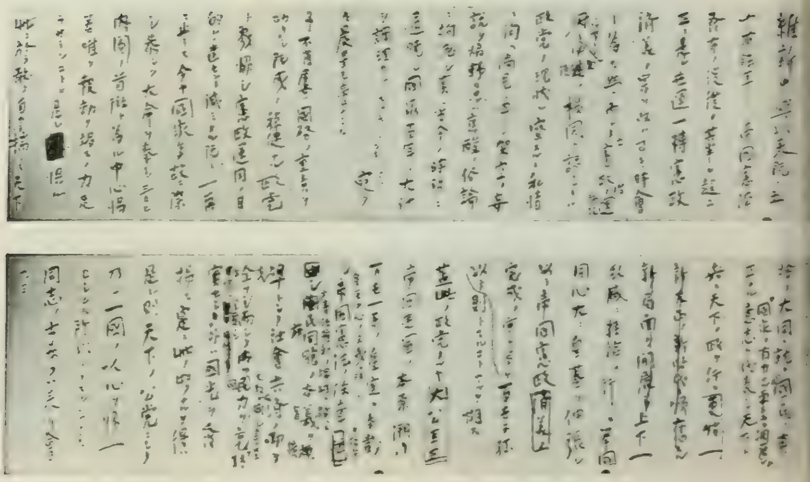
群集に對することは、三十八年九月五日の經驗があるから、何等狼狽することも無つた。此度の騷は前者に比して、寧ろ辛酷であり、形勢は刻々不穩となり、社に向て火玉を投込むやら、それを消すやら、なか〳〵容易のことでは無つた。此上は最早や劍を拔くの外無しと思ふたけれ共、巡査は堅く長官の命を守つて拔かずに襲撃者に當り、襲撃者は石や石礫や、煉瓦の破片などは勿論、手の屆く限りのものを、盛んに投下したけれ共、此方も充分手を盡して消しとめ、爭は何時果つべしとも思はれなかつた。

而して社中の阿部君、松岡君、清水君などといふ連中が、百計盡きて切り出したからして、群集も當分は離避したが、やがて又た押寄せ來り、如何ともすべからざる狀態であつた。然るに意外なることには予の從者□□が、近寄つたる襲撃者の一人に向つて、ピストルを放つたが、それが命中して斃れたから、大いに民衆の憤激を加へ、愈々吾社の人々を鏖殺しにせねばやまぬといふ勢となつた。當時予の友人都筑馨六男は、飯倉の邸より電話を掛け、



桂公の筆蹟

立憲同志會設立趣意書の原稿



『承れば貴君は今危險の最中にある由、社は致方は無い。せめて貴君の一身なりと安全を保たせたいから、予の家に避難しては如何』との事であつた。予は尠くとも男兒の皮を被つた爲に、その好意に應ずることが能はなかつたのは、當然である。

當日は社友の外にも吾社の危急を聞き、加勢に來たる、義勇の君子も鮮くなかつたが、その中にも吾社を暫らく前に罷めた、矢部謙次郎君、千葉龜雄君の如きは、今尙ほ予が感謝するところである。

千葉君は予が桂内閣を擁護するのが氣に喰はぬといふことを理由として、社を辭し、殆ど一週間も經たなかつたと思ふが、此の事件を聽き、餅を兵糧として風呂敷に包み、それを携へて、重圍の中に來られたことは、君の厚誼として、最も感銘に堪へぬところである。

六　第二回燒打後に於ける予

◇精神的、物質的疲勞と近畿旅行

◇『時務一家言』と『政治家としての桂公』

第一の燒打と第二の燒打とは、被害者たる予にとつては、必ずしも同一の心境では無つた。第一の

燒打に際しては、予は飽迄ポーツマス條約の止むべからざるを信じた爲に、如何なる危險に瀕するも、極めて快活に、且つ愉快なる態度を以つてこれに接した。

しかも第二の燒打に際しては、唯だ萬已むを得ざる勢の爲に、予も亦た此に至りたるものにして、露骨に云へば、他人の失策の爲に、何となく自らその責を負はねばならぬ樣に立至つたかの如き感を免れなかつた。されば別に愚痴はこぼさず、弱音は吐かなかつたが、英語の所謂 Resignation を以つて、これを受け入れたのであつて、その實は寧ろ不快千萬であつた。

賽の川原の地藏は又た此の時に出で來つた。切角築き上げたる『國民新聞』の信用と勢力とは、又た此の燒打の爲に、多大の災害を被つた。

併しそれよりも多大の損害を被つたのは、寧ろ予自身であつた。予自身の物質上の損害は兎も角、より大なるは、精神的の損害であつた。有體に云へば、大正二年の第二回燒打以後の予程、精神的に慘めであることを感じたることは、前にも後にも、殆どその例が無つた。今日から想出しても、尚ほ此の身がぞく／＼して、膚に粟を生ずる程である。

それは何であらう乎。予は今それを分析するに甚だ困難だ。但し兎も角も第一は、溯つて云へば、明治二十年『國民之友』發刊以來、若しくは二十三年『國民新聞』發刊以來、もつと手近く云へ

ば、明治三十四年第一次桂内閣の組織以來、多年政界に於ける、所謂る自由勞働者としての、長き生活の疲勞が、一時に發生したものであらう。第二は豫ねて政界といふものは、忘恩を以つて終まり、忘恩を以つて終ることを、覺悟してゐたけれ共、今日が今日まで、斯く迄ではあるまいと思ふ程に、何となく味氣無くなり、政界が嫌になつて來たことを、感ぜざるを得なかつた。理つて置くが、これは決して桂公その人に對する、個人的の考では無い。寧ろ概括的に斯く考へたのである。

併し斯ることは何時迄考へてゐても埒が明くべきで無つたから、兎も角も勇氣を鼓して、新聞の回復に力めた。予は敢へて自ら誇るでは無いが、人並に彈力だけは持つてゐるものと思ふ。

それで艱難は寧ろ予にとつては、元氣鼓吹の良藥となつた。而して此際予の弟が、予の極めて困難なる境遇に立つに同情して、絶えて久しく揭載しなかつた『國民新聞』に、その小說を揭載するといふことになつた。それが讀者に如何なる影響を與へたるかは第二として、予自身には、百萬の援兵を得たる心地がして、久振りに予も、快心の笑を、獨り自ら漏らしたほどであつた。

予は未だ曾つて公にも私にも、予の弟に就いて、一言も、必然にも偶然にも、有心にも無心にも、書いたことは無い。されば今更らその例を破りたくは無いが、唯だこの一事だけは、予の心境に多大の關係があるから、一言せざるを得ない。

斯る折にも朝鮮に於ける、『京城日報』の監督は、予が朝鮮總督寺内伯に對する約束の上から、當然の義務として、予は怠らなかつた。予は兎も角も予の弟が『國民新聞』に小説を出して與るゝといふことを大なる力とし、京城に赴いたが、或日『國民新聞』の編輯長から、予に急電が到著した。それに依れば一旦書きかけた小説を、如何なる理由にや、中止するといふことであつた。予はその電報を受取つた晩は、正直のところ殆ど一睡もせず、その善後策に就いて考へた。

併し最早や致方無しと考へ、兎も角もそれより生ずる、悪影響のなるべく少からんことを力むべく、萬事を擲つて、急に東京に立歸へることゝした。

予は固より予の弟の氣質を十二分に體得してゐるから、一度書かぬといふことを、書かせることの出來様とも思はないから、せめてその代りに何か小品文でも、時々寄稿するといふことにて、お茶を濁すことゝした。併しその影響は頗る多大であつた。

予は吾社の販賣部の人々に對し、彼等が切角努力して得たる地盤を、又もや顚覆へされたるを見て、寔に心外千萬と考へてゐたが、せめて今回吾弟の小説にて、彼等の心を聊か慰め、彼等の元氣を聊か回復することが出來るであらうと、空頼みしたことが、今は却つて空となりたるを見て、予一個の爲といふよりも、寧ろ販賣部などの人々に對して、如何にも氣毒千萬であつた。

併しこれも亦た致方無しと諦めて、兎も角もやつてゆいたが、新政黨の方も種々の分子が寄集つて、必らずしも予が考へた通りには參らず、然も新聞では殆ど一手で新政黨のことを引受けつゝあつたに拘らず、誰しも新聞に向ては援助は勿論、同情するものさへなく、全く孤立の位置にあるからには、予が怏々として自ら樂しまなかつたのも、必らずしも無理とは思はれなかつたであらう。されば予はむしやくしやしたる氣分を直す爲に、平福百穗君を乞ふて同伴し、瀨戸内海から別府に赴き、或は屋島、或は寒霞溪、或は宮島など諸方を遊歴し、六月の頃京都に立還り、暫らく京都の田舎に休養せんとて、友人の親戚の別宅が京都の北郊松ヶ崎にあるのを借りて、其處に一夜を過したところへ、桂公の病氣が迫るといふ電報に接して、取るものも取敢へず、歸京することゝなつた。

斷つて置くが、桂公は内閣を辭職して以來、新政黨の爲に、その力を致さんとする間も無く、忽ち病に取憑れ、その病氣が如何なる性質のものであるか、誰も正確に知る者も無く、何れ遠からず全快するものと思つてゐたが、案に相違して、段々長引き、不意に右の如き警報を發するに至つた。

併し歸つて見れば、それ程でも無いといふことであつて、予も又た胸を撫で下し、更に東京を出て、今度は富士の山麓御殿場の、青龍寺に出掛けて、約一ケ月を送つた。以上の顛末は予と平福百穗との合著とも云ふべき、「山水隨縁記」を見れば、分明であらう。

御殿場には大正二年八月一ケ月を暮したが、この一ケ月の靜養中に、予は如何にして今後新たなる生涯を始むべき乎を考へた。その結果が卽ち『時務一家言』として、『國民新聞』に出で來つた。『時務一家言』は、明治十九年に於ける『將來之日本』と相ひ呼應する、予の一生の中に於ける著作中の高き水準の一である。

話後に還る。予は第三次桂內閣が頓死して以來――卽ち正味一ケ月半ばかりで潰れて以來――『政治家としての桂公』と題する長き文を綴つて、これを『中央公論』に揭げた。これは謂はゞ予が十年間、桂公に對する總勘定の一切とは云はざる迄も、殆どそれに幾きものとして、自ら取扱うた。

これを書くに就いては、種々桂公に關する、――最も公人としての桂公に關する――正確なる知識の入用があつたから、豫じめそのことを、公にも話して、差向ひの上にて種々の物語をなした。その爲に予もこれ迄知らなかつたこと、若くははつきり知らなかつたことを、知り得たことが、決して少くなかつた。

その文が雜誌に揭げらるゝや、予はそれを懷にして、公を三田邸に訪ひ、ストーブを擁して、それを互に讀み、且つ批評した。その爲に殆ど一夜を明かすに近くなつた。

扨て予は御殿場靜養中、到底桂公の健康は、回復すべきものでないと見切りをつけた。假りに公の

健康が回復しても、とても從來ほどには完全に回復することは六ケ敷ものと考へた。假りにそれ程迄に回復しても、予は最早や實際政治には見切りをつくるのが、予の晩節を全うする爲には、必要であると考へた。

それで予は桂公の作りたる新政黨の間に於ける、權勢爭奪の活劇などを、恰も雲烟過眼に附し、愈愈明治十九年立言者として世に立つべく、東京に出で來つたる初心に立還り、最後の御奉公をなすべく、それ〴〵準備に取掛つた。

七　桂公の薨去と予

◇『公爵桂太郎傳』の編纂

果然事は予の豫想の如く、桂公は遂に十月十一日に薨去せられた。而して桂公を葬送して以來、予は又た朝鮮に赴き、予の責務を果すべく京城に出掛けた。

而して前に著したる『政治家としての桂公』は、更にその以來の事實、例へば桂公の臨終記などを附加へて、單行本として世に出した。これが予が桂公に對する、一片の氷心であつた。

桂公に關する予の觀察は、既に該書に盡きてゐるから、今此に繰返へす必要は無い。

桂公の死は、予の一身に大なる影響を齎らした。予は、予が一生の中に最も油の乘りたる時代、卽ち明治三十四年予が三十九歲より大正二年四十九歲までの間、殆ど予の有する總てのものを擧げて、これを桂公に捧げたとは云はないが、桂公を中心としての實際政治に捧げた。これは予にとつては、決して無用では無つたと思ふ。然もその中には予が畢生の望であつた、明治三十七八年戰役を挾んでゐる。

併し予一個人として云へば、一生緣の下の力持ちをしても、埒が明くべきものでもないのみならず、それが果して予の天分に最も適したる、卽ち天が予に賦與して、竭さしめんとしたる處に、適したる乎否乎は、予も亦た聊か疑問とせざるを得ない。然るにそれが自然に解放せられて、本然の故吾に復ることを得た。

一方から云へば、予に何等物質的の報酬は滿されなかつたとしても——自分でも滿たさうとする希望も無つたが——。謂はゞ言聽かれ、謀用ゐられしたから、別に不滿といふべきことは無つた。併し予も聊かそれを以つて、一生の仕事を終るべしとも思はず、何となく予自ら予を見出したるが如き心持が、無いでも無つた。されば今此に桂公と別れたことは、悲しくはあるが、予自身としては何とな

く新たなる世界に投出されたる如き感があつて、更に一段の新生涯を打出すべく、英氣を加へ來つた。
併し予は十年の跡を顧て、何等悔恨するところも無ければ、又た失望するところも無つた。予は桂公との關係の爲に、公を益したるよりも、國家に對して、若干の貢獻を爲したことを疑はない。
予は初から個人としての公を認めず、唯だ政治家としての公を認めた。されば政治の一點に就いては、極めて近くあつたが、その他のことに就いては、互に沒交渉であつたとも云ひ得らるゝ。併し予は今日でも機會があれば、桂公の墓に詣ることを忘れ無い。
曾つて桂公の未亡人が予に云はれた。
『生前には種々のことを云ひ、若しくは、爲したる人々もあつたが、死して墓を營む時に於て、現金を以つて寄贈せられた者は、御身と大阪の某男爵實業家のみ』と。
予は固より貧乏で、餘計なる金を寄附をすることも出來ないが、予としては、自から恥ぢざるだけのことはした積りである。予は一生の間に種々の缺點もあり、過ちも犯したと思ふが、自ら顧りみて忘恩などゝいふことは、無い積りである。
序でながら云ふて置くが、それは桂公の傳記である。この傳記も豫ねて公が予に書いて貰ひ度いといふ樣なことを話してをられたが、拔目無き公は、曾つて臺灣總督を罷めて、病を葉山に養つてゐた

際に、口授として筆記せしめられたるものもあつて、一寸したものが出來てゐた。
然るに桂公の死後、傳記編纂の議が起つて、誰や彼やといふことになつて、その人選が予に當つた。當時大隈内閣の時で、若槻男が大藏大臣であつたが、予に向つて、
『愈ゝ桂公の傳記編纂を御身に御依頼することになつたから、宜敷く御願ひ申上ぐ。就いては原稿料などは、幾何でも思召し通りで然るべく願上ぐ。』といふことであつた。予は若槻男に儼然として、
『御身と予と試みに地を代へて一考あれかし。御身は原稿料をとつて、桂公の傳記を書かんとせらるる乎。予は不肖なれども、左様なる了見は聊も無い。唯冀くは、予に一切を任せられよ。而して編輯の費用だけは、實費を提供せられよ。』と云つた。
此の如くにして桂公の傳記は、吾が社中の同人に依つて、一氣呵成に出で來つた。これを成すに就いては、桂公未亡人が、一切の書類を提供し、何等の遺憾あらざらしめたることが、最も傳記完成の迅速を告げるに、與つて力あつたことゝ思ふ。
これも亦た聊か公に對する感謝の意味を表したるに過ぎない。

杜陵公園 （明治四十三年　四十八歲）

女蘿蔓草繞城垣。　塹樹荒涼露老根。
遺烈千秋人墮淚。　公孫銅馬立黃昏。

黑瀧山不動寺

蕭寺晩投窮水源。　滿窓清籟不關門。
任他下界雲烟湧。　五老峰頭月一痕。

松都　朝鮮

倚天崧岳勢飛騰。　滿月臺荒露欲凝。
嗚咽鄭公橋下水。　秋風二十八王陵。

明月樓招宴席上　京城

羯鼓聲繁翠袖飜。　清歌曼舞古風存。
坐中誰是知音者。　白髮書生欲斷魂。

傲骨 （明治四十四年　四十九歲）

已難爲俗況爲仙。　謫落人間獨自憐。
却笑乾坤容傲骨。　春風四十九新年。

千歲村

殘紅新綠護衡門。　繞舍禽聲清夢魂。
不用桃源迴棹去。　一家鷄犬自成村。

元山

青螺若畫控江關。　靺鞨灣通虎島灣。
落日孤帆天在水。　那邊知是鄂羅山。

會寧

女眞高麗舊恩讎。　圖們長江日夜流。
烽燧不揚兵氣靜。　白頭山外是皇州。

奉壽淇水家尊九十

不求富貴不希仙。清白家風此裡傳。
休道長生有眞訣。渾將人事付蒼天。

南山下 京城

一碧秋天雁影微。隣邦遮莫羽書飛。
風塵不到南山下。紅葉滿庭閒息機。

秋風嶺

斜陽滿目舊山河。唯見人家點澗阿。
回首一年如一夢。秋風嶺上十經過。

芙蓉峰下有作

日夕雲烟往又還。青屏縹緲是仙寰。
名山不作不平色。白髮昂然天地間。

壬子元旦（明治四十五年 大正元年 五十一歲）

不嘆人生如露電。人生五十儘隨緣。
新年有此快心事。茅舍日高伸脚眠。

山陽道中

翠松粉壁幾人家。鷗影參差帆影斜。
半日山河海陬路。黃橙果果艷於花。

謁新嶋先生墓

滿山松柏任風吹。欲語當年更有誰。
不隔幽明論此志。夕陽墓畔立多時。

鵝湖

人家斷續擁天龍。幾道煤烟入碧空。
神女想應新出浴。湖山缺處見芙蓉。

江州曉景

升吹山色隔青霞。　已見風光到菜花。
應是野人春睡足。　曉烟淡鎖水邊家。

報恩庵

空留老樹護禪扉。　翁[illegible]作公掛衲衣。
昨是今非渾不省。　春山唯任白雲飛。

京城卽事

帝都新舊雜殘礎。　卽到京城春色加。
好是北南奔走客。　一年兩度看櫻花。

二樂莊

[illegible]館粉牆縣翠巒。　無邊眼界與雲寬。
山中不識人間熱。　七月清風拂面寒。

群鬼

眼中群鬼幾縱横。　知[illegible][illegible][illegible]晴白新。
一掃人間不平事。　漫漫白雪滿皇京。

漢江舟遊　（大正二年　五十一歲）

[illegible][illegible][illegible]屋家文案。　平沙[illegible]木水流斜。
二[illegible]坐石封多事。　[illegible]艇閑暇看浣紗。

別府卽事

亂石[illegible][illegible][illegible]野花。　蛩聲切切雜鳴蛙。
[illegible]身[illegible][illegible][illegible]立。　[illegible]萬壽頭曉月斜。

耶馬溪

奇峰怪石勢堂堂。　更有清溪百尺長。
山水不須詞客筆。　可憐[illegible]古賴山陽。

羅漢寺

危嵓缺處著孤亭。鶯語鵑聲脚底聽。
石佛無言僧不見。拂雲松影入簾青。

嚴嶋釣遊

觀音岳上黑雲頹。古聖埼邊白雨來。
風定潮清魚不食。暮天何處送輕雷。

青龍寺 七首

滿目青嵐杳不分。簟紋如水水成紋。
晚來岳麓千林雨。岳頂今朝一朵雲。」
少思多睡與吾忘。不厭人間夏日長。
籬下幽花花外水。輪來禪院北窓涼。」
江湖浩蕩懶振衣。問舍求田事亦非。
祗有故人傳好信。翠瓜黃黍雨餘肥。」
翠篁幽處水淙淙。高樹亂蟬吟滿腔。
亭午無風人不到。一雙黃蝶入閑窓。」
不肯參禪不念佛。青山滿目性靈凝。
半生閑却屠龍術。天地仍容有髮僧。」
桑陰漸少稻花香。野水縱橫傍徑長。
寄語鄉人能愛護。百年喬木鬱蒼蒼。」
萬籟清寥曉色開。一天如水絕塵埃。
空靈脉脉新秋氣。知自芙蓉頂上來。

日阪

幽燈喬木老祠前。月色蟲聲古驛邊。
仍是風塵頭白客。重來三十又三年。

癸丑歲晚

秋燕春鴻跡渺然。窮陰滿目鎖寒烟。
故人零落舊歡盡。回首一年如百年。

第十五章　書き遺せる思出を拾ふ

一　高島子爵と予

◇子爵のカバン洋行

予は今や長い間奔走したる政界と絶縁し、立憲者に立復つて以来のことを語る前に、予が親しく交つた政治家中、書き遺せる人々、及び語り忘れたる思出に就いて、少しく語りたいと思ふ。

予の交遊中、最も不幸なる一人は、恐らくは高島将軍であらう。此人は生前毀誉相半ばし、或は蠻勇黨の巨魁とか、非立憲政治家とか、種々の面白からぬ評判を受けた。併し多くの薩人中に於て、君は一種の好男児であつた。税所篤翁は老西郷の面影は、僅かに高島に於て之を見るといふてゐたさうだ。河島醇氏は何人にも頭を下げなかつたが、友人としては山本伯、先輩として西郷侯爵と高島子に傾倒してゐた様だ。予は明治三十年の暮、第二次松方内閣没落後、勝海舟翁の家に遊ぶか、さもなけれ

ば高島子の所に半日を暮らし、莫迦噺をして欝を散じてゐた。予が高島子と相知つたのは日清戰役前であつた。本來予も高島子を蠻勇一點張りの漢で無ければ、野心滿々たる大山師と考へてゐた。曾て友人が予の事を將軍に話した時に『德富といふ奴は猿見たやうな奴だらう』といふたといふ事である。
併し偶然一見して、互に終生の交情が成立した。予が明治二十九年洋行する時などは、銀座裏通りの予の下宿屋まで馬車を乘りつけて來たり、途中の持藥やら鞄なども贈られた。此鞄は將軍と一度世界を漫遊して歸つて、再び予と世界を漫遊し來つて、三たび大西操山の洋行に伴うた。今は行衞が分らぬが、高島子から予を經、大西博士に至るまで三回の洋行をして、三人の主人に仕へたものである。鞄としては奇しき運命を有つたものといふべきであらう。高島子は決して利慾の人ではなかつた。但だ政治家となるには、金持となる必要があると考へて（中江兆民翁の如きも亦た同樣であつたが）遂に鑛山事業に手を出した。然るに所謂る士族（新華族）の商法で、其爲めに頸も廻らぬまでになつた。予は曾て予が一友人の外國に在るものから、學費の調達を依賴せられ、故兒島惟謙氏と相圖り、兎も角も高島子に相談すべく、紀尾井町の邸に出かけた。兩人應接間にて待つてゐたが、其の內部の模樣を見るに、何やら苦しさうに直覺せられた。そこで兒島翁と相語つて云ふには、こゝの親爺にいへば否とはいふまい。併しどう考へても氣毒だ。何とか別に功夫をしようと、遂に兩人申し合せ

て、其話を持ち出さずに歸つたことがあつた。

高島子の晩年には及ばずながら予も何とか平昔の厚誼に酬いたいと思ふて、些か骨折つた事があつたが、何事も微力で思ふやうに參らなかつた。但だ子に對する『國民新聞』紙上の弔詞は、予が心から子に手向けたものであつた。高島子は英雄ではなかつたが、其の出來損ひであつた。出來損ひながらも何處やら英雄らしき馨りがした。詰り若い時から、頭を叩くものがなく、我儘勝手に增長したからであらう。それに比ぶれば、川上子は十二分の訓練、修養を經て來た人で、如何なる場合に於ても、成功者たる資格があつた。仕事の上の相談相手としては、川上子は寔に有用の器であつたが、人間としての面白味は、寧ろ高島子に多かつた。予は今でも此の未成品といふよりも、出來損ひの英雄の破片とでもいふべき、高島子を憶ふのである。

二　西園寺公と予

◇公と三つの旨

予が西園寺公と相知つたのは明治十九年の夏で、未だ『將來之日本』を出版しない前であつた。予

は初めて公を高輪の伊藤公邸に訪うた。其邸は今は岩崎男の邸となつて居るが、當時西園寺公は伊藤公の邸に居候をして居られたやうだ。當時の公は實に白面秀容、風采瀟洒であつた。頭髪は眞中から分けられて、一本の髪毛さへも亂れてゐなかつた。眞に古人の所謂翩々たる濁世の佳公子であつた。而して其の談論風發、實に予を傾聽せしめた。予は初對面に滅多に人には感心せぬが、此若き華族さんは只物でないと思ふた。當今の言葉でいへば全く公に魅せられた。爾來公から幾多の厚誼を荷うた。また公に向つていろ／＼の面倒を持ち込んだ事もあつた。併しながら中年以後は、予の政局に於ける立場に、動もすれば公と同じきを得なかつた。其爲めに往々『國民新聞』の筆法は、個人的ではないが、政治的に非難攻撃の鋒尖を向けた事もあつた。併し今から考へて見れば、予が一介の書生として東京に來た時に、何等の縁故もなきに、公から好意を忝くしたのは、今以て知己の感がある。何とかして酬いんとするが、不幸にして未だ其の機會を得ぬ。

予は曾て西園寺公を評して、公には英語で三つの I がある。第一はインテリゼンス（聰明）である。第二はインドーレンス（無精）である。第三はインデフェレンス（無頓著）であるといふたことがある。併し今から考へて見れば、多少修正するの必要があるやうだ。第一は勿論である。公の如き聰明の人は、絶無とはいはぬが、當代比類鮮からう。無精といふていゝか、我儘というていゝか、之

も其通りであらう。併し無頓著ではない。無頓著のやうに見ゆるが、公は公の流儀でなか／＼頓著してゐる。伊藤公が初めから公に目をかけて、其の衣鉢を相續せしめんとしたのは、薀き入つた眼識といはねばならぬ。併し何やら公は英國のロズベリー卿を聯想せしむる所がある。公は如何なる人物であつたかといふ事に、公が或る程度に於て、山縣公の苦手であつた事を見ても想像がつく。

三　伊藤公最後の一の思出

◇ハルビン出發前のエピソード

予と伊藤公との關係は既記の通りであるが、晩年は隨分懇親なる交誼を辱うした。併し予は相變らず伊藤公の政治の批評家であつた。而して前にも述べたる通り、予は伊藤公と接觸するには、先づ其反對者として始つたのである。それで公の缺點、弱點は、未だ公を見ざる時から百も千も承知してゐた。

併し公と接近するに至つて、相見る事の遲かつたのを悔いた。公は明治時代の一大經世家である。政治家などといふのは公に對して失禮であらう。人は其弱點を以て世に繋がるといふが、公に一種の

稚氣があつたのは、公に接觸するものにとつては一種の愛嬌であつて、端なく其人間味が暴露したものと見らるゝ。公が哈爾賓の厄に罹りたる最後の旅程に上らるゝ際には、當時の首相桂公は、國際新聞協會の連中を陪賓として、首相官邸に晩餐會を催した。大隈侯の如きは、滅多に著けた事なき燕尾服を、わざ／＼新調して著けて來たといはれた。列席者は桂、伊藤、大隈、小村、其他内外新聞記者等であつたが、予は久し振りに伊藤、大隈の兩雄が、テーブルを隔てゝの舌戰を見た。凡そ世の中に面白き角力はあるが、テーブルの上に於ける伊藤、大隈の太刀打ほど面白いものはなかつた。桂公は起つて伊藤公の爲めに祝盃を擧げられたが、何人も大隈侯の爲めに祝盃を擧ぐるものがなかつたから、伊藤公は特に起つて、大隈侯の爲めに祝盃を擧げられた。惟ふに之が兩雄の最後の別れであつたらう。

伊藤公は餘程滿足されたと見えて、外人の客の歸り去つた後まで居殘り、予は吾が同業記者の望みに任せて、メニューの裏に少からざる公の署名若くは揮毫を求めた。中には使ひ古るした手巾を出してさへ需めたものがあつたが、伊藤公は之は困るといふて頸を振られたけれども、予が強つて折角の事だからといふたから、いよ／＼書く氣になられた。扨て何を書かうかといはれるから「豪氣堂堂横大空の詩は如何でせうか」といふたら、『あれは少壯の作だから面白くない』といはれ『それなら滿

目江山帯夕暉の詩は如何でせう』といつたら、早速それを書かれた。今から思へば何となく讖をなしてゐるやうだ。其後愈々伊藤公の出立せらるゝ際には、大磯まで出掛けて送つたが、何やら心殘りがあるやうに覺えて、更に國府津まで見送つて別れた。之が公と予との最後の別れであつた。

四　大隈侯の晩年と予

予は前にも記した通り、第二次松方内閣沒落後、大隈侯とは殆ど十箇年も交通を中絶してゐた。併し十年も經つて尙ほ不通であるといふ事は、如何にも遺憾であつたから、或る招待の日に出かけて行つた。而して園内を歩いて居る中にヒヨツコリ出逢うたのが、大浦子爵であつた。『之は珍らしい』と此方からいへば、向うからも『之は珍らしい』といふた。兎に角互に意外であつたに相違はない。大浦子も『こゝは滅多に來る處ではないが、今日は兎も角もやつて來た』と云ひ、予も亦た同樣の答をした。

爾來幾もなく侯とは舊交を恢復した。固より第二次大隈内閣の當時は、相變らず猛烈なる批評を加へた事もあつたが、政治上の事は政治上の事として、晩年に及んでは殆ど當初の如く親密になつた。

而して、教育問題、歷史問題、文明問題などについては、其の趣味が共通したから、屢ゝ同じ演壇に立つた事があつた。詳かにいへば、吾社の催し毎には大隈侯の臨席を乞うた。而して如何なる場合も吾社の乞ふ所に向つて、殆ど否といはれた事はなかつた。予は大隈侯の病床に、侯が愛せられる所の蘭を贈つた。之が侯に對する所謂る一片の芳心であつた。侯についての評論は、今此に試むるまでもなく、實に侯が去つて以來、世の中が如何に淋しくなつたかを思へば、侯の一身が如何に社會の多くの場面を賑はしてゐたかが判る。

五　井上梧陰先生と予

◇先生の遺稿『財政論』

◇山田武甫翁と予

予は吾が同鄉の先輩であつた井上梧陰先生とは、本來同鄉といふ以外何等の關係もなかつた。學統の行き掛りよりすれば、寧ろ互ひに反對黨であつた。併し、予が未だ東京に出で來らざる以前から、予の文章を見て、盛んに吹聽せられたやうだ。或は元田先生に向つて、或は伊藤公、山縣公、松方公

等に向つて。

ところが井上先生は議論家であつて、面會する毎に議論を闘はしめた。予は此人は學者でもあり、論客でもあるが、到底刀筆の吏たるを免かれぬと思つてゐた。併し、それは予が管見であつて、先生は決して刀筆の吏では無つた。其の功業の一半は緣の下の力持で分らぬが、伊藤公はいふまでもなく、岩倉公に最も信用せられ、又た文教の如きは、森子が文部大臣たる際は固より、自ら文相となつて以來、其の冥々の裡に貢獻せられた所のものは多大であつた。予は先生の如きを、模範的官人と認むる。前にも述べたが、先生が或る問題に就て、進退を決せんとした事がある。其時に予は私かに先生を訪ふて云ふた。『河童は水の中に居つてこそ河童だ。水を離れた河童は何でもない。先生は明治政府の中にあればこそ先生だ。今更ら民間に下つたとて、恐らくは思ふ程の仕事も出來まい。寧ろ此際は思ひ止まられた方がよからう』と。有體にいへば予の立場からは、寧ろ先生に辭職を勸告すべきである。然るに予の告ぐる所は其逆であつたから、當時先生は、予が故らにかゝる議論を擔ぎ出して、先生を試みるのではなからうかと思ふたらしいが、他日先生は云ふた『實はちよつとさう思はんでもなかつたが、親切に斯く自分に忠告して呉れたのは、君と清水小一郎だけであつた。』と。

斯くて先生が死に垂んとする時には、予に死後之を公けにせよといふて、其の手稿にかゝる『財政

論」を與へられた。斯くて其の遺書には棺側につく一人に加へられてゐた。予は先生の生前には議論の方が多くて、互に心事を打ち明けて語る事が少かつたから、先生の厚誼を感ずる事が、左程でも無つたが、清水小一郎君は井上梧陰先生の尤も信頼したる門下の一人であつた。先生曾て薩長藩閥の巨頭某々に語つて曰く『德富は御身達が、如何なる寵榮高祿をもて買收せんとするも、到底是れに應ず可きものではない。渠には當人の了見があり、眞骨頭がある』と。是れ清水君が先生の死後予に諗げたる挿話の一である。今更ら予が梧陰先生を知ることの深からざりしを愧づ。先生逝いて後、予は先生を知る事の淺かつたのを悔いて、今尙隨時谷中瑞輪寺の先生の墓に詣つてゐる。

而して之と偶然にも相對したる墓が、吾父の執で、予が最も敬愛したる山田武甫翁である。翁は予の知り得る限に於て、人格者の一人であつた。予が明治十三年熊本に歸つて以來、十九年東京に出づるまで、また翁が代議士として東京に出で、明治二十六年の初めに、病を押して彈劾的上奏案の決議に加はるべく議場に赴き、やがて倒れるまで、翁は實に予にとつては二つなき先輩であり、翁も亦た年齡の相違に拘らず、予を友人視して何事も予と諮つた。翁の如きは何等赫々たる功名なきも、所謂る古人の智名もなく勇功もなき、賢者であつた。故に予は翁の墓を訪ふ時には、井上先生の墓にも禮し、井上先生の墓を訪ふ時には、翁の墓にも禮してゐる。

また予が大江義塾時代中、予の落寞を慰めたものは、前にも述べたが、行徳先生であつた。予も熊本に歸つた際には、自分ながら予の文章が如何なる程度まで發達せるかを知らなかつた。併し一篇成る毎に之を先生に示せば、推賞措かず、先生から油をかけられ、不知不覺、愈よ勉强するに至つた。予をして新聞記者として、今日あらしめたのは、また先生の獎勵提撕に負ふ所が少くない。

六　福地、福澤兩氏の回顧

◇『幕府衰亡論』と『瘠我慢の說』

尙ほ序ながら、福地、福澤兩氏に就いて語つてみたい。

予は福地氏とは文章以外に何等個人的關係はなかつたが、氏が或る事件の爲めに、一時悲境に陷つて、跡を社會から潜めて居られた際、漸く氏の在家を突き止め、氏を築地の僑居に訪ひ、遂に氏を慫慂して『幕府衰亡論』を『國民之友』誌上に掲ぐる事とした。其時福地氏は、一枚一弗（圓の事）でなければ書かぬと云うた。其の一枚と云ふは十行廿字であつた。當時の原稿料としては、其が破天荒であつたかも知れぬ。併し予は欣然として之に應じた。今日から考へて見れば、氏の作は一生を通

じて澤山あるやうだが、若し必傳の作を求めば、恐らくは此の『幕府衰亡論』であらう。予は福地氏の作としても、之が第一等であると思ふ。之は福地氏の知識、經驗、同情、文藻の四つのものが、旨く調和して出來たものである。其の立論も自ら公平穩健である。或は些か上辷りした觀察ではないかといふ非難もあるが、併し其のヒネクレず、何處までも紳士的態度である所に、福地氏の本色がある。中江兆民翁が、樗癡氏の文を評して、『恰も五紋附の羽織に袴を著け、扇子を握つて白足袋をはき、ソロ〳〵と推し出したやうだ』といふたやうに記憶して居るが、蓋し適評であらう。予は兎も角も此の『幕府衰亡論』を、福地氏に書かしめたることを以て、私かに自分の手柄と信じ、且つ些か福地氏に酬ゆる所があつたと喜んで居る。

明治三十三年の末か、四年の初め頃かと覺ゆ。福澤翁は曾て勝、榎本二氏の出所進退に釋然たらざるものあつて『瘠我慢の說』なるものを書き、それを兩氏に示されたることがあつたさうだが、久しく其れを筥中に藏して居たに拘らず、何を感じられたか、其れを當時公にせられた。勝先生は福翁から返事を求められたに際し『行藏は己れに在り、是非は人に在り、御意見忝く承り置く』といふやうな挨拶をされた。流石に先生だと思つた。然し、後進の予としては既に世間に公にせられた以上、それを看過する譯には行かなかつたから、自ら揣らず、『瘠我慢の說を讀む』といふ題にて、予

の所見を陳じた。

自ら僣して海舟翁に代りて陳じたといふではない。併し翁の意志を忖度すればまさに此の如くあるべしと思ふたのであつた。ところが其の論文は意外にも反響があつた。之に對して更に福澤翁の駁論が出で來つた。此れは翁の尤も信頼したる門人をして、代稿せしめたるものと信ぜらるゝ。その後やがて間もなく翁は逝かれた。翁は一度腦溢血に罹られたが、それが若干快くなつて、その間に先きの『瘠我慢の說』が發表されたのであつたが、右に對する予の駁論に答へられたる間もなく、再び其病に罹つて逝かれたのである。予は今尙予の說を是なりと信じて居る。卽ち勝海舟先生が恭順論を徹底せられたのは、日本國家の爲めに計つて忠なるものと信じて居る。さなくば幕末の日本は、或は外國の干涉を惹起したかも知れぬと信じて居る。當時に於ては慷慨悲憤の主戰論よりも、穩當著實の恭順論を主張する方が、大智、大略、大膽、大勇を要したと信じてゐる。一身上の安危からしても、海舟翁の如き立場に立つ方が、より危險であつたと信じてゐる。

因みに云ふ、予は生前に福翁とは沒交涉であつたが、翁の長逝に際しては、直に翁の靈前に向つて、一瓣の香を捧げた。

每遇登臨好風景。
羨他天性少情人。

第十六章　政界絶縁と立言者

一　政界との絶縁と修史の素志

◇父の死と修史の一頓挫

大正二年十月桂公が此世を去つて以來は、從來の政治上の繫累なるものは、殆ど全く無つた。予が自ら進んで解放を求むる迄も無く、解放そのものが予を驩迎したる狀態であつた。これからは愈よ文章報國の新たなる生活である。

實を云へば過去十數年間は、予の身體若くは予の頭腦が忙しき割合には、予の著作は寧ろ乏しかつた。卽ち政治の實戰上に――黑幕とは云ひながら――出入したる予は、その爲に忙殺せられて、著作などを顧みるに遑なかつたのだ。然るに天はこれからして、その自由なる時間を予に與へた。

予はこれから愈よその果報に對して、報ゆるところがあらねばならぬ。此の如くにして、爾後予の

著作は、敢へて世を驚かす程とは云はぬが、予自身としては、可成り分量に於ては少く無いものを産出した。

當時猶ほ時の內閣や、時の政黨は、予に向つてその助力を求めたものもあつたが、予は孰れに對しても偏たく黨なく、中立の立場にあつて、全然自己の面目と精神とを、發揮することとした。併し從來の舊友なる、例へば大隈、後藤、平田、大浦、若しくは野田、長谷場などとは、依然相當の友誼を持續してゐた。

予は豫ねて予の晚節を修史の爲に效さんと考へてゐた。歷史は母の胎內にゐた時からの、好物であるとも、云ひ得らるゝ程であつた。されば如何なる場合にも、古老、長者から、その實歷談を聽くことを忘れなかつた。而して如何なる場合でも、その資料を蒐集することを怠らなかつた。

唯だ修史は晚年の事業と考へて、自らそれに著手するを、敢へてしなかつたのである。併し大正の御代になり、桂公とも別れ、實際の政治とは全く緣を切つて見れば、予の心頭に上り來るものは、獨一修史の問題であつた。況んや平生春秋に富むとばかり思つてゐた予も、風塵の間に奔走して、最早や人生五十になりかけたことを思へば、聊か自ら驚かざるを得なかつた。

此に於て猛然として、最早や最後の仕事に著手すべき時期の到來を、痛切に感じ、愈よそのことに

手をつけ初めたのが、大正二年の暮から三年の初であつた。

予は思ひ立つては早速著手するの流儀で、無暗に思案分別してゐることを、屑しとしない性質であるから、二三の同志の士にもそのことを語り、彼等にも予の助手たらんことを求め、それぐ〜調査の方針なども申渡した。

さればもしその計畫通りに行けば『近世日本國民史』の第一巻は、遲くとも大正三年の下半期には、出で來るべきであつた。然るにそれが意外にも頓挫したのは、予の父の死であつた。

父にも予の修史のことは相語り、父よりは是非長命して、それの出で來るを讀み度いと申してゐたが、意外にも大正三年五月、予の父は昇天し去つた。父のことは改めて書き度いと思ふから、此に詳しくは云はぬが、予は父を喪ふて後、初めて如何に予の生活の中に、父が多くを占めてゐたかに氣付いた。

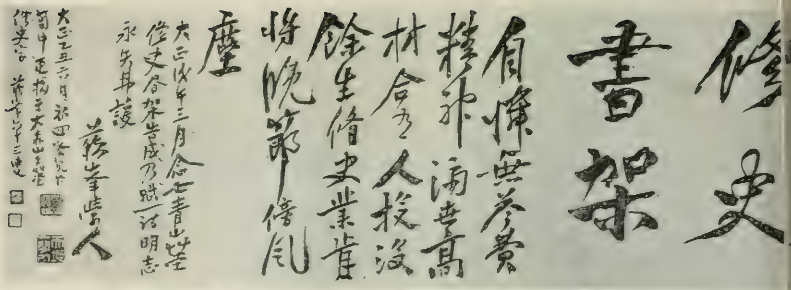
一口に云へば、父を失ふたる後の予は、當分生ける屍も同様にて、何も爲す勇氣も無ければ、元氣も無く、唯だ機械的にその日を送つてゐた。父は大正三年に九十三を迎へて、尚ほ健全であつた。但だ耳が遠くなつた迄にて、目も確かであり、記憶も確かであり、脚力も確かであり、予は尠く共百歳迄は間違無しと思つてゐた。

大正三年の春は、兩親を東京に迎へ、或は小金井に櫻を觀、或は日比谷に躑躅を見、但だ大森——現在の山王草堂の地所——の山に遊びに赴かんと誘つたるに、少しく疲勞したから、次に讓るといふことであつた。

斯くて五月十日に、多くの孫等を伴ひ、逗子に歸へり行いた。五月の二十日頃には、予は又た京城に赴くことゝなり、父よりは送別の詩なども贈り來つて、既に急行劵や、寢臺劵を求めてゐたが、遽かに父が膀胱結石といふことにて、種ゝ工夫をしたが、兎も角も東京の方が便利であるから、二十日に伴ひ來つたが、その時には、舊の新橋停車場の長きプラットホームを、他人の助けをも俟たず、一人にて濶歩して行つた。元より九十三になつても、死ぬるといふ覺悟も無つたと見えて、逗子からは愛讀の書籍なども、少からず持參した。

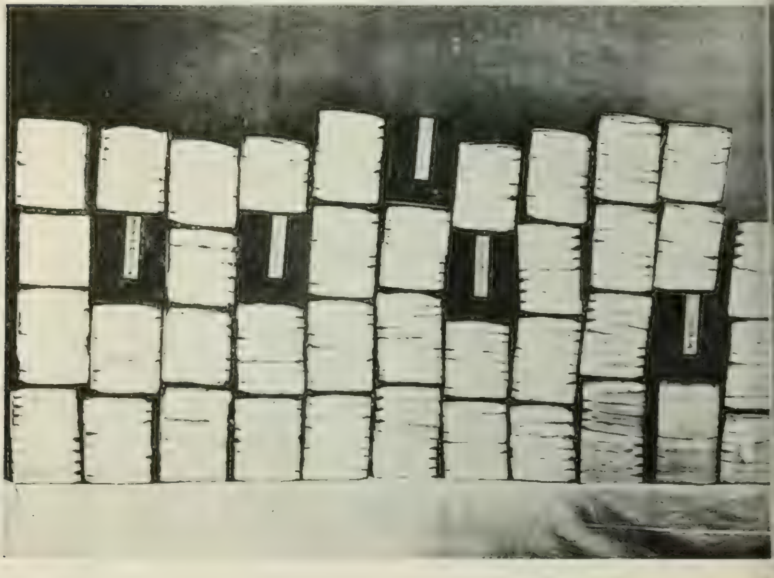
然るに、病症は面白からず、さりとて、老人であれば手術といふことも面倒であり、その二十五日には、愈ゝ病院に入院するといふことになり、予もこれは持久戰と考へて、修史の資料なども自ら携へ、病院に當分起臥する積りにて、父に伴ひ出掛けたが、その翌二十六日の未明には、遂に不歸の客となつた。

五十の子が九十三の親を喪つた云つて、左程落膽するなどといふことは、常識から考へて不思議の



大正七年修史書架成るを告ぐ　即ちその所懐なり

「近世日本國民史」三十八冊分の原稿全部



朝鮮慶州新羅武烈大王殘碑龜趺上に於ける蘇峰翁

樣だが、予の心境は、到底常識にて判斷が出來なかつた。實を云へば、予の子供の時から、吾父には頗る慊らぬ處があつた。予の眼から見れば、父は餘りに莫迦正直である。餘りに謙遜過ぎる。餘りに自己沒却である。餘りに小心翼々である。子供心にも、俺ならば斯くするものをと思ひ、父の進退に就いて、生意氣ではあるが、齒痒く考へたことも、一再では無つた。

併し段々年をとるにつけて、父は寔に善人であり、尠く共善を好む人であり、責任觀念の甚だ濃厚なる人であり、道義的最高標準から見れば、縱令多くの缺點ありとするも、予の自ら企て及ぶ處で無いと思ひ、自然に吾父を崇敬するの念を加へ來つた。

のみならず父は何よりの子孝行にて、予も餘儀なく親孝行たらざるを得ざる次第となつた。されば血統の上からは、父子といふも、情誼の上から云へば、師弟であり、朋友であり、知己でもあつた。予は吾父に、殆ど何をも隱くすところなく、又た父を樂しましむること以外に、自己の利害などといふことを、殆ど考へたことも無く、貴族院議員になつたことなども、自分としては、別段難有いとも思はないが、父の滿足の爲には、寔に予も亦た、滿足せざるを得なかつたのだ。

されば父の去つて以來は、毎日家族の者と共に、墓詣りをするの外、他に爲すことも無く暮した。而して到底修史の筆を執るの氣分になれなく、只だその日〳〵の仕事をしてゐたが、此に同年夏から

世界大戰が始つたから、當分は予の心も世界大戰に向つて一轉し、一切の力をそれに向つて傾けた。卽ちその結果として出で來りたるが『世界の變局』である。

而してその閒桂公の傳記などの編纂に依つて、漸く窮愁を散じた。桂公の傳記は、前に記したる如く、大正四年より初めて、六年二月には、完成出版した。

二　大正三年より七年に至る予の著述

大正三年五月、予の父の永眠より大正七年五月、愈〻『近世日本國民史』の筆を執るまで、滿四ケ年は如何にして暮した乎、予自らも殆ど記憶が無いが、併しその間に於て『國民新聞』と、京城に於ける『京城日報』との二新聞以外に、予の筆硯は可成り多忙であつた。

卽ち大正四年には前に記したる如く『世界の變局』を三月に出し、九月には『兩京去留誌』を出し、十二月には『蘇峰文選』を出版した。大正五年の三月には、『大正の青年と帝國の前途』を出版した。これは予が『近世日本國民史』の小手調べとも云ふべきものであつて、他日予が『近世日本國民史』の結論として、書かんと欲するところの若干は、これに揭げて置いた。

而してこれの賣行は、恐らくは予の總ての著作中に於て、最も多くの一であつた。今その數を正確に語ることは出來ぬが、既に百二十六版を重ね、一版毎に最少千、最大に至つては、數千部を印刷したから、如何に少く見積つても、十五萬部以上は、賣れ行いたものと思ふ。

予は大正五年元日に『先生別有二一年計一。欲レ作二維新興國書一』といふ詩を作つたが、その書初めたのは、實に三月下旬であつた。

大正六年の二月には『公爵桂太郎傳』が出來た。これは專ら社友の力を集めて成したるものにて、予は指導者、及び責任者たるに止つたが、併しこれも又た予の勞力を要したことは、決して尠くは無つた。

而して九月には『杜甫と彌耳敦』を出版した。これは『大正の青年と帝國の前途』と對照して、彼は予の著作中、最も世に擴がり、これは寧ろ識者間にのみ、讀れた本であるが、併し予は十數年來、此の著作を心掛けてゐて、漸くこれを成したるものにて、他人に讀ましむるよりも、予自ら予の豫ねて思ふところを、述べたることを、自ら愉快とせざるを得なかつた。

斯くて九月から朝鮮、滿洲を經て、再び支那を漫遊した。その結果として大正七年六月に『支那漫遊記』が出で來つた。これは明治三十九年十一月に出版したる『七十八日遊記』と對照して、如何に

十餘年を隔てたる、予の支那に於ける觀察が變化した乎、又は支那自身がこの間に於て、如何に推移したかを、見るに足るものがあるであらう。

斯くて愈〻大正七年五月、『修史述懷』を發表し、七月一日より『近世日本國民史』を『國民新聞』紙上に連載し、昭和四年一月十六日に至つた。

而して今猶ほこれを『東京日日』『大阪毎日』に連載しつゝある。今から考へて見れば、豫期の通り大正三年から筆を執つたならば、その進歩も相當に見るべきものがあつたであらう。

然るにそれを四年間も放擲したのは、今更ら申譯無き次第であるが、併し予の父の永眠が、如何に精神的に予を、殆ど半死半生の狀態に陷いれたかは、以つて知る可しであらう。

而して大正七年に至り、時は漸く予の受けたる傷を癒し、しかも前途を考ふれば、予も既に五十六歲となつた。卽ち賴山陽の死は五十三歲であることを考へ、予は寧ろ修史の大事業に取掛るには、遲れたるに氣付き、猛然として筆を執り初めたのである。

而して七月には安土、賤ケ岳、桶ケ瀨等、織田氏に關する史蹟を踏査し、十二月に至りて『織田氏時代前篇』を發行するに至つた。これが修史の第一程であつた。

三　盲腸炎の大手術

◇逗子に於ける養病と修史

大正八年は予にとつては、全く意外の年であつた。予は大なる希望と愉快とを以つて、新年を迎へた。當時の詩に、

「餘生碌々愧二顓顓一。著作寧期千古傳。
遲暮雄心猶未レ息。笑迎五十七新年。」とある。

全くその通りであつた。然るに好事魔多し、實に思ひもよらぬことが、續發した。二月といふ月は元來予にとつては、甚だ面白からぬ月である。

此の二月には予の次男萬熊が、逗子に於て吐血し、その爲に予の妻は逗子に赴いてゐた。予の門下生と云はざる迄も、それに類したる古谷久綱君は、遂に志を抱いて斃れた。予は内外にかけて心配が多かつたが、二月十六日の夜に至つて、非常なる痛を腸に感じた。

予の腸の病氣は、今に始らぬことにて、隨分それには惱まされてゐた。近くは大正六年支那漫遊の

途次、大連に於て病に罹り、實は引返へさんと思ふたが、兎も角も小康を得たから、漫遊を果たすことが出來た。

然るに同夜は一睡も出來ず。此に於て予は、これが所謂る盲腸炎であらうと氣が付いた。實はその以前から屢〻腹に痛を感じ、且つ足が引きつりて、如何にも不愉快であつたが、多分これは老衰の致す所であらうと觀念してゐた。人々も近年予の面色が、何となく土の如く、殆ど生氣無きを見て、不思議に思ふてゐた相だが、誰もそれと予に親しく告げ知らした者は無つた。

斯くて兎も角も逗子なる妻を呼寄せ、それ〳〵醫師に診斷して貰つたが、果してそれが盲腸炎であつた。しかも十八日には予の母は、九十一歳にて病無くして朽木の倒れるが如く逝いた。しかも同じ家に住みながら、予は母の遺骸の傍に行くことさへ出來なかつた。

三月には築地林病院に入つて、大手術を受けた。元來盲腸炎の手術と云へば、せい〴〵三十分位であると聞いたが、予の手術は殆ど三時間に亙つた。固より予は自らその經過を知らなかつたが、後にそれを聽いたのである。

而して予の病症は、頗る危險狀態にて、その盲腸及び周圍に群り生じたる腫物は、手術者の兩手に掬するに餘る程のものであつたさうで、後にそれがアルコール漬になつたものを示されて、予も自

ら驚いた程であつた。

要するに手術せざるも危く、手術するも危く、何にしても九死一生の所であつたが、幸に助かりてそれから四月下旬湯ケ原に轉地療養し、七月には又た手術を受け、八月以來は逗子に滯在して、養痾の傍ら、專ら修史の事業を繼續することゝした。

それ以來大正十二年九月、大震火災後に至る迄、滿四ケ年間は、予は逗子にて暮した。偶ゝ一週一回位は東京に出で、國民新聞社の社務を見たけれ共、予の生活は專ら逗子にあつた。若し予が此間東京に在つて、常に社務を見たならば、如何に震災に罹りたればとて、彼程迄のことは無つたかも知れぬと思ふも、これは唯だ爾後に於ける想像にて、死兒の齡を數へるも同樣、彼是云ふだけが愚痴であらう。それに比ぶれば、寧ろ予が一命を取止めたのが、却つて仕合せと云はねばなるまい。

四　國民教育奬勵會の創立

予は築地の林病院に手術後の病を養つてゐる中に、『國民新聞』の一萬號の記念事業として、國民教育奬勵會を創立せんと思立つた。幸に大方諸君の贊成を得て、予が自ら一萬號の記念として、

一萬圓を寄附し、遂に吾が國民教育界に於ける、一個の大なる、財團法人を組織するに至つた。

その貢獻したる事業に就いては、別に記する所があるから、此には掲げないが、兎に角會長故澤柳政太郎博士を始め、會員諸君の努力に依つて、發起者たる予の期待以上の成績を收めたるは、予の最も感謝するところである。

しかも又た此のことが天聽に達し、教育に關する大正天皇の御宸筆の御製を拜寫謹頒するの御許可を賜り、大正十一年には、御内帑金三千圓御下賜の光榮に浴したることは、感激の至りに堪へない。

大正九年には、前年の病も漸く平生に復したから、四月妻を伴ひ、伊勢大廟、畝傍御陵、桃山御陵、出雲大社を參拜し、山陰の山脈を横切り、嚴島に出で、約一ヶ月の旅行をなした。而して修史中にも拘らず、九月には『大戰後の世界と日本』を出版した。これは『大正の青年と帝國の前途』と『世界の變局』との前二著に接續するものと見ても、よきものであつて、予自身としては、可成りの力作であつた。

予の妻は父母の存在中は、固より父母に奉仕することを專一とし、殆ど東京と逗子との往來以外には、何處にも足を踏出さなかつたが、爾來漸く共に旅行するの時機に到著することを得た。

話は少し後に戻るが、予は大正二年以來『國民新聞』を以つて、全く獨立の新聞となし、偏せず、

黨せず、その信ずる所を述べた。

然るに大正七年寺内伯が内閣首班たる際、『國民新聞』の議論が忌諱に觸れたとかいふことにて、予の朝鮮に於ける『京城日報』の監督たる位置に就いて、彼是物議を挾む者があつたから、予は決然としてこれを辭し、その關係を絶つた。

予の見る所では『京城日報』は朝鮮總督府と緣故ある新聞であれば『京城日報』に依つて、總督府を攻撃するといふことは、その筋道を失つてゐるが、緣も由緣も無き『國民新聞』が、寺内内閣に對して、率直の批評をしたとて、何等予が『京城日報』監督者たるに於いて、煩となすべき理由は無いと考へたが、斯ることは單純な道理のみで行くべきもので無いから、予はその爲にこれを擲ち去つた。

しかも予はこれが爲に餘力を蓄へ得たから、愈よ修史に全力を竭さんとする矢先きに、前に述べたる通り、八年二月の大病を惹き起した。見來れば人事意の如くならずとは、全く此のことであらう。

五　朝鮮に於ける予と名總督寺内伯

予は自ら朝鮮に於て何事を爲した乎といふことを、語るを欲しない。それはこれを語れば、勢ひ自

家の廣告となるからである。併し極めて概略的に云へば、予が明治四十三年九月より、朝鮮に於ける『京城日報』監督の任に當り、大正七年七月まで約八ヶ年間、京城に於ける勞苦は、必ずしも無用では無つたと信ずる。

尠く共予は朝鮮併合當時に於ける、言論機關を統一することに於て、聊か微力を效した。言論機關の統一といふことは、言論の自由といふことゝ、殆ど相反する如き意味をなすものであり、事實往々此の如きことがあるが、しかも予の見る所に依れば、併合以前の朝鮮に於ける言論界は、紛々として亂麻の如く、若しこれを統一せざる場合に於ては、切角の併合も、殆ど水泡に歸するの、虞無しとしなかつた。

されば若し併合の目的を、完全に達せんとするには、是非共或る期間は、言論の機關を統一し、尠く共日韓併合の聖旨に副ふべき、順序を踏む可き必要があつた。

この事に就いては、寺内伯は固より、當時警務總監部に於ける、明石將軍が、予と同心協力して、殆ど予の云ふ所を、十中九分九厘まで同意し、これを援助したことを、予は此に特筆して置かねばならぬ。

又た予は及ばずながら、日本人が新府の民たる朝鮮人に對する態度に就いて、最も丁寧親切、恭敬

慇懃なるべきを以つてした。

而して事實予自身も、朝鮮諸名士と互に遺憾無き交際を結び、予は李完用、宋秉畯、趙重應等の諸氏を、友人に數へ得るのみならず、李埈鎔、朴泳孝氏等は固より舊知であれば云ふ迄も無く、其他各方面の朝鮮人士とも、互に眞率なる交際を爲し、聊か彼等の感情を融和するばかりで無く、その意見をも、疎通するの便を計つたと思ふ。

又た朝鮮統治に就いても、朝鮮の各地を巡回し、寺内總督にもそれ〴〵意見を陳述したることもあり、其他文化國としての朝鮮を識認し、朝鮮の文化に就いて、これが發揚を竭めた。例せば朝鮮人名辭書、若くは朝鮮史の編纂、而して海印寺一切經の印刷など、必ずしも予一人の意見とは云はぬが、予の意見も亦た多少の關係があつたことゝ思はるゝ。

猶ほ予は朝鮮自治に就いては、夙に見る所があつて、朝鮮人の要求に先立ち、我より進んでこれを與ふべきことを主張し、その爲には朝鮮の重なる人士を、吾が貴族院に勅選若くは選擧せしむるばかりで無く、朝鮮に於て、朝鮮議會なるものを開くの必要をも認め、これ等の意見も、或る方面には陳述したることもあつた。

寺内伯は明治二十七八年役以來、寧ろ予とは親交ある一人であつて、最後には『京城日報』の一件

に就いて、予が關係を絶ち、その內閣の施設に就いても、多少予と意見を異にし、その爲に一時疎遠にたつた傾があつたけれ共、併し交情そのものは、毫も變らなかつた。

大正八年予も病み、寺內伯も病んでからは、互に書信を往復し、寺內伯よりは、予に向つて書簡のみならず、見舞の菓子なども贈りて吳れたが、予も病の爲に往訪を果さず。遂にそのまゝ永訣となつた。

併し予は寺內伯は、如何にも立派な政治家の一人と思ふてゐる。狹量とか小型とか種々註文をすれば、云はれないことも無いが、併し君國を憂ふる公人であつたことは、決して間違ひはあるまい。爾後の朝鮮總督は、種々あつたが、恐らくは朝鮮人の爲に、毀譽褒貶を顧ず、眞面目に働いた人としては、何人も寺內伯に及ぶ者はあるまい。

六　予の還曆と青山會館の設立

◇帝國學士院恩賜賞の授與

予が逗子養痾時代卽ち大正八年八月より、大正十二年九月迄には種々の出來事があつた。その間に

は內地は固より、十年には朝鮮、奉天邊に遊び、又た十一年には久振りに故鄕に歸つた。久振りと云へば、明治三十三年伊藤、井上兩公に伴つて歸へりたる以來のことである。

又た同年は北海道にも赴いた。予は何時迄も逗子に退隱する積りは無つた。何れ愈〻予の身體が從前にも増して、壯健となりたる曉には、再び東京に出掛けて、主として社務を總攬する積りであつた。併し斯くすれば、予は再び多忙の身となるからして、その以前に成可くは、旅行などもして置きたいと考へて、その爲に概して春秋二季には、妻を伴ひ、時としては子を伴ひ、旅行したのであつて、此間に於て、予が考へたることは、青山會館の創立である。

予も大正十二年には、愈〻還曆となるから、それを記念する爲には、何か一仕事をせねばならぬ。既に『國民新聞』が一萬號になつた曉に於ては、國民教育奬勵會を設け、幸に目的通りと云ふよりもそれ以上の效果を來しつゝあつた。

されば還曆記念には、更らに他の方面に於て、何か記念すべき事業を起し、且つ遺したいと考へ、百方考慮の上に、會館を造り、事實に於ける平民大學となし、社會教育の本部となし、これに依つて予が平生信奉する處の主義主張を、一般に普及せしめたいと考へた。

實は東京の各方面を物色し、何處か適當の場所は無い乎、政府の所有地、華族若くは富豪の所有地

に、分割して貰へる樣な場所は無いかと探し廻つたが、とても左樣なる場所も見付らず。此に於て昔の彫刻家が、彫刻する材を求めて得ず、失望の餘り、如何せんと考へたが、幸己の爐に燃え殘りの木の株があつたから、これ屈強のものであると、それに彫刻したといふことを考へ、此上は致方が無い。予の青山草堂は、狹くはあるが、五百坪以上である。且つ場所も明治神宮參道の前に當つて居れば、寧ろ何處彼處といふよりも、此に定めんと考へ、予の妻及び家族の者共にも相談し、孰れも異存が無いから、その旨を發表したのが、大正十年、予が五十九歲の時であつた。

十二年に造り上げんとするには、尠く共十年から着手せねばならぬことは、云ふ迄も無いことだ。扨て此の青山會館なるものは、幸に全國同志者の熱誠なる贊成に依つて、資本金も豫期程とは云は無いが、兎に角予の當初の計畫を實行するには、不足無きだけ集り、此に於て、從來予の家族だけは依然青山草堂に居た者が、十一年には愈ゝ引拂ふて、家族は大森山王の借宅に移ることゝした。それは大森の山王に、豫ねて予が父の東京に出たる時に、運動の場所として、購ひ置きたる地面に引移ることを、決心したからである。

此の如くにして予の身體は、愈ゝ健全に赴き、青山會館も愈ゝ予の還曆を迎へて、成就せんとし、歷史の方も規則通りに進行し、予は實に滿腔の愉快を以つて、大正十二年の還曆を迎へた。當時の詩

を見れば、如何に予の心が、希望に滿ちてゐたかゞ想像せらるゝであらう。(十七章の終の詩參照)

予は前にも述べた樣に覺えてゐるが、三十迄は覺束無しと、他からは豫言せられ、自分も餘り長生すべきものとも、思つてなかつたが、何時の間にやら還曆を迎へ、自ら顧みて、多幸の人間と視せざるを得なかつた。此に於て『中央公論』に『還曆を迎ふる一新聞記者の回顧』なる長文を出して、予が新聞記者としての淸算とは云はざる迄も、一通りの棚卸しをした。

而して新聞關係、友人關係の人々を招き、それぞれ還曆の自祝會を催した。然るに當時意外にも、予の『近世日本國民史』に就いて、同年五月、帝國學士院より恩賜賞を授與せられ、六月には朝野名流相集つて、その祝賀會を帝國ホテルに開催さるゝに至つた。

予は本來アカデミックの名譽などを希望したることも無く、又た希望すべき筋も無つた。同志社さへも卒業せずして、飛出した予であれば、予が學問上の名譽を飾るべきものとては、一物も無つた。然るに帝國學士院が、予に恩賜賞を與ふるに至つたことは、予としては全く寢耳に水であつた。これには多分官學の中に於ける、歷史家の諸學士が主唱したものであらうと思ふが、果して然りとせば、予は諸氏が黨同伐異の偏見を脫し、その態度の公平なるに、敬服せざるを得ない。

何は兎もあれ自ら思ひ設けないことであつたから、これこそ予が還曆に於ける、第一の祝典である

と考へて、予は喜んでこれを受けた。而して秋風も吹く頃にならば、予も愈々逗子を引拂ひ、大森に還らんと決心してゐた。

因に云ふ、大森には既に大森草堂の建築は、初め書庫だけはその前年に出來上りたれば、年末までには一切完成することは、間違無しと考へてゐた。併し縦令それが完成せざる迄も、書齋は既にその所を得たから、予の一身丈は、兎も角も、家族と共に新築する家の傍らなる假寓に託するも、差支へ無しと考へてゐた。

七　私設新聞局として勉强館の設立

◇大浦兼武子と予

予にはこれといふ道樂は無つたが、唯一の道樂は、吾が信ずる主義主張を、成可く天下に擴げたいといふことである。雜誌を作り新聞を作り、若くは多くの著書を出版したのも、要するにそれに外ならなかつた。猶ほその爲に予が考へ出したることは、全國の凡有る新聞に向つて、無代價通信の事であつた。

予は第二次桂内閣が、明治四十一年七月に出で來りたる頃、桂首相に向つて、私設新聞局創設の意見を開陳したが、首相はその主意を賛成しつゝも、それが爲に何等仕事を爲す丈の經費を出して呉れなかつたから、予は止むを得ず大浦兼武子と相談し、互に持寄つて、極めて小規模ながら、それを造へ、國民新聞社の別棟に、勉強館の名を以つて、その仕事を始め、それには專ら草野門平氏をして、其事に當らしめた。

その仕事の第一は、重なる新聞、雜誌の意見議論等を摘要して、これを然るべき筋に分配することと。第二必要と思ふ事實、若くはその事實に關する説明等を、全國の各新聞に送附すること。第三所謂る地方新聞の社説ともなり得べき種類の論説類を起草して、之を全國の各新聞に分配することであつた。

然るに此の仕事は誰も知らなかつたが、可成り有效であつた。地方の新聞などは固より、これを一種のプロパガンダとして、その儘これを受取るには、躊躇したるものもあつたが、それでもそれに手を入れて脱胎換骨して、出したものも尠く無つた。而して中にはその儘それを掲載するものもあつた。固より開封もせず、これを紙屑籠に投じたものもあつたであらうが、大體から觀察すれば、それは頗る有效のものであつた。

予はこれを一層擴張して、外國の諸新聞にも及したいと思ふたが、遂にそれを行ふ迄に至らなかつた。斯くて明治四十四年八月、桂內閣が辭職するや、予は依然これを繼續してゐた。

それには隨分困つたが、大浦子と共に、四苦八苦で、少しばかりの金を出し合せてやつてゐた。

予は此の機會に於て、大浦子に就いて、一言したい。彼は何時も金錢には困つてゐた。彼自身には極めて金の經らぬ樣に暮してゐた樣であるが、苟くも政治上に費ふ金ならば、出來得る限り才覺をした。即ち彼の失脚したのは、その才覺と、その使用との爲であつたと思はるゝ。

併し予は敢へてこれを辯護するでは無いが、彼は常に右から取つて左に與ふることを、當然のこととした。否寧ろ左に與へんが爲に、右から無理算段をしても、これを集むる樣なこともした。但し予等の勉強館の仕事は、大金といふでもなし、ほんの予等の貧しき財布から出したもので、兎や角も維持してゐた。

即ち此の機關があつた爲に、大正元年の末から、二年の初にかけて、桂公が新政黨を起すに就いては、多大の便宜を得たのである。併し此事は桂公も、その時に於て初めてこれを聞き知つた位で、此の機關の存在してゐたことは、予、大浦子、及び專らその事に當りたる草野君位が知つてゐたに過ぎないと思ふ。

草野君が大正二年に逝いたる後も、猶ほこれは繼續し、その後にも、極めて手薄くはあつたが、又ばかりのものは存して置いた。

予は世界大戰中、獨逸側からの宣傳を常に受取り、當初は莫迦々々しきものと思ひ、碌に讀む氣も無つたが、餘り度々で、それを遂讀む氣になり、讀んでしまへば又たその次の來るを待兼ねる樣になり、何時の間にか覺えず知らず、それに引込まれる樣な傾向を生じ、如何に宣傳なるものが有力である乎を體驗し、予が勉強館を起したことの決して無用で無つたことを、自ら確めた。

老萊衣 （大正三年　五十二歳）

瑞光淑氣滿荊扉。逹莫初心與命違。
五十餘年何限事。春風吹上老萊衣。

遊小金井

一家長少事行吟。無賴春雲晴又陰。
流水小橋望不極。午雞啼處菜花深。

別愛吾盧　三首

枕書飲水淡生涯。抱甕灌園分長宜。
四歲星霜如電掠。別家情似別人情。
歲歲又京幾往還。斯生不覺鬢毛斑。
愛吾盧畔手栽樹。翠蓋堂堂高似山。
白岳青晏斜照殘。低徊欲去又凭欄。
庭花歷亂秋方好。留與他人仔細看。

膠州灣占領

鐵拳透破古膠東。黃禍圖成覇業隆。
人算不如天算巧。白旗今見閃秋空。

平林寺

渺渺平林帶落暉。丹楓黃葉鎖禪扉。
老僧何管掃枯葉。一陣風來萬點飛。

乙卯元旦（大正四年　五十三歳）

五十三年是與非。世情嘗盡遂忘機。
險夷前路不須說。雲海茫茫一鳥飛。

老龍庵

欲賦招魂獨不禁。春潮蕩漾抱門深。
庭梅空發轉堂寂。唯有老龍天半吟。

葉陽子墓畔栽櫻樹

手栽櫻樹勞青苔。墓畔應知春色回。
寄語殷勤泉下友。每年花發約君來。

對嶋水道

漁帆點點趁輕風。對馬釜山指顧中。
炎熱今朝吾已卜。初陽如火射波紅。

沼津

相携曉窓呼欲醒。銀冠映日勢軒騰。
笑僕閑棄人間事。唯有名山耐久朋。

中秋對月

桂影上階蟲語悲。一天風露夜闌時。
阿翁仙去知音少。獨對清光不賦詩。

金剛山

萬象排列紅映黄。削成天斧是金剛。
不將雄筆圖奇勝。故放山雲獨擅場。

蕉峰文選成

筆下千言猶未剛。文章經國奈疎頑。
斯心賴有故人識。一卷長留天地間。

丙辰試筆（大正五年　五十四歳）

睡起初陽滿大虚。已看賀客到閑居。
先生別有一年計。欲作維新異國書。

舞兒灣

波際翠松千百株。曉風翔夢覓平蕪。
春帆細雨舞兒驛。隔水淡山花欲無。

山陽道中

相忘功業賞忘身。過眼風光喜是真。
十歲往來猶著書。一番看去一番新。

鵲巢居　二首

清閑堂上白雲洞。洞裏鵲巢傍水斜。
老樹當門門擁石。鵲巢高處是吾家。」
月明紙帳翻經吟。夜靜鳴泉韵似琴。
卜宅山中非避世。秖聽天籟省塵心。

辭鵲巢居

依微殘月曉猶明。欲別吾廬又有情。
借問樹頭雙喜鵲。將何好事報先生。

過興津

苑門長鎖徑生苔。唯見鄉人立石臺。
一代俠雄仙去後。手栽桃李爲誰開。

觀瀾亭 二首

松樹百尺與樓齊。　豆北湖南望欲迷。
最是詩思高絕處。　士峰晴雪曲欄西。」
春潮如帶繞長汀。　天女烟鬟波上青。
風拂雲帷蓮嶽湧。　觀瀾亭是吾樂亭。

曝書偶詠

萬卷奇書看愈奇。　蠹魚還晒先生痴。
不憂他日付雲散。　湖海有人能護持。

好墓田

落落孤松帶野烟。　武相雲接士峰巔。
不須身後畫麟閣。　碧玉川原好墓田。

京　都

隔簾鴨水響淙淙。　樓閣參差曉霧重。
應是山靈眠未起。　模糊三十六青峰。

謁菟道稚郎子祠

金碧鳳凰堂陸離。　豪華逝水憶當時。
清風萬古誰來奠。　茅屋三間帝子祠。

傳燈寺

蕭寺秋殘落葉堆。　山披石壘擁崔嵬。
老僧何會禪中趣。　衝雨使泥得得來。

嚴嶋贈友

白頭相對暗自驚。　共是卅年湖海情。
不說人間窮達事。　溪楓紅處聽泉聲。

一　瞬

一瞬滄桑二十年。　庭松凌屋罩蒼烟。
吾頭如雪阿翁逝。　只有蓮峰聳碧天。

丁巳新年（大正六年　五十五歲）

等閑五十五新年。勳業文章兩漠然。
祇剩青春狂態在。詩篇寫出筆如椽。

示　内

相思萬里寸心馳。無奈人間有別離。
今日湘南梅如雪。花陰攜手立多時。

老龍庵卽事

雨中高閣且凭欄。霧海雲山望渺漫。
詞客未來春未到。梅花獨立不禁寒。

與　誰　歌

與誰歡笑與誰歌。不是無人愁緒多。
寄語孤高銀杏樹。落柯零葉奈卿何。

扶餘懷古

想到王仁感慨催。沈舟白馬有餘哀。
春風平濟塔邊路。千樹櫻花滿意開。

樂浪郡故趾

古墳環列土城周。斷瓦殘甎滿隴丘。
汀柳含顰野花咽。大同江水道悠悠。

藏　經　閣

海印寺邊花欲然。藏經閣聳翠微巔。
風雷刼避况秦火。鬼護神呵七百年。

任　人　看

風霽曉雨送輕寒。岳雪高抽雲霧端。
眞個名山若名士。玲瓏八面任人看。

觀瀾亭雜詩 節錄

一枕仙遊萬古中。 機關打破是神通。
維摩丈室無長物。 消受東西南北風。」
落潮如洗映晴沙。 幽夢覺來橋影斜。
松翠繞門無剝啄。 階前發遍紫薇花。」
爲誰勞苦爲誰瞋。 花落花開五十春。
睡覺閑窓無一事。 青山笑對白頭人。

北門眺望

詩與高粱秋色飛。 南山漠水帯淸暉。
舉頭試向青天問。 昨日陰雲何處歸。

瀋陽

白塔亭亭挿碧空。 高粱滿地動金風。
乾坤寥廓淸如許。 人在瀋陽秋色中。

長春

曠原如海天如水。 萬里淸光麗影團。
風露凄凄人不寐。 長春驛畔値中秋。

大連星浦

滿灣秋水碧於藍。 帆外斜陽鷗影涵。
吾亦江湖一竿客。 即從星浦憶湘南。

山海關

關頭楡柳戰秋風。 長壍如龍劈碧穹。
回首中原無管仲。 山河形勢爲誰雄。

北京所見

太液池邊柳葉飛。 景山樓閣鬱巍巍。
人家百萬秋光裡。 白塔峰頭看落暉。

明十三陵

石人不語立秋風。楊葉疎黄柿葉紅。
十二帝陵荒艸裡。壽山終古屬梟雄。

鞭不動

大同城外朔風吹。雨後玉河涵石陂。
驅馬蕭蕭鞭不動。雷公嶺上凍雲垂。

琢州

秋原渺渺旋愁闊。盡日東南不見山。
大耳王孫廬何處。老楊如蓋亂丘間。

黄鶴樓

革命功成奉小雄。西南殺氣滿長空。
登臨欲問爲王業。祗有江流日夜東。

廬山

秋天洗出碧嶙峋。雙劍香爐次第新。
儂比東坡多得意。廬山面目看來眞。

長江

濁浪排空亦一奇。大孤微倒小孤欹。
封姨怒叫魚龍舞。正是先生詩就時。

清涼山

江左風流跡渺茫。明時宮闕亦荒涼。
秋光十里金陵路。野菊花開細細香。

金山寺

六朝金粉水悠悠。南北風雲今亦愁。
獨立金山寺邊望。淡烟一抹是揚州。

西湖

不嘆紅顏化作塵。落花芳草毎年新。
小青塚接秋琴墓。千古西湖屬美人。

過姑蘇

虎邱千載塔尖孤。寶帶長橋似畫圖。
一水廻環行不極。月明如夢過姑蘇。

孔林

茅舍蕭條泗水潯。馬蹄一路曉霜深。
曙光當面天如海。紅日生邊是孔林。

泰山

石磴層層柏樹間。丹樓絕壁是仙寰。
斯遊第一快心事。踏月孤笻上泰山。

黃河

長橋萬尺渡奔波。堤上垂楊半落柯。
千載黃河無定跡。華山仍舊秀容多。

青嶋

踏盡魯齊長短亭。廢墟殘塚幾回經。
不知身在山東角。一鏡波光林外青。

夢亦穩

雁門風雪長江雨。身似飛鴻無定蹤。
歸臥湘南夢亦穩。滿窓晴日對蓮峰。

戊午新年 (大正七年 五十六歲)

笑迎五十六新年。身後身前付碧天。
點檢心頭無一事。老松高處掩門眠。

修史書架告成乃賦

自憐無益費精神。濟世高材合有人。
投沒餘生修史業。肯將晩節傍風塵。

愛山小祥忌

把臂高談憶往時。人間無復此男兒。
千秋史筆有光焔。一片青山墮涙碑。

淡生涯

閉門修史淡生涯。簡冊沒頭無盡期。
臥病今朝興不淺。滿窓新緑讀陶詩。

安土懷古

壘石重重委棘榛。尚看層塔擁嶙峋。
扶桑第一謾休説。唯是斯公第一人。

孤松軒

一帶霜林村逕料。玉川兩岸幾人家。
先生不刈遶籬棘。滿地秋香野菊花。

富士山

一路驛輪繞岳馳。乾坤清氣小春時。
名山何問看山訣。遠近高低到處宜。

法常寺 二首

蕭寺秋深冷白雲。翠林紅樹石蹊分。
淡枯自是君家法。落葉半埋三尺墳。」
誅茅枯坐萬山中。抛去世榮空又空。
知己一生天子在。低頭未肯向關東。

湯河原雜吟　節錄　（大正八年　五十七歲）

夾澗人家西又東。　四圍新綠帶薰風。
看來艸木有眞趣。　濃淡淺深皆不同。

浮嵐嫩翠當軒開。　半擁匡頭半澗隈。
却是山居多樂事。　快心有友訪吾來。

與　友

隻手欲廻天地春。　從來憂道不憂貧。
可憐俱作抱痾客。　臥看浮雲百態新。

作　史　家

莫上高樓浪嘆嗟。　樓前富嶽亂雲遮。
不期勳業傳千古。　却託餘生作史家。

國民新聞一萬號

文章報國志猶存。　誰使微名達紫闈。
新紙十千吾未老。　人間始見布衣尊。

歲　除

晴則吟行雨讀書。　男婚女嫁意安舒。
波光岳色依然好。　忘却今朝是歲除。

庚申新年　節錄　（大正九年　五十八歲）

一門笑語自成春。　湘海烟波甚可人。
病父回生兒得室。　十年無此好新年。」
不願斯生樂事全。　唯望淸白世家傳。
思量今日差强意。　病骨蘇來新迓年。

湯河原雜吟 節録

溪流曲曲板橋斜。　翠樟森森三兩家。
閑倚孤筇回首處。　懸崖一半是梅花。

吉野

踏破櫻雲深處巓。　尋花恰過花方姸。
山亭不夢南朝事。　春雨如酥伸脚眠。

入雲州

大神雪色半空浮。　因伯平疇一望收。
正是山陰好時節。　菜花香裡入雲州。

松江節録

路近松江畫不如。　薫風四月綠陰初。
漁翁解否這中趣。　繫艇楊塘網白魚。

嚴島

百花落盡綠陰生。　嫩葉枝枝掩澗横。
白髪夫妻沒情思。　水亭對坐聽鷗聲。

袖手看

明滅波光帆影殘。　蓬艫半出暮雲端。
湘南好景無人管。　百尺樓頭袖手看。

中禪寺湖

二荒山色碧旻横。　殘照偏於湖上明。
滿徑蕭蕭枯葉裡。　林間紅樹可憐生。

辛酉元旦　（大正十年　五十九歳）

乾坤俯仰謾忘機。　萬卷藏書一布衣。
莫把前賢較長短。　未知五十九年非。

江州路所見

絲絲細雨濕農蓑。豐歲遺蹤畫裡過。
占領人間閑富貴。黃金滿地菜花多。

大同江

大同江上雨如麻。錦繡山邊松逕斜。
遊客不知身在畫。烟籠堤柳花籠家。

安東縣

鳳凰山色入雲稠。鴨綠長江欲盡頭。
北望滿洲春尚淺。岸花汀柳使人愁。

蔚山城

經始幾旬功未成。敵兵十萬壓孤城。
援來固可不來可。唯愛扶桑男子名。

晉州

晉州城外翠楊垂。矗石樓邊奇石欹。
百載恩讎流不盡。南江江上美人祠。

長崎諏訪公園

海風掠面弄輕陰。的皪櫻花香滿襟。
白首重來多少感。將軍植樹已成林。

瀨戶內海

群嶼星羅不識名。疊山如畫畫山迎。
憑誰描取斯時景。夕日將沈海月生。

壬戌新年 (大正十一年　六十歲)

大筆淋漓氣拔山。書生舊味自頑顏。
今年六十何功德。俯仰青天白日間。

魚楽園

暖風遲日萩芽肥。茅舍無人乳燕飛。
紅蘂紫藤零落盡。晴池碧映白薔薇。

關原

兩崖峽束扼西東。松尾南宮指顧中。
諸將當年志何小。石郎還是可憐生。

江州途上

宿雲深鎖伊吹嶺。安土城墟帶曉烟。
新緑殘紅湖畔路。菜花十里滿平田。

薩肥道中

太平橋外海蒼蒼。松影沙光官道長。
桑葉青舒麥黄熟。薫風滿袖入家鄕。

湯出

茅屋參差倚水涯。泉聲禽語兩相宜。
尋思四十年前事。唯有青山記往時。

人吉温泉

高起樓臺球水濱。四圍山色翠嵐新。
君家別有靈泉在。一洗人間萬斛塵。

阿蘇山　二首

聳列群峰作外輪。天成畫本此披陳。
一邱一壑何須說。請看蘇山面目眞。
夢裡蘇山五十年。而今始踏火池巓。
老來文字無光焔。羨汝衝天萬丈烟。

紀州途上

行盡和州長短亭。麥芒半熟橘花馨。
一天雨霽快人意。洗出金剛山色靑。

高野山

堂堂詞翰費深求。顯密界中出一頭。
遍照金剛眞炯眼。靈區占得自千秋。

厨川

一過風雨洗征塵。岩手山光映碧旻。
秋草茫茫厨川路。女郎花發高於人。

定山溪溫泉

溪頭老樹聳高秋。山月微茫夜色幽。
孤館思詩人未寢。水聲蟲語兩悠悠。

家庭學校所見

喬木堂堂自作門。坦途窮處有泉源。
牛房鷄棚不行盡。隔谷人家又一村。

輿突灣

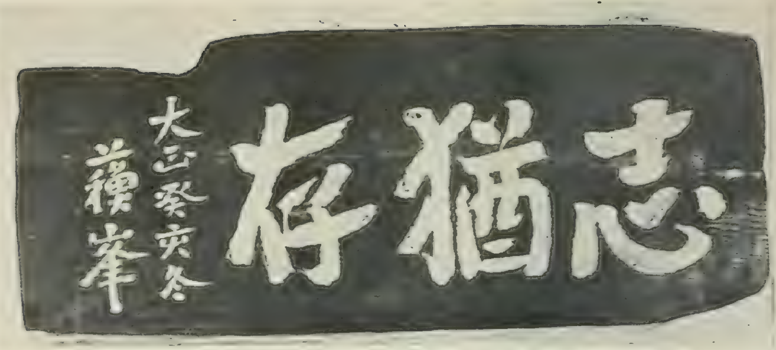
銀漢無聲星斗收。一天風露滿征裘。
便知身在蝦州首。輿突灣頭明月秋。

狩勝嶺

登登鐵路似環縈。秋入荒村露氣淸。
不管山靈遮望眼。二州嶺上踏雲行。

大沼公園

林樹頭黃釣艇閑。星羅嶋嶼碧波間。
湖亭偶坐白頭客。一碧秋空望馬山。



大正十二年關東大震火災にて燒失せる國民新聞社屋の燒木杭に刻せる木額

同燒跡の瓦礫堆裡に於ける記念撮影

第十七章　關東大震火災と厄難時代

一　逗子に於ける大地震

これから地震の話となる。地震の爲に影響を受けたのは、固より予一人では無い。予と同樣の損害や苦痛を受けたものも、澤山ある。又た予以上に受けた者も少くは無い。つまり予も幾千分とか幾萬分とか、若くは幾百萬分といふ中の一に過ぎない。

されば殊更らに予一人のみの損害や苦痛である如く、物々しくこれを語ることは、如何にも非常識と云はねばならぬ。併し正直のところ、此の大震火災は、予を殺すには至らなかつたが、予の生涯に、死に幾き影響を與へた。

されば今日から當時を回想すれば、如何にも夢の如き心持がする。しかもその夢は、恐ろしき夢であり、面白からぬ夢であり、再び見ることを好まない夢である。

九月一日の朝は、朝の日課たる修史の業を終へ、例の如く魚樂園に出掛けた。魚樂園とは予が大正三年父の永眠後、逗子田越川の上流に於ける葭、蘆の叢生したる地面を購ひ求め、潮入りの池を掘つて、その土を以て低地を埋め、それに山から松を移し植ゑたるものにて、七百坪ばかりの地面で、三方は田越川に接し、狹いけれ共散歩をするなり、池にて釣をするなり、或は池の中島の小亭にて、書物を讀むなり、予にとつては快適なる燕息の地であつた。

其日は朝から蒸暑くなり、池の中島の小亭に腰打掛けて、小魚の飛ぶのを眺めてゐたが、雨がちらほら降り出し、而して又た止んだ。良久うして、野史亭に還へり、仕事をして、それから東京から到達した新聞雜誌の類を讀み、最早や晝食の時刻も近付いたから、予は野史亭の北の窓側のソファーに倚つて、雜誌を讀んでゐた。

その時に地震が出て來つた。初めは音が聞えるから、何時も書生の往來する足音と思つたが、足音にしては少し強過ぎると思ふ間に、愈ゝ地震と感付いた。

其處でとても此家は潰れるに相違無いと考へたから、極めて曲折したる梯子段を、漸く降り、下の緣側迄出たが、その時は立つことも出來ず、身體は恰も震ひ落さるゝが如く、庭に落ちたから、勿論立つてゐることが出來なかつた。そこで小石の上を這ひ廻つて、大なる楓樹の下に辿り著き、そこの

石に兩手を抱きしめてゐた。

吾家は道を距てゝ田越川の殆ど出口に接してゐるから、下に赴けば海嘯に攫はるゝ虞があり、上に行けば家が倒れて、その下敷きとなる虞がある。そこでその中間なる傾斜面の處に、暫らく身を落付けて、樣子を眺めてゐた。

果して海嘯と云はん乎、海嘯らしきものと云はん乎、大波がやつて來て、予の家の入口にある、大松の傍まで、大なる舟を持上げて來た。波は優勢なる軍隊の如く、襲つて來た。それは殆ど上流の田越橋にも及んだ。

吾家は幸に全く崩壞はしなかつたが、瓦は殆ど雨の降る如く落ちた。家も傾いた。予は櫻山中町にある、予の長子の家を氣遣ふたが、主人は横須賀に出勤して、未だ歸家せず、家族丈は無事に附近の竹山の中に避難したといふことであつた。聽けば家は全く崩壞しなかつたが、事實崩壞同樣であつたと云ふことだ。それ丈のことを確めたから、此上は速かに東京に戻らんとて、逗子停車場に出掛けたが、途中家屋が崩壞して、殆ど足を著くるところ無く、屋根の上を踏んで、漸く停車場迄辿り著いた。

停車場で聞けば、汽車は固より不通となり、自動車を傭はんとしたが、それも應ずる者が無いから、

最早致方無きものと諦め、老龍庵に歸へり、かねて吾子の住家たる櫻山莊から、家族を引纏め、老龍庵に移した。これは櫻山莊にはとても足を入るゝ餘地無く、又た危險が刻々迫つてゐたからである。その中に予の長子も横須賀から危險を冒して、歸へり來つたから、一同無事を喜び、兎も角も一夜を老龍庵の庭の上に、露宿することゝした。

隣家からも予の家に避難した者があつたが、其家の若主人が脚氣か何かで困つてゐるとの事であつたから、予が有したる唯一の長椅子をその人に貸與へて、予は池の端に縁臺を置き、其處に踏臺などを持出し、それを机に代へ、其處にて例の如く仕事をした。その中に横須賀方面の空を見れば、赤くなり、何やら灰が降つて來た。

心配なのは何處よりも東京であつた。二日の曉方になつて、東京から一人の使者がやつて來た。それは志村文藏君であつた。志村君の語る所に依れば、大森にある予の家族は、無事であつたらしい。而して殊更に愉快に堪へぬのは、他の新聞社は大概火災に罹つたが、國民新聞社のみは別條無く、その爲に他の通信社抔も、國民新聞社の一室に避難すべく、申込んでゐるといふ樣なことであつた。

予はこの報を聽いて、天我に幸するかと、殆ど躍立つばかりに感謝した。志村君は新聞記者の心得ある漢にて、予に此の話をすると同時に、その實況を報ずべく、取敢へず大なる白紙にそれを書綴

り、それを予の家の大なる大松の傍の垣根に貼出した。斯くて予は取敢へず書翰を認め、志村君を二日の正午頃歸へした。

二　國民新聞社全燒の第二報と徒歩歸京

予は老龍庵の池の端にて、例の如く仕事をなしつゝも、心には種々の妄想を描いた。志村君は安全と云つたが、果してその後何等の異變は無つた乎。何等具體的に知り得るものは無いが、空の色を眺めて見れば、東京方面はなか〳〵容易で無い。何やら分明では無いが、惡運が時々刻々此身に迫つて來るが如く感じ、胸中頗る平かならぬものがあつた。

それとてそれを他に語る間も無く、二日の夜を更た、池の端の縁臺の上に明かすべく、吾が身體を横へてゐる際に、第二回目の使者が東京から來た。それは木内、境田兩人であつて、彼等が不時に來たことを見て、予は彼等の語る前に、一切を了解した。

果然社は全滅したのである。當初は安全であつたが、遂に類燒の禍を蒙り、百計盡きて、若干重要の書類は取出した樣であるが、器械等凡そ新聞製造に關するものは、一切燒失したとの事であつた。

予はこれを聴いて、最早や此上は予自らその場に赴き、後事を處理せねばならぬと覺悟し、後の事は予の長男に申付け、三日早朝結束して、大内、境田及び大正八年以來終始予の傍にゐた鈴木の三人を伴ふ、然も予の修史の業は斯る場合とて中止すべきで無いから、必要の書類だけは、これを携へ、徒歩にて出掛けた。

途中心配に堪へないから、鎌倉に松方公の邸を見舞ふたが、見る影も無く崩壊してゐるから、漸く公の避難場所を訪ね、公と相見て先づ恙無きを賀した。

而して畏れながら山階宮殿下を御弔問申上げ、妃殿下の柩を拜し、大妃殿下の御傷狀を御見舞申上げ、それから東慶寺に赴き、その崩壊の跡を見、鎌倉の僧侶達が半死半生の態にて、横はりつゝあるを見舞ひ、大船、戸塚を過ぎて、横濱に至つた。

横濱では停車場が猶ほ燒けつゝあり。附近のタンクは今猶ほ炎々として火焔を上げてゐた。斯くて日沒に鶴見總持寺前に來たから、途中朝鮮人と見誤られる危險があるにより、同寺より提灯を借受け歩出したが、提灯などはなか〳〵役に立つところで無く、途中で屢ゝ危險な目に逢つた。

元來普通の道で無く、多くは汽車の線路を歩き來たから、枕木と枕木との上を踏みつゝ歩くことは當分は面白くもあり、足並みもはかどるが、終日枕木の上のみを踏んで歩くことは、尠からず大儀で

あつた。

仕合せに川崎にて一輛の車を見出したから、だますやら、すかすやら、脅すやら、凡有る方便もて漸く三人の隨行者が、一輛の車を擁して歩き出したが、扨て車に乘つたといふことが、途中監視の若者等には、非常なる反感を激發し、斯云ふ場合に車に乘るなどゝは、怪しからぬなどと云つて、喰つてかゝる者もあつた。正直の所予は緣側からはね飛ばされたる際に、多少脚部に負傷したのであつて、本來なれば歩行に困難であつたが、元氣を出して逗子から川崎迄やつて來たので、纔かに一里や二里を車に乘るとて、不都合の譯では無いが、それ等の辯解を固より聽入るべくもなく、予は寧ろ車に乘つたことを、後悔せねばならぬ程であつた。

中には醉拂つて、拔身を持つて立つてゐる者もあり、予は固より、隨行の者共、大概白の上衣を着てゐるから、朝鮮人と思へば思はれ無いことも無く、隨分閉口したが、同日の八時頃に、漸く大森の寓居に辿り著き、初めて：家相見て恙無きを賀した次第であつた。

併し家の中には寢られ無いといふことであつて、猶ほ空地の椎の木の下に、三日の夜は明かすこととなつた。此の如くにして、予は漸く大森迄歸著したのであつた。

三　大震火災と德富萬熊

大正十二年九月四日の朝、久振りに大森から人力車にて、本社の立退いたる芝山内の金地院に赴き、其處にて諸氏に面會。それから編輯局として、取敢へず借受けたる帝國ホテルの一室に赴き、それぞれ善後策を協議した。それから先のことは詳しく云つたとて、致方は無いが、第一に不足したものは、印刷機械であり、活字であり、紙であり、而して更に一歩を進めて云へば金であつた。

一切のことが概して順調に赴き、出入は相償つてゐたが、萬一に備ゆる丈の準備金とても無く、然も一切のものが全滅したる今日に於て、之を回復することの困難であることは勿論であり、それには斯く申す予一身の信用より外に、抵當とすべきものは無つた。

幸に社中の人々も奔走し、社外の人々も相當の同情を表し、兎や角回復の曙光を見るに至り、兎も角も『國民新聞』を刷り出したのは、多分予が東京著後、未だ一週間を出ない範圍であつたらうと思ふ。

予は『國民新聞死せず』とて、自ら大呼して立つた。此間に於て予が特筆禁ずる能はざることは、

予の次男萬熊の事だ。

彼は幼け無き時より父の跡を嗣ぐといふ決心を以つて、岡山の高等學校を卒業以來、大學にも行かず、其儘新聞社に入社した。彼は中學時代から呼吸器を病み、屢ゝ血を吐き、一時は殆ど一命覺束無く、然らざる迄も廢人となるべしと思うてゐたが、非常なる堅忍不拔の精神を以て、南湖院に疾を養ひ、社にも南湖院から通勤してゐた。

併し漸次に身體も健全に赴き、當人にも相當の自信が出來たから、追つては大森に寓すべく、その爲從來青山に於て、予の書齋に使用したる一棟を、大森の新築の傍に移すことゝした。彼は逗子から予が出社する際には、その時間を待合せ、槪して茅ケ崎から大船に於て、予の車窓に乘換へ、同車して出社することを、例としてゐた。

予は新聞のことに從事するには、一切のことを知らねばならぬといふことを原則とし、先づ事務員の最下級から學習せよとて、當初は專らその方に勤めしめ、當人もそれが爲に屢ゝ不平を述べたが、併し嚴命致方無く、それをやつてゐた。

斯くてそれから調査部に移したが、これには彼も全心全力を盡し、國民の調査部が、各社に冠たる調査部となつたのは、全く當人の努力の結果といふも、過言ではあるまい。

兎も角も一寸旅行するにも、彼は『國民新聞』と云ふことを忘れず、その爲に材料の蒐集を竭めてゐた。一口に云へば、彼は病院に居ても、又た青山草堂に居ても、又た國民新聞社に於ても、要するに『國民新聞』の爲に、生活してゐたといふより外に無つた。

彼は聽くところに依れば、予の留守中、卽ち九月一日に、本社に居つて、非常に奮闘し、四方より猛火が本社に迫つて來たるに拘らず、最後迄屋根の上に登つてホースを取り、しきりに火を防いだといふことであつた。

而して到底止む能はずと見るや、調査材料の最も大切なるものを引出し、それを車に積み、同人と共にこれを押して逃げたが、到底それが不可能と見るや、その材料を汽車の線路に埋めつゝ、漸く身を以つて、金地院に逃れた相であつて、後に堀出して見れば、資料を入れたる箱の片隅は燒け、燻つてゐた程であつた。

彼は毎日大森からゲートルをはき、半搗米の握飯を携へ、帝國ホテルに至り、それから日吉町の本社の燒跡に赴き、その煉瓦を片付け、若くは煉瓦の殘骸が柱となり、壁の毀れとなり、覺束無く立つてゐるのを、ワイヤーにて引倒すやら何やら、九月震災後の炎天、靑きものとては八百八街何物も無い時に於て、日々自ら勞作しつゝあつた。

予は本社の全滅に對して、甚だ心を傷めたけれ共、他方に於ては第一吾子の健康が、斯迄完全に回復したるを見て、何やら新らたに、或る大切なるものを發見したる如く思ひ、尠からざる慰安を得た。一口に云へば、他方に吾社を失つたが、一方には吾子を得たと云ふ樣な心地がした。これが何よりの予の愉快であつた。

四　國民新聞社復興策と石川武美氏

本社は曲りなりにも恢復し、當時青山會館の新築中であつたから、その工事に從事する人、及びその監督者たる、岡田學士の好意に依つて、案外速に元の燒跡に假普請も出來た。固より土階三尺の假屋であつたが、それでも仕事をするには差支無つた。

而して地方の予の既知未知の友人から金錢を送つて來た向も、多額では無つたが、相當にあつた。之が爲に愈〻天下に、知己が尠からざるを思ひ、回復の精神が旺盛になつて來た。否な旺盛なる回復の精神が、更に根强くなつて來た。

これと同時に意外の話を、予の友人綱島佳吉君が持つて來た。綱島は京都同志社に於ける、予の同

級生であつて、予は同志社時分から、既に普通のクリスチャンとは、意見を異にし、特に所謂同志社派と稱する、正統のクリスチャンとは、行き方を別にしてゐたが、同級生たる綱島君とは、何處やら互に一致する處があつたと見えて、議論は議論、信仰は信仰、職業は職業、各々別々であつたが、友人としては親しき一人であつた。――而して今も尙ほその一人であるが――君が來つて云ふには、『石川武美といふ「主婦之友」雜誌の社長があつて、君に同情し、聊かながら御加勢を仕樣と云つてゐる。君も今は逼迫であらうから、それを受けては如何乎』との事であつた。

予は甚だ恥しきことであるが、大正八年以來逗子に居て、東京に出で來ることは、金曜日毎に理事會があつて、その爲に出社すること、修史上材料の取調べの爲に、東京に於ける、諸家の文庫及び倉庫に赴くこと、若くは吾家の都合に依りて、靑山に宿泊すること等にて、殆ど全く大正八年八月から、十二年九月まで、逗子に於て、隱者的生活をしてゐた。偶ゝ旅行することがあつても、逗子から出て、逗子に歸つたばかりにて、東京とは謂はゞ沒交涉であつた。

その爲でもあらうが、『主婦之友』といふ婦人に關する雜誌の、大なる廣告が、新聞紙面に出で來ること丈は知つてゐたが、その雜誌が何物である乎。その社長が何人である乎は知らなかつた。況んやその社長が予に同情して、予が逼迫より助はんとする如きに於てをや。

これは全く寢耳に水であつた。その結果石川氏に面會したが、石川氏からは取敢へず□□□とか寄贈しようといふことであつた。予は固より無償にて、斯る寄贈を受くべき理由が無いから、これを辭した。併し相當の道を以つて、その好意を受入るゝことを、拒まなかつた。

予は考ゆるに、今後資本を要することは、□□や□□□にて足りる可きもので無い。回復するには容易の業で無い。何故ならば吾社と販賣系統を同じくする、大阪の方から進出して來たる、或社の如きは、盛んに『國民新聞』は最早や回復せずと宣傳して、その道を塞いでゐる。此等の大敵を相手として回復するには、第一非常なる手腕家が必要である。第二に多額なる資本が必要である。

然るに綱島君から聽けば、右の石川氏は、資本も潤澤であるし。又た全く徒手空拳にて、今日の事業を築上げたと云へば、その手腕も見るべきものがあらう。雜誌と新聞とは同一の業では無いが、互に共通する點も尠く無いから、雜誌に用ひた力を、新聞に用ひることは、決して無理でも無く、六ケ敷くもあるまい。寧ろ此の際『國民新聞』を、石川氏と協同の事業にしたらば、總ての點に於て、面白く運ぶであらうと考へ、予は綱島君を介して、その旨を石川氏迄申込み、遂に石川氏もその話に乘つて、それから種々の逐條的談判は、吾社の幹部と、石川氏との間に取交はされて、予が社長となり石川氏が副社長となり、それにて『國民新聞』の回復は、略ゝ一段落を告ぐることゝなつた。

これが大正十二年の秋の末、冬の初であつた。
而してこれが爲めに、吾社編輯局の幹部たる、馬場、石川二君の如きは、吾社を罷むることゝなつた。予は寔にそれを遺憾としたが、併し此際萬障を排して、『國民新聞』の回復を計ることが第一であるから、一切のことは、その目的の爲めに、目をつぶることゝした。

五　石川氏の副社長辭任と萬熊の永眠

予は石川氏を得て以來、心身全く滿足した。而して吾社の經營は悉く石川氏に一任し、從來の社員は固より、予の相續者と目指したる次男萬熊の如きも、石川氏の股肱となつて働く可き旨を、詳しく申付け、石川氏が地方支局巡察の時などは、隨行すべきことゝしてゐた。
『好事魔多し』五月であつたと覺えてゐるが、每月一回『主婦之友』寄稿の予の文章筆記の爲に、同社員杉江氏が、大森草堂に來たが、五月の某日の夜、筆記終つた後、杉江氏は、
『これを石川社長より先生に上げて呉れと申付かりました』と云つて、一通の書簡を、懷中より探りて、予の前に置いた。

予は杉江氏が歸つて後、何事ならんと思ひ、これを披き見て、全く驚いた。その文句は記憶しないが、『最早や「國民新聞」の復興事業も、一段落付いたから、これから專ら主婦之友の經營に從事する』といふことで、正しく予と協同の國民新聞經營から、脫退する意味の書簡である。

實は最初石川氏との間には、種々取交したる約束書もあるし、それが公正證書ともなつてゐるから、其等のものに基いて考ゆれば、予は斯る書面が、斯る場合に出で來ることを、期待しなかつた。

但し人間の仕事は、契約書で出來るものでなく、意氣を以つて成るものであるから、石川氏が斯く決心した上は、その意に任ずるより外無いと思つた。併し予としては、當然石川氏の再考を促す可しと思ふたから、その順序をとつたが、これは落著すべき處に落著した。予は此事に就いて、毛頭石川氏に對し、不滿の情を湛ゆるでは無い。石川氏は從來全く沒交涉の人にして、全く他人である予に向つて『まさかの時には力になる』杯と云つて、氣休め文句を吐いた人よりも、非常の場合に助力して吳れたのである。只だその一事を以つても、予は君の好意を永久に記憶せねばならぬ。

其他のことは何れとも問題で無く、又た問題とすべきものでは無い。併し『國民新聞』の世間に於ける位置と信用とは、石川氏が手を退いたことに依つて、加はつた乎、減少した乎と云へば、固より加はる可き理由は無つた。

『國民新聞』はこれが爲と云はん乎、或はこれよりと云はん乎、何れにしても、新たなる難關に向つて行かねばならぬ運命に、遭遇して來た。

予は最早や此上は『國民新聞』を單に予以外の一人、若くは二人と協同事業となすよりも、寧ろ匿名組合なり、若しくは株式會社なり、何れにしても、予の從來懇意な人々に向つて、株を持つて貰ふ外あるまいと思ひ、その方針もて『國民新聞』を經營せんとする考を定めた。それが大正十三年の夏から、秋にかけたことであつた。

然るにその年の九月十六日には、予の次男萬熊が、傳染病研究所に於て永眠した。彼も自ら長生を期してゐなかつたであらう。六十以後生存するは、恥辱であるなどゝ云ひ、自分は四十迄生きれば、それで澤山であると云つてゐた。自ら身體の上に弱點あるを感知してゐたものと見えて、結婚の相談も、笑つて相手にしなかつた。世中には蓼喰ふ蟲も好々といふことにて、當人を愛して、是非吾婿にせんと、予に向つて申込んだ予の友人も數輩はあつた。併し當人は全くそれを相手としなかつた。然も予自身も、當人が斯る場合に、斯る病を以つて、斯る場所にて逝かんとは、全く豫想の外であつた。諺に愚痴なることを『死兒の齡を數ふる』といふが、予は今更ら彼是云はんと欲するものでは無いが、予の短からざる一生の中にて、多くの悲しき死に接した中でも、今尚ほ新たなるが如く、

予の眼の前に髣髴たるは、明治二十三年一月二十三日、大磯に於ける新島先生の死、大正十三年五月二十六日東京の朝倉病院に於ける予の父の死、次には大正十三年九月十六日東京白金傳染病研究所に於ける、予の次男萬熊の死、及び昭和六年九月九日東京帝大病院に於ける、予の長男太多雄の死の四つである。

それに次いでは大正八年二月十八日、東京に於ける予の母の死、昭和二年九月十八日、予の弟健次郎の伊香保に於ける死であるが、正直の處母の死は、予自ら大病中であり、弟の死は殆ど半ケ年以上豫期したることであつた爲に、前四者ほどの劇しき打撃は受けなかつた樣だ。

予は父を失つて以來、非常に淋しく感じた。今も尙ほ感じてゐる。而して萬熊及び太多雄を失つて以來、予は非常に味氣無く感じた。父を失つて以來の予は、淋しき人であり、子を失つて以來の予は、味氣無き人である。

實を云へば新聞經營に關する、興味も、執著力も、半ば以上、萬熊の遺骸と與に、土中に葬つたる心地がした。併し彼が總てのものを『國民新聞』に捧げたる熱誠を思ひ、せめて彼の亡魂を慰むる爲に、予も今一肩入れねばなるまいと思ひ、力めて自ら攝生して、漸く社務に從事するに至つた。併し正直の處それ以後の予は、全く前日の予では無つた。

六　國民新聞社の苦境と田中伯

萬熊永眠後の予は、恰も別人の如き元氣を振ひ起した。併しそれは謂はゞ自ら意志に鞭打つて、斯くしたのであつて、それが予の自然の傾向と云ふべきものでは無つた。併し目前に横はるものは、何よりも復興の事業であつた。予は前にも述べたる通り、此上は吾社を少數の匿名組合、若くは株式會社として、成立せんと欲し、豫ねて懇意であつた方面にも、夫々その相談を試みた。

いざとなれば、なか〳〵容易の業では無つた。金持の金持である所以は、金を出すが爲の金持では無くして、金を出さないが爲に金持となつたことは、理論の上には、豫ねて聞き囓つてゐたが、事實としては、初めてこれを實驗した。

予は今更誰を恨む可き要は無つた。併し有體に云へば、事志と違ふといふが、此事であつたらう。

但だ此際特筆すべき一事がある。それは田中伯爵のことである。田中光顯伯は、明治二十三年『國民新聞』發行頃から面識はあつた。併し別段懇意といふわけでも無く、親友といふわけでも無つた。『國民新聞』が田中伯その人に對して、如何であつた乎を、確實に語ることは出來ぬが、田中伯は凡

有る新聞から非難せられたる經歴を持つてゐる人であるが――その事の是非眞僞は姑く措き――恐らくは『國民新聞』も世間並には、その筆法を振つたものであらう。

併し予は餘事は姑らく措き、伯が文雅風流の紳士であり、同時に最も勤王心の熱烈である、老壯士であつたことを、熟知してゐた。卽ちその一點に於いて、予等兩人は互に靈犀相通ずることゝなつた。されば予を此の困難より救ひ出さんが爲に、老伯は自ら隱居の身にして、世事を一切放擲し居たるに拘らず、尠からざる盡力をせられた。予も又た敢へて伯の好意を、濫用するといふわけでは無いが、それを快く利用して、伯の意見に從つて、資本家を求め、又たその資本家に相談を持掛けたこともあつた。此の一事は精神的に予に少なからざる慰安を與へたが、物質的には必らずしも、予の希望通りには至らなかつた。卽ち詳かに云へば、田中伯の推薦したる資本家は、田中伯に向つては、敢へてそれを拒まなかつたが、又た予に向つても惡き顏はしなかつたが、しかもいざ實行といふ場合に至つては、容易に財布の口を開けなかつた。

これは金持共通の性癖と見て、別に予はそれを彼是云ひもせず、思ひもしなかつた。併しその結果として、吾社は駸々乎として深淵に入つたのである。それは復興の爲には社も新築しなければならず、機械も新調しなければならず、活字も固よりのことである。

而してその收入は復興以前に比して、殆ど比較にならぬほど減退してゐるからして、謂はゞ新に新聞を起すも同樣の資本を要してゐた。それで予が他日國民村を造るべく購ひ置きたる、小金井の五萬坪の地所を賣り、或は澁谷に予が父の散歩、逍遙の爲に設け置きたる、櫻の林を賣却したり、又た其處此處より若干の資金を調達し、其日暮しに切拔けてゐたが、事は愈ゝ急迫となつて來た。

特に斯る場合の時には、進一歩の手段を以つて、臨むの外無しと觀念し、兼ねて加賀町に五百坪の土地を求め、其處に建築の計畫を立てゝゐたから、猶ほ事は面倒に陷つた。理つて云ふが、此の計畫は、石川氏と協同の際に初つたことであつて、石川氏が引退後その計畫を實行した迄であつた。

人は或はこれを以つて無謀といふかも知れないが、無謀らしく見えるところに、却つて予等の苦心の存する處があつたといはねばならぬ。

此の如くにして、殆ど十三年の下半から、十四年の下半迄經過した。卽ち萬熊の死後の一年間は、予にとつては十年と云はんか百年と云はんか、一生の中で此の一年程、苦勞の一年は無つた。

然るに田中伯の口入れに依つて、最後に或る一人の資本家が出で來つた。それは根津嘉一郎氏である。予は青山に住んでをり、根津氏も又たその附近であつて、謂はゞ同町の誼みといつても差支無つた。別段根津氏とは懇意といふわけでは無つたが、青山會館創立に際しては、同町の關係から、最

初に相談し、欣然氏も應諾し、自ら野田大塊と共に世話役の一人となり、工業倶樂部の集會では、勸進帳に、よく覺えぬが、一萬五千圓の額を書いた。

その以前から人は知つてゐるし、又た書畫骨董の上に於て、氏の宅に同好の者と共に、觀覽に赴いたこともあつた。世間では根津氏の評判は、今更ら此に言明する必要も無き程定つてゐた。

予の懇意なる者の中にも、氏と交渉の爲に、痛手を負ふた者が、一人や二人では無つた。唯だ予は氣六ケ敷く、我儘なる金持であるといふことだけは、知つてゐたが、何れの金持でも、金持といふものは、斯くあるべきものと考へてゐたから、予は必らずしも左程には警戒しなかつた。

しかのみならず、その紹介者としては、田中伯の依賴を受けたわけである乎、根津氏の依賴を受けたわけである乎、堀内良平氏が來た。堀内氏は予の舊友では無いが、新聞記者の經歷もあり、實業家として、最も譯の分りたる一人にて、予を了解し、且つ予に對して了解もあると考へてゐた。故に予は安心して堀内氏と話合ふこととした。

而して堀内氏は、根津氏が予に同情し、予の修史の事業が中途にて挫折するを、見るに忍びずとし、兎に角新聞に一肩入れてやるといふ話であつて、予にとつては恰も牡丹餅にて頰を叩かるるが如き話であるから、予は『宜敷く賴む』といふことで、堀内君に依賴した。

癸亥元旦　節錄　（大正十二年　六十一歲）

不作黨人不學仙。　沒頭簡冊便安禪。
齡過耳順差强意。　恰是祖翁釋褐年。

華甲自述　三首

嶽雪波光帶瑞烟。　笑迎華甲一周天。
人間百事消磨盡。　唯禱殘生二十年。

唯禱殘生二十年。　文章敢擬馬遷編。
巍巍明治聖天子。　盛德宣揚千古傳。

盛德宣揚千古傳。　君民相信道相全。
文章報國非無意。　唯禱殘生二十年。

老龍庵

不用出門尋綺霞。　香雲深處卽吾家。
春風莫謾弄庭樹。　此是阿翁遺愛花。

籠坂嶺

嶺上無風氣自淸。　高峰屛列碧湖橫。
下山人似憑虛客。　快駛白雲堆裏行。

出世間

五歲湘南獨掩關。　圖書堆裏對名山。
寧期造化謾多事。　賺得先生出世間。

大震災有作　二首

四十餘年不息功。　自家具得自家風。
文章有命誰憎達。　萬卷書焚一炬中。」

江湖論陣勢堂堂。　劫后荒涼夢一場。
休說死灰難再起。　請看靈焔燭天長。

國民新聞社假屋成

板屋依然意氣豪。　一枝禿筆捲風濤。

紅塵紫陌今安在。　唯見土階三尺高。

中秋月

松影參差蟲語寒。　碧天皎皎轉氷盤。
年年慣賞中秋月。　今夜偏爲別樣看。

除夜

流年逝水不須驚。　萬境轉來心愈平。
顧影燈前還一笑。　讀書生是可憐生。

甲子元日 (大正十三年　六十二歲)

孤忠許國一身輕。　誰爲皇家策太平。
醒眼看來多怪事。　滿腔憂憤迓新正。

山王草堂新居　二首

來往湘南與帝鄕。　悠悠身世兩相忘。
餘生欲老那邊好。　占得山王一草堂。
高臥不須棲碧山。　寄生半市半村間。
蓬蒿滿地無過客。　雲外長松獨護關。

四國約成

四國約成隣交温。　昇平瑞氣滿乾坤。
狂夫不解推移術。　獨唱臥薪嘗膽言。

勿來關

松靑沙白水連空。　撫劍悲歌憶昔雄。
行客不禁吟興動。　勿來關外落花風。

落花

蝶舞蜂歌到處宜。　香雲漠漠草離離。
早春何若晚春好。　滿袖輕風花落時。

青龍寺

芙蓉岳麓青龍寺。流水濺濺度竹林。
不用安禪閑作用。滿窓清籟洗塵襟。

觀瀾亭偶成

碧花紅藥爲誰開。遮莫閑園委草萊。
日午幽亭人欲睡。哀蟬若水報秋來。

眞一夢

吾黨二三子。隨我出湘南。炎熱荒劫后。
老脚我何堪。行行不行盡。前路虎視耽。
但倚扶持力。半夜歸草庵。回頭眞一夢。
懷往與清談。莫厭厨味淡。深情有餘甘。

哭阿熊

平昔謾期天下奇。唯吾與汝兩心知。
桂花零落陰蟲唧。正是人間腸斷時。

鹽原 二首

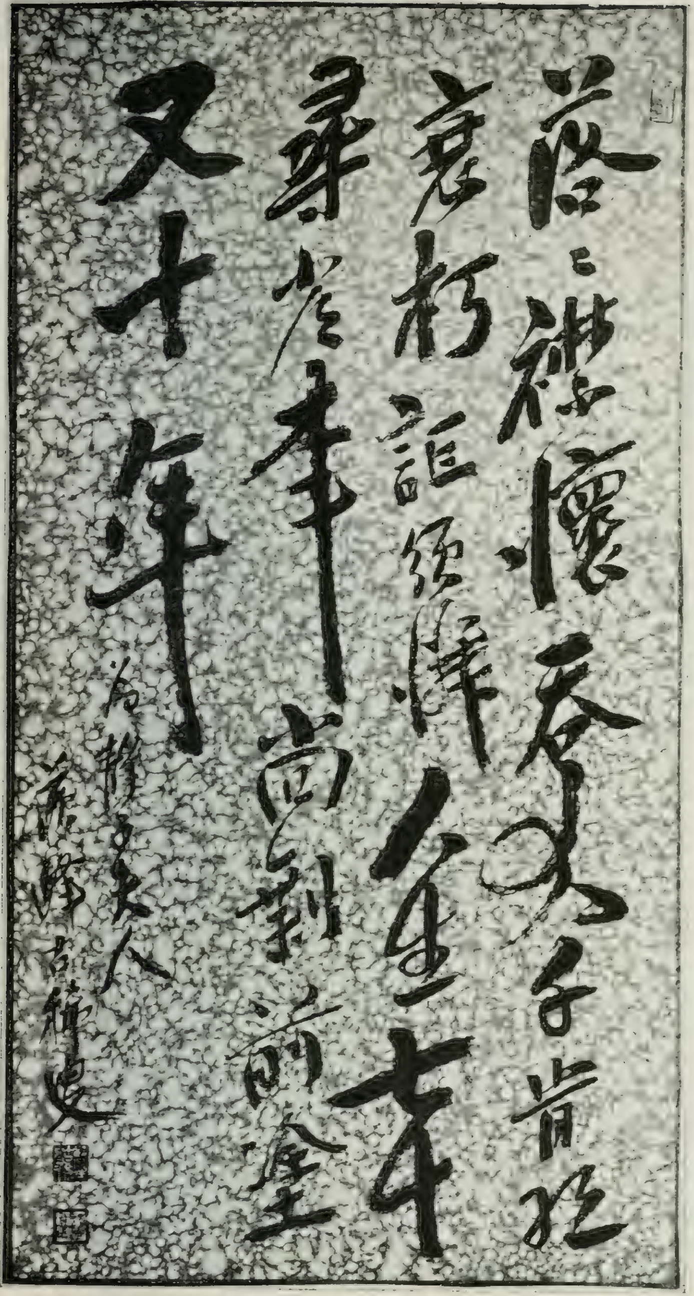
蹈盡鹽溪北又南。不知何處結孤庵。
秋光蕭瑟群山靜。紅葉無風點碧潭。

昨夜嚴霜墜。溪山錦作堆。欲窮溪上路。
唯見白雲來。

觀瀾亭除夜

北風怒吼捲寒濤。百尺孤松意氣豪。
守歲江亭人不睡。晨星落落枕頭高。

山王草堂庭前に於ける翁夫妻



古稀自述の詩書

第十八章　國民新聞社退社以後古稀に至る迄

一　何故に國民新聞社を去りたる乎

◇國民新聞社と根津氏との關係

今此に予と根津氏との交渉に就いて語らんとすれども、それはあまりにくだ〳〵しければ、そのことだけは別に認めることゝして、但だ極めて概略だけを書いて置く。

最初堀内氏口入れをなし、それから根津氏の代表として、河西豐太郎、堀内良平兩氏が出で來り、此方からは、山川、尾間、山根、時としては坂部氏などを加へて、それ〴〵談判に取掛つた。先づ談判に就いて、國民新聞社側の委員長とも云ふべきものは、山川瑞三氏であつた。當時氏は副社長であつたから、而して社の經營の實務に當つてゐたから、これは當然のことであつた。尾間氏は營業局長であつて、本社總支配人の格であつたし、山根氏は編輯局長であつたから、孰れも適當の委員

であつた。
予は自ら此のことに當るを欲しなかつたのは、第一算數のことは予が最も不得意のことであり、且又た予としては、他日根津氏と協力する場合には、予自ら經營の任に當るわけでも無いから、予は背後に居つて、そのことの成行を唯だ監視してゐた。
此の談判は實に長引いた。此方に於ては、最初堀内氏の口入れに依つて、當然根津氏は一肩入れるものと確信し、その前提の下に於て、本社復興の仕事を進めて行つた。然るにその談判は、必らずしも、故らに長引かせたものでもあるまいが、なか〳〵思ふ樣には捗らなかつた。
或は遂にこれは、根津氏が予等を窮地に陷れ、思ふ存分に蹴つて蹴つて蹴りつけて『國民新聞』を吾有にする了見ではあるまい乎と疑ふの已むべからざるに、至らしめた。何は兎もあれ、予は此の談判に依つて、如何に石川武美氏が、立派なる紳士であつた乎を、回顧せざるを得なかつた。石川氏との時には、國民新聞社の評價を、二百萬圓に定め、石川氏の希望にて百五十萬圓に切下げたが、根津氏との談判には、先づ百萬圓に初まり、遂に八十萬圓に切下げ、愈〻談判結著といふ間際に、更に七十萬圓に切下げた。
實は餘りに脚下を見て、値切り倒すなどといふことは、面白く無つたが、脊に腹は代へられず、今

更ら此まで乘り掛つた舟となり、又た世間にも此事は、既に公表せられたることで、此上根津氏が手を引いたと云はるれば、それこそ『國民新聞』は致命傷を受くるものであるから、涙を呑んでそれを容れた次第であつた。

實は予は談判の中途から、成程予は己れの心を以つて、餘りに相手を忖り過ぎた。世の中の人が『油斷するな』と云ふたのも、決して理由なきことでは無つた。實は自分も全く一杯喰はされたわけだが、併し彼も商賣人であるから、慾得には目が無い。

新聞の經濟などは、如何にして立ち行くかといふことは、早く合點するであらうから、此際は己を殺して、新聞を生かす外は無いと考へ、總てのことは豫想以外であつたが、せめて最後は根津その人の經濟的知識と、手腕とに依賴して、愈よその議を成立たしむることゝなつた。

然るに相談の成立つや否や、予は又それが裏切られたることを知つた。元來『國民新聞』は總てに於て不足は無つた。不足といふは唯だ資本だけであつた。

從來販賣店にせよ、廣告業者にせよ、予に對して同情こそあれ、反感などを持つてゐたものは、恐らくは無つた。併し彼等は如何に『國民新聞』の肩を持ちたりとて、愈よ一大競爭となる日には、有力なる資本家の新聞から、必らず最後の打擊を受くるに相違無い。されば『國民新聞』の肩を持つの

も、先づ大抵にして置かねばなるまい。これが即ち彼等の心意氣であつた。
然るに今度その人格は兎も角も、資本家としては、日本に隱れ無き根津氏が、德富氏と協力したから、これこそ鬼に金棒にて、今度は新聞繁昌疑ひ無しと考へた。
即ち予はこの考に乘つて、大いに積極的に仕事をして見たいと云ふのが、最後の望であつた。然るに根津氏は予の期待を裏切つたばかりで無く、世間一般の期待を裏切つた。彼は何よりも先づ社の經營として、經費節減令を下した。
由來新聞經濟なるものは、經費さへ節減すれば、收入は自然に增加するといふわけのものでは無い。總ての場合とは云はぬが、概して五百圓の經費を節減すれば、やゝもすれば千圓の收入を減ずることゝなり、千圓の經費を節減すれば、二千圓の收入を減ずることゝなる。
新聞社に於ける經費節減は、鰹節を削るが如く、新聞そのものを縮少するばかりになつて、經費節減の極度は、新聞そのものゝ往生寂滅となるものが多い。然るに根津氏は唯だ節減一方に力を入れたから、周圍の形勢は全く惡化した。
予は國民新聞社に經費節減の餘地が無いとは云はない。されどそれはそれとして、一方には、或は販賣部の擴張、廣告部の擴張など、積極的に思切つて、金を費ひ、世間の期待に應じて、大いに

活動して見せれば、自然に紙數も増加し、廣告も増加し、何時の間にか收入支出の兩端は、期せずして相合するものとなるから、予の積極的經濟を用ひる利益を、反復說いたが、とてもそれが了解せらるべきやうも無つたから、最早やこれ迄なりと考へ、此上は唯だ時節を待つの外無しと諦らめ、自分は生ける屍同樣に、唯だ國民新聞社に毎日出社して、予の役目であるところの仕事丈を爲るに過ぎなかつた。

二　國民新聞社退去の決意

◇言論の自由を拘束されし予

『君子は交絕てども惡聲を出さず』といふ言葉がある。今更ら『國民新聞』を去つて後に、彼是云ふのは、如何にも男らしく無いことだ。故に予は委曲の事情は、寧ろこれを語らぬこととして置くが、併し大正十五年の四月頃から、昭和三年の終迄、彼是三年間、予は自分ながらよく辛抱したと思うた。

但だその間に於て予が一言することは、予の所得に屬する株が、優先株、普通株、合せて八十萬圓ばかりあつた。七十萬圓は所謂『國民新聞』の看板料であつたが、あとの十萬圓は、從來民友社か

ら『國民新聞』に用立てたる、辨償であつた。予はその中三十萬圓を割いて、舊社員の諸氏に分配した。而して殘り五十萬圓だけを、予の所有として置いた。

三百萬圓の會社で、五十萬圓の株主と云へば、固より六分の一に過ぎ無い。併し六分の一の發言權だけは、これに依つて尠く共保留することが出來ると思うて、それだけ殘し置いた。

併し今日から考へて見れば、分配した株も、殘した株も、殆ど廢紙同樣と云はんより、廢紙である。これが何れの日に蘇生すべき乎。何人もそれを語ることは出來まい。

元來國民新聞社には、社長室などといふは、初から終迄無つた。然るに加賀町に移つてからは、社長室なるものが設けられた。無論社そのものが狹いから、社長室の狹いのも、餘儀無いことであるが、有體に云へば、狹き社に比して、社長室は猶更ら狹かつた。別に予はそれを窮屈とは思はなかつたが、その中に居ることは、苦痛であつた。

予は如何なる場合でも、編輯局の眞中に机を据ゑ、其處に腰掛けて、一切のことをした。文章を書くことでも、校正をするでも、讀書をするでも、若くは特別で無い來客は、予の座右に引見した。

然るに社長室が出來てからは、予は全く別物となつた。予は強いて室外に席を設けて、仕事をして見たが、一體の空氣が甚だ從前とは異つてゐた。從つて寧ろ社長室に蟄居することが、賢明の處置で

あらうと思つて、狹い社長室でやつてゐた。

予は社長といふ名儀であるが、根津氏等が作りたる、社の規則では、副社長が一切の業務、經營の任に當ることであつて、社長は謂はゞ頭では無く、頭に被る帽子となつた。一切のことを金錢で定むるものに於ては、金を出した者が最後の權力を得るといふことは、必らずしも不思議では無いが、それが餘りに露骨に顯れてゐたことは、豫ねて斯くあるべしと覺悟はしたものゝ、予にとつては、必らずしも愉快では無つた。

要するに予は此の三年間を、一生の中に於て、最も精神的に不愉快の期間であつたと思ふ。後にも先にも此れ以上の不愉快は無く、又たこれに類したる不愉快も無つた。

予は總てを犧牲としても『國民新聞』さへ繁昌すれば、而して『國民新聞』の筆政さへ予の手中にあれば、それで辛抱出來無いことではあるまいと考へた。

併し段々經過するに從つて、『國民新聞』は此儘で置けば、唯だ自滅するより外は無いと考へた。予の筆政も漸次拘束せられた。殆ど予は社長でも無く、主筆でも無く、一種の傭人同樣にて、資本家の註文次第で筆を執らねばならぬ樣な位置に、陷りつゝあるに氣付いた。

一切の不愉快も、個人的屈辱も、公の機關たる『國民新聞』には代へ難しと考へてゐたが、その

公の機關たる『國民新聞』が、公の機關たることが出來ず、公人としての予が、公人として立つことが出來ぬと認めた時に於ては、最早や吾事已むといふことを、諦めざるを得なかつた。

正直のところ、予は『國民新聞』が日吉町から加賀町の新館に移るときに、或は予は永遠に國民新聞社に留ることが出來無い場合が來りはせぬ乎と懸念した。それは空想では無い。

大正十四年の末から、大正十五年の初にかけ、此の數ケ月間に、根津氏との交渉に依つて、日一日と予に於ては、新發見をするが如き心持をしたからである。其處で予は新館に移る際に、豫ねて『國民新聞』創立以前より使用したる、予の編輯机案だけは——その一切の引出は燒けたけれ共、机そのもの丈は、大震火災に取出されたるが爲めに、それが恰も予にとつては、一のシムボルとしてゐたものであつたが——移轉の際に加賀町に持運ばずして、予の山王草堂に持運ぶことゝしてゐた程であつた。

予が『國民新聞』退去の顚末は、既に周知のことであるから、今此に繰返へす必要も無いが、予自身としては、屢〻これを考慮した。而してその決心をつくるに就いては、誰にも相談はしなかつた。唯だ予自ら予の心に問ふて、然かしたまでゞあつた。實を云へば最後の決心は、昭和三年の十二月につけた。別に前途に就いて、何等考へることは無つた。予は身を處する上に就いては、必らずしも

随ふ不見では無い。

従来とても随分気早き者ではあるが、その中にも又た冷静に考慮する余裕を有たないことも無い。併し自分の新たなる住家を造らして、然る後古き家を出づるなどの遣り方は、予の最も嫌ふところである。予は國民新聞社にあつて、斯る態度を取つたる人々に對して、その理由は兎も角も、餘り贊意を表ふ能は無つた。

他人に對してさへその通りであれば、予自身に就て斯ることの出来得可き筈は無い。予は唯だ己を恃んでゐた。老いたりと云へど、猶ほ一管の筆を持つてゐれば、自ら支ふるに足る。吾身を日本國民の懐に托するは兎も角、何人とか、何れの社とかに、豫め渡りをつけて、而して後に進退を決するは、賤丈夫のなすことゝ考へたから、一切それ等のことは顧著しなかつた。

而して予が四十年来、凡有る苦心を以て育て来つた、國民新聞社を去るに際して、予が「國民新聞」に最後の筆を擱いた一文を掲ぐれば、左の如し

「國民新聞愛讀者諸君各位、不肖は國民新聞社長及記者を辭退したることを、諸君に向つて、告白せざる可らざるを悲しむ。

國民新聞は、明治二十三年二月不肖創立し、爾来約四十年。諸君の同情と、友愛によりて今日に到

つた。不肖の一生、不肖の生命、殆ど此中に存す。然るに不肖自から去らねばならぬ所以は何故である乎。不肖は進んで即今具體的に之を陳述するを屑としない。但だ不肖をして斯く決心せしめたる、重なる理由の一は、筆政の不自由と、不安心の爲めである。別言すれば、新聞道の爲めに、言論自由を擁護せんが爲めである。

公人としての不肖は、唯だ國民新聞あるが爲めであつた。既に國民新聞を失ふ。不肖の公人としての存在は、殆ど其の意義を沒却する。而して之をしも忍ばざる可らざる事情は、唯だ偏に各位の諒察を仰ぐのみ。

然も皆な不肖の微力と、不明と、不敏の致す所、實に慚惶の極である。

恭しく玆に多年不肖を眷顧せられたる、國民新聞愛讀者各位に謝し、諸君の淸福を祈る。

昭和四年一月五日』

三　新聞社退去後の修史と文筆

予が國民新聞社を罷めて以來、世間では勿論予が何事を爲すかと、考へてゐて呉れた者もあらう。

或は最早や德富の公的生涯も、これが斷末魔で、これからは生ける屍として、兀々修史を相手に、一生を送るであらうなどと考へた者もあらう。

又た予の友人中には、直接予に向つて『謂はゞ日暮れて道遠し。これからは一意專心、修史の業を完成するが宜からう』と、半ば希望的に、半ば忠告的に告げた人も、一人や二人には止らない。

併し當人たる予は、篤と考慮した。又た篤と考慮せざるを得ないのだ。成程新聞事業と手を絕つたのを仕合せに、全部の力を歷史に傾倒するといふことは、却つて仕合せであるかも知れぬ。併し飜つて考ふるに、如何に全力を歷史に傾けるとしても、修史の速力は是迄以上に出づることは、恐らくは難からう。

何故なれば、予の修史は盲目滅法に書きまくるでは無くして、其日〳〵の氣持に依つて、書き續けて行くので、要するに、如何に予の前途は縮りつゝあればとて、予の心持は、百年も先に生きる積りで、悠々として迫らず、徐々として行歩するといふ所に、本色もあり、且つ特色もある。

如何に新聞の關係を絕つたればとて、從來出したる五十哩の速力を、百哩とすることは、とても出來難い。否な予の歷史なるものは、時事と接觸の間に書き始め、且つ書き續けたるものであつて、今から全く世間離れをしたる、新境涯に入つて、從來の仕事を持續するといふことは、容易で無い。

謂はゞ予の修史の筆は、新聞の筆に依つて、新なる生命を得、新なる元氣を得て、進行しつゝあるものにて、全く新聞と關係を絶つた時に於ては、從來の速力を倍にすることが出來ないのみか、從來の速力そのものを維持することさへも、或は六ケ敷くはあるまい乎と、心配せらるゝ。

元來予そのものが、純粹なる學究では無い。謂はゞ學者から見れば、餘りに世間的に、世間から見れば、餘りに學者的に、卽ち實際と學問との境界線に、その片足と片足を踏込んでゐる樣なもので、若し予の本領といふべきものがあれば、恐らくはその所に存するであらうと、考へられる。

若し予の歷史に、聊かたりとも價値ありとせば、それは純乎たる書齋的學究の歷史で無く、廣く世間を渡り來りたる、所謂る新聞記者の歷史であるが爲であらう

斯る次第であるから、單に予の興味が新聞と離るゝことを欲せざるのみならず、歷史を書く上にも、是迄受用したる、その刺戟を全く取去ることは、修史の業の進行の上にも、甚だ不利益と考へた。

以上の理由の爲に、予は『國民新聞』とは關係を絶つたが、新聞、雜誌そのものとは、關係を絶たない決心をした。

扨てこれに就いて、二個の問題がある。第一は身を自由の位置に置いて、何れの新聞、何れの雜誌を問はず、勝手次第に寄稿するといふ位置、所謂るフリー・ランスの位置。第二は然るべき雜誌なり

新聞なりと特約し、予の原稿をそれに掲ぐる便宜を保障すること。即ち或る意味に於ては、予はその新聞若くは雑誌に向て、原稿を寄する義務を有するが、他の意味に於ては、掲載せしむべき權利を有することである。

此の二點に就いて、予は頗る考慮した。何れかと云へば、第一が最も好都合に相違無い。予の友人の中には、從來の行掛りを知り、予が全く新聞雑誌と關係を絶つことは、不可能であることを知つて、斯る上は、予をフリー・ランスとして、何れの新聞雑誌にても欲するまゝに、寄稿するの位置を、保留するを以つて、得策となすの意見を、予に向つて吹込んだる者も、二三には止らなかつた。

予もこれを好まぬでは無つたが、予は極めて少壯の時から、新聞雑誌の投書家たる經驗を持つてゐたから、その裏面に於ける屈託を知つてゐる。成程投書家は樂は樂であるが、第一の心配は、投書た果して受付ける乎否乎。第二の心配は假りに受付けたとするも、如何なる形式に於て、何日頃それを發表する乎。時としては、此方で汗水を流して漸く作り上げたる原稿を、握り潰し、然らざるも時期遅れて、殆ど何等の效果も無き時節に、申譯的に最も不都合なる掲載方をなす等、斯る痛き經驗は、多くとも云はぬが、聊か嘗めないことも無つた

これが予をして斷然『國民之友』の創立をなさしめたる所以であつた。されば從來は『國民新聞』

に立籠つたる予が、日本國中の新聞雜誌を吾物同様に、解放せしむることは、寔に好都合であるとは、一寸聞けば如何にも面白き話であるが、事實は決してさうでは無い。
縦令予が國民新聞社を去りたる爲に、三ケ月か半年位は、世間の話題に上り、予の原稿も要求せらるゝ様な場合があつたとしても、如何なる原稿でも屢ゝすれば、鼻につくといふこともある。疎んぜらるゝといふこともある。軈ては予はフリー・ランスの愉快の夢未だ覺めざるに、早くもフリー・ランスの悲哀を感ぜねばならぬ場合にならぬとも限らぬ。
されば強いて一定の場所を求むるでは無いが、若し左様なる機會が出で來つたらば、予は寧ろその機會を摑むことが、予の前途にとつては、得策であらうと、考へた。

四　熱心なる大阪毎日新聞社の提議

◇大毎、東日社賓として論壇に立つ

然るに右の如き考をなす以前に『大阪毎日新聞』は、頻りに予に向つて、相談を持掛けた。その顛末は今此に詳しく語る必要は無いが、如何にも敏速に、如何にも熱心に、如何にも寛大に、凡有る

條件を具して相談を持掛けた。

予は此に於て意を決して、これに應ずることゝした。これが爲に最も甚だしきものは、予は豫じめ本山氏と昭和三年、御大典の際、京都にて會合の節、此事を談合し、所謂る予が身を托すべき場所を作つて、然る後に、國民新聞社を去つたであらうといふ者もあつた。

或は予が高き俸給に目がくらんで、身を賣つたのであるといふ者もあつた。或は予が大阪商人の甘言に惑はされて、うつかりこれに乘つたが、今に見ろ、聽てひどい目に逢つて、後悔するであらうといふ人もあつた。

それほどで無くとも、予が國民新聞社を去つたが爲に、予に向つて多大の同情を表したる、予の既知未知の友人達は、予の此事の爲に、所謂る幻滅を感じたる人も少く無つたと思ふ。

併し予としては、これより外に處すべき方法が無つたとは云はぬが、斯くするを以つて予の使命を果すに、最も適當と信ぜざるを得なかつたのである。それは予の言論の自由を拘束せざる點に於ては、從來の『國民新聞』に於けるよりも、更らに幾倍の自由があり、且つ予の讀者の範圍も、東西二紙に掲載するに於ては、從來に比して幾倍かの多數讀者を得ることゝなり、文章報國の上から見ても、これは予にとつて、寧ろ本望と云ふべきものであり、且つ予が修史に就いては、何等の妨げなき

のみならず、寧ろ尠からざる援助を吝しまざるに於ては、予は「大阪毎日新聞」の提議を快諾すること
が、予としては最も至當のことゝ思はざるを得なかつたのである。

予は必ずしも羹に懲りて、膾を吹くでは無いが、楳津氏との相談に於て、餘り紳士的言語を恃としたから、「大阪毎日新聞」との相談には、聊か考慮せぬでも無つた。且つ正直の所、大阪商人と云へば、必ずしも生馬の目玉を抜くといふ程では無いが、總てのことが算盤一點張りで、予の友人中には、その爲に予が久しからずして、大なる後悔を來すであらうと、心配した者も尠く無く、予に向つて彼是忠告したる者もあり、その人々の好意に對しても、予はうかと相手の口車に乘るといふことを、再思せねばならぬ次第であつた

但だ予は本山翁及び幹部の二三氏と、親しく會談したる結果、何時迄考へても、考へ盡すことは無いから、第一予は一君萬民の皇室中心主義であることに於て、果して「大阪毎日新聞」と、同主義である乎否乎 又た如何に議論の筋道に於て、異同あるも、右の主義に依つて、予が書く一切の文字には、自由を與ふる乎否乎。言ひ換ゆれば、社の意見と異同を問はず、予をして言論の自由を、何等の拘束無く行使せしむる乎否乎。其他若干の問題に就いて協定し、昭和四年三月二十日、予と本山翁と、日本倶樂部に於て調印し、清浦、後藤兩伯その裏書をなすことゝなつた。

猶ほ牧野伯もこのことを與り聽かれたが、伯は內大臣の位置にありたるが爲に、裏書きだけは見合せられた。

斯る次第で予は昭和四年四月一日から、約束通りに「大阪每日」「東京日日」の兩紙に、筆を執ることになつた。

大阪每日新聞社との契約は滿五ケ年と極めて置いた。何故にしかしたるかと云へば、予は醫者に身體檢査をして貰ふたが、十ケ年位は大丈夫といふことで、それを半減して、予の方から先五ケ年と定めた。

予はこの新たなる予の境遇に立つて、自分ながら不思議に考へた。正直の所、予は生れてから、未だ曾つてサラリーマンとなつたことは無つた。予の方から給料を出すも、予が給料を受取つたことは、明治三十年の七月から十二月まで、一寸松方內閣の爲に、役人となつた以外には無つた。

然るに六十七歲にして、初めてサラリーマンとなつたことは、何んとなく吾心の淋しきを感ぜずしては、已む能は無つた。併しながらこれが爲に予と社會との連絡は、依然繼續するを得た。否な或る意味に於ては、寧ろ擴充せられた。

從來は「國民新聞」を通じての關係であつたが、今や「大阪每日」「東京日日」を通じての關係であ

るから、讀者との交通は、頻繁といふよりも、更に增大したと云はねばならぬ。即ち單に從來の讀者を繫ぎ得たのみならず、又た新たなる方面に於て、讀者を開拓しつゝある事實を、無視することが出來ない。他のことは扨て置き、文章報國といふ上から云へば、予に於ては決して不本意のことでは無い。

日長うして少年に似たりと云ふが、老人になればその逆にて、全く光陰は矢の如しである。予が大阪每日、東京日日社賓として、筆を執るに至つたのは、昭和四年四月、六十七歲の年であつたが、それから昭和七年七十歲までは、殆ど一瞬の間に過ぎ去つた。而して此間は予一身にとつては、最も平凡なる、又た平板なる生活を送つた。

予と大每社との關係は、總てのことが豫想通りと云はんよりも、寧ろ豫期以上圓滑に行はれた。それは予の老友故本山社長が、極めて予に對して諒解あり、且つ同情ある態度をとつたことが、その主なる理由の一であつたと、云はねばなるまい。同時に予も亦た約束以上の義務を果したことは、云ふまでもない。

五　德富蘆花臨終の記

尙ほ話が少しく前後するが、予は今此に予の弟蘆花德富健次郎の長逝に就いて語らねばならぬ。而してその顚末は『一日如夢の記』に詳述し置きたれば、即ち左にその全文を揭げることゝする。

『昭和二年九月十九日早朝、伊香保仁泉亭別館にて、此記を艸す。

九月十七日は、感冒の氣味にて、頭痛、腰痛と共に、咳を發し、近頃珍らしく出社せず平臥した。實は十六日の夜、青山會館に於ける、德富萬熊記念講演會に出席したる際からのことであつた。否な十五日頃からのことであつた。

十七日午後四時頃、妻は一通の電報を手にして病床に來つた。把て見れば伊香保なる弟より、只今お目にかゝりたし、直に御出を乞ふとの至急報だ。此れは予に取りては、決して期待しないことではなかつた。

予は大正二年の秋、京城にて弟を見て以來、遂ひに面會の機を得なかつた。予の弟に對する態度も、感情も始終、一貫してゐる。然も弟の其の父母、兄弟に對する態度と、感情は、何故にや時

に變化あり。その爲め兄弟指顧の間に住しつつ、十五個年も、遂ひに手を把りて驩晤するを得なかつた程の、不自然なる情態を現出した。

今春弟の病の甚だ輕からざるを聞くや、予は相見んと欲するの情に禁へず、予の姉達を介して、其の方便を講じた。而して遂ひに親から粕谷の弟家に出掛けた。然も弟は予に面會せず、予は空しく雨のぱら／＼降る草深き庭に立つて、澁茶一椀喫するを得ず、天を仰いで去る可く餘儀なくせられた。

爾後幾回か凡有る道を便りて、面會せんと試みた。されど其機の自から熟するを俟つの他はなかつた。而して早晩其機の來るを信じてゐた。今や其機は來つた。然も其機の來ると共に、弟の病狀の頗る漸みたらんことを豫測して、愕然とした。

予は早速病床より蹴起し、伊香保行の準備をした。乃ち予の子女を悉く伴ふことゝした。弟の尤も嗜みたる物を携ふることゝした。而して折角同日午後逗子に赴きたる予の秘書並木淺峰君をも電話にて召還した。

十七日の予は、餘りの嬉しさと、弟の病狀の懸念とにて、殆ど睡る能はなかつた。それはかねて弟の氣質を心得たる予には、彼が此夜睡る能はざることを、感得したるが爲めであつた。

電報の著してから、やがて伊香保から電話が二回程かゝつた。第一は待つてゐると云ふことだ。第二は時間の打合であつた。如何に弟が予を待つてゐたかは、此れにても推知するに餘りある。

九月十八日、天は雨を催した。空は陰鬱だ。午前四時半に起き、支度を整へ、七時五分の汽車にて上野を發した。熊谷に至れば、伊香保から待つてゐると云ふ電報が車中に運ばれた。新町に至れば、再び高崎から自動車で來れとの電報が運ばれた。而して何れも故らに健次郎と署してあつた。

高崎には仁泉亭主人と、榛名國民新聞前橋支局長が迎へ呉れた。我等は自動車にて秋雨を衝き、高崎から澁川を經て、伊香保に十一時前に著した。仁泉亭の別館に至れば、靴を脫する間もなく、吾弟は頻りに病床より大聲を發して、いざいざと促がした

妻は家を出づる際に、弟の容貌が平生に異る可きを豫期し、面會の場合には、それを見て取り亂さぬ樣にと注意した。予は固より覺悟の前であつた。注意したる妻は先づ泣き伏した。十五年相見ざる兄弟姉妹は、茲に相見たが、病人の目に、我等が如何に映じたるかは知らねども、病人の窶れは、實に意想通りと云はん乎、意想外と云はん乎。萬熊の葬式にさへ泣かなかつた予も、涙を出さない爲めには、渾心の努力を要した。

弟は兄を迎ふるに安臥しては失禮であるとて、予等が到著以來、矢を力めて床上に起坐したと

のことであつた。前夜は一睡もしなかつたとの事。一刻も速かに逢ひたしと、今朝來待ち兼たとの事。電報の文句は弟が自から口授し、殊更らに健次郎と署名せしめたとの事。而して予等を迎ふる爲めに、弟の注文にて小豆飯を作らしめたとの事。以上は後に側近の人々から聞いた。

予等の談話は、予が聞役で、弟が話役であつた。弟は極めて靜かにそろ〳〵と話し初めた。先づ予の顏を見るや、あゝ間に合うてよかつたと云ひ、又水滸傳々々々々と再三叫んだ。又た敗北々々々々と云ひ、獨逸〳〵々々と繰り返した。弟は娓々として過去の心得違を謝した。而して自分も日本一の兄を持つてゐるのを愉快とする。此後の事は一切無條件で御願ひする。而して其の夫人を顧み、此女を助けて吳れよと云うた。聞いて此處に至れば、予も殆ど淚潸々として臆を霑すを、禁ずる能はなかつた。

其他の談話は、餘りに神聖なるが故に、此には揭ぐることを見合はする。

談話は容易に盡きなかつた。然も予は過去を語るを止めよ。何よりも元氣を付けよと云ひつゝ、子女を悉く病床を繞りて立たしめた。弟は何れもの顏を熟視し、能くも皆々綺麗に成長したと云ひ、特に其の手しほに掛けたる鶴子を見上げ、見下し、愛撫禁する能はなかつた。而して病人自ら午餐の世話までした。

雨は相變らず降つた。予は別室と弟の病床との間を、幾回となく往來した。弟は兄に逢ひた

い、嫂に逢ひたいと、屢〻予等を招いた。

病人は寒を怯れた。今でも室内には、火を擁しつゝ、尙ほ寒きを訴へた。されば此冬は熱海に越年せんとて、當人の希望に任せ、直ちに其支度に取り掛つた。事は直ちに電話にて運んだ。熱海では借家が見出された。汽車の打合も出來た。途中同伴の醫師も約束が出來た。而して愈〻明後日――二十日――予等夫婦も吾弟と相伴うて、熱海に赴くことに內定した。

吾弟は熱海の宿が定まつたと聞いて、滿足の意を表した。而して愈〻明後日――醫師は動かす程ならば、一刻も速かにと云うたから――と申し出でた時には、一寸待て下さい、明後日は萬熊の處に行くと、嗒然として冥想するかの如く獨語した。

弟は嫂に向て、萬熊は惜しきことをした。萬熊は兄さんの身代りに死んだのだと云うた。而して機嫌克く病苦を忍び、其の兄嫂子姪等と共に、寫眞「最後の」を撮つた。而して子姪の歸り去るを、情に堪へざる如く目送した。鶴子がまたお目にかゝりますと云うたら、愁然默して答へなかつた。

弟は當初予等も亦還り去るものと、豫期してゐた。然も予等が尙ほ留ることを聞くや、頗る滿足し、且つ安心し、予の休息のことさへも自ら指圖した。

弟は此處は大磯であるかの如き心地がする。新島先生には負債があると云うた。予は先生の負債

は、兄が代りて皆濟したから、安心せよと慰めた。此の負債は固より金錢上の意味ではない。

弟は予を見て、兄さんは理想家であらうとか、兄は賢く弟は英迦だとか、どうも兄さんには感心するとか、半ば尊敬の語でもあり、半ば皮肉でもあるかの如く連發し、而して、私がわるかつた。熱福はぽてりと地に墮ちた。何もかも悟を開いた。云ふだけ云うて、荷が輕くなつた。最う今ま死んでもよいと、全く安心したるが如く、快心の笑をもらした。而して側近の醫師達にまで、皮肉を浴せかくるから、此際惡口だけはよしては如何かと云へば、此れは矢島家傳來で致し方がないと笑うた。

予等は熱海行の事は、尙ほ弟の氣分次第によりて定めんとし、餘りに予等が病床に近くは、病を亢進せしむる所以たるを虞れ、姑らく別處に退き、仁泉亭主人と相語り、主人の芳情に酬ゆ可く、書畫帳に揮毫などした。

然るに日沒より弟の樣子が急變の調があつた。百方手を盡した。而して午後十時五十分には、遂ひに昇天した。而して極めて安らかに、殆ど眠るが如く昇天した。予は多くの人の末期を觀たが、弟の如き立派なる往生は、殆ど觀たことがない。

予は弟の希望と依賴とにより、一切の後事を經紀することとした。予が祕書並木君と與に、十八日の夜半と云はんより、十九日の午前二時まで、諸般の打合をした。

豫ねて九月といふ月は、予等に取りては事故ある月だ。今年の九月も何事か無ければよいがと、妻と相語つたが、遂ひに天壌間に持つた唯だ一人の弟を喪うた。予の心は淋しくある。』

六　徳富蘆花と兄としての予

◇弟を弔するの辭

序ながら昭和二年九月二十三日、青山會館に於ける葬儀に際して、予の徳富健次郎を弔するの辭を左に掲げる。

「皆樣、兄が弟を葬ると云ふ事は極めて不自然な事であります。又其葬儀の場所に於て兄が弟に就て御話をすると云ふ事も、恐らくは不自然の事であらうと思ひます。併し私が茲に一言申しますことは、單に御座なりの義理一片の弔辭ではないのであります。茲に立ちまして、弟の遺骸の前に立ちまして、併せて皆樣の前に立ちまして、一言申しますることは、是は弟の志であらうと思ひます。

弟は死する時に、私の手を執りまして、後の事はよろしく頼むと申しました。其のよろしく頼

むといふことの中には、少なくとも今日此の場合に私が一言をすると云ふ事も、加はつて居たであらうと信ずるのであります。

弟の文學上に於ける位地は、天下の公論がありまして、私が茲に彼れ是れ申す必要は無いと思ひます。併しながら其の得たる所の位地は、私共の父が與へたのでもなく、兄たる私が與へたものでもなく、是は弟の獨自一己の力を以て開拓したる所の位地であります。さうして是までにやり上げたと云ふことは、私の父も、私も、全く意想外の事であつたのであります。この一事だけは私は皆樣に告白し、併せて私の亡き父の申す分迄告白して置きたいと思ふのであります。

弟の著作は先程略歴に述べてある通りであります。其外にまだ澤山あります。例へばコブデン、ブライト、グラッドストーン、ゴルドン將軍などと云ふ樣な本もあります。其他色々の飜譯もあります。併しながら弟の人物、弟の性格と云ふ樣なことは、弟の作りました、若くは書きました所の多くの文字を通して御覽になつたのみでは十分でないと思ふのであります。此の場合に於て私は其邊の事も一言申上げて置く必要を感じます。

世上では兄弟不和などと云ふ樣な話がありましたが、それはさうではないのでございます。全くそれは間違つて居る事なのです。不和と云ふ事は兩方からの時に初めて云ふ事であります。弟は私

に對し感心しないこともありましたらうし、不平もありましたらうし、或は近づき、或は遠ざかつた事もあるのでありますが、斯く申しまする私は、私が人心付いてから今日に至るまで、弟に對する感じと云ふものは毛頭變りませぬ。其の力量、其の手腕、其の文才、其の貢獻と云ふ樣な事に就きましては、時と共に評價が變つて參りますけれども、弟に對する友愛の情と云ふ點に對しましては、私は神の前に誓つて申しまするが、不和などと云ふ事は絕對に無かつたのであります。私は種々の事を澤山書きましたけれども、是まで私の書いた著作の中に、弟の惡口などと云ふ樣な事は、一言半句も書いた覺は無いのであります。若しあつたと云ふ事であれば、あなた方の中から證據を御突き付け下さつても差支ないのであります。斯の如き譯でありまして、私及び私の兩親は、弟に對して常に親及び兄たるだけの事を考へて居たのであります。

併しながら唯だ不幸にして吾々は弟を見るの明を缺いて居たのである。弟が是だけの者にならうと云ふ事を豫期して居なかつたのである。で吾々は、弟に向つては、寧ろ不明であつたと云ふ事を云ひ得るであらうと思ひます。

凡そ世の中の事は、遠い所の人は長所のみを見ます。近い所の人は缺點のみを見るのである。それに吾々兄弟は不幸にして性格がさう一致して居ない。固より弟が違つたと思ふ程に、違つて居たか

どうかは問題でありまするが、悪に角違つて居る。兄は先づ、私の自身の事を申すも如何でありまするが、譬へて見れば河内木綿の樣なものである。弟は羽二重の樣なものである。同じ布地でも河内木綿と羽二重とはどうしても違ふのである。で、有體に申しまするど、弟は直情徑行の人間である。然し決して横着者ではなかつた。我儘者であつた。然し極めて正直、親切、父母には孝行、兄とか姊とかには極めて友愛であつたのである。父母には孝行、兄には友愛、それが何故に時としては父母にも遠ざかり、兄にも遠ざかつたかと云へば、それは弟が惡いと云ふばかりではありませぬ。諺に兄弟喧嘩は兄からと云ふことがあります。私共は喧嘩はしない。併しながら少くとも弟の方からは時として親及び兄に背いた。是は兄が何か弟に對して仕向け方が十分を缺いたと云ふことを、私が自ら反省するより外に途は無いと思ひます。

私は長い間、どう云ふ譯であらうと云ふ事を反省したのでありますが、不肖にして十分にそれを覺悟し得なかつた。併しながら今日になつて考へて見ますれば、多少其の理由も分つたかの如く感ずるのであります。

と申しまするのは、弟は父母の晩年の子であります。弟は私に五歳違つて居たのである。それで私の兩親は、弟を子と思ふよりも寧ろ孫と思つた。私は弟を弟と思ふよりも、寧ろ伯

父が甥、親が子に對すると云ふ樣な考へを持つて居つた。五歲位の違ひでさう云ふ事をと云ふ樣に御疑ひになるかも知れませぬけれども、私は極めて若い時から、同輩から小爺いと云ふあだ名を受けた。小爺いとは小さい爺いさんと云ふ事であります。非常に小きつちやくれてゐたと思ひます。それで五歲の差でありますけれども、自分では十五歲位の差に思つた。まるで弟をば掌の上に載せて見る位に考へて居る。自分の弟であるが對等とか、若くは後から付いて來るとか云ふ感じは有たなかつた。又た親達は、孫の樣なつもりで、うまい物を食はせるとか、若くは頭を撫でてやると云ふ樣なことはしたけれども、一所懸命に教育などと云ふ樣な事をするだけの必要は感じなかつた。

それで弟の方から申しますると、愛に餓ゑたのではない。愛には食傷して居る。併しながら敬に渇して居る。尊敬と云ふ事に渇して居る。それで始終弟が癇癪を起す時には、己れを侮辱したとか、失敬をしたとか、馬鹿にしたとか云ふ樣な事を申して居つた樣でありますが。何故にあゝ云ふ事を云ふかと考へて見ますと、今日になつて見れば、さう云ふ譯であることが漸く分つて來ました。

それに又當人と吾々、此の吾々と云ふ中には父母も加へての話でありますが、異つたことは、大分異つて居る。私は當人の子供の時からの模樣をよく知つて居りますが、非常な内氣者で、はにかみやで、人の前では碌々物も云へない位の風であつた。弟の小學校時代には、餘りに其の學科が出來

過ぎて、傍輩に氣の毒であるとて、故らに知らぬ振りをして點數を減した程でありました。それから大變に感情が激烈である。それから其の時々の事を其時の氣分氣分でやつて行くと云ふ樣な事がある。それから最も小さい事によく氣が付いて、それから何事にも餘り辛抱と云ふことは出來なかつたと云ふよりも、寧ろそれは嫌ひである。それで弟の極く幼少な時分には、帳面二つ、善人帳と、惡人帳と云ふものを拵へて、先づ自分の好きな人は善人帳、嫌ひな人は惡人帳と云ふものに書いて置いた。恐らくは此の善人帳惡人帳の氣分は、彼の死に抵るまで殘つて居ただらう。彼の著作の中には、自ら善人帳に揭げられた者と、惡人帳に揭げられた者とあつて、惡人帳に揭げられた者は、洵に不仕合せな者であつたかも知りませぬ。

　それから自分の嫌ひな友達が來ると、自分ではそれを追ひやることは出來ずに、よく母に告げて、あの人は嫌ひだから、早く追つ拂つて吳れと云ふ樣な事を賴んだ。學校に行く時に、辨當がうまくないと、食はずに歸ると云ふばかりでなくして、大概辨當箱ぐるみ川の中に棄てるとか、道に棄てると云ふ樣なこともありまして、隨分辨當箱を澤山、母は取かへ引かへ購つたのである。それから物が欲しいと云ふ事になれば、別に父母に相談すると云ふこともなく、店からずん／＼取つて來ると云ふ樣な譯でありました。私の父は非常に几帳面な性格の者でありました。それでさう云ふ事を見まする

と、是は困つた子供だと云ふ事でありまして、私もどつちかと云へば、さう云ふ風の事は餘り好きの方ではない。それで其時から、とても此子は一本立ちは出來ぬと云ふ事を父母は云つて居りましたからして、私が、それでは私が此子の世話は引受けます、御安心下さい、私が必ず此子は引つ張つて行きますからどうぞ御安心下さいと、斯う云ふ譯で私は自ら兩親に代つて弟の保護者‥‥後援者位ではない保護者と云ふ樣なつもりになつて了つた。それがずつと後まで殘つて居たので、多分弟から絶交せらるゝ樣になつた、それが一つの理由でないかと、私は近頃になつて漸く考へ付いたのです。もう考へ付いた時には絶交された後であつて、何とも仕方がない。下司の智慧はあとからと云ふ樣な譯であります。

さう云ふ譯でありまして、弟は天才でありましたが、同時に弱蟲、泣蟲、怒蟲、偏屈蟲でありまして一寸手が當りませんでした。明治十一年私が十六、弟が十一。十六の兄が十一の弟を伴れて京都の同志社へ出かけたのである。さうしてどし／＼私が教育をした。丁度新兵を下士官が教育する樣な譯であつて、下士官の方では當り前と思ふけれども、新兵の方では虐待と解したかも知れない。河内木綿で羽二重を非常に揉んだものだから、羽二重の方が少しは痛かつたかも知れない。さう云ふ樣な事が始まりなのである。此話を長くすれば彼の傳となり、私と彼との交渉の傳になります

から、それは略しますが、要するに決して吾々共は、弟を憎いと云ふやうなことはない。弟はどう云ふことをしても、兄には土をぶつゝけても、石をぶつゝけても、憎いなどとは思はない。唯さう云ふ事をさせずにうまく行く事が出來なかつたと云ふ事を、自ら恥ぢて居たのであつて、何時かはさう云ふ事がうまく行くだらうと思つたのである。で、さう云ふ様に弟がなつたのも、決して弟の責ではない。實は、弟がもう少し偉くなると云ふ様なことには氣付かずして、其の弱點とか缺點とか云ふ事のみをよくこつちが見て、それを矯め直さうと云ふことのみに、餘り骨を折り過ぎた我等不見識の罰であらうと諦めました。

兎に角履歴にもありました様に、新島先生の懷から逃れて、熊本に歸りました弟を、私が明治二十二年に引つ張つて、そして『國民之友』『國民新聞』で種々やらせて見ますと、實に私も其時には驚いた。何時の間に斯う英書をよく讀み習つて、兄よりも能く讀める様になつたか。又た文章を書かせて見ると中々能く書くのである。それで是は洵によい者を得たと思つて、私は是ならば俺れの祕書位は勤まると思つた。これが又た恐らく一つの間違ひであつたかも知れない。さう云ふ譯で私は段々弟と交渉をやつて來たのである。

弟は實に鋭敏な頭を有つて居りまして、一を聞けば十を知ると云ふ様な事も出來たのである

先程履歴に『黒潮社』を作つて獨立したとありましたが、其の『黒潮』と云ふ小説は、實は兄が弟に種を授けたのである。私が自分が書けたらば書きたいと思つて居たことを、どうも自分は小説などを作る筆は有たない。又た小説を作ることは自分としては欲しない。それでどうか、あれ程の筆を有つて居るのであるから、弟に書かして見たい。是は恰もヴィクトル・ユーゴーが『九十三』と申します小説で佛蘭西革命を書いた如く、維新から明治時代の潮流を書いて見たいと云ふことで、弟と相談して、乃ち此の青山會館の立つて居りまする此の所に私が居りました時に、何時も夕方から庭に縁臺を出して、私が色々と斯う云ふ風の事もある、さう云ふ風の事もあると云つて弟に話した。それが即ち『黒潮』である。若しうまく行つたならば、兄弟で非常な大著述が明治年間に出來たかも知れませぬが、『黒潮』が出來つゝある間に、弟から絶交狀を突き付けられたのである。大概の事には驚かない私も、其の書付を當人が持つて來て、之を讀んで呉れと云はれたのには、聊か一驚を喫した。それから私がそれを讀んで申しまするには「お前さんが俺れと絶交すると云ふ事も、したければ致し方がないけれどもが、此の書付を今天下に公にするだけは、勘辨して呉れる譯には行くまいか。俺れも松方内閣の沒落以來、非常な惡評を受けて、世中で俺れの事を褒める者は一人もない。どの新聞を見ても、俺れの事を惡く書く者ばかりである。自分も常に人の事を澤山書いて

居るから、人から惡く云はれた所で、自分に何も應へることはないけれども、何を云つても肉親のお前さんから、斯う云ふものを突き付けられては俺れもやり切れない。のみならず漸く俺れもどん底から再び頭を擡げつゝある矢先に、此の手紙を天下に公けにされては、あの德富蘇峰なる者は、輿論から見限られたのみならず、肉親の弟から迄見限られたと云はれるだらう。さうなつては俺れは立つ瀨がない。それも辛抱するが、年を取りつゝある兩親の手前、どうも俺れは忍びない。お前が何と考へて呉れてもそれは仕方が無いが、世間に公にする事だけは、勘辨して呉れないか」と懇に相談しましたけれども、そこが弟の本色だ。小崎さんの所謂る、己れの欲する所は結果を顧みないで、出したのである。成程それは大變な名文であつて、今日でも人はそれを暗誦して居る位であります。

私は實に困つたものと思ひましたけれども、それ等の事に就ても別に弟を恨むことも無つた。怒ることも無つた。何故ならば弟は恨んだり怒つたりする程の人間とは考へて居ない。もう少し善人であると私は思つて居たからの事である。ところが日露戰爭後、燒打ちの後ひよつこり青山の家に訪ねて來て『兄さん、どうも今迄のは私が不心得だつた。是から一緒にやらう。仲直りしよう』と云ふことである。寔に有難い。お前さんがさうして呉れゝば、實に俺はもう何よりの事である。で、それから弟が外國に行くと云ふ事になりまして、私は神戸迄弟を送つて、それから私は

支那に參りまして、支那から歸つて參りまするど、横濱には既に弟がトルストイの訪問から歸つて迎へて居る。それが丁度明治三十八年から三十九年の頃のことである。

其後當分の間はまことに圓滑に行つて居つたのである。弟は固より私に調子を合はせる樣なことはないけれども、私は下手であるが、弟の音樂に全く合奏は出來ぬでも、せめて邪魔にならぬ位の程度に弟に交際つて行つたのである。が、私は弟の書いたものは餘り讀まない。何故なれば、餘り讀む時に於いては、是は間違ひであるなどと云ふ樣な感じを自分が起すのは、弟に對して濟まぬことゝ思ふから、私は讀まなかつた。併しながら私は恐らく弟孝行であつたらうと思ふのである。弟の爲めには私は何事でもすると云ふ決心は持つて居たのである。

さう云ふ譯でありまして、互に相容れて居たのでありますが、大正二年の秋、京城で弟に會ひました時分には、弟を迎へるとか案内するとか、極點の、外の人には其の十分の一も勤まらぬだけの御奉公をしたのであるが、弟は大變な不機嫌で、停車場から碌に挨拶もせずに歸つて行つたのである。何が惡かつたか、其處は自分にも分らずに濟んだのである。それ以來又弟から見限られた。併し何時かは又弟がやつて來るだらう。今日は來るか、明日は來るかと待つて居た。其待つて居たのが十五年。十五年經つて病氣したと云ふことを聞きましては、私も氣が氣でなくて、何とかしたい

と思うて、姉共を賴んで色々會ふ道を講じて見た。又た自分も千歳村へ行つて見たり、及ぶだけのことをしたが、門前拂ひをされた時には、自分の嫌ひな小さな友達を、自分で追つ拂ふことが出來ず、母に云つて漸く追つ拂ふことをした弟が、兄を門前拂ひをする杯と云ふことは、弟も偉くなつたと云ふ様に考へることも出來たが、實は私は其の時は悲しかつた。併しさう云ふことは誰に向つて申すことも出來ず、但だ弟の心が何時か和らいで來ると云ふことを信じて居たのである。それから先のことはもう新聞にも出て居る様でありますから、私は申しませぬ。今申した通りのことで、決して私は弟を惡く云ふのではありませぬ。

　私は自分及び自分の兩親を辯護するのでない。併しながら一體の事情は今申した通りであつて、決して不和とか、疎隔とか、仲違ひと云ふ様な言葉は私は用ひて頂きたくない。私は未だ曾て弟と仲違ひした事はない。不和であつた事はない。餘儀なく追つ拂はれたから行かぬのであつて、自分の方から行かなかつたのではない。何時も弟を思つて居たのである。恐らく弟も心の中にはさう思つて居たのであらうと思ふ。實に弟は私共の様な情の・・・私も薄情とは自分で思はない。併しながら弟は私共の様な情の荒い人間ではない。私共の情と云ふものは如何にも荒つぽく、唯だ素麵の様に出て行く。弟のは實に緻密で、小さくて、毛細管の中にある様なものである。

それで弟が親孝行などをやる時などに至つては、非常に孝行をする。兩親も、もう健次郎の孝行には實に困る。あゝ孝行をされてはやり切れぬ、もう少し親不孝をして呉れないだらうかと斯う言つた。何故なれば撫でても滿足しなければ擦する。手を引いても滿足しなければおんぶする。斯う云ふ譯である。もう兩親に對しても至れり盡せりで、餘り盡し過ぎるのである。私が病氣した時にでも、弟程に良い看護をして呉れる人はない。痒い處に手の屆くと申しまするが、實にそれ以上である。さうして、何處迄もやる。私共が溺れる人を見た時には、飛込で助かるだらうと見れば上着をぬいで飛込む。弟は助からうが、助かるまいが、人が溺れて居ると見ますれば、自分がどてらを著て居らうが、何を著て居らうが、直ぐに其の儘で飛び込んで行くと云ふ譯であつて、さう云ふ處はとても私共の及ぶ處でない。さう云ふ樣な良い處は澤山持つて居たのである。併しながら私共の流儀は物事を秩序立てゝやつて行く。弟は氣分でやつて行くと云ふ事であつて、所謂道が違つて居る。弟はまるで兄は理の人、自分は情の人だと言ひまするが、神樣はさう人間をはつきり分けて作ると私は思はない。矢張兄弟には多少の共通點があるべきだと思ふ。情の人とか、理の人とかは、弟が勝手に分析したのである。弟にも理性はあつたと思ひますが、私にも人道の人情は持つて居ると信じて居る。併しながらやり口が多少違つて居る。但だ其の元に歸つて見れば、私が始終

弟を自分が保護者として見て居つて、斯うしたら宜からう、さうしたら宜からうと云ふ様な事で、指圖した様な位置に始終立つて居た事が、弟の癪に障つた一つの大きな理由ではなかつたかと思ふ。夫も或は間違ひの一つであるかも知れませぬが、此間伊香保で會見の時、其處まで話す暇がなかつたのは殘念でありました。それで私は何も此際申す事はございませぬ。唯だ私が寔に感心するのは、實に弟の臨終の良いことでありまして、私も偉いお方の死には澤山立ち會うて居る。併しながら弟の死には實に感心した。所謂る大いなる禪僧、若しくは禪僧ではなくても、高僧方の往生される時でも、あれ以上の往生は出來得るや否やと云ふ事を、私は疑うたのである。

さうして弟の逝つた翌くる日、即ち九月十九日、秋雨蕭條の中、伊香保から弟の遺骸を未亡人一同從つて來た時に、雨は漸く武藏野に掛る時に霽れまして、上州を出て熊ヶ谷邊に掛ります時には霽れまして、さうしてまるで朝日の如く綺麗な太陽が西に輝きまして、東の方にも、何と云ふ美しい虹でありますか、大きな虹が半輪を作つて映じました。實に天地が弟の死んだ事を、其のまゝ自然を以て寫して呉れたのではないかと思ふ程、私は感激しました。

私は尙ほ此上申す必要はない。唯だ私が存在した事も、弟の存在には決して無意義でもなかつた。初めには指導者と思ひ、中頃は他山の石と思ひ、さうして終には弟も萬一の場合には兄が生

きて居るからして、己れの心事は兄が克く諒として居るのであらうと云ふ事を、心の奥底には信じて居たであらうと思ふのである。

私も今更弟に向つて何も申す言葉はありません。弟が今日の此の地位即ち皆様方の御會葬下さる様な地位を作つたのは、私の力でもたく、父の力でもなく、母の力でもなく、全く弟の力で開拓したものであつて、私共も一家族として弟の餘光を擔ふと云ふ事は、弟に向つて感謝せねばならず、又た皆様方に向つて弟の著述、又弟の爲した事が、聊かでも國家の爲、人道の爲に利益があつたと云ふ事をお考へ下さると云ふ事であれば、弟の爲にも本望と思つて止まないのでございます。玆に一言弔辭を述べて置きます。」

七　人生七十尋常事。尙剩前途又十年

◇滿洲事變、淇水文庫設立、德富太多雄の長逝

◇予の古稀記念と有栖川宮奬學金の下賜

話が前後したが、昭和四年以後公事に於て特筆すべきことは、昭和六年九月十八日の滿洲事變以來

のことである。予はその事變の以前より、滿蒙問題に就いては、平生見るところあつて、それを主張してゐたが、偶まこの事變は予の主張を實現する好機會と信じ、予は當時有する限りの最善を以つて、天下に呼號した。その效果が幾ばくであつたかは、予が自ら測定すべき限りではなかつたが、概して予の意見が、事件の進行と共に、追々實現し來つたることは、晩年に於ける、予の最大一の愉快であつた。詳らかに云へば、明治三十七八年以後の愉快であつた。

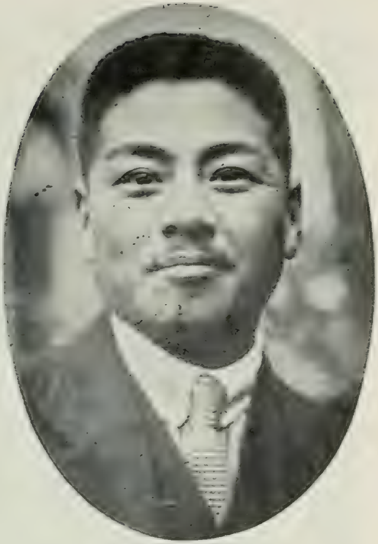
予の私事に於ては、昭和五年予が父淇水翁記念の爲に、淇水文庫を設立し、これを郷里水俣町に寄贈した。固より眇たる金額にて、思ふほどのことは出來なかつたけれ共、予が父の志を成すに於て、或は若干の效果を、將來に於て齎し來るであらうと信じてゐる。惟ふに地方教育の振興は、予が祖先二百年來の素志にして、予が幾分にてもこれを紹成することを得ば、予に於ては仕合せである。

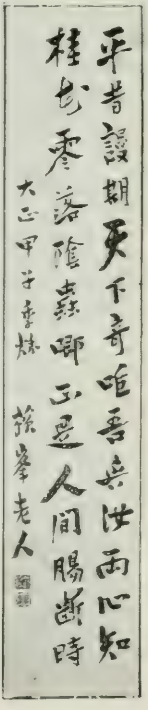
更らに一言を要するは、昭和六年九月九日、予の長男、海軍少佐徳富太多雄の逝去であつた。彼は元來予の子女中、最も強健なる一人であり、その氣性も亦た極めて凛々しく、生れながらに軍人向きであつた。然るに不幸にして、前年より病に罹り、遂に逝いたことは、當人の遺憾は勿論であるが、予に於ても非常なる打撃であつた。

予は豫てより予の事業は次男に讓り、予の家は長男に相續せしむることを期してゐた。然るに大正

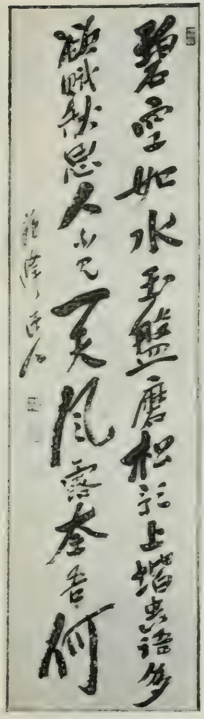
（上）明治三十三年の蘇峰翁（三十八歳）と徳富健次郎氏

（下）伊香保に於ける蘆花記念碑除幕式
挨拶する蘇峰翁





徳富萬熊氏とその長逝を悼む詩



徳富太多雄氏とその永眠後の所懐

十三年の九月に、次男萬熊を失ひ、事業の繼續者は絕えた。而して昭和六年九月に長男を失ひ、宗への相續者を失つた。

旣に予の畢生の事業としたる、國民新聞社を失ひ、又た予の二子を失つた。予の前途は殆ど此に於て、暗澹と云ふの外はなかつた。

但だ今後剩すところのものは『近世日本國民史』あるのみ。されば予は總ての能力をこれに向つて傾倒し、一切の憂愁を排して、これに全力を注ぐことゝした。

然るに昭和六年三月、病を得て南胃腸病院に入院し、又た翌年四月、再び入院した。予が盲腸炎の大手術を大正八年三月、及び七月に爲して以來、殆ど腸胃の宿痾は全治したる如き心地がしてゐた。ところが昭和六年三月以來、何やらそれが再發したる樣に感じたが、これは所謂る腸管狹搾症といふものにて、これを全治することは、殆ど難いものと察せらるゝ。

幸ひ醫學博士南大曹君が、尋常の醫師と病客との關係以上の好意を以つて、予を待たれ、今日まで恙無きを得たが、併しこの腸管狹搾症は、終始予に伴ひ、恐らくは予の一生を終るまで、予の同伴者となつて、最後まで附纏ふであらうと思ふ。その爲に予の身體に少たからざる自由を奪はるゝことは、固より覺悟の前と云はねばならぬ。卽ち長途の旅行の如きは、如何なる必要あるも、予に於

ては、殆ど不可能となつて來た。

併しその爲に尋常一樣の業務を爲すことには、別段差支がないから、それを知らざるものは、予は全く無病息災のものと思ひ、種々の難題を予に持掛くるには、聊か閉口せざるを得ないが、兎も角もさる難題を持ちかけられる間が、予の身上と云はねばなるまい

予は當初『國民新聞』を中心として、國民教育奬勵會と、青山會館とを、左右の翼として、言論の上にも、行動の上にも、聊か涓埃の微衷を表したいと考へた。然るにその中心たる國民新聞社を去りたるが故に、その兩翼も亦た予の理想通りに振ふ能はざるは、又た已むを得ざることにして、それには不幸にも、奬勵會には最善の會長たる、澤柳政太郎君を失ひ、青山會館には館長たる野田卯太郎君、侯爵蜂須賀正韶君の兩君を失ひ、其他種々の事情の爲に、予の理想を行ふ能はざるのみならず、予の煩累を來したものも少くなかつたのは、予に先見の明がなかつたと云はんよりも、予が幸運に惠まれなかつたと云ふのが、適當かも知れない。

併し物事はなるべき樣になるの外はないから、予は強ひてその自然の趨勢に逆行せず、只だ如何なる場合でも、その當時に於ける、最善を效すといふことを以つて、予の覺悟として置いた。

昭和七年予は何時の間にか七十歳となつた。予の少壯時代には、とても三十までは覺束ないとい

ふ、折紙をつけた者もあつたほどにて、予自らも長生を期しなかつた。併し自らも七十歳になつたことをみれば、予は實に予の期待以上に惠まれたことを、感謝せざるを得なかつた。

而して予の友人、故舊、門生等胥謀つて、古稀記念展覽會を、青山會館に開き、又た帝國ホテルに祝賀會の催しなどあつた。

然も高松宮殿下よりは、思ひがけなくも『近世日本國民史』に對し、有栖川宮奬學金の御下附を忝くして、予にとつては、意想外でもあり、又た面目の至りであつた。而して予は既に七十の坂を踰ゆれば、序ながら八十の坂をも踰えたきものといふ、望を起した。

これも徒らに生活せんが爲ではない。謂はゞ予が『近世日本國民史』を完成したいといふ、一念からに外ならないのだ。

乙丑歲首 （大正十四年　六十三歲）

山笑海歡光景新。迎來六十三年春。
問君何意轉寥寞。座上今朝少二人。

題國民小訓

祇今誰是濟時才。皓首壯心歌莫哀。
碧海掣鯨吾豈敢。一腔熱血獻君來。

遺愛花

七歲光陰一夢賒。書窓偏覺冷香加。
寄言春雪莫相虐。此是阿孃遺愛花。

老龍庵偶成

輕寒細雨養花天。庭上長松翠色鮮。
舉世營營何所得。白梅香裡枕書眠。

青山會館成

我老唯期晚節香。先皇廟畔幾彷徨。
青山會館巍然在。不羨當年晝錦堂。

國民小訓祝賀會

草澤優遊抱膝歌。休嘆宿志漫蹉跎。
知音不要期千歲。今日知音天下多。

阿熊小祥忌

一束秋花三尺碑。低徊墓畔幾尋思。
向人寧說鍾情事。又見西風搖落時。

天竺花

老樹當階石逕斜。短垣板屋碧蘿遮。
欲知秋色惱人處。試看風前天竺花。

白頭

白頭蕭散任風吹。曉露凄凄野色奇。
吸盡新秋靈爽氣。亭午籬畔立多時。

且開顏

不將高踏傲人間。故態猶中獨掩關。
唯有舊朋知我意、對床燈下且開顏。

本栖湖　二首

白雲紅樹遶湖端。落葉埋蹊露未乾。
不恨秋空無定態。雨奇晴好一時看。

雲影重重浸碧漣。吟詩客在釣魚船。
山靈似解遊人意。擎出芙蓉雪色鮮。

從精進湖至大宮途上有作

樹葉蒼蒼雜茅菅。路逢高原岳麓間。
畢竟閑人閑適足。秋晴終日飽看山。

對蓮峰

縱横野水界平蕪、滿地黄雲千萬區。
唯合名山負名著。一天秋色對蓮峰。

奉寄青山老伯

芙蓉峰下海東濱。託跡樵漁度幾春。
但有葵心依舊好。瑞雲深處拜楓宸。

歲除

一日又一日。今夕是歲除。思來又懷往。縱横感有餘。皓髮蕭先苦。意氣猶未盡。阿誰為同友。

殷勤恒誨予。但予迂頑質。聞達與命疏。薦目論時務。經綸畫坤輿。身無黃金印。家有萬卷書。晩節志修史。兀兀坐草廬。自期千秋業。詎希一世譽。不知老將至。老至其何如。

甲子歲首（大正十五年昭和元年　六十四歲）

隱隱初日瑞光開。　忘却人間歲月催。
起倚東窓先一笑。　早梅數點報春來。

杉田看梅

綿蠻鳥語雜樵歌。　松逕行過又竹坡。
迂路彷徨君莫笑。　孤笻到處野梅多。

吉野看梅　二首

道入川原好景迎。　東風吹暖一笻輕。
却嫌遊客攪清興。　故向梅花少處行。

水崖山腹幾茅家。　香雪垂垂石逕斜。
村老不知清福足。　一年生計在梅花。

洗足池畔偶成

堂堂錦旗鎭關東。　百萬死生談笑中。
群少不知天下計。　千秋相對兩英雄。

題富嶽圖

湛濤大雄撐天關。　畫出神州第一山。
不恨浮雲遮望眼。　楣間日日對屛顏。

國民新聞新社屋成

辜負家山二頃田。　不爲將相不爲仙。

一枝禿筆志空在。　淵海文章四十年。

過麓時

五月薰風過麓時。　綠陰幽草賦新詩。
白雲浮動何多事。　掩映山容百態奇。

清浦老伯喜壽庵

青山不背白雲封。　高臥東山第一峯。
晩節人間何處好、　樓頭笑指萬株松。

野田大塊無爲庵

天下皆知塊老奇。　結茅林下儘幽期。
雲生水湧吾看取。　至竟無爲是有爲。

外房沿岸所見

斷壁危礁當面灣。　汀灣曲曲幾人家。
房南六月海風好、　一路吹薰百合花。

玉川

孤帆愛水水連天。　玉峽清秋氣自閒。
午睡醒來坐圓石。　泉聲蟬語滿林間。

四萬溫泉

對岸溪聲淺復明、　晨星落落夏山晴。
覺醒塵土十年夢。　半是蟲聲半水聲。

妻戀驛途上

鐵路初通雲橫嶺、　秋花歷亂各爭妍。
車窓忽轉樺林外、　當面淺間萬丈烟。

輕井澤

青春意氣有時闌。　遙對淺峰開我顏。

悄枝山畔笑頑骨。 江湖年落老臣衰。

妙義山

殘熱烘人蟬語哀。 白雲山下暮雲回。
定知天狗鼓雄翼。 喝動老杉雷雨來。

白河關

古關蕭條起暮烟。 青山紅樹故家連。
斷碑寂寞秋風底。 唯有老楓知當年。

樂翁公 二首

一新政就萬民蘇。 果識名門出鳳雛。
獨恨看機何太早。 黑頭歸去樺南湖。
挺身濁浪滔天中。 善斷善謀相業隆。
遮莫苦哀人不解。 阿賢此處是英雄。

樂翁公幼稱賢丸

望岳詩碑成

東海勝區天下奇。 高峯積雪映双眉。
著書未就千秋業。 空托新詩一片碑。

昭和改元

大正天子駕龍去。 血涙黎元流作河。
一系神孫承大統。 乾坤須照入昭和。

偶成

凋落老臣少。 黨榮新進多。 巍巍先帝業。 紹述在人和。

丁卯新正（昭和二年　六十五歲）

霞宮淵水閣。迎歲亮陰中。[illegible]色浮[illegible]海。[illegible]光映碧穹。嗟吾六十五。衰朽作無功。何以報明主。千言氣吐虹。

熱海梅園　二首

雨山含[illegible][illegible][illegible]。的皪梅花水石間。
黃鳥似知當世事。絕無人處弄綿蠻。

溫泉氣上作[illegible]霞。溪水潺湲石逕斜。
白髮夫妻淸福足。攜孫伴子訪梅花。

贈　友

齊世致[illegible]道不貧。解頤[illegible]閣[illegible]處隣。
先生[illegible][illegible]老將至。奉仕天[illegible]五十春。

昭和一新論成　二首

小[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]。大[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]。
草澤微臣隱遯在。凝成昭代一新文。

功名不夢[illegible][illegible]。老去江湖白髮新。
[illegible]必空文無世用。[illegible][illegible][illegible]外見精神。

樂水園文庫

[illegible]木參天[illegible][illegible][illegible]。[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]。
主人不[illegible][illegible][illegible][illegible]。閑[illegible][illegible][illegible]萬卷書。

延　年　訣

門外何須長者車。淡枯生活意安舒。
欲知夫子延年訣。成簣堂中萬卷書。

落　　花

蝶舞蜂歌到處宜。　香雲簇簇艶離離。
早春何若晩春好。　滿袖薰風花落時。

我孫子贈友　二首

薰風掠面水紋斜。　雨足澗塘長葦芽。
孤棹何須尋去路。　綠陰深處是君家。

陰陰夏木映潮灣。　半日行吟且解顔。
想起香山詩句好。　偸閑氣味勝長閑。

贈長興山莊主人　二首

筆底雲烟恒有春。　天眞發處自淸新。
洞天安用錬丹術。　不老泉中不老人。

修竹淸泉隔四隣。　閑花幽草自無塵。
飢來喫飯倦來睡。　兩日替君爲主人。

函山

危崖峭壁幾人家。　新樹蒼蒼石磵斜。
五月函山詩境好。　老鶯啼處見櫻花。

佐原

橋邊垂柳綠毿毿。　澤畔蒲菰靑似藍。
茅舍連田田接水。　依稀風色小江南。

犬吠岬

吹面海風生晩涼。　燈臺百尺倚天長。
潮頭忽看氷輪湧。　萬頃金波入渺茫。

靑龍寺　三首

岳雲呑吐早涼生。　簾外微風竹影淸。

午夢醒來禪院寂。禽聲斷續和泉聲。

野水環家村趣濃。萩畦竹塢絶塵蹤。
十年四訪青龍寺。唯爲門前有七峰。

憶曾蹈頂立孤筇。昂昂名山落落胸。
岳麓而今禪榻上。飽伸閑脚看芙蓉。

忍野

風驟白雨氣凄淸。無賴雲峰顏又生。
玉黍漸花瓜未熟。山中八月聽流鶯。

踰篭坂峠

九折羊腸盤半空。四圍山色白濛濛。
疾風忽送烏雲到。身落銀彈亂射中。

仙石原

金時山下野人家。仙石原頭草逕斜。
兒女亦知天趣好。羅裙浥露折秋花。

人吉途上

經過栗野矢嶽間。滿目黃紅霜葉斑。
誰識日陽兼火國。犬牙交錯三州山。

人吉寄友

垂髫五歲球川涯。老去何須嘆鬢華。
主客相忘君莫笑。君家畢竟是吾家。

別府贈友

菌茵灣頭幾度逢。評今品古興逾濃。
羨君獨抱煙霞志。蹈破鎮西山萬重。

得一孫

縱向江湖策萬言。　閑人甄谷老閑園。
家門偏善有餘慶。　歲晩淵明得一孫。

除　夜

今年今夕盡。冥坐虛堂中。心頭湧百感。窓外吼北風。不省頑鈍質。猛志趁無窮。不憂世途嶮。欲竭報國忠。不希榮與達。清白存家風。不問譽與毀。唯期千秋功。寸衷向誰訴。俯仰乾坤空。四壁人聲絶。深宵爐火紅。

戊辰歲首　二首　（昭和三年　六十六歲）

回天偉業慕前賢。　昭代享生還有緣。
日出山河呈瑞色。　吾皇登極戊辰年。
修史年年致憚煩。　故交凋落幾人存。
兒曹莫歎乃翁老。　飽喫春饒咬菜根。

熱　海

曲浦長汀曉霧開。　山容淡淡黛光斑。
春潮宛似春愁湧。　浩蕩烟波往又還。

米澤偶成

淺綠殘紅近晩霞。　鬼面川原三兩家。
五月輕陰米澤路。　東風掠面看櫻花。

身延山

閑訪清兮寺。暮鐘隔谷聞。滂沱西澗雨。凝作鷹峯雲。

下部溫泉

偶作山中客。湯泉常欲仙。鱸魚甘且美。
知是釣前川。

香山雜詩　二首

竹與伊軋度崔嵬。無賴濕雲西下回。
好待秋空晴朗日。滿山紅葉詠詩來。

青山繚繞白雲遮。偶訪孩名溪畔家。
說與都人渾不信。重委五月見櫻花。

亡弟記念碑

牢騷淵源少知音。想到當時涙滿襟。
花木成蹊人不見。九泉唯合識斯心。

胸像成

相并庭前與不孤。本來面目是信夫。
先生笑向釣人語。吾自當專學釣者。

木蘭樹

堂堂木蘭樹。宛然園中王。舉蓋葉底夏。和鳥其
間翔。一夜秋風到。滿目落葉黃。傲兀凌冰雪。
枯枝忽開張。春和三四月。白花映朝陽。青山卜
居日。新樹接書堂。攜帶手所植。兒女戲其傍。
移栽湘南地。枝幹倚天長。曾經三十載。身世轉
匆忙。對此懷往事。憶懷涙成行。

函嶺雜詩　四首

連日傾盆雨。石泉奔百雷。門前絕過客。
空翠上階來。

空齋無一事。讀倦枕書眠。不老靈泉在。
浴來身欲仙。

主人能待客。眠食兩安舒。朝喫後園菜。
夕餐前淵魚。

濕雲封亂嶂。崖樹碧於烟。十日山中雨。
懸爲百道泉。

舊函根街道

石路崎嶇山驛邊。碧林深處有鳴蟬。
英雄覇業今何在。空向長松問往年。

永　源　寺

曾誦寂室錄。今訪瑞石山。高僧遺躅在。水石非
人間。永懷悵佇立。紅楓照吾顏。

六甲山贈人

四隣何所見。滿地唯靑松。茆屋足容膝。不知窮
與通。人間有至樂。長嘯白雲中。

點　塵　無

黃菊丹楓次第枯。淸霜滿地點塵無。
窓前小景誰描取。一幅寒林落木圖。

贈小久保城南

刀水波山意氣豪。寒梅氷雪見高操。
老來別有風流在。笑擲功名付爾曹。

己巳新年　三首　（昭和四年　六十七歲）

吾生六十七。無達又無窮。白日靑天下。
逍遙大化中。

不遇風雲會。悠然臥草廬。畢生何所得。
著作等身書。

新正迎好日　衆鳥相俱嬉。孤鳳栖何處。
高梧第一枝

熱海清快樓

昭和己巳首。來投清快樓。樓上空神火。樓下泛
輕鷗。樓主眞老實。樓中儀門出　浴湯且廿匯
朝夕事優游　人間在斯境。寧爲利名囚　臨去謝
樓主。賴君忘百憂。

國民新聞社引退有作　二首

布衣宰相閒餘春　休道千言筆有神。
今日始知無職業。　乾坤落落一閑人。

文章豈敢襲三蘇。自笑平生心計粗。
一事較優前輩處。雲飛水宿老江湖。

臺灣行船中偶成

層雲接水水連空。萬斛樓船萬里風。
一片詩思無著處。渺茫落落碧瀾中。

眼前景

竹舍蕉園迤且迎。水牛得得水邊横。
如今欲寫眼前景。思殺能詩[illegible]不成。

巳插秧

春水溶溶滿野塘。紅柑熟盡翠蕉香。
北人不解南中趣。二月平田已插秧。

臺中驛人

四圍山色翠屏長。溫藹風光憶洛陽。
庭上老榕三百尺。樹陰相對說家鄉。

日月潭

划舟一棹去迢迢。拔老慣聽番女謠。
青嶂如屏湖似鏡。湖心水暖長魚苗。

阿里山

登登七十二洞門。古檜喬杉半斧痕。
寄語山靈護莫伐。向榮新樹沿途蕃。

阿里山貴賓館

更深山寂寂。爐冷復添薪。脚底雲千疊。
嶺頭月一痕。

四重溪

一碧高天大月明。蛙聲閣閣雜蟲聲。
恒春二月輕衫候。客傍蕉陰詩未成。

木瓜

色同牛酪漿尤滋。形似甜瓜香更奇。
艷說蟠枝三百顆。坡仙此味不曾知。

草山雅會

凄凄芳樹雨如烟。洗骨温泉入欲仙。
駘蕩蓬萊春二月。草山深處會群賢。

草山偶成

昨非不可追。明是不可期。擺脫是非意。隨緣又
隨時。偶來蓬萊島。南北極津涯。送迎有知友。
常春無四時。木瓜纍累累。芭蕉實垂垂。草山雲

深處。緋櫻花滿枝。山中靈泉湧。亦足醫勞疲。
人生行樂耳。古人不吾欺。

北白川宮上陸記念碑

竹輿軋軋度崔嵬。　踏盡白沙碧海開。
一片銅標人不見。　風驅萬馬亂濤堆。

題桃李滿門帖

小楠天挺傑。實學極眞源。宿志在天下。桃李滿
其門。崇論駭世俗。孤鶴衆鳥喧。晚節拜朝徵。
遭難喪其元。匆匆六十載。識者哀其寃。昭和御
極日。枯骨浴天恩。丹心報君節。赫赫照乾坤。
吾黨默堂子。愛人及兒孫。寄來一長卷。展披淚
欲吞。兒孫何須說。偏使風教敦。

桃李滿門帖山崎默堂君所編

別府

鳳山炎熱甚隆雨。　踏遍蓬萊南北州。
歸路泉都春色好。　梅花新柳滿灣頭。

湖邊

點點布帆明鏡開。　比良雪色映天台。
春寒京洛連朝雨。　洗淨湖邊山水來。

立願寺

昭和己巳夏。徜徉菊水邊。不貫尋古刹。立願浴
新泉。小岱山色好。懷往獨愴然。白頭耿耿志。
惟有故人憐。

水俣

滿盤鄉味鄉音繁。　倘記當門老桂存。

百載典型遺澤在。　座中長少悉同根。

龜　嶺

五國風烟眉睫間。　賴翁詩賦落人寰。
山靈今日應微笑。　博得佳名萬壽山。

湯出溫泉

安座茅軒氣味閑。　群峰若染水潺潺。
白雲何意却多事。　忽入山中出復還。

雲仙嶽　二首

濛濛硫氣接嵐烟。　牧馬悠悠芳草邊。
靈泉何當洗凡骨。　杜鵑花底聽啼鵑。
金峰頂上望雲仙。　海上神山聳碧天。
今日立節仙岳頂。　金峰縹渺沒雲烟。

人吉林溫泉

球水香魚美。林泉溫玉流。向人說双絕。
唯是翠嵐樓。

球磨川畔

午炎漸去晚涼微。　一洗征塵著浴衣。
萬點流星明又滅。　不知水面衆螢飛。

偶　成

未知何日賦歸田。　白髮紅塵四十年。
出處背期前輩躅。　斯心祇合故人憐。

岩手山

岩手芙蓉落眼中。　典刑雖小秀容同。
唐松白樺厨川路。　吹送綠秋千里風。

十和田湖舟遊贈人

携手大同江岸邊。百花零落雨如烟。
清風好日山湖上。對座扁舟說往年。

春雨庵

澤老遷流地。猶存春雨名。孤笻悵佇立。
夏木滿荒城。

慈訓在

鐙前膝下誦吟頻。明德親民語更新。
六十餘年慈訓在。白頭猶是抱經人。

偶成

大正震災後。六回寒暑更。寒暑何須說。人事轉
堪驚。阿熊墓木拱。阿雄病床橫。交友半凋落。
史業奈孤撐。昨日鳳凰宿。今作鴟梟營。舊歡追
難及。新愁拂復生。擧頭看岳雪。照顏有餘淸。

阿蘇途上 二首

鐵路羊腸往復還。秋深撩亂野花間。
途中也好近尤好。相揖五峰開笑顏。

一道晴烟銜碧旻。五峰如削競嶙峋。
幾回來往阿蘇路。始見名山面目眞。

題牧娘亭

牡丹臺上幾曾經。隔水丘墳春草靑。
栖息老來何處好。大同江畔牧娘亭。

道通天地有形外。
思入浮雲變態中。

第十九章　予の著作・文章及び書籍愛好趣味

一　予の著作一瞥

◇文章報國五十年

予はおこがましくも、文章報國を以つて自ら立たんことを期してゐる。されば文章の事業は、予が畢生の精力の殆ど總てを傾倒したと云ふも、不可あるまい。從つて予の文章の活字及び其他に上つて、世間に流布したるものは、予自らも悉くこれを記憶しないほどであれば、その數が莫大に上ることは申迄もない。質に於ては兎も角も、量に於ては予が文章、若くはそれに類するものは、同時の人に比して、恐らくは多く讓るところはあるまいと思ふ。

予の文章の初めて活字に上りたるは、明治十一年か十二年の頃であつたと思ふ。それは大阪の新聞や、神戸の『七一雜報』といふ雜誌に投書したる短篇であつた。明治十三年頃には、可成り多く雜誌

に掲載せられた。併し兎も角も單行本として世に出したるは、明治十七年一月に『明治二十三年後の政治家の資格を論ず』といふ、長銘を打つたる、パンフレットであつた。これは極めて小部數出版し、自ら禁發賣の銘を打つて、無代配布した。

然るに田口卯吉君は予に向つて『維新以來文章の見るべきもの少し。尊文の如きは、その比を見る能はざる也』との評言を送り來つた。予は必らずしも斯く自ら信ずるではなかつたが、これが爲に聊か力を得て、更らにこれを再版して配布した。

次に配布したのは、明治十七年十二月『自由道德及儒敎主義』の小冊子であつた。尙ほ此書を印刷せる熊本の活版舍の當時の假領收書を今尙ほ保存して置いたから、その寫しを左に掲げて置く。

假　領　收　書

一　金　拾　六　圓　也

是は自由道德及儒敎主義書貳百部代三拾圓の處、昨十二月二十九日內金拾壹圓五拾錢拜領。殘拾八圓五拾錢の內本行之通

右金額正に奉領收候也

明治十八年一月三日　縣廳門前活版舍　(印)

徳富猪一郎様

それから十八年六月には『第十九世紀日本の青年及其教育』なる題の下に小冊子を著し、今回は東京の友人に托して三百部印刷し、これを配布した。此書が如何なる事情によつて、井上毅君――後に子爵――の手に入つた乎知らないが、君は餘りの面白さに、一日病に托して役所を休み、これを讀了したといふことである。これは後から聞いた話で、當時は固より斯ることがあつたことを知らなかつた。

その次に出で來つたのが、即ち『將來之日本』である。この事に就いては、既に別に語るところがあつたが、何れにしても『將來之日本』が、明治十九年十月出版せらるゝや、初めて予の存在が――尠く共世間の讀書子に――認識せらるゝに至つた。その爲に予は書肆に慫慂せられて『第十九世紀日本の青年及其教育』に更に『新日本之青年』なる長篇の一章を加へて、これを『新日本之青年』なる新銘の下に出した。

それ以後は專ら『國民之友』に筆を執つたから、著作の暇もなく、又た必要も無つた。固より其間他の雜誌若くは新聞に寄稿したることがあつたが、それは寧ろ餘儀無き事情の下であつたから、精力の殆ど總ては、『國民之友』及び二十三年以來發刊したる『國民新聞』に傾注した。

爾來予は臨時に多少の書籍を刊行したが、それは大概一度雜誌及び新聞に出たるものであつた。その中で特筆すべきは『國民叢書』の發刊であつた。これは明治二十四年六月『進步乎退步乎』の題目の下に其の第一册を出版し、それが大正二年八月第三十六册第十二日曜講壇に至る迄、繼續した。この赤表紙の小册子は、當時最も讀まれ、その中には特に支那留學生などにも愛讀されたものがあつたことは、當時の留學生であり、後には支那政界に雄飛したる人々より、親しく予に對する感謝の言葉を聽いたことによつても判る。而してその三十六册の中にて、最も多く讀まれたのは、明治二十六年五月發刊したる『靜思餘錄』と、二十八年四月發刊したる『第二靜思餘錄』であらう。予は今此にその發行部數を詳しく語ることは出來ぬが、恐らくは、この種の書籍として、他に比類少からうと思ふ。

それから多くの著作中にて、最も多く讀まれたる一は、明治二十六年十二月に發刊したる『吉田松陰』及び四十一年十月の『增補改訂吉田松陰』であらう。『靜思餘錄』と『吉田松陰』は、現在も尙ほ相當の購讀者があることは、發賣所の報告によつて、明白である。

又た明治二十七年の十二月に著したる『大日本膨脹論』は、極めて小册子ではあるが、著書として は頗る重要の一であつたと思ふ。要するに明治二十年より明治四十五年までは、殆ど新聞や雜誌に揭

げたるものを編纂したる以外に、特に著作したるものとては少なかつた。

大正二年の末出版したる『時務一家言』は、これ又た量に於ては決して大著といふことは出來ぬが、予にとつては最も重要なる一と信ずる。

尙ほ美文と云はんよりも、美書と云ふべきは、『山水隨緣記』である。これは平福百穗君と共著にして、予の文に君の畫を加へたるものである。恐らくは君の挿畫として、これほど力の籠りたるものはあるまい。予の文章は快心の作といふことは出來ぬが、君の畫は正しくその通りと信ずる。

大正二年からは『成簣堂叢書』なるものを刊行した。これは大正十一年十一月第十三編に至つて終つたが、更らに昭和六年に至り、『新成簣堂叢書』を刊行し始め、昭和七年八月まで、第五冊に至つてゐる。それ以外にも古書を複製したるもの若干ある。

大正四年十二月『蘇峰文選』が友人等によつて出で來つた。これは予が自ら選擇したるものでないから、必しも予の理想通りとは云はぬが、先づ明治から大正の初期にかけての、予の文筆生活を知るには、多少の手引であらうと思ふ。尙予の最も力を勞して著作したる一は、大正六年九月に刊行したる『杜甫と彌耳敦』の一書であつたが、これは世間に讀者は多くなかつた。固より當初から多きを求めてゐなかつたけれ共、具眼者は多少予の苦心を諒とするであらう。

意外と云はんよりも、最も意外であつたのは、大正五年十一月に刊行したる『大正の青年と帝國の前途』である。これは全く著者の意想外なる發行部數にて、『將來之日本』より現在に至るまで、總ての予の著書を通じて、これほど多く讀まれたるものはあるまい。

尙ほ明治三十九年の十一月刊行したる『七十八日遊記』大正七年の六月に刊行したる『支那漫遊記』は、尋常の旅行記以外、聊か著者の支那、滿洲、朝鮮に對する觀察を記載したるものにして、多少識者の參考に供するに足るものと信ずる。

又た明治三十一年五月、予が山路愛山、森田思軒兩氏と共に『賴山陽及び其の時代』を著はしたることは、日本に於ける山陽研究に、多少の拍車を加へたであらう。將た大正四年三月に『世界の變局』を著し、大正九年九月に『大戰後の世界と日本』を著した。前者は恰も大戰勃發の際に起稿したるものにして。後者は大戰後の始末が未だつかざる時に起稿したるもの。然も後者の中、日米に關する部分は『日本及びアメリカ』と題して、既に英文に飜譯せられ、紐育のマクミラン社から出版せられてゐる。

大正七年よりは愈よ修史事業の實行に取懸り、その爲に予の精力の殆ど全部は、これに向つて傾注せられた。然もその間に若干の小册子及び其他の著作出版物があつた。その中にて特に一言を要する

は、大正十四年二月に出版したる『國民小訓』である。これは『大正の青年と帝國の前途』に亞いで、最も多く世に行はれ、又た昭和八年十月には『增補國民小訓』を出し、これも亦た大いに行はれてゐる。これは極めて大衆向きの著述であるが、著者としては、若し得意の作といふことが出來なければ、苦心の作といふには、餘りがある。

大正の下期から、昭和の初期にかけて、隨筆其他の人物評傳、若くは『昭和一新論』『日本帝國の一轉機』などゝいふ小冊子と、別に『蘇峰叢書』なる小冊子が、約十二冊出で來つた。尙ほ其他の雜書は目錄に就いて見れば分明である。

何れにしてもその精力の殆ど總ては、修史に盡してゐるから、予の現在は修史の爲に存在してゐるといふも、妨げあるまい。『國民之友』の創刊時代には、全部の過半と云はざるも、半ばは予が自ら筆を執つた。『國民新聞』にも、殆ど一日として予の原稿の載らない日は無つたといふても餘りに過言ではあるまい。予が一個年歐米旅行中の如きも、予は殆ど新聞に揭げきれないほど多くの原稿を送つてゐる。

予が如何なる程度まで、文章報國の理想を實行し得たかは、他の評に任かするの外はないが、現代に於て、最も多くの原稿紙と、最も多くの墨若しくはインクを消費したる第一人に非らざる迄も、そ

の中の一人としては、予も自ら信じて疑はないところである。

二　予の文章に就いて

◇達意の文章を目的とす

著作と文章とは、水と氷の如き離れ難き關係のものである。如何なる著作も文によつて成り、文によつて傳ふるの外はない。さればこの際文章報國を以て畢生の事業と自ら信じたる予が、文章に就いて一言するのも、亦た已むを得ない次第だ。

文は人なりと云ふが、果してその通りであるや否や、予の文章は果して予を全面的に表はしたるものであるや否やを、予自ら然りとも、將た然らずとも、云ふことが出來ない。但だ予の文章は初から終りまで、別に何人の文章を模倣したといふこともない。平たく云へば、予が自ら筆を執つて書き出したるものが、予の文章である。かるが故に予の文體は予の創成であり、予の文章は予の創作である。

勿論少年時代には、自ら愛好したる文章が、然るを期せずして、予の文體に影響を與へたるものが

あることは、申す迄もあるまい。同時代若しくは先輩の文章として、福地、福澤、田口、中江其他の人々が、無自覺の中に予を影響したることは、予はこれを肯定するに遲疑しない。又た少年時代に『東萊博議』を愛讀したことも、又た山陽の文及び詩を愛讀したることも、又た英國のマコレー卿のエッセー及び歴史等を愛讀したることも、從つてそれが影響を與へたることも無視する譯にはゆくまい。けれ共要するに予は當初より達意を主として、殊更ら文の巧みなるを求めなかつた。若し予が文章に力を注いだといふことがあれば、それは達意の爲であつた。それには恐らくは孟子の文を、最も予が愛讀したから、從つて影響の程度も多かつたではあるまいかと思ふ。けれ共孟子に限らず、先秦の文字は概して愛讀した。又た日本の文字としては、白石の『藩翰譜』『讀史餘論』『折焚く柴の記』室鳩巣の『駿臺雜話』なども、或る時代には愛讀したることもあつた。

予が東京に一家を携へ來つた當時、明治二十年頃と覺ゆるが、尾崎行正翁が、予の家を訪ひ――當時予は父母と同居してゐた――予の父に向つて、頻りに行雄君のことを語り、『君の家の令息の文章は如何にも花が多いが、吾家の行雄の文章には實が多い』抔と語られたのを、傍で聽いてゐた。予の父と行雄君の尊嚴とは、その昔熊本縣に於て、與に廳務を執つたることもあり、從つて舊友であつた。成程當時予の文章は隨分冗長であり、言はぬでもいゝことまでも言ひ、書かぬでもいゝことまでも

書き、使はぬでもいゝことの文字を使つたものと思はるゝ。併しそれも達意の爲に外ならなかつた。當時はそれでなければ意が達しないものと思ふてゐたのだ。

達意といふことは、第一は我思ふことを正しく他に達することであり、第二には我思ふことを強く達することであり、第三にはこれを達して而してその感情を動かすことであらねばならぬ。予は常にこの三者を達することを以つて、予が作文の目的としてゐる。その爲には凡有る犧牲をも惜まない。犧牲を惜まないといふことは、その爲に藝術品としての文章の價値を、如何ほど毀損しても、毫も頓著することがないといふ意味である。

併し予は必らずしも冗長といふことが、達意と兩立するものとは考へてゐない。寧ろ出來得る限り無用の文句、無用の文字、無用の言語を省けば、省くほど、その意義は却て明瞭となり、加ふれば加ふる程、却て朦朧となることを、疑はぬものである。

故に簡潔の爲に簡潔を欲するのではないが、達意の爲に、簡潔を力めてゐる。併し簡潔の爲にその意の暢達せざる場合の時には、如何に簡潔を好めばとて、思切つて我が嗜好を捨てゝ、その暢達を力め、その誤解無きことを力めてゐる。

予は未だ曾つて自ら文章家を以つて任じたることも無く、又た文章家たらんことを希望したること

もない。予は徹上徹下、新聞記者を以つて任じてゐる。所謂る予の文章は、新聞記者の文章にして、予の著作も亦た新聞記者の著作である。從つてその十中の七八までは、對症投藥を目的とし、必しもこれを千古に傳へんと欲するが如き、大野心を持たない。

故に文章の爲に憂身をやつすなどゝいふことはない。併し予も新聞記者として筆を執り初めたる頃、『國民之友』刊行の明治二十年當初までは、可成り文章には苦勞した。苦勞したといふことは、名文を書かんが爲ではなく、只だ達意の文を書くことに苦勞したのだ。

一文を起草するまでには、少なからざる腹稿の時間を要した。併しそれが齡と共に漸く樂になり、今日――七十三歳の昭和十年――に於ては、殆ど尋常茶飯同樣になつて來た。尠く共予はペンを執ることを樂しむとは云ひ得ざるまでも、決してそれを苦痛とは思はぬほどになつて來た。これは天性と云はんよりも、寧ろ習練の然からしむるところであらう。

自ら文士を以て任ぜざる予と雖も、名文を作ることは、嫌ひではない。然るに往々名文といふことと、達意といふことゝが、兩立せぬ場合がある。ジャーナリストは大衆を相手としてゐる。從つてその贊成、不贊成は姑らく措き、誤解せられ、若しくは曲解せられることは、甚だその目的と相反する。その爲に文章の上からは、贅言であると思ふことやら、贅文であると思ふことをも、削る譯には

ゆかない場合が往々にしてある。否な餘計なことまでも餘儀なく附加ねばならぬことさへある。
又た文章の上には斯く云はねばならぬといふことを、止むを得ずそれを削除せねばならぬ苦痛がある。世の中に新聞記者ほど樂なものはないと思ふ人があるであらうが、その實は一文を草する毎に、此の難題に出會する。

達意に忠ならん乎、文章に忠ならん乎。極めて小數の識者のみを相手とするに於ては、含蓄あつて餘味多く、咀嚼して罄くるところなき、文章ほど望ましいが。多數相手では、芝居の所謂腹藝なるものは、容易に爲すべきものではない。されば時としてはジャーナリストでない、別段の位置に立つて文章を作つて見たいと思はぬこともないが、その全力をジャーナリズムに盡し、殆ど後天的にはジャーナリストになりすました予に於ては、急にその身分を變へて、象牙の塔の中に遲蒔きながら入ることも出來ないことは、止むを得ざる次第である。

世間は隨分廣きものであつて、此方ではひやかした積りで書いたのを、彼方では褒められた積りで受取ることもあり。褒めた積りで書いたことを、相手ではひやかして書いたと、受取ることもある。戲談を眞面目に聽く者もあれば、眞面目を戲談に聽く者もある。文章のあや、つやを、その大本旨とするものもあれば、大本旨を文章のあや、つやとする者もある。

予の如く一所懸命達意の文を作る者さへも、その意が往々達せざるばかりでなく、逆に達してゐることを見ては、最早やペンを擲ち、インキ壺を打毀すより外に、道はない様に失望することも少くないが、それは要するに除外例として、此方で意を用ゐた丈のことはあると思ふ。

如何に考へて見ても、予の金科玉條は、孔夫子が『辭達而已矣』といつたことに止まる。予はこれ以上のことも望まず、これ以外のことも求めない。然れどもその言葉の達することは、今も尚ほ容易の業ではないと信じてゐる。

特に予の『近世日本國民史』の文章に就いては、一言する必要がある。

予は『近世日本國民史』に就いては、頼山陽と全く反對の立場に立つてゐる。頼山陽は『二十餘年成二我書一』と云つてゐるが、その二十餘年の苦心は、材料を蒐集することよりも、十の七八までは文章の修正であつた。それほど彼は『日本外史』の文章には、力を用ゐてゐた。

ところが予は『近世日本國民史』に於て、未だ曾つて文章に力を用ゐたことはない。殆ど書き放しである。書いて後これを再讀することさへもしないほどである。これをマコレー卿の『英國史』の原稿の殆ど塗抹滿紙に比して、予が原稿の餘りに綺麗なるに驚く。その綺麗なるは、畢竟如何に予が文章に就いて、勞力の缺乏と云はんよりも、皆無であるかを、證するに足るものあるを知るに餘りあら

んと思ふ。

併し予は初から、予の『近世日本國民史』は、事實として世に傳ふべきものにして、文章としてこれを傳ふるものでないことを期してゐる。

事實、文章兩つながら卓絶なる、例へばツキヂデスの不朽の作の如き。若くはギボンの「ローマ帝國覆滅史」の如きを得ば、これに越したることはないが、その次は文章をとらん乎、事實をとらん乎の、二者その一を選らばねばならぬ。

予は自ら日暮れて道遠く、到底予の精力は兩者を兼ね備ふるに不足してゐることを、知つてゐるから、自ら文章を犧牲として、事實をとることに努力してゐる。併し如何に文字が拙であるにしても、事實を傳へんとせば、その文章は達意を主とせねばならぬから、達意の一點に於ては、固より油斷はない。

但だ同時に文字の精練推敲に力を用ゆるの遑無きことを、此に自ら白狀して置く。而してこれは予が當初から自ら期したものであることを、併せて記して置く。

序ながら云つて置くが、予の文章が半熟の飯の如く、半ばは文語體であり、半ばは口語體であり、漢文書きくずし口調があるかと見れば、忽ち言文一致體となつてゐて、如何にも文章が調和を缺いて

ゐるかの如く見えることがあり、又たこれが爲に予の文字を以つて悪文といふ人もある。けれ共前にも云つた如く、予には予一個の文格なるものがあつて、予は必らずしも、世間の口語體にも、又た文語體にも依らず、予自ら予一個の風を以つて、隨意に書いてゐる。それが悪文であれば悪文も亦た致方無し。併しそれは予一家の悪文である。

要するに予の文章は、予の一身と共に變化し、今日から少壯時代の文章を讀めば、予自身に於ても、如何にして此の如き齒の浮く樣な文章を書いたかと、驚くほどである。併し何れにしても予の文章は、予を離れて出來たものではない。

三　予と書籍蒐集の趣味

◇徳富氏藏書の二大厄難

これから少しく方面を變へて、寧ろ予の道樂と云ふべきことに就いて、語るであらう。謂はゞ予の道樂と稱すべきものは、甚だ少い。これは本來無趣味であるが爲では無い。自ら意志の力を以て、他の方面に赴く道樂を、悉く遮斷してゐるからである。

但だその中に於て、予の一生を通じての、道樂なるものがありとすれば、書籍の蒐集であらう。元來予は保存といふことは、性來の好きである。必ずしも物を惜むとか何とか、吝な了見で斯くするのでは無い。併し物そのものが、予にとつては、如何にも愛惜すべきと考へてゐるから、決て粗末にはしない。

されば書籍などは、惜し氣もなく、自分の愛讀したものを、他に與へたことが、屢々ある。それは與へられたる人が、その書籍に依つて、利益を享くることを信じて居、且つその書籍を粗末にせぬであらうといふことをも、信じてゐるから、何等惜むところなく與へた。中には最も自ら愛讀したるものを與へてゐる。

それで予の書籍道樂は、必ずしも書籍を惜しむといふわけでは無い。但だこれを愛するといふに過ぎない。

予の家には比較的藏書が多かつた。何時頃から集めたのであつたか知らぬが、予の祖父が上方旅行をした際に、購ひ來つたものが、尠くなかつたであらうと思ふ。『四書』『五經』、其他支那、日本の歴史ものなどは勿論、『武王軍談』、『呉越軍談』、『漢楚軍談』等の軍談ものもあり、特に吾父がその兄弟と共に、近藤淡泉先生の塾や、横井小楠先生の塾に遊んで、その兄弟等と共に謄寫したるものも、鮮

く無つた。

併し中年以後、予の父は專ら四方に奔走して、書籍などを取纒める遑は無つた。尤もその奔走中に購ひ求めて來たものも鮮く無つた。予の母は多くの長所を持つてゐたが、整理及び保存といふ點に就いては、他の卓越したる點に比して、寧ろ短所ではあるまいかと思はれた程であつた。

兎に角予等が、葦北郡水俣から熊本に家を移轉したる際が、德富氏の藏書に取つては、一大厄運であつたらう。一通りの書物は、書物箱の中に入れてあつたが、其他屋根裏の二階に、狼藉と積込まれ投込まれたものゝ中には、隨分面白き書籍もあつた樣だ。

予は少年の時によく、一人その屋根裏に上り、鼠や時としては青大將でも出さうな、むさくるしき室の中に、狼藉たる書物を開いて讀んでゐたことを、今猶ほ記憶してゐる。

而してその中から若干予が拾ひ上げた書籍がある。例へば「唐詩品彙」若くは王元美の「藝苑巵言」の如きがそれである。夫等の書籍は今猶ほ缺本ながら、成簣堂文庫に保存してゐる。

予は京都や東京に遊學中に、多少の書籍を購ひ求めた。それ等は悉く持歸つた。併し大江義塾を創立する時には、予の書籍を塾生にも借與へ、若くは頒ち與へたることも鮮く無つた。

併し書籍の第二回目の大厄は、明治十九年、予が一家を擧げて東京に移轉したる際だ。今日の如き

運輸交通の便利なる際には、家でも殆ど運び得らるゝが、當時に於ては、出來得る限り荷物を減ずるといふことを本意とした。

その荷を三種に分け、絶對的必要品は、東京迄携帶し、苟も經濟的價値あるものは、悉く賣却し、それ程經濟的價値は無く、さりとて捨つるに惜しきものは、親類に預け置いた。例へば多年予が使用したる、机とか、椅子とかの類がそれである。その他親類や知己に頒ち贈つたものも尠く無い。書籍等も殆ど二圓か三圓にて、大部分を紙屑同樣に賣拂つた。その中には支那の歴史類もあり、又た『吾妻鏡』や『太平記』とかいふ類があり、是等は勿論寛永若くはそれ以前の版であつたと思ふ。併し今日から考ゆれば、能くも交通不便の時に、斯迄多くの書籍を携へ來つたと思ふ程である。それは父及び父の兄弟の謄寫したる寫本類一式、及び予の愛讀したる『日本外史』『日本政記』、及び杜甫の詩集などの類は、今猶ほ手許にある。

特に予が幼時から愛讀したる『唐詩選』なども、當時に於て既に半ば破れ損じたるものを、今尚ほ存してゐる。併し兎も角も東京移轉は、予の家の藏書の一大厄難であつたことは、間違ひあるまい。

それから少しづゝ書籍を集めかけた。然るに予が赤坂氷川町に居住してゐる際、如何なる理由であつた乎、予の藏書の、特に英書の大部分を、國民新聞社に移した。然るにその書籍は何時の間にやら

紛失して、殆ど餘す處が無い。

曾つて瀧本誠一君が、予の藏書印あるものを、所持してゐると云つた。又た故厨川白村君が予の一友に語つて、『徳富氏が斯る本を讀むなどゝは、意外である』とて、予の藏書印あるものを、所持してゐるといふことを語つた相だ。その何書たるかは知らぬが、何れもその時代に紛失したものであらう。併しその頃は唯だ必要の爲に書物を集めたので、書物を集める爲に集めたのでは無つた。

四　刀劍からステツキ、ステツキから書籍

予が書物を集めようと、意識的に決心したのは、明治三十五六年の頃であつたらうと思ふ。三十一年は、予の一身にとつて、最も危難の年であつたから、とてもその餘裕のあるべき筈は無く、三十二年三年四年頃は、新聞の經營に餘念無く、如何にして新聞を生かさんかと、努力した最中であつたから、恐らくはその餘裕が無つたであらうが、三十五年は最早や予も四十歳となつたから、その頃から何か道樂を初めようと考へたのも、無理は無つたであらう。

元來道樂なるものは、自然に嗜むべき性質のものであるが、それを自らかれやこれやと選擇して初

めようなど、考へるは、聊か道樂そのもの、本然の性に適ふ意味が無いでも無い。

併し予は初めんと欲せば、凡ての部分と云はぬが、多くの部分に亘りて、初めることが出來るから、その中で比較的最も害が鮮く、最も利益多きものを選んだのであらう。

凡そ何人でもコレクションなるものに、興味を持たない者は無い。子供の時に玩具を集めることもそれであらう。或は唐の玄宗が三千の佳麗を集めたのも、それであらう。郵便切手から、マッチのレッテルに至る迄、世の中にコレクションの爲に憂身をやつすものは、少く無い。

現に英國皇帝ジョージ五世陛下の如きも、切手の蒐集家として世界的に高名である。

序でながら云つて置くが、予は當初ステッキを集め初めた。それは恐らくは三十五年より餘程前からのことであらう。實を云へば予は刀劍に興味が持ちたかつた。併し刀劍に興味を持つといふことは、如何に唯だ道樂であればとて、勢ひ寶刀と云はざる迄も、名刀が欲くなるに相違は無い。併し名刀は端金で得らるべきものでもない。且つその選擇が頗る困難で、果してそれが名刀である乎否乎、その鑑定に行きつく迄は、なか／＼骨折りである。

他人の眼を借りて名刀を購ふ如きことは、成金者流の爲すところで、固より予が屑とする所で無い。且つ購ひたる名刀は、自らこれを拂拭せねばならぬ。その儘放り込んで置いては、名刀も臺無し

になる虞がある。且つ餘りに刀劍を弄べば、或は人を傷けずんば、自ら傷く虞が無いとも限らない。まさか刀の持主であればとて、殺人罪を犯かさねば、自殺するといふこともあるまいが、何れにしても刃物を手許に集め置くは、危險と云へば、危險と云はれ無いことも無い。

それで予は刀劍の代りに、ステッキを集めることゝした。ステッキには僞物と眞物との鑑定を爲す必要は、殆ど無い。固より手入れをすることは、せぬに勝るに相違は無いが、然も刀ほど五月蠅くは無い。

實用の一點に至つては、固より高價なものを購はんとすれば、購ひ得られ無いことも無いが、ステッキの妙は、金銀を鏤めたものでは無くして、自然の趣味を具たものである。而して多くは自ら旅行の記念として、行く先々から携へ歸るものであつて、物そのものゝ價値よりも、寧ろそれに伴ふ歷史的意義の價値が、より多くある。

斯る理由で予はステッキを集め出し、一時は餘程澤山の數に上つた。ところが予が愛杖家と聞いて凡有る人々から、凡有るステッキを寄せ來ることもあるが、同時に予を訪問したる人々から、懇望せられて、一箇二箇と引拔き行かれたるものも鮮く無い。

されば今日でも、若し予が所藏のステッキを集めなば、二日や三日の風呂を焚くに、差支へは無き

程のものがあるが、然も多く未成品その儘にて、比較的高價のもの、若くは既成品の氣の利いたるものは、殆ど取去られてゐる。

併し今日でもその趣好は衰へず、旅行する度に、一箇や二箇は携へ歸ることを、例としてゐる。併し携へ歸れば、その儘放り込んで置くからして、自然ステッキとしては、未成品であり、薪としては既成品であるといふ如き姿になつてゐる。此話は此で切つて置く。

扨予は當初書物の道樂をするにつけて、先づ繪草紙若くは浮世繪がかつたものを集めることゝした。予は別に鑑識があるわけでは無いが。子供の時から繪畫には趣味を持つてゐる。併し高價なる繪畫を購ふことは、不可能であると考へたから、寧ろ大家、名家の書きたる繪の彫刻せられたものを集むるに若かずと考へ、そろ〳〵その方面に手を伸して見た。

併し此の方面に手を出せば、勢ひ外國のコレクターとも競爭をしなければならぬ程になつて、切角高價なる書畫の方面を、思切つてゐつゝ、更にその方面に手を出すことになれば、所謂る前門の虎を防いで、後門の狼を進むるの類であると氣がついたから、先づその方面は思ひ止ることゝした。

五　蒐集の第一歩五山版

◇島田翰の藏書と竹添井々居士の藏書

從つて予は專ら所謂古版、即ち世俗の所謂五山版を集むる可く骨折つた。別に予は自ら鑑識眼があつたわけでは無い。併し何れの書店に行つても、必ず先づ五山版は無い乎と訊いた。

然るに何れの書店でも『左樣な本は持合せが無い。』『御座らぬ。』抔と云つて、拒絶せられた。その中で獨り琳琅閣、即ち池の端のバイブルと綽名する本屋だけは、なか〳〵澤山持合せがあつた。

當時主人が云ふには『住友家にて書籍館とか何とかを造るといふことにて、取揃へて居た。』とのことであつて、なか〳〵種類も澤山あつたが、今から考へて見れば、それを全部その儘引受けて置けば、予も一廉の藏書家となつたであらうが、不幸にしてそれに及ばなかつた。それは當時如何に廉價であるとは云ひながら、正平版の論語無跋本が、五十圓位の時價を持つてゐた。

五山版の語錄などは、一册五圓以上十圓位のものであつたと思ふ。琳琅閣の外には、大阪に松雲堂鹿田があり、京都に春和堂若林があり、名古屋に其中堂三浦があつた。その中でも予の最も多くの取

引は、東京では琳琅閣、大阪では松雲堂であつた。

然るにその際偶然にも、予よりも寧ろ藏書家としては一日の長があつた大野酒竹氏が來つて、島田翰なるものが、藏書若干を賣り度いといふことであるから、購ひ呉れまい乎と云ふことであつた。

島田は明治に於ける漢學の大家、島田重禮翁の次男にて、元と島田澄と云つてゐたが、足利學校の文庫の論語を、猥りに携へ歸へりたりとか何とかいふことにて、刑事問題を惹起し、その爲に恐らくは謹愼の意を表して、改名したものであらう、當時は翰と云つてゐた。

其の目錄を見れば、五山版なども尠く無く、その外古寫本、又た元版、明版などもあつたから、予も直に心動きて、本をも見ず、當人にも面會せず、大野酒竹氏の紹介通り、その言ひ價の儘引取ることゝした。當時それが全部で五百圓であつたが、五百圓の金は予にとつて大金であつたけれ共、斯る機會は二度とあるまいと思ひ、思切つて買受けた。今から考へて見れば、その中には、左程誇るべきものゝみでは無つたが、概して云へば、先づ中の上に位するものにて、中には北宋版、若くは高麗版と稱する說文解字などは、翩々たる一小册を、五十金の價にて求めたる程にて、當時は餘り高價ではあるまいかと思ふてゐたが、今日から考へれば、それも先づ仕合せであつたかも知れ無い。

兎も角もこれに依つて、予は尠く共藏書家たる所の基礎が出來上つたと云つても宜からう。元來そ

れ等の書は、大野酒竹彼自身が購ふべきであつたらうが、酒竹氏は他に尙ほ求むる所があつた乎、若くは金廻りが思ふ様で無つた乎、兎も角もそれ等が予の手に歸したのである。

斯くて予は書物を受取り、金を拂つた後、大野、島田三人會食し、それから島田翰と交際を始めることゝなつたが、彼は當時二十一二であつたらうと思ふが、實に校勘の學問にかけては、海內第一と云ふべきものであつたのに、驚かされた。

實を云へば、獲物は更に大なるものがあつた。當時日本に於ける有數の珍書の所藏家、竹添井々居士が、餘儀無き事情の爲に、その書を賣却することゝなつた。井々翁は予にそれを依賴したから、予はそれを松方公に勸め、松方公が買取ることゝなつたから、予は國民新聞社員數名を率ゐ、麴町なる翁の書籍庫に赴き、目錄に照して調べ上げたが、實際の書物は目錄以外に尙ほ澤山の珍書があつた。その代價は五千圓以內であつたと覺えてゐるが、今日から考へれば、その中の一部でも五千圓位の價値あるものは鮮く無つた。

宋元版は固より、日本の古寫、其他明、淸の初版、その他凡有る善本、實に驚くばかりであつた。若し予が少しく金廻りがよく、若くは予の金錢に關する信用が充分であつたならば、寧ろ予自ら購ひ置くべきであつたが、當時は五百圓が予にとつては最大限度で、とてもその十倍などゝいふことは夢

にも思ひ及ばなかつたから、寶の山に入りつゝ、それを松方公に周旋したのであつたが、松方公は後ちこれを岩崎家に讓渡され、今では竹添文庫が、岩崎家の靜嘉堂文庫の蒐集書籍の、重要なる一部をなしてゐるには、相違あるまいと思ふ。

六　朝鮮支那漫遊と古印

三十七八年は恐らく予にとつて最も多事多忙の年であつた。卽ち日露戰役の年にて、予は國民新聞社長及び主筆としても、又た若くは桂公の內輪に於ける助言者としても、實に晝夜兼行の姿で働らいた。然も道樂なるものは恐しきものだ。その貴重なる時間に尙ほ古本屋を訪ひ、古本を漁る時間を見出した。予は此の戰役中には、吾が兩親を親しく一週一回逗子に見舞ふことさへも、怠り勝になり、自ら赴く代りに、頻繁と書簡のみを送つてゐたに拘らず、一寸した號外を出した後にて、一時間や三十分の暇を偸んで本屋に赴き、特に琳瑯閣の奧座敷にては、凡有る奇書、異書、珍書を漁りて、連日の苦を忘れることが少く無つた。

而して此の二年間に、予の鑑識眼も、段々確になり、同時に予のコレクションも追々增加すること

となつた。斯くて戰爭の終るや明治三十九年の初夏から、朝鮮滿洲を經由して、北支那から南支那へと旅行した。此の旅行には、予は大なる望を持つて出掛けた。その望の中の一は、朝鮮、支那にて珍書を漁ることであつたが、朝鮮でも支那でも、殆ど何等思はしきものは手に入らなかつた。

朝鮮では當時未だ本屋らしき本屋も無く、又た僅かに一日二日の滯在日數にて、手のつけ樣も無つたが、北京では琉璃廠や、隆福寺街などの古本屋を漁つたが、左程思はしきものも無く、偶々思はしきものあれば、目の玉の飛出すほどの高價にて、とても予の貧弱なる旅嚢の辨ずる處では無つた。

併し予はその代りに、恰も琉璃廠の各店頭に轉りてゐる、古銅印などを、無茶苦茶に集めて來た。それは必ずしも善惡の選擇をするで無く、店にあるもの一切を、一山幾何といふ價で買つて來たのである。自ら鑑別力の無きものには、これが最も安全なる方法と考へたからである。

予の古印道樂は、その時に初つたといふでは無い。實はその以前からそろ〳〵その方には興味を持ちかけてゐた。特に三十八年九月五日の燒打騷ぎ以來、予は宅に歸へらず、其儘當分國民新聞社に籠城してゐたが、新聞と讀書以外には仕事が無く、その爲に社附近の古道具屋から、古印を取寄せて、これを購ふこととした。

それも世間で所謂鷄血とか、白蠟とか云ふ高價の品物で無く、銅印で無ければ、木印ときめ、偶

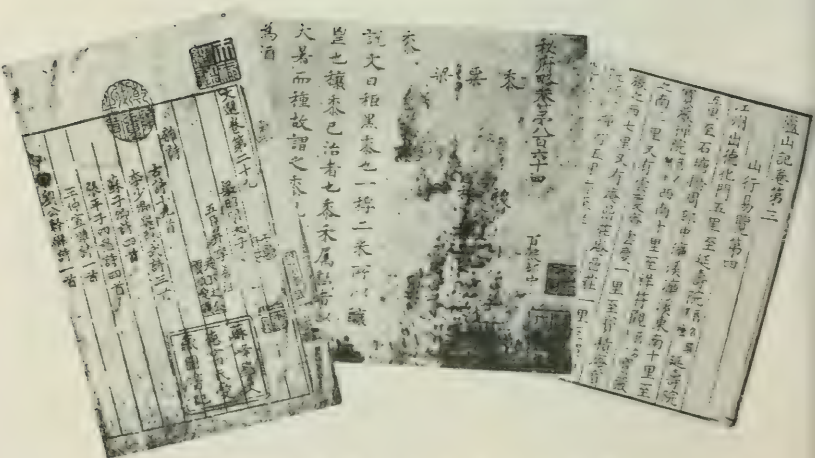
偶石の印でも、印材そのものゝ餘り高價ならざるものを、需めてゐた。されば若干の豫備知識もあつたから、その方に力を傾けたのであつた。

それが北京ばかりで無く、天津でも、漢口でも、上海でも、蘇州、杭州至る處で少しづゝ求めたから、歸へり來れば分量に於ては、案外鮮く無つた。其處で予はそれを瓦礫でも包む如く、造作なく半巾に包み、其の道の大家中井敬所翁にその審査を乞ふた處、悉くとは云はぬが、案外その中には漢銅印などもあり、其他唐宋元明のものも鮮く無く、それより印の方にも愈ゝ手を出すことになつたが、併しこれはほんの片手間にて、自ら進んで求むるで無く、他の來り賣るを買ふたに過ぎ無つた。

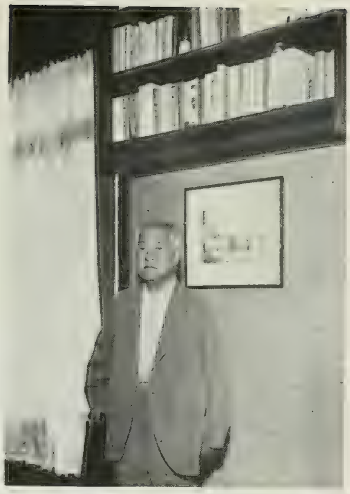
而して其中には日本人の教授として、支那に赴き、携へ來りたる人よりも、鮮からず讓り受けたが、それ等のものは悉くと云はぬが、概ね僞造品であつて、或は贋造と云へば聊か酷であるが、僞造にせよ、贋造にせよ、眞物で無きこと丈は間違ひ無く、予は唯だそれも參考の爲に殘し置くといふに過ぎ無い。固より買た當時には、左程吟味もせず、例の調子にて、一山幾何といふことにて、購ひ得たるものであるから、今更ら自己の不明を悔ゆる理由もあるまい。

凡そ物を蒐集するには、鑑識眼と熱情と、及び豐滿なる財布とが相合せねばならぬ。然るに予は常に豐富ならざる財嚢の持主たるのみならず、その口を開くさへ甚だ小心であるから、とても思切つた

蒐集ステッキの一部



翁自から掘出せる稀書の一部



（上）民友社に於ける蘇峰翁

（下）山王草堂の書齋に於ける蘇峰翁

善き物が、予の手に入るべき筈も無く、又た予もそれを求めんとするほどの熱心も無く、唯だ限りある力の中にて、それを亦たその中から幾部分を割いて、好奇心を滿足せしむるに過ぎ無い。併し此の方面の道樂も、實は大概にして打切りとした。それは物が無いのでは無く、力が足らぬからである。

七　何故に書籍を愛したる乎

◇『雲烟過眼錄』の記述

更に島田以外に予をして、書籍蒐集の便を得せしめたる者に、森大狂君を擧げねばならぬ。予が大狂君と相知る樣になつたのは、日露戰爭以前であつたらうと思ふ。君は嚮て國民新聞社々員となつたが、君は禪籍に親み、特に吾が五山諸學僧の墨蹟などにも明かであり、又た古版、古寫にも相當の鑑識を持つてゐた。

然も君は何れの禪寺にも、その門戸を開放せしむる便宜を得たから、予は君に依つて鮮からざる援助を得た。特に明治三十八年の末、君は予に向て、

『京都には意外の掘出物あらん。若し贊成ならば、此事に任ぜん』とのことであつた。併し予は寧ろ

京都よりも途中の古刹を捜索するに若かずと慫慂し、斯くて君は鈴木子順和尚と、十二月二十四日に鎌倉に赴いたが、果然歳晩ではあるし、非常なる獲物があつた。

猶ほ予が何故に書籍道樂を始めたるかに就いては、此頃偶ゝ當時記錄し置きたる『雲烟過眼錄』なるものを見出したが、今その中より必要と考へる數點を摘出することゝした。

『予他の嗜好なし。唯だ書籍を愛す。少時より今日に至る迄、三十年來毫も渝る所なし。然も其の愛するは讀むを愛するに止まり、更らに之を珍藏するに意なかりき。既に珍藏の意なし。其の製本彫板の新古、精粗、醜美、善惡の如き豈に問ふを要せん哉。予が書籍に對する愛情は單に其の內容のみ。其の精神のみ。然るに今や所謂る書物道樂者の仲間に伍せんとするが如き傾向あるは、何ぞや。是れ偶然なる乎。夫れ然り。豈に夫れ然らん乎。

予は人として多少の道樂ある可きを恕し。且つ其の安全辮として、寧ろあらざる可らざることを信じたり。而して如何なる點に予の嗜好即ち道樂を向はしむ可きやに就て、聊か熟圖せざるにあらざりき。庭園の如き、花卉の如き、盆栽の如き、漁釣の如き、予に於て多少の趣味なきにあらず。若し夫れ骨董の如き、予が蔑視する物なれども、然も其の趣味に於ては、全然是れ無しと云ふ可らず。然も概して云へば、上如の諸道樂は、多の費用を要せざれば、多くの時間を要し、さなくては多くの技巧を

要するものにして、未だ予をして専一の愛を獻げしむるに足らず。但だ繪畫の一事に至りては、予に於て夙好あり。予は敢て具眼者と誇るにあらざれども、予が京都同志社在學中——明治十二年の頃と覺ゆ——京都博覽會に於て、森寛齋翁の小畫片を購ひ、之を王父美信君に獻じたることあり。予は久保田米僊氏の未だ名を成さゞるに先んじ、其の手腕を認め、之を國民新聞社に聘用したり。予は原田直次郎氏の肖像畫を識認したり。近くは三宅克巳氏の如き、高嶋北海氏の如き、未だ世人の嘖々せざるに際して、聊か鑑識傾倒せざるにあらざりき。若し夫れ古畫に至りては、全くの素人たるを免かれずと雖も、亦た之を愛好する所以を解せざるにあらず。

　されば予は上記の理由を以て畫に向て、予が專愛を傾けんと欲したり。而して予は必らずしも多くの費を投ぜざりしも、若し必要以外に於て、予が從來消費したる金錢を擧ば、恐らくは繪畫は——縦令其の額の驚く可く少なるにせよ——其の隨一ならん乎。乃ち橋本氏、久米氏、原田氏、和田氏、三宅氏、下村氏の如き、若しくは北齋、廣重の類の如き、或は鈴木松年、森寛齋等の如き、洋行前より洋行後に至る迄、若し無益の冗費と云ふ可きものあらば、恐らくは此にあらむ歟。

　併し翻て考ふるに、今人の畫は多きを貪ぼるを要す。古人の畫に至りては、眞贋の區別頗る難く、而して其の費用も亦た少小ならず。故に畫の道樂は、其の終局に於ては、甚だ贅澤にして、予が現今

の境遇の克く耐ゆる所にあらず。假りに耐ゆることあるも、予は寧ろ此の如き費用を、他の有益なる使途に向て投ずるの義務ある也。故に予は悉く之を放擲せざるも、成る可く其の増長を抑制するの至當なるに考へ當れり。然らば則ち焉くに面して道樂の乾坤を開拓す可き。此に於てか其の予と最も緣故ある書物道樂に想著したり。即ち書籍の爲めに書籍を愛すること是れ也。是れ費用も比較的少く、眞贋の掛念も比較的少く、且つ多少實用にも近く、更らに予の精神的修養、文學的教養にも資するの便宜あり。而して此の方面に於ては少しく力を用ゆれば、我國に於て一頭地を抽ずること敢て甚だ難からざる可しと信じたれば也。但だ斯く著想する事の甚だ晩く、眞に斯く迄に決心したるは、僅かに本年の春なりき。是れ此れを惜しむ可しと爲すのみ。　明治三十六年九月十七夕記

『明治三十三年の頃より、少しく畫譜の類に著眼したり、畫譜は畫其物に比すれば信憑し易きを以て也。同年の秋かと覺ゆ。司法大臣官邸に於て、始めて鳥之子紙の古寫本を見、始めて之を愛玩するの心を生じたり。明治三十四年の春――寧ろ殘冬と云ふ可き乎。兎も角も一月下旬也――京都文求堂及び若林等に赴き、之を捜索し、若林より住吉物語三册を購求したり。是れ予が寫本に著眼したる嚆矢也。爾來迫源次郎氏より秋月物語を贈り來るあり。又た明治三十五年には元就歌集、古今集等を求め、爾來文章艸紙、義政集等あり。然も予は此の方面には餘りに力を專らにするを欲せず。若し夫れ

畫譜は板本と寫本とに論なく、聊か蒐集したり。而して今尙ほ然る也。(明治三十六、九月二十日)』

『予が古版類に注意したるは、明治三十五年四月、大阪に於て內藤湖南君を訪ひ、其藏書正平翻刻本論語、高山寺影寫本論語卷子等を一覽し、頓に其の興味を鼓舞したりき。而して明治三十六年の初夏、池之端琳琅閣を訪ひ、其の藏貯の夥多なるを見て、專ら力を古刻の蒐集に致すの便を得たり。明治三十四年八月の末大阪鹿田に於て、枯崖漫錄を得たり。是れ五山版を得たる嚆矢とす。同九月上旬、書林に於て正平版翻刻本の校正刷を得たり。是れは完成したる翻刻本に比すれば、寧ろ稀品と云ふ可きが如し。十一月淺倉屋に於て慶長版七書を得たり。是れ慶長版を得たる發端也。(明治三十六年十月初六之夕)』

八　蒐集の第二歩五山版

◇ 磯部屋より購ひたる五山版

◇ 鎌倉古寺院の五山版

予が森大狂、鈴木子順二君に依つて、鎌倉其他の古寺院より續々書籍を買込み、それが菰包となつ

て仰山に予の家に送込まるゝのを見て、偶々逗子より來りたる予の父は、安からず思ひ、密かに予に向て『此の如き道樂は、先づ大抵にして置くが宜らう』との意を漏した。

併し予は別に過分の金を拂ふのでは無い。唯だがらくた同樣に凡有る書籍を、寧ろ選擇せず、一山幾何にて購ひたるものにて、分量こそ多けれ、その質に於ては、左程感心するものばかりでは無い。故に予が父の思ふ程の贅澤では無いから、別段辯解もせず、其儘聽いてゐたが、幾何も無く父は予の妻に向つてそれを取消した。曰く『先頃は大抵にして思止るが宜からうと云つたが、再考するに人間には何か道樂が必要であるから、寧ろ書物の道樂は、道樂の中にて性質の善きものなれば、餘りこれを制止しない方が宜からう』と。

兎も角も予は自らその道樂を調節してゐたからして、餘りその爲に無理をしたことは無つた。但だ明治三十八年は、今申した鎌倉遠征の外に、東京の書肆磯部屋、武田屋が、京都から國民新聞社に一行李の五山版、其他を持込んだ。その消息は此に書いてある通りである。

『歲末に際すれば稀有なる獲物あり焉。今明治三十八年十二月十二日、予首相邸より伊藤侯邸を訪ひ社に抵る。時に正午に近し。磯部屋、武田屋の兩人予を待つ久し。彼等は京都よりの歸途にして、行李中に五山版充滿す。嘗て磯部屋が京都に赴くに際し、予に諮る所ありき。然も彼も予も其の獲物は

杜工部集外二三たりと期したりき。然るに思ひきや此の如し。彼等予に向て其の全部を購はんことを以てしたり。予之を諦視するに、一二を除き何れも罕覯の珍籍たらざるはなし。但だ或は予が意に適せざるあり。或は予が既に藏儲したるものあり。故に其の尤物を拔き、之を購ふ事としたり。總體を擧げて予の調査評價は五百六十三圓也。彼等の所謂京都に於ける賣値と稱するもの六百五十圓也。予は實に其の賣値の不廉なるを知る。然も此の如き一手に一度に集拾したるものを得る事、頗る困難なるを知るが故に、大飛躍にて左の書目を購ふ事を約せり。要するに全體の約四分の三は予が手中に歸したる也。是れ三十六年十二月十九日島田翰氏の書籍を五百圓にて購買したる以來の出來事也。而して予が藏書家として、一大長足の進歩を島田氏購買に於てなしたる如く、此回更らに復た然りとす。世或は千金を散じて明眸皓齒の一笑を沽ふものあり。予の如きは贅澤に似たれども、何時にても之を轉賣するに難からず。或る意義に於ては一種の貯蓄と云ふも不可なき也。或は有利の貯蓄たらざるも、少くとも或物丈は留存するを得る也。自から樂み而して既に保存す可らざるものを保存して子孫に遺すもの、豈に夫れ無用の業ならんや。(以下目錄中略す)

右總計四百五十五圓也。予が損なる乎。書肆の得なる乎。双方得なる乎。更らに他日を待つて之を知る可き也。呵々。但だ予は此れが爲めに離隔的作用を以て大いに精神的保養を得たり。此れは計算

以外の利益にして、此の利益の爲めには多大の金錢も決して愛しむに足らざる也。

明治三十八年十二月十二夕　蘇峰記』

これは恰も前に掲げた森大狂氏の運動より以前のことであり、要するに予が珍書の藏書家としての基礎を築きなしたのは、島田五百圓、磯部屋四百五十五圓、森氏第一回分の百三十五圓、此の三者にて築き出したるものにて、卽ち一千一百圓以內に於て、予の珍書の藏書家たる立脚地は出來たものと云はねばならぬ。

その以前にも、これ以外に多少集めたものがあり、その以後には猶更ら澤山集めたものがあるが、然も總ての基礎は、此の三者にて出で來りたりと云ふも不當で無い。予は屢ゝ予が明治三十六年頃より意識的に書籍道樂を始めたるを、旣に遲しと悔いたが、成程予より先に始めた者も無いでは無いが、寧ろ今日の所謂る藏書家は、予の後輩に屬する者が多數である。

但だ予が悔ゆるのは、予に充分の資力が無く、所謂る乏しき財嚢から、漸く若干を節約し得て、これに振向けるが爲に、折角寶の山に入りつゝ、これを取逃したことの鮮く無つたことを、遺憾とする迄である。

九　『唐三藏取經記』堀出しの記

◇村幸書店に於ける發見

元來堀出し物抔と云ふ物は、求めて出來るものでは無い。而て又たこれを避けんと欲しても、避くる能はざるものがある。予が書籍蒐集の歴史を考へて見るに、予のコレクションの中にて、目星き品物は、總てとは云はぬが、尠く共その一斑は、堀出し物の部に屬してゐる。

予が此に堀出し物と云ふは、その物に相當する代價を拂はずして得たるものにて、謂はゞその物品の時價の十分一とか、百分一とか云ふものにて得たことを意味してゐる。即ち語を代へて云へば、予は中流の書籍、若くは並上の書籍と云ふものには、それ相當、若くは不相當の代價を拂つて得たるものが多いが、無類、最上、飛限りとも云ふべきものゝ中には、往々莫迦らしき程の廉價にて得たものが、鮮く無いと云ふことになる。

但だこれ等は大概明治年間のことにて、大正となつては比較的鮮く、大正も晩年となつては、殆ど皆無と云つても差支へあるまい。

今三十八年に於ける一二の例を掲ぐるであらう。第一は三十八年一月十八日のことである。當時は旅順陷落の後にて、奉天戰爭の以前であつた。隨分新聞社は多忙であつた。然るにその日予は偶然日蔭町村幸に赴いた。村幸と云へば、有名なる軟本屋にて、軟派の德川時代の文學に關するもの、浮世繪其他のものに就いては、頗る有名で、外國人等も顧客に多く持つてゐた樣だ。主人はその方にかけては鑑識眼もあり、從つて軟派の筋には奇書、珍書の類も多かつたが、その代價も又た不當とは云はぬが、水平以上であつたらうと思はるゝ。

予は滅多にその店には赴かぬが、其日は偶然に日吉町から程遠からぬ爲に出掛けた。予が滅多に赴かぬと云ふのは、軟派の書物には、左程愛著が無つたからだ。併し時偶ま其處に赴き、餘り珍書とも云はない種類の、德川時代の社會文學の書籍抔を偶ゝ購求したることがある。されば村幸に於ては、予は殆ど尋常一般、通り掛りの顧客と認むる以上のことは無つたであらう。

其日も予相當のガラクタ本を澤山戸棚から出して示したが、別に予の意を動す物も無つた。然るに其中から奉書に和歌を書いたるものを裏返へしにして包み、その上に『唐三藏取經記』と書き、下に高山寺本と書いてあり、偶ゝそれを開いて見れば、中からバラ〳〵となつた紙が十四五枚も出で來つた。それは殆ど手に取れば、直に破るゝ程の危き狀態であつた。

併しその字體が容易で無いから、予は直にこれは宋版であると睨んだ。扨てそれを飜して見た後、元の儘に紙に包み、何氣無き態にて傍に置き、軈て代價を訊いたら七十五錢と云つた。予は心中にてこれは〆たと喜んだが、成可くその色を包み隱して、その儘購ひ取り、これを懷にして歸つたが、更に靑山草堂に歸り、徐ろにこれを閱し來れば、全く宋槧に相違無く、然かも又た高山寺の印さへ捺り居れば、固よりその藏書であつたことは確かであり、成程殘闕ではあるが、それは餘程久しき以前から殘闕であつたことは、表紙の上にその通り認めてあつた。

予は更に一圓三十錢を投じて裏打をなし、表裝を新たになして一卷の書物に仕立てたが、これは紛れも無き宋版にして、然かも支那に於ては全く佚書であつた。猶ほ他日三浦將軍が、『唐三藏取經詩話』なるものを所藏さるゝといふことを聞き、借覽を乞ふたが、將軍愛しんで借さなかつたから、わざわざ將軍の宅に出掛けてこれを見、その許可を得て寫眞に撮り、十部ばかり複製して、それを西園寺公其他好書家に頒つたが、扨予の取經記と對照するに、內容は全く同樣にて、唯だ一方は詩話となり、一方は取經記となつてゐるまでゞあつた。

而して詩話の方は袖珍本にて、字は正楷であり、予のは半紙本にて字は行體を帶びてゐる。然も又た倶も殘缺にて、兩者を合しても此書を全く完書となすことは難いが、然も兩者出入するところあ

つて、互に缺くべからざるものと云はねばなるまい。而して詩話も亦た高山寺より逸出したるものであることは、兩者共歴然と、高山寺藏書目錄の中に掲げてあるからよくわかる。

三浦將軍の『取經詩話』は羅振玉氏が更に寫眞に撮り、單行本として世に行はれてゐた。予の『取經記』は深く祕して人に示さなかつたが、羅振玉氏の爲に借出され、氏は又たこれを寫眞版に撮り、その叢書の中に刊行した。而してこれに對する跋文も、彼の文集の中に掲げられてゐる。

聽けば三浦將軍の書は、元と鳥尾將軍の有であつたが、豫ねて三浦將軍が欲しがつてゐた爲め、鳥尾將軍歿後、その遺物として贈られたとか云ふ。先年三浦將軍の入札があつたが、その中にも見え無つた。如何になつた乎と考へてゐたが、昭和四年秋頃であつたらう。三浦家最終の入札とも云ふべきものがあつて、其中にこの書物が出で來つた。

實は小泉三申君が、此事を聽いて、予に相談の書簡を與へられたが、予は關西旅行中にて、遂に答を與ふる機會を得なかつた。聞けば千五百圓乃至二千圓の間にて、大倉男の手に歸したと云ふことである。それにしても天下無二の珍本であれば、寧ろ廉價と云ふも差支へあるまい。

但だ予はそれを七十五錢で得たのは、如何にも天の與と云はねばならぬ。これは何人の有であつた乎。恐らくは村幸が青木信寅の藏品を買つた中に、多分打混つてゐたものであらう。村幸はこれを七

十五錢に賣つたのは、仕入れよりも若干の儲けであつたかも知れぬ。併し予から云へば、天佑と云ふの外は無い。要するに有るものを有るべき所より買ふ時は、掘出しとはならない。

有るものを有るべからざる所より買ふ時に於て、初めて掘出しとなるのだ。されば軟派の古本屋から、硬派の書物を買ふて見たり、硬派の古本屋から軟派の書物を買ふて見たり、若くは古本屋から新刊書を買ひ、新刊書肆から古本を買ふたどゝいふことは、若し幸ひ獲物に際會することがあれば、必ず掘出し物がある。但だ有るものが、有るべからざる所にあることが極めて稀で、謂はゞ絶無僅有とでも稱するの外はあるまい。

十　『文選』『廬山記』『虚堂錄』掘出し記

◇磯部屋と琳琅閣に於ける發見

更に明治三十八年十月十九日、予は麹町を過ぎつゝある際、磯部屋に立寄つた。此に磯部屋の話をするが、磯部屋の主人磯部太郎兵衛といふ漢は、本屋でありながら一廉の民權家であつて、自由黨に

興してゐた。卽ち中江兆民居士の『平民の目ざまし』抔といふ小冊子は、此店から出版された。予が知合になつたのは其子である。

扨その店頭に曝してある『文選』の零本一卷あつた。本の見出しにも又た終にも、大きな印が三顆づつべた〳〵捺してあり、且つ卷頭の頁、又た卷末の頁にも、大小の印が澤山捺してあるのを見受けた。

何か急ぎの用があつた爲に、其儘社に赴いたが、途中考ゆれば考ゆる程不思議でたまらないから、予の車夫を遣り、一圓札一枚を持たせ、これにて購ひ來れと命じた。軈て車夫はその本一册と、五十錢銀貨一片を携へ歸つた。卽ち代價五十錢である。

予は宅に歸つて後、それを吟味して、愕然案を打つた。これは正しく宋版である。而して首尾の空白に捺したる大なる印は、孰れも乾隆帝の印にて、所謂古稀天子之寶などゝあつて、卽ち乾隆帝が七十以後愛玩したるものである。

其他本文の餘白にも各種の印があるが、それは乾隆帝及びその以前の藏書家である文徵明、季振宜其他の人々の藏書印であつて、特に宋版といふ極めもある。これは『文選』の第二十九卷にて、古詩十九種を以て始つてゐる。『文選』の中では、恐らくは最も大切なる一卷であらう。

予は更らに乾隆帝の藏書目錄『天祿琳琅書目』を調査して見れば、正しくその書目中にある一卷だ。それが五十錢にて予の手中に入るなどゝいふことは、不思議と云はんよりも、寧ろ莫迦々々しき話であるが、磯部屋は多年古本屋として、五山版、宋版、古活字本なども取扱つてゐたのであるが、多分一山幾何で、所謂る二束三文に購ひ來つて、其儘店頭に並べてゐたのであらう。磯部屋の仕入れ値段からすれば、五十錢でも儲の多い部分に屬するかも知れぬが、本そのものゝ價値としては、何となく可哀想である。

これは聞く所に依れば、三十三年役卽ち團匪の亂に從軍したる某氏が死して後、家族がその遺品を賣拂つたと云ふことにて、その時の戰利品であらう。惟ふに支那では、英佛同盟軍が北京に入り、圓明苑を奪略したる時と、又た各國同盟軍が北京に入りたる時とが、種々の珍物が飛出す好機會であつたらしく思はるゝ。

併し椰の下に何時も蠹が居るでは無い。斯る『文選』が何處にか落ちてはゐないかと、爾來二十餘年探してゐるが、遂にそれらしきものも見當らない。されば初から一卷だけ失敬して來たものであらうと思はるゝ。

明治三十八年は予にとつて、如何にも書籍運のよき年であつた。予は此の一年間に、予の成簣堂文

庫に於ける、優品と云ふべきものを、數點得た。今その一二を語るであらう。

明治三十八年八月十七日、例の通り池の端琳瑯閣に赴いたが、偶ゝ表紙も無く、バラ／＼になつてゐるものを見出した。それが五卷あつて、二卷は刊本にて、三卷は鈔本である。予はそれに就いて、此の如く記してゐる。

『廬山記五册予之を琳瑯閣に獲たり。全部紛混固より表標なし。乃ち故紙と擇ぶ所なきに似たり。予一見直ちに其の稀寶たるを察し、五圓を投じて購矣。

歸來細閲するに、全部所謂蝴蝶綴にして、儼古刻舊鈔の面目を存矣。其文字精健跳拔、俗氣なし。暗に顏歐の筆意を得たるに幾し。而して我が藏弄する宋槧華嚴經に比すれば、其弩張の氣は少しく遜るも、其の清雅の致は之に勝るものあり焉。若夫れ其の鈔册に至りては筆墨論ずるに足らざれども、其の足利時代の舊鈔たる事は殆ど疑を容れず。是以て更らに裝師を督して之を補繕し、其の舊に仍りて其の裱潢を新らたにす。面目一新宋槧の眞價始めて顯る。予の驚喜可知也。且つ其の鈔册を細閲し、之を他書と對校するに、多少の脫落ありと雖も大過なし。概論すれば二卷槧三卷鈔五卷やゝ完全に近しと云ふを得可し。蓋し此の一部は予に於て近來の掘出物と云ふ可き歟。

明治三十八年八月十七日夕

於青山艸堂　蘇峰學人』

併し今此に足利時代と云つたのは誤にて、恐らくは南北朝頃の鈔本であらうと思ふ。その刊本は疑も無く、宋槧に相違は無い。元來『廬山記』は、我國に於て元祿時代刊行せられてゐるが、それさへも頗る珍書であつて、支那には元來此種の『廬山記』は、全く佚書である。

然るにこれが五圓にて購ひ得たと云ふ事は、實に不思議と云ふも愚かである。此書は羅振玉氏よりの懇望默し難く、彼に貸與へたが、彼はこれを全部寫眞版に撮つて、其の叢書の中に收めた。

第二は『虛堂錄』である。それに就いては、左の如く認めてゐる。

『虛堂錄四册

卅八年十月五日琳琅閣に於て購焉。代價十圓也。斯書予一見其の異常品たるを知る。四册中其の一巻の上半及び三卷の全部寫本也。其他皆な宋の咸淳五年板也。而して欄の內外記入頗る多矣。此書桑名及び樂亭文庫の印あり。松平樂翁の遺愛たるを知る。樂亭文庫は樂翁の自書を刻したるもの也。又た眞珠菴及び天下純藏司の印あり。殆めて其の一休和尚の手澤本たるを知焉。書中の細評或は和尚の手稿ならむ歟、然らざれは玄訥和尚ならん。蓋し玄訥の印記あれば也。玄訥の傳別紙にあり。又た蟠桃院の印あり。是れ妙心寺の塔頭也。此書古板寶愛す可きのみならず、其の寫字の古

雅翫す可きのみならず、現に三哲の遺物也。豈に寶惜珍重せざる可けんや。予は後の此書に接するもの、必らず予の遺囑に孤負せざる可きを信ずと云爾。

明治三十八年十月卅日夕　　於青山艸堂　蘇峰學人」

以上の二書は孰れも素人の家から掘出して來たものでもなければ、何でも無く、全く歴然たる有名なる古書肆より得たるものにて、予としては何等疚しき所も無ければ、愧づる處も無く、唯だ自ら快心の情に堪へざるのみ。

而して其の『廬山記』が、高山寺の舊儲であつたことは、高山寺の印が卷頭に捺してあるを見ても判斷がつく。

十一　書籍蒐集最大の幸運

◇『祕府略』及び『醫心方』を得るの記

予は予の書籍蒐集者として、一生の中に再び遭遇し難き幸運に際會したることがある。これは云ふ

迄も無く幸運だ。それは明治四十一年九月上旬であつたと覺えてゐる。

當時神田に野田屋と云ふ一の古本屋あり、予は其處から專ら英書及び西洋の古本類を求めることゝした。卽ちケムフェルの日本に關する著述の如きも、其處から求めた。其處には洋本もあれば、和漢本もあり、店は如何にも雜然たるものであつた。

予は曾て其處から、森有禮子の所藏であつた、ケムフェル二册を、百圓で求めたこともあり、又た大智和尙の偈頌を五錢にて求めたこともある。主人は如何にも面白き漢にて、每年輕井澤に古洋本を持つて出張し、仕入れ値段よりも安く賣飛して、その爲に評判を博してゐたが、後遂に如何になつた乎、その消息を聞かない。

話前に還る。或日卽ち前に云つた四十一年九月上旬――右野田屋の小僧が、予に面會を求めたから、薄暗き國民新聞社の應接間に引いて、相見た。小僧は風呂敷包を背負つてゐる。是を降し、是を解いて見れば、雜然として古文書が山の如くある。

その古文書の中には、建武などの年號もあり、恐らくは鎌倉から室町時代のものであつたらうと思ふ。或は中には今少しく古きものもあつたかも知れぬ。予は最も編輯の忙しき時間であつて、悠々とこれを見る暇が無つた。全部で三十圓とか云つた樣であるが、予はそれを購求する氣にもならず、但

だその中から古色蒼然たる一の巻物と、新しくはあるが醍醐寺に貯へたる論語の臨寫本二卷を撰出し、その代價を問へば、論語二卷、古文書一卷合せて四圓といふ。予は其儘買取つて歸した。

併しその卷物が如何にも古色蒼然として、初には室町時代のものであると思ひ、やがては鎌倉時代では無いかと思ひ、更にこれを諦視すれば、猶ほ上代に遡るべきものと思へたが、予は甚だ恥しきことであるが、それ迄『祕府略』の何物たるを知らなかつた。其處でそれを大槻如電氏に質したに、如電氏は別紙の如く答へた。

『祕府略之作者

滋野貞主

大日本史百二十七卷に有之申候。活字本では十四册目也

右は卽答申上候。』

此に於て予は初めて此書の何物たるを知つた。卽ち別紙に就いてこれを見よ。

『前日野田屋小僧古文書一包を齎らし來る。予匆忙の際之を瞥見し、祕府略第八百六十四一卷子を抽んで得たり。蠹蝕破損多しと雖も、古色蒼然其の足利氏若しくは以前の古鈔たること以て知る可し。仍て之を留置し、更らに論語卷子本二帖を合し、四圓にて購求したり。予祕府略の何人の著たるや

を詳にせず。之を大槻如電氏に質す。別紙の答書を得たり。更らに人名字書によりて著者の履歴概略を記すれば、別紙の如し。之によりて考ふるに、此書の成る天長八年にあり。今を距る實に一千七十八年也。此巻子は□□□より出でたりと聞けば、或は□□より逸出したるにはあらざる乎。而して紙質字體よりすれば、或は當時のものにあらざるなき乎。然らざるも、當時を距る甚だ遠からざるものにあらざるなき乎。予は此の巻子本が寔に罕覯の珍物たるを識認するに於て、毫も疑を容れざる也。

明治四十一年九月十一夕　蘇峰學人』

惟ふに海内祕府略一千巻中にて、その原本の存するものは、纔に二巻、他の一巻は前田家にある。それは八百六十八巻布帛の部にして、予の所藏は八百六十四巻百穀の部である。此の兩部は、京都の或る公卿の家に存したが、前田家の好事家松雲公が求めた際に、多分兩者の中の一部を止め置き、他の一部を與へたものであらう。

而して欲目かは知らぬが、予の有する方が、巻子の裏にも多くの文字あつて、前田家のものよりも更に一等を擢んでてゐる様に思はるゝ。固より兩者は千巻中の二巻にして、同時、同物に相違無け

れ共、兎も角もそれを三四圓にて掘出したと云ふことは、予に於ても全く意外とせねばならない。今日に於て吾が成簣堂の尤物は全くこれを以て横綱とせねばならぬ。此の如きものは、力めて得べきもので無く、全く向うから運が廻り合せて來たものと、云はねばなるまい。

又た此に一の話あり。それは明治四十二年十月八日の午後、大槻如電翁より來簡あり、古銅印の賣物あるから、欲しければ早く來れといふから、予は豫ねて大槻翁とは懇意の間柄であつたから、閑を偸んで翁を淺草の宅に訪ふた。

翁は予を見るや否や『親類の者が賣拂ひ度しとて予に托したり。これ見よ』とて、印篋一箇を示す。即ち支那製なり。その中に銅、玉、石の印大小二十九箇あり。外に風呂敷包あり、それを解けば古文書が出で來る。その內には『本朝文粹一卷』背面古文書高山寺の印あり。『醫心方一卷』『佛頂抄一卷』背面古文書。又た天平勝寶、東大寺古文書あり。『作文大體』背面古文書。仁平古寫大般若經一卷。明惠上人筆『光明眞言句義釋聽集記二』。成唯識天安年號ある春日版一卷。後伏見帝祈願文一軸あり。

如電翁は『君が不要なれば、早稻田の市島謙吉に賣る積りだ。代價百圓だが、卽刻返事しろ』と云ふから、予は一議にも及ばず、之を購ひ求めて、直に總てを車に載せ携へ歸つた。

如電翁は斯の道に於ても、凡有ることに於けるが如く、大家として知られてをれば、翁の手から翁

の言出し價で予が讓受ることとは、決て不都合はあるまい。併し予は實に予の幸運なるに驚いてゐる。印には左程結構なるものは無い。印よりも寧ろその印箱の方が有難いが、附屬の古文書に至つては、實に涙の出る程有難い。この『醫心方』は、實に丹波康賴の原本にして、その一卷は婦人病に關する、特に產科に關する一卷にして、說明と共に多くの圖畫がある。恐らくは全部の『醫心方』の中にて、最も大切なる一卷であらう。この一卷に就いては、楊守敬も『日本訪書誌』に於て認めてゐる。これは先づ予の『秘府略』に次ぐ大切なる一卷である。『本朝文粹』なども亦た勿論であつて、予は當時の代價としても、その十倍位は相當であり、如何に安く見積つても、五倍位は當然であると思ふた。如電翁は予が言ひ價にて買受けたから、頗る滿足の態であつた。

予は如電翁から種々の誨を受けたが、それよりも猶に有難く感じたるのは、如上の珍書、珍文書を予に告げ知らしめ、予に渡したことである。猶ほ此の中に一部の印譜があつたさうだが、それは必要の事情があつて、河井荃廬氏に讓渡したとのことであつた。

併しその印譜などは如何樣にても差支無し。これが偶然予の所に舞込んだことは、實に淺草觀音の御利益と云ふも不可無いであらう。

十二　朝鮮を經由せる支那本と朝鮮本

凡そ日本に書籍の輸入せらるゝは、普通の貿易の經路をとるばかりで無く、隣國に事變あれば、その事變の爲に來るものが鮮く無い。例へば日本に於ける珍書の一斑は、豐太閤壬辰の役の賜である。その役には朝鮮王宮は勿論、凡有る所から書籍を、戰利品の一として齎し來つた。その中には北宋版と云ひ、若くは北宋時代の高麗版といふ種類の書が、若干ある。予も『說文正字』の一卷を所持してゐる。

猶ほ恐らくは明末に於ける戰亂の際にも、日本に輸入し來つたものが、若干あつたであらうと思ふ。明治時代に至つては、前にも記したる支那團匪の亂、即ち明治三十三年役の如きがそれであり、それから明治三十七八年の役後、日本が統監府を朝鮮に置くに至つて、從來朝鮮の書籍は、これを求むるに容易で無つたものが、續々解放せらるゝに至つた。

而て東京に於ては、村口、磯部等の連中が、朝鮮に出掛けて、その書籍を齎し歸つた。予はこれをその機會に於て鮮からず購求した。元來朝鮮の學者は、概ね朱子學者であつて、朝鮮の兩班等の藏書

と云へば、先づ概して朱子學の本であつた。

從つてその藏書の種類も、必しも多く無く、謂はゞ型に入つた本ばかりであつたが、支那の嘉慶、道光頃、阮元、翁覃谿等の學風が朝鮮に入つて以來、朝鮮人にも古學を嗜む者出で來り、從つてその藏書にも若干の變化を來した。又た舊家には明時代に朝鮮に輸入したる書籍も鮮く無い。

中には明の朝廷から、朝鮮の國王に贈られたる書籍もあつた。從來朝鮮本と云へば、非常に高價のものであつたが、それ以來朝鮮本は、殆ど顧る者も鮮き様になつた。而して却て朝鮮から輸入し來れる、支那の書籍を重しとする様になつた。

即ち予に於ても寧ろ朝鮮本よりも、朝鮮を經由したる支那本を、より多く求めた。恐らく今日に於て予の藏書の大部分とは云はぬが、重なる部分は、村口、磯部その他の手を經て、朝鮮から購ひたるものである。

而してそれよりも澤山あるのは、予が明治四十三年九月以來、予は朝鮮京城なる「京城日報」の監督を依賴せられ、爾來一年數回、京城に赴き、又た數日若くは十數日滯在することになり、それが大正七年迄年々繰り返へされたから、その間暇ある毎に購ひ求めたものも鮮く無い。從つて勢ひ支那の書籍ばかりに限らず、朝鮮の書籍にも及ぶことゝなつたが、當時は朝鮮人の全集などを買ふ氣になら

ず、殆どそれを看過したが、愈々『近世日本國民史』を編纂し、朝鮮役に至つて、頓に朝鮮人の作つたる書籍の中に有益なる史料あるを知り、今更ら當初にそれ等の史料を豫め求め得なかつたことを後悔したが、しかも尚ほその際に、それ〴〵手を廻して集めたから、從つて支那を經由して朝鮮に至りたる書籍の外、朝鮮の書籍も、予の藏書に於ては、恐らく鮮くあるまいと思ふ。

但だ朝鮮に於ける朝鮮の書籍は、何れも壬辰の役後のもの多くて、古き朝鮮版は、却つて日本に於て多く發見せられたのは、又以つて如何に壬辰の役が根こそぎに朝鮮から書籍を引攫へ來たかを知ることが出來る。

第二十章　自らを解剖す(上)

一　少年の心と反抗の精神

如何たる巧妙なる畫家でも、自畫像を描くことは、容易でない。固よりレムブランドなどの自畫像もあるが、彼が描いた他人の像よりも、自畫像の方が優秀であるとは云へない。予自らに就いて、云はんと欲する處、語らんと欲する處、甚だ多いやうであつたが、いざこれを云ひ、これを語らんとするに於ては、茫漠として、捉へ得る處が無い。

但だ聊か他の人では、十分洞察が出來無いであらうと思ふ様なことを、重複の點があるかも知れないが、自ら語りて置く。併しこれを語りたればとて、何の役に立つ乎、予自らこれを知らず。

孔子は「七十にして心の欲する所に從へども、矩を踰へず」と云つたが、予は今、七十を既に過ぎたが、今猶ほ矩を踰へざることの出來ないばかりか、猶ほ少年の心を失ふことが出來無い。これは予

にとつては、一面甚だ不幸である様であるが、他の一面に於ては、寧ろ仕合せである。

何んとなれば、少年の心を失はないといふことは、多少の活力の餘剩を意味することになるからだ。扨て少年の心の中にて、種々點檢して見れば、その中にて最も重なる一は、反抗の精神である。世の中には事大主義者と、反抗主義者と、又た臨機應變者とある。或はこれを無頓著者と云ふことも出來よう。

予は何れかと云へば、寧ろ反抗者である。固より大勢に順應するといふことは、横井小楠の學問の本旨であつて、その傳統の學問に依つて養はれたる予が、大勢順應に眞向から反對すべき理由は無い。併し所謂る大勢なるものも、その尖端を行くものは、勢ひ小數たらざるを得ない。

從來予は大勢順應者であつたが、常にその尖端を行くことを力めたからして、その時々に於ては、大勢反抗者の如く見えたのである。例へば春の氣分は冬に出てゐるから、冬に於て春の氣分を說くといふことは、道理は大勢順應に相違無きも、實際から見れば、苦寒嚴雪の時に、百花爛漫の時を說くは、反抗と云はざるを得ないのである。

斯る次第で、世人が平民主義を說かざる時に、平民主義を說き、世人が宗教の自由を說かざる時に、宗教の自由を說き、世人が婦人の解放を說かざる時に於て、婦人の解放を說いた如き例は、一にして

足らない。

斯く云へば、予は常に先走りのみをする様に見ゆるが、予自身としては、非常なる保守性を持つてゐる。予は本來保守黨であつて、教育に依つて急進黨になつたのではない乎と、自ら思ふ。一生の間常に革新とか、改革とかいふことのみを口にして來たが、予の日常の生活は、悉く保守である。世人は『衣は新たなるを喜び、友は古きを喜ぶ』といふが、予は友の古きは勿論、衣でも新きよりも、古き方を好む傾向がある。

執著などといふことは、大丈夫の屑しとせざるところであるとは、百も承知であるが、予は何事にも執著の癖があつて、自らそれに打勝つことの、容易で無いことを感じてゐる。正直に云へば、一切の過去をさらりと水に流すとか、忘却するとかいふことは、予には絶對不可能では無いが、頗る困難のことである。

予が少壯より中年における、予の反對者は、常に予を以て、一種の輕薄才子のやうに評判してゐた。何んと評判されても、此方は別にかまふことは無いが、併し事實は恐らくは、眞を誤つてゐると思ふ。縱から見ても、横から見ても、表から見ても、裏から見ても、若し予の缺點、若くは過失といふものがあれば、輕薄といふよりも、寧ろその反對でありはせぬかと思ふ。卽ち餘り物事に執著しすぎるで

はあるまいかと思ふ。
　いざ旅行となれば、輕裝で出掛ける。愈々となれば裸で道中もするといふ樣な氣分は、愈々一大決心をする場合には、なり得ないことも無いが、出來得る限りは、身に負へるだけの、總てのものを背負ひつゝ旅行するといふのが、予の本色である。
　予は常に自ら若し予が過去の執著より、自由なるを得たらば、予は今少し世の所謂る成功家となるであらうと思ふが、予が世の所謂る成功家と趣を異にする所以は、予が輕薄才子たらざるところにありはせぬかと思ふ。
　凡そ世の中には、大事を手輕く扱ふものがあり。小事を重大に取扱ふものがあり。又た大事は大事、小事は小事と區別する者がある。予の理想は即ちそれである。併し自ら行ふ處を見れば、大事を大事と取扱ふはよいが、動もすれば小事さへも、餘りに大切に取扱ひ、その爲に自分自身を、餘計の苦勞と、餘計の苦痛をせねばならぬ仕末に立至らしむるが如きことも、これ迄皆無で無つたと思ふ。
　予の父はつまらないことまでも氣にかけて、可成り心配する性分であつたが、母は全くその逆であつた。如何なることに對しても、泰然自若として、これに應じた。予は母の餘り度胸のよきに閉口し、又た父の餘りに小心翼々たるに閉口し、出來得べくんばその中和を得んことを力めたが、孰れかと云

へば、父の方が六分で、母の方が四分位の割合ではあるまいかと思ふ。
自分は正直の所、今少し無責任になつたらば、如何乎と思ふてゐるが、どうもそれが出來兼ねる。

二　反抗心と優越心

人或は予の如く順境に育ちたる者が、一生反抗兒で終るといふことを、不思議と思ふであらうが、それには多少の理由がある。人間は矛盾の動物である。予の如きもその原則を免かれないのみか、寧しろ最も甚しきものであらう。

それは一方では餘りに順境に過ぎたるが爲に、その方の影響を多大に受け、他方には逆境とは云はぬが、種々の境遇によつて、反抗の精神を旺盛ならしめた。

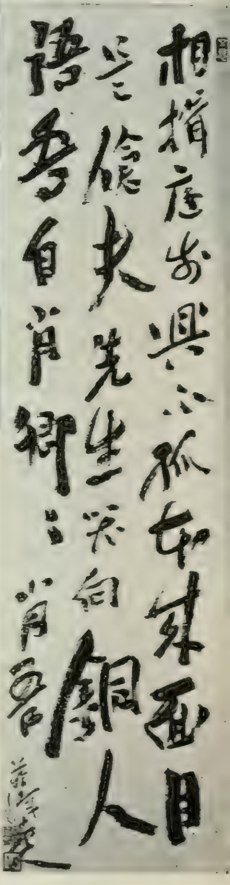
予が生れたのは文久三年正月二十五日で、物心のついたるは、明治初年である。其頃は未だ階級觀念の最も盛んなる時にて、初からそれが頭に浸込んで來た。予が成長したる肥後葦北郡水俣には、尠く共予の家よりも他に、二個のより以上と認めらるゝ家があつた。この事は既に前述したが、一は代々御總庄屋の深水氏にして、此の家よりは藩主細川家の御部屋樣を、數回出してゐた。知行も幾百

石か貰つてゐた。その次が予の本家の德富氏である。これは中小姓格であつて、予の家は所謂一領一匹といふものであつた。平生は何等の差別も無つたが、正月になれば、本家の門松は五段の枝を備へたるものであつて、吾家の門松は、普通の松であつた。第一それが癪にさはつた。

明治三年八歲にして熊本に出たが、熊本では第一に本來の熊本人と、地方より出で來たれる者との差別が、甚しかつた。所謂吾々は在鄉の者と唱へられてをり、且つ第二には士族と然からざる者との區別が甚しかつた。即ち在鄉者及び輕輩、この二つの名目は、予が子供心にも甘受するを、欲せざるところであつた。

思ふに普通の子供心ならば、飾松の枝が三段になつてゐようが、五段になつてゐようが、其等に餘り頓着するものはあるまい。又た在鄉の者と云はれ樣が、輕輩と云はれ樣が、予の父は熊本藩の役人として、尠く共中以上にあり、藩知事の御覺えも、最も目出度き一人であつたからして、それ等のことを彼是念頭にかくる必要も、無つたであらう。

然るに如何なる譯か、侍などと云ふ言葉が頗る癪に障り、それ等の考が何時の間にか予に所謂る平民主義なるものを、湧出さする樣になつたのではあるまいかと思ふ。それから熊本にて各所の學校や、私塾に赴いたが、何時も其處では長幼の序を正し、年少者たるの故に、常に自分は損をしてゐ



山王草堂庭園に建つ胸像に對す

相揖庭前與不孤。
本來面目是傖夫。
先生笑向銅人語。
吾自背卿卿背吾。

(上)

平福百穂畫伯筆　青山草堂　明治三十二年より
大正十年迄の翁の舊居　現在は青山會館と爲る

(下)

平福畫伯筆　相州逗子の老龍庵
淇水先考夫妻養老の別業

る樣な心地がし、自ら年の不足なるを呪ふたことが屢ゝあつた。

京都の同志社に入つてからは、先輩連中が、所謂るバイブル・クラスと稱して、恰も羅馬のパトリシアンの如き位置を占めたるを見て、彼等何者ぞといふ樣な感情が起つた。それから東京に出で、軈て故鄕に歸へり、私塾を開いたが、その目標は常に官學であつた。卽ち官學何者ぞといふ氣分になつた。追々年をとるにつけて、薩長人士の威張るのと、大學連中の橫暴たるとが癪に障つて、恰も藩閥打破、學閥打破、此の二つが自分の天職であるかの如く考へた。

段々年をとつて來て、二十七八年役に、三國干涉の苦き經驗を嘗め、その爲に露國何者ぞといふ考を起し、三十七八年以降、米國との關係に就いて、米國何者ぞといふ考を起し、廣く世界を見て、白皙人士の威張るのが癪に障り、白皙人士何者ぞといふやうな考も起し、一生唯だ相手を持つて暮すといふが如きことになつたのは、自分ながら如何にも愚かなことゝ思ふ。併しながら、顧つて考へれば、予をして今日あらしめたのも、又た此の刺戟であらうと思ふからして、予は寧ろ田舍の鄕士に生れたるを感謝し、極東の日本人に生れたるを感謝し、予自身の境遇に、徹頭徹尾感謝已む能はざるものである

これと反對に予が順境に育つたといふことは、第一家庭が圓滿であつたといふことである。尤も

予の家は、富の程度から云へば、予が成長する頃は、無論下り坂となつてゐた樣であるが、併しそれは富だけで、家としての位置は、祖父の時代よりも、父の時代に更に昇つたことは、間違ひ無い。從つて何れの學校に赴いても、私塾に出入しても、尠く共尋常以上の待遇を受けた。特に予の父母は、予の教育には、最も心を勞したものと覺えて、先生への附け屆なども、恐らくは他に比して手厚かつたものと見えて、必ずしもその爲ばかりでは無つたらうが、何れの學校でも概して、別段とは云はざる迄も、それに幾き待遇を受けた。

而して予の日夕交るところのものは、概ね父の門下生の類であつたからして、子供ながらも餘り粗末には待遇され無つた。そのことが予の一生に附纏ふてゐる。卽ち如何なる場合でも、世間並の待遇を受けては、何やら物足らぬ感がする。自分だけは何時もお山の大將で居なければ、滿足が出來ない樣な感がする。これは恐らくは予の一生にとつて、尠からざる不幸であり、予が他人と共同して仕事をなす上に於て、縱令その感を相手に與へざる迄も、予自身として斯く感ずることは、必ずしも予の幸福を增進する所以では無いと思ふが、併しこれも亦た致方無い。

卽ち以上のことを縮めて云へば、一方では反抗心が勝ち過ぎ、他方では優越心が勝ち過ぎ、優越觀念も無く、反抗觀念も無く、明鏡止水、一切平等といふ心地には、容易に達しがたきことで、今尙ほ

一生の中に、せめてかゝる心地に到達したいと、精進自ら已む能はざるところである。

三　肉體的臆病と精神的勇氣

勇氣にも幾樣の種類がある。これを大別すれば、肉體的の勇氣と、精神的の勇氣に、區別することが出來るかも知れ無い。例へばセシル・ローヅの如きは、非常なる大膽の人であり、喜望峰からカイロ迄、亞弗利加從貫鐵道などを計畫したる人にて、いざとなれば一身を挺して、獰猛なる蕃人の酋長と、直接談判するなどのこともあつたが、併し聞く處に依れば、なか／＼用心深く、野營などには、必らず火を焚き、猛獸の來り襲ふを避け、又た寢る時には決して端に寢ず、自分は眞中に寢ることにしたと云ふ程である。

予は敢へてセシル・ローヅを以つて自ら比較するでは無いが、子供の時から神經的に臆病者であつた。それは極めて幼少の時に、夜一人寢るに、屢ゝ何やら物に襲はれるが如き心地をし、布團を打被り、目をつぶつてゐるのに、その眼前に種々恐ろしきものが徘徊するやうな氣持がして、なか／＼寢つかれ無い。又た少し物心のついた後には、夜中に屢ゝ眼を覺し、何時も泥棒が入りはせぬかなどと

いふ懸念があつて、一寸した風の音にも、雨の音にも驚くといふ如き、臆病と云はん乎、神經過敏と云はん乎、自分ながら愛想がつきる程の者であつた。

子供の時村塾に於て、札貼りといふことがあり、塾より遠くにある神社に、札を貼る催があつたが、然る場合には、予は頗る困却し、年長の者と相談し、その者を護衛に連れて、自ら札貼りに出掛けたことがあり、自分では餘程上手くしすましたりと思ふてゐたが、他の一人は、翌朝人の未だ起出でざる前に――誰もまだ知らない中に出掛けて札を貼り、恰も昨夜眞夜中に貼りたるかの如き顔をしてゐた者もあつた。

それに比べれば、予の遣り方は聊か負けてゐるが、兎に角予が臆病者であつたことは、これでもわかる。予は幽靈とか、化物とか、狐とか、狸とか、怨靈とか、種々のものを信ずる程の者では無つた。何れかと云へば、子供の時から多少理智に長けてゐた様であつたが、併し不思議に臆病神に取憑かれてゐた様であつた。

併しそれはさうとして、一度決心すれば、隨分思切つたこともした。予が未だ十代頃のことであらう。父に連れられて郷里に赴いたが、何やら氣に喰はぬことがあつて、二十五里の道を、しかも有名なる三太郎の峠を一人で越え、さつさと熊本に歸り、當時予の祖父が熊本に居たのを、驚かしたこと

がある。

予が十八歳頃であらう。東京の新富座に於て觀た芝居、それは由利八郎といふものが、味方の機密を洩したとて、泉親衡、其他が、夜押込んで、それを打討るといふ芝居で、多分由利は先代の菊五郎で、泉は先代の左團次であつたと思ふが、予はその芝居を觀てから急に恐しくなり、それが動もすれば眼の前にちらついて、寢てゐる中に他から襲はれては、何人たりとも抵抗は出來無いといふ考を持ち、寢てゐても油斷はすまじきものなどといふ、つまらぬ了見を起したことがあつた。

今日では左樣なる考は、殆ど煙散霧消してゐるけれ共、少壯の時には、隨分左樣なる考もあつた。予の勇氣を試したのは、恐らくは二回の燒打であつたであらう。有體に白狀すれば、予は平氣でその間を驅廻つたといふことは出來ない。予にも恐ろしいといふ觀念は、恐らくは人一倍あつたかも知れぬ。

併しながら、此は男のふん張るところと觀念してからは、縱令如何なる憂目に逢ふとも、ゆめさら怯むことは無い。

又た予には、關羽が華陀といふものに、腕の療治をさせつゝ、平氣でやつてのけたといふやうな意味の勇氣は、甚だ乏しい。外科の療治は固より、一本の齒を拔くことさへも、予には億劫である。一

寸傷をしても、人並以上の痛さを感ずる樣である。併し一度觀念をすれは、如何なる大手術であらうと、將た如何なる危險であらうが、別に予を驚かすものは無い。

それを平たく云へば、本來臆病ではあるが、意志の力もて、それに打勝つとでも云ふべきであらう乎。予は所謂る道義上の勇氣といふものに就いては、一人自ら多量に持つてゐるとは思はぬが、併し未だ多く人後に落ちないといふことを、確信してゐる。

四　金錢問題と予

◇大禁物の借金

話代つて、予と金錢の關係を觀察して見よう。予は曾つて非常なる蓄財家と稱せられてゐた。予に『潤屋先生』と名をつけた新聞があつたが、それは予が未だ三十代になるか、ならぬかの時であつた。潤屋と云ふは、『徳潤レ身、富潤レ屋』といふ大學の言葉からとつたものであらう。

又た予を卑悋などといふ者も鮮く無つた。曾つて青山會館創立の際に、寺尾亨氏が演說をした時に、予て國民新聞は貧乏であるが、徳富氏は富んでゐるといふことを聞いた。然るに今度は奮發さ

れて」云々といふ樣な話もあつた。予は今迄一々それ等のことを辯解せんとする者では無い。併し明白なる事實を語らねばならぬ。

成程予の著書及び雜誌などは、世間が驚くほど賣行が良かつた。而して予自身は別に贅澤をするでも無く、粗衣粗食とは云はぬが、生活には案外質素なる程度に、切つめてゐた。されば何人も自然に予は金持となるべき者であらうといふ想像が出で來るは、寧ろ當然のことであらう。それが思ふた程金持で無つたといふことは、寧ろ不自然のことゝ云はねばなるまい。

予は生れながら金の匙を銜んで、母の胎内から出で來つた者では無いが、少しも吝くさくは育てられ無つた。殊く共吾家に於ては、吾父に次いで、第一等の資格者として待遇を受けた。子供の時から予が望んだことに、未だ曾つて否まれたことは無い。寧ろ子供の時に揚ぐる凧などは、わざ／＼四十餘里の海上を隔てたる長崎より、取寄せた位であつて、普通士族の子供に比れば、寧ろ贅澤であつたかも知れ無い。

予の母は大體に氣が大きく、こせ／＼することが嫌で、特に金錢などに於いては、最も淡泊であつた。父はそれに比すれば、細心であつた樣だが、併し時と場合に於ては、向不見に贅澤をした。時としては餘りに奮發し過ぎて、後悔したことがあつた程だが、それでも吝くさくは無つた。

予の成長する時分は、德富家と云へば、凡有る客を優遇することを以つて、有名なる家であつた。取りわけ親類等は猶更らであつた。矢島叔母、横井叔母などは、態々水俣に來て、長く逗留してゐた程であつた。

されば境遇から云つても、敎育から云つても、予は卑悋の人間となるべき理由は、毛頭無い。但だ予は子供の時から執着力が多くて、如何なるものでも、それを粗末にすることが嫌ひで、極めて莫迦々々しき話ではあるが、すり減らして草履の如くなりたる下駄をば、東京から携へて、大分から阿蘇山脈を越えて、熊本の吾家まで齎し歸つたことさへある。

卽ち一枚の紙でも、一杯の水でも、物を粗末にせぬといふことは、亦た予の嗜であつて、必要、不必要の論無く、保存するといふことゝ、愛惜すると云ふことゝは、予の殆ど第二の天性となつてゐた。或は第一の天性かも知れ無い。

併しその割に金錢の上のことは寧ろ淡泊であり、今尙ほ淡泊である。その證據と云ふでも無いが、予は隨分種々のことを筆まめに記錄して置くが、金錢の出入に至つては、偶ゝ旅行の際などは記錄し又た書籍購買の際などは、或る機會にはこれを轉賣する必要もあるべしと考へて、その書物に購入の年號月日及び代價づけを記入し置くことあるが、大體に於ては金錢出納に就いて、何等記したことは

無い。

予の一生を通じて、予の手から手に、随分多額の金錢が去來したと思ふが、それ等のことは一切何等徴すべきことは無い。

予は已むを得ざる場合に於て、例へば旅行などをなす場合などといふ時には、金錢を取扱ふが、出來得ることならば、一生金錢などには手を觸れ無いことが好きである。手のみならず、金錢問題などは、口にすることが嫌ひである。口にするばかりで無く、これを念頭に置くことさへ嫌である。即ちこれが遂に予が國民新聞社を四十餘年經營して、失敗に終つた所以であらう。自分は正しく堅く信ずるが、併し縱令國民新聞社を失つても、此の性格を失ふことは禁物である。予は寧ろ一生金錢勘定に淡泊であつたことを、幸福と信じてゐる。

予が親類、緣家一統に對して、不評判を來たした原因――その不評判の中には、恐らくは直接金錢といふことでは無いが、尠く共吝とか、何んとかいふことの意味に於ての、不評判を來たした原因――は、恐らく予が明治十三年の末、歸鄉の上、吾が家政の大改革をしたといふことであらう。實は餘りにリベラルに過ぎて、吾家は此儘では到底難船の外無しと考へたから、予は父母と相談の上、一大果斷を以て、一切のことを改革した。

即ち御馳走主義を廢め、質素、儉約、自ら給し、自ら稼ぐといふことを、原則として行く方針を樹てた。斯樣なることは、極めて誤解されやすきことにて、それが不評判の原因をなしたかも知れ無い。併し予は此の如き時代に於ても、予のなすべきだけのことを爲すことは、怠らなかつたと思ふ。例へば大江義塾を設けたのも、實は教育勞働に依つて、予が家計の足となさんと考へたことも、その一因であつたが、愈々學校を開いて見れば、却つて志あつて貧乏なる學生には、無月謝のみか、或る場合には予自らその生活さへも手傳ふ樣なことになつてしまふた。

但だ予は必らずしも、右の手に施したことを、左の手に知らしむる勿れといふ程に嚴密では無つたが、金錢に關することは、最も謹愼して、決してそれを他言しなかつたから、固より何人も知る者は無つたであらう。

予の姉の一人を予の友人である或者に娶はせんとする際に、問題は其の漢が頗る山氣ある者にて、若し彼と縁組みする時に於ては、何時の間にやら予の家もその卷添へを喰ふではあるまいかと心配する者があつたが、予は兩親に向つて「決して御心配なさるな。私が生きてゐる限りには、決して左樣のことは、致させまい」と保證した。全くその通りで、何等その爲に煩はさるゝことは無つた。

但だ時に予は援助したが、それは相手の希望する側の援助で無くて、予の方から適當であると信ず

る意味に於ての、援助であつた。

予は他よりも濫りに援助を受くることを欲しなかつたが、たゞ予の清き良心にて、安心の出來る援助は受けた。併しそれに向つて予は、それ以上とは云はぬが、それに相當するだけの報酬にした。

予の父の門人にて、常に予の家に出入する一人の漢があつた。その漢は多少と云ふよりも、多大なる吾父の庇護の下に出身して、從て予の家の家計の世話などもして呉れた樣であつたが、予が「將來之日本」や「國民之友」にて、世の中に押出した頃には、彼は非常の失敗をした。かるが故に予は予の著書や、雜誌の收入の幾分を割いて、彼の生活費に供給した。然るに彼は日清戰爭の時に、仕事が當つて、聊か成金となり、恰も予が洋行するに際して、その洋行を引受けたいと云つたから、予は喜んでその好意を受けた。

然るに歸朝後、幾ばくも無く又た失敗して困り、予に向つて頻りに事業費を相談したから、予はそれを謝絶した。併し同時に生活費だけは、予が出來得る限り貢ぐと約束し、それより十數年であつたと思ふ、當人が永眠するまで、これを繼續して缺かさなかつた。

予は新聞社の經營上には、借金したこともあるが、それは國民新聞社長としての借金であつて、明治二十九年乃至三十年の世界周遊の際を除けば、未だ曾つて個人的に借金をしたことは無い。

予は借金が大嫌ひで、借金するほどなら寧ろ喰はずに居たいと思ふてゐる。それと同時に、人に金を貸すといふことを、禁物として居る。予は明治十四年の頃と覺えてゐるが、父の命を受けて、吾家の桑苗を、島原なる士族團體の會社に賣りたるその代金を、受取るには受取つたが、途中で或る友人に面會し、その漢が餘儀無く入用ありと云つて予に相談を持掛けたから、予は懷中したる全部を渡したことがある。

斯る例は二三度あるが、固より予も豫期しなかつた通り、貸した金の返つた例は、全く無いとは云はぬが、甚だ鮮い。故に予は原則として金を貸さないことゝ、貸す程なら贈與するといふことにして置いた。

予は今その人名と、その額とを此に明記しないが、予一個としては、必らずしも少額で無い金を、用立てたことがある。斯る場合には、相手は必ず借金を申込むのであるが、予は絕對にそれを謝絶し若し此方が好意で寄與するのを、受取つて呉れゝばやるといふことを原則として、實行してゐた。これが爲に予は、如何にもつまらない煩累を免れた。凡そ友達と金錢上の關係を結ぶ程、不愉快のことは無い。一切のことをその場限りにしてしまへば、何も後に殘ることは無いから、これ程氣樂なものは無い。

併し予は自ら頭を下げて、人に金錢の相談をすることが嫌ひであるから、時としては使用したいと思ふ金錢の使用を、差控へることがある。これは予にとつて、寔に遺憾であるが、予の立場として、全く致方無いのである。

五　金錢上の失敗譚

金錢に關することにて予の失敗は、決して鮮く無い。予は前にも云つた通り、シェクスピーアの言葉の如く、借りもせず貸しもせず、金錢上には全く他と沒交渉の者であることを、理想としてゐたが、なか〱予の思ふ通りにもならぬことがあつた。

今日では多分人がその名を記憶して居る者は、多くあるまいが、曾つて議會に於て『政府が俺を買收した』とて、議場から銀行の小切手か何かを披露した、小山久之助といふ面白き漢があつた。予は別段懇意では無つたが、中江兆民翁の門人で、仲間には知られた漢であつた。

或日のこと日吉町の國民新聞社に、彼が息せき駈込んで、予に面會を求めたから、『何事か』といつたら、彼が云ふには、

一予は所謂るごくだうであるが、併し親孝行だけは、誰にも譲らぬ積り。然るに今附近の古道具屋の前を通つたのに、父の好める或る骨董を見出して、それを購はんとしたが、折悪しく持合せが無いから、甚だ申兼ねるが、用立て吳れまいか」との事であつた。

そこで予は『他のことならお斷りするが、親孝行とあれば、及ばずながら御用立てしよう』と云つて彼の望に任せた。僞乎眞乎、其後杳として消息無し。予の先輩山田武甫翁も、又た曾つて話は少し違ふが、小山久之助氏より同樣の手練にて、若干金を卷上げられたといふことであつた。

これは一例であるが、所謂る『君子は欺くにその道を以てすべし』といふやうな譯でもあらう。

併し予は金儲けとか、事業とかと云ふことには、そのことの如何に拘らず、一切無關心であつたから、その方には別に何も躓いたことは無つた。但だ友人野田卯太郎、永江純一等の經營したる、三池紡績會社に、吾父と相談の上、基本財産とも云ふべきものを加入してゐたが、會社が半減せねばならぬ場合になつたから、それが半減となつた。併し他日それが鐘紡と合併したから、その株が額面通りになつたのを待つて、それを賣飛ばしたが、若しそれを持續けてゐたならば、却つて仕合せであつたかも知れ無い。予は固より金儲けなどといふことを、頭から考へたことも無い。但だ偶ゝ著述その他から得た、聊かばかりの收入を、手元に置けば消費してしまふから『宜しく賴む』といふ意味にて、友

人等に預けたことがあつた。

但だ何れも預つた人々は、予に好意を表する人々であつたが、不幸にして彼等の財運が思ふ様に無く、中には全く損失となつたものもあり、又た中には義理堅き友人があつて、自分は失敗しつゝ、予の預り金だけは、月賦か年賦にて拂ひ呉れた者もあつた。又た中には預け主より、利殖の目的も出來ず、併せて元金さへも返金が出來兼ねると理つて來たのに對し、予が欣然帳消しにするといふことを申やつて、その欣然の二字が實に難有つたと、改めて禮を云はれたこともあつた。

但だ甚だ少額ではあるが、故村井吉兵衛氏に少しばかり預けた金が、今日でも殘つて、それが轉々して、極めて少額ながらも、日本石油會社の株となつてゐる。その他はどれがどうなつたか、忘れて終つたものである。されば予の四十餘年間に稼ぎ出したるものとては、恐らくは吾家に藏する數萬の書籍以外には、何一つ目星しいものも無い。

六　金を作る人と費ふ人

人は全く見掛けに依らぬものである。「子孫の爲に美田を買はず」と詠うたる西郷南洲は、その遺兒

の一人たる菊次郎君より親しく聽く所に依れば、極めて經濟向きには嚴密にして、用心堅固の人であつた。固より多くの貯蓄も無つたが、同時に借金らしきものも無つた。所謂る自足自給は、南洲一家の經濟法であつたらしい。

これに反して何事にも思慮周到、水も漏れず、爪も立たないといふほどの大久保甲東は、何時も金に窮して、その死後なども、寧ろ借金の整理に骨が折れて、目星しき遺產などは、殘つて居なかつたといふことである。

大倉喜八郎翁の云ふ處に依れば、自分も大久保家には、毎々金錢を用立てたが、感心のことには、きつと返濟せられたと云ふことだ。

予は甲東ほどの濶達も無く、南洲ほどの堅固も無い。謂はゞ行當り次第にてやつて來た樣なものであるが、人に金を借りるといふことは何となく非常に不愉快であり、借金といふことは、大小如何に拘らず、如何にも不愉快なる義務であるかの如く考へ、個人の經濟としては、一切これをせぬことにきめてをり、仕合はせに今日までその主義を貫いて來た。

但だこれが爲に、時としては今少し奮發して出したいと思ふ場合に、出すことが出來無つた。若しくは出すことが少なかつたのは、遺憾至極であるが、それでも無理にやり繰りをして、結局不義理の

借金となるが如きことは、寧ろ三度の飯を二度に減じても、やりたくないと思ふてゐる。

長い間世の中を渡つて見れば、泌々と金錢の力の大なるに驚き、自らこの力を有しなかつたことを、口惜しく思ふ場合がある。セシル・ローヅが「理想のみでは役に立たぬ。理想を實行するの力は富であるが故に、富を作ることを先務とする」と云つたことは、一理ある言であらうと思ふ。

若し予にして萬一富を作ろことを主としたならば、一生唯だ富を作ることに骨折つて、何事をもなし得なかつたであらう。而してその富さへも、思ふ樣には作り得なかつたかも知れ無い。又た若干作り得たとしても、殆どそれのみにて予の一生は終つたかも知れ無い。

されば予が一生を通じて、富の缺乏を感ずるも、予は寧ろ自ら擇んだる所を、後悔すべき理由を持たない。世の中に淸貧を樂しむなどといふ言葉は、已一人だけを、何の煩ひ無く暮すといふこと丈にて、苟も天下を兼濟せんとする志ある者は、淸貧よりも、寧ろ淸富を望むべきであるが、その方面に力を效すことが叶はぬとならば、寧ろ自ら長ずるところを擇んで、之に向ふが、賢明なる方法であると思ふ。

予は決して貧乏を誇りとすべきでは無いと思ふが、併し富を得んが爲に、一切を犠牲とするよりも寧ろ富を犠牲としても、自ら長ずる所のあるものを以つて、奉公を計ることが、適當であらうと思ふ。

或はこれは痩我慢であるかも知れ無い。

予は從來の遣り方を見るに、金を作る人と、金を費ふ人と、自ら分業がある樣に思はれる。世の中に大なる事業をなした者は、必ずしも金持ではない。唯だ何かの機緣に依つて、多くの金を他より集め得たのである。

例へば東大寺を再建したる俊乘上人を見よ。彼は決して金持では無つた。只だ日本全國を勸進して、その志を成した。又た一切經を彫刻したる鐵眼和尚を見よ。これも亦た同樣である。

予も亦たその通りに働いて見たいと思ふ。併し他人より寄附金を貰ふことは、自ら金を作ると同樣と云はんよりも、寧ろより以上の骨が折れる。

予は新島先生を助け、同志社の寄附金を集めた時に、泌々これを感じた。即ち國民教育奬勵會の事業、若くは靑山會館の事業なども、その類と云はねばならぬ。併しやりかゝつたことは、骨が折れても、その任にあらざるも、やる丈のことはやつて見たが、なか／＼思ふ樣には參らない。

金を作るにも才能が必要であるが、金を集むるにも亦た才能が必要である。予は何れにしても、兩つながらその方面の才能は、全く無いとは云はぬが甚だ鮮い。

又た或る人には金主なるものが出來て、此方から頭を下げて賴まぬでも、相手から頭を下げて、費

つて呉れと云ふ者も、無いでは無い。予も實は一生の中に斯る人に出會せんことを、期待せぬでも無かつたが、今分ではとても斯る注文に應ずる者は無い樣だ。己に才が無く、又た縁が薄しと云へば、元の木阿彌に立還つて、自ら諦める外は無い。

七　酒色の誘惑と予

世の中に生活を一の義務と心得てゐる者があり、又た一の快樂と心得てゐる者があり、又た義務でも無く、快樂でも無く、唯だ花が開き、花が落る如く、自然の約束と考へ、若くは斯く意識せざる迄も、無我夢中に暮して、一生を送る者もある。

予自らは此の三者の何れに屬する乎、明白に語ることが出來ぬが、併し自ら顧れば、人は一生の間に何事かなすべきもの、なさねばならぬものといふことを、初から意識して、今日に至りたることは、敢へて自ら斷言し得るところと思ふ。

但し斯る生活は、如何にも沒趣味の生活らしく思はれこが、予自身にとつては、寧ろそれが反對である。予は他人がその生活を樂しむといふ意味に於ては、必ずしも一致しないと思ふが、併し予は亦

た予の流儀として、相當に生活を樂しむことが出來、今尚ほ樂しみつゝあると思ふ。

生活を樂しむことに就いて、先づ普通の男子には、最も一般的に酒色の外はあるまい。然るに予は少年の時より、比較的嚴肅なる家庭に成長し、又た自ら友を選ぶ上に於ても、常に考慮してゐたからして、遂に此の二者の誘惑にかゝつたことは無つた。

若し斯る誘惑に罹れば、かゝり得べき機會も滿更無つたではない。例へば明治十三年同志社を飛出して、東京に放浪してゐた間は、予にとつて最も危險であつたかも知れ無い。それは予は衷心より窮屈なる同志社の生活に反抗してゐた。されば東京に來た時には、放たれたる駒の如く、何事でも爲し得べき氣分であつた。

然るに遂にその誘惑に陷らなかつたのは、何故であつた乎。予が初からその方面に趣味の無つた爲乎、それとも他のその方面に耽溺する者を見て、自らその仲間となるを屑しとしなかつた爲乎、他人のことを云ふと、如何にも笑止であるが、同志社などにて、最も謹嚴無垢の標本といはれた人が、學校を出るや、軈て世間的の快樂を人一倍Enjoyした者も、予の知り得る限りに於ても、若干ある樣だ。併し予がその仲間に伍さなかつたのは、自ら省みて、不思議と云はねばならぬ。

併しその一は予が飲酒を欲しなかつたからであらう。予は今日では先天的の禁酒家の樣であるが、

果して然るや否は、予自ら保證の限りで無い。予が極めて幼き時、予の父は往々大酒の擧句、非常に苦痛を感じてゐる有樣を目擊し、予が禁酒の願を立てたのが、七歳であつた乎、八歳であつた乎、恐らくはその頃であつたと思ふ。予の父は祖父程では無いが、本來酒は好きであつた。

祖父に至つては、酒そのものが殆ど生命とも云ふべきものであつた。されば予は生れながらにして、酒の味を知るべきであり、未だ母の膝を離れ無い前から、祖父のお流れを頂戴するが如きことは屢々あつた。然るに一度神樣に願を立てゝ以來、それが殆ど自動的に今日まで持續したのは、不思議と云はねばならぬ。

今では如何に修業しても、とても盃を手にする程の勇氣は出ない。又は遊蕩などといふことは、殆ど一切興味が無つた。予には如何なる理由か知らないが、教育の無き女性ほど、面白く無き者は無い。その教育といふ意味は、尠く共予の教養の範圍に於ける教育であつて、必ずしも一般的のことでは無い。

然るに幸か不幸か、此の如き女性に、壯年時代に遂ひに出會したることが無つた。所謂る職業婦人などといふ者は、予は初から絕對に興味を惹かず、今日などでも彼等の仲間に、萬已むを得ずして、宴會の席などにて同座することある時には、恰も鵜が烏の仲間にでも入つた樣な心地がして、唯だ不

愉快を如何なる程度まで辛抱するかといふことに過ぎ無い。

斯る次第で予は必らずしも克己の力と云ふでは無いが、殆ど自然の傾向で、酒色の二敵は、予が撃退したよりも、敵の方から予に近寄らなかつたことは、一生の上にとつて、意外なる僥倖であつたと云はねばなるまい。一層踏込んで云へば、如何に予が無教育の女性に興味を感ぜざればとて、若し相手が予に向つて、興味を感ずるが如きことあつたらば、予も亦た人並相當の弱味を有するものであるから、或はそれの爲に致されたかも知れ無い。併し予には彼等が容易に接近し能はざる、或は接近するを欲せざる、一種のアトモスフィアを持つてゐたのではあるまい乎と思ふ。

それは何故かと云へば、未だ曾つて斯る誘惑に陥づたること無く、又た陥らんとする傾向さへも見出さなかつたからである。

要するに予が無教育なる異性から、愛好せられざる性格、若くは彼等を反撥せしむる性格は、予が自ら養成したるものでなくして、自然に予に具備したるものであつて、所謂る彼等から嫌はれたことが、若くは嫌はれざるまでも、接近すべく予に興味を感ぜしめなかつたことが、予にとつては如何にも仕合せであつた。

世人は予が品行方正などといふことを以つて、予の大なる克己力に歸し、或は予を以て故らに斯く

装ふ一種の僞善者ではあるまい乎と思ふ者があるが、事實これは予が力めてなしたわけでは無い。されば固より僞善でも無ければ、眞善でも無い。予は唯だ自然の傾向に依つて、此に至つたまでゞ、悪く云へば、予が本來不器用の結果、酒からも、女からも見限られて、取殘されたる結果が、此に至つたものであらう。

八　勝負事及び遊藝事と予

生活を樂しむといふ點からすれば、酒色以外には種々の道樂がある。道樂と云ふ言葉は、少しく重きに失する樣だが、例へば碁、將棊、歌留多など、所謂る勝負事の類がある。所が予は一切勝負事をやらなかつた。これは予が勝負事が嫌ひといふ譯では無い。やらなかつた眞實の理由は、時間をむやみに潰すといふことが、主なる原因であつたかも知れ無いが、その以外に、負けるといふことが嫌ひであつた爲ではあるまい乎と思ふ。

若し予が生れつき器用であり、如何なる勝負事でも、決して他に負けを取らないと云ふことであつたなら、予は恐らくは是等の勝負事に耽けらざる迄も、それから遠ざかることは、出來なかつたかも

知れ無い。

然るに斯く遠ざかつたのは、勝負事に必勝を期し難く、必勝を期し難きことの根源は、勝負事に不器用と云ふことであり、謂はゞ不器用そのものが、予をして勝負事から遠ざからしめたのでは無いかと思ふ。

果して然からば、人生不器用に生れたる者も、又た一德ではあるまい乎と思ふ。

勝負事以外には、或は謡曲とか、或は長唄とか、義太夫とか、所謂る紳士者流にも、それぞれ遊藝に凝るといふ程で無き迄も、樂みを有する者が、無いでもない。併し予はそれ等のことに、全く無頓着である。

予の家には德利も無く、杯も無く、碁盤もなく、將棊盤も無く、煙草盆も無ければ、煙草入れも無く、纔にあるものは、唯だ應接間にある、接客用の紙卷煙草入れに過ぎ無い程だ。

それから宴會とか、交際とか云ふ如きものは、初から好む所で無く、實は人と與に樂しむよりも、獨り自ら樂むことを以つて、自ら足れりとするの風がある。斯く非社交的に出來上つたのは、何故であらう。

餘りに個人性が强過ぎて、他と融和する、要素を缺いてゐるが爲では無らう乎。併し世の中には隨

分主我的の漢で、社交的の者が無いでもない。

それは即ち餓鬼大將となることである。己が意の儘になる子分を集めて、その大將となることであるが、予は不幸にして、餓鬼大將となることも、餘り好ま無い。自ら頭を下げて、他と交ることも好まないが、他に頭を下げしめて、交ることも好まない。さりとて對等の交際などといふことも、好まない。

斯く見來れば、予は全く一種の非社交的隱遁者の樣であるが、又たそれほど隱遁者であることも好まない。要するに、予は世間の人並に、社交的の道具を持揃へてゐないと同時に、又た社交そのものを好まない。

それならば、予は生活を Enjoy することは無いかと云ふに、恐らくは人並には Enjoy してゐるものと思ふ。或は十人並以上ではあるまい乎と思ふ。併しそれは思ふばかりで、必ずしも他と比較したものでは無い。

予は音樂に就いては、何等の素養も持たない。併し若し予の心を最も動かすものがありとすれば、音樂がその主なる一であらうと思ふ。又た芝居、能などといふもの等は、決して嫌では無い。否な孰れかと云へば、寧ろ好きであると云ひ得らるゝであらう。但だ音樂とか芝居とか、能とか、それ等の

方面に、若し一度足を踏込めば、抜くことの出來ぬのみか、首まで入つても猶ほ足らぬといふことになりはしない乎と、心配の餘、寧ろこれ等より遠去かる方が安全と考へて、遠去つてゐたのである。それで今日でもよき音樂を聽き、よき能樂、よき芝居などを見れば、多大の興味を感ずる。只だ自ら用心して、深入りせぬまでのことである。

非社交的と云ふけれ共、それも亦た程度問題である。予は快心の友と相會して語るなどといふことは、最も好む所の一である。予は自己の事務所で喫飯する以外、倶樂部とかその他で、未だ曾つて己一人で食事を執つたことは無い。如何なる場合でも、他の友人二三若くは四五の人と、會食しないことは無い。又た偶ま久しく逢はない友人などの訪問を受け、眞に心から喜ぶことも、鮮くない。又た友人の書簡等を受取る時の心持も、それである。

併し惡客の來訪や、惡客の書簡などは、甚だ面白く感じない。論語に『朋友に數すれば、斯に疏んぜらる』といふ言葉があるが、五月蠅きものは、予が驩迎せざる一である。

第二十一章　自らを解剖す(下)

一　美の愛好者としての予

◇審美的精神と野蠻の氣象

予自ら考ふるに、予の如き無藝にして、猶ほ且つ生活を或る程度まで樂しむことの出來るのは、何であるかと云へば、恐らくは予が美を愛し、美を好み、美を嗜むといふが爲ではあるまい乎と思ふ。

世中には眞善美の三者があり、何れも人の生活に主要であるが、單に樂しむといふ點に於ては、美に如くは無し。然るに世間では、放縱にして、遊蕩なる生活を、美的生活などゝいふに至つては、如何にも言語道斷にて、世の中の所謂る美的生活の十中の七八は、醜的生活と云つた方が、適當かも知れない。

予が美を愛するといふことは、肉慾などに關係を持つ意味では無い。寧ろ高きと云ふ能はずんば、

廣き意味に於てのそれである。又た美を愛する人の中に、英語で云ふファステヂアス・テスト fastidious taste 氣六ケ敷き趣味とでも云はふ乎。或は潔癖の趣味とでも云はふか、斯るものがある。所謂るこれを以つて美を愛するの道とするものがある樣だが、予の見る所では、これは一種の性癖にて、或は寧ろ病的に近いと云つた方が、適當かも知れない。

美を愛好するのも、餘りに潔癖に過ぎれば、その標準に應ずるものが甚だ鮮くして、標準に應ぜざるものが、甚だ多くなり、寧ろそれが爲に生活を樂しむよりも、却つて生活を苦しむに至らないとも限らない。

さりとて予は所謂る俗惡のものを美と認め、それを樂しむことをも欲しないが、さりとて前に云つた如く、吾自ら雛型を作つて、それに當嵌まらないものは、一切これに振向か無いと云ふが如きにも、與しない。

予の美を樂しむといふは、苟も美を愛する心あれば、吾が身邊至る所に、これを發見すること難く無いと思ふ。

予は書畫骨董などにも、多少の興味を感じてゐる。中には非常に好むものもあり、中には非常に好まないものもあるが、何れかと云へば、予の趣味は寛大であり、廣大であり、從つてそれほど高尚で

無き迄も、健全であると思ふ。

且つ予はこれ等のものに向つて、何等の所有慾を離れてゐるから、唯だこれを適當なる時に、適當なる場所にて鑑賞すれば足るものにて、寔に氣易き限りである。

予は人間の作つた美術以外、造化の作つた美術を更に愛する。予は平凡の人の中に愛すべき性格を往々見出す如く、平凡の景色中に、愛すべき風景を屢々見出す。予は人間よりも、より多く天然を愛すとは云はぬが、併し予と天然との間は、非常に接近してゐる。

予は自ら手を下して庭園を造るよりも、寧ろ天が造りたる自然の庭園を愛することを知つてゐる。世人が平凡だとか、つまらないとか、くだらないとかいふ場所に、予は往々低徊逍遥止む能はざる景色を見出す。

又た予は一度見たる光景、若くは名畫などは、恰も動物が反芻する如く、時折それを眼前に思ひ浮べて、髣髴せしむることが出來る。謂はゞ予の頭の中には、凡有る種板が貯蓄せられ、時に應じてそれを現像することが出來るではないかと思ふ。

又た予には人の心の美を鑑賞するの能力を、若干與へられてゐるでは無いかと思ふ。例へば予に對する他人の好意とか、友情とかいふものに就いては、予は人一倍これを感受する。相手では何等深き

考が無く、唯だ當座自然發露したる性情でも、それを受取る予にとつては、非常なる好印象を與へ、それが何時迄經つても、消去らない條は、予が屢く感じたる所である。

それは單に予自身に關係を持つことばかりで無く、予自身に何等の關係なきことに於ても亦た、同樣である。併しこれは理つて置くが、予自身に關係したことは勿論、關係無きことに於ても、美の反對のことについては、又た人一倍これを忌嫌ふ情を免るゝことが出來ない。

それで人間の心の美も醜も、浮雲流水の如く、無頓著であつた方が、却つて一切の繫累無く、仕合せであつたかも知れぬ。併し如何に醜を厭ふ心が猛烈であつても、美を景仰する心が熾んであれば、美を以て醜に勝つことは、自然の數と云はねばならぬ。

廣く世間を見渡すに、金の落ちてゐる所は無いが、美の落ちてゐるところは澤山ある。吾々は必らずしも、金殿玉樓ばかりで無く、九尺二間の裏店にも、美を見出すことが鮮く無い。必らずしも聖人とか、聖徒とかいふ人ばかりで無く、日常應接する平凡人の間にも、美を見出すことが少く無い。必ずしも楊貴妃とか、クレオパトラとか、小野小町とかいふばかりで無く、田舍の女學校に於ても美を見出すことが鮮く無い。必ずしも世界第一等とか、第二等とかいふ程の、有名なる名所の地で無くとも、或は繪圖面にさへ、或は地誌にさへ、畫家の手帖にさへ取殘されたる所に於て、猶ほ美を見

出すことが難く無い。

唯だ美の眞中に存在して、美を知らざるは、恰も盲者が百花の中に起臥して、百花を見ざると同樣と云はねばならぬ。

以上のことは餘りに理窟つぽくなつてゐるが、事實予自身は幸にその教養と云はん乎、若くは習慣と云はん乎、或は性格と云はん乎、聊か美を見出し、美を歎賞するの要素を持つてゐるかの如くあるから、その爲に予は如何なる場所に置かれても、相當の樂みを受用し、予の心は何時も光澤を帯びて、乾燥の心配が無いではあるまい乎と思ふ。これが無藝若くは無能で、且つ社交性の餘り發達せざる予として、猶ほ生活を Enjoy することの出來る所以ではあるまい乎と思ふ。

右の如く美を發見し、若くは歎賞する心と、所謂るファステデアス・テストの反對、謂はゞ何事も大まかに、大ざつぱにやつてのける氣分、極端に云へば、野蠻の氣象とでも云ふべきものとは、容易に兩立しがたきもの ゝ樣であるが、天は仕合はせに、予に此の二つのものを惠んでくれたのではあるまい乎と思ふ。

併しこれは多分予が幼少の時より、私塾生活をなし、しかもその塾が極めて簡素質朴、平民的の極致であつた爲であらう。

何れにしても予は大體に於て、几帳面であると信ずるが、併し几帳面の極度は、ファステデアス・テストとなつて、何事も整理、整理で、室内には何をも置かず、机の上には塵一片も無いと云ふ如く、さもなくては、氣分が惡しきなどゝいふ樣な人もあるが、予は仕合はせに、それ程のことも無く、恰も大工が仕事部屋にて仕事をなす如く、凡有る使用物などを、身邊に堆高く積み上げて、頭をその中に沒して、兀々とやることを、却つて樂みとしてゐるやうな氣分があり、從つて衣服なども、固より美服と粗服との區別は知つてゐるが、强ひて特別に美服を要するほどの慾望も無く、卽ち衣食住なども全く無關心では無いが、又た餘りに關心して、その爲に多く煩はさるゝことも無く、自ら云へば餘りに誇りがましくなる樣であるが、實は良きものを良しとするだけの知識と趣味だけは、具へてゐても、その理想に全く手が屆かなければ、不愉快であるといふ程に、それの爲に捉はれる虞も無く、謂はゞ野蠻の氣象と、文明の敎養と、予の一身に於て、若干の調和を保つてゐるのではあるまい乎と思ふてゐる。

併しこれは恐らく、自惚れであつて、他から見れば、如何にも平仄のあはぬ、辻褄のとれぬ、一身に矛盾の性質を帶び、一方には非常に潔癖であるかと見れば、他方ではそれ程でも無く、一寸見れば如何にも端倪しがたき性格の樣であるが、併しその矛盾の性格が、兩立したる所に、自ら生活を樂

むことを得るわけではあるまい乎と思ふ。

二　非社交的性格の兩面

明治十三年五月、予が同志社を退校して、東京に赴く際、旅費に窮し、新島先生に借用を申込んだ時に、先生は憤然色をなして『徳富君の面の皮は、實に千枚張りである』と云はれたといふことを聞いた。これは直接に聽いたのでは無い。その話を取次いだ者から聽いたのである。

恐らくは先生も、予が先生の希望に反して、同志社を飛出すのみか、おまけに旅費までも借りて飛出すなどゝいふことは、餘りに不敵なことゝ思はれたであらう。併し予自身としては、實は先生はそれ位の寛大な心境を持つてゐる人と思ふたからだ。

決して千枚張りどころか、予はとても人並の面の皮は持たないのである。若し予の缺點を云へば、面の皮の厚いのでは無い、薄いのである。薄いために予には種々の苦勞もあり、心配もある。

斯く云へば人によつては、或は信じないであらうが、正直の所、予は子供の時から、非常なるはにかみやである。今日では千軍萬馬の間を往來して、人を人とも思はぬ位のことは、當然の習慣である

べきだが、その實今以つてはにかみやである。

甚だ恥しきことであるが、予は今日でも知らない人の家に投ずれば、何んとなく氣がそは〳〵として、落著かぬ。否な自分が知人の中でも、澤山なる知人の中に交れば、何となく逆上する樣な心地がする。子供の時には猶更らであつて、人の前に出ることが一番嫌であり、一番苦しくあつた。特に晴れの場所に出るなどゝいふことには、最も不安を感じ、その爲に今日でも出來得る限り左樣なる場所には、出掛けないことにしてゐる。大いなる宴會とか、大なる園遊會とか、若くは宮廷の莊嚴なる御儀式とかいふ樣な場合には、他人は或は愉快であらうが、予には苦痛である。

新年宴會、紀元節の宴會など、宮廷の宴會には、甚だ畏入つたことではあるが、予は概ね御辭退を申上げてゐる。又た觀櫻會、觀菊會なども、悉くとは云はぬが、成るべくだけ、御辭退申上げてゐる。

但だ特別の場合、例へば御大禮などは勿論、その他帝國學士院會員としての、宮内大臣などの招待には、當然出席すべき義務を感じて、罷出ることゝしてゐる。併しそれが濟んで宮城の門を出るときには、甚だ申兼ねたことであるが、氣も晴々とする。

予は到底野人たるを免れぬであらう。併し野人としての會合にも猶ほ同樣の感がある。つまりこれ

は非社交性の然らしむるところか、將た所謂るはにかみやの然らしむるところか、自らそれをしかと語ることは出來無いが、事實は全く今申した通りである。

斯く云へば予は人の前にて、何事も云ひ得ないかと云ふに、さうでは無い。苟も云ふべきところであり、云はねばならぬところであると決心すれば、恐らくは他の人々が云ひ得ざる、云ふを欲せざる、云ふ能はざることまでも、大膽に、不遠慮に、殆ど平氣で陳述することが出來ないことも無い。

予は如何なる因緣か、婚禮の席上に於て、演說を依賴せらるゝことが、殆ど常習となつてゐる。併しこれは決して予にとつては、愉快なる仕事では無くして、苦痛の義務である。

世の中には斯る席上にて、おしやべりすることが、一の愉快である人もある樣だが、予は全くその反對である。世間では予のテーブル・スピーチを、面白いとか云ふ人があるが、それは聽く人だけのことで、話す予にとつては、汗を絞り、絞りやるのであつて、餘り繰返へせば、命が縮まるかと思ふ程である。

從つて演說なども、多くの聽衆を相手に話すことは、予にとつては多大の神經を惱ます。それを知らない人は、予が平氣で演壇に立ち、何やら聽衆を呑んでかゝつた如き態度で話すから、演說者たる予は、寧ろ自ら面白くてたまらないだらうと思ふ人もあるであらうが、その實全く然からずで、なか

なか左樣に樂なわけでは無い。

實は勇士の戰陣に臨むが如く、渾身の勇氣を傾けて、これに當るので、一演說濟めば、恰も重荷を降ろした如き心地がする。英語で所謂るセンス・オブ・リリーフ（sense of relief）の感がする。

予を知らざる者は、或は予を以つて陰險といふ者もあつた樣だが、予自身としては、陰險らしき所は無いと思ふ。唯だ所謂るはにかみやにて、云ひたいことも容易に云はず、聽きたいことも容易に聽かず、大概のことは自分の一心に藏ひ置く爲に、自然陰險とでも云はるゝ樣な仕末になりはしなかつたかと思ふ。

しかのみならず、つまらないものと、つまらない議論をすることは、役に立たぬと考へるからして、如何なる自分の氣に喰はないことでも、或る程度までは聽流して置くからして、その人は予がそれを贊成したかの如く誤解し、他日予がそれと異りたる辯論をなし、又た行動をとれば、何と無くその人を裏切つた如く思はれるだらうが、予は初から予の態度をきめておいて、唯だその必要なき場合には、强ひて他と爭は無いまでだ。

予は少年の時から、自分の云はんと欲するところだけは、その必要を認むるに際しては、十分と云はんよりも、十二分に述べ、一度でも、二度でも、幾度でもこれを繰返へすといふことに就いて、何

等自ら不便を感じ無いが、さりとて他人と意見を戰はすといふことは、得意でも無いが、又た好むところでも無い。

予は予の云ふだけのことを、云つて置きさへすれば、賛成する人は賛成し、反對する人は反對すると思ふから、強ひてその反對者まで、賛成せしむる必要を感じ無い。又た如何に他人の說を論駁したとて、その效能を覿面に見るなどゝいふことは、到底容易のことで無いと思ふから、予は強ひて左樣なることを爲さない。

但だ予の主張だけをして置けば、自然それに反對する論駁となる結果を來たすから、必らずしも當初から、論駁を目的として言論を戰はす必要はあるまいと思ふてゐる。謂はゞ予は議論を好むが、討論は好ま無い。

特に枝葉の末に拘泥して、意見を戰はすなどゝいふことは、一種の浪費にして、何等必要は無いと思ふから、予は長い間論壇に立つてゐるけれども、未だ他人の說を攻撃したことも無く、又た攻撃されたりとて、それに答辯したことも無い。併しこれは予のはにかみやから來たものでは無くして、寧ろ予一個の流儀から來たものであらうと思ふ。その流儀は、吾は吾、汝は汝と云ふことである。

三 粗枝大葉とエネルギーの經濟

世の中には何事でも頭を突込めば、それから拔出すことの出來無い者もある。又た一度手を下せばそれを徹底的にやりつけねば、安心が出來無い者もある。又た何やかや手當り次第に手をつけて、その儘放つたらかす者もある。予は前者でも無く、將た後者でも無い。予は自ら自分の力の分量を、豫じめ測定してゐる故に、如何に自分の趣味が廣くあればとて、それに打込んでゆくといふことは、大なる危險であるといふことを考へ、趣味は趣味、研究は研究といふ事で、自ら制限を立てゝゐる。自ら點驗し來れば、予の一生の間に、若し聊か取るべきものがあつたとしたならば、吾力を量つて多くも無き精力を、分散せしめ無いといふ點であるかも知れ無い。つまり分散せしめ無いといふことは、言ひ換ゆれば、その精力を集中して、或る一方面に傾くことである。

世の中には大觀派と、細條節目派がある。慾を云へば、二つながらその宜しきを得るに如くは無い。されど若し兩者兼ね備ふることが出來ぬとすれば、何れを執るべき乎。予は常に斯る場合あるを豫期し、その場合には後者を措いて、前者を執らんとする者である。

即ち文章を書くにも、學問をするにも、予は終始此の主義を一貫してゐる。昔の人の言葉に『些細の注意は、全備の效を爲す。全備の效は些細のことで無い』といふが、これは寔にその通りである。人間誰か完全無缺を欲せざらん。

予の不敏を以てしても、衷心それを欲してゐる。併し若し兩者兼備ふる能はざる時には、何れを執らん乎、大乎小乎、予は縱令精美の效を缺くも、粗枝大葉を免れざるも、大體に於て、その宜しきを得んことを欲してゐる。

昔の人の語に『大德は閑を踰えず、小德は出入して可也』とあるが、これは單に大德、小德の場合のみならず、學問の上にも、藝術の上にも、趣味の上にも、處世の上にも、皆なその通りであると思ふ。それで予は第一己の力を量つて、むやみに手を出さないこと、第二手を出したることでも、己の力を量つて、大を執り、小を捨つることにしてゐる。

例へば予が『近世日本國民史』などに就いても、常に期する處は、大體の觀察に於て、間違無きことである。場所の詮議、時の詮議など、詮議をすれば、數限りも無い。

世の中には、或る天皇の御陵の詮議で一生を暮し、然も猶ほその效を全くする能はざる者がある。

予は決してそれを無用とは云は無い。唯だ予自身が左樣なることには、力を費さずして、寧ろ歷史そ

のもの〻本體に就いて、力を效さんことを希望するまでゞある。

これを要するに、若し予の一生に何事か爲し得たるものがありとすれば、それは予が勇猛精進の力と云はんよりも、寧ろ予が力不相應のことを爲さず、興に任せ、八方に手を出さず、如何なる感情が湧いても、又た如何なる周圍の壓迫に際しても、予は自ら予が爲し得る限りの範圍を定めて、それを限定し、その限定の範圍を踰ゆることなからんとするが爲であらうと思ふ。

斯る次第であるから、或人から見れば、予は如何にも主我的であり、自己本位であり、相互扶助の感情乏しく、同情心薄く、所謂る義俠などゝいふことの、極めて緣遠き者のやうに思はるゝが、その實予の自然の傾向から云へば、聊か一片の俠骨を持たぬでは無いが、むやみに仁俠を振りまくことは、予の柄で無いと信じ、枉げて自ら抑制して、自己は唯だ自己の爲すべきことを、なすに止め置く次第である。

斯る次第であるから、例へば文章なども、テニヲハなどは、別段關はないことにしてゐる。餘りそれ等にのみ骨を折れば、或は文法から見れば、間違ひなき文章かも知れないが、死文となり終つて、到底人を動かすことは、出來ぬと思ふからである。

又た詩などは好んで讀み、又た時としては作ることもあるが、併し餘り深入りする時には、その爲

に予の精力を割くの處があるから、自ら素人藝たることを甘んじ、强ひて玄人たることを學ばないわけである。必しも負惜しみを云ふて、自ら是なりとするでは無いが、予の心持は詩人として世に立つ望は初から無いからして、專門的に詩を學ぶ必要を認めぬのである。

又た書なども自ら書くことは兎も角、これを鑑賞することは、敢へて人後に落ちぬが、併し自ら書家となることは、眞平御免と云はねばならぬ。何故なれば、これが爲に餘計な時間を費し、餘計な精力を費し、吾が爲すべき仕事を妨ぐるからである

予は自から意志の鞏固なる者とは思は無い。併し天性鞏固ならざるにせよ、成るべく鞏固にやつて見度いと考へてゐる。それは及ばずながら、豫め或る目的を立て、その目的に向つて全力を竭し、その目的を妨ぐるもの、若くは目的に何等の關係無きものは、なるべくそれを切拔け、成可くそれを篩ひ落し、唯だ生粹の予の目的に副ふものに向つて、力を效したいと考へてゐる。併しそれは唯だ理想であつて、自ら考へて來れば、これ迄とても多くはつまらないことに時と力とを費したといふことを、否定することが出來無い。

但だ若し初から此の如き決心をしなかつたなら、予は今に到るまで、何等の爲すべきことも爲さずに終つたかも知れ無い。然も詮じ來れば、是亦た予の精力の薄く、且つ乏しくして、古人の所謂る多

多益々辯ずる』能はざる爲であつたと、云はねばなるまい。

これは予として決して誇るべきことでは無い。寧ろ恥べきことであつたかも知れ無い。

四　壓迫に對する戰鬪的精神

何人にもある如く、予にも亦た多少の競爭心はある。併し世の中には無限の競爭心を持つ者があり、有限の競爭心を持つ者がある。例へば佐久間象山の如きは、無限の競爭心を持つてゐた人と云ふても差支あるまい。彼は詩を作つても、文を作つても、字を書いても、馬に乘つても、砲術をしても凡有る方面に於て、それ〴〵專門家と對抗するだけの競爭心を持つてゐた。或は藥の詮議などは醫者も及ばない程であり、琴を彈ずることなども、一通りは心得てゐた。

これは天性器用に出來て、何事も人並に卓越してゐたからであらうが、併し彼が何れの方面に向つても、負けないといふ魂が、行亙つてゐたからであらう。

前獨逸皇帝の如きも、又たその類であつて、彼は建築家には建築の講釋をなし、銀行家には金融の講釋をなすといふ如く、凡有る方面に於て、何者にも負けない、劣けをとらないといふ氣分を漲らし

てゐた。

斯る類は世に少く無い。仕合せに予にはそれが無い。これは自分が不器用に生れ付いた仕合せであるかも知れぬ。予は凡有る方面の、凡有る部分を、殆ど中立地帯としてゐる。但だその一點、若くは二點に於て、聊か自分の領分なるものを定め、唯だその點だけでは他より侵略せられず、若くは蹂躙せられないだけの用心と、覺悟とを持つてゐる。

されば予の如き者は、案外世を渡るに氣安く、唯だ一本の道を油斷せずして行きさへすれば、それにて吾事は終るやうなものにて、一生營々汲々として、他人と長短を比較して、その間に死生するものに比ぶれば、頗る呑氣であると云ひ得られないことも無い。

又た世の中には彈力のある者と、彈力の無き者とがある。予は此點に於て、餘り彈力が多きに過ぎはせぬかと思ふ。勿論常に戰鬪的精神が燃えてゐるわけでは無い。特に弱き者に向つて、吾力を示すなどといふことは、元來予自らが弱き者であるからでもあらうが、趣味として、甚だ好まない。併し何者にもあれ、他が吾に向つて壓迫し來る如きことあれば、その時には猛然として、戰鬪的精神が湧來り、全力を振つてそれを擊退しなければ息まず、時としては追擊さへも、敢へて辭せない程である。これが予の一生に於ける一個の箴言で無いまでにせよ、或はそれに幾いものではあるまいか

思ふ。

　但だ予はこれが爲に利益を得たこともあらうが、又たこれが爲に損をしたことも少くはあるまい。唯だ持つて生れた氣分であつて、今更ら致方無い。

　予は山中鹿之助の如く、自ら七難八苦を祈るほどの勇氣は無い。出來得べくんば、戰鬪よりも、平和がよく、山坂よりも平坦の道がよく、艱難よりも安樂がよいに定つてゐる。

　予は自ら平和の愛好者であると信じてゐる。故に平地に波瀾を起すとか、靑天に霹靂を飛ばす如きことは、即ち語を換へて云へば、事の爲に事を起す如きことは、甚だ嫌ひである。併し一度艱難が吾身に迫つて來た時には、從來何處に潜在してゐたか知らぬが、戰鬪的精神が潮の如く湧いて來る。而してその艱難に向つて、挑戰することを、寧ろ愉快に考へる。その爲に强ひて自ら事を起すことは好まぬが、動もすれば艱難が生じたとて、別に大なる差支は無いものと、初から觀念して、それ等を豫防するが如きことに餘り心配をせず、その爲に往々足元から地雷火を踏むが如きことも、偶には無いでも無つた。

　予は自ら好んで喧嘩の押賣をしたことは無い。又た喧嘩の押買をしたことも無い。併し相手が挑戰して來れば、これを辭せない丈の氣分がある。これは予にとつてよき癖である乎、惡い癖である乎、

一生の清算をなした上で無ければ何とも云へないが、予をして餘計の苦勞をなさしめたのもこれが爲であり、又た予をして多くの困難の爲に蹉跌されしめず、兎も角も九轉十起といふ如く、如何なる重圍に陷るも、一方の血路を開きて、兎も角も吾が行くべき道を行くことが出來たのも、これが爲ではあるまい乎と思ふ。

但だ禍を轉じて福となし、危きを變じて安きになすといふことに就いては、平生多少の工夫をしつゝあるが、併し冷靜に考へれば、これは畢竟第二義にして、第一義は禍などゝいふものを招かざること、危を踏まざることであつて、既に回轉するとか、切開くとかいふことが、第二義に落ちてゐるものと云はなければならぬ。

凡夫の悲しさ、垂拱して天下治ると云ふが如き氣分にはなり兼ぬるが、併し禍に打たれ、危に卷込まれ、自ら動く能はざる者に比すれば、或は稍ゝ一日の長ありとも云はれ無いことはあるまい。併しこれ等のことは、悉く人爲と云ふばかりで無く、半ばその人の運命であれば、如何に第一義を目掛けても、運命がそれに伴はなければ、致方無きものと、諦めねばならぬ。

予は自ら考へて、中運の者と思ふてゐる。即ち幸運でも無く、惡運でも無く、その眞中であらうと思ふ。果して然からば、中運の者としては、惡運に遭遇した時には、これを幸運に轉ずるより外に、

手段も方法もあるまい。

五　保守的なる予

グラッドストンの子グラッドストン子爵が、其父のことを語りたる中に、
『父は生れつき保守的であるが、世間から變節漢などゝ云はれるのは、全く以つて意外千萬のことである。但だ父の變るのは、春から夏に移り、夏から秋に移り、秋から冬に移るが如く、自然に移行くものであつて、何人もこれを如何ともする能はざる場合に於て、初て然るものである。』と云つてゐるが、將してそれが虞翁に當嵌る乎、否乎はわからぬが、予自身にとつては、如何にも面白き言葉と思ふ。

予は決して己を辯護する者では無い。併し過去を顧て見れば、予ほど保守的の者はあるまいと思ふ程に保守的である。世の中には走りが好きであり、早生ものが好きである者が少く無い。

交友なども唯だ新しく新しくなどゝ變つて行く者がある。

予は變るといふことが本來嫌であつて、大から小まで、小から大まで、出來得べくんば、成るべく

變りたくないのである。予には全く無いとは云はぬが、世間で所謂る退屈とか、倦怠とか云ふことは無い。又た飽きるといふやうなことも無い。固より全く無いとは云はぬが、比較的少いやうに思ふ。

若しその弱點を云へば、寧ろ動的に失するよりも、靜的に失する方であらうと思ふ。即ち動くが爲の弱點で無く、動かない爲の弱點であらうと思ふ。

併し飜つて予の一生を見れば、予の意見、議論などは、可成り變化したことがある。而して予は其の變化の爲に、所謂る變節漢、節操を失つた者とまで非難されたことがある。

即ち知識上の缺陷に止らず、德性上の缺陷として、非難されたことがある。併し予自らに於ては、何等疾しいところを感じない。

予の意見を變じたのは、周圍の變化に依つて、變じたものであつて、謂はゞ冬に外套を著け、夏に帷子を著るの類であつて、何等不自然のことは無く、極めて自然と信じてゐる。

予は政治家では無い。併し予の意見、議論は、予一人の道樂の爲に把持してゐるのでは無い。尠く共其の意見を世の中に實行して、所謂る經國濟民の業に、貢獻せんとするのである。

無責任なる放言高論をなして、世を驚かし、自ら快なりとするが如きことは、予の未だ曾て敢へてするを屑しとせざる處だ。

救世の中の爲に實際に行はねばならぬ議論なるものは、所謂る對症の妙藥で、症が變ずれば、處法も變ぜねばならぬは、當然のことである。如何なる病氣にても、カツコン湯のみを飲ますれば足るといふのは、藪醫者の言であらう。

予は及ばずながらも、その配劑方に於て、大過無きを期してゐる。但だ予の根本思想とも言ふべきものに至つては、恐らくは予の著述を通讀せられたる人は、承知であらうが、當初より今日に至るまで、即ち彼是五十年間、恐らくは寸分の狂もあるまいと思ふ。

それは何事である乎と云へば、正しきことを行ふといふことである。これは個人としても、社會としても、國家としても、世界としても、皆な此の根本思想を以つて貫いてゐる。

從つて予は強者の味方よりも、弱者の味方となることを好んでゐる。予は如何なる利益の爲にも、不正不義を容認するといふことは、予の有する哲學――若し哲學なるものありとせば――には、未曾つてこれあらずだ。

古人の所謂る「一の不義を行つて天下を得るもせず」といふ言葉は、予が金科玉條として服膺してゐる所である。予が自由主義を主張し、藩閥政府に向つて戰つたのも、これが爲である。予が帝國主義を主張し、露國に向つて戰ふたのもこれである。

今日に至つても、世界水平大運動の原理より、白人の專橫を、適當の程度に抑制せんと欲するも、これが爲である。特に予が最近十數年北米合衆國の、容赦なき批評家となりつゝあるも、これが爲である。予は時として政黨に味方して、官僚政治を攻撃したことがある。それは政黨よりも、官僚政治の方が、腐敗してゐると認めたからである。

然るに今日に於て、予が又た政黨政治を攻撃するは、今や政黨政治が、その腐敗の絶頂に上りつめてゐるが爲である。官僚にせよ、軍閥にせよ、苟も國家に不正不利と認むれば、予は今後と雖も、斷然之に向つて挑戰するつもりである。

正しきことの爲に戰ふといふことは、終始一貫であるが、その戰ふべき對象物は、時と共に異らさるを得ない。これを以つて予が變節などゝいふことは、全く見當違にして、予としては到底これを默認することは出來無い。

六　予の好まざるタイプと好むタイプ

嘗つて大磯に伊藤公を訪たる時、予に論語から「惟仁者能好レ人、能惡レ人」と書いて與れた。これ

は別に深き意味があつて書いたのではあるまい。予が見てゐる前にて書かれたのであるが、多分手當り次第に書かれたのであらう。

然かるにこれは可成り長き文句を、一字づゝ書いたのであるから、額面としては、なか〳〵長きものとなつて、今も逗子の老龍庵に懸けてゐるが、友人の或者はこれを見て、

『これは伊藤公が深き考があつて御身の爲に書かれたものであらう』などと云つた。

それは何れにしても差支無い。予は此の言葉に就いて、篤と考へた。

予は固より仁者では無い。それで人を憎むことも、人を愛することも、孔子の所謂る能の字に當嵌る乎否乎を知らない。併し自ら考ふるに、若い時から英語の所謂るグード・ヘーター（Good hater）であつて、愛することも、可成り少く無いが、憎むことは猶更ら多くは無いかと、自ら顧ることが屢〻である。

所謂る毛嫌ひなどといふことでは無いが、予には可成り嫌ひのものがある。誰とか彼とか云はないが、嫌なものゝ二三のタイプを擧げて見れば、先づ左の通りである。

第一に嫌であるのは、僞善者である。僞善者と云つてその當人は眞善者と思ふてゐるかも知れぬが予自身としては、如何にも僞善者としてより外、受取られないものである。

由來人間には完全なる者が無い。長所は長所、缺點は缺點、白は白、黑は黑、これを表白するに於て、別に深く恥づべき理由は無い。然るに自分を何やら聖人くさく、恰も完全無缺の位置に於て、人を高き所から見下すが如きものは、何やら虫が好かぬといつても宜からう

斯る連中は世の宗教家、若くは有道者などといふ者の間に少くない。或は愛國家とか、或は忠君家とか、種々の看板を持ち、種々の引札を撒き、世間を瞞化すものが少く無いが、これ等の贋物は、予が最も欲せざる所だ。

その次には輕薄、忘恩の徒である。例へば己に必要があれば、一日に三度も人を訪問し、必要が無ければ、三年に一回も葉書さへよこさぬといふ者にて、しかも他人の好意、助力、犠牲を請求するに至つては、至れり盡せりであるが、己に既に攝取し盡せば、その以後は見向きもしないといふ如きは、甚だ面白く無く思ふ。

好意を與ふる方に於ては、固よりその報酬を望むべきでは無い。又た報酬を望めば好意では無い併し受けたる者に於ては、多少の感謝の念を湛へねばならぬ。恩には大もあり、小もあるが、恩を知り、恩を記憶し、出來得べくんばその恩に報ゆるといふことは、人の美徳であり。恩を知らず、恩を記憶せず、恩に報ゆる所以に力めざる者は、惡人とは云はぬが、或は惡人以下の下劣なる動物かも知

れぬ。此の如き者が予の甚だ欲せざるところである。

第三は極端なる自己中心主義者である。人間は固より自己を中心とすることを、否定すべきでは無い。己の世話は己が燒かねばならぬといふ意味からしても、自己を中心とすることは、當然である。併し極端なる自己中心であつて、己の都合のみ考へて、それが他人に如何なる影響を與ふるかといふことを、一切無頓著で過すといふことは、餘りに自己中心過ぎてゐる。

何事にもあれ、自己を中心とし、一切のことを自己の利害より打算し去るといふ者は、到底共存同榮とか、相互扶助とかいふ意味は判らない。何ぞ況んや獻身的努力をやだ。

併しそれよりも予の不愉快に思ふことは、針ほどの小善を、棒程に吹聽し、己が爪の垢ほど貢獻したることを、他に比類なき大なる功績の如く吹聽し、單に報酬を得るといふばかりで無く、極めて小なる仕事に對して、極めて大なる報酬を要求する如きものが、予の最も與みする能はざる所のものである。

斯る徒輩は第一に擧げたる僞物の間に多いが、又た必しも僞物ともつかず、僞善者ともつかず、此の如きことを以つて、常に世の中に運動をしてゐる者がある。予は屢ゝ斯る輩に煩はさるゝことが多くて、常に煩く感じてゐる。

又た明けても暮れても、唯だ金儲けとか、肉慾とかのみに沒頭してゐる者もあるが、これは必しも憎むといふほどでは無いが、斯る仲間のお附合は、寔に困入らざるを得ない。併し彼等は俗物であつて、俗物の方が僞善者や贋物に比すれば、猶ほ幾分かましといふことは間違ひあるまい。

要するに予はぶることが嫌だ。聖人ぶつたり、悧巧ぶつたり、英雄ぶつたり、學者ぶつたり、愛國者ぶつたり、義人ぶつたりするものは、皆な予の好まざる所。所謂るぶる者に比ぶれば、如何なる俗物でも、寧ろぶらない方がましであらうと思ふ。

予は特別に愛するといふ人を持たない。但だ予の好む所の人は、誰にもせよ、一藝一能ある者で、予はこれ等の人々を好むばかりで無く、これを尊敬する。縱令その藝術に就いては、予自ら左程尊敬しなくとも、その藝術に堪能なる人に對しては、何と無く頭が下る。

但し予は世の所謂る成功者なる者に對しては、左程にも思は無い。成功者なる者は、或る場合に於ては偶然の出來事であり、或る場合に於ては詐欺に類したる仕事の結果であり、或る場合に於ては、曲まなる道に依つて得たる結果であり、或る場合に於ては、他人の勞苦をその儘横取りしたる結果と云はねばならぬ。

故に予は成功者その者に就いては、彼は何故に成功したる乎、何に依つて成功したる乎を疑問とす

る。例へば道に落ちたる金を拾つて金持になつたからといつて、それが左程尊敬すべきことではあるまい。人を欺して金持になつた者の如きは、寧ろ卑むべき者であらう。

されば世間の所謂る成功者なる者に就いては、予は寧ろ懐疑の目を見張つてゐる。兎に角成功さへすれば、その人に向つて謳歌するといふ氣持には、予は絶對になれない。

何は兎もあれ、政治にもせよ、實業にもせよ、凡有る職業にもせよ、成功者といふ者に就いては、極めて注意深く、吟味の上に、もし成功が正しき道に於て得られたならば、固よりそれだけの尊敬をするが、然らざれば予の眼には、如何に世間にその成功が輝くも、何等の價値は無い。

予が愛すると云はざるまでも、それに幾きものは、恒ある人である。世にはお天氣師と名付けて、その時〳〵に、よく變る者がある。今日は取つて喰ふ迄に親切であるかと思へば、明日は見向きもしない者がある。斯る者は予の最も好まざる所の者であつて、如何なる場合でも、恒があり、當になり、約束が守られ、責任を重んずるといふ如き人は、縱令その人が抜群の力量が無いでも、縱令その人が平凡の人でも、予はその人に向つて、相當の尊敬を拂ふことを辭し無い。

予は必ずしも完全無缺の人を喜ぶでは無い。世の中には何れの點から見ても、申分の無き樣な人で、而してその人と交つて、更に面白く無き者がある。律儀も結構である。正しきことも結構である。

併し人間にはそればかりでは不足する。

人間に最も必要のものは、人間味である。そこで予の最も好む者は、人間味あるものである。縱令その人が多少の缺點があつても、人間味のある者は、如何にも捨て難き心持がする。

人間味といふことは、これを解釋することは容易で無い。併し讀んで字の如く、人間が人間としての味のあることである。即ち人間味の中には情のみでは無いけれども、多分の情を含蓄してゐる。而して此情に自ら二種ある。

それは主我的の情と、非主我的の情である。主我的の情は、自己を本位として割出すが爲に、人間味といふが、寧ろその人間味は狹き意味に於ての、卑しき意味に於ての、俗惡なる意味に於ての、人間味たるを免れ無い。

併し非主我的の情は、寧ろ對象の者を本位としてのものであるから、如何にも美しくあり、如何にも崇高くあり、それが高調する時には、人間が恰も天の使にでもなつた樣な者に見受けらるゝ。

要するに人間味の極意は同情であらう。同情の極意は、獻身的精神であらう。人間の面白味は、吾は吾事を爲し、汝は汝がことを爲すといふよりも、吾事は人が爲し、人のことは吾が爲すといふ方に存するかと思ふ。

此の如く人間が眞に對象の者を本位として考慮するに至つては、自然その心掛が奉仕的となり、初めて狹き小我の桎梏から脫することが出來るものと思ふ。

併し此の如き人は、事實必ずしも存在し得るものでは無い。但だ或る程度まで斯る方向に向つて動く人と、その反對に動く人とがある。

予の好む所のものは、即ち非主我的人間味を具備する人か、左なくばそれに向つて、常に動いて行く人かである。

併し愛とか犧牲とかといふことを看板にしたり、賣物にしたり、商賣にしたりする者は、寧ろ泥棒の方が、却つて淡白で罪が少い乎と思ふ。

七　予の宗教觀

◇宗教は心靈上の最高美術

◇宗教に對しては一切平等

予は所謂る物質的信者では無い。予はクレマンソーなどの如く、徹底的に宗教を否定する者では無

（上）山王草堂の一部
二階右側翁の書齋

（下）山王草堂の門より玄關に
至る通路の一部

い。何れかと云へば、予は宗教を信ずる者では無いが、好む者である。奉ずる者では無いが、愛する者である。

謂はゞ宗教の信仰者で無い代り、寧ろ愛好者である。予は生れながらにして、所謂るかつぎ屋なる者を輕蔑すると迄は云はぬが、尠く共おかしく思ふてゐる。例へば家相とか、方位とか、若くは加持、祈禱、御籤、占卜、其他灸据、鍼針などの類は、一切不問に附してゐる。

家を建つるにも、旅行をするにも、嫁を娶るにも、婿を取るにも、何等其邊のことには、頓著が無い。自ら頓著無きのみならず、世間の人が餘りに頓著するのが、不思議でたまらない程だ。

尤も子供の時には、願を立てたこともある。それは予の父が酒を飲み、飲んだ後に屢ゝ苦痛を覺えてゐるのを、子供心に見て、自分は一生酒を飲むまいと、淡島樣に願を立てたることがある。淡島樣とは如何なる神であつたか知らぬが、當時願を聽く神樣として知られてゐたのであらう。

又た予の姉の子が病院に入つて死なんとする際に、予の母と共に山崎天神にお百度を踏んだこともある。又た明治十年五月頃であつた乎、新島先生から洗禮を授けられたこともある。

併し又た明治三十一二年の頃であつた。予が一生の中に最も運命に窮した際、友人と明石に遊び、人丸神社に於て、別に何等の考も無く、御籤を取つて見たが、その御籤が何やら開運の意味が書か

れてゐつた爲に、大いに氣強く感じ、それを丁寧に懷中に藏ひ置いたことを覺えてゐる。

併しそれは何れも例外であつて、基督教の信仰さへも、基督を信ずるといふよりも、寧ろ新島先生を信じたまでにて、其後『基督教證據論』などを讀むにつけ、基督が神であるとか、奇蹟とか云ふ樣なることについて、種々の疑を生じ、强ひてその疑を解かんと骨折つたが、愈々倍々疑は增長し、その爲に一時は殆ど腦病さへも煩ひかゝつた程であつた。

予は後に新島先生にその洗禮を公然返却し、自由の身となつて、それからすが〳〵しき心地となつたことを覺えてゐる。

斯る次第であれば、予は全くの懷疑者で、無神論者であるかと云ふに、遺憾ながら信仰にも徹底せぬが、不信仰にも徹底しない。

予は分類すれば、先づナショナリストであらう。予には佛教よりも、基督教よりも、儒教の要素が最も多く沁わたつてゐる樣であるが、しかも儒教の易などは、これを理論として見れば興味を持つが、實際的の占卜としては、全く沒交涉だ。

併し予は基督教にも、佛教にも、その他の宗教にも、多大の興味を持つてゐる。自ら信仰せずして、興味を持つてゐるといふことは、をかしき樣であるが、併し繪を愛するものが、必ずしも畫師で無

く、芝居を愛する者が、必ずしも役者で無く、詩を愛する者が、必ずしも詩人で無い如くに、予は門外漢ながらも、又たこれを愛好するに於て、何等妨げないものと思ふてゐる。

予の宅には佛壇も無ければ、神棚も無い。昔は固よりあつたであらうが、屢ゝ家を移轉し來りたる今日は、殆どそれらしきものは無い

但だ春秋二期に家祭をなして、祖先の筆蹟やら、肖像等を掲げ、遠きを追ひ、源を懷ふことをするに止つてゐる。併し予の家には、凡有る宗教の空氣が滿ちてをるものと、予は信じてゐる。

予は佛教の信者でも無く、所謂る神道家でも無く、又た所謂る基督教信者でも無いけれ共、神社の前を通れば、禮拜することを怠らない。寺院に入りて、彌陀や釋尊や諸々の佛達の前に立てば、必ず合掌する。又た基督教の會堂に行き、その禮拜の時に際すれば、他の基督教者の爲すごとくなしてゐる。而して道傍の地藏でも、馬頭觀音でも、猿田彦でも、相當の敬意を表することを、忘れ無い。

これは予が無主義である爲では無い。予には宗教なるものに就いて、不肖ながら一種の定見がある。それは苟くも宗教なるものは、その如何に拘らず、吾等はそれに向つて、相當の敬意を表すべきものといふことを、予の主義としてゐるからだ。他人の眼前を通過する時には、腰を屈めるなり、挨拶をするなりして通るが禮儀でありとすれば、神社、佛閣、會堂等に於ても、相當に禮儀を竭すは、

當然のことであらねばならぬ。

世の中には、一の宗教を奉ずるの餘り、他の宗教を敵視し、これを滅絶せしめなければ止まないといふ者もある。予はそれに就いては、宗教そのものゝ本體を誤りてゐるものと思ふ。宗教は各〻の安心を得る爲のものでありとすれば、何れの宗教を信じても、差支へあるまい。又た一の宗教で無くとも、凡ての宗教に興味を持ちたりとて、一向差支へあるまい。

然るに已が佛尊しとて、他の佛を卑まねばならぬといふ理由は、何れに在る乎。ユダヤの神は嫉妬の神といふことが、舊約書にあつた樣だが、それは畢竟ユダヤ人その者の性質を暴露したものであつて、神そのものは博愛の神であり、既に博愛の神であれば、嫉妬の神であるべき筈が無い。

予は宗教を哲學にて說明し、若くは科學にて解釋せんとするものを見て、寧ろ御苦勞千萬のことゝ思ふてゐる。宗教は謂はゞ人の心の底から現出せられたる美術である。それを科學的辨證法や、哲學的推理法を以て、說明せんとするは、全く見當違ひであらう。固より宗教の補助學としては、哲學も科學も無用ではあるまい。

併し宗教そのものゝ本體は、決してさるものでは無い。宗教は予の見る處では、論ずべきものでは無くして、信ずべきものである。證すべきものでは無くして、感ずべきものである。

宗教は人間心靈上の最高美術である。宗教に必要なるは、想像と感情である。人間の熱烈なる感情と、高遠なる想像とが合致して、此處に宗教なるものが出來る。それを理智一偏にて説明し去らんとするは、全く見當違といはねばなるまい。

一神教とか、汎神教とか、種々の議論をする者もある。併し予は一を取つて、他を排すべき理由を認めない。獨一神を拜するも、天地萬有を神明として拜するも、將た世の中には神明などゝいふものは無いとする者も、何れも各々の心に於て斯く考へるもので、その考の何れが是にして、何れが非なるは、唯だ各々にてこれを決するの外はあるまい。

予は或る人々が偶像崇拜を排斥するのを、寧ろ不思議に思ふ。そは若し偶像と云はゞ、何物か偶像ならざらん。世の中の人々が偶像を排斥するといふのは、唯だ甲の偶像を尊崇して、乙の偶像を排斥するに過ぎ無い。

凡そ人間の心の中には、何か必ず偶像があり、若くは偶像らしきものがある。天地神明を信ぜすといふ者にても、又た所謂る無神論者にても、己自身を偶像とし、時としては自己崇拜を事とする者もある。

他を偶像として拜むも、己を偶像として拜むも、拜むに於て何の相違かある。要するに予は宗教に

於ては飽迄自由、飽迄寛大、飽迄無差別、飽迄平等を以つて立前としてゐる。

予は日本に於ける村の鎭守の森などを見ると、何となく涙が滾るゝ心地がする。是等の鎭守の森は何れの時代に始つたのか、その森の中にある神樣は、誰を祀つたのであるか、今逐一それを吟味するに遑がない。併しながら此に日本國民の宗敎心が、自然に流露してゐる。

その宗敎心には哲學もあるまい。科學もあるまい。併しながら祖先と祖國とを追慕する眞純なる情趣は、自ら發揮せられてゐる。

謂はゞ日本に鎭守の森がある限りは、日本民族は永久に存し、日本の國家は永久に存すると云つても、差支へあるまい。予は此の意味に於て、先年來行はれたる、神社合併などゝいふことに、容易に同意が出來無い。

最早や二三十年も昔であらう。予の故鄕に若干の社があり、何れもその域内に巨大なる樟が生茂つてゐるから、その神社を一箇所に集め、それ等の樟を切倒し、樟腦を製すれば、それで神社の維持費等も出來るであらうといふ說があつて、その議正に行はれんとしたが、予はこれに對して絕對に反對し、必ずしもそれが爲ではあるまいが、幸に今も尙ほ合併の禍を免かれてゐる。

斯る例は全國に澤山あつて、中には頗る亂暴なる、破壞事業を逞しくした者もあつた樣に聞く。こ

れは神社とか、風致とかの破壞ばかりで無く、眞に敬神愛國の念を破壞する者といつても差支へあるまい。

斯く云へばとて、人心を惑亂し、風敎を害するが如き、婬祠、邪敎の如きは、固より國家が當然取締るべきものであるが、それ以外は所謂る信仰自由の域内にて、固より國家の干渉すべきわけは無い。況んや個人がこれに干渉するに於てをや。

予は如上の理由に依つて、總ての宗敎に對しては、一切平等に尊崇し、禮讃する。而して予自らの微力もて、何れの宗敎にも力を借すこ とを吝む者で無い。予は斯る意味を以て、佛敎、神道、基督敎、基督敎の中に於ても、救世軍等にその力を借すことを吝まないわけである。

八　生れ落ちたる蒲團兒

◇親の子孝行と妻の内助

予は生れ落て以來、一家に於て特別待遇を享けた。多くの女子の後に生れたる最初の男子であれば、左もある可き筈だ。今更ら思ひ廻らせば、父母の恩を感ぜずにはをられない。幸ひに父母の敎育

は嚴重であり、緊切であつた爲め、驕兒たる不幸を免れたが。併し予には特別の事が、普通の事に考へられ、家庭の溫室に成長したる結果、遂ひに人情の機微に通ずる機會を失うた。されば山路愛山君の如きは、恒に其の夫人に向て、『德富さんは蒲團の上に成人した仁である。彼人には世間の事が諒解せらるゝ筈がない』と語つてゐた相だ。

予は山路君が評した程の唐變木ではないが、他の家庭はいざ知らず、予の家庭は、生れて今日に至る迄、七十年來、予に取りては、全く樂園であつた。社會的には不幸もあれば、不平もあつたが、家庭的には何等の不幸もなければ、不平もない。予は未だ生れて以來、兩親に對して、不平を感じたことはなかつた。兩親は予が一を望めば、十を與へた。十を望めば、百を與へた。

予は親孝行といふ能はざるも、兩親は全く子孝行であつた。兩親は予を單に自からの私有物とせず、祖先より供託せられたる吾家傳來の寶物として取扱うた。此で不平があれば、罰があたる。併し此れが爲めに、予は殆ど人情盲となつた。自ら不平なき爲めに、他の不平にも頓著しなかつた。自ら不幸なき爲めに、他の不幸にも共鳴しなかつた。予は自から決して同情心の稀薄なる漢とは思はない。併し餘りに單簡、淸白、光明なる家庭の裡に成長した爲め、他に對して思ひ遣りの出で來る可き端緒を見出さぬのだ。而して小兒から一躍して大人となつたから、遂ひに青春のローマンスな

るものも、殆ど一切皆無であつた。隨て他人の是等の境遇には、如何に同情せんとしても、矢張り同情する所以が分らない。

一言すれば予は苦勞性でもなく、又た苦勞人でもない。此れは新聞社の社長として、恐らくは少からざる缺點であつたらう。予は人間學を多年研究したつもりであるが、然も人情學は、予に取りては封書だ。七十年の今日迄、世間と接觸して得たる事は、人情の新發見だ。世間では尋常茶飯の事が、予に取りては全く新發見だ。それ程予は人情に迂濶である。此れは前の半生を、父母の膝下として過し、後の半生を、平和なる家庭の主人として過したからだ。

予の生涯は、戰鬪的精神で一貫するが、此れは公的生涯に限つてゐる。私的生涯は、安樂であり、平和であり、呑氣である。予は未だ嘗て家庭的の心配なるものを體驗した事はない。況んや家庭的戰鬪をやだ。家は富まなかつたが、――否な事實を語れば、田舍では比較的富家であつて、父が國事に奔走の結果、貧乏となつたが――然も學費は思ふ通りに支給せられた。富貴の甘味も喫せざる代りに、貧乏の苦味も喫せず。父の在せし時は父と妻とが、家務に當り、父の歿したる後は、吾妻專ら之に任じ、予は七十年の今日迄、未だ一度も家計簿を見た事もなく、算盤を手にした事もなく、吾妻より小遣を貰うて、用事を辨ずる迄だ。一家の主人と云ふが、其實は一家の大なる居候だ。世間で能く

內助の功と云ふが、予が全心全力を傾けて、新聞記者として、何等の頓著なく思ふ通りに行動し得た自由は、吾妻の賜だ。吾妻は父が予に代りて擇んで呉くれたものなれば、又た吾父の賜だ。今更ら吾妻の頌德表を書くではないが、吾妻は文字通りに、否な文字以上に、內助の功を奏してゐる。

予等は既に恙なく金婚式をもすましたが、予は金婚式に際して、左の口占一首を得た。

悲歡半百歲。寵辱徒紛紛。

形影長相伴。眼中吾與君。

九　予は一種の泣蟲

◇予の戀愛觀

予は決して理智一遍の漢ではない。實は性來餘りに情熱が激しいから、せめて理智一遍の漢たらんと、自から努力してゐるのだ。冷酷とか無情とか云ふ事は、予には到底行ふ能はざる事だ。山路愛山君は、『蘇峰氏は、其の窮境に陷つた際にも、餘りに我慢が強いから、世間が同情せんとするも、同情心を注がれ難い。世間が君を憐むには、君は餘りに戰鬪的精神が多い』と云ふた。此れも幾分か眞

理であらう。予は他人より憐まれるを、寧ろ侮辱と感ずる程だ。併し予は本來弱蟲であり、又た泣蟲だ。予は吾母の勇氣の、せめて十分一程もあれかしと、自から祈つてゐる。予は子供の時から、心中にメランコリー（悲哀）の鬼が潜んでゐる。時に何やら心細くなりて、泣たくなることが、屢々あつた。同志社在學中などは、半ば此鬼の捕虜となつた程だ。此鬼に心中をかき廻はされては、たまらないと思ふから、十重にも、二十重にも、此鬼が跳梁せぬ樣、鐵鎖にて縛つてゐる。併し七十歳の今日でも、尚ほ此鬼は活てゐる。予は決して徹上徹下の樂天者ではない。太陽は我心を隈なく照らすが、尚ほ其の温光の達せぬ場所が殘つてゐる。

前不レ見二古人一。後不レ見二來者一。念二天地之悠悠一。獨愴然而涕下。

と云ふ詩は、宛も吾心の奥底を道破したものだ。予は往年逗子に養痾の際、觀瀾亭の欄干に凭りて、夕陽が相模灘に入り、富士山が漸く暮雲に包まれて隱れんとするを眺め、何とも名狀し難き氣持が中心より湧き、涙が自然に吾が臆を濕すを覺えることが屢々あつた。併し斯る場合には、予は忽ち氣を取り直し、やがて戰鬪的精神で、之を打ち蹶せて了ふた。

予は全人間でなく、恐らくは半人間であらう。予は片輪者であらう。併し予を片輪者としたのは、予一個の責任と云はんよりも、予が父母の子孝行の結果だ。予の一生には、世間で云ふ戀愛などと云

ふ一件に、接觸しなかつた。予は天成の木石漢ではないが、遂ひに其の機會を與へられなかつたからだ。故に他人の生きるとか、死するとか云うて騷ぎ廻る戀愛のいきさつなどには、如何に同情せんとするも、予には其の同情心が出て來ない。小說抔も、讀んで面白く無いことも無いが、さりとて寢食を忘れて讀みたくはない。それよりも予の心を動かすものは、天下國家の大事件だ。若し予に戀愛に對する同情心が湧く時節が到來するならば、そは予が再び人間に生れ代りて來た後であらう。予が大なる文學者となる能はざる所以も、或ひは若干此の缺點に因するかも知れぬ。

併し如上枚擧した通り、予には家庭の境遇上、人間としての多くの缺點があり、予の教養にも、不足があり、到底片輪者たるを免れぬが、然も予は此の片輪者たるを恥ぢず、片輪者たるを悔いず、此の片輪者たるに滿足してゐる。而して此れも其の大部分は、予が父母の恩である。而して其他は吾妻の予に與へたる、五十年間の獻身的奉仕の結果である。

庚午新年　三首　（昭和五年　六十八歲）

六十八新歲。懷往又想來。往者如電抹。來者似疾雷。報效志空在。跛鼈度崔嵬。豈期蓋棺閒。自分臥草萊。修史成何日。幾奈衰朽催。衰朽何須嘆。天地長悠哉。獨對南窓起。寒梅數點開

一年如一夢。願望獨自憐。落落露問答。共上遙

萊翁。蓬萊極南北。歸來梅朔邊。聰從二三子。要在事局詑。得失吾不與。野耕若不遷。當月旣時事。冷灰復然然。老大無長物。一枝筆如椽。昨今孰非是。忘魚笑忘筌。

六十八春如淡烟。　圖書萬卷履便便。
想會村莊賀正日。　坐上青衫喜少年。

熱海探梅

不問時事亂如麻。　老去新年興更切。
淵豆猶餘三十里。　孤節得得訪梅花。

送藤井君之歐洲

大戰十載後。世局尙紛紛。獨往視風容。吾黨有藤君。藤君志識士。志趣凌高雲。觀風何所得。待我握手分。頤望日出國。歐米何足云。萬端中興業。趙趙循聰明。歸來期國事。新史紀鴻文。

贈留岡幸助君

我友留岡氏。眞性忠且淳。單身入京洛。師友得其人。海外訪賢哲。白首能尊[illegible]。畢無功名念。素心在書只。豈無同志士。遑遑走風塵。集鴨相按合。感化子尙親。北見開大耕。赤手拔荊榛。終始一誠意。幸有三十春。嘉績傳天下。姓名達楓宸。世榮非所願。身老志益振。爲君誦佳句。憂道不憂貧。

立願寺溫泉觀劍舞

切切四絃歌宴。　當爛桃李爲誰開。
書生老去壯心在。　春夜高樓舞劍來。

菊池城山

矢峰鞍嶺隔青霞。　泗水溶溶菊水斜。
十八都城何處是。　滿眸無地不櫻花。

入故鄉

南去鐵城春草蒼。　鵬峰球水送迎忙。
滿車親友滿眸景。　一路看花入故鄉。

萬壽山

五國風烟眉睫間。　賴翁詩句薦人寰。
山靈今日應微笑。　博得佳名萬壽山。

雄志加

著書千卷不須誇。　偏覺老來雄志加。
天賜野人清福足。　一春看盡故山花。

贈大江義塾同人

衝雪吟行蘇岳前。　蹈霜逐兎金峰邊。
疎狂故態君休笑。　村塾相親五十年。

戸部溫泉　二首

花滿層巒泉滿泓。　細思五十載前情。
曉來何物驚殘夢。　知是濤聲是雨聲。

溫泉混混濺清池。　崖樹蒼蒼倚水湄。
一半櫻花一半雪。　却驅奇景入新詩。

有馬

飛瀑鳴禽非世寰。　蒼蒼新樹白雲間。
倦來甜睡醒來浴。　一日偷閑勝永閑。

送友人之南米

隨處隨縁住自由。米南萬里意悠悠。
小樓佳句爲君語。鯤躍鵬飛六大洲。

長與山莊

階前野草自蕤蕤。流水穿林入小池。
日午茅齋無一事。竹窓喫茗與談詩。

手通神

寸刀在手手通神。彫去刻來吟且呻。
最是良工苦心處。蘇翁面目自天眞。

那須卽興　三首

冥濛天未曉。山堂秋氣生。草蛩吟蕭瑟。石泉咽
微聲。披衣倚孤榻。誰識此時情。

高原沙沙氣凄清。崇嶽雲烟天外明。
偶倚烏藤行石逕。鳴蟬若同和鶯聲。
時事悠悠吾自寬。滿襟凉味共凭欄。
欲迎佳客與清興。無限雲烟隨意看。

上山田溫泉　二首

昨來越信海邊山。蓑笠長行不暫閑。
偶得閑程餘一日。筑川清處且開顏。
金風瑟瑟入堤楊。隔水層巒自碧蒼。
閑試前川新雨足。香魚一尺上盤長。

豐肥車中

每每山田熟稻黃。秋花歷亂滿高原。
驅車忽轉竹林外。柿葉經紅又一村。

上林溫泉

黃稻穰穰柿實紅。香魚漸老茂秋菘。
年年來遊林泉地。我爲親朋在此中。

水俣偶成

吾鄉固愛我。我亦愛吾鄉。豈翅山水美。人情自
醇良。吾族雖微矣。十世福澤長。何以報祖澤。
努力發國光。臨別諗鄉友。相扶莫相忘。

延岡黑岩園

偪仄疑無路。川通山忽開。魚遊澄潭底。禽鳴白
雲隈。翠杉擁幽谷。綠茶擁崖嵬。茅軒無賓主。
掬泉代酒盃。半日清閑足。吟嘯遺悠哉。

室戶崎

椿樹林邊滄海間。高僧遺躅擁崔嵬。
秋濤不聞人間事。萬轉千回去復來。

土佐阿波途上

官道蛇行群岳周。人家半在白雲頭。
奇巖東水淨於玉。黃樹青林兩岸秋。

室生寺

晚投室生寺。兩窓燭光明。山僧待我渥。古佛豈
無情。五更點滴裡。恍聽颯颯聲。十年塵土夢。
一夜覺來清。

名古屋寄人

鎮西又南海。舟車三旬强。周旋更調護。相拉到
金城。金城揮手姑相別。看取夫子不言情。

庚午除夜

春秋六十八。身似不繫舟。自甘[illegible]昔拙。肯忘天下憂。孤忠存國史。百代[illegible]與飫。不知歲將暮。獨坐[illegible]悠然。

辛未新正（昭和六年　六十九歲）

窮通不用問蒼昊。一事排來一事新。自笑先生命未薄。明年正是古稀人。

熱海偶成

初陽出海曙光除。滿目江山帶瑞霞。未必[illegible]情老來減。新年第一樹梅花。

題蘇峰詩草

不傚前賢不[illegible]奇。偶吟真情任吾痴。孤雲出岫[illegible]行地。此是蘇峰野客詩。

將去南胃腸病院

我到[illegible]院[illegible]。[illegible]來[illegible]。我去[illegible]院[illegible]。櫻花[illegible]滿枝。傳物不待我。志業有所期。[illegible]千古事。懷抱[illegible]與誰。

呈青山田中先生

青衿風雲會。中年[illegible]。功成[illegible]冠去。[illegible]東海濱。報主情尤切。憂國氣全振。孤松[illegible]尚節。老[illegible]多[illegible]辛。

奧多摩

登登[illegible]水源。[illegible]谷爲村村。崖峻泉鳴覚。[illegible]高雲入軒。

哭阿雄

往年喪阿熊。老淚濕吾衣。阿雄今復逝。淚盡徒長歎。辛苦半百載。事事與心違。遮莫碧翁意。不問是與非。擧首望天末。萬里白雲飛。

秋思

碧空如水玉盤磨。　松影上堦蟲語多。
欲賦秋思人不見。　一天風露奈吾何。

御坂嶺

碧林紅樹擁崔嵬。　絕壁缺邊湖面開。
奇景何人酬好句。　銀蓮萬丈擊天來。

君寵渥

翠松黃菊映龍墀。　奉對玉音辭殿遲。
白髮書生君寵渥。　天顏有喜近臣知。

七十自述　二首　（昭和七年　七十歲）

不說功名不語天。　丹心報國慕先賢。
今朝七十自堪笑。　村塾當時最少年。

落落襟懷存大千。　肯將萎朽詎須憐。
人生七十尋常事。　尙剩前途又十年。

對陳編

野屋蕭條對陳編。　與誰歡笑祝新年。
庭前未見寒梅發。　惟有老松凌碧天。

熱海偶成

晨風滿海樓。　四顧曙光稠。

雲外有飛信。天兵入錦州。

又

江山一碧映晴瀾。鳩影山光獨倚欄。
野老何須負暄坐。橙黃橘白不知寒。

奈老何　二首

明治鴻圖娘神武。漢唐天子豈同科。
一枝史筆千秋業。欲報聖明奈老何。
赤狄黃龍各操戈。太平洋上奮濤多。
何時四海歸一主。欲報皇恩奈老何。

詠希臘史家

敘事平若獨花倫。都公高眼自通神。
後來作者稱於前。誰是同家國外人。

人更難

論世固難人更難。群言評家莫爭端。
吾曹不做他家法。莫作馮班同樣看。

病後所懷

老與衰相待。衰與病相期。古稀雖天子。病臥多所思。氣因病却老。體從病而羸。皇都當四月。萬樹花滿枝。春風如作客。惠然入吾帷。來日豈無策。去日不可追。隨處隨分好。成歡須及時。

意自寬

病骨蘇來意自寬。爐堂靜寂有餘歡。
不知門外百花盡。相對硯頭仔細看。

百合花

國色天香何足誇。　尚嫌此處是貧家。
綠陰遮斷紅塵外。　羞殺山園百合花。

双宜莊偶成　二首

曉鶯啼處露華濃。　湖畔低徊倚短筇。
下界人間眠未起。　天光探映玉芙蓉。

林間板屋枕湖濱。　水面無風自作紋。
修史課終天未午。　坐看遠岳去來雲。

笑且招

秋風秋雨暮還朝。　湖水湖山笑且招。
却恐靈峰人易押。　白雲堆擁鎖高標。

山中湖畔偶成　二首

秋氣滿天地。夜雨曉來晴。雲動山容改。風定湖面平。野徑無人跡。林間有鶯鳴。悠然散髮客。孤嘯若爲情。

早起驚宿鳥。晴烟籠高岡。薄紗掩岳頂。湖面半微茫。無雨野花濕。不風襟袖凉。須臾催曉色。遠岳帶旭光。倒景映水上。双双添新妝。獨立孤亭畔。物我兩相忘。

摇落秋

金菓堆堆錯倶粟。　幽香陣陣入書樓。
紫薇凋謝芙蓉盡。　又值西風搖落秋。

蘇峰著作及び編纂目錄

◇著作書目

明治廿三年後の政治家の資格を論ず（明治十七年一月）
自由道德及儒教主義（明治十七年十二月）
第十九世紀日本の青年及其教育（明治十八年六月）
將來之日本（明治十九年十月）
新日本之青年（明治二十年三月）
日本國防論（明治二十二年一月）
嗚呼千載の一時（明治二十二年二月）
總選擧　附解散始末（明治二十五年一月）

吉田松陰（前刊本）（明治二十六年十二月）
大日本膨脹論（明治二十七年十二月）
歐洲大勢三論（深井英五氏共著）（明治二十八年四月）
賴山陽及其時代（山路愛山 森田思軒 共著）（明治三十一年五月）
勝海舟（民友社中共編）（明治三十二年五月）
七十八日遊記（明治三十九年十月）
吉田松陰（後刊本）（明治四十一年十月）
探報記者十箇條（明治四十二年五月）

探報記者の任務　（明治四十二年七月）
先帝御聖徳一斑　（大正元年八月）
政治家としての桂公　（大正二年十一月）
時務一家言　（大正二年十二月）
山水隨縁記　（大正三年一月）
政黨と首領（無名氏著と署名實業之日本社版）　（大正四年二月）
世界の變局　（大正四年三月）
兩京去留誌　（大正四年九月）
蘇峰文選　（大正四年十二月）
大正政局史論　（大正五年三月）
大正の青年と帝國の前途　（大正五年十一月）
公爵桂太郎傳（二冊）　（大正六年二月）

蘇峰詩草　（大正六年五月）
杜甫と彌耳敦　（大正六年九月）
支那漫遊記　（大正七年六月）
大戰後の世界と日本　（大正九年九月）
蘇峰詩草（木活本）　（大正十一年二月）
國民敎育論　（大正十二年一月）
國民自覺論　（大正十二年三月）
政界の革新　（大正十三年二月）
蘇峰文粋精神の復興　（大正十三年三月）
烟霞勝遊記（二冊）　（大正十三年六、七月）
大和民族の醒覺　（大正十三年七月）
國民小訓　（大正十四年二月）
蘇峰隨筆　（大正十四年九月）
三十七八年役と外交　（大正十四年十一月）

第二蘇峰隨筆　（大正十四年十二月）
第一人物隨錄　（大正十五年五月）
野史亭獨語　（大正十五年七月）
婦人の新教養（主婦之友社版）　（大正十五年八月）
賴山陽　（大正十五年十一月）
西鄉南洲先生　（大正十五年十一月）
昭和一新論　（昭和二年二月）
伊豆遊記（伊豆循環鐵道期成同盟版）　（昭和二年二月）
冷淡生涯（靜子夫人、周年記念出版）　（昭和二年四月）
白河遊記（川崎大四郎氏版）　（昭和二年四月）
大久保甲東先生　（昭和二年五月）
日本名婦傳（主婦之友社版）　（昭和三年四月）
維新回天の偉業に於ける水戸の功績　（昭和三年五月）
中庸の道　（昭和三年五月）
木戸松菊先生　（昭和三年十二月）
夫婦の道（主婦之友社版）　（昭和三年十二月）

赤穗義士觀　（昭和四年二月）
予は何故に國民新聞を去りたる乎（新聞時代社版）　（昭和四年三月）
維新回天史の一面　（昭和四年五月）
土佐の勤王　（昭和四年六月）
臺灣遊記　（昭和四年七月）
日本帝國の一轉機　（昭和四年九月）
素空山縣公傳　（昭和四年九月）
時勢と人物　（昭和四年十月）
人間界と自然界　（昭和四年十一月）
生活と書籍　（昭和五年一月）
歷史の興味　（昭和五年二月）
老記者叢話　（昭和五年三月）
時代と女性　（昭和五年五月）
德富蘇峰集（改造社版）　（昭和五年八月）

景仰と自省　（昭和　五　年九月）
文祿慶長以後日本に於ける朝鮮の感化（中央朝鮮協會版）　（昭和　五　年九月）
書窓雜記　（昭和　五　年十月）
教育勅語四十年（大每社版）　（昭和　五　年十一月）
修史餘課　（昭和　六　年一月）
持身小訓　（昭和　六　年二月）
奉公小訓　（昭和　六　年二月）
世界の動きと維新史の教訓（信行社版）　（昭和　六　年四月）
現代日本と世界の動き　（昭和　六　年五月）
人さまざま　（昭和　六　年六月）
『英國の危機』を讀む（全國產業團體聯合會版）　（昭和　六　年六月）
卓上小話　（昭和　六　年九月）
悠々我思　（昭和　六　年十月）
吾が母　（昭和　六　年十二月）
吾が同胞に訴ふ（大谷光瑞共著近代社版）　（昭和　七　年一月）

人間山陽と史家山陽　（昭和　七　年三月）
史境遍歷　（昭和　七　年五月）
岩倉具視公　（昭和　七　年五月）
讀書人と山水　（昭和　七　年八月）
武藤全權大使及其の一行を送る（大每東日版）　（昭和　七　年九月）
大事小事　（昭和　七　年十月）
明治天皇の御盛德　（昭和　七　年十月）
典籍清話　（昭和　七　年十二月）
床次君八面觀（近代社版）　（昭和　七　年十二月）
ペルリは日本の恩人か（日本講演通信社版）　（昭和　七　年十二月）
勝海舟傳（改造社版）　（昭和　七　年十二月）
東西史論　（昭和　八　年二月）

公爵山縣有朋傳（三冊）　（昭和 八 年 二 月）
愛國讀本（雲ぼら社版）　（昭和 八 年 三 月）
愛書五十年（ブックドム社版）　（昭和 八 年 四 月）
歐洲現代政史の暗流　（昭和 八 年 五 月）
增補國民小訓　（昭和 八 年 十 月）
成簣堂閑記（書物展望社版）　（昭和 八 年十二月）
吉田松陰（普及版）　（昭和 九 年 二 月）
勝海舟翁に就て（洋々舍版）　（昭和 九 年 三 月）
靜思餘錄（改版）　（昭和 九 年 五 月）
聖德景仰　（昭和 九 年 六 月）
明治維新の大業　（昭和 十 年 二 月）
四時佳興　（昭和 十 年 六 月）
漢籍を語る（大東出版社版）　（昭和 十 年 七 月）
公爵松方正義傳（二冊）　（昭和 十 年 七 月）

◇國民叢書　三十六冊

進歩乎退歩乎　（明治二十四年 六 月）
人物管見　（明治二十五年 五 月）

青年と教育　（明治二十五年 九 月）
靜思餘錄　（明治二十六年 五 月）
文學斷片　（明治二十七年 三 月）
天然と人　（明治二十七年 七 月）
第二靜思餘錄　（明治二十八年 四 月）
風雲漫錄　（明治二十八年十一月）
家庭小訓　（明治二十九年 二 月）
經世小策（上下）　（明治二十九年 七 月）
單刀直入錄　（明治三十一年 六 月）
寸鐵集　（明治三十一年 七 月）
文學漫筆　（明治三十一年 十 月）
漫興雜記　（明治三十一年十二月）
世間と人間　（明治三十二年 九 月）
社會と人物　（明治三十二年十一月）
生活と處世　（明治三十三年 六 月）
日曜講壇　（明治三十三年 六 月）
處世小訓　（明治三十四年 四 月）
人物偶評　（明治三十四年 九 月）

教育小言（明治三十五年二月）
第二日曜講壇（明治三十五年六月）
第三日曜講壇（明治三十六年一月）
近時政局史論（明治三十六年六月）
第四日曜講壇（明治三十七年五月）
第五日曜講壇（明治三十七年七月）
第六日曜講壇（明治三十八年二月）
讀書餘錄（明治三十八年六月）
第七日曜講壇（明治三十九年五月）
第二天然と人（明治四十年四月）
第八日曜講壇（明治四十年九月）
第九日曜講壇（明治四十二年九月）
第三天然と人（明治四十三年十一月）
第十日曜講壇（明治四十四年五月）
第十一日曜講壇（明治四十四年十二月）
第十二日曜講壇（大正二年八月）

◇近世日本國民史（既刊五十卷）

織田氏時代前篇（大正七年十二月）
織田氏時代中篇（大正八年六月）
織田氏時代後篇（大正八年十月）
豐臣氏時代甲篇（大正九年三月）
豐臣氏時代乙篇（大正九年十二月）
豐臣氏時代丙篇（大正十年六月）
豐臣氏時代丁篇　朝鮮役　上卷（大正十年十月）
豐臣氏時代戊篇　朝鮮役　中卷（大正十一年一月）
豐臣氏時代己篇　朝鮮役　下卷（大正十一年五月）
豐臣氏時代庚篇　桃山時代概觀（大正十一年九月）
家康時代　上卷　關原役（大正十二年一月）
家康時代　中卷　大阪役（大正十二年五月）
家康時代　下卷　家康時代概觀（大正十二年十二月）
徳川幕府上期　上卷　鎖國篇（大正十三年十月）
徳川幕府上期　中卷　統制篇（大正十三年十一月）
徳川幕府上期　下卷　思想篇（大正十四年四月）
元祿時代　上卷　政治篇（大正十四年六月）
元祿時代　中卷　義士篇（大正十四年九月）

元祿時代 下巻 世相篇 （大正十四年十一月）
元祿享保中間時代 （大正十五年二月）
吉宗時代 （大正十五年六月）
寶暦明和篇 （大正十五年九月）
田沼時代 （昭和二年一月）
松平定信時代 （昭和二年五月）
幕府分解接近時代 （昭和二年九月）
雄藩篇 （昭和二年十一月）
文政天保時代 （昭和三年三月）
天保改革篇 （昭和三年六月）
幕府實力失墜時代 （昭和三年九月）
彼理來航以前の形勢 （昭和四年一月）
彼理來航及其當時 （昭和四年九月）
神奈川條約締結篇 （昭和四年十二月）
日露英蘭條約締結篇 （昭和五年四月）
孝明天皇初期世相篇 （昭和五年八月）
公武合體篇 （昭和五年十一月）
朝幕背離緒篇 （昭和六年三月）

安政條約締結篇 （昭和六年八月）
朝幕交渉篇 （昭和六年十二月）
井伊直弼執政時代 （昭和七年四月）
安政大獄 前篇 （昭和七年七月）
安政大獄 中篇 （昭和七年十一月）
安政大獄 後篇 （昭和八年三月）
櫻田事變 （昭和八年九月）
開國初期篇 （昭和八年十二月）
久世・安藤執政時代 （昭和九年四月）
文久大勢一變 上篇 （昭和九年七月）
文久大勢一變 中篇 （昭和九年十二月）
文久大勢一變 下篇 （昭和十年四月）
尊皇攘夷篇 （昭和十年七月）
攘夷實行篇 （昭和十年九月）

◇『近世日本國民史』普及版

昭和九年十月以降既刊五十巻を毎月二巻づゝ豫約

配布中。昭和十一年十月完結の豫定。

◇蘇峰叢書

皇室と國民（昭和三年二月）
名山遊記（昭和三年二月）
國民と政治（昭和三年四月）
好書品題（昭和三年四月）
書齋感興（昭和三年七月）
人物偶錄（昭和三年十月）
關東探勝記（昭和三年十一月）
言志小錄（昭和三年十二月）
國民的敎養（昭和四年三月）
新聞記者と新聞（昭和四年七月）
關西遊記（昭和四年九月）
讀書と散步（昭和四年九月）

◇編纂書目

成簣堂叢書（藏書中の古書珍籍を原刊本其儘寫眞石版に附し五百部限定刊行）

淮海挐音（二冊）（大正二年五月）
櫟翁稗說（附 解說一冊）（大正二年六月）
白隱和尙垂示（大正二年十月）
酒餅論（大正三年三月）
月江和尙錄（大正三年六月）
戶田左門覺書（大正三年九月）
帝範臣軌（二冊）（大正四年七月）
茂睡考（附 解說一冊）（大正四年十一月）
大梅夜話（附 解說一冊）（大正五年三月）
論語抄（五冊・及附 解說一冊）（大正六年五月）
禁帶集（附 南浦文之和尙）（大正七年四月）
卜養狂歌集（二冊）（大正八年一月）
平洲先生小語（大正十一年十一月）
杜樊川夾註（五冊）（大震火災にて組版全部燒失）

新成簣堂叢書

聽雨紀談（昭和六年四月）

貧人太平記（昭和六年六月）
和歌論語（昭和六年九月）
明惠上人臨終記（昭和七年二月）
日本書籍總目錄（昭和七年八月）

其　他

小楠遺稿（横井時雄共編）（明治二十二年十月）
淇水詩草（明治二十四年九月）
誕生日（明治二十四年十二月）
濱久木（久子刀自歌集）蘆花共編（明治四十一年四月）
横川和尚百人一首（明治四十二年二月）
元田先生進講錄（明治四十三年一月）
明治天皇仰景畫錄（大正元年十月）
宮市雜話（德富貞甲翁著）（大正三年七月）
隨感漫筆（淇水翁・自筆）（大正三年八月）
日本書紀　神代卷（二冊）丹鶴叢書本（大正三年十二月）
假名貞觀政要（大正四年十一月）
帝範臣軌國字解（大正五年三月）
賴山陽書翰集（二冊）木崎・光吉共編（昭和二年七月）
弘決外典抄（五冊）（昭和三年二月）
山陽朱批網香詩稿（附　解說一冊）（昭和三年九月）
小楠堂侍草（昭和四年五月）
賴山陽書翰集（木崎愛吉共編）（昭和四年九月）
成簣堂善本書目（昭和七年五月）
成簣堂善本七拾種（昭和七年五月）
元田先生進講錄（增補版）（昭和九年六月）

◇新聞・雜誌

開化の手引（明治十四年十一月二十九日創刊　終刊號不明）
國民之友（明治二十年二月十五日創刊　明治三十一年八月十日終刊）
家庭雜誌（明治二十五年九月創刊　明治三十一年八月終刊）
Far East（明治二十八年二月二十日創刊　明治三十一年七月二十日終刊）
國民新聞（明治二十三年二月一日創刊　昭和四年一月十七日止筆）

◇關係書目（抄）

大江義塾沿革誌（上野岩太郎著）　（刊行年月不明）
蘇峰先生年譜　（昭和三年五月）
蘇峰先生古稀祝賀知友新稿　（昭和六年十一月）
同　展覽會目錄　（昭和七年三月）
蘇峰先生古稀記念帖　（昭和七年七月）
蘇峰先生詩書百幅帖　（昭和八年十二月）
蘇峰會誌　（昭和五年二月以降）

○

過眼小景（蘇峰先生書 百穗畫伯畫）　（刊行年月不明）

◇外國語に飜譯されし書

漢譯

吉田松陰（前刊本）　俵江王鍾譯　（光緒二十九年五月）
鐵血主義（單刀直入錄簡譯）　同氏譯　（刊行年月不明）

英譯

Japanese-American Relations
（大戰後の世界と日本抄譯　柳原氏譯）
（米國マクミラン、一九二二年刊行）

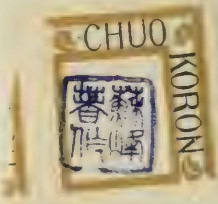
其他講演及び諸新聞雜誌に掲載されたるものにて小册子となれるもの多くあれ共、此に略す。

蘇峰自傳（終）

昭和十年八月廿五日印刷
昭和十年九月三日發行
昭和十年九月十二日三十版
昭和十年九月十八日四十版

蘇峰自傳

定價一圓八十錢



著者 德富猪一郎

發行者 木田開
東京市麴町區丸ノ內二丁目一番地

印刷者 堀修造

發行所
東京市麴町區丸ノ內二丁目
丸ノ內ビルディング五九二區
中央公論社
振替口座東京三四番
電話丸ノ內 五三三五番 五三三六番 五三三七番 五三三八番

大日本印刷株式會社榎町工場印刷

中央公論社發行書目抄

文章讀本	谷崎潤一郎	一・五〇	〇・一四
軍縮讀本	伊藤正德	一・五〇	〇・一四
レコード音樂讀本	野村光一	一・八〇	〇・一四
金の經濟學	猪俣津南雄	一・五〇	〇・一四
唯物辨證法讀本	大森義太郎	一・二〇	(品切)
議會政治論	馬場恒吾	一・五〇	〇・一四
現代人物評論	馬場恒吾	一・五〇	(品切)
政界人物風景	馬場恒吾	一・五〇	〇・一四
政界人物評論	馬場恒吾	一・五〇	〇・一四
藝術論	藏原惟人	一・五〇	(品切)

文壇人物評論	正宗白鳥	一・五〇	〇・一四
柿の蔕	坪内逍遙	二・五〇	〇・一四
春城代醉錄	市島春城	一・八〇	〇・一四
荷風隨筆	永井荷風	一・八〇	〇・一四
青春物語	谷崎潤一郎	一・七〇	〇・一四
攝陽隨筆	谷崎潤一郎	一・七〇	〇・一四
神・人間・自由	木下尚江	一・七〇	〇・一四
文藝林泉	室生犀星	二・〇〇	〇・一四
人間修行	登張竹風	一・七〇	〇・一四
無絃琴	内田百間	二・〇〇	〇・一四
ドンク	辰野隆	一・五〇	〇・一四
明治文學の片影	佐々木信綱	三・〇〇	〇・一四

書名	著者	定價	送料
花鳥草紙	新村　出	一・八〇	〇・一四
まてりありすむすみりたんす	大森義太郎	二・〇〇	〇・一四
國際紛爭史考	板倉　卓造	二・〇〇	〇・一四
直木三十五隨筆集		一・五〇	〇・一四
懷往時談	小泉策太郎	近刊	
外遊斷想	尾崎　咢堂	一・七〇	〇・一四
辯證法讀叢	三枝　博音	一・五〇	〇・一四
新聞生活二十年	伊藤　正德	一・五〇	〇・一四
熱球三十年	飛田　穗洲	一・五〇	〇・一四
ヒマラヤの旅（寫眞紀行）	長谷川傳次郎	二・二〇	〇・二七
役者藝風記	三島　霜川	二・二〇	〇・一四
演劇巡禮	三宅周太郎	二・〇〇	〇・一四
日本合戰譚	菊池　寛	一・五〇	〇・一四
新版日本畸人傳	白石　實三	一・五〇	〇・一四
科學隨想	西村　眞琴	一・四〇	〇・一四
近代科學の驚異	寮　佐吉	一・六〇	〇・一〇
荷馬車挽きの娘の手記	杉内　いち	〇・八〇	〇・一四
黑髮懺悔	高岡たつ（著）	一・五〇	〇・一四
國際外交錄	杉村陽太郎	一・五〇	（品切）
大滿洲國建設錄	駒井　德三	一・二〇	〇・一四
東郷元帥直話集	安部　眞造	一・二〇	〇・一五
友愛結婚	リンゼイ　原田　實	一・八〇	〇・一四
廢帝前後	黑田　禮二	一・八〇	〇・一四

忠臣藏	眞山青果	近刊	
安城家の兄弟	里見弴	一・八〇	(品切)
寢園	横光利一	一・八〇	(品切)
つゆのあとさき	永井荷風	一・五〇	〇・一四
盲目物語	谷崎潤一郎	一・七〇	〇・一四
武州公祕話	谷崎潤一郎	近刊	
女の一生	山本有三	一・八〇	(品切)
神風連	十一谷義三郎	上一・八〇	下一・五〇
花嫁學校	片岡鐵兵	一・五〇	〇・一四
沈丁花	久米正雄	一・五〇	〇・一四
百夜	田山花袋	一・八〇	〇・一四
倫敦の宿	水上瀧太郎	一・六〇	〇・一四
U新聞年代記	上司小劍	一・五〇	〇・一四
青年	林房雄	一・五〇	〇・一四
黃昏の薔薇	德田秋聲	一・五〇	〇・一四
牡丹のある家	窪川稻子	一・五〇	〇・一四
罌粟はなぜ紅い	宇野千代	一・二〇	〇・一四
色ざんげ	宇野千代	一・五〇	〇・一四
結婚街道	菊池寛	一・二〇	〇・一四
限りなき鋪道	北村小松	一・六〇	〇・一四
情炎の都市	北村小松	一・五〇	〇・一四
女給君代	廣津和郎	〇・八〇	〇・一〇
女給(小夜子)	廣津和郎	〇・八〇	〇・一〇
眞理の春	細田民樹	一・五〇	〇・一四

書名	著者・譯者	定價	送料
日本の戰慄	直木三十五	一・五〇	〇・一四
光・罪と共に	直木三十五	一・五〇	〇・一四
失業都市東京	德永直	一・二〇	〇・一〇
天國の記錄	下村千秋	一・五〇	〇・一四
遍路行	下村千秋	一・五〇	〇・一四
死よりも强し	下村千秋	一・五〇	〇・一四
男裝の麗人	村松梢風	一・五〇	〇・一〇
西部戰線異狀なし	ルマルク 秦豐吉	一・五〇	〇・一〇
首斬りセレナーデ	デコブラ 武林無想庵	一・五〇	〇・一四
グランド・ホテル	ヴッキ・バゥム 牧逸馬	一・七〇	〇・一四
少年探偵エミール	ケストナー 菊池重三郎	一・〇〇	〇・一〇
四十年	ゴーリキイ 一〜二部 梶原勝三郎譯	各二・〇〇	〇・一四
濡れ闇の男	長谷川伸	一・〇〇	〇・一〇
旋風時代(三卷)	田中貢太郎	各一・三〇	各・一四
水戶黃門	大佛次郎	一・七〇	〇・一四
女人曼陀羅	吉川英治	一・八〇	〇・一四
三萬兩五十三次(三卷)	野村胡堂	各一・七〇	各・一四
楠木正成	直木三十五	一・二〇	〇・一〇
フランス唯物論哲學	ラ・メトリ其他 杉捷夫譯	二・五〇	〇・一三
農業經濟學	カウツキー 向坂逸郎譯	二・八〇	〇・一三
支那經濟論	嚴靈峰其他 田中忠夫譯	二・五〇	〇・一三
支那の經濟と社會(二卷)	ウイットフォーゲル 平野義太郎譯	上二・八〇 下二・五〇	〇・一三
日本財閥の解剖	高橋龜吉	二・五〇	〇・一四
ファッシズム國家學	H・W・シュナイダー 佐々弘雄譯	二・八〇	〇・一四

51

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02952 4808